

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 60 集

なごやじょうさん まる  
名古屋城三の丸遺跡(V)

——旧名古屋営林支局地点の調査——

1 9 9 5

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



名古屋城全景 (南より)

# 序

名古屋市は愛知県西部のほぼ中央に位置し、伊勢湾に面しています。日本全国の各地域において核となっている都市をみると、城下町から発展したものがほとんどですが名古屋市もこの例にもれません。近世における名古屋城とその城下町は、日本でも有数の大都市として発展した現在の市の母胎ともいえるものでしょう。この名古屋城が位置する名古屋台地北西端は、原始の時代より日本の各地域からのさまざまな影響を受けた生活が営まれて参りました。

このたび愛知県総務部によって、名古屋営林支局跡地に「三の丸共同施設」が建設されることとなりました。この名古屋城三の丸地区の外堀は国の特別史跡に指定されており、その内側の官庁街では近年、耐用年数を超えた建物の建て替えなどに伴い、発掘調査が行われて参りました。財団法人愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて愛知県総務部からの委託を受け、建設工事に先立ち事前調査を行いました。その結果、近世をはじめとして古墳・戦国時代などの遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることとなりました。

調査にあたりましては、愛知県総務部、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺住民の皆様から多大のご協力をいただきましたことに、深く感謝申し上げる次第であります。

最後に本書が地域史の理解、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成7年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 安 部 功

# 例 言

1. 本書は愛知県名古屋市中区三の丸に所在する、名古屋城三の丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、愛知県総務部による「三の丸共同施設」建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて愛知県総務部から委託を受けて実施した。調査対象面積は3,404㎡である。
3. 発掘調査は平成5年5月から平成6年2月にかけて実施した。さらに平成6年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、本センター調査課主査杉浦 茂、調査研究員松田 訓、伊藤秀紀が担当した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県総務部財政課・同建築部営繕課・名古屋市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下のとおりである。  
Ⅲ-2 織田眞弓（本センター調査研究補助員）、Ⅲ-4-3-(1) 八木佳素実（同調査研究補助員）、Ⅲ-4-3-(2) 古橋佳子（同調査研究補助員）、Ⅳ堀木真美子・服部俊之（同調査研究員）、Ⅴ-1 杉浦 茂、Ⅴ-2 伊藤秀紀  
上記以外を松田 訓が執筆した。  
なお、遺構、遺物の写真撮影は松田 訓が行った。
7. 遺物整理作業については松田 訓が担当し、次の方々の協力を得た。  
洗浄・注記・接合 中井さやか CAROLINE PATHY-BARKER  
実測・トレース 古橋佳子 織田眞弓 八木佳素実  
小桧山洋子 田中和子 中馬妙子 早川久美 本所千恵子
8. 本書に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T. P.）の数値である。
9. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
10. 調査記録は本センターにて保管する。
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
12. 本書の執筆にあたり藤澤良祐氏、大橋康二氏、仲野泰裕氏、檜崎彰一氏には、出土遺物の時期的解釈において多くの指導を得た。さらに本遺跡の調査・報告にあたって、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）  
安芸毬子 伊藤嘉章 市田京子 内野 正 梅村清春 遠藤才文 小川 望 尾野善裕  
金子健一 木村優作 久保和士 下村信博 積山 洋 立松 宏 武田さわ子 豊田幸子  
永松 実 橋口定志 服部哲也 速水信也 平野 功 藤田忠彦 藤本史子 松尾信裕  
水野裕之 森 勇一 両角まり 山崎純男  
佐賀県立九州陶磁文化館 東京都港区立港郷土資料館 名古屋市博物館

# 目次

## 第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	(松田) 2
第2節 調査の経過	(松田) 2
第3節 遺跡の位置	(松田) 4
第4節 歴史的環境	
1 名古屋台地の黎明	(松田) 6
2 城と町の誕生	(松田) 7
3 調査地点と三の丸地区	(松田) 7
第5節 調査の概要	
1 調査区	(松田) 11
2 調査の方法	(松田) 11

## 第II章 遺構

第1節 基本層序	(松田) 12
第2節 遺構	(松田) 14
1 概要	(松田) 14
2 古墳時代の遺構	(松田) 14
3 戦国時代の遺構	(松田) 16
4 江戸時代の遺構	
(1) 江戸時代I期	(松田) 23
(2) 江戸時代II期	(松田) 29

## 第III章 遺物

第1節 概要	(松田) 37
第2節 古墳時代の遺物	(織田) 38
第3節 戦国時代の遺物	(松田) 39
第4節 江戸時代の遺物	
1 江戸時代I期	(松田) 44
2 江戸時代II期	(松田) 48
3 その他の遺物	
(1) 人形・玩具類	(八木) 112
(2) 金属製品	(古橋) 120

第IV章 自然科学的分析…………… (堀木・服部) 124

第V章 補論

第1節 名古屋台地における古代…………… (杉浦) 126  
 第2節 三の丸に居住した人々…………… (伊藤) 132  
 第3節 調査地点の空間的・時間的位置付け…………… (松田) 152

## 図版目次

図版1 ①表土剥ぎ風景	④A区土師皿出土状態 (南より)
②A区調査前風景	図版7 ①B区 上層全景 (東より)
③B区調査前風景	②B区上層東側 (北より)
④A区上層北東隅	③B区上層中央土坑群 (北より)
⑤A区上層全景	図版8 ①B区下層全景 (東より)
図版2 ①A区SK165セクション (南西より)	②B区下層東側 (北より)
図版9	③B区SK702周辺 (北より)
②A区SK201遺物出土状況 (東より)	④B区SK703・704周辺 (北より)
③A区SD10周辺 (南より)	図版9 ①B区SD401セクション (西より)
④A区SD04セクション (南より)	②B区SD601セクション (東より)
⑤A区SX11 (南より)	③B区SD603周辺 (北より)
図版3 ①A区下層全景 (南西より)	④B区SD607 (北東より)
②A区SK312周辺 (東より)	⑤B区SD607 (北西より)
③A区SK313セクション (南より)	図版10 ①B区SD605コーナー (北より)
④A区SK315・316周辺 (南より)	②B区SD605セクション (東より)
図版4 ①A区SK313 (南より)	③B区SD605セクション (南より)
②A区SK315セクション (北より)	④B区屋敷境 (北より)
③A区SK316セクション (北より)	図版11 遺物写真1
④A区SK458・459 (南西より)	図版12 遺物写真2
図版5 ①A区SD602セクション (南より)	図版13 遺物写真3
②A区SD602 (南より)	図版14 遺物写真4
③A区SD603セクション (東より)	図版15 遺物写真5
④A区SD604セクション (北より)	図版16 遺物写真6
図版6 ①A区SD308・309・610・611 (南より)	図版17 遺物写真7
②A区SD606セクション (南より)	図版18 遺物写真8
③A区SD804セクション (南より)	図版19 遺物写真9

# 挿図目次

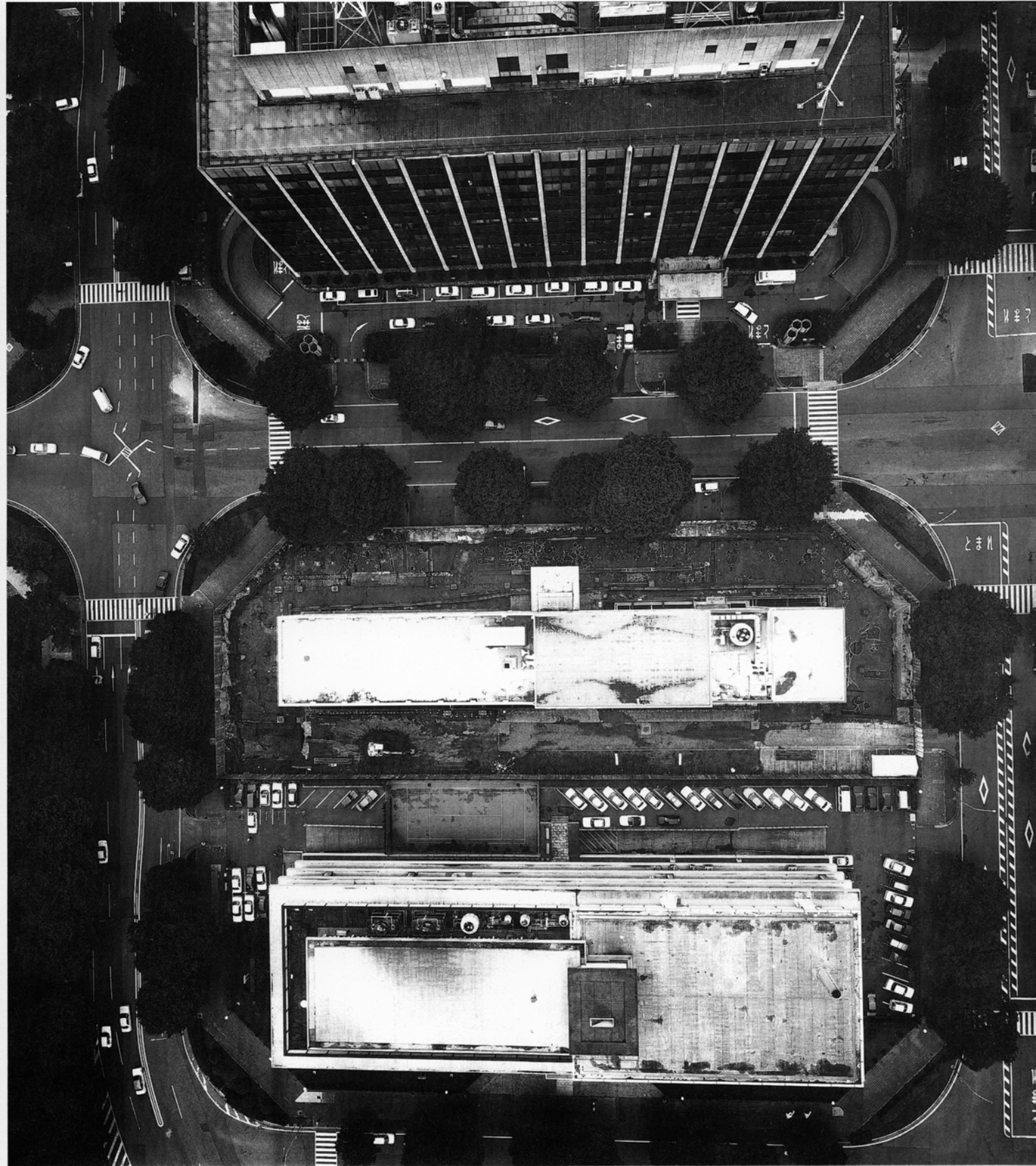
第1図	遺跡位置図	4	第31図	S D608・S K513・S D601・602 出土遺物実測図	42
第2図	遺跡周辺地形図	5	第32図	S D604出土遺物実測図	43
第3図	周辺遺跡分布図	6	第33図	S D307出土遺物実測図①	54
第4図	名古屋城江戸末期の図	8	第34図	S D307出土遺物実測図②	55
第5図	調査地点該当ブロック拡大図	8	第35図	S D308出土遺物実測図①	56
第6図	調査位置図	9	第36図	S D308出土遺物実測図②	57
第7図	名古屋城三の丸内調査地点位置図	10	第37図	S D309出土遺物実測図	58
第8図	調査区位置図	11	第38図	S D401出土遺物実測図	58
第9図	A区北壁土層断面図	13	第39図	S K313出土遺物実測図①	59
第10図	古墳時代の遺構（S D802・803・804） 位置図及び平・断面図	15	第40図	S K313出土遺物実測図②	60
第11図	戦国時代遺構位置図	16	第41図	S K313出土遺物実測図③	61
第12図	S D610平・断面図	18	第42図	S K313出土遺物実測図④	62
第13図	S D605・607平面図	19	第43図	S K338出土遺物実測図	64
第14図	戦国時代II期土坑群平面図	19	第44図	S K701出土遺物実測図①	64
第15図	S D602・608平・断面図	20	第45図	S K701出土遺物実測図②	65
第16図	S D601・603平面図	21	第46図	S K701出土遺物実測図③	66
第17図	S D604平・断面図	21	第47図	S K701出土遺物実測図④	67
第18図	戦国時代溝断面図	22	第48図	S K702出土遺物実測図①	68
第19図	江戸時代主要遺構位置図	23	第49図	S K702出土遺物実測図②	69
第20図	S D308平・断面図	25	第50図	S K703出土遺物実測図①	70
第21図	S D403・404断面図	25	第51図	S K703出土遺物実測図②	71
第22図	B区西側土坑群平・断面図	27	第52図	S K703出土遺物実測図③	72
第23図	A区西側土坑群平面図	28	第53図	S K704出土遺物実測図①	73
第24図	S K313平・断面図	29	第54図	S K704出土遺物実測図②	74
第25図	S D01平・側・断面図	31	第55図	S K704出土遺物実測図③	75
第26図	S B01・S X04平面図	33	第56図	S K704出土遺物実測図④	76
第27図	S K315・316・319平・断面図	34	第57図	S D101出土遺物実測図	77
第28図	S K62平面図及びS X11平・側面図 ……………	35	第58図	S K316出土遺物実測図①	77
第29図	古墳時代出土遺物実測図	38	第59図	S K316出土遺物実測図②	78
第30図	S D610・603・605・607出土遺物 実測図	41	第60図	S K320出土遺物実測図	79
			第61図	S K62・114・116・172出土遺物 実測図	80

第62図	S K 201出土遺物実測図①	81	第98図	試料採取位置図・模式柱状図	124
第63図	S K 201出土遺物実測図②	82	第99図	名古屋市域の地質概略図	131
第64図	S K 206出土遺物実測図①	83	第100図	藤原顕隆をめぐる系譜	131
第65図	S K 206出土遺物実測図②	84	第101図	建春門院法花堂領	131
第66図	S K 309出土遺物実測図①	84		尾張国那古野庄領家職相伝系図	
第67図	S K 309出土遺物実測図②	85	第102図	名古屋城三の丸屋敷割図	135
第68図	S K 309出土遺物実測図③	86	第103図	戦国時代遺構変遷図	153
第69図	S K 309出土遺物実測図④	87	第104図	築城当時の名古屋古図(『名古屋城史』より)	154
第70図	S K 309出土遺物実測図⑤	88	第105図	調査区周辺戦国時代遺構図	155
第71図	S K 309出土遺物実測図⑥	89	第106図	江戸時代遺構変遷図	159
第72図	S K 310出土遺物実測図	91	第107図	調査区廃棄地点位置図	160
第73図	S K 312出土遺物実測図①	92	第108図	戦国時代瀬戸美濃窯産陶器器種分類	162
第74図	S K 312出土遺物実測図②	93			
第75図	S K 312出土遺物実測図③	94	第109図	戦国時代天目茶碗・播鉢器形分類	162
第76図	S K 312出土遺物実測図④	95			
第77図	S K 312出土遺物実測図⑤	96	第110図	戦国時代土師器器種分類	162
第78図	S K 312出土遺物実測図⑥	97	第111図	遺物組成グラフ	165
第79図	S K 312出土遺物実測図⑦	98	第112図	江戸時代主要遺物分類概念図①	171
第80図	S K 312出土遺物実測図⑧	99	第113図	江戸時代主要遺物分類概念図②	172
第81図	S K 318出土遺物実測図①	101	第114図	江戸時代主要遺物分類概念図③	173
第82図	S K 318出土遺物実測図②	102	第115図	産地・材質組成グラフ	182
第83図	S K 318出土遺物実測図③	103	第116図	器種組成グラフ	183
第84図	S K 318出土遺物実測図④	104	第117図	主要産地・材質別器種組成グラフ	184
第85図	S K 318出土遺物実測図⑤	105	第118図	主要器種別産地・材質組成グラフ	184
第86図	S K 318出土遺物実測図⑥	106			
第87図	S K 319出土遺物実測図①	108			
第88図	S K 319出土遺物実測図②	109			
第89図	S X 11出土遺物実測図①	110			
第90図	S X 11出土遺物実測図②	111			
第91図	人形・ミニチュア出土分布	116			
第92図	人形・玩具類実測図①	117			
第93図	人形・玩具類実測図②	118			
第94図	人形・玩具類実測図③	119			
第95図	金属製品実測図①	120			
第96図	金属製品実測図②	121			
第97図	銭貨拓影図	122			

## 表 目 次

第1表 調査行程 …………… 3	第32表 S K 318出土遺物観察表①……………107
第2表 居住者の変遷 …………… 9	第33表 S K 318出土遺物観察表②……………108
第3表 主要遺構一覧表 …………… 36	第34表 S K 319出土遺物観察表……………110
第4表 古墳時代出土遺物観察表 …………… 38	第35表 S X 11出土遺物観察表 ……………111
第5表 S D 610・603・605・607出土遺物 観察表 …………… 41	第36表 人形・玩具類 種別・材質別出土数 114
第6表 S D 608・S K 513・S D 601・602 出土遺物観察表 …………… 42	第37表 人形・玩具類 屋敷地別出土数 ……115
第7表 S D 604出土遺物観察表…………… 43	第38表 人形・玩具類 調査地点別出土数 の比較 ……………115
第8表 S D 307出土遺物観察表…………… 56	第39表 人形・玩具類観察表① ……………115
第9表 S D 308出土遺物観察表…………… 57	第40表 人形・玩具類観察表② ……………116
第10表 S D 309出土遺物観察表…………… 58	第41表 金属製品観察表 ……………123
第11表 S D 401出土遺物観察表…………… 58	第42表 銭貨観察表 ……………123
第12表 S K 313出土遺物観察表…………… 63	第43表 花粉数一覧表 ……………125
第13表 S K 338出土遺物観察表…………… 64	第44表 居住者屋敷地別一覧表① ……………136
第14表 S K 701出土遺物観察表①…………… 67	第45表 居住者屋敷地別一覧表② ……………137
第15表 S K 701出土遺物観察表②…………… 68	第46表 居住者屋敷地別一覧表③ ……………138
第16表 S K 702出土遺物観察表…………… 69	第47表 居住者屋敷地別一覧表④ ……………139
第17表 S K 703出土遺物観察表①…………… 72	第48表 居住者屋敷地別一覧表⑤ ……………140
第18表 S K 703出土遺物観察表②…………… 73	第49表 居住者屋敷地別一覧表⑥ ……………141
第19表 S K 704出土遺物観察表…………… 76	第50表 居住者屋敷地別一覧表⑦ ……………142
第20表 S D 101出土遺物観察表…………… 77	第51表 居住者屋敷地別一覧表⑧ ……………143
第21表 S K 316出土遺物観察表…………… 79	第52表 居住者屋敷地別一覧表⑨ ……………144
第22表 S K 320出土遺物観察表…………… 80	第53表 居住者屋敷地別一覧表⑩ ……………145
第23表 S K 62・114・116・172出土遺物 観察表 …………… 81	第54表 居住者屋敷地別一覧表⑪ ……………146
第24表 S K 201出土遺物観察表…………… 82	第55表 居住者索引① ……………147
第25表 S K 206出土遺物観察表…………… 84	第56表 居住者索引② ……………148
第26表 S K 309出土遺物観察表①…………… 90	第57表 居住者索引③ ……………149
第27表 S K 309出土遺物観察表②…………… 91	第58表 居住者索引④ ……………150
第28表 S K 310出土遺物観察表…………… 91	第59表 居住者索引⑤ ……………151
第29表 S K 312出土遺物観察表①…………… 99	第60表 戦国時代出土遺物残存率集計表 ……165
第30表 S K 312出土遺物観察表②……………100	第61表 江戸時代Ⅰ期屋敷地別集計表 ……176
第31表 S K 312出土遺物観察表③……………101	第62表 江戸時代Ⅱ期屋敷地別集計表① ……177
	第63表 江戸時代Ⅱ期屋敷地別集計表② ……178
	第64表 器種別残存率集計表 ……………180

# 調査報告



調査地点全景

# 第 I 章 調査の概要

## 第 1 節 調査に至る経緯

名古屋城三の丸遺跡は、愛知県名古屋市中区三の丸地内に所在する。1986年発行の愛知県遺跡分布地図には、名古屋城跡は本丸跡、二の丸庭園、天守閣貝塚、那古野城跡が記載されている。このほかに国指定特別史跡として外堀と三の丸土塁が含まれるが、現在官公庁舎などが建ち並ぶ三の丸の土塁内は、遺跡としては範囲指定されていなかった。1987年、名古屋市教育委員会は市公館建設計画に伴い、三の丸内に所在する建設予定地の試掘調査を行い、近世を中心とした遺跡の存在を確認した。このため名古屋市教育委員会では、この地点の本調査を実施するとともに、1988年同市遺跡分布地図に、旧三の丸域を名古屋城三の丸遺跡として追加指定した。以後、名古屋市教育委員会・本センターによって、数地点の発掘調査が行われている。

名古屋城三の丸遺跡とは、上記に述べた経緯による遺跡である。この範囲内にある名古屋営林支局跡地に、愛知県総務部によって三の丸共同施設の建設が行われることとなり、事前に発掘調査が必要となった。

（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて愛知県総務部からの委託を受け、平成5年4月から発掘調査を実施した。

## 第 2 節 調査の経過

調査を始めるにあたり、排土処理などを考慮して調査区を南北で2分割したため（A・B区）、平成5年4月より北側にあたるA区の表土剥ぎを実施、資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは5月6日であった。

調査年度は例年に比して降水量が多く、調査地の土質は水を含むと粘性が極端に強くなり、さらに両調査区は建物の影響で終日日照がとどかず、土は排出する際にコンベヤーのベルトから離れず巻き付いてしまった。これは度重なる故障の原因となり、調査は困難を極めた。

A区は、8月5日に上層、10月27日に下層の航空測量をヘリコプターにより実施し、写真撮影、測図、補足調査を含めて11月17日に調査を終了した。

B区は、11月1日から表土剥ぎを実施し、12月17日に上層、平成6年2月18日に下層の航空測量を実施し、埋め戻し作業も含めて3月23日に作業工程を終了した。

この間10月9日には、発掘調査現場の普及・公開を目的として現地説明会を開催し、多

くの見学者の参加を得た。

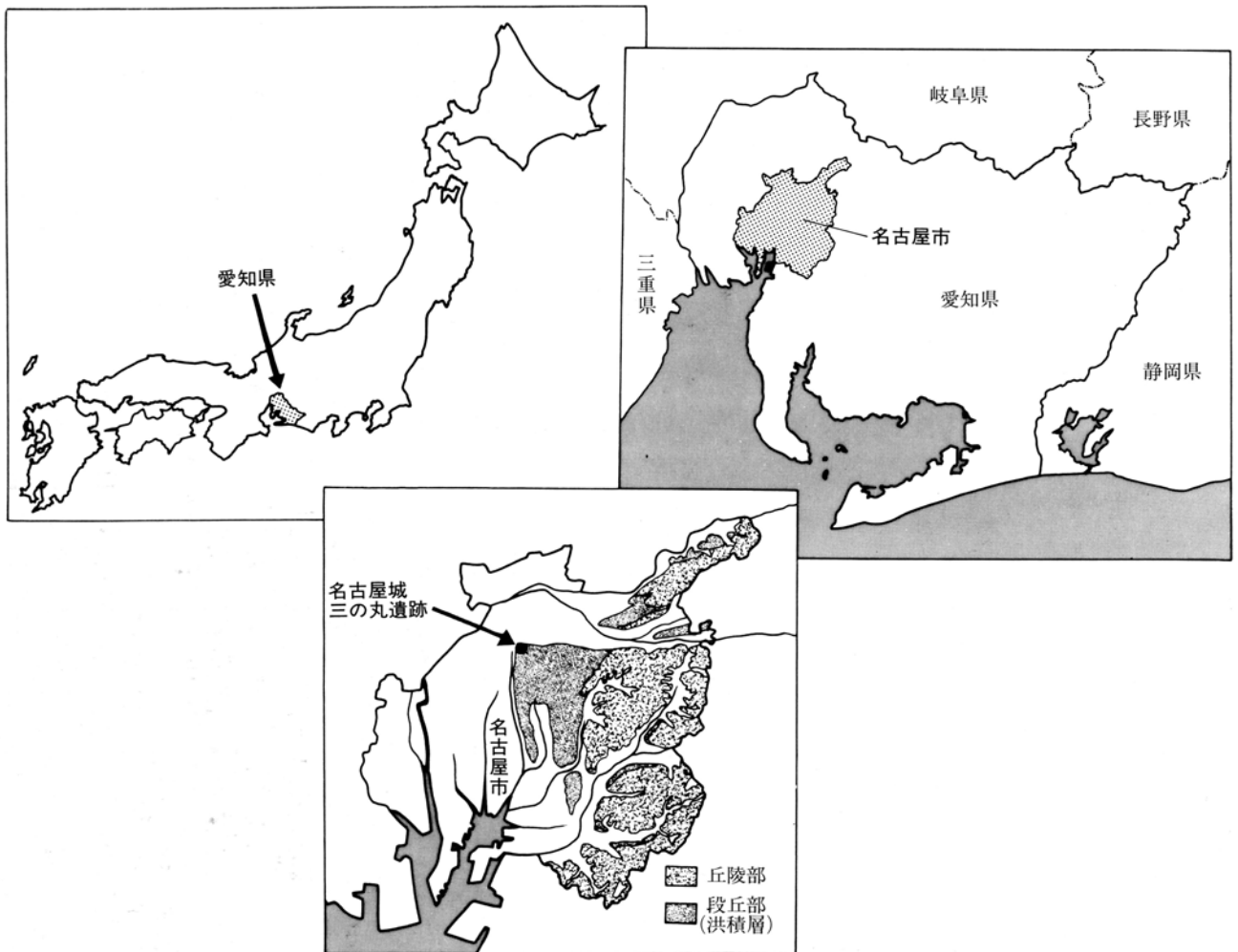
出土遺物の整理作業は、調査と並行して洗浄・注記作業を現場事務所で行い、引き続き平成6年度には本センター調査課において、遺物実測・トレースなど調査報告書作成までの作業を行った。



	H.5												H.6											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作業員説明会	・																							
資材搬入																								
A区表土剥ぎ																								
A区上層調査																								
A区下層調査																								
B区表土剥ぎ																								
B区上層調査																								
B区下層調査																								
補足調査																								
空撮				・																				
現地説明会																								
資材等撤収																								
基礎整理																								
報告書作成																								

第1表 調査行程

### 第3節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。名古屋城三の丸遺跡の位置する名古屋市は、愛知県西部の伊勢湾岸最奥部に位置し、木曾三川（木曾・長良・揖斐）などによって形成された濃尾平野南端、名古屋台地、尾張丘陵などに市域を広げる、東海地方屈指の大都市である。

市域の中央部をめぐる低地は、縄文海進や河川による堆積物によって形成された沖積地である。市域の中央部は、この沖積地からは段丘状に高い面を形成しており、この名古屋台地のさらに東方に尾張丘陵が広がっている。

名古屋城三の丸遺跡は名古屋台地北西端に立地しており、この城郭は北・西側にある低地との比高差を防御上利用した配置になっている。



第2図 遺跡周辺地形図 (国土地理院1/20万 地勢図「名古屋」)

## 第4節 歴史的環境

### 1 名古屋台地の黎明

台地の縁辺部は、原始集落の立地しやすい環境であることを多くの事例が示している。名古屋台地の縁辺部も、縄文時代以降各時代にわたる遺跡の存在が確認されている。

名古屋城三の丸遺跡の周辺に目を向けてみると、台地上には旧紫川遺跡をはじめとした縄文時代の遺跡が点在している。台地の縁辺部及びその周辺低地には、初期弥生文化を受容したと思われる、西志賀・片山神社・高蔵遺跡などがみられる。熱田側の台地西端から南側にかけては、古墳時代の当地域における支配状況を物語る、大須二子山・断夫山・白鳥古墳がみられる。この南北にのびる舌状台地上には尾張元興寺跡をはじめとして多くの遺跡が確認されており、さらにその南側延長線端には熱田神宮がある。この舌状台地上は古墳時代から古代にかけて、当地域を支配する上での重要な役割を果たした場所と云えるであろう。中世のこの地域については、当該期の遺跡・文献史料等においてもはっきりした材料が少なく、戦国期までは実像がつかみにくい。戦国時代に至ると、織田氏の内紛や分裂によって、本遺跡に重なる那古野城や古渡・末盛城などが築かれる。文献史料などには登場しないが、伊勢山中学校地点で検出の大溝などもこの時期の関連遺構と思われる。

- 1 旧紫川遺跡
- 2 西志賀遺跡
- 3 片山神社遺跡
- 4 高蔵遺跡
- 5 大須二子山古墳
- 6 断夫山古墳
- 7 白鳥古墳
- 8 尾張元興寺跡
- 9 熱田神宮
- 10 那古野城
- 11 古渡城
- 12 末盛城
- 13 伊勢山中学校遺跡
- 14 名古屋城三の丸遺跡



第3図  
周辺遺跡分布図  
(1/28000)

## 2 城と町の誕生

近世初頭、尾張国の政治の中心地は清須であった。徳川家康は関ヶ原の戦いの後、四男忠吉を清須城主とし、東海道の西に対する押さえとした。しかし忠吉が若年で死去すると、家康はさらに幼年の甲府城主、九男義直を清須城主とした。慶長14年(1609)、家康は西国に対するさらに強力な拠点の必要を痛感し、名古屋の台地北西端に築城を決意する。

名古屋城とその城下町は、この年以降順次築かれて行くことになる。外堀の内側三の丸地区には、役割を重んじられた家臣が、ブロック状に区画整理された役宅を割り当てられる。外堀の外側には、城下町が碁盤の目状に割り当てられ、上・下級武家屋敷、町屋がはいる。そして、清須から人を移すだけでなく、新たにつくりあげた城下町の地名・橋の名なども清須にあったものをつける。後に言う「清須越し」は、こうした経緯で行われた。

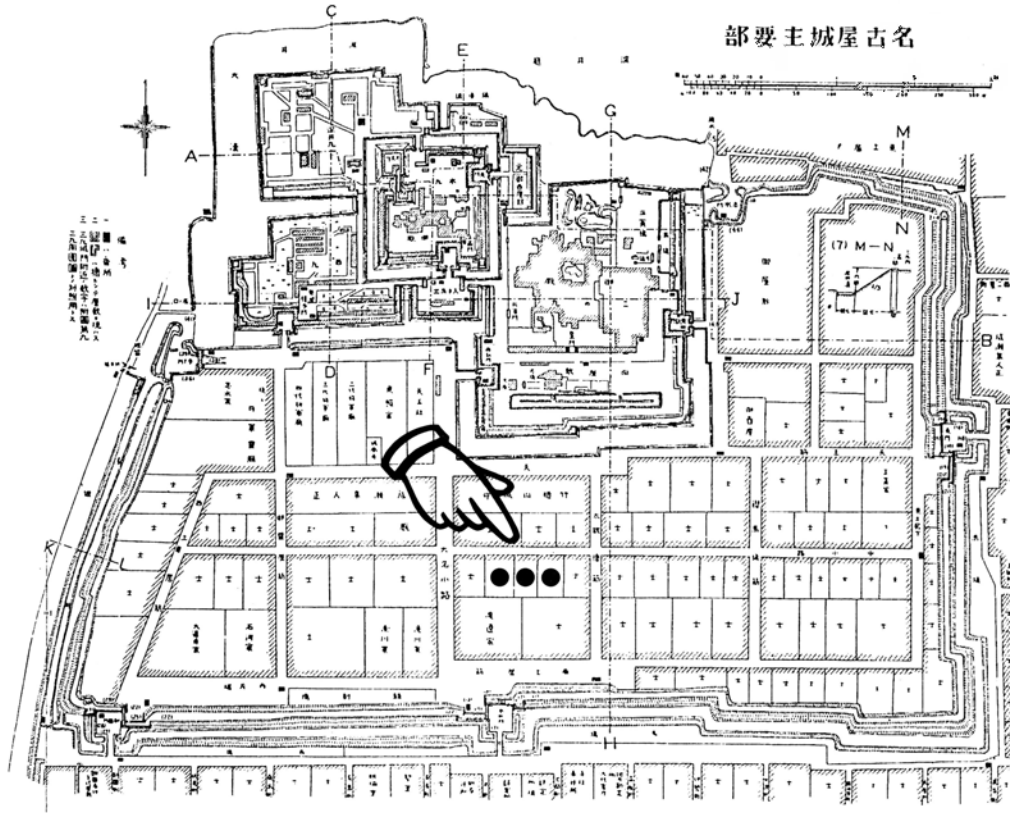
## 3 調査地点と三の丸地区

名古屋城三の丸遺跡は現在まで本遺跡を含めて、9地点(第7図)で発掘調査が実施されている。各調査地点は、未調査の三の丸地区北東部を除いて片寄ることなく分布しており、調査面積は総計約3万㎡におよぶ。

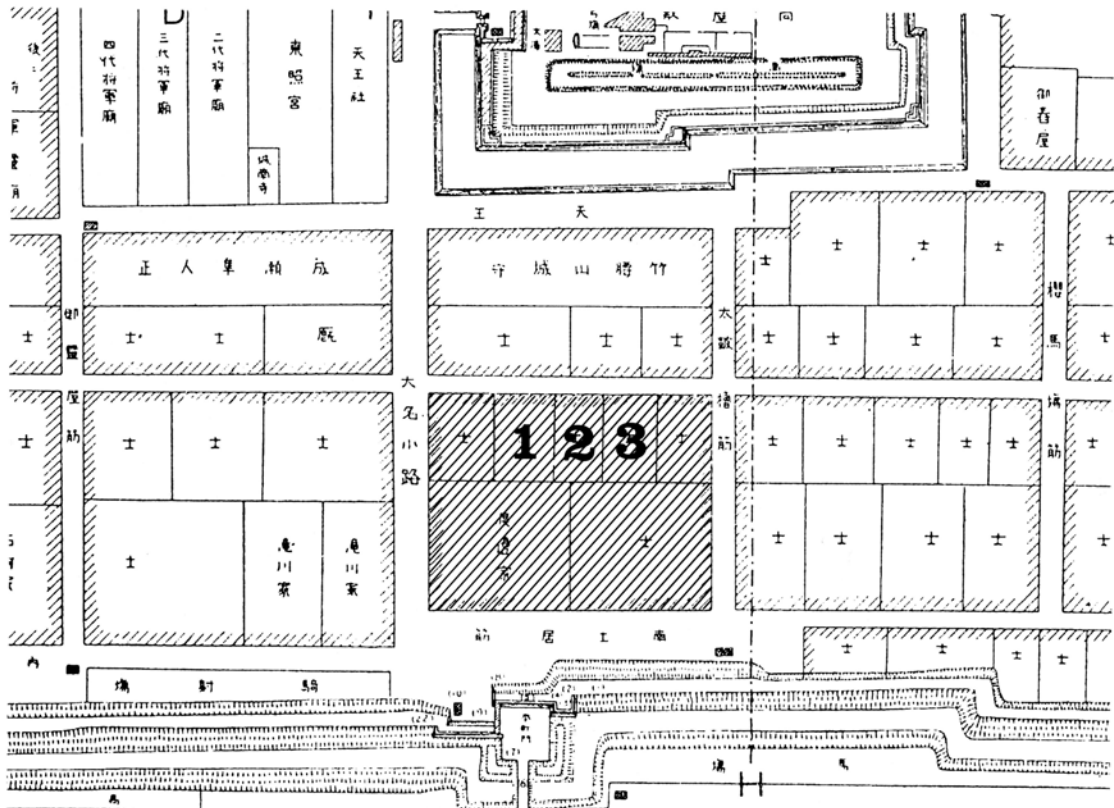
「三の丸」という区画は、近世城郭の中では家臣の居住域として機能していた場合が多いが、名古屋城もこの例にもれない。

93年度調査区は三の丸内では、中央南端の旧本町御門近くに位置している(第4図)。名古屋城三の丸の場合、数件をひとまとまりのブロックとし、このブロックを東西・南北に敷いた道にそろえて配置している。この東西・南北の各道には名前が付けられており、調査地点に重なるブロックは北辺を中小路、南辺を南御土居筋、東辺を御太鼓櫓筋、西辺を大名小路に囲まれている。この区画内には大小併せて6～7区画の屋敷が江戸時代を通じて配されている。調査地点にあたる部分は、東西に3区画分の屋敷地が並立している。第5図に示したように、この3区画を屋敷地1・2・3と区別して呼称することとし、説明する。

この屋敷地の伝邸関係は、第2表に示すようにかなり複数にわたっている。これは屋敷自体の性格が個人に帰属するものではなく、役宅的性格であったことを物語っている。第6図に示したように屋敷地1～3は東西に並立しているが、名古屋市博物館の所蔵している『坪間路頭帳』では、宝暦3年(1753)における各屋敷の規模が記載されている。これによれば、屋敷地1は間口25間×奥行32間(800坪)、屋敷地2は間口25間半×奥行32間1尺5寸(822坪)、屋敷地3は間口20間1尺×奥行30間半(615坪)である。屋敷地1は築城当時独立した区画であったが、1700年前後に南側で屋敷を接する渡辺家の添え屋敷となる。この区画は以後明治に至るまで渡辺家の一部となるが、こうした屋敷替えなどに伴い微妙に屋敷境の修正を行ったことが、各時代の絵図から見て取れる。各屋敷地の江戸時代最後の居住者は、1=渡辺半蔵(1万330石)、2=横井万之助(600石)、3=松井雄之助(400石)である(いずれも世襲名)。



第4図 名古屋城江戸末期の図（『名古屋城史』より）

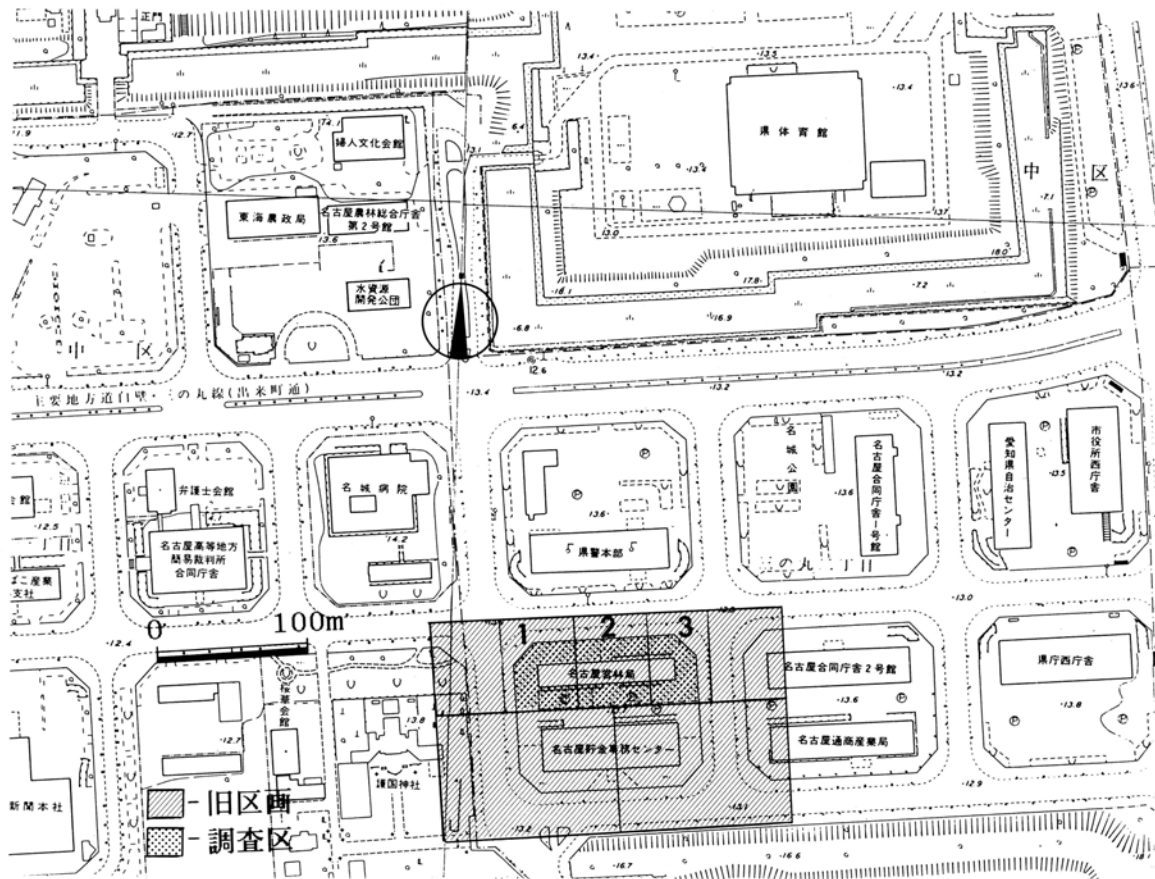


第5図 調査地点該当ブロック拡大図（第4図部分）

年代	1600	1700	1800	明治維新
屋敷地1	清水兵助 清水兵助 佐枝種定 長野重政 伊達半平 渡辺奉綱 吉田六郎右衛門 織田貞幹 山内知重 山内(渡辺半蔵添地)	渡辺定綱 渡辺直綱	渡辺綱道 渡辺綱保	渡辺潤綱 渡辺綱倫 渡辺寧綱 渡辺剛綱 渡辺綱光
屋敷地2	山本内蔵助 山本宗兵衛 山本秀熊 横井時良 沢井元智 松井充房 白井常春 白井常義 山本伝蔵	山本孫市 松井尚定	松井一澄 松井左治馬	横井時富 横井時貴 横井時邦 松井要人
屋敷地3	三守逸平治 三宅逸平治 三宅重良	津田信明	松井吉保	領地の寺部へ (豊田市) 領地の 祖父江へ 中下元堀詰町 で酒肆を

※「金城温古録」「士林浜洞」「旧邸礎跡略」をもとに作成

第2表 居住者の変遷



第6図 調査位置図



● 財愛知県埋蔵文化センター調査      ■ 名古屋市教育委員会調査

- |                     |                           |                      |
|---------------------|---------------------------|----------------------|
| 1. 名古屋市公館地点 (13.6m) | 2. 丸の内中学校地点               | 3. 県図書館地点 (11.8m)    |
| 4. 名古屋第一地方合同庁舎地点    | 5. 簡易・家庭裁判所地点 (10.4m)     | 6. 愛知県警察本部地点 (11.2m) |
| 7. 中部電力地下変電所地点      | 8. 名古屋営林支局跡地 (11.2~12.3m) | 9. 名古屋市能楽堂建設予定地点     |

※ ( ) 内の数値は基盤層標高

第7図 名古屋城三の丸内調査地点位置図

## 第5節 調査の概要

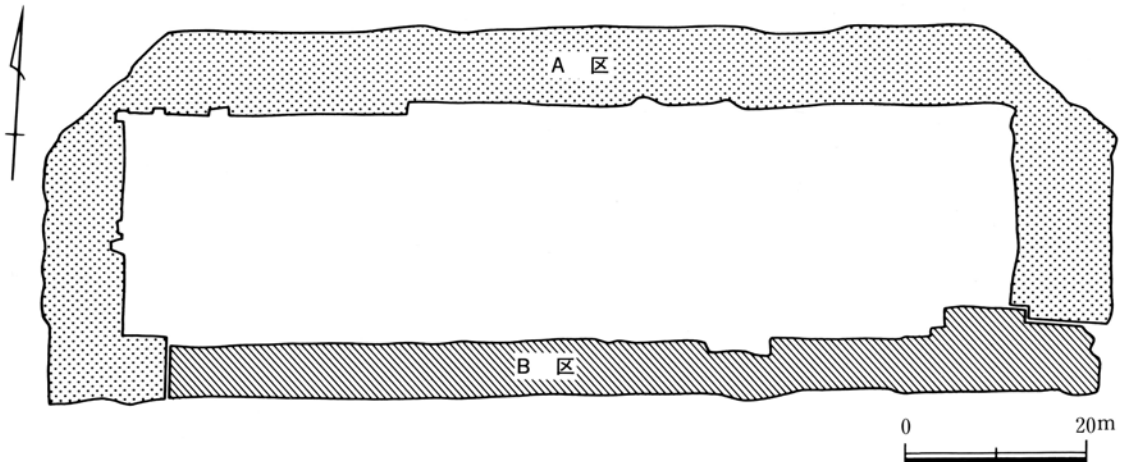
### 1 調査区

調査区は旧名古屋営林支局の敷地のなかで、建物以外の部分に設定した。これは、支局ビルが地下構造をもつからである。ビルは建築時に、敷地面積よりも外側に2～3mほど広げて掘り下げられて地階が施工されているため、建物とその周辺部分はすべて調査対象外と判断したためである。東西に長い敷地のほぼ中央に同様の長方形ビルが建っていたため、調査区はこのビルを「口」の字形に囲むように設定した。さらにこの調査区を排土処理の関係から南北に2分割し、北側をA区、南側をB区として分割調査を行った。

調査地点は台地上であるため、極端な変化の少ない平坦な土地である。しかし、基盤層の高低は調査区の南西隅地点がもっとも高く、東端との標高差は約1mを測る。したがって調査地点は、東に向かって緩やかに下がる基盤上に立地すると言えよう。

### 2 調査の方法

調査区内の表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、A区は排土をすべて持ち出し、B区は排土置き場をA区に充て、これをまとめた。両区ともに調査区外壁に沿ってトレンチをいれたが、遺物包含層は上・下層ともに一度に掘り下げられる厚さを越えていた。したがって、上・下層をそれぞれ任意（約10cm）で分層し、実質的にはグリッド（5m方眼）ごとに検出作業を繰り返して、それぞれの検出面に到達する方法をとった。



第8図 調査区位置図

## 第II章 遺構

### 第1節 基本層序

はじめに、三の丸地区の各調査地点における基盤層高を比較し、この地区内の地形変化を概観してみたい。

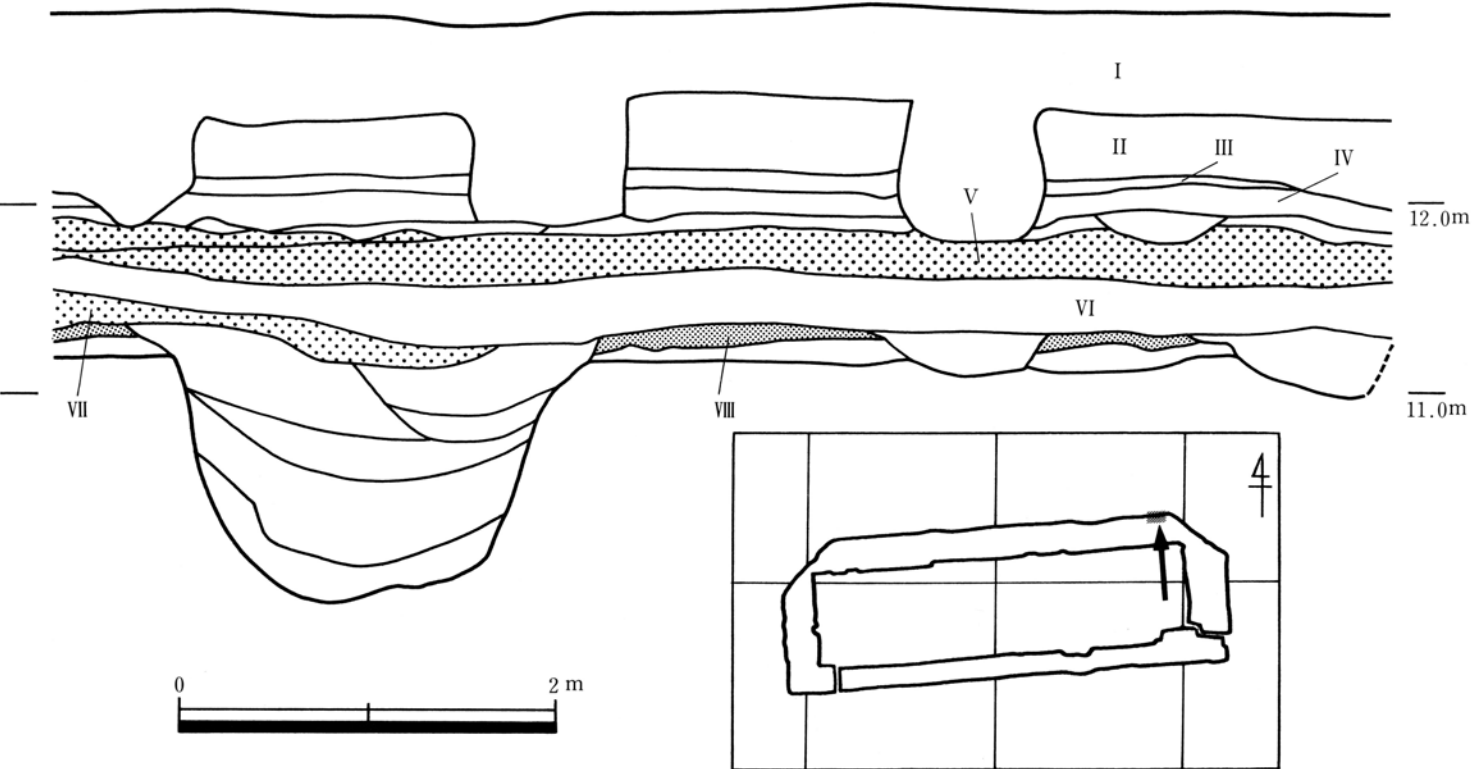
調査区は東西方向に長方形で設定したため、この方向の地形変化については全体に東に向かって傾斜することが確認できた。本センターの行った91年度調査区（県警本部地点）は、今回の調査地点から北へ約100mという至近距離に所在するが、基盤層の標高は今回の調査地点のもっとも低い位置とほぼ同じである。第7図に周辺調査地点での基盤層の標高を示したが、これを比較してみると、この県警本部地点・本調査区東端地点はこの台地上の窪地にあたる。しかも今回の調査地点は、前章でも述べたように西端と東端の基盤層の標高差が約1mあり、調査区東西方向の平均斜度は1度弱東に下がっている。これに比べて、県警本部地点の調査区内における傾斜は認められない。周辺調査地点のうちもっとも低いのは名古屋簡易・家庭裁判所合同庁舎地点であるが、本調査区西端地点と比較的至近に位置しながらも、基盤層の標高差は2m近い。さらに三の丸地区東西両端の調査地点である名古屋市公館・愛知県図書館地点の基盤層は、それぞれこうした地点より高い。したがって、本調査区を含むこうした窪地は、本調査区西端から西に続く微高地をはきんで、県警本部地点から南西方向に続くものと、南東方向に続くものとが想定される。

名古屋城三の丸遺跡93年度調査区における層序の特徴は、第9図にみるように整地層と思われる地山ブロックの多量に混じる層が数カ所で確認できることで、この層の上下に遺物包含層が堆積していることが判明した。このブロック混じりの層は、調査区全体に安定して確認できるわけではない。場所によっては遺物包含層中に2層以上認められる箇所もあれば、全く確認できない箇所も存在する。しかし、おおむね現地表高より60cmから100cmの位置で確認できるものが、調査区全体で多く認められた。このブロック混じりの層は近世の遺物包含層中に存在するが、91年度調査区で確認できた層序とは異なる。

91年度調査区では、調査区全体に同様の整地層が存在したが、この層を掘り込んでいる遺構は、すべて近世以降のものであった。したがって91年度の調査地点は、徳川家による名古屋城築城に伴い整地が行われていることが確認された。これに対して93年度調査区では、名古屋城築城に伴う整地層は少なく、相対的に近世の包含層の中で整地層が多く認められた。この近世の整地層は、焼土層などが確認されていないため、建て替えなどに伴う性格のものと考えられる。

上記のような特徴及び所見から、93年度調査区の基本層序を概観する。第1層は表土で

40～60cm堆積している。第II層は近・現代の盛り土と思われる暗褐色シルトで、15～50cm堆積している。第III層は灰オリーブ色シルトで、10～40cm堆積しているが、これは明治初期の三の丸廃絶期に伴う整地層と考えられる。さらに、第IV層は近世後期の遺物を含む黒褐色シルトが10～20cm堆積している。第V層は、熱田層がブロック状の塊となって多量に混じる暗灰黄色シルトが堆積している。この第V層中には、少量ながら近世後期の遺物が混じる。第VI層は灰黄褐色シルトが10～30cm堆積しており、近世前・中期の遺物を伴う。第VII層は熱田層ブロック混じりの黄褐色シルトで、部分的に10～20cm堆積しており、徳川家による名古屋城三の丸築城時の整地層と思われる。第VIII層は黒褐色シルトが10～30cm堆積しており、弥生・古墳時代の遺物がわずかに含まれる。この第VIII層より下位では遺物は含まれておらず、この層以下からの人為的な掘り込みは観られないため、基板層として扱った。



- |                              |                             |
|------------------------------|-----------------------------|
| 第I層 表土                       | 第V層 暗灰黄色シルト (Hue 2.5Y 5/2)  |
| 第II層 暗褐色シルト (Hue 7.5YR 2/1)  | 第VI層 灰黄褐色シルト (Hue 10YR 5/2) |
| 第III層 灰オリーブ色シルト (Hue 5Y 6/2) | 第VII層 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 5/3) |
| 第IV層 黒褐色シルト (Hue 10YR 3/1)   | 第VIII層 黒褐色シルト (Hue 5YR 3/1) |
- \* ( )内の数値は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」で照合した JIS notation

第9図 A区北壁土層断面図(部分・南より)

## 第2節 遺構

### 1 概要

本遺跡で検出した遺構は、古墳時代、戦国時代、江戸時代と大きく3時期に区分できる。遺構の頻度から言えば、江戸時代がもっとも多く、戦国時代は大型遺構が中心で数は少なく、古墳時代ではわずかな数しかみられない。こうした状況を調査区別にみると、A区では少ないながら古墳時代の遺構がみられるのに対して、B区では戦国時代以降の掘り込みしか確認できないという違いがみられた。この理由としてB区では、A区に比べて遺物包含層の残りが悪く、攪乱を受けた部分や削平された部分が多くみられたこと、さらに、元々この時期の遺構密度が薄いことを考えたい。

遺構検出面は概ね標高11.2~12.0mである。この検出面は基本層序の項でも述べたように、削平された部分も含まれていたため、各時期の生活面での検出とはなり得ない。

今回の調査区で検出した遺構は、全体的にかなりの数にのぼる。しかし、大型遺構や廃棄を目的に掘られたと思われる遺構以外からは、遺物を一定量伴うものが少なく時間的な特質を判断する上で苦慮した。以下に各時期別の主要遺構について説明をするが、遺構番号はA・B区を各調査区ごとではなく、両調査区を一括して通番を用いた。

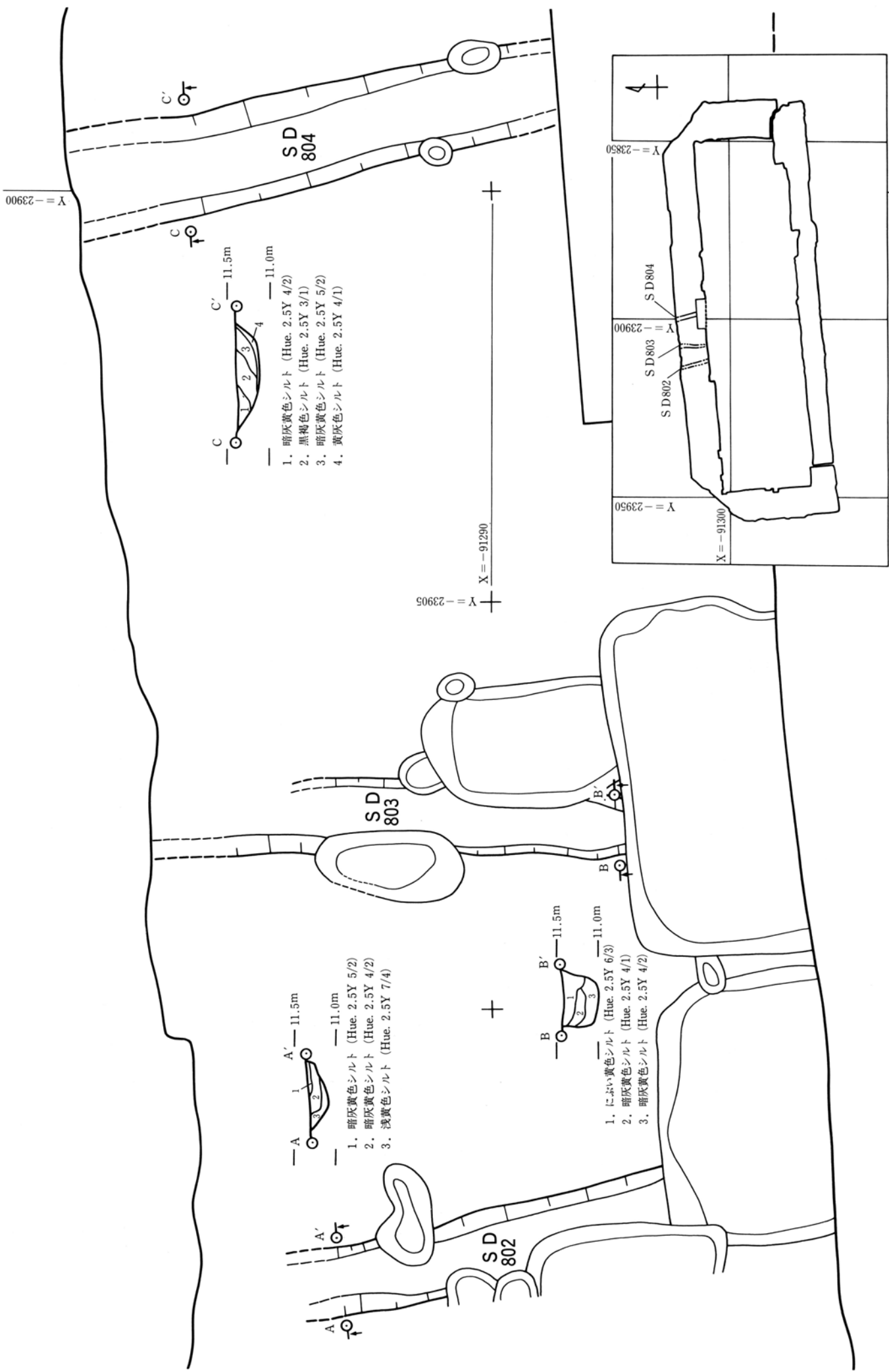
### 2 古墳時代の遺構

本遺跡の中で古墳時代以前の遺物を伴う遺構は、溝3条のみである。いずれもA区の中で南北方向にのびるもので、円筒埴輪片などが出土していることから、古墳に伴う溝の可能性を有する。このほかに遺物として弥生・古墳時代のもと思われる土器片を数点確認しているが、いずれも遺構に伴わない。この時期の堆積層は、基本層序の項で扱った第VIII層と思われるが、この層からの明確な掘り込みはほかに認められなかった。

**S D802** A区中央やや西側に位置する。検出高は11.4mを測り、断面形態は舟底形を呈しており、幅0.9m、深さ0.2mを測る。軸線の方向は、N-13°-Wを示す。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、古墳時代のもと思われる円筒埴輪片が出土している。周辺の近世遺構に切られている。

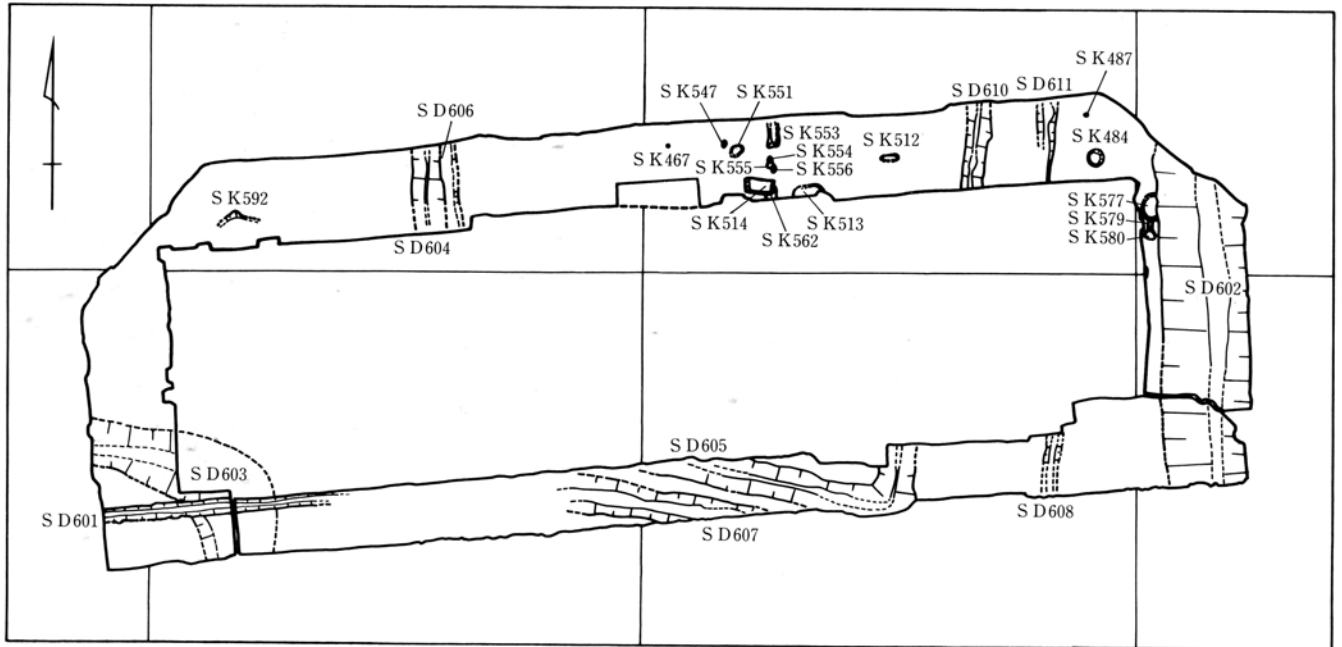
**S D803** A区中央やや西側に位置する。検出高は11.5mを測り、断面形態はU字形を呈しており、幅0.8m、深さ0.5mを測る。軸線の方向は、N-3°-Eを示す。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、須恵器高杯片が出土している。周辺の近世遺構に切られている。

**S D804** A区中央に位置する。検出高は11.4mを測り、断面形態はゆるやかな谷形を呈しており、幅1.3m、深さ0.3mを測る。軸線の方向は、N-13°-Wを示す。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、S D802同様古墳時代のもと思われる円筒埴輪片が出土している。周辺の近世遺構に切られている。



第10図 古墳時代の遺構 (SD 802・803・804) 位置図及び平・断面図

3 戦国時代の遺構



第11図 戦国時代遺構位置図

本遺跡の中で戦国時代の遺物を伴う遺構は、土坑17基、溝9条である。伴う遺物の量は、江戸時代の遺構と比較すると極端に少ない。

土坑に関しては、深浅の差が若干認められ、平面形態は方形、楕円、柱穴状の小円などがみられた。これらの土坑の分布状況は、A区東側に集中する傾向がみられた。これに対し溝は、規模においてははっきりとした格差が認められ、断面形態においても違いがみられた。断面形態は逆台形を呈するいわゆる箱堀（S D 602・603・607）、逆三角形を呈するいわゆる薬研堀（S D 601・604・605）がみられた。これらの溝の分布状況は、土坑のようなまとまりがみられず、方向もいくつかのグループに分かれる。この溝のなかで明確な切り合い関係が確認できたのは、わずかに1組（SD601と603）のみであった。

時期の差については、遺物の出土量が少ないため明確にしにくいだが、出土遺物の時期的構成によって3段階を推定した。

- I期 15世紀後葉の窖窯製品のみが出土するもの  
溝S D 610
- II期 大窯I・II期（16世紀前・中葉）を主要出土遺物とするもの  
溝S D 603・605・(607)・608 土坑S K 512・513・514・553・555・556
- III期 大窯III期（16世紀後葉）を主要出土遺物とするもの  
溝S D 601・602・604

ただし、この戦国時代の遺構の中で溝については、出土遺物の様相から開削期間が複数期に及ぶ可能性を持つもの（S D 607）もみられた。

## 戦国時代I期

S D610 A区東側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.3mを測り、断面形態は舟底形を呈しており、幅2.1m、深さ1.0mを測る。軸線の方向は、N-6.5°-Eを示す。埋土は灰褐色シルトを基調とし、窖窯期末の陶器片が少量出土している。江戸時代の土坑に切られている。

## 戦国時代II期

S D603 A・B区南西端に位置し、西からのびてきたものが南に向けて曲がるコーナー部分が検出される。江戸時代から現代にかけて、掘り込み面の大半に激しい攪乱を受けているため、正確な規模は復元し得ない。検出高は12mを測り、断面形態は傾斜角のきつい逆台形であったと思われる。推定幅5m以上、推定の深さ3m以上を測る。軸線の方向は、N-82°-WからN-6°-Eに曲がるものと思われる。埋土は、褐色系シルトの中に黄色系細粒砂層が混じる。A区西壁に近い断面の状況は、南側から偏った埋伏行為が行われた可能性を示す。大窯I・II期の陶器片、土器片などが出土している。

S D605 B区中央やや東側に位置し、西からのびてきたものが北に向けて曲がるコーナー部分が検出される。検出高は12.8mを測り、断面形態は逆三角形を呈する。推定幅5.2m、深さ2.8mを測る。軸線の方向は、N-79°-WからN-8.5°-Eに曲がるものと思われる。埋土は、黄褐色系シルト層に黄色系細粒砂層が混じる。短期間に埋伏行為が行われたものと思われるが、溝に直行する断面には埋める方向に関して偏りは認められなかった。大窯I・II期の陶器片、土器片、窯道具などが出土している。

(S D607) B区中央やや東側に位置し、東西方向にのびる。検出高は11.7mを測り、断面形態は逆台形を呈する。幅4.1m、深さ1.7mを測る。軸線の方向は、N-81°-Wを示す。埋土は黄褐色系シルト層に黄色系細粒砂層が混じる。この溝から出土した遺物は下層においては、わずかな大窯I・II期の陶器片のほかに、江戸時代初頭の陶磁器片がまとまっている。しかし、中・上層からは大窯I・II期の陶器片、土器片などが出土している。こうした逆転現象については、埋め戻される直前の時期が江戸時代初頭であり、埋め戻しに利用した周囲の土に大窯I・II期の遺物が混入していたと判断したい。したがってこの溝は、方位などを合わせて判断すれば、機能を停止するのは江戸時代初頭であるが、掘削時期は戦国時代II期の可能性を有すると考え、()表示でこの時期に入れた。この溝に関する埋土についても、溝に直行する断面には、埋伏時における一定方向からの偏りはみられなかった。

S D608 B区東側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、幅1.6m、深さ0.7mを測る。断面形態は舟底形を呈する。軸線の方向は、N-9°-Eを示す。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、遺物は、大窯I期の陶器片や、土器片がわずかな量ではあるが出土している。

## 土坑群

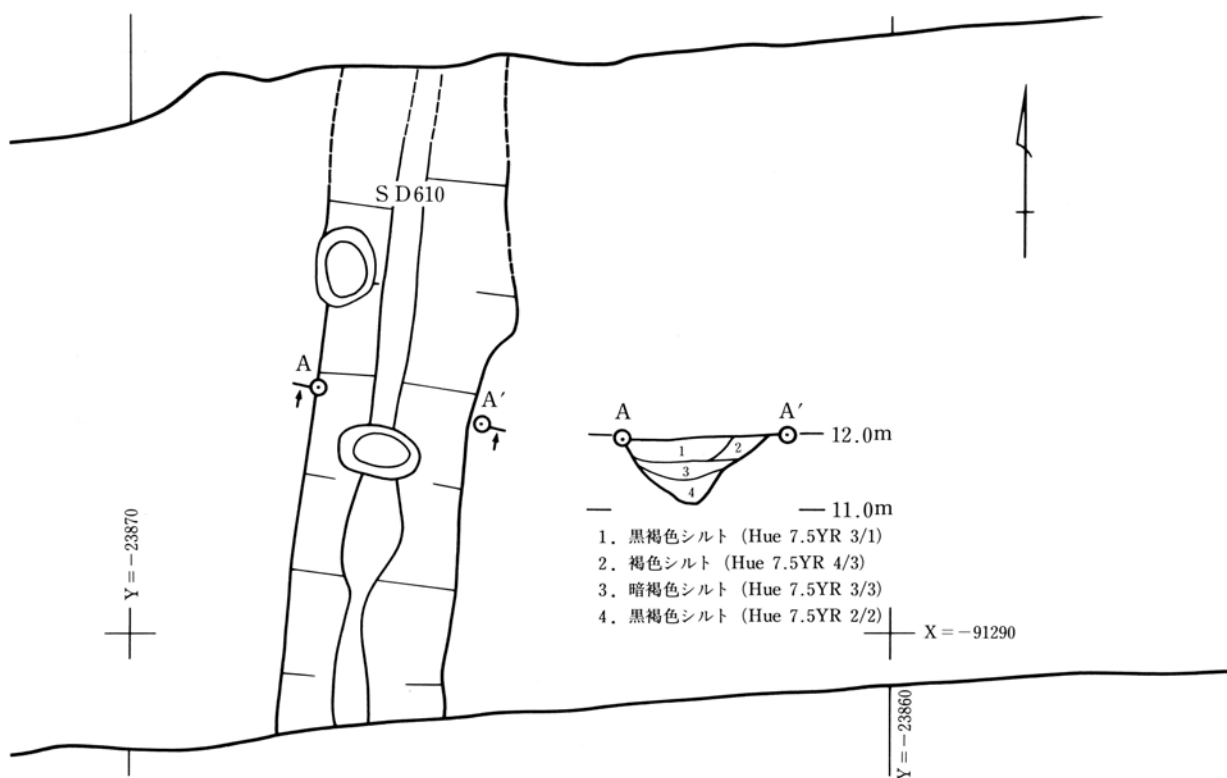
A区東側に集中して位置する。検出高は概ね11.3mを測り、平面形態は楕円形、隅丸方形、不整円形などを呈し、長径0.7~3.0m、短径0.5~1.7m、深さ0.1~0.7mを測る。埋土は黄灰色シルトを基調とするものが多く、大窯I・II期の陶・土器片が出土する。

戦国時代Ⅲ期

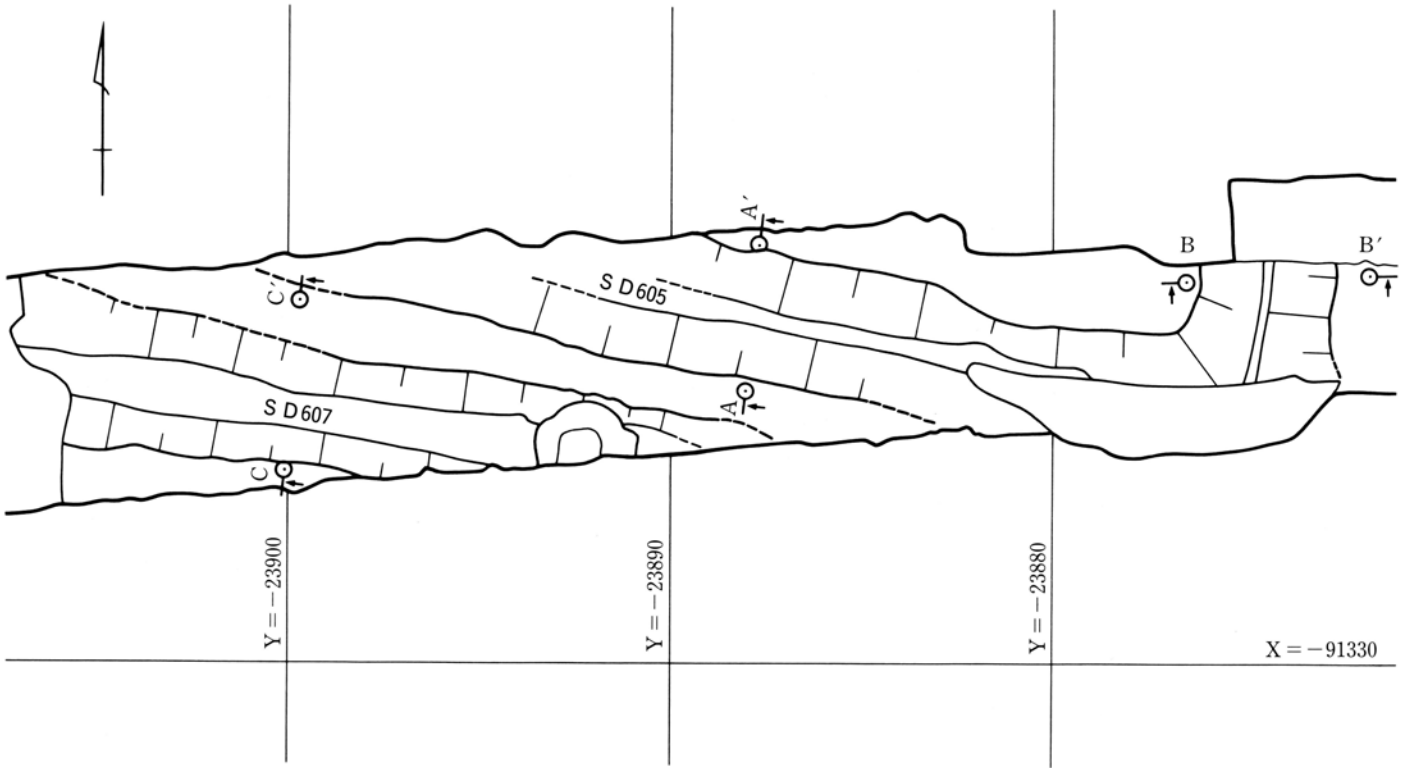
S D 601 B区西端からA区南西端にかけて位置し、東西方向にのびる。検出高は12.1mを測り、幅1.6m、深さ1.1mを測る。断面形態は、逆三角形を呈する。軸線の方向は、N-86°-Eを示す。埋土は黄褐色系のシルトを基調とし、大窯Ⅲ期のものを含み、それ以前の陶・土器片が出土している。このS D 601は、戦国時代の溝の中で唯一切り合い関係を持ち、Ⅱ期のS D 603を切っている。

S D 602 A・B区東端に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、推定の幅11.2m、深さ4.3mを測る。断面形態は、逆台形を呈する。軸線の方向は、N-2°-Wを示す。埋土は上・中層と、下層とで明確に区分できた。上・中層は、地山である熱田層ブロックの多量に混じる、黄色系シルトが厚い層として堆積する。これに対し下層では、灰色系粘質土と黄色系シルトの薄い層が、互層となって堆積する。この堆積状況の違いは、溝の機能していた時期の堆積層が下層であり、溝を埋め戻した層が上・中層と考えたい。この溝は調査区内で全幅が検出できないため、東側の掘り込み状況が確認できないが、溝に直行する断面では、西側から偏った埋伏行為が行われた可能性がうかがえる。大窯Ⅲ期以前の陶・土器片が、わずかに下層から出土しており、上・中層は無遺物である。

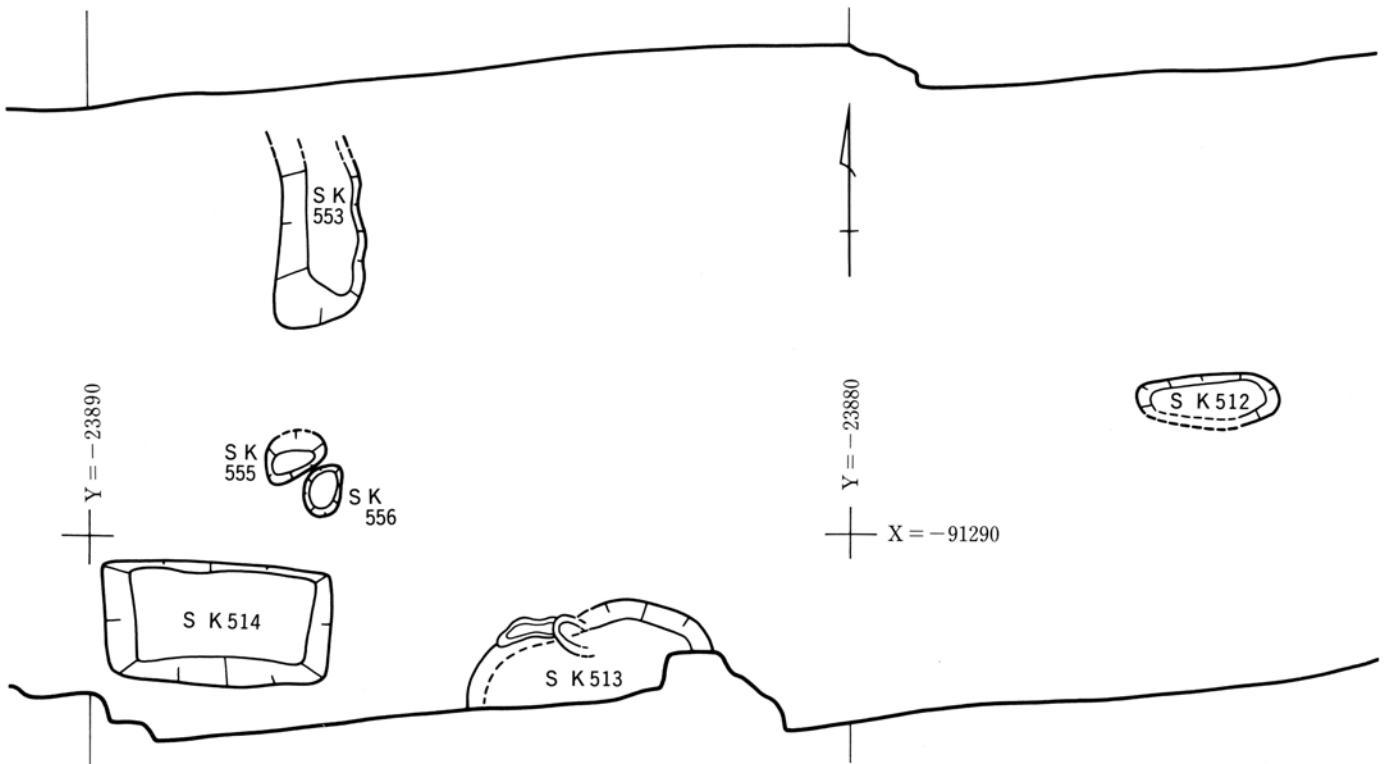
S D 604 A区中央やや西側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.7mを測り、幅3.2m、深さ1.8mを測る。断面形態は、逆三角形を呈する。軸線の方向は、N-1°-Eを示す。埋土は地山である熱田層ブロックが多量に混じる、黄色系シルトを基調とする。大窯Ⅲ・Ⅳ期以前の陶・土器片が出土している。



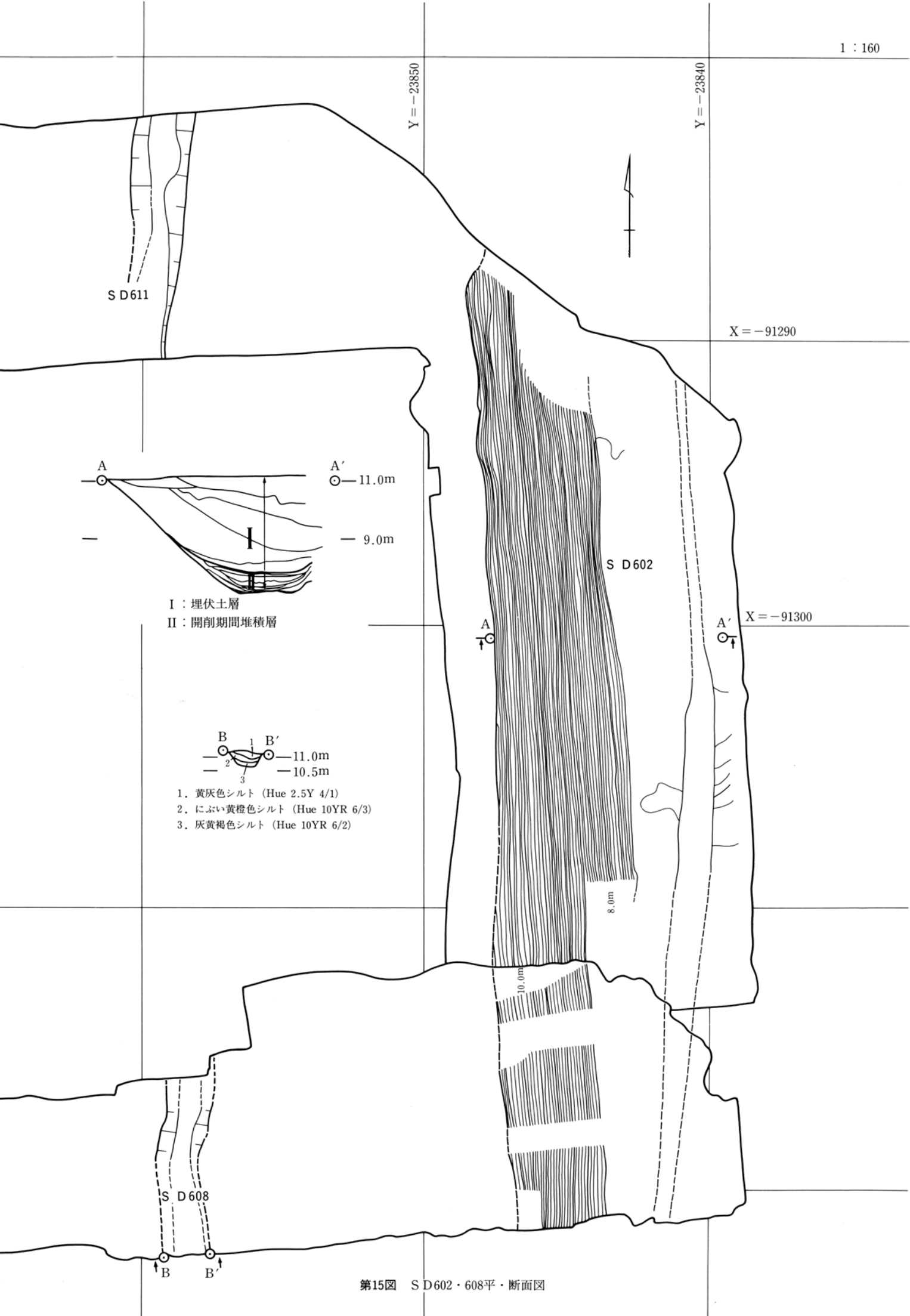
第12図 S D 610平・断面図



第13図 S D 605・607平面図



第14図 戦国時代II期土坑群平面図



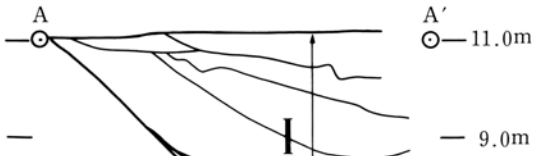
S D 611

Y = -23850

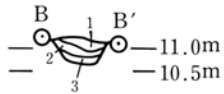
Y = -23840

X = -91290

X = -91300



I : 埋伏土層  
 II : 開削期間堆積層



1. 黄灰色シルト (Hue 2.5Y 4/1)
2. にぶい黄橙色シルト (Hue 10YR 6/3)
3. 灰黄褐色シルト (Hue 10YR 6/2)

S D 602

A  
↑

A'  
↑

8.0m

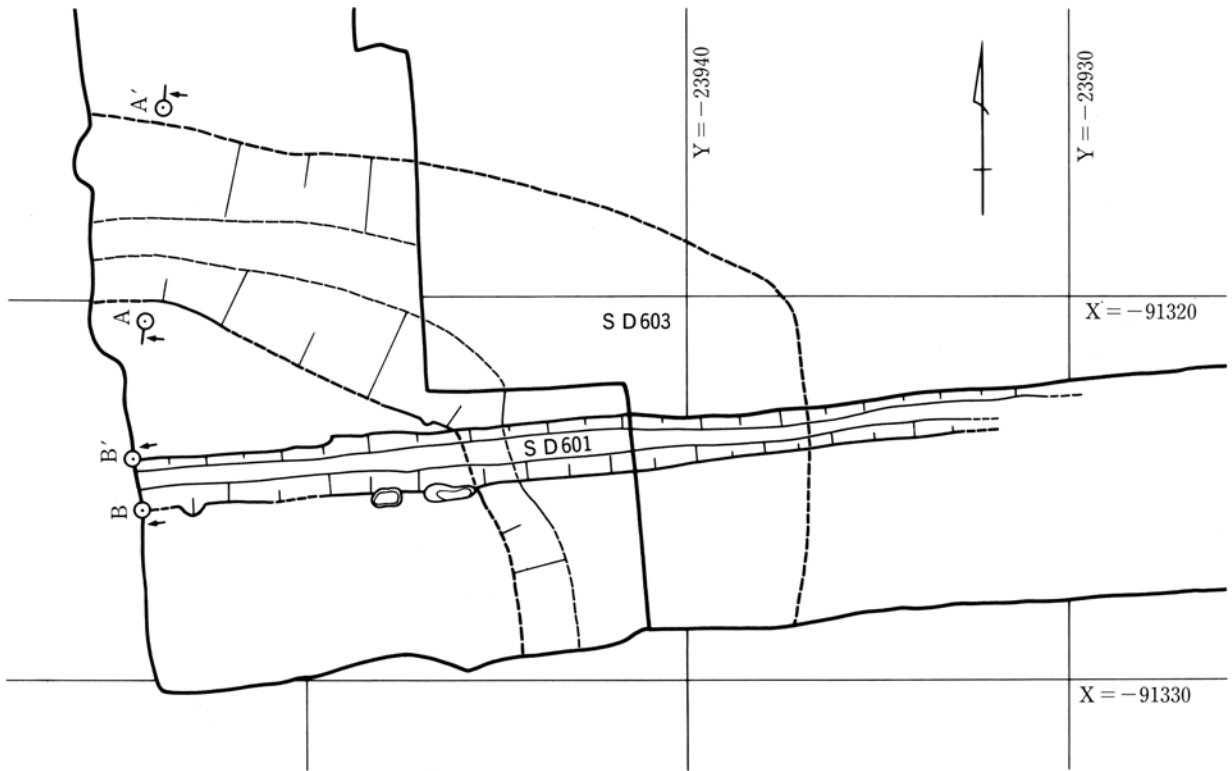
10.0m

S D 608

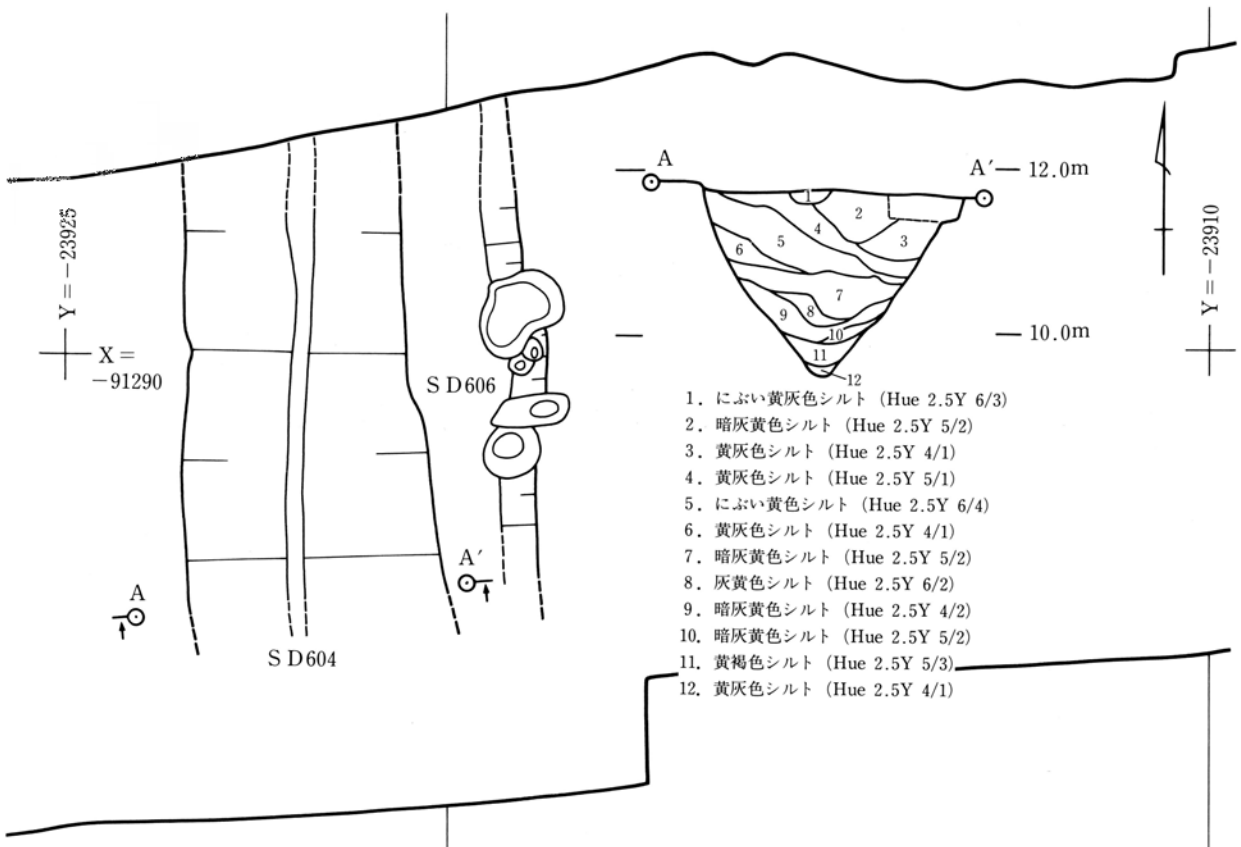
B  
↑

B'  
↑

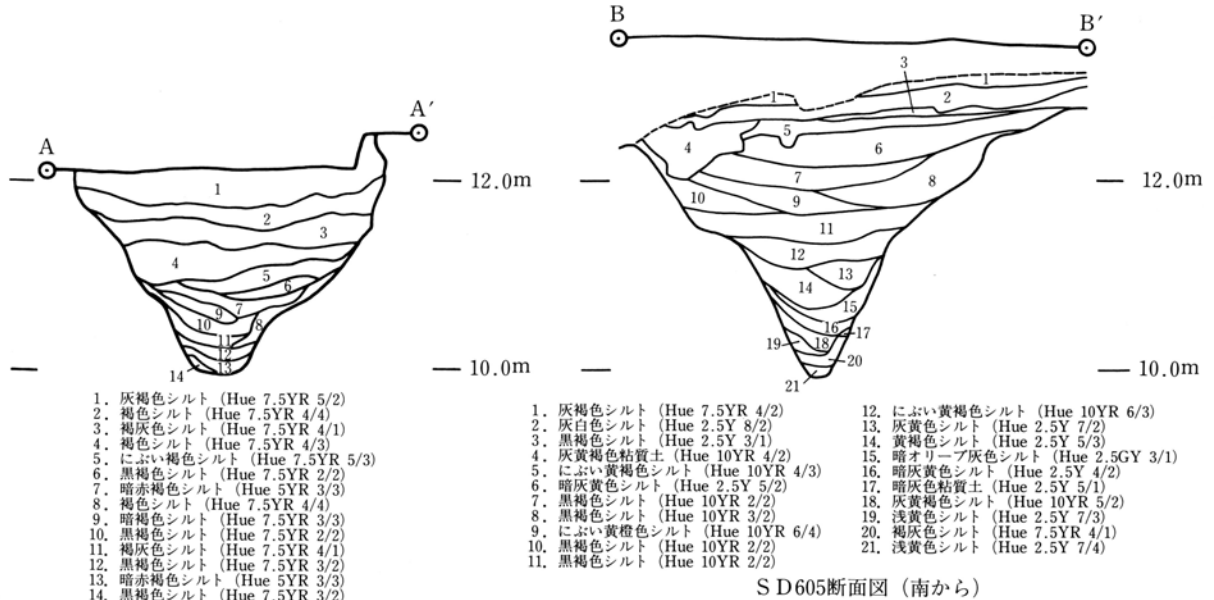
第15図 S D 602・608平・断面図



第16図 S D 601・603平面図

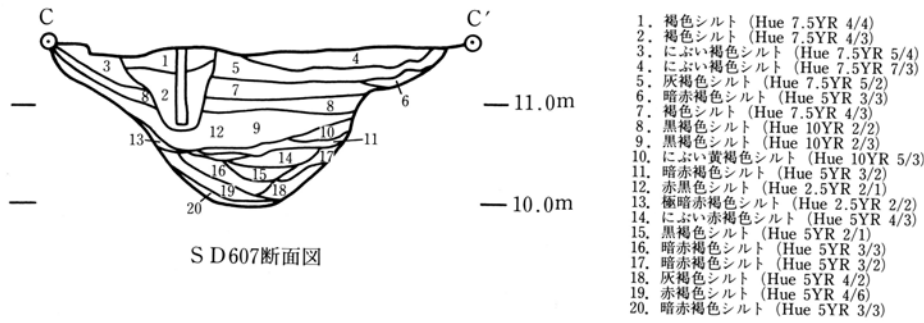


第17図 S D 604平・断面図

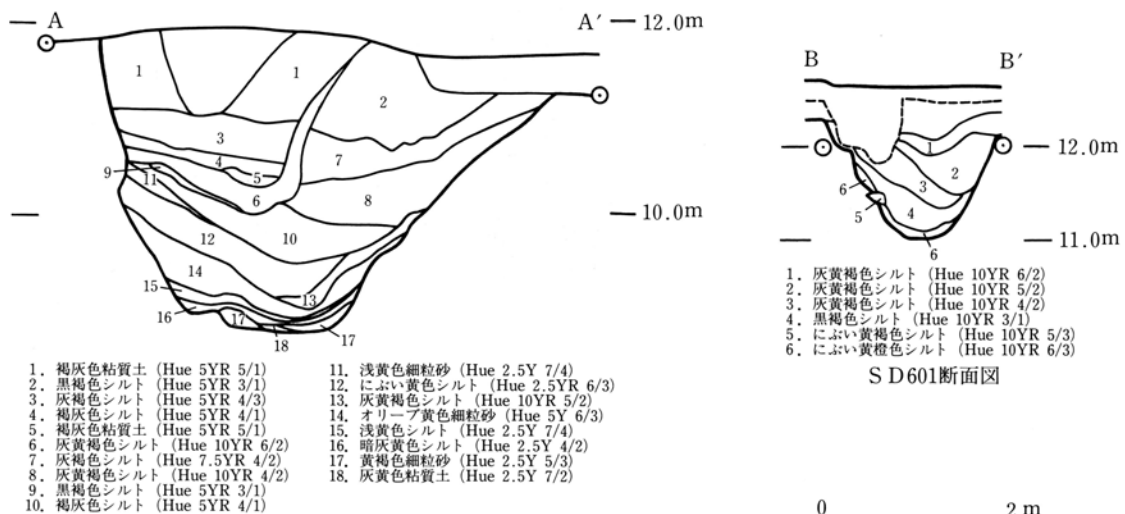


SD605断面図 (東から)

SD605断面図 (南から)



SD607断面図



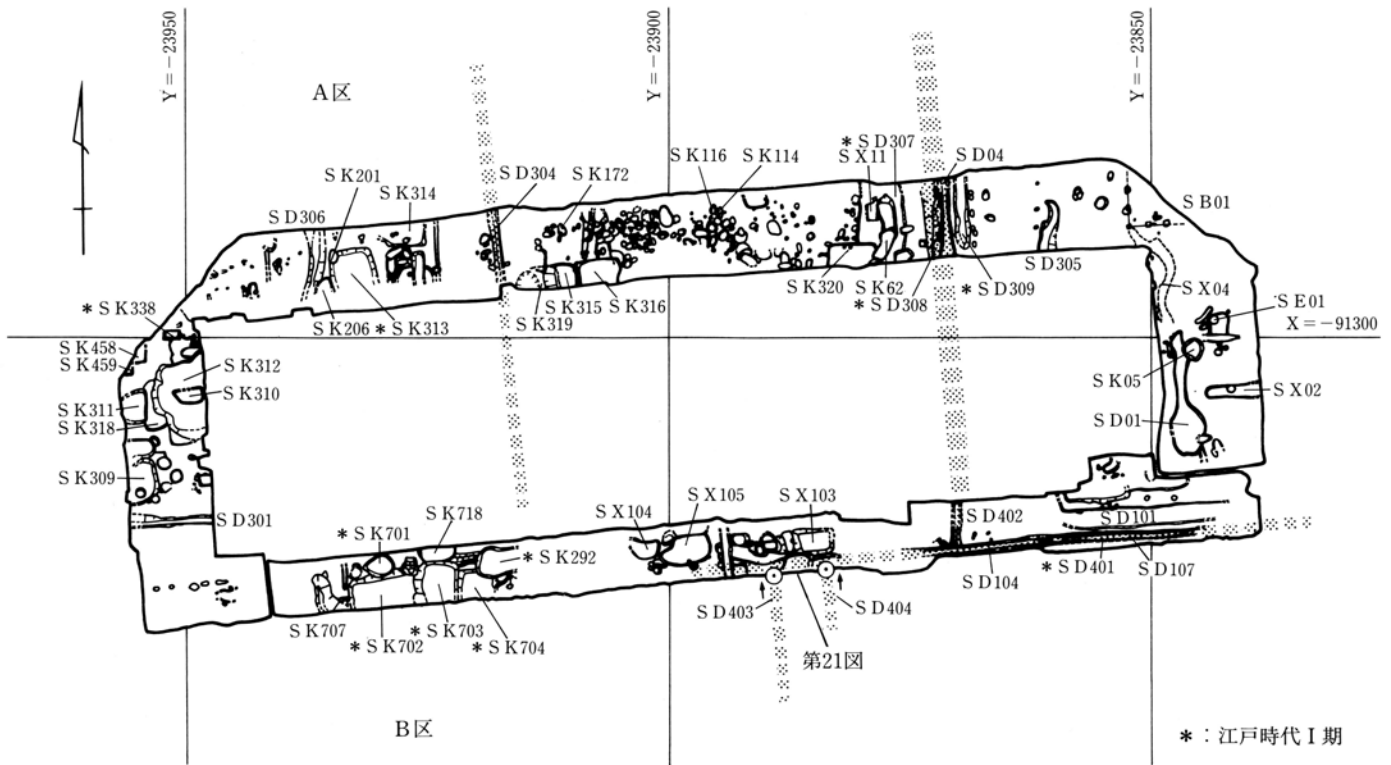
SD603断面図

SD601断面図



第18図 戦国時代溝断面図

4 江戸時代の遺構



第19図 江戸時代主要遺構位置図

本遺跡の中で江戸時代の遺物を伴う遺構は、土坑321、溝31、井戸9、建物跡1、不定形な掘り込み・その他20、である。その数は、他の時代の遺構と比較すると、圧倒的な量を占める。これらの遺構は、尾張徳川家によって築かれた名古屋城三の丸内の武家屋敷に伴うものと思われる。三の丸内の区画、屋敷境などの推定は、絵図・文献資料などと遺構との照合で可能となったが、各屋敷内の建物配置などの推定は一部を除いて成し得なかった。

時期の差については、遺構の検出状況・出土遺物の時期的構成によって2段階を設定した。

I期 下層で検出した遺構、主に江戸時代初期より18世紀中頃までの遺物を伴うもの

II期 上層で検出した遺構、主に18世紀後半より幕末に至る遺物を伴うもの

(1) 江戸時代I期 (17世紀前半～18世紀中頃)

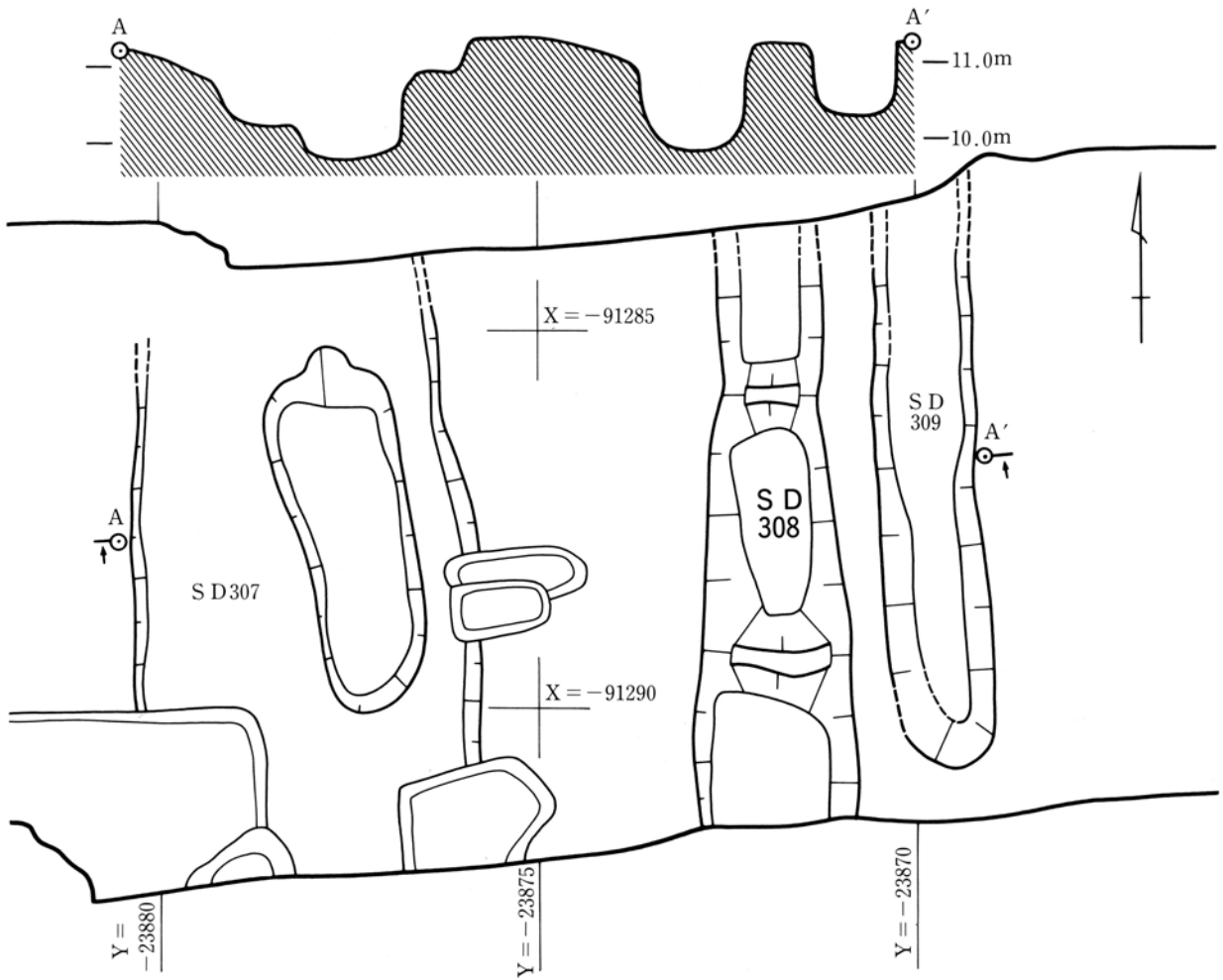
下層で検出した遺構のなかで溝状の遺構は、屋敷の境界に伴う可能性を有するものを除いて、南北方向のものがほとんどである。こうした溝の断面形態は、ゆるやかな船底形を呈しているものが多く、戦国時代の溝と比較すると浅く幅も狭い。土坑は、上層のものに比べて大型のものが目立った。土坑に関しては深浅の差が認められ、平面形態は方形、円形、楕円形、柱穴状の小円などがみられた。これらの土坑の分布状況は、極端に偏ることなく位置しているが、17世紀代の遺構がB区西側に集中する傾向がみられた。また、小規

模の土坑はA区中央付近に特に集まって検出された。この地点は、絵図・文献資料などと検出遺構とを照合し、復元した屋敷境の溝から、屋敷地2と思われる。調査区内の土坑は全体的に複雑に切り合っている場合が多く、同じ地点が何度も掘り返されたことがうかがえる。これらの土坑を規模・形状などで分類すると、大型で地下・半地下式設計の意図がうかがわれるもの、大型で設計の意図がうかがわれないもの、中・小規模のものなどがみられる。

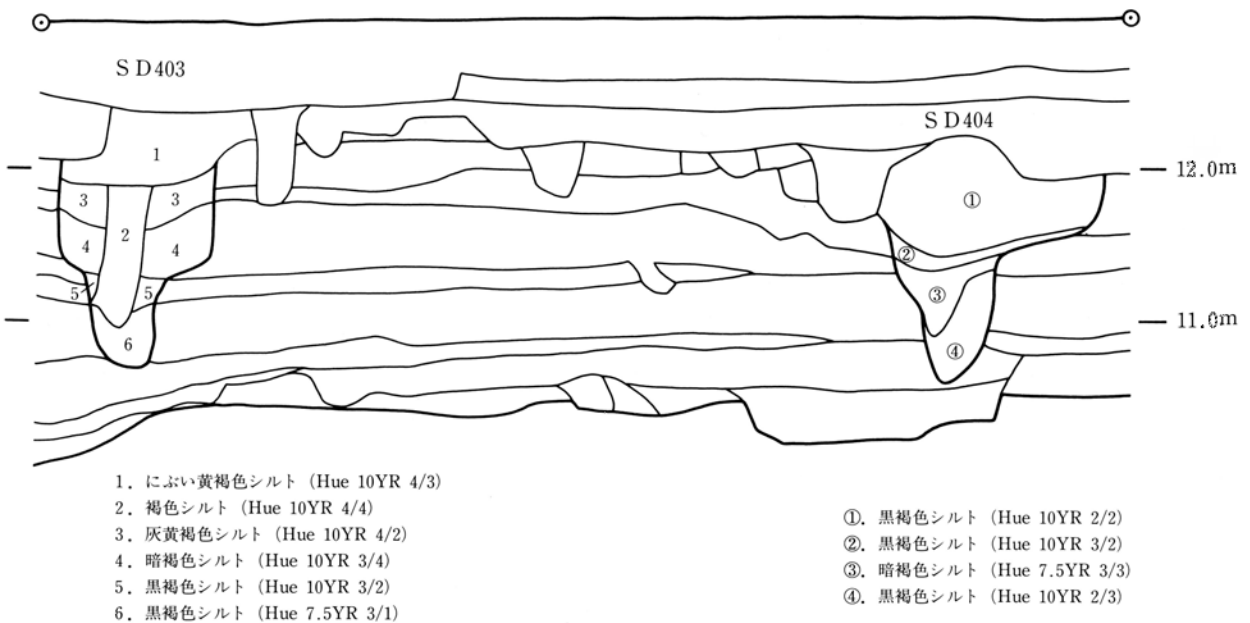
以下に主要遺構について、種別に説明する。

#### 溝状遺構

- S D 304 A区中央やや西側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.25mを測り、断面形態は箱形を呈しており、幅1.0m、深さ0.36mを測る。軸線の方向はN-6.5°-Wを示し、埋土は灰黄色シルトを基調とする。周辺の基板層は、この溝を東西の境として東側が0.5m低くなっており、土坑の密度も東西で異なっている。したがって屋敷地1と2は、この南北溝によって区画されているものと思われる。遺物をほとんど含まない。
- S D 308 A区中央やや東側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.3mを測り、断面形態が舟底形の溝の中に、楕円形の土坑を破線状に掘削しており、幅1.9m、深さ1.6mを測る。軸線の方向はN-1°-Wを示し、埋土は褐色系シルトを基調とする。この遺構の掘削状況は、上部構造として塀を構築するための基礎を目的にしていることが想定できる。さらに、この遺構を東西の境として、土坑などの密度も異なっている。したがってこの遺構の性格は、屋敷地2と3の境界を目的としたものとして捉えたい。この遺構は位置的に、B区中央東側S D 402の延長である可能性が考えられる。遺物をほとんど含まない。
- S D 401 B区東側、調査区南端に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、断面形態は箱形を呈しており、幅1.3m、深さ1.0mを測る。軸線の方向はN-86°-Eを示し、埋土は褐灰色シルトを基調とし、水の流れまたは滞水の痕跡は認められない。南北方向の屋敷境ラインと思われるS D 308～S D 402に対して、東西方向ではほぼ直行するように交わる。したがって、本調査区が所在した三の丸内のブロックを南北に区画するラインと思われる。遺物は、1700年前後の陶器片がわずかに出土している。
- (S D 403 B区中央南端に位置し、B区南壁の断面でのみ確認することができ、北側では検出し得  
。404) ないことから、この地点から南側にのびる可能性が強い。断面形態は、箱形または舟底形の溝にさらに土坑を掘削している可能性が考えられる。したがってS D 308のように、上部構造として塀を構築するため、その基礎造りを目的として掘削された可能性が強い。両遺構の新旧関係は、断面から明確に読みとることはできない。しかし、これらの遺構が屋敷の境界だとすれば、文献資料・絵図では、この南北ラインは変更されていることが確認できるため、そうした行為の痕跡をこの断面に求めたい。この2条の遺構間は、約4.1mを測る。断面のみの確認であるため、時期は判じ得ない。



第20図 SD308平・断面図



- 1. にぶい黄褐色シルト (Hue 10YR 4/3)
- 2. 褐色シルト (Hue 10YR 4/4)
- 3. 灰黄褐色シルト (Hue 10YR 4/2)
- 4. 暗褐色シルト (Hue 10YR 3/4)
- 5. 黒褐色シルト (Hue 10YR 3/2)
- 6. 黒褐色シルト (Hue 7.5YR 3/1)

- ①. 黒褐色シルト (Hue 10YR 2/2)
- ②. 黒褐色シルト (Hue 10YR 3/2)
- ③. 暗褐色シルト (Hue 7.5YR 3/3)
- ④. 黒褐色シルト (Hue 10YR 2/3)

第21図 SD403・404断面図

土坑

・地下・半地下式土坑

S K 313 A区西寄りに位置する。平面形態は方形を呈しているものと思われ、S K 201に切られている。残存東西径は4.7mを測り、深さ2.3mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、土坑内には床面に時期不明の素掘りの井戸の痕跡が認められる。埋土は褐色系シルトを基調としながら、中層に灰白色粘土が厚く層を成す。この遺構は平・断面形態や規模などから、地下室として使用された可能性が考えられる。18世紀前半の時期を主要とする陶磁器、焼塩壺、三星一文字紋瓦（渡辺家紋）などが出土している。（屋敷地1）

S K 458 A区西端に位置する。S K 458は、壁面が垂直に落ちるコーナー部分が検出され、壁際であつたため深さが確認できなかった。

S K 459は同様にコーナー部分が検出される。東壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁はS K 458とは異なり、北側に向かって狭いテラスを連続して設けながら下がっている。両遺構の方位はほぼ同じで、S K 458を垂直に掘り込まれた地下室と考えると、S K 459はこれに付属した素掘りの階段を設けるための掘り込みと想定できる。（屋敷地1）

・土坑

S K 338 A区北西端に位置する。平面形態は長方形を呈し、長径1.9m、短径0.9m、深さ0.4mを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、S K 336を切っている。遺物は17世紀後半から18世紀前半の陶磁器片が、出土している。（屋敷地1）

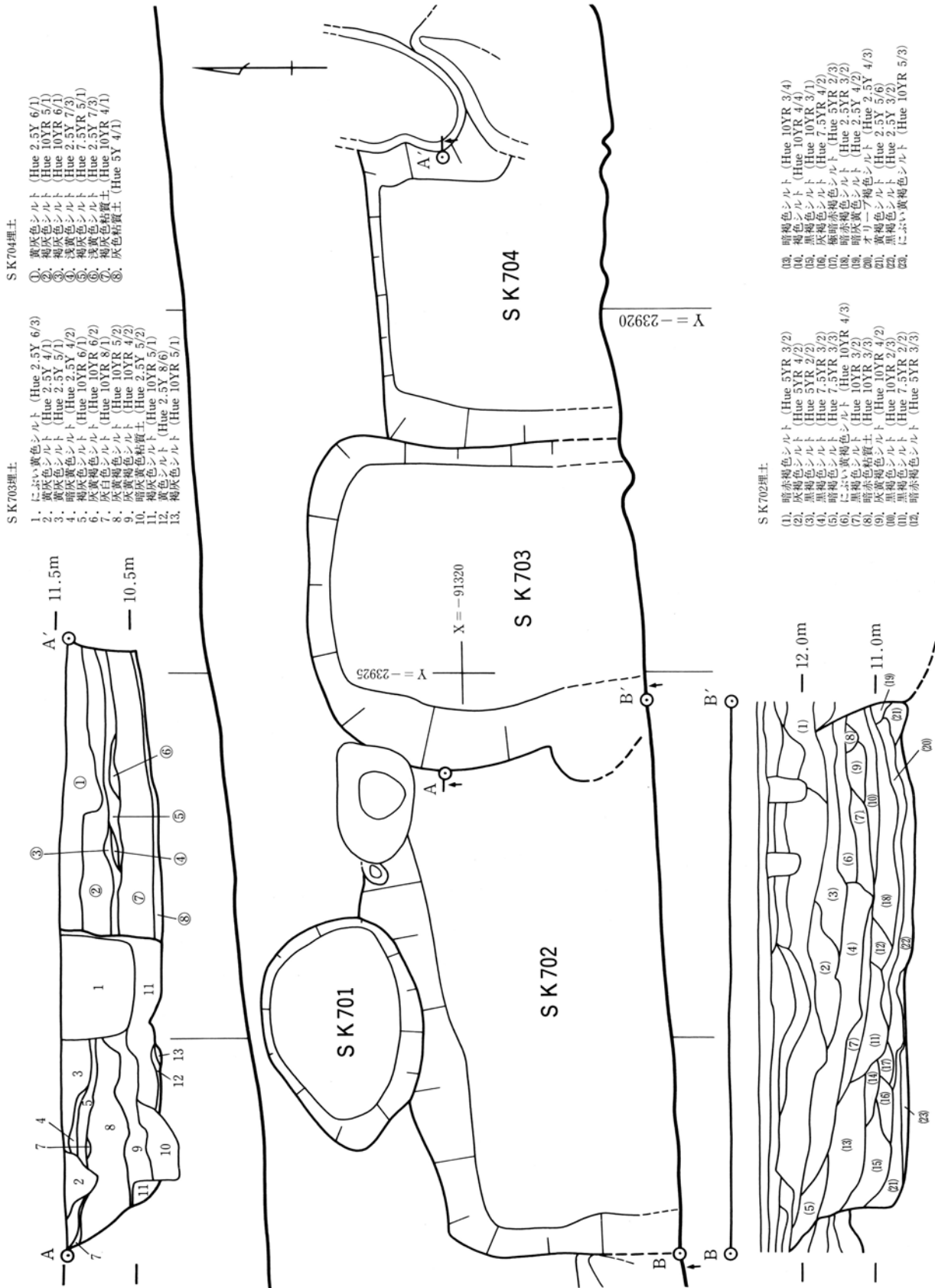
S K 701 B区西側に位置する。平面形態は不整形を呈し、長径3.2m、短径2.2m、深さ0.7mを測る。埋土は褐色系シルトを基調とし、S K 701を切っている。出土遺物は、17世紀後半のものを主体とする。

S K 701を含みこの地点の周辺には、大型で廃棄を目的として掘り込まれたと思われる土坑が集中している。いずれも主要出土遺物は17世紀代のものであり、この地点が17世紀前半～18世紀初頭の時点で集中して、廃棄を目的に利用されたことがうかがえる。各遺構の切り合い関係は、S K 702を701・703が切っており、S K 704を703・292が切っている。（屋敷地1）

S K 702 B区西側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は11.4mを測り、深さ1.2mを測る。埋土は黄色系シルトに地山ブロックが混じる。出土遺物は、17世紀前半のものを主体とする。（屋敷地1）

S K 703 B区西側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は11.4mを測り、残存径4.5m、深さ1.6mを測る。埋土は褐色系シルトに地山ブロックが混じる。出土遺物は、17世紀後半のものを主体とする。（屋敷地1）

S K 704 B区西側に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は11.2mを測り、深さ1.2mを測る。埋土は黄色系シルトを基調とし、出土遺物は、17世紀後半のものを主体とする。（屋敷地1）



S K 704埋土

- ①. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 6/1)
- ②. 黄褐色シルト (Hue 10YR 5/1)
- ③. 黄褐色シルト (Hue 10YR 6/1)
- ④. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 7/3)
- ⑤. 黄褐色シルト (Hue 7.5YR 5/1)
- ⑥. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 7/3)
- ⑦. 黄褐色シルト (Hue 10YR 4/1)
- ⑧. 灰褐色粘質土 (Hue 5Y 4/1)

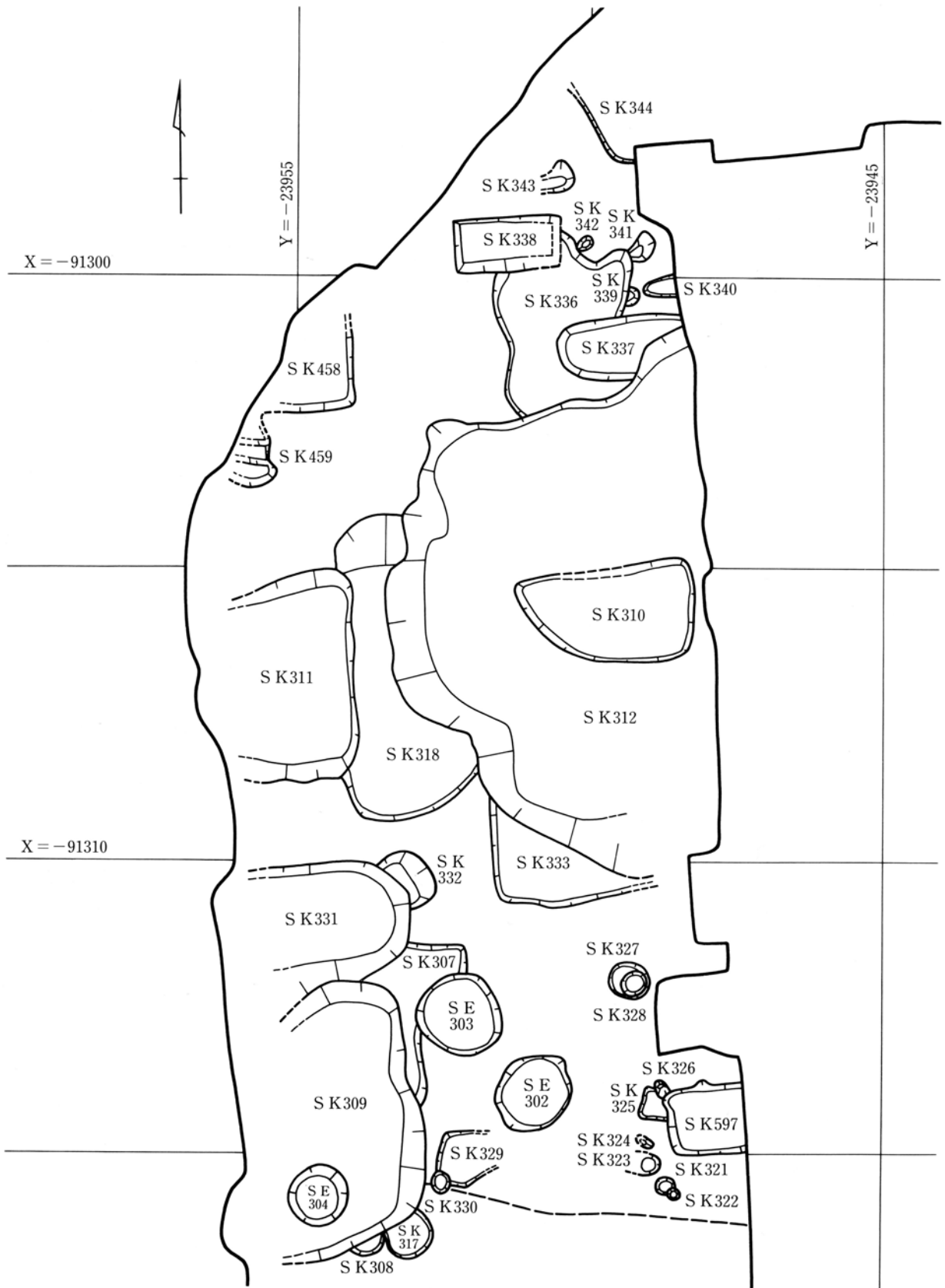
S K 703埋土

- 1. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 6/3)
- 2. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 4/1)
- 3. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 4/2)
- 4. 暗灰褐色シルト (Hue 10YR 6/1)
- 5. 灰褐色シルト (Hue 10YR 6/2)
- 6. 灰褐色シルト (Hue 10YR 8/1)
- 7. 灰褐色シルト (Hue 10YR 5/2)
- 8. 暗灰褐色粘質土 (Hue 10YR 4/2)
- 9. 暗灰褐色シルト (Hue 2.5Y 5/2)
- 10. 黄褐色シルト (Hue 2.5Y 8/6)
- 11. 黄褐色シルト (Hue 10YR 5/1)
- 12. 黄褐色シルト
- 13. 黄褐色シルト

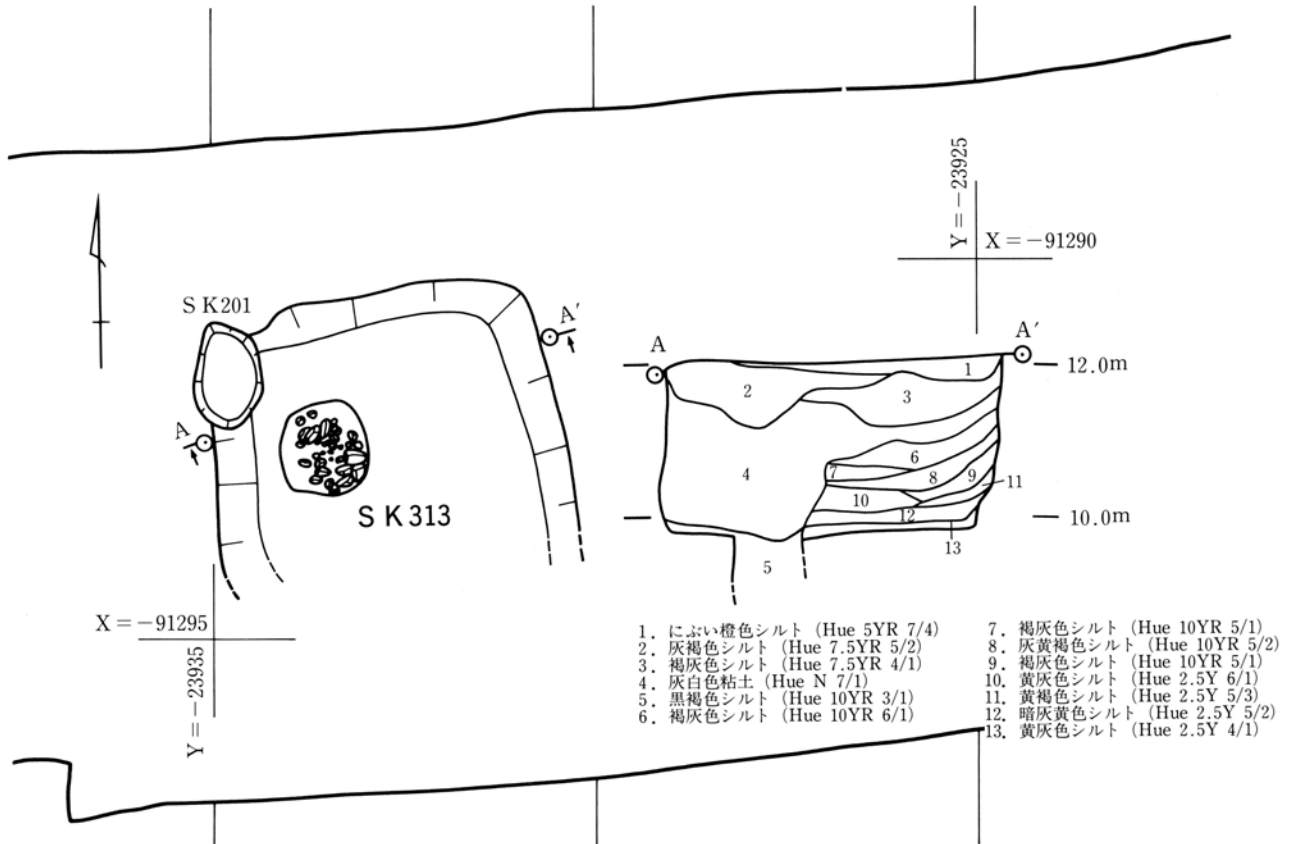
S K 702埋土

- (1). 暗赤褐色シルト (Hue 5YR 3/2)
- (2). 灰褐色シルト (Hue 5YR 4/2)
- (3). 暗褐色シルト (Hue 5YR 2/2)
- (4). 暗褐色シルト (Hue 7.5YR 3/2)
- (5). 暗褐色シルト (Hue 7.5YR 3/3)
- (6). 暗赤褐色シルト (Hue 10YR 4/3)
- (7). 暗褐色シルト (Hue 10YR 3/2)
- (8). 暗赤褐色粘質土 (Hue 10YR 3/3)
- (9). 暗褐色シルト (Hue 10YR 2/2)
- (10). 暗褐色シルト (Hue 7.5YR 2/2)
- (11). 暗褐色シルト (Hue 5YR 3/3)
- (12). 暗赤褐色シルト (Hue 5YR 3/3)

第22図 B区西側土坑群平・断面図



第23图 A区西侧土坑群平面图



第24図 SK313平・断面図

(2) 江戸時代II期 (18世紀後半～19世紀中頃)

上層で検出した遺構は、下層の遺構同様に相互の関係を判別するのが困難で、出土遺物・切り合い関係などによって時間的な特質を推定することを主眼とした。

溝状遺構の中で屋敷の境界に伴う可能性を持つものは、下層検出の遺構と重なるものが多く、数度の掘り返しがうかがえる。

土坑に関しては、下層のように地下・半地下式施設が想定できるものが、上層でも数基確認できた。平面形態は上層と同じく、方形、円形、楕円形、柱穴状の小円などがみられた。これらの土坑の分布状況は、A区中央部分に規模の小さいものが下層と同様に集中し、廃棄を目的にしたと思われる規模の大きな遺構は、A区西側に多くみられた。

以下に主要遺構について、種別に説明する。

溝状遺構

**S D01** A区東側に位置し、南北方向にのびる。検出高は11.5mを測り、全長13.1m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。溝の内部には石組みの痕跡が残っており、北から南に向かってやや下がっている。そして、この溝の南端は、楕円形状に広がって終結する。溝の北側はSK05に切られているが、この土坑をSD01に伴うものと考え、両遺構で污水处理施設を形成していた可能性が考えられる。すなわち、汚水がまずSK05に流れ込み、オーバーフローした上澄みがSD01内の石組み溝に流れ、南端の楕円形状に広がった部分で、地下に浸透

する仕組みがうかがわれるからである。周辺には、SE01のような漆喰の枠をもつ井戸も存在するため、洗い場等の空間も考えられる。軸線の方位はN-4°-Wを示す。(屋敷地3)

**S D 04** A区中央やや東寄りに位置し、南北方向にのびる。検出高は11.8mを測り、幅1.5m、深さ0.4mを測る。軸線の方向はN-4°-Wを示し、I期のSD308の上層で重なるように検出するが、断面形態は舟底形を呈しており、SD308のように内部土坑は伴わない。埋土は暗褐色シルトを基調とし、ほとんど遺物を含まない。

**S D 101** B区東側に位置し、東西方向にのびるが西端で北へ屈曲する。検出高は11.8mを測り、幅2.1m、深さ0.6mを測る。軸線の方向はN-87°-Wを示す。溝のほぼ中央部分が東西方向に攪乱を受けており、全容をうかがうことができないが、内部に石組みの溝が設けられていた痕跡がみられる。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、19世紀前半から中頃にかけての陶磁器片が出土している。(屋敷地3)

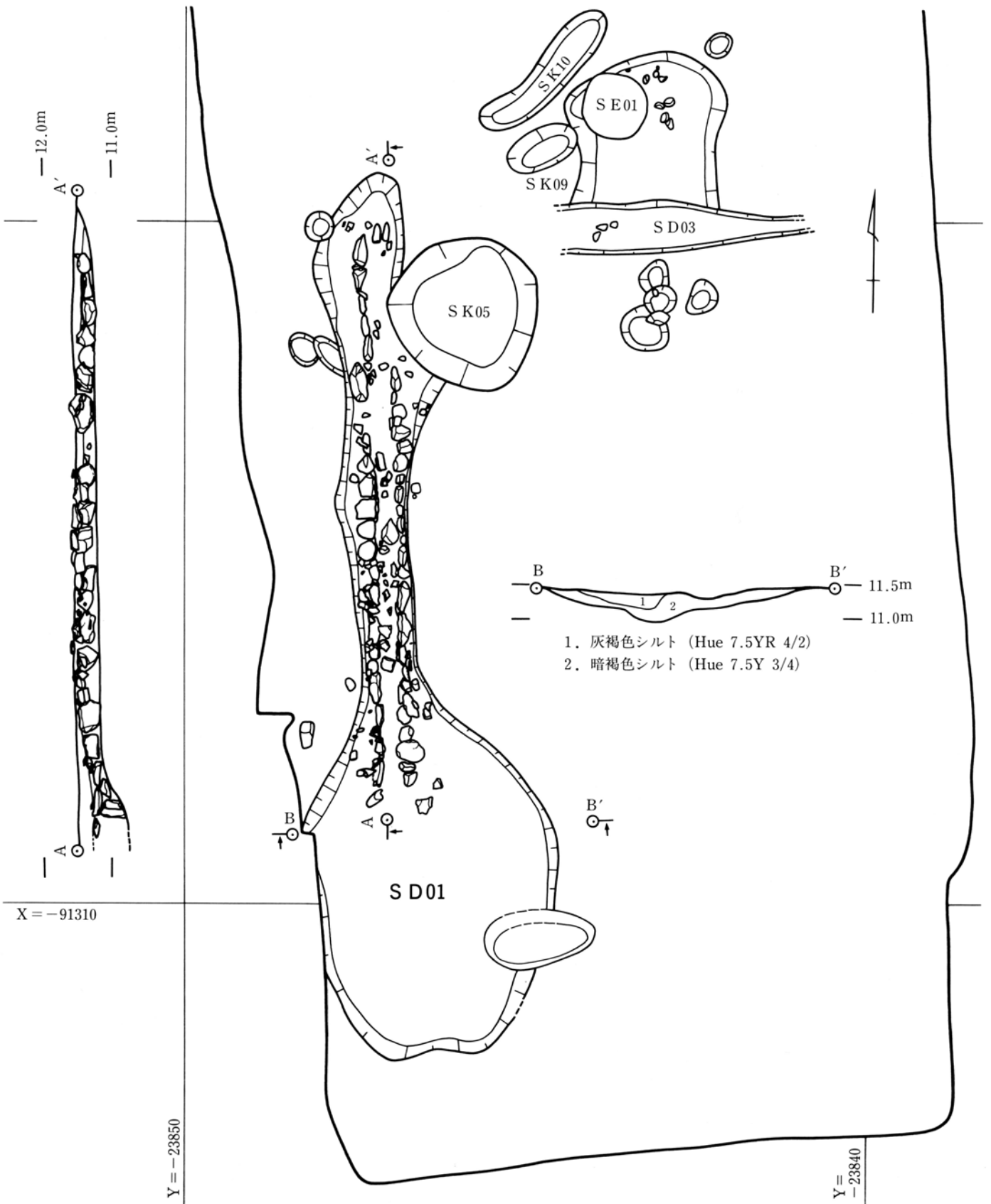
**S D 104** B区東側南壁沿いに位置し、それぞれ東西方向にのびる。検出高は11.8m~11.9mを測り、深さは0.2mを測る。この両溝は、壁沿いにトレンチを設定したためにいずれも南側の掘り込みが確認できず、全幅は求められなかった。両溝は、それぞれに方向を同じくしながらつながらず、SD104の東端と、SD107の西端がわずか1m程の間隔をもつ。この溝の位置は推定した屋敷地3の区画のほぼ南端であり、I期のSD401ともほぼ重なるため、何度か改修された屋敷境に伴う溝の可能性を有する。

#### 土坑

##### ・地下・半地下式遺構

**S K 315** A区中央やや西寄りに位置する。平面形態は方形を呈しているものと思われ、残存東西径は3.4mを測り、深さは検出高より0.9mを測る。東壁及び北壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西側のみスロープ状に角度がつけられている。埋土は黄色系シルトを基調とする。東隣にはやや浅いSK316が、わずか0.15mの距離で掘り込まれており、平面形態の方位もほぼ同じである。したがって、この両遺構は互いの存在を認識した上で掘り込まれた可能性がうかがえる。本遺構の掘削目的は、深さから判断すると人の背丈を納めるまでには及ばないため、完全な地下式とはなり得ず半地下式の構造が考えられる。さらに、片側の壁をスロープ状にし、東隣のSK316と合わせたような平面形態を持つことから、このSK315は316と併設された、半地下室的性格を持ったものではないかと思われる。ほとんど遺物を伴わない。(屋敷地2)

**S K 316** A区中央やや西寄りに、SK315と並ぶように位置する。平面形態は方形を呈しているものと思われ、残存東西径は4.4mを測り、深さは検出高より0.6mを測る。埋土は黄色系シルトを基調とし、壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、19世紀前半~中頃の陶磁器片とともに三鱗紋瓦(横井家紋)が出土する。SK315とともに、半地下室的な使用が想定される。(屋敷地2)



第25図 SD01平・側・断面図

S K 320 A区中央やや東側に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は11.3mを測り、残存径5.0m、深さ0.4mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、埋土は灰黄褐色シルトを基調とする。18世紀後半から19世紀前半の陶磁器片などが出土している。本遺構は、その深さ、掘削状況、平面形態などから、S K 315・316と同様に半地下式の施設が考えられる。(屋敷地2)

土坑

S K 62 A区中央やや東寄りに位置する。平面形態は不整形で、南北方向にのびるほぼ中央を、近代以降の建物基礎によって攪乱を受けている。検出高は11.9mを測り、長径3.9m、短径1.6m、深さ0.5mを測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、出土遺物は18世紀後半の時期を主体とする。(屋敷地2)

S K 114 A区中央に位置する。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、S K 115に切られている。検出高は11.9mを測り、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、まじない的文言が内面に書かれた土器(皿)が出土している。(屋敷地2)

S K 116 A区中央に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、上記のS K 114に隣接しこれと同様、S K 115に切られている。検出高は11.9mを測り、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.14mを測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、S K 114と同じくまじない的文言が内面に書かれた土器が出土している。(屋敷地2)

S K 172 A区中央に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は11.8mを測り、長径1.3m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、墨書土器が数点出土している。(屋敷地2)

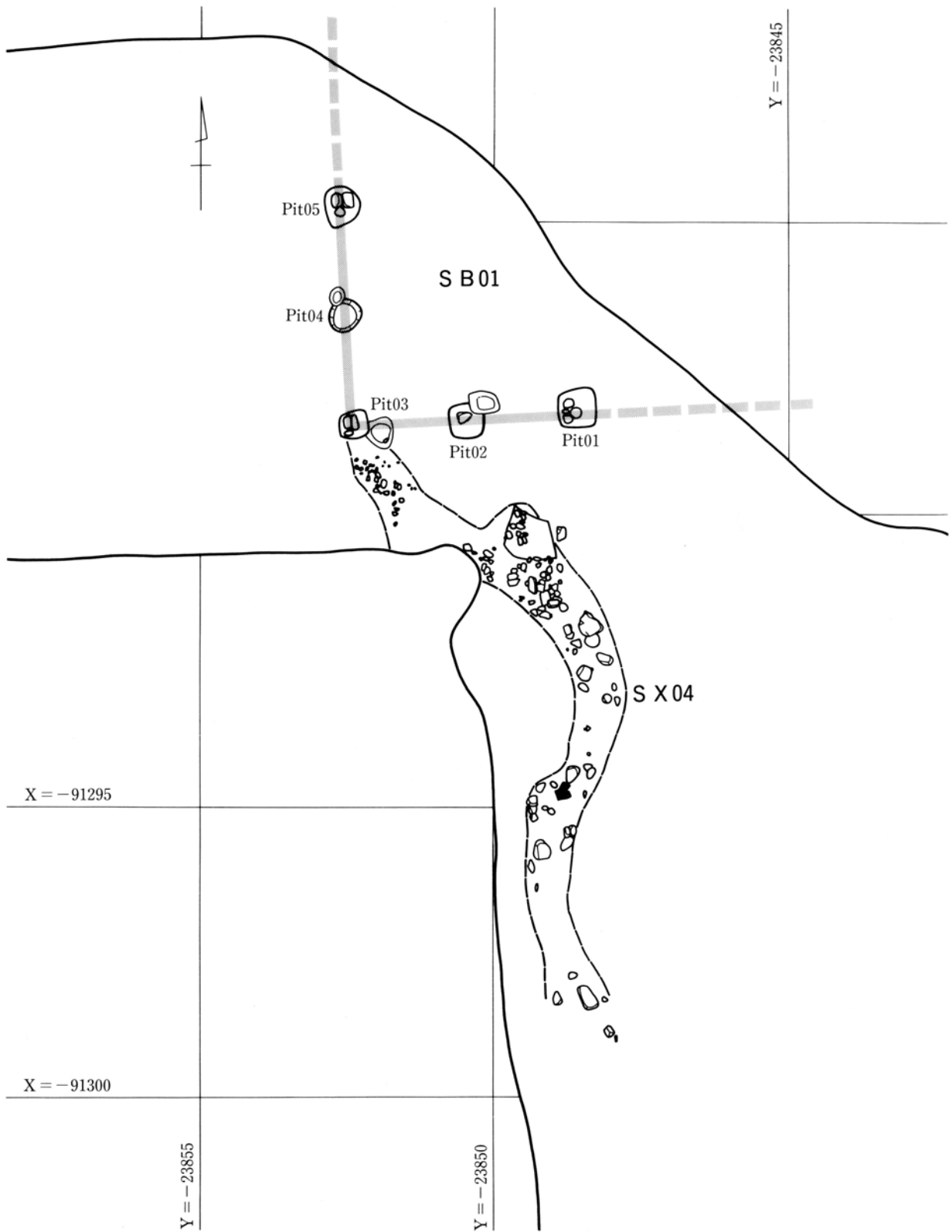
S K 201 A区中央西寄りに位置し、下層のS K 313を切っている。平面形態は楕円形を呈し、検出高は12.2mを測り、長径1.4m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器片、三星一文字紋瓦(渡辺家紋)などが出土している。(屋敷地1)

S K 206 A区西側に位置する。検出高は12.2mを測り、深さ0.5mを測る。南側は現代の建物基礎によって攪乱を受けており、平面形態、規模などは確認できない。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、18世紀後半から幕末までの陶磁器片などが出土している。(屋敷地1)

S K 309 A区西端に位置する。平面形態は不整形で、検出高は12.1mを測り、残存径は4.9mを測り、深さ0.9mを測る。埋土は暗灰褐色シルトを基調とし、出土遺物は18世紀後半から19世紀前半にかけての陶磁器片等が主体を成す。(屋敷地1)

S K 310 A区西側に位置し、大型土坑のS K 312が埋められた後、そのほぼ中央に掘り込まれている。検出高は11.7mを測り、長径3.1m、短径1.8m、深さ0.6mを測る。埋土は暗赤褐色シルトを基調とし、出土遺物は18世紀後半から19世紀前半のものが主体をなす。(屋敷地1)

S K 312 A区西側に位置する。平面形態は不整形で、検出高は11.6mを測り、残存径は9.2m、深さ2.4mを測る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器片、瓦片等が大量に出土している。本遺構は今回の調査区の中でも、規模としてはもっと



第26図 SB01・SX04平面図

も大きなものであり、遺物の出土量も含めて、大量に廃棄することを目的に掘り込まれたのではないかと思われる。(屋敷地1)

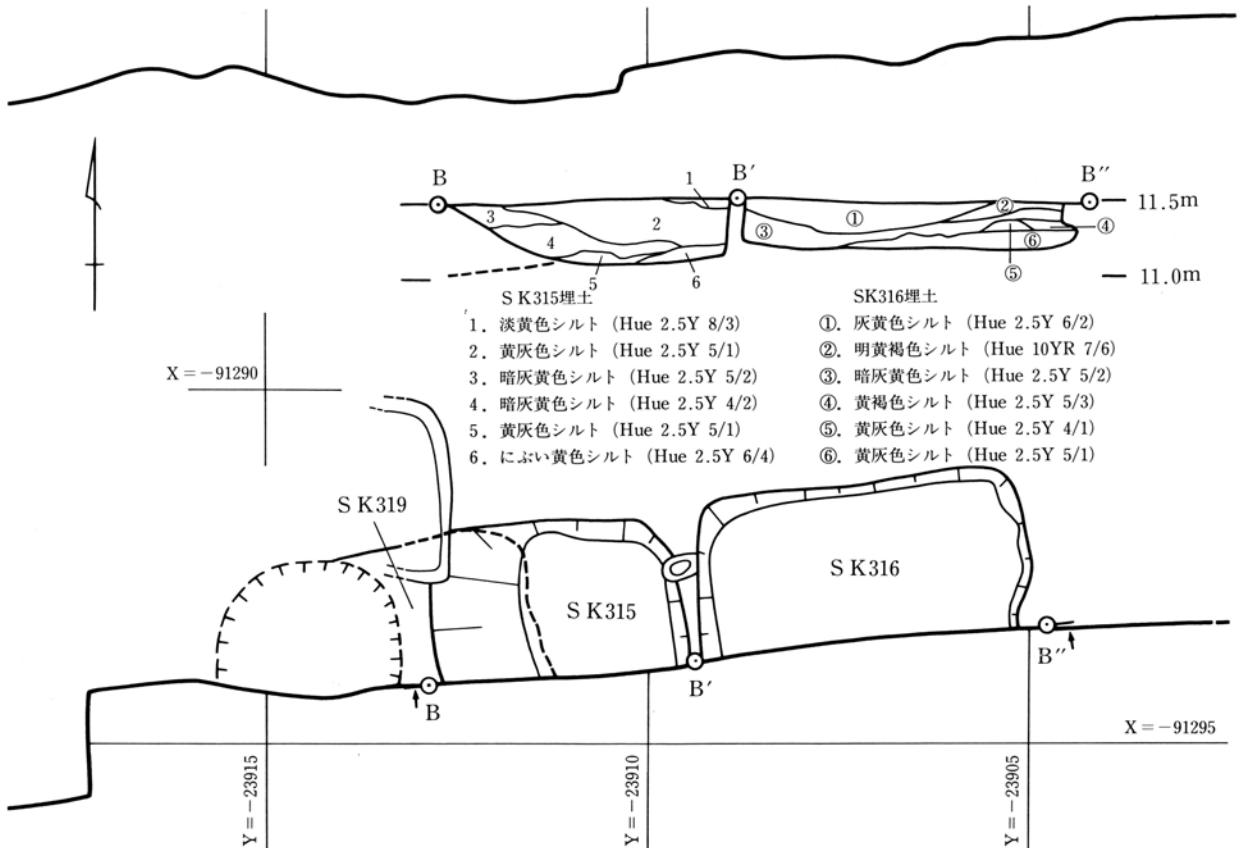
**S K 318** A区西側に位置し、S K 311・312に切られている。平面形態は不整楕円形を呈するものと思われ、検出高は11.6mを測り、残存径は5.3m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とし、出土遺物は18世紀後半の陶磁器片等が主体をなしている。(屋敷地1)

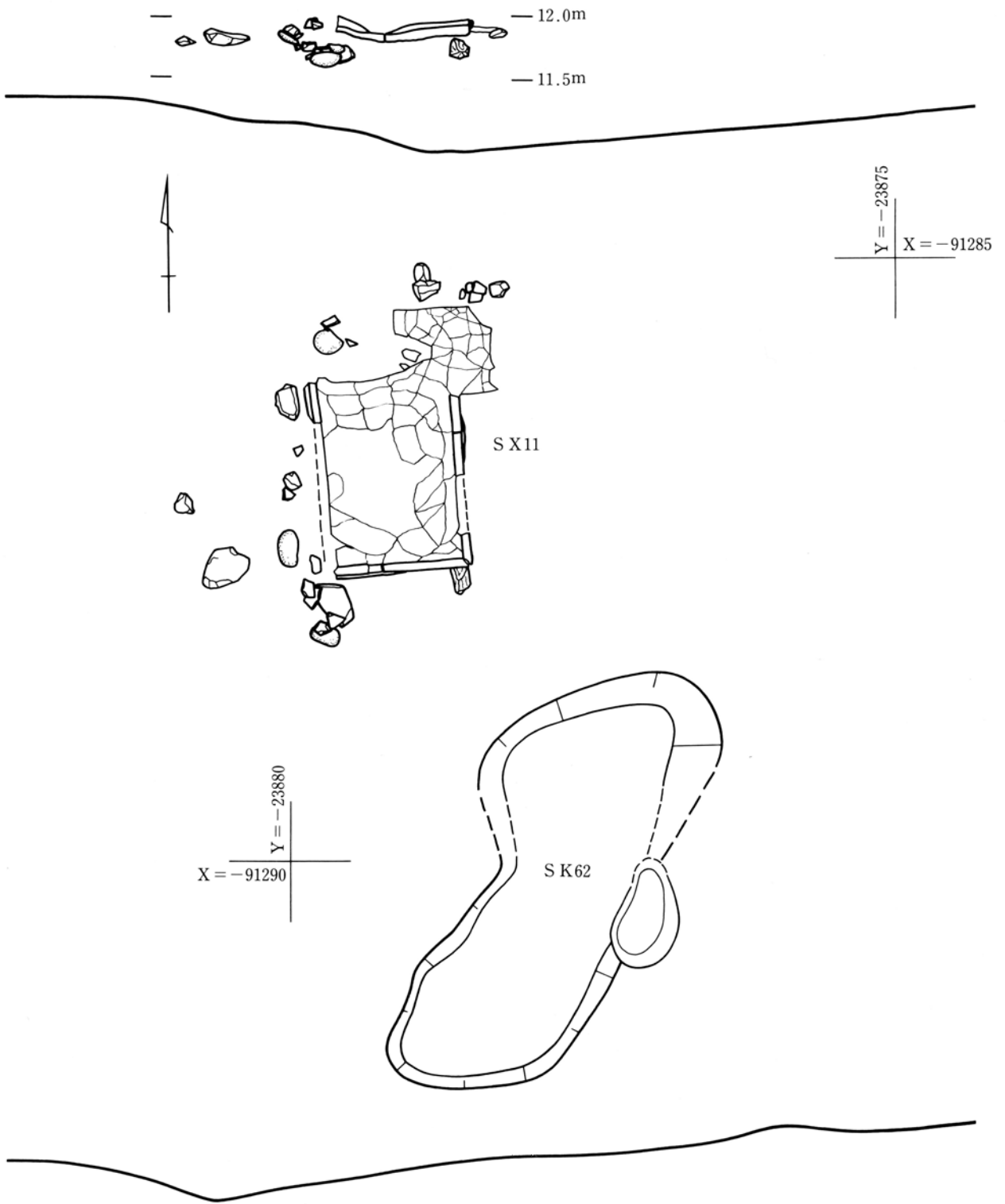
**S K 319** A区中央やや西側に位置する。周辺を現代の掘削坑などによって掘り込まれているため、床の一部を残してほぼ全面が残っていない。床の一部からは、19世紀中頃の陶磁器片などが出土している。(屋敷地2)

建物跡ほか

**S B 01**・ A区北西端に位置する。S B 01の根石を伴う柱穴列は、建物基礎と思われ、南西角部分が検出され、各柱穴間は約1.9mを測る。S X 04は灯籠片、庭石と思われる玄武岩、根石を用いて据え置いた砂岩(漣痕をもつ)などが、掘り込みをもたずに蛇行して配されている。非実用的な配石であり、位置的にも庭の一部ではないかと思われる。(屋敷地3)

**S X 11** A区中央やや東寄りに位置する。漆喰で平面を設け、これを枠で囲んだ痕跡が残るが、枠の一部は舟底形に切られており、平面はこの部分に向かって傾斜が設けられていて、水を扱う場を目的につくられたものと考えられる。(屋敷地2)





第28図 SK62平面図及びSX11平・側面図

第II章 遺構

登録番号	区	旧遺構番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	断面形態	平面形態	時 期	屋敷	備 考
SD802	A	SD802	-	90	32	U字形	-	古墳		南から北へ下がる, N-13°-W
SD803	A	SD803	-	(80)	52	箱形	-	古墳		南から北へ下がる, N-3°-E
SD804	A	SD804	-	125	31	皿形	-	古墳		南から北へ下がる, N-13°-W
SD610	A	SD610	-	210	100	V字形	-	戦国I期		南から北へ下がる, N-6.5°-E
SD603	AB	SD603	-	(1120)	430	箱形	-	戦国II期		傾き不明, N-82°-W, 調査区外で南へ屈曲, N-6°-E
SD605	B	SD605	-	365	(280)	V字形	-	戦国II期		東から西へ下がる, N-79°-W, 東端で北へ屈曲, N-8.5°-E
SD607	B	SD604	-	410	202	U字形	-	(戦国II期)		西から東へ下がる, N-81°-W
SD608	B	SD608	-	160	69	箱形	-	戦国II期		北から南へ下がる, N-9°-E
SK512	A	SK512	190	75	29	(U字形)	楕円形	戦国II期		
SK513	A	SK513	(330)	-	69	-	-	戦国II期		
SK514	A	SK514	295	165	35	(箱形)	方形	戦国II期		
SK553	A	SK553	-	115	19	(U字形)	-	戦国II期		
SK554	A	SK554	70	55	6	(皿形)	円形	戦国II期		
SK555	A	SK555	85	60	18	(皿形)	楕円形	戦国II期		
SK556	A	SK556	70	50	7	(皿形)	円形	戦国II期		
SD601	AB	SD601	-	160	110	U字形	-	戦国III期		西から東へ下がる, N-86°-E
SD602	AB	SD602	-	(520)	401	箱形	-	戦国III期		南から北へ下がる, N-2°-W
SD604	A	SD604	-	320	175	V字形	-	戦国III期		北から南へ下がる, N-1°-E
SD606	A	SD606	-	-	140	U字形	-	戦国		南から北へ下がる, N-4°-W
SD611	A	SD611	-	190	142	U字形	-	戦国		北から南へ下がる, N-5°-E
SD307	A	SD607	-	470	34	U字形	-	江戸時代I期	2	北から南へ下がる, N-4°-W
SD308	A	SD608	-	190	163	U字形	-	江戸時代I期	2,3	区画溝, 北から南へ下がる, N-1°-W
SD309	A	SD609	-	145	97	箱形	-	江戸時代I期	3	北から南へ下がる, N-3°-W
SD401	B	SD301	-	125	100	箱形	-	江戸時代I期	3	区画溝, 東から西へ下がる, N-86°-E
SD402	B	SD302	-	115	45	U字形	-	江戸時代I期	2,3	区画溝, 北から南へ下がる, N-3°-E
SD403	B	SD303	-	-	-	V字形	-	江戸時代I期	2,3	区画溝, セクション図のみ
SD404	B	SD304	-	-	-	V字形	-	江戸時代I期	2,3	区画溝, セクション図のみ
SK292	B	SK68	-	320	68	皿形	(方形)	江戸時代I期	1	
SK313	A	SK313	465	-	230	箱形	(方形)	江戸時代I期	1	
SK338	A	SK338	185	93	39	(箱形)	方形	江戸時代I期	1	
SK458	A	SK458	-	-	77	(箱形)	-	江戸時代I期	1	階段を伴う地下室
SK459	A	SK459	-	-	20	(箱形)	-	江戸時代I期	1	階段を伴う地下室
SK701	B	SK301	320	215	66	(皿形)	円形	江戸時代I期	1	
SK702	B	SK302	-	-	123	箱形	-	江戸時代I期	1	
SK703	B	SK303	-	445	155	箱形	隅丸方形	江戸時代I期	1	
SK704	B	SK304	410	-	118	箱形	方形	江戸時代I期	1	
SD01	A	SD01	1310	110	48	皿形	-	江戸時代II期	3	北から南へ下がる, N-4°-W, SX301と同一
SD04	A	SD04	-	150	39	U字形	-	江戸時代II期	2,3	区画溝, 南から北へ下がる, N-3°-W
SD03	A	SD03	-	75	10	(皿形)	-	江戸時代II期	3	西から東へ下がる, N-88°-E
SD104	B	SD04	-	-	14	(U字形)	-	江戸時代II期	3	区画溝, 東から西へ下がる, N-85°-E
SD107	B	SD07	-	-	23	(U字形)	-	江戸時代II期	3	区画溝, 西から東へ下がる, N-87°-E, 西端で南へ屈曲(?)
SK05	A	SK05	230	220	63	(U字形)	楕円形	江戸時代II期	3	
SK09	A	SK09	110	60	33	(U字形)	楕円形	江戸時代II期	3	
SK10	A	SK10	243	55	32	(箱形)	楕円形	江戸時代II期	3	灰白色粘土ブロックを多く含む
SK62	A	SK62	385	155	45	(U字形)	不定形	江戸時代II期	2	
SK114	A	SK114	73	50	12	(皿形)	楕円形	江戸時代II期	2	
SK116	A	SK116	90	65	14	(皿形)	楕円形	江戸時代II期	2	
SK172	A	SK172	130	85	10	(皿形)	楕円形	江戸時代II期	2	
SK201	A	SK201	140	80	24	皿形	楕円形	江戸時代II期	1	
SK309	A	SK309	485	-	88	(U字形)	(楕円形)	江戸時代II期	1	
SK310	A	SK310	310	175	57	(箱形)	不定形	江戸時代II期	1	
SK311	A	SK311	360	-	51	(U字形)	-	江戸時代II期	1	
SK312	A	SK312	920	-	241	(U字形)	-	江戸時代II期	1	
SK315	A	SK315	335	-	-	箱形	方形	江戸時代II期	2	
SK316	A	SK316	440	-	55	箱形	方形	江戸時代II期	2	
SK318	A	SK318	525	-	26	(皿形)	-	江戸時代II期	1	
SK319	A	SK319	(425)	-	-	-	(方形)	江戸時代II期	2	
SK320	A	SK320	500	-	37	(箱形)	方形	江戸時代II期	2	
SK331	A	SK331	-	(225)	147	(箱形)	-	江戸時代II期	1	
SK332	A	SK332	103	-	-	-	-	江戸時代II期	1	
SK333	A	SK333	-	-	18	(皿形)	-	江戸時代II期	1	
SK337	A	SK337	-	108	43	(U字形)	(楕円形)	江戸時代II期	1	
SK344	A	SK344	-	-	10	(皿形)	-	江戸時代II期	1	
Pit01	A	上面Pit01	65	65	-	-	方形	江戸時代II期	3	SB01
Pit02	A	上面Pit02	65	60	-	-	方形	江戸時代II期	3	SB01
Pit03	A	上面Pit03	45	45	-	-	方形	江戸時代II期	3	SB01
Pit04	A	上面Pit04	60	50	7	(皿形)	円形	江戸時代II期	3	SB01
Pit05	A	上面Pit05	63	60	-	-	(方形)	江戸時代II期	3	SB01
SX04	A	SX04	-	110	-	-	溝状	江戸時代II期	3	庭の一部?
SX11	A	SX11	(160)	(125)	-	(箱形)	方形	江戸時代II期	2	漆喰
SE01	A	SE01	98	95	-	-	円形	江戸時代II期	3	
SE302	A	SE302	130	125	(78)	(箱形)	円形	江戸時代II期	1	
SE303	A	SE303	145	145	(96)	(箱形)	円形	江戸時代II期	1	
SE304	A	SE304	105	100	(150)	(箱形)	円形	江戸時代II期	1	

第3表 主要遺構一覧表

## 第III章 遺物

### 第1節 概要

名古屋城三の丸遺跡における今回の調査地点で出土した遺物は、遺跡の主体が江戸時代であったため、当該期の他遺跡同様に膨大な量(27リットルコンテナ約800箱)にのぼった。したがって本調査地点では、出土遺物の時期的な比率は江戸時代が圧倒的に多く、ほかにも古墳・戦国時代の遺物が確認できたが、比較対象になる量ではなかった。

本遺跡では江戸時代の遺構が比較的良好に残っているが、数回にわたるものと思われる大規模な整地行為によって複雑な検出状況を見せており、遺構の時期的な判断は出土遺物に負うところが多かった。

これらの遺物の出土状況は、各時期の遺構に伴うものが少なく、包含層中より出土したものが多。

古墳時代の遺物は円筒埴輪片が溝から出土しており、そのほかにはトレンチから須恵器片がわずかに出土しているのみである。したがって本調査地点は、この時期には生産・消費といった性格をもつ空間ではなかったことが遺物の出土状況からうかがえる。

戦国時代の遺物は古墳時代と比較すると量的には増加するものの、遺構の数、規模などから考えると少ないと言える。このことは、当該期における本調査地点の、遺構から考えられる空間的特質が、かならずしも生活空間とは直結しないものも存在することを示唆している。

江戸時代の遺物は、古墳・戦国時代の遺物と比較すると量的には大半を占める。遺構内出土遺物は、包含層出土遺物に比べると少ないながらも、短期間に大量に廃棄されたと思われる一括性の強い出土状況のものもみられた。こうした遺構間の時期的な差は、遺構の分類上は2時期に大別したが、遺物の時期幅が比較的短期間に絞れるものもあり、さらに細かい設定も可能である。

今回の調査地点は江戸時代の名古屋城においては、特に信頼された家臣の役宅が所在した三の丸の内側地点という場所で、このことは絵図・文献資料などからもほぼ正確な位置が推定可能である。遺物は、役宅跡とはいえほかの時代から比べると、生活空間を想定させる多様な器種が出土している。これらの大量な遺物は江戸時代の名古屋が、瀬戸・美濃地域という、この時期におけるわが国の代表的窯業生産地をひかえていたため、大半が瀬戸・美濃産という産地組成を示す。しかし、そうした強力な地場産業の流通圏に、他地域から流通してくる製品も確実に存在している。これらの製品は組成としては少ないが、この地域における江戸時代各時期の流通状況がうかがえる資料となっている。

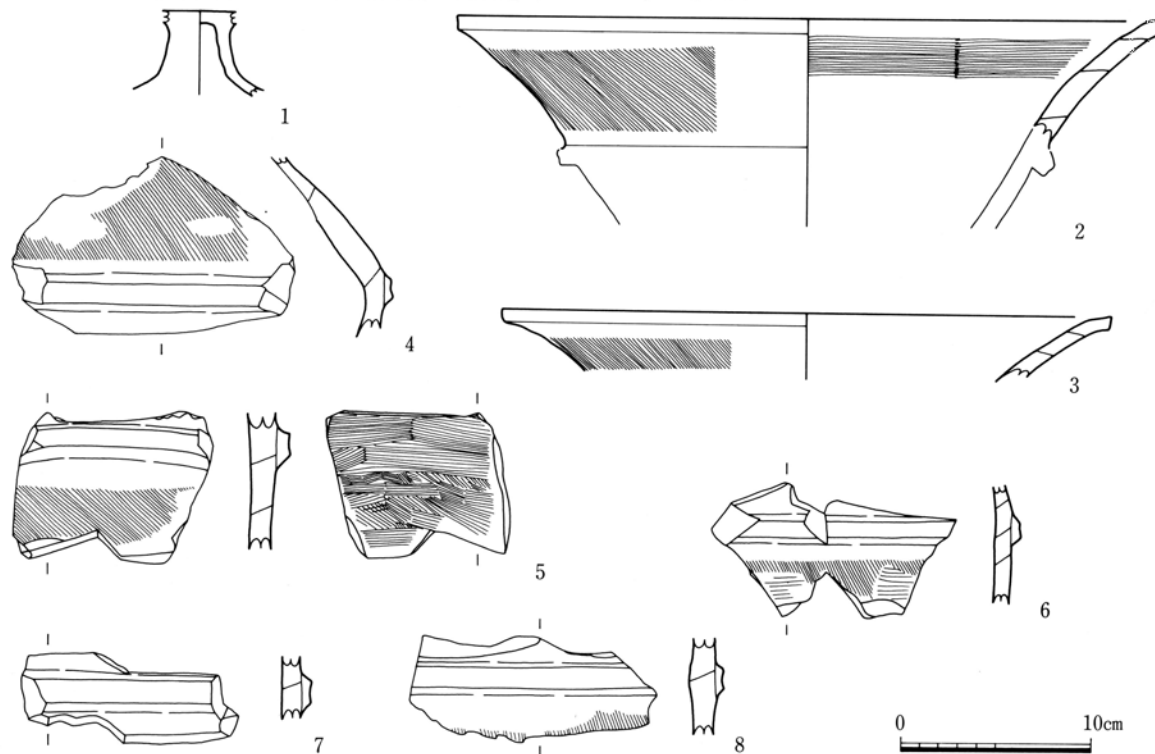
## 第2節 古墳時代の遺物

1は、須恵器高杯の脚部であり、外面調整には、丁寧なヨコナデを用い、内面にもヨコナデを施している。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。透孔は確認できない。2～8はすべて円筒埴輪であり、2～4は朝顔形であることが確認できる。外面調整は、7については確認できないが、ナナメハケを施すものが大部分であり、口縁部と凸帯の前後にヨコナデによる二次調整が認められ、6は、さらにヨコハケが施されている。内面調整は、2・3がヨコハケ、4・6～8が指オサエを用い、5についてはランダムなヨコハケが施されている。色調は、5・8は白色を呈し、それ以外は、淡黄褐色を呈する。なお、凸帯は、突出高と側面長比が1：3となり、時期は、6世紀代と思われる。

### 参考文献

種上 昇 1991 『池下古墳』 働愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1992 『古墳時代の研究9』（2-1-D） 雄山閣



第29図 古墳時代出土遺物実測図

図版No.	遺構No.	品種名	法量(cm)	備考	登録No.
29-1	S D803	須恵器・高杯	—	ヨコナデ、ヘラケズリ	E-1
29-2	S D804	埴輪・朝顔形	口径 18.40	ナナメハケ、ヨコナデ、ヨコハケ	E-2
29-3	S D804	埴輪・朝顔形	口径 16.00	ナナメハケ、ヨコナデ、ヨコハケ	E-3
29-4	S D804	埴輪・朝顔形	—	ナナメハケ、ヨコナデ、指オサエ	E-4
29-5	S D804	埴輪	—	ナナメハケ、ヨコナデ、ヨコハケ	E-5
29-6	S D804	埴輪	—	ナナメハケ、ヨコハケ、ヨコナデ	E-6
29-7	S D804	埴輪	—	ヨコナデ	E-7
29-8	S D804	埴輪	—	ナナメハケ、ヨコナデ	E-8

第4表 古墳時代出土遺物観察表

### 第3節 戦国時代の遺物

#### 主要遺構別出土遺物

戦国時代Ⅰ期（15世紀後半の窖窯製品のみ出土する遺構）

S D 610 I期唯一の遺構で、本遺構の出土遺物はわずかである。9は陶器の鉢片で、口縁部内側に突帯がめぐる。10は陶器の釜の口縁部片で、表面には粗く錆釉がかけられている。ともに窖窯製品では後半期につくられたものと思われる。

戦国時代Ⅱ期（16世紀前・中葉の大窯Ⅰ・Ⅱ期を主要出土遺物とする遺構）

S D 603 11・12は天目茶碗である。輪高台で、高台内から外側体部にかけて錆釉で化粧掛けされており、外側体部から内側全面に鉄釉がかけられている。大窯Ⅰ期の特徴を持つ。13は付け高台に特徴を持つ陶器碗の底部で、瀬戸・美濃地域でつくられた窖窯製品と思われる。14・15は土製の皿で、いずれもロクロ成形である。16は土製の鍋で、内耳をもつ。本遺構の主要出土遺物は、全体として大窯Ⅰ期のものと思われる。

S D 605 17はエンゴロ（窯道具）である。口縁部から体部にかけてのみ、炭化物及びすすが付着しており、窯道具以外の使用がうかがえる。18・19は陶器の皿で、18は外側体部から内側にかけて、19は全面に灰釉がかけられている。20はロクロ成形の土製皿である。本遺構の遺物は、全体として大窯Ⅰ・Ⅱ期のものと思われる。

(S D 607) 本遺構は遺構の章でも述べたが、埋土の下層より江戸時代初頭の遺物が出土し、中・上層からは埋め戻しに利用した周囲の土に混じったと思われる大窯Ⅰ・Ⅱ期の遺物が出土している。この逆転現象から、廃絶時期を江戸時代初頭、掘削時期を方位などと考え合わせて戦国時代Ⅱ期と判断したため、( )表示でこの時期にいった。

21は端反り口縁の陶器皿で、全面に灰釉がかけられており、見込み部には印花が施されている。22は無釉の焼き締め陶器皿で、内側のロクロ目が同心円状にはっきり残るいわゆる「重圏皿」である。23はロクロ成形の土製皿である。器壁は全体的に厚手であるが、見込み部はロクロの回転を利用してくぼませている。24は土製の鍋で、内耳をもつ。本遺構の出土遺物は、大窯Ⅰ期の特徴をもつものが多い。

S D 608 25は天目茶碗である。体部外側から内側にかけては鉄釉に灰釉掛けがされており、高台内から体部にかけては錆釉が化粧掛けされており、いわゆる「黄（黄瀬戸）天目」と言われるものである。26は端反り口縁の陶器皿で、全面に灰釉がかけられており、見込み部には印花が施されている。27は重圏皿である。25～27は、いずれも大窯Ⅰ期のものと思われる。28～31は土製の皿で、31のロクロ成形を除いて、いずれも非ロクロ成形で口径は6cm程である。29・30はナデ調整がされておらず、28はヨコナデが認められる。

S K 513 32は重圏皿で、27とは若干形態が異なり、平底の底部は一端高台状に立ち上がり、口縁部は薄く直立する。33は端反り口縁の陶器皿で、全面に灰釉がかけられている。34は播鉢の口縁部片で、残存部にわずかに擦目が認められる。口縁部は、成形時に段状に折り返さ

れている。35・36はロクロ成形の土製皿である。いずれも見込み部及び見込み部脇が、くぼめられている。本遺構の出土遺物は大窯Ⅰ・Ⅱ期のものと思われる。

戦国時代Ⅲ期（16世紀後葉の大窯Ⅲ期を主要出土遺物とする遺構）

S D 601 37は天目茶碗で、体部外側から内側にかけては鉄釉がかけられており、外側体部から高台にかけては錆釉が化粧掛けされているものと思われ、大窯Ⅰ期の製品と思われる。38は土製の焙烙で、口縁部は「逆ハの字」状に開き、内耳が口縁部内側に三ヶ所二等辺三角形状に配されていて、その形状から、大窯Ⅲ期併行の製品と思われる。

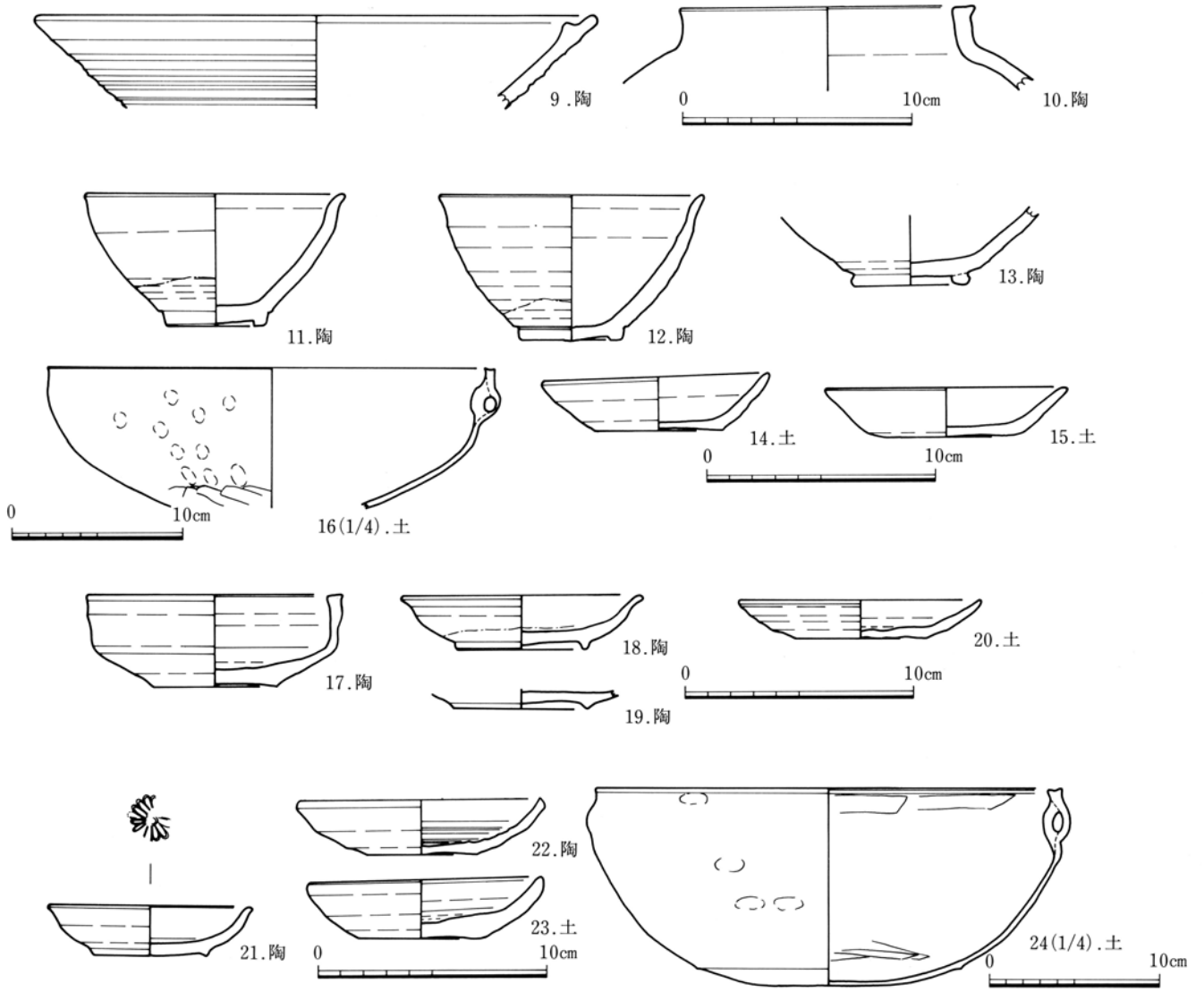
S D 602 本調査地点の中でもっとも規模が大きな遺構で、他の遺構も規模から考えると出土遺物量が少ないが、本遺構はその中でも極端に少ない。遺構の章でも述べたが、埋土のほとんどを占める地山混じりの埋め戻し層は無遺物で、溝の開削期間中に自然堆積したと思われる最下層からわずかな量の遺物が出土している。

39は天目茶碗の底部片で、残存する内側には鉄釉がかけられ、外側は錆釉で化粧掛けが施されている。高台は輪高台で、大窯Ⅰ期のものと思われる。40は陶器皿の底部片で、内外面ともに灰釉がかけられている。41は播鉢の口縁部片で、残存部にはわずかに擦目が認められ、口縁部は段状に折り返されていて、その形状から大窯ⅢまたはⅣ期のものと思われる。42は平瓦片で、全体的に厚く凸面には成形時のハナレ砂が付着している。

S D 604 本調査地点の戦国時代の遺構の中で、遺物をもっともまとまって出土した遺構である。43は天目茶碗で、口縁部の断面形態は「S字」の屈曲がやや強く、外側体部の下方は錆釉によって化粧掛けがされており、形態上窖窯末から大窯Ⅰ期の製品と思われる。44・45は白磁の皿である。44は端反りの口縁部をもち、45は底部がいわゆる「碁ヶ底」で、いずれも中国産と思われる。46～49は陶器皿で、46・47は見込み部には印花が施され、全面に灰釉がかけられており、49は全面に鉄釉がかけられ、48は外側体部から内側にかけて灰釉がかけられている。これらの皿はいずれも大窯Ⅱ期のものと思われる。50は重圏皿で、同心円状のロクロ目は間隔が比較的広い。51は陶器壺の口縁部片である。形態的には広口で、口縁部内側から外側にかけて鉄釉がかけられており、窖窯後期の製品と思われる。52～54は播鉢の口縁部片である。52は口縁端部が玉縁状に丸くなる形態と思われるが、膨らみは少ない。53は口縁部の断面形態が内・外に分かれて開くもので、これによってつくられた平坦面の中央はわずかにくぼむ。54は口縁端部が段状に折り返されており、折り返し部端はわずかに外に出され、段の中央はややくぼむ。55は陶器の筒形鉢で、口縁端部は平坦面が設けられており、わずかにくぼみがつけられ、外側体部から口縁部内側にかけて錆釉がかけられている。形態的に大窯Ⅲ期の製品と思われる。56は土製の内耳鍋で、体部は丸みをもち、器壁は薄い。57は土製の茶釜形羽釜で、壺形の頸部は比較的短い。58は土製の羽釜で、体部は丸みをもつものと思われる。

参考文献

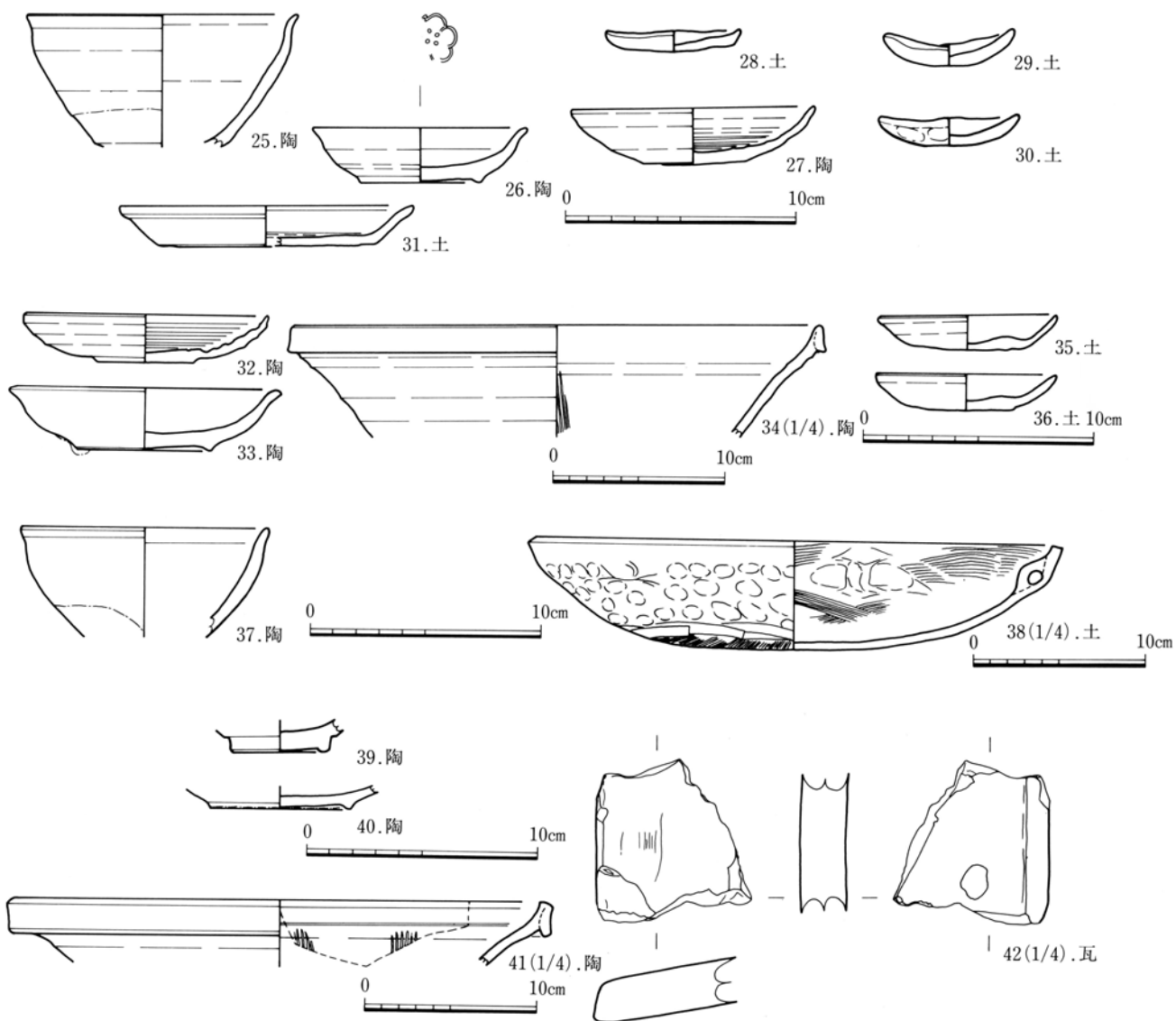
- 藤澤良祐 1986 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館  
檜崎彰一 1976 『美濃の古陶』 光琳出版



第30図 S D610・603・605・607出土遺物実測図(16・24は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	時期	産地・材質	器種名	器形	口縁形	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
30-9	SD610	戦国I期	1	3	1	3	1	-	-	(24.20)	-	-	古瀬戸後期4	E-9
30-10	SD610	戦国I期	1	8			5	-	-	(13.00)	-	-	古瀬戸後期3~4	E-10
30-11	SD603	戦国II期	1	1	1	1	2	-	5.90	11.10	4.30	-	大窯I	E-11
30-12	SD603	戦国II期	1	1	1	2	2	-	6.40	(11.40)	4.40	-	大窯	E-12
30-13	SD603	戦国II期	1	1	3		1	-	-	-	5.00	-	付け高台、14c末~15c初、古瀬戸後期1	E-13
30-14	SD603	戦国II期	2	2	1	2	5	5	2.50	9.90	5.60	-		E-14
30-15	SD603	戦国II期	2	2	1	2	5	-	2.20	(10.40)	5.00	-		E-15
30-16	SD603	戦国II期	2	8	2	3	5	5,6	-	26.20	-	-	大窯I or II	E-16
30-17	SD605	戦国II期	1	5	1		5	6	4.00	(11.10)	(5.40)	-		E-17
30-18	SD605	戦国II期	1	2	3	1	1	-	2.40	(10.30)	(5.60)	-	大窯I	E-18
30-19	SD605	戦国II期	1	2			1	-	-	-	5.90	-	大窯I or II	E-19
30-20	SD605	戦国II期	2	2	1	2	5	-	1.70	(10.50)	(5.70)	-		E-20
30-21	SD607	戦国II期	1	2	3	1	1	-	2.20	(8.70)	(4.90)	-	大窯I	E-21
30-22	SD607	戦国II期	1	2	1	0	5	-	2.50	10.50	4.80	-	大窯I	E-22
30-23	SD607	戦国II期	2	2	1	2	5	-	2.80	10.30	5.40	-		E-23
30-24	SD607	戦国II期	2	8	2	3	5	5,6	11.60	27.10	-	-		E-24

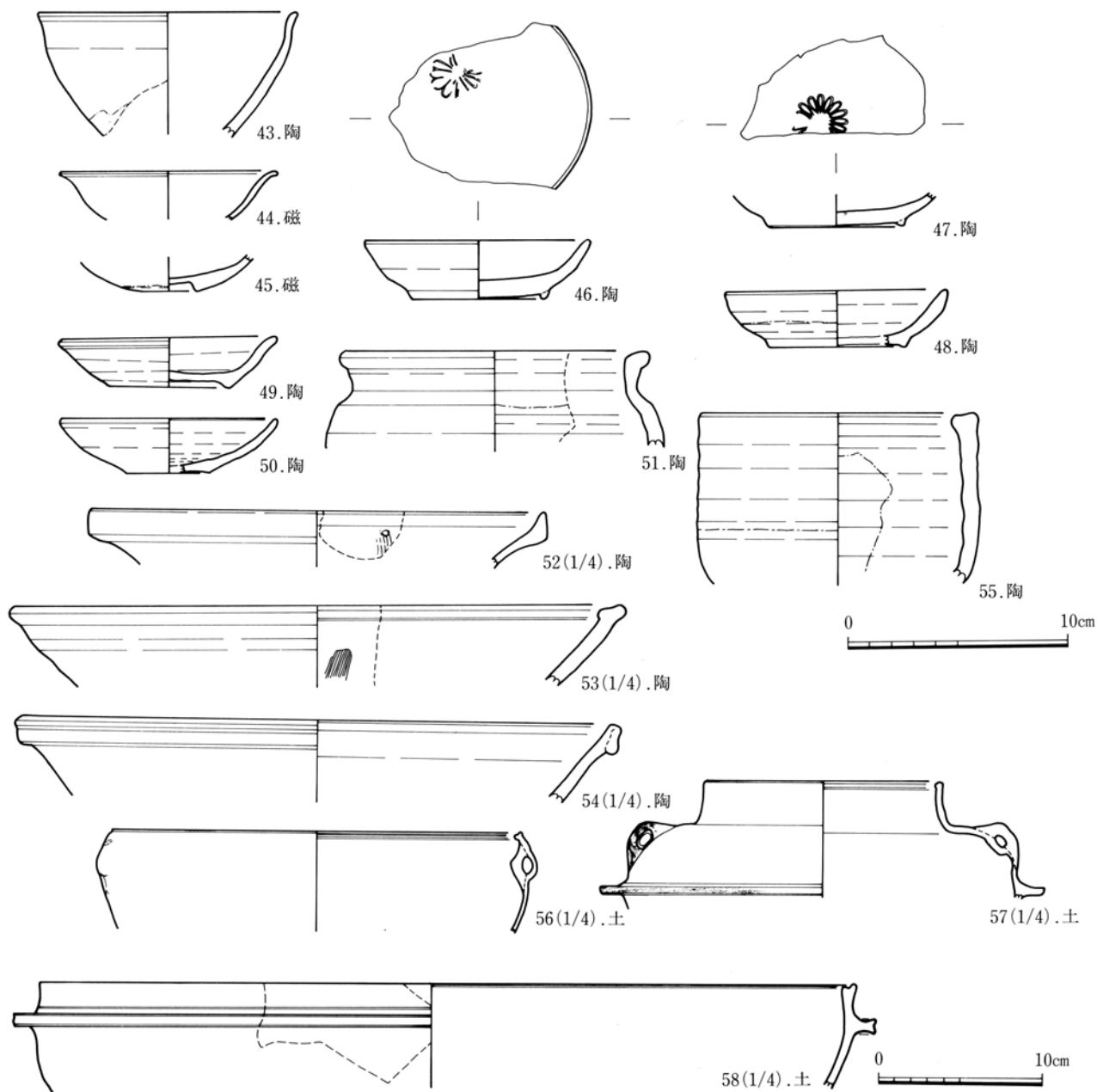
第5表 S D610・603・605・607出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第31図 SD608・SK513・SD601・602出土遺物実測図 (34・38・41・42は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	時期	産地・材質	器種名	器形	口縁形	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
31-25	SD608	戦国II期	1	1	1	2	2	-	-	(11.60)	-	-	黄天目、大窯I新段階	E-25
31-26	SD608	戦国II期	1	2	3	1	1	-	2.40	(9.20)	5.20	-	大窯I	E-26
31-27	SD608	戦国II期	1	2	1	0	5	-	2.40	(10.40)	(4.40)	-	大窯I	E-27
31-28	SD608	戦国II期	2	2	2	1	5	-	1.00	5.70	-	-		E-28
31-29	SD608	戦国II期	2	2	2	3	5	-	1.60	5.50	-	-		E-29
31-30	SD608	戦国II期	2	2	2	3	5	-	1.30	6.00	-	-		E-30
31-31	SD608	戦国II期	2	2	1	1	5	-	1.80	(12.70)	(7.70)	-		E-31
31-32	SK513	戦国II期	1	2	1	0	5	-	2.10	10.40	4.20	-	大窯I	E-32
31-33	SK513	戦国II期	1	2	3	1	1	-	2.70	11.80	5.80	-	大窯I	E-33
31-34	SK513	戦国II期	1	4	0	3	2	-	-	(30.40)	-	-	大窯I~II	E-34
31-35	SK513	戦国II期	2	2	1	3	5	6	1.40~1.60	7.80	2.20	-	大窯I<II	E-35
31-36	SK513	戦国II期	2	2	1	2	5	6	1.60	7.80	2.20	-	大窯I<II	E-36
31-37	SD601	戦国III期	1	1	1	2	2	-	-	(10.60)	-	-	大窯I	E-37
31-38	SD601	戦国III期	2	8	3	1	5	6	6.50	31.10	-	-		E-38
31-39	SD602	戦国III期	1	1	1	0	2	-	-	-	(4.10)	-	大窯I	E-39
31-40	SD602	戦国III期	1	2			1	-	-	-	6.10	-	大窯I or II	E-40
31-41	SD602	戦国III期	1	4	0	6	2	-	-	(31.20)	-	-	大窯III	E-41
31-42	SD602	戦国III期	瓦						-	-	-	-		E-42

第6表 SD608・SK513・SD601・602出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第32図 SD604出土遺物実測図 (52~54・56~58は1/4、その他は1/3)

図版No	遺構No	時期	産地・材質	器種名	器形	口縁形	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
32-43	SD604	戦国III期	1	1	1	1	2	-	-	(11.70)	-	-	密窯末	E-43
32-44	SD604	戦国III期	6	2			7	-	-	(9.70)	-	-	端反、基ヶ底、16c	E-44
32-45	SD604	戦国III期	6	2			7	-	-	-	2.40	-	端反、基ヶ底、16c	E-45
32-46	SD604	戦国III期	1	2	4	1		-	2.70	(10.20)	6.00	-	大窯II	E-46
32-47	SD604	戦国III期	1	2			1	-	-	-	6.20	-	大窯I or II	E-47
32-48	SD604	戦国III期	1	2	4	1	1	-	2.60	(9.90)	(6.25)	-	大窯II	E-48
32-49	SD604	戦国III期	1	2	5	1		-	2.40	9.70	5.50	-	大窯II	E-49
32-50	SD604	戦国III期	1	2	1	0	5	-	2.50	(9.70)	(3.80)	-	大窯I	E-50
32-51	SD604	戦国III期	1	5	2	4	2	-	-	(13.60)	-	(15.40)	大窯II(少)~III	E-51
32-52	SD604	戦国III期	1	4	0	5	2	-	-	(27.50)	-	-	古瀬戸後期	E-52
32-53	SD604	戦国III期	1	4	0	9	2	-	-	(36.90)	-	-	大窯IV	E-53
32-54	SD604	戦国III期	1	4	0	7	2	-	-	(35.80)	-	-	大窯IV	E-54
32-55	SD604	戦国III期	1	5	1	2	2	-	-	(12.30)	-	-	大窯III	E-55
32-56	SD604	戦国III期	2	8	2	3	5	-	-	(24.80)	-	-	大窯II	E-56
32-57	SD604	戦国III期	2	8	4	2	5	6	-	(14.30)	-	-		E-57
32-58	SD604	戦国III期	2	8	1		5	6	-	(34.70)	-	-	大窯II?	E-58

第7表 SD604出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照

## 第4節 江戸時代の遺物

### 主要遺構別出土遺物

#### 1 江戸時代Ⅰ期（17世紀前半～18世紀中頃）

S D 307 59～62は天目茶碗である。いずれも高台脇から内側にかけて鉄釉がかけられ、高台は高く深めに削られており、口縁部から体部にかけての屈曲部は長く、17世紀前半のものと思われる。63・64は陶器の灰釉小碗で、65～70は陶器碗である。65は天目茶碗で、輪高台の周辺は錆釉で化粧掛けが施されており、大窯Ⅰ期のもと思われる。66～68は灰釉碗である。69・70は高い高台に体部が張る断面形態の碗で、口縁部の俯瞰は楕円形を呈する。形態的な特徴などから66～70は、17世紀前半～中頃のものと思われる。71～74は陶器皿で、71・72には灰釉が、73・74には長石釉がかけられている。75は煙硝播鉢で、体部内側から外側にかけて鉄釉がかけられ、内側の鉄釉以外の部分には錆釉がかけられている。76・77は播鉢で、口縁部内側は76では凸部がめぐり、77では凹部が作り出されている。78は盤状の陶器で、断面形態は折り返された口縁部と張り出した体部をもつ。79は陶器の鉢で、内側体部には櫛描きの波状文が、見込み部には菊花文が施されている。80は非円形の陶器鉢片で、内側には端に銅緑釉、中央には長石釉の上に鉄絵が描かれていて、いわゆる「織部」製品である。81は筒形の陶器で、口縁部の俯瞰は方形を呈し、断面形態は体部上方がくびれている。82は陶器碗の底部で、器壁は厚く、内外両面にロクロ目がはっきり残る。83は内側にはいわゆる「三島手」の文様が施されており、82・83ともに肥前陶器と思われる。84・86～88は磁器碗で、84は肥前産の白磁で、口縁部から体部にかけて筒形に直立する断面形態をもち、86～88は中国産白磁染付である。85は肥前産磁器染付小碗である。89・90は土製の鍋で、いずれも内耳をもち体部は丸みをもつ。89は三足と思われる突起が、底部上方に設けられている。

陶器は17世紀前半～中頃のものが多いが、肥前産磁器などと考え合わせると17世紀中頃～後半に廃絶した遺構と思われる。

S D 308 91は天目茶碗で、92は長石釉に鉄絵が施された陶器碗である。93・94は陶器の皿で、94は端反り口縁に灰釉がかけられ、大窯Ⅰ期のもと思われる。94は灰釉に白化粧が斑にかけられている。95は大窯期のエンゴロ（窯道具）である。97は播鉢で、口縁部内側は凸部がめぐり、99は陶器の蓋で、外側にのみ白釉がかけられている。100～106は土製の皿で、100～103はロクロ成形、104～106は非ロクロ成形である。100・102は、内側にロクロ目の膨らみが比較的残っており、101・103は内・外ともに丁寧な整形が成されている。非ロクロ成形のものでは、106のみ内側に一方向のナデ調整が認められる。107・108は常滑系の風炉・甕である。

本遺構の遺物は、大窯期のもも混じるが、碗などの時期を考え合わせると17世紀中頃に廃絶した遺構と思われる。

S D 309 109・110は天目茶碗で、いずれもやや小型である。111は陶器碗で、外側高台脇から内側

にかけて白釉がかけられており、高台内には「十」と思われる文字が書かれている。112・113は陶器皿で、112は素地に蘭竹文と思われる鉄絵が施され、長石釉がかけられている。114は陶器鉢で、口縁部は折縁状を呈し、口縁端部はやや受口状を呈する。115・116は染付磁器碗で、115は高台端部に明赤褐色の焼けがみられ、砂が付着しており、中国産と思われる。116は外側に如意頭繫ぎ文が描かれ、肥前の百間川窯製品と思われる。117は非クロコ成形の土製皿である。

本遺構の出土遺物は、陶器皿などから17世紀後半が下限として考えられる。

- S D 401 118・119は陶器皿で、118は口縁部外側から内側にかけて灰釉がかけられており、端反りの口縁をもち、窖窯末期の製品と思われる。119はいわゆる「菊皿」で、外側高台脇から内側にかけて灰釉がかけられ、口縁端部には銅緑釉が流しかけられている。120はいわゆる「笠原鉢」である。
- S K 313 121～127は陶器の碗で、121は外側体部から高台内にかけて錆釉がかけられ、内側から外側体部にかけて灰釉がかけられている。122・123は外側に呉須絵が描かれ、124には灰釉の上に鉄釉が流しかけられており、125・127には鉄絵が描かれている。125・126は体部が直立し、腰部にはっきりと稜線がはいる。126の高台内には、「六・御部屋・子(乃)四月」と墨で三行に分けて書かれている。128～137は陶器皿で、128の菊皿は、内側から外側高台脇にかけて灰釉がかけられている。129は見込み部に重ね焼き痕が認められ、130には、高台内に「・・・元御主」と書かれた墨書がみられる。131は軟質陶器の皿で、薄い器壁に端反りの口縁部をもち、内側には線刻による文様が施され、緑釉が全体的にかけられている。132は見込み部に呉須絵が描かれ、133の口縁部は、俯瞰が方形を呈するものと思われるが、高台は丸い。134～137は型打ち成形の皿で、136を除いて、俯瞰は木瓜形を呈するものと思われる。138・139は擂鉢で、口縁部はいずれも段状に折り返されているが、139は段の外側が膨らんで縁帯状を呈する。140は三足の香炉で、外側の口縁部から腰部にかけてのみ灰釉がかけられている。141～144は陶器鉢で、断面形態が141は筒形に近く、143は直線的に開いている。144は笠原鉢である。145～148は陶器の瓶で、145は把手と注口をもち、口縁部はしばられ受口状を呈する。146・147は小型の瓶で、それぞれ高台の幅は広く、胴部が張り、頸部は細くしばられていて、油壺として使用されたものと思われる。148はなで肩で、筒形の長い体部をもつ。149は筒形陶器で、筒形の竹を模したものを3本並べて接合したものと思われ、底部には「キシタ」と墨で書かれている。150は陶器蓋で、外側には鉄絵が施されている。151～155・157は陶器碗で、151には外側に楼閣山水文と思われる図柄が描かれ、高台内には「木下弥」と思われる印が押されている。152～154は内外面ともに刷毛目文様が施されており、焼き締められた緻密な胎土で、154には外側に呉須で印判及び施文がみられる。156は陶器皿で、外側体部から内側にかけて透明釉がかけられ、内側には緑釉がわずかに流しかけられており、見込み部は輪剥げがみられる。157は色絵磁器の合子と思われ、外側に描かれた文様は蓋から続いているものと思われ、欠損部には漆継ぎの痕跡が残る。158～161は染付磁器の碗で、160・162の高台内には「大明年製」の2行4字

銘が書かれており、161には、二重方形枠内に「福」字銘の渦状にくずしたものが書かれている。163～165は染付磁器の皿で、164の見込み部にはコンニャク印判による五弁花が押されており、165の高台内には方形枠内に「福」字銘が書かれている。166は青磁の徳利で、肩部に二ヶ所稜がみられる。167～174は土製の皿で、すべてロクロ成形で、口径は4種類に大別できる。口径が6cm弱のもの(167)、9cm前後のもの(168・169)、11cm前後のもの(170～172)、16cm前後のもの(173・174)である。遺存度の低いものを除いてタールの付着が認められるため、灯明皿としての使用がうかがえる。175～178は焼塩壺の身で、179・180は同蓋である。身はいずれも粘土板を芯に巻き付けた作りで、印籠形を呈する。175・178には外側体部に一重枠で、「御壺塩師堺湊伊織」という2行8字銘の刻印が押されており、176・177には方重に、「泉州麻生」という4字銘の刻印が押されている。蓋はいずれも、伴出している印籠形の身に伴うものと思われ、型づくりで内面には布目が残る。181は土製の鍋で、内耳をもつ。182・183はミニチュア製品である。182には内側に緑釉で絵が描かれており、鉢または碗のミニチュアと思われる。183は口縁部に把手がつけられていたと思われる、底部には三足が設けられている。

本遺構の遺物は今回の調査の中でも、出土量の多さ、器種の多様さにおいて、良好な出土状況を見せている。これらの遺物の時期は、陶器においては18世紀中頃の可能性を有するものもみられるが、焼塩壺、磁器などは18世紀前半が下限と思われる。

**S K 338** 184は陶器蓋で、成型時に口縁部が一ヶ所「U」字状に空けられており、外側には鉄釉がかけられている。185・186は陶器碗で、いずれも口縁部から体部は直立し、腰部は丸みを帯びた断面形態である。185は体部に楼閣山水文が描かれ、高台内には「清水」銘の刻印が押され、186の体部には鉄釉と呉須で笹文が描かれている。187は土製の皿で、ロクロ成形であり、内外面ともに丁寧にナデ調整されている。188は土製の火器で、上部は欠損しており、体部に通気孔が空けられ、三足が設けられている。

**S K 701** 189～198は陶器碗である。189～191は天目茶碗で、高台はいずれも深く削られている。192～194は端反りの口縁部をもち、197・198は腰部に稜をもつ。199～203は陶器皿である。199には長石釉が、200には灰釉がかけられている。201～203は型打ち成形の皿で、底部は201・202には三足が設けられており、203は高台である。204・205は陶器鉢で、いずれも内側は無釉で、205の口縁端部は、打ち欠けた痕跡を示す。206～208は播鉢で、口縁部の断面形態は受口状に折られ、立ち上がりは短い。209～214は陶器鉢で、209は口縁端部に平坦面をもち、体部上方は波状文や刻みが施され、体部外側から内側にかけて白釉をかけた後、緑釉を重ねかけ、内外の底部には鉄釉がかけられている。209～214は灰釉が全面にかけられた大型の鉢で、211・213・214は内側に鉄絵及び銅緑釉流しが施されている。210・212は銅緑釉流しのみである。215は陶器の瓶で、低く幅広の高台をもち、体部は肩から腰にかけてほぼ筒形である。216～219は染付磁器の碗で、外側体部にはそれぞれ文様が施され、216には口縁端部に錆釉がかけられており、高台内には「太明」字銘がみられる。220は色絵磁器の底部片で、見込み部には赤絵具で文字が書かれ、外側体部の残存部には緑、赤などの

文様がみられる。これらの装飾は内外面ともに、上絵付けである。221は染付磁器の鉢で、見込み部には荒磯文が、外側体部には鳳凰が描かれ、高台内には「大明」字銘がみられる。222は青磁の脚付き碗で、口径に比べると底部は幅が比較的狭い。223～238は土製の皿である。このうち、223～236はロクロ成形で、237・238は非ロクロ成形である。ロクロ成形の皿では、口径が11cm前後のものをもっとも多く、225～231がこれにあたり、続いて14cm強のものも多く、233～236がこれにあたる。239は土製の茶釜形羽釜の口縁部片である。240・241は土製の鍋である。242～244は焼塩壺の身である。身の残存部はいずれも無印で、輪積み成形である。245は道具瓦(丸)で、外側には丸形で花卉状に図案化された印が押されている。

本遺構の出土遺物は、焼塩壺に印の有無が確実に判明するものがなく、肥前系磁器の下限は17世紀中頃と思われるが、瀬戸・美濃産陶器は17世紀後半のものがみられる。したがって、この遺構の廃絶時期は、17世紀後半と思われる。

- S K 702 246～248は陶器碗で、246の小碗は灰釉が、247・248は長石釉がかけられている。249は陶器皿で、全面に長石釉がかけられ、内側には鉄釉で施文されている。250は播鉢で、口縁部内側に段をもつ。251は染付磁器で、断面形態はやや開く筒形で腰部は90°近く折れ、やや広めの高台をもつ。252～258は土製の皿で、252～256はロクロ成形で、257・258は非ロクロ成形である。260～263は焼塩壺の身で、264～267は同蓋である。身はいずれも輪積み成形で、体部上方から口縁部にかけてややすぼみ、欠損している262を除いて無印である。蓋はいずれも輪積み成形の身に伴う形態と思われる。268は焼き締められ白色の細砂粒を含む胎土の鉢で、三足が設けられており、常滑産の火器ではないかと思われる。269は石製の硯で、裏面には「天□」と線刻されている。

本遺構の出土遺物は、246が17世紀でもやや新しい様相を示しているものの、そのほかは17世紀前半～中頃までのものが多くみられる。したがって、本遺構は時期的に17世紀中頃のものと思える。

- S K 703 270～273は天目茶碗である。270・271は器形が小型化したもので、273は丸みを帯びた断面形態で、17世紀後半～18世紀前半のものと思われる。275～281は陶器碗である。275及び276は小碗で、280の碗とともに灰釉がかけられ、277は鉄釉が、278・281は鉄釉に灰釉掛けが施されている。279は鉄分の多い素地に白泥と鉄絵具で施文が成されている。282～289は陶器の皿である。灰釉または長石釉がかけられているものが多く、282には口縁部にタールが付着している。287は灰釉に口縁部のみ銅緑釉を流した菊皿である。288・289は型打ち成形の皿で、いずれも三足が設けられている。290・291は陶器鉢で、いずれも鉄釉がかけられ、290の口縁部には蓋掛かりが設けられている。292・293は陶器の大皿である。294は播鉢で、口縁部内側に段をもつ。297～308は磁器碗で、300以外はすべて染付が確認できる。高台内に銘をもつものがみられ、301には「大明成化年製」という2行6字銘が、304には「大明」銘が、305・306には「製」が記されている。形態的には腰部が丸みを帯びた小碗、碗が多いが、308のように筒形を呈するものもみられる。310は染付磁器の皿で、高台から

内側にかけて砂が熔着している。307・310は中国産と思われる。311～316は土製の皿で、311～314はロクロ成形、315・316は非ロクロ成形である。319は土製の釜片で、318～322は土製の鍋である。323・324の鉢・壺は、胎土に白色の細砂粒を含み、良く焼き締められており、常滑産と思われる。325は常滑産の甕で、底をもたず管状につくられている。

本遺構の出土遺物の中で、磁器は製作年代が17世紀中頃までのものが多くみられ、陶器は17世紀前半～18世紀初頭のものがみられた。したがってこれらの遺物の廃棄は、18世紀初頭と考えられる。

**S K 704** 326～328は陶器碗で、326は灰釉がかけられ、327・328には灰釉に鉄釉が流し掛けされている。329～333は陶器の皿で、332の見込み部には鉄絵具で蘭竹文が描かれている。333は型打ち成形の皿で、三足が設けられている。334は灯明皿受台の破片で、皿部が欠損しており、鉄釉がかけられている。335・336は播鉢で、335は内側が無釉で擦り目をもたない、いわゆる「煙硝播鉢」である。337～340は陶器鉢で、338・339の見込み部には菊印花文が施されている。343は瓦質の火器口縁部片と思われ、内外面にすすが付着し、体部上方には焼成前に穿孔が成されている。344～352は染付磁器の碗である。351・352の器形は天目形を呈し、外面青磁掛けである。354～359は土製の皿で、354～358はロクロ成形、359は非ロクロ成形である。361・362は焼塩壺の身で、363は同蓋である。361の外側体部上方には「ミなと藤左右衛門」銘と思われる刻印が押されている。364は常滑産の壺で、365は土製の火器、366は石製の硯である。

本遺構の出土遺物は、「ミなと藤左右衛門」銘の焼塩壺を筆頭に、17世紀中頃に製作年代が求められるものが多い。わずかにこの時期以降の様相を示すものもみられるが、埋伏行為の時期は、17世紀中頃と想定できよう。

## 2 江戸時代II期（18世紀後半～幕末）

**S D 101** 367・368は陶器の碗で、368の高台内には扇形の枠内に「清」銘の刻印が押されている。369～371は陶器皿である。371は灯明皿受で、受部の口縁が皿部の口縁より高い。373は陶器壺で、灰釉が外側体部下方から口縁部内側にかけており、肩部には双耳が設けられている。375・376は陶器蓋で、いずれも落とし蓋で、375には鉄釉が、376には灰釉がかけられている。378は焼塩壺の身で、蓋掛かりはみられない形態である。379は土製の人形で、動物をかたどったものと思われる。

本遺構の出土遺物は、368・371などのように製作年代が18世紀と思われるものも含まれているが、そのほかの陶器や、焼塩壺の形態から考えると、19世紀前半～中頃の時期が想定できる。

**S K 316** 380・381は陶器の有脚碗で、仏飯具と思われる。382・385・386は陶器の合子で、382は小型製品である。385の高台内には「御用」と墨で書かれている。383・384は陶器の小鉢で、餌入れと思われる。388は「三鱗」紋をかたどった家紋入り瓦である。389～391は陶器鉢である。389は片口鉢で、白釉に鉄絵及び銅緑釉が流し掛けされている。390は転用植木

鉢と思われ、焼成後に底部中央が穿孔されている。393・394は陶器瓶で、いずれも底部脇には補助的な三足が設けられている。395は陶器鍋で、把手にはそれぞれ2穴、3穴と穿孔されている。397～401は染付磁器の碗で、398・399は広東碗で、401は仏飯具である。402は染付磁器の皿で、見込み部にはコンニャク印判による五弁花が施されている。403～406は土製の皿で、いずれもロクロ成形で、器壁は薄く径は小さい。403は焼成後に底部中央が穿孔されている。

本遺構の出土遺物は、19世紀前半～中頃のものが多く、この時期に比定することができよう。

- S K 320 407・408は陶器の碗で、408は外側体部中ほどにくぼみが数カ所つけられた、いわゆる「拳骨茶碗」である。409は陶器の皿で、非ロクロ成形で、2枚の葉を重ねたように作られており、重なる部分は段をつけ、鉄絵具で輪郭を描きこれを強調している。2枚の葉先には銅緑釉流しがなされ、底部には三足が設けられている。410は播鉢で、折り返された口縁部外側は垂下せず、薄く重ねられている。411～414は陶器蓋で、このうち411～413は落とし蓋、414は被せ蓋である。420～425は人形・玩具類である。420はミニチュア鍋で、421はミニチュア急須、422は金魚、423は坊主をかたどったもので、424はミニチュア合子の蓋で、425は土製の碁石代用品と思われる。

本遺構の出土遺物の廃棄は、播鉢、焼塩壺の形態から想定すると18世紀後半～19世紀前半に位置づけられよう。

- S K 62 426は陶器碗で、丸い腰部に小径の高台がつく。429～434は土製の皿で、いずれもロクロ成形である。435・436は焼塩壺の蓋で、印籠形の身に伴うものと思われる。437はミニチュアの鍋で、438は鳥をかたどったものである。
- S K 114 土製の皿が2点のみ出土しているが、いずれもロクロ成形で、440には内側に墨で、まじないの文言が書かれている。
- S K 116 土製の皿が4点のみ出土しているが、いずれもロクロ成形で、器壁は極端に薄く、443・444には底部に墨書の痕跡が認められる。
- S K 172 土製の皿が4点のみ出土しているが、いずれもロクロ成形で、448には内側に440同様に、まじないの文言が墨で書かれている。
- S K 201 449～453は陶器碗で、451・453は高台内が渦状に削り出されている。454～456は陶器皿で、454の内側には花文が摺絵で施されている。455・456は灯明皿受で、いずれも受け部の口縁の方が皿部の口縁より高い。457は播鉢の小型製品で、458は盤状陶器である。460は陶器の徳利で、体部中ほどには焼成後に穿孔されており、高台内には「キヨ」と墨で書かれている。467・468は焼塩壺の身で、469は同蓋である。身はいずれも無印と思われ、467には蓋掛かりが痕跡的に残る。470～472は瓦である。470・472は「三星一文字」紋の家紋入り瓦で、471は棟入瓦である。

本遺構の出土遺物は18世紀後半～19世紀前半のものが多い。したがって、19世紀前半頃に機能を停止したことが、想定できよう。

S K 206 473～478は陶器碗である。473は、外側体部上方から高台内にかけて鉄釉がかけられた、いわゆる「腰鎊茶碗」である。475は外側体部上方から高台脇にかけて刻み目を施された、いわゆる「鎧手茶碗」である。478は高めの高台から斜め直線的に口縁部まで立ち上がる、いわゆる「広東茶碗」で、白釉に染付が施された陶器である。479～481は陶器皿で、479には高台内に「渡勘」と墨で書かれている。480は478同様に、染付磁器風に仕上げた陶器である。481は灯明皿受で、受け部の口縁の方が皿部の口縁より低い。483は播鉢で、口縁部外側は段状に折り返された形態を残しているが、形態のみで折り返されていない。485・486は磁器で、485は器高が低いのに比べると体部の径は広く、頸部は細い形態で、油壺と思われる。486の小碗は蛇の目状で幅広の高台をもつ。489は十能の破片で、ロクロ成形の皿を作った後、口縁部を方形に縁取り、把手をつけたものと思われる。490～492は陶器蓋である。490・491は落とし蓋で、492は被せ蓋である。493は染付磁器の蓋で、内外面ともに文様が密に描かれている。494は常滑産と思われる焼き締め陶器の火器で、両肩部に把手がつく。495は焙烙で、内耳には掛け具を止めた針金が残る。

本遺構の出土遺物は、陶器碗・皿などの特徴から19世紀前半～中頃に位置づけられる。

S K 309 496～504は陶器碗で、496～498・500は半球状の体部に径が小さめの高台をもち、499・504は端反りの口縁で、502は広東茶碗である。505～516は陶器の皿で、505～508は丸みを帯びた腰部から口縁部があまり開かず、径の小さい高台がつく皿で、506には「サ」、507には「茶」と墨書が書かれている。514は灯明皿で、3穴の飾り把手がつく。515・516は灯明皿受で、受け部はいずれも口縁部より低い。522は播鉢で、口縁端部は折り返されず、内側摺り目上端には丸に「大」銘の印が隣接して押されている。517～520は餌入れで、各容量は一定でなく、目的、対象に応じた使い分けが想定できる。523～531は陶器鉢で、525・526・530は焼成後に底部が穿孔されており、転用植木鉢と思われる。528はいわゆる「水甕」で、口縁端部の断面形態は内外に開く「T」字形を呈している。529はいわゆる「瓶掛」と呼ばれる火鉢である。532・533及び534・535は蓋と身のセットで出土した陶器瓶である。547は陶器の火器と思われ、口縁部から内側にかけてはスス、炭化物が付着しており、体部上方は数カ所穿孔され、各穴は体部外側の排気管と連結する。548は伏せた半球状の体部に幅9cm程の窓と、径1cm程の空気孔を設けた手あぶり状の陶器で、鉄絵に銅緑釉流しが施されている。549～552・556～558は磁器の碗で、549・551・552・556は筒形を呈し、550・557・558は口縁端部が端反りを呈する。557は外面が青磁で、高台内には「大明成化年製」と2行6字銘が書かれている。554・555・559・560は磁器の皿で、559の高台内には方重に「福」字銘が書かれている。564～566は土製の皿で、これらはいずれもロクロ成形である。568・569は土製の被せ蓋と身で、セット関係にあり、蓋の外面にはスタンプで菊花が散らし押されており、身の底部には「玉光」字銘の刻印が押されている。それぞれの外面及び身の口縁部から内側には朱泥が塗られている。570は土製の鉢で、内外面ともに朱泥が塗られ、口縁部外側には2条のへら描き沈線が、体部にはへら状工具による施文が認められる。572・575は常滑産と思われる焼き締め陶器の火器である。575の体部下方には空気取り入れ

の窓が開けられ、肩部は排気用に穿孔が成されている。573・576・577は瓦類で、573は棟入瓦と思われ、576は道具瓦、577は軒丸瓦である。578～580は砥石で、581は石製の小型硯である。

本遺構の出土遺物は、陶器の碗、皿などが19世紀前半～中頃までのもので占められており、幕末までは至らないものの19世紀中頃に投棄されたものと位置づけられよう。

S K 310 582は染付陶器の筒形碗で、見込み部には梅文が施されている。585は陶器鉢で、体部下方から内側にかけて鉄釉がかけられている。587・588は瓦類である。587は「三星一文字」紋の家紋入り瓦で、裏側には「奴古や・師権右衛門」とへら書きされている。588は丸瓦である。

S K 312 589～600・664～666は陶器碗で、全体的に腰部の丸いものが多い。597は天目茶碗で、体部は丸みを帯びる。589・590は小碗で、590は無高台である。601～603は広東碗で、603は見込み部側から高台内に向かって穿孔されており、植木鉢などの転用が考えられる。600は幅広の高台をもち、方形枠をもつ印が押されている。604～614は陶器皿である。604～610は見込み部の文様、形態など共通するが、606を除いて底部に局所的な被熱痕が認められる。606・608～610には高台内に墨書が認められる。612は内側全体に網目文が施されており、底部は高台を作った後、3ヶ所を切り込み三足にしている。614は白釉に染付文様を施した磁器風の陶器である。615～617は播鉢で、615・616は小型製品である。618～621は陶器小型鉢で、把手付きは621のみである。625・626は陶器鉢で、体部下方から内側にかけて鉄釉がかけられ、いずれも焼成後に底部が穿孔されており、転用植木鉢と思われる。631は植木鉢で、高台脇から口縁部内側にかけて灰釉がかけられている。634・658・659は陶器の大型鉢で、634は口縁部から体部にかけて窓が切れ、その対面の体部には2ヶ所に穿孔が行われ、いわゆる「風炉」と呼ばれる火器である。635～640は陶器壺・瓶類である。638の壺には高台内に「十八」と墨書が書かれている。644～657・663は陶器蓋で、644～646は被せ蓋である。667～671・676～679は磁器碗で、676を除いて染付が施されている。676は白磁の猪口で、高台は深く削られている。678には割れ口に焼継ぎ痕がみられ、高台内には「七五四」と朱書きされている。672・673・683は磁器皿で、673の高台内には、「太明年製」という2行4字銘のくずしたものが、683の高台内には「乾」字銘が書かれている。684は白磁の蓋で、碗に伴うものと思われる。685～689は土製の皿で、いずれもロクロ成形で、689は器壁が極端に薄い。690～693は土製の耳皿で、いずれもロクロ成形の皿を焼成前に変形させたものと思われる。694～699は土製の焙烙で、口縁端部の断面形態はいずれも「Y」字形を呈し、697・698は器壁が極端に薄い。700は用途不明の土製品で、形態はキノコ形を呈し、半球状の曲面には2状の沈線の中に刻み目が施されている。701は、土製の五徳片である。703～705は火器で、703・704は、白色の細砂粒を多く含む焼き締められた胎土であるが、705は砂粒を含まず白色で緻密な胎土で、下段の体部が一部欠損しているが、その部分に風穴が設けられていたと思われる。706・707は焼塩壺の身で、708～710は同蓋である。706の口縁部には蓋掛かりはみられず、707には低い蓋掛かりが設けられている。714は土製の鉢

で、火桶として使用されたものと思われる。711は焼き締められた無釉陶器の蓋で、長方形の窓が連続してめぐり、712は瓦質の筒形小浅鉢である。いずれも内側にはスス、炭化物が付着しており、711・712はセットとして、瓦燈のように灯明具を入れた容器かと思われる。713・715～722は瓦類である。713は棟入瓦で、715～717・721は道具瓦、718は丸瓦である。722は軒丸瓦で右巻き三つ巴、珠文ともにシャープである。719・720は軒棧瓦で、いずれも周縁には丸に「三」字銘の刻印が押され、中心飾りは三葉に7個の珠文が入る。

本遺構出土遺物は、瀬戸・美濃産陶磁器において19世紀に位置づけられるものが圧倒的に多く、下限は19世紀中頃に求められよう。

S K 318 723～732は陶器の碗で、断面形態は全体的に丸い腰を呈するものが多い。724は全体に錆釉がかけられ、鉄釉が流し掛けられている。727は外側体部に凹線が2条入る、いわゆる「重層碗」で灰釉に鉄釉が流し掛けされている。733・734・736～741は陶器皿で、736は俯瞰が方形で四隅は谷状に波をもつ口縁を呈する。737は型打ち成形の皿である。740・741は灯明皿受で、いずれも受け部の口縁は皿部の口縁より高い。受け部における油の落ち口は、741では受け部を切り込んでいるが、740では受け部に穿孔して設けられている。747～749は描鉢で、いずれも口縁部外側は段状に折り返されているが、段は痕跡的で体部に密着している。735・742～746・750～754は陶器鉢である。735は非円形の浅い鉢で、口縁部は数カ所に内彎部が設けられている。745の合子は、高台内に「五カ□屋」と思われる墨で書かれている。746はびん水入れで、外側体部には梅文と笹文が表裏に、それぞれ色絵で描かれている。750は灰釉の鉢であるが、高台端部にはへら状工具による刻み目が3ヶ所一対で2単位施されている。751はこね鉢で、高台内には「延享五年 辻□右衛門 辰六月吉日」と墨で3行に分けて書かれている。この記年銘が正確だとすれば、延享五(1748)年六月にこの鉢を入手した記述と思われる。752・753は平鉢で、内側には櫛描波状文がめぐり、銅緑釉が流し掛けられ、753の底部には「未… 十… 太…」と墨で書かれている。755は灰釉が掛けられ、体部に長石が等間隔で埋め込まれている。756～762は陶器の壺・瓶類である。756～758は花瓶で、口縁部はいずれも開いており、757の底部には、「せん□様」と墨で書かれている。759・760は双耳壺で、760の底部は焼成後に穿孔されている。761・762は汁つぎで、いずれも壺形の体部に注口と把手が付属し、注口の断面形態はゆるやかな「S」字状に屈曲する。763・791は灰落として、いずれも底径に比して口径は狭くすぼむ。764～767は灯明具で、764～766はひょうそく、767は灯明皿受台である。768～774は陶器蓋で、774の被せ蓋以外は落とし蓋で、773の内側には「嘉□」と墨で書かれている。777・779～781は火鉢で、781の底部には「御部屋」と思われる墨で書かれている。792～797は土製の皿で、いずれもロクロ成形である。796・797は口径が20cm前後と大きく、いずれも丁寧に磨かれている。798～800は焼塩壺の身で、801・802は同蓋である。799には「泉湊伊織」、800には「泉州磨生 サカイ 御塩所」銘の刻印が外側体部に押されており、いずれも蓋掛かり部は痕跡的である。798は無印で、蓋掛かりを設けられていない。蓋はいずれも被せる部分が浅く、痕跡的な蓋掛かりをもつ身に伴うものと思われる。805～807は焼き締

められた無釉陶器の蓋、皿で、いずれも内面にはスス、炭化物が付着している。805と806は形態が酷似しており、長方形の窓がめぐらされているか否か、端部が落とし蓋か被せ蓋かの違いである。807の皿は底部中央につまみが欠損したとも考えられる痕跡がみられ、蓋からの転用品の可能性も有するが、特徴ある胎土は3点とも同一で、805・807の2点で瓦燈のように灯明具の容器として使用し、806は消火用として3点セットで使用された可能性も考えられる。808～812は瓦類である。808は陶器軒丸瓦片で、緑釉が掛けられ、巴部は左巻き三つ巴と思われる。809は道具瓦で、810は棟入瓦であり、811は丸瓦、812は棧瓦である。813は石製の硯である。

本遺構の出土遺物は、全般的に18世紀代のもが多くみられるが、播鉢、焼塩壺などから判断すると、18世紀後半に位置付けられよう。

- S K 319 814・815は陶器碗で、815の広東碗は820の皿とともに白釉を掛け染付を施して、磁器風に仕上げている。816～820は陶器皿で、817・818の灯明皿受は、いずれも受け部の口縁が皿部の口縁より低い。821・822は陶器壺で、821は半環耳の双耳壺である。824の陶器鍋は、823の蓋とともに鉄絵と銅緑釉の流し掛けが施され、セット関係にあるものと思われるが、蓋の裏には「□部屋」という文字が書かれている。830・831は染付磁器碗で、832・833は白磁の皿である。832には内側に菊花が陽刻で散らされている。836は土製の焙烙で、口縁部は短く直立し、端部は内傾している。829の土製品は、断面形態が筒形を呈し、体部下方には窓が設けられている。837・838は常滑産の甕・火器で、837の外側体部には、いわゆる「松皮手」といわれる波状文が施されている。839～845は人形・玩具類である。839・840は壺形を呈するが、いずれも破片であり土瓶のミニチュアの可能性を有する。843は火器、845は釜蓋のミニチュアで、844は有人船のミニチュアである。

本遺構の出土遺物は19世紀代のもが中心で、陶器碗、磁器などの年代観から、19世紀中頃に位置付けられよう。

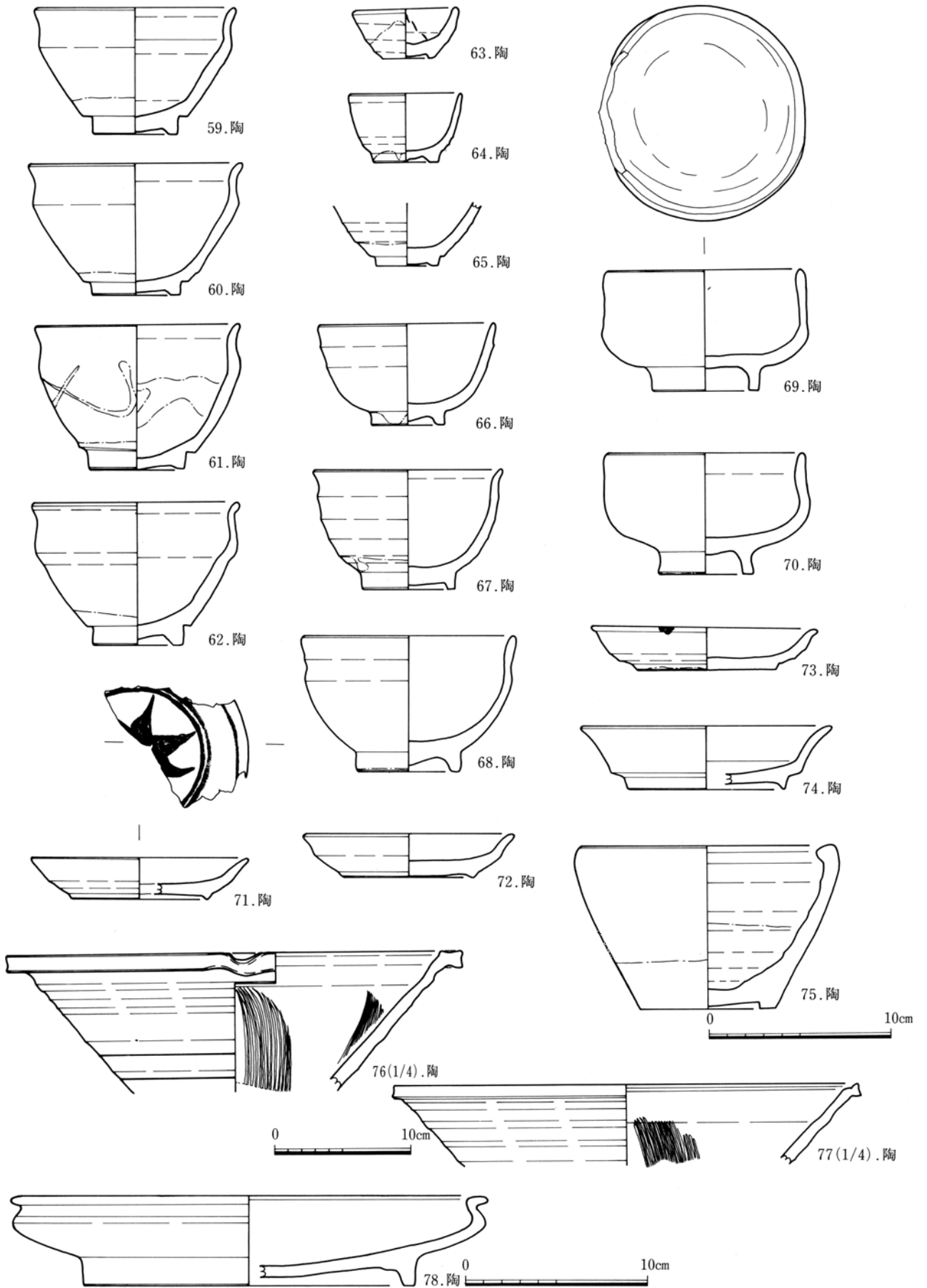
- S X 11 846・847は陶器碗で、847は灰釉の拳骨茶碗である。848は陶器皿で、錆釉が全体に掛けられている。849・850は播鉢である。849の口縁部外側は、段が痕跡的で折り返されていない。850は無釉で、明赤褐色の胎土は焼き締められており、口縁部内側と外側の段には2本の凹線が入る。854・855は磁器の仏飯具で、854の底部は山形にえぐられているが、855の底部は浅く平らに削られている。858～860は土製の皿で、いずれもロクロ成形で器壁は薄い。863は焼塩壺の身、864・865は同蓋で、身の蓋掛かりは痕跡的である。866～869は人形・玩具類で、868は獅子頭、869はニワトリをかたどったものと思われる。

本遺構出土遺物は、播鉢、焼塩壺の形態などから、18世紀後半～19世紀前半に位置付けられよう。

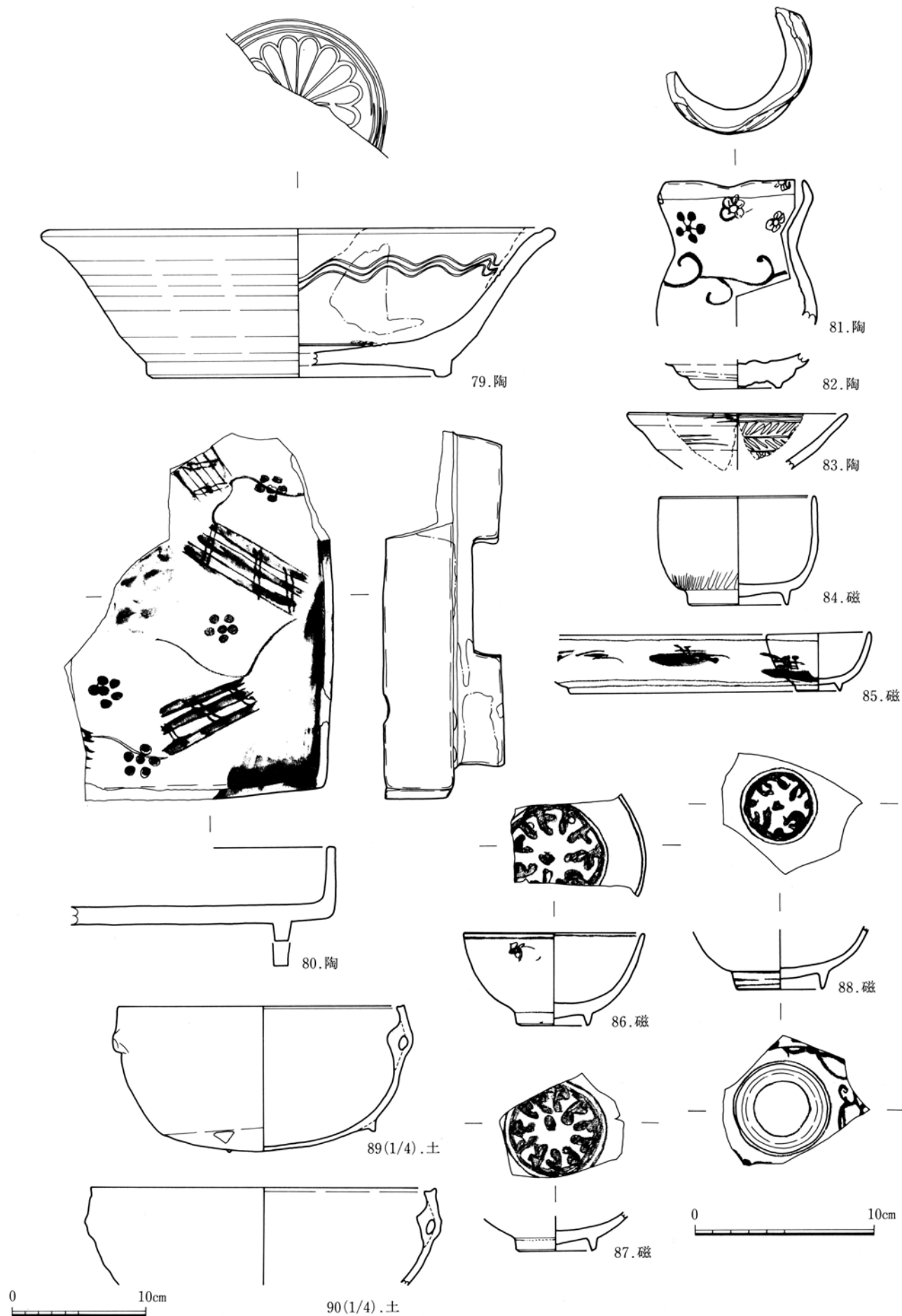
#### 参考文献

- 藤澤良祐 1986～1989 『研究紀要V～VIII』 瀬戸市歴史民俗資料館  
 田口昭二 1993 『美濃窯の焼物』 多治見市教育委員会  
 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社

第III章 遺物



第33図 S D307出土遺物実測図① (76・77は1/4、その他は1/3)

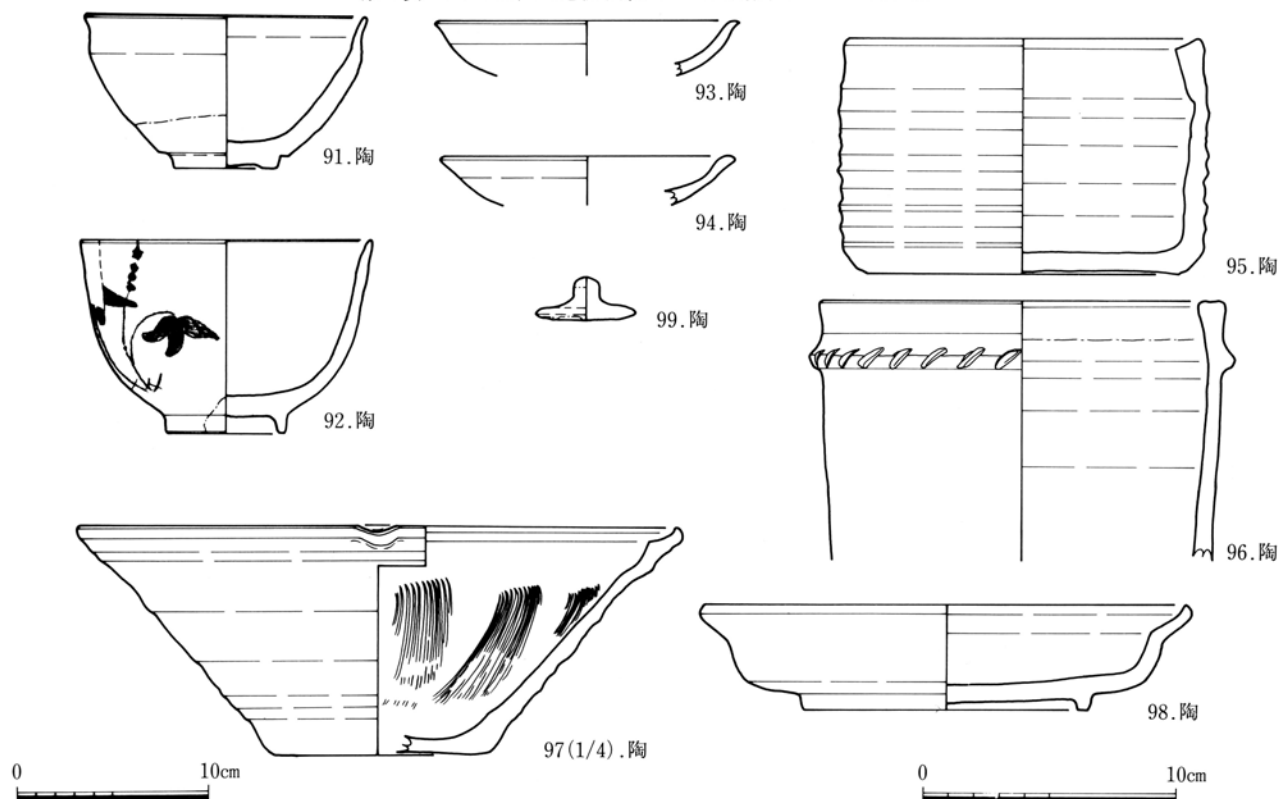


第34図 SD307出土遺物実測図② (89・90は1/4、その他は1/3)

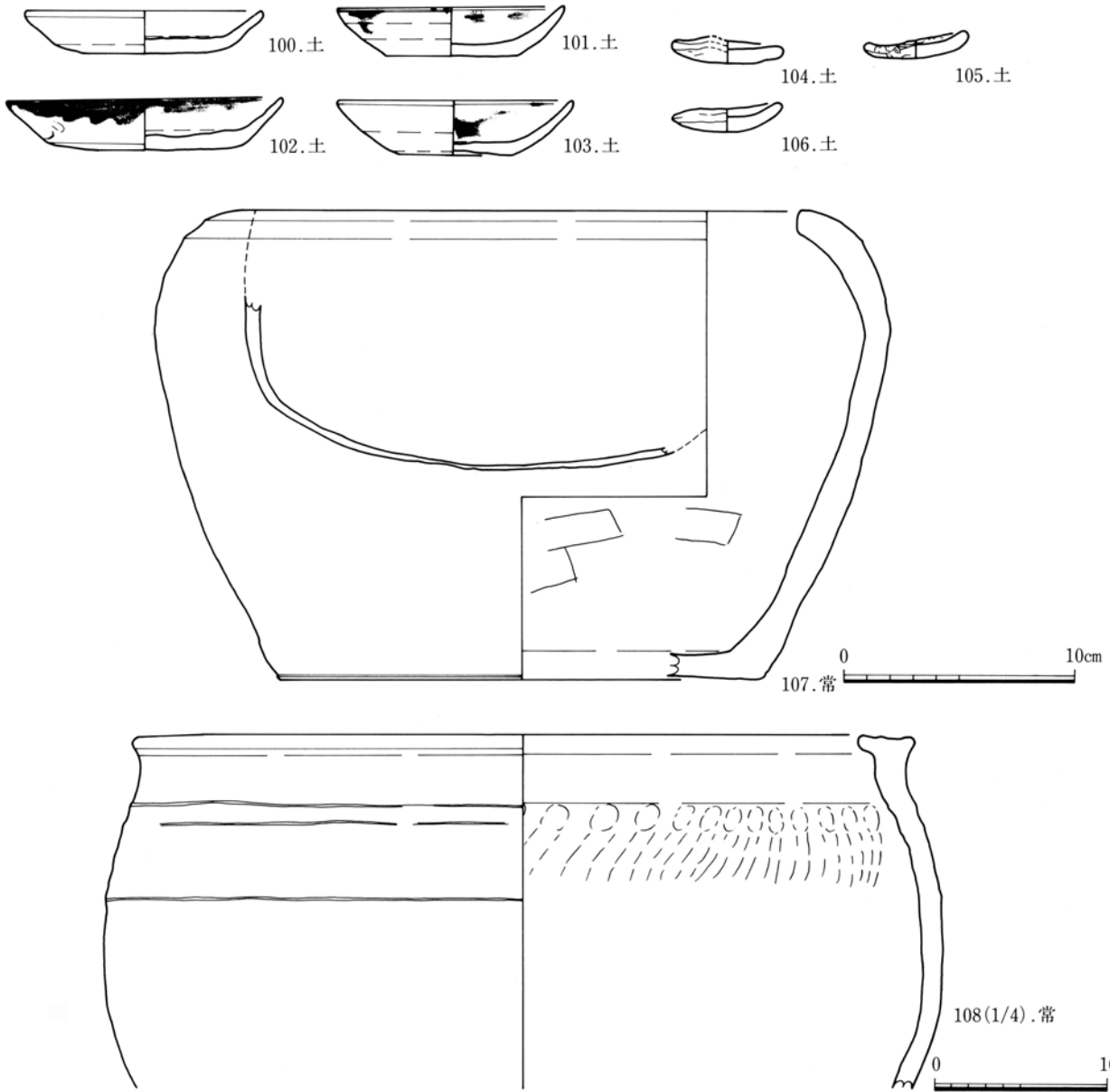
第三章 遺物

図版No	遺構No	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
33-59	SD307上層	2	美濃	1	1		2	-	7.00	(10.80)	4.50		17c	E-59
33-60	SD307	2	美濃	1	1		2	-	7.30	(11.80)	4.80		17c	E-60
33-61	SD307	2	美濃	1	1		2	-	8.00~8.10	11.10	5.20		灰釉流し、17c	E-61
33-62	SD307	2	瀬戸	1	1		2	-	7.90~7.95	11.20	5.00		17c	E-62
33-63	SD307	2	瀬戸・美濃	1	7		2	-	2.80	5.50	2.60		大窯IV	E-63
33-64	SD307	2	美濃	1	7		1	-	3.80	(6.00)	3.60		17c	E-64
33-65	SD307	2	瀬戸	1	1		2	-	-	-	3.40		大窯 I	E-65
33-66	SD307	2	美濃	1	2		1	-	5.60	9.60	4.00		17c	E-66
33-67	SD307	2	瀬戸	1	2		1	7	6.60	10.2	5.00		17c	E-67
33-68	SD307	2	美濃	1	1		1	-	7.50	(11.40)	5.60		17cか	E-68
33-69	SD307	2	美濃	1	2		1	-	6.70	10.60	5.80		17c	E-69
33-70	SD307	2	美濃	1	2		1	-	6.70	10.70	5.20		志野、17c	E-70
33-71	SD307上層	2	瀬戸・美濃	2	1		1	-	2.30	(5.80)	7.40		志野、鉄絵、17c	E-71
33-72	SD307	2	美濃	2	1		1	7	2.40	11.60	7.00		17c	E-72
33-73	SD307	2	瀬戸	2	1		1	7	2.20~2.50	12.40	7.60		17c	E-73
33-74	SD307	2	瀬戸	2	2		1	-	3.50	13.80	8.60		17c	E-74
33-75	SD307	2	美濃	3	3	10	2	5,6	9.00	(14.00)	7.50		17c	E-75
33-76	SD307	2	瀬戸	3	3	3	2	-	-	(23.40)	-		17c	E-76
33-77	SD307上層	2	瀬戸	3	3	3	2	-	-	(34.10)	-		17c	E-77
33-78	SD307	2	美濃	3	8		2	-	5.00	(25.60)	18.20		17c	E-78
34-79	SD307上層	2	瀬戸	3	1		1	-	8.35	(28.20)	16.40		陰刻、銅緑釉流し、17c	E-79
34-80	SD307	2	美濃	7	6		1,4	-	6.70	-	-		鉄絵(織部)、17c	E-80
34-81	SD307	2	美濃	4	5		1	2	-	(7.80)	-		鉄絵、17c	E-81
34-82	SD307	2	肥前(唐津)	2			1	-	-	-	4.60		1590~1610年代	E-82
34-83	SD307上層	2	肥前	2	1		1	-	-	(12.30)	-		唐津、三島手、17c前~	E-83
34-84	SD307	2	肥前	1	2		7	-	6.10	(8.60)	5.40		17c後半	E-84
34-85	SD307上層	2	肥前	1	7		3	-	3.30	5.70	2.40		1640~1660	E-85
34-86	SD307上層	2	中国(景德镇)	1	2		3	-	5.20	(10.00)	3.80		1590~1630	E-86
34-87	SD307上層	2	中国(景德镇)	1	2		3	-	-	-	4.00		1590~1630	E-87
34-88	SD307上層	2	中国(景德镇)	1	2		3	-	-	-	4.80		1590~1610	E-88
34-89	SD307	2	土器	5	3		5		10.90	21.30	-			E-89
34-90	SD307	2	土器	5	3		5	6	-	(25.70)	-			E-90

第8表 SD307出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



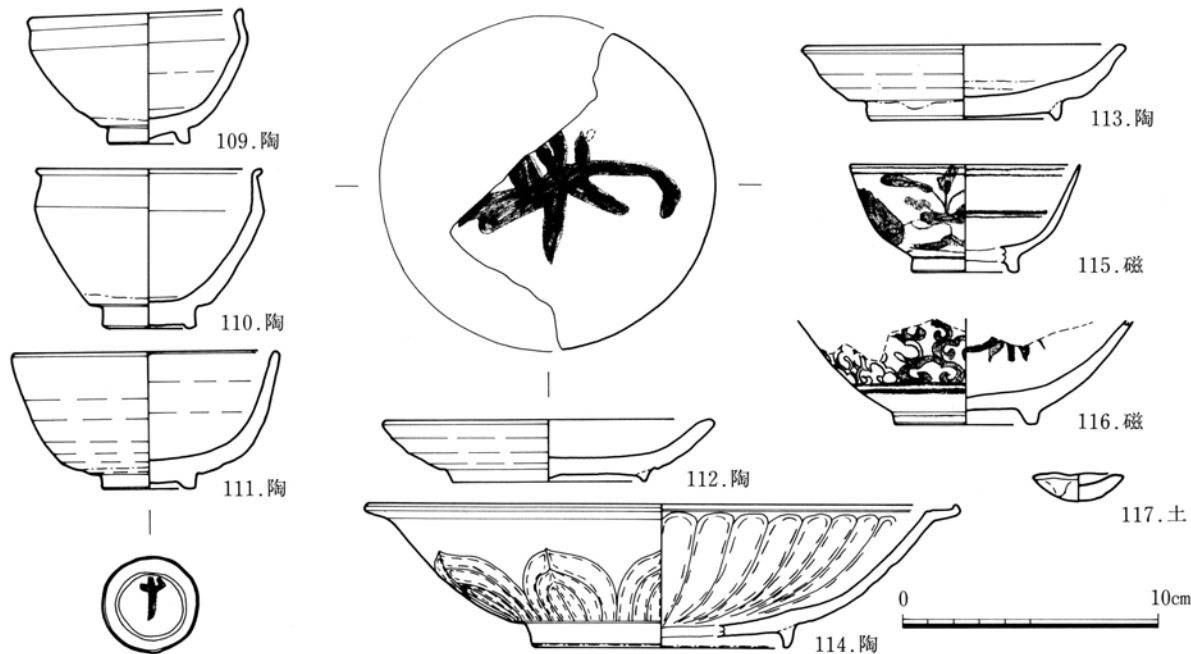
第35図 SD308出土遺物実測図① (97は1/4、その他は1/3)



第36図 S D308出土遺物実測図② (108は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
35-91	SD308	2,3	瀬戸	1	1		2	-	6.10	10.80	4.00		17c	E-91
35-92	SD308	2,3	美濃	1	2		1	-	7.60	11.40	4.60		鉄絵、17c	E-92
35-93	SD308	2,3	瀬戸	2	1		1	-	-	(11.60)	-		大窯 I	E-93
35-94	SD308	2,3	不明	2	1		1	-	-	(11.00)	-		白化粧まだら、大窯 I	E-94
35-95	SD308	2,3	瀬戸	3	4		5	-	9.30	(13.80)	12.20			E-95
35-96	SD308	2,3	美濃	3	4		2	-	-	15.60	-		17c~18c中	E-96
35-97	SD308	2,3	瀬戸	3	3	3	2	2	12.10	31.10	10.80		外ナデ、糸切痕、大窯IV	E-97
35-98	SD308	2,3	瀬戸	3	8		2	-	4.20	(18.80)	11.20		17c	E-98
35-99	SD308	2,3	不明	7	10		1	-	1.65	3.90	-			E-99
36-100	SD308	2,3	土器	2	1		5	6	1.80	(10.20)	4.50			E-100
36-101	SD308	2,3	土器	2	1		5	-	2.20	9.70	5.60			E-101
36-102	SD308	2,3	土器	2	1		5	7	2.30	11.80	7.00			E-102
36-103	SD308	2,3	土器	2	1		5	6	2.40	10.10	4.60			E-103
36-104	SD308	2,3	土器	2	2		5	-	1.20	4.60	-			E-104
36-105	SD308	2,3	土器	2	2		5	-	1.20	4.10	-			E-105
36-106	SD308	2,3	土器	2	2		5	-	1.30	4.50	-			E-106
36-107	SD308	2,3	常滑	7			10	6	20.50	(24.00)	(20.50)			E-107
36-108	SD308	2,3	常滑	6			10	-	-	(44.70)	-			E-108

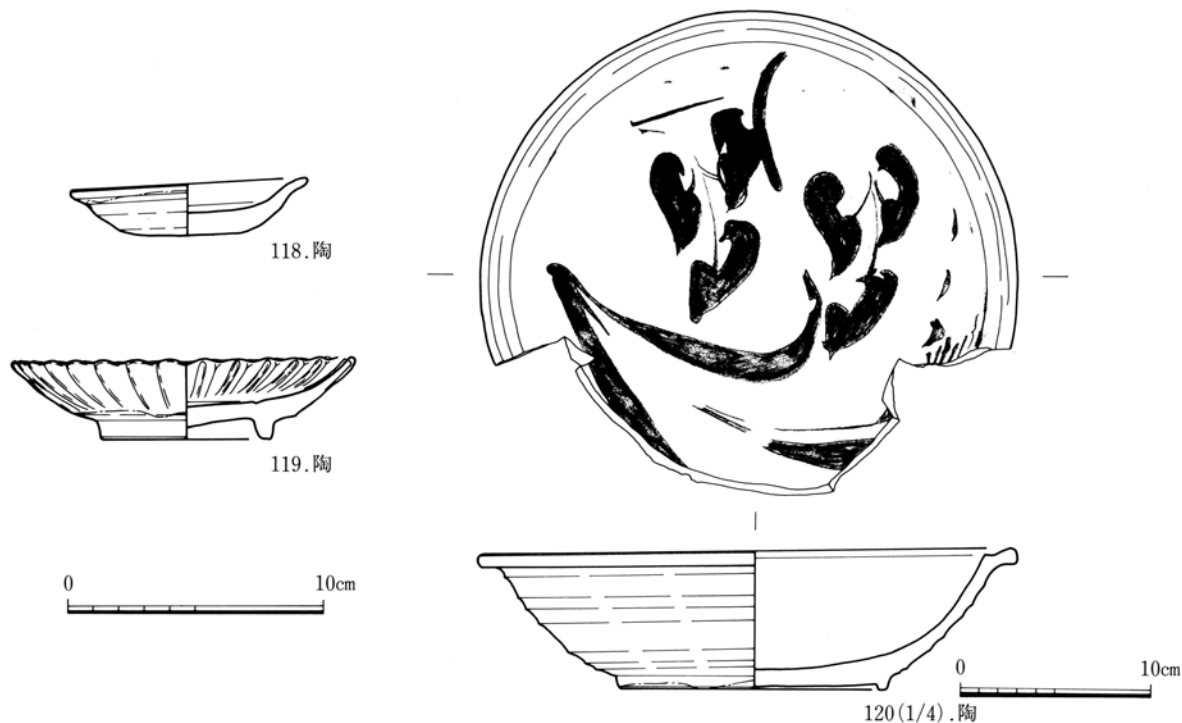
第9表 S D308出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第37図 SD309出土遺物実測図

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
37-109	SD309	3	美濃		1	1	2	-	5.30	8.20	3.10		17cか	E-109
37-110	SD309	3	美濃		1	1	2	-	6.30	(8.70)	3.60		17c	E-110
37-111	SD309	3	美濃		1	2	1	9	5.40	(10.20)	3.50		17c	E-111
37-112	SD309	3	美濃		2	1	1	-	2.40	(12.60)	7.60		志野、鉄絵、17c	E-112
37-113	SD309	3	瀬戸		2	1	1	-	2.95	(12.30)	7.40		17c	E-113
37-114	SD309	3	美濃		3	8	1	-	5.70	(23.30)	(9.90)		御深井、17c	E-114
37-115	SD309	3	中国(福建省)		1	7	3	-	4.20	(8.90)	(4.00)		1590~1630	E-115
37-116	SD309	3	肥前(百間川)		1	2	3	-	-	-	5.50		1630~1640	E-116
37-117	SD309	3	土器		2	2	5	-	1.00	3.60	-			E-117

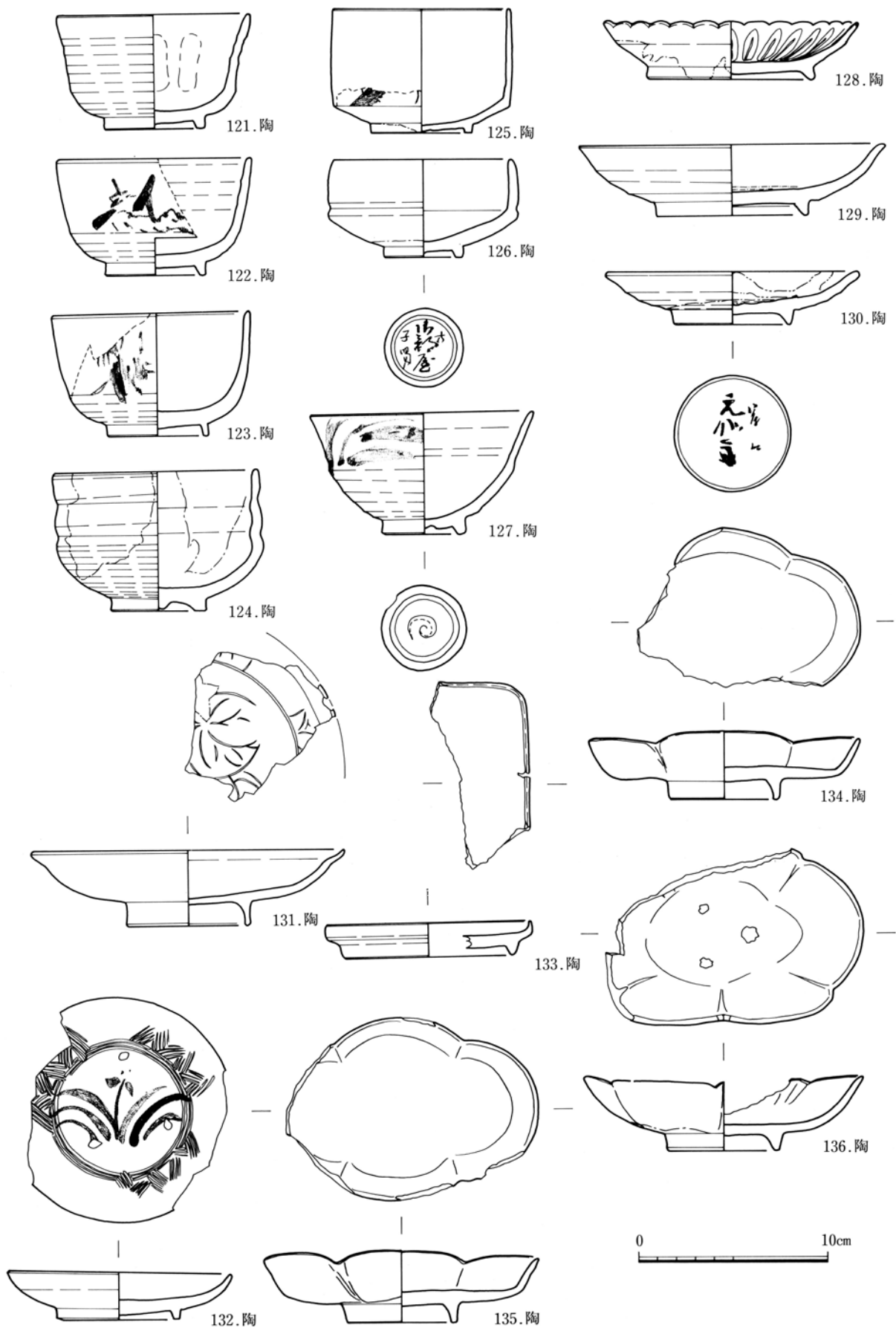
第10表 SD309出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第38図 SD401出土遺物実測図 (120は1/4、その他は1/3)

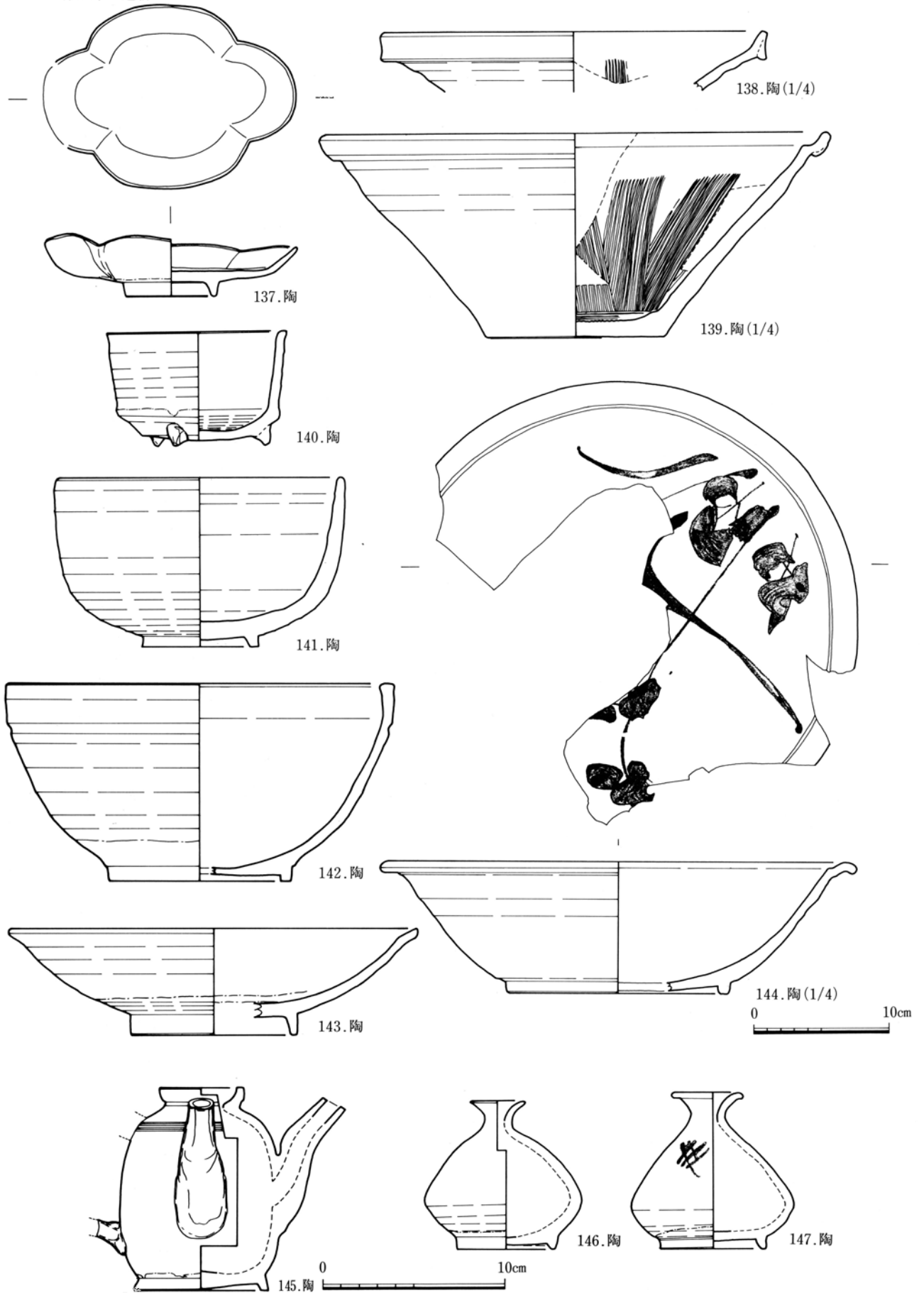
図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
38-118	SD401	3, ?	瀬戸		2	1	1	-	2.30	9.10	4.20		窯窯後期最末	E-118
38-119	SD401	3, ?	瀬戸		2	1	1	-	3.00~3.20	13.50	6.80		18c、銅緑釉流し	E-119
38-120	SD401	3, ?	美濃		3	1	1	-	7.00~7.50	27.70	14.00		鉄絵、銅緑釉流し、17c	E-120

第11表 SD401出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照

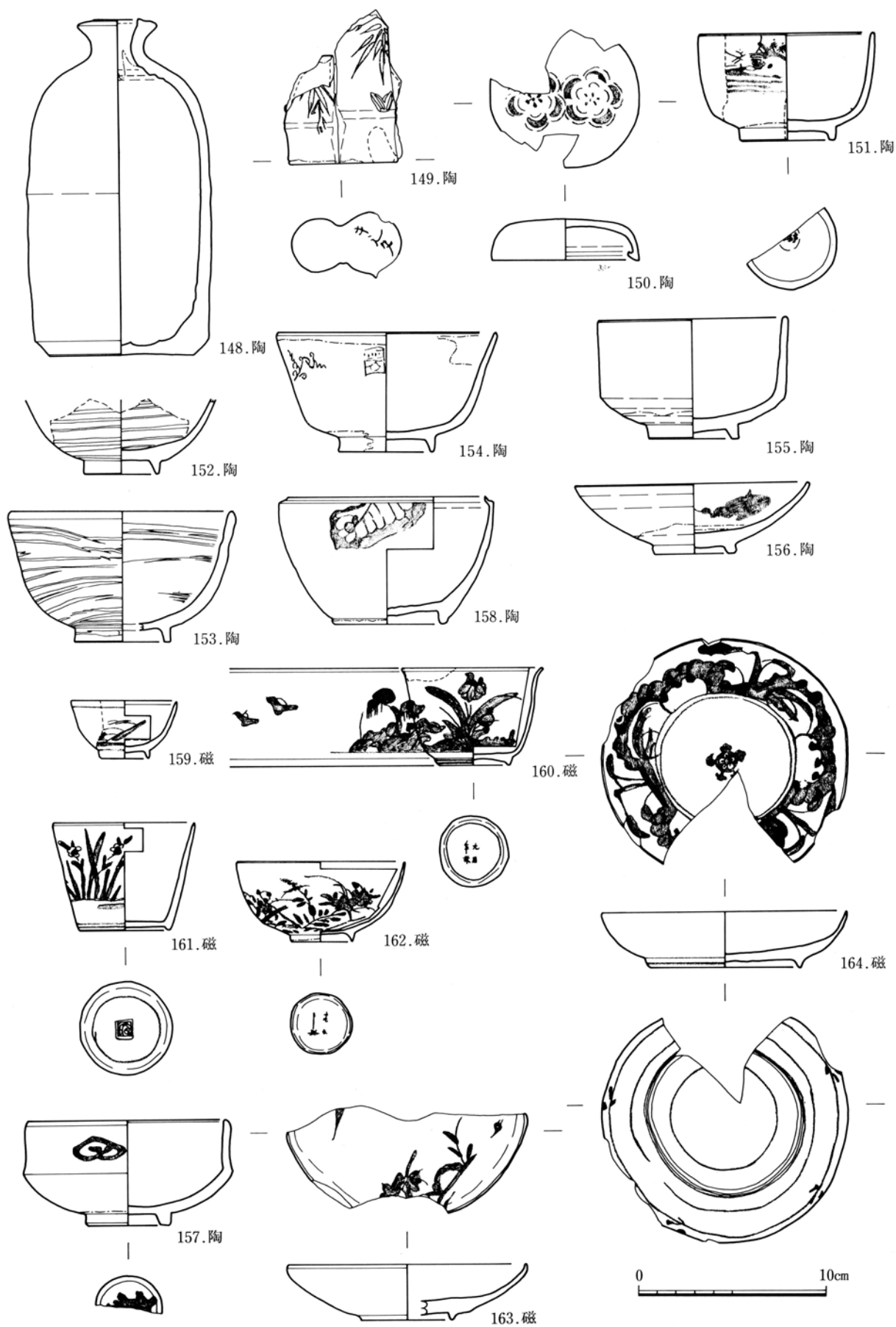


第39图 SK313出土遺物実測図①

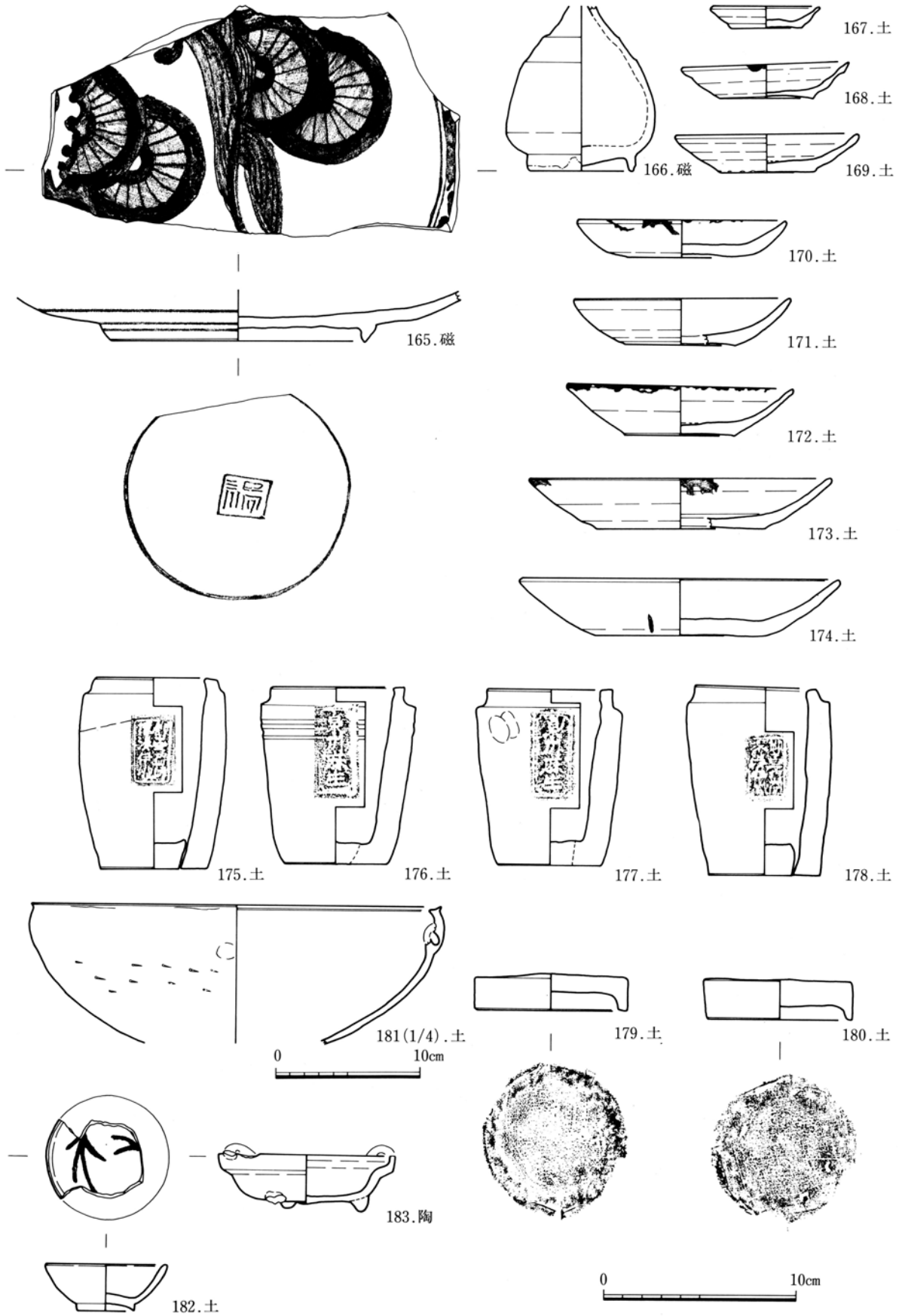
第III章 遺物



第40図 SK313出土遺物実測図② (138・139・144は1/4、その他は1/3)



第41图 SK313出土遺物実測図③

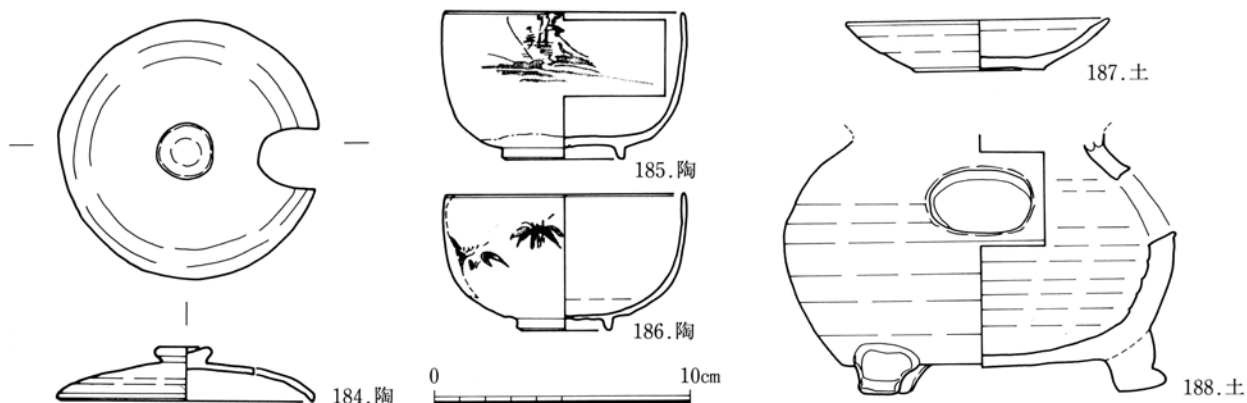


第42図 S K313出土遺物実測図④ (181は1/4、その他は1/3)

第三章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	軸葉	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
39-121	SK313	1	瀬戸	1	2		1,2	-	6.10	(10.30)	5.20		18c	E-121
39-122	SK313	1	瀬戸	1	2		1	-	6.20	(10.20)	5.00		呉須絵、18c	E-122
39-123	SK313	1	瀬戸	1	2		1	-	6.60	10.30	5.20		御室茶碗、呉須絵、18c	E-123
39-124	SK313	1	美濃	1	2		1	-	7.45	10.60	4.90		鉄釉流し、18c	E-124
39-125	SK313	1	不明	1	3		1	-	6.60	(9.30)	5.30		鉄絵	E-125
39-126	SK313	1	瀬戸	1	3		1	9	5.20	(8.20)	4.00		18c	E-126
39-127	SK313	1	美濃?	1	2		1	-	6.50	11.60	4.00		鉄絵、18cか	E-127
39-128	SK313	1	美濃	2	1		1	-	3.10	(13.20)	8.70		陰刻、18c	E-128
39-129	SK313	1	瀬戸	2	1		1	-	3.75	(15.80)	7.80		18c	E-129
39-130	SK313	1	美濃	2	1		1	9	2.80	(13.20)	6.00		銅緑釉流し、18c	E-130
39-131	SK313	1	京都	3	8		4	-	4.00	(16.40)	6.40			E-131
39-132	SK313	1	瀬戸・美濃	2	1		1	-	2.65	11.70	5.80		陰刻、呉須絵、18c	E-132
39-133	SK313	1	瀬戸	2	3		1	-	1.80	(10.80)	8.80		18c	E-133
39-134	SK313	1	美濃	2	3		1	-	3.60	(14.40), (9.90)	5.70		18c	E-134
39-135	SK313	1	美濃	2	3		1	-	3.85	(14.70), 9.70	5.80		18c	E-135
39-136	SK313	1	美濃	2	3		1	-	3.90	(14.80)	5.70		18c	E-136
40-137	SK313	1	美濃	2	3		1	-	-	(13.90)	4.90		18c	E-137
40-138	SK313	1	瀬戸	3	3	2	2	-	-	(27.90)	-		大窯III古段階	E-138
40-139	SK313	1	瀬戸(赤津)	3	3	6	2	4	15.20	(36.90)	13.00		18c	E-139
40-140	SK313	1	瀬戸	3	4		1	-	6.40	9.80	6.40		18cか	E-140
40-141	SK313	1	瀬戸・美濃	3	1		1	-	9.40	15.60	6.40		18c	E-141
40-142	SK313	1	瀬戸(赤津)	3	1		2	-	14.75	28.20	13.40		18c~19c中	E-142
40-143	SK313	1	瀬戸	3	2		1	-	5.90	(12.40)	9.10		18c	E-143
40-144	SK313	1	美濃	3	2		1	-	9.80	34.00	16.20		鉄絵、18c	E-144
40-145	SK313	1	美濃	4	7		2	-	11.30	4.60	7.40		18c	E-145
40-146	SK313	1	美濃	4	10		1	-	8.20	(2.90)	5.40	8.70	18c	E-146
40-147	SK313	1	美濃	4	10		1	-	8.70	3.70	5.80	8.95	呉須絵、18c	E-147
41-148	SK313	1	瀬戸・美濃	4	8		2	-	18.00	2.20	7.80	9.45	18c	E-148
41-149	SK313	1	不明	7	1		1	9	-	-	-	-	上絵	E-149
41-150	SK313	1	美濃?	7	10		1	-	2.20	7.80	-	-	鉄絵	E-150
41-151	SK313	1	肥前	1	2		1	-	5.70	(9.20)	5.00		呉須絵、刻印、17c後	E-151
41-152	SK313	1	肥前	1	2		1	-	4.00	-	3.90		刷毛目唐津	E-152
41-153	SK313	1	肥前	1	2		1	-	7.00	(12.20)	(5.00)		刷毛目唐津、17c前後~18c前	E-153
41-154	SK313	1	肥前(現川)	1	2		1	-	6.40	11.60	5.00		刷毛目、呉須絵、1690~18c前	E-154
41-155	SK313	1	美濃?	1	3		2	-	6.40~6.50	10.10	4.80		刷毛で鉄釉、内面無釉、18c	E-155
41-156	SK313	1	不明	2	1		1	-	3.75	(12.20)	4.20		銅緑釉流し	E-156
41-157	SK313	1	京都	1	3		1	9	5.60	(10.60)	4.40		鉄絵	E-157
41-158	SK313	1	肥前(有田)	3	10		7	11	6.80	9.45	5.90	11.55	上絵、1650~1670	E-158
41-159	SK313	1	肥前	1	7		3	-	3.10	5.60	2.50		1840頃	E-159
41-160	SK313	1	肥前	1	7		3	-	5.20	7.40	3.20		1690~18c	E-160
41-161	SK313	1	肥前	1	7		3	-	5.80	7.50	4.30		ソバ猪口、18c前頃	E-161
41-162	SK313	1	肥前	1	2		3	-	4.30	8.80	3.30			E-162
41-163	SK313	1	肥前	2	1		3	-	3.00	(12.70)	4.90		1640~1650	E-163
41-164	SK313	1	肥前	2	1		3	-	3.00	13.00	8.00		1690~18c初	E-164
42-165	SK313	1	肥前(有田)	3	8		3	-	-	-	13.00		17c後	E-165
42-166	SK313	1	肥前	4	8		6	-	-	-	5.40		1630~1650	E-166
42-167	SK313	1	土器	2	1		5	-	1.10	5.50	3.60			E-167
42-168	SK313	1	土器	2	1		5	7	1.80	8.60	4.90			E-168
42-169	SK313	1	土器	2	1		5	-	2.00	(9.45)	4.70			E-169
42-170	SK313	1	土器	2	1		5	5,6	1.90	10.80	5.20			E-170
42-171	SK313	1	土器	2	1		5	6	2.50	11.10	5.70			E-171
42-172	SK313	1	土器	2	1		5	7	2.60	(11.70)	5.70			E-172
42-173	SK313	1	土器	2	1		5	7	2.60	(15.60)	8.80			E-173
42-174	SK313	1	土器	2	1		5	6,7	2.95	(16.50)	8.80			E-174
42-175	SK313	1	土器	8	1		5	-	9.90~10.00	5.80	5.60		刻印「御壺塩師堺湊伊織」	E-175
42-176	SK313	1	土器	8	1		5	2	9.25	6.90	5.20		刻印「泉州麻生」	E-176
42-177	SK313	1	土器	8	1		5	2	9.20	6.50	5.30		火樺、刻印「泉州麻生」	E-177
42-178	SK313	1	土器	8	1		5	2	9.70~9.90	6.30	5.80		刻印「御壺塩師堺湊伊織」	E-178
42-179	SK313	1	土器	8	2		5	-	1.90	7.80	-	-		E-179
42-180	SK313	1	土器	8	2		5	-	2.10	7.60	-	-		E-180
42-181	SK313	1	土器	5	3		5	6	-	(28.40)	-	-		E-181
42-182	SK313	1		人形									第39表参照	E-182
42-183	SK313	1		人形									第39表参照	E-183

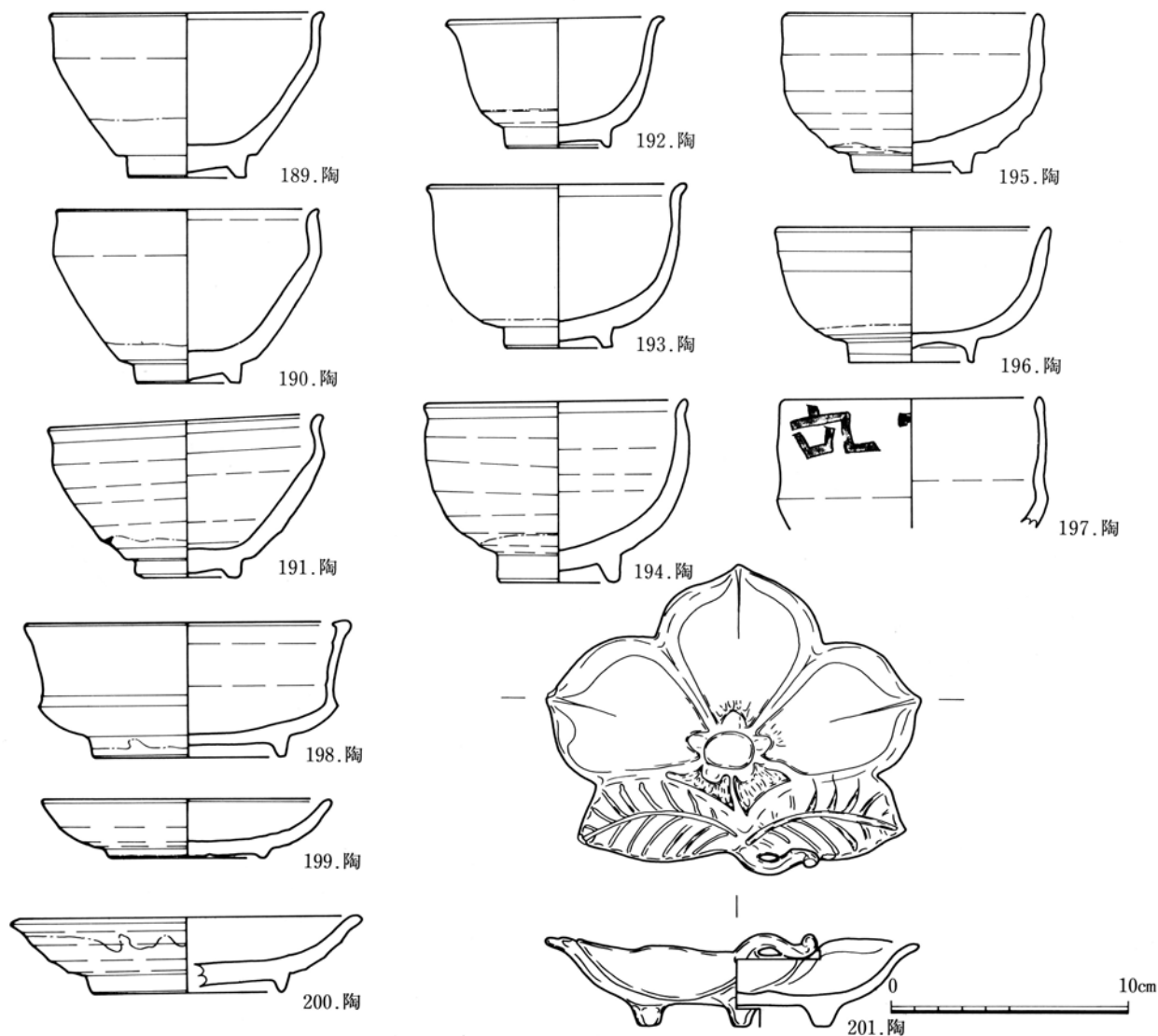
第12表 SK313出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



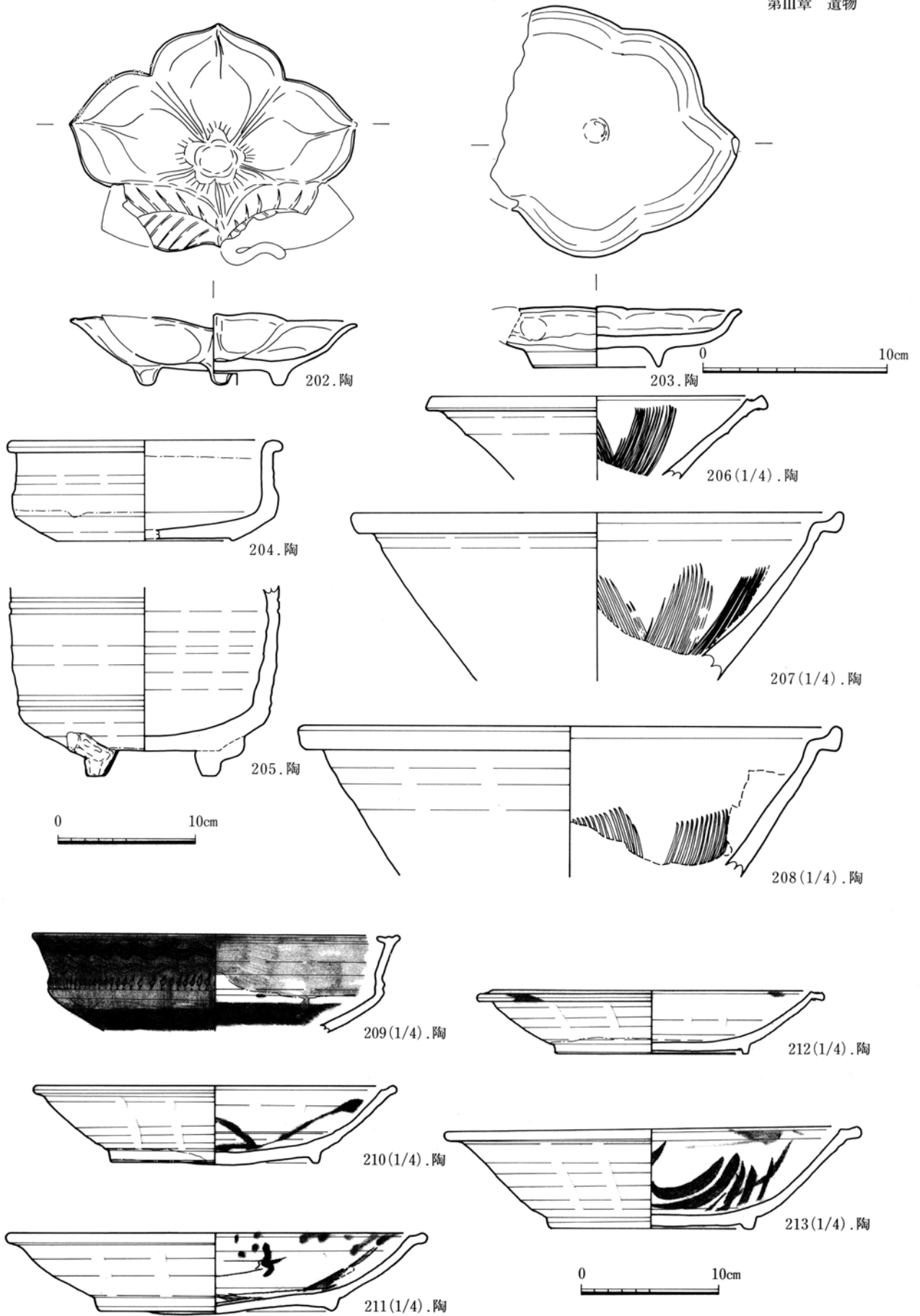
第43図 SK338出土遺物実測図

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
43-184	SK338	1	不明	7	10		2	-	2.10	10.10	-			E-184
43-185	SK338	1	肥前	1	2		1	-	5.80	9.40	4.70		京焼風、呉須絵、17c末~18c初	E-185
43-186	SK338	1	京都	1	2		1	-	5.40	(9.40)	3.50		鉄・呉須絵	E-186
43-187	SK338	1	土器	2	1		5	5.7	2.00	10.10	5.10			E-187
43-188	SK338	1	土器	7	1		5	-	-	-	11.00			E-188

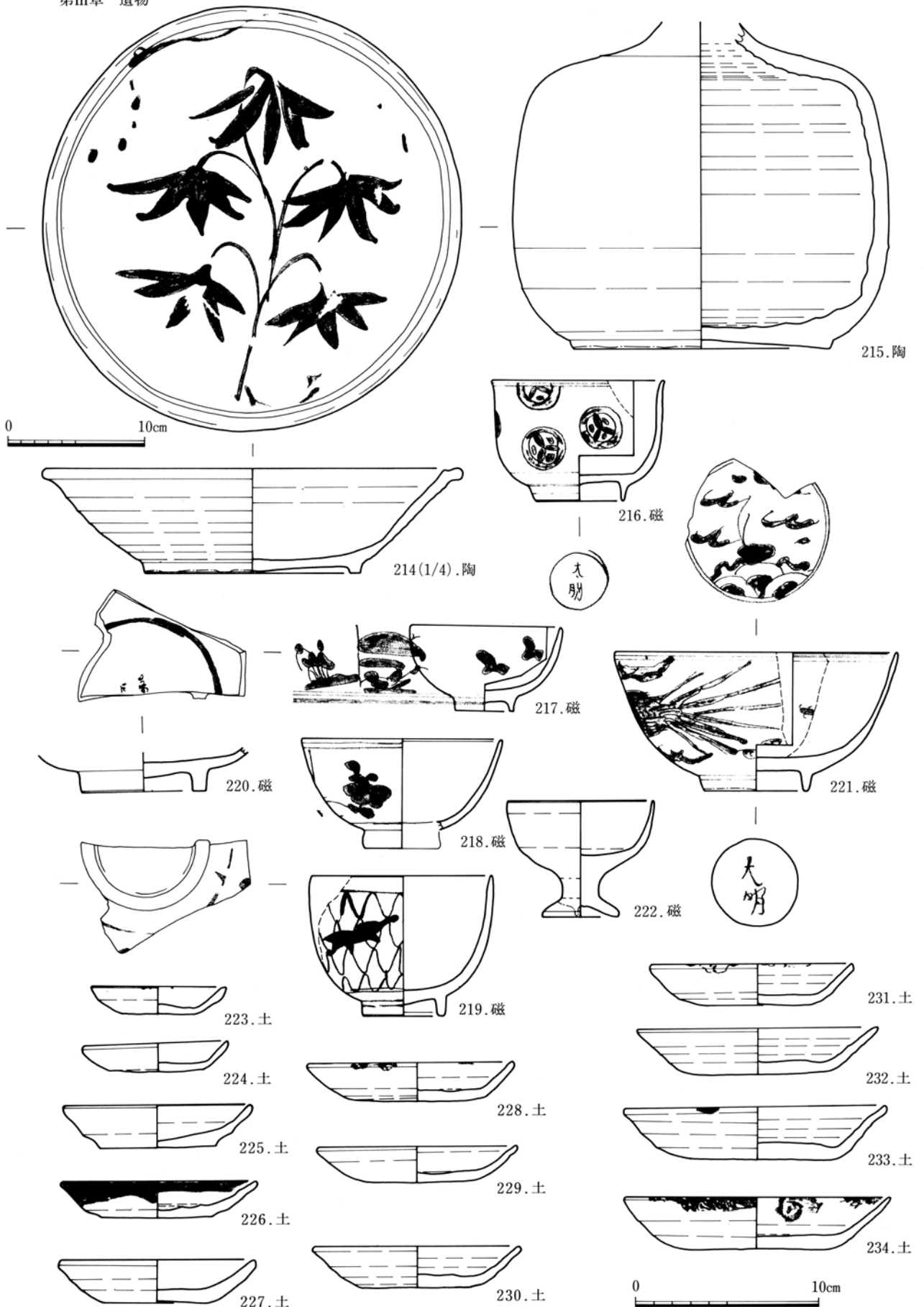
第13表 SK338出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



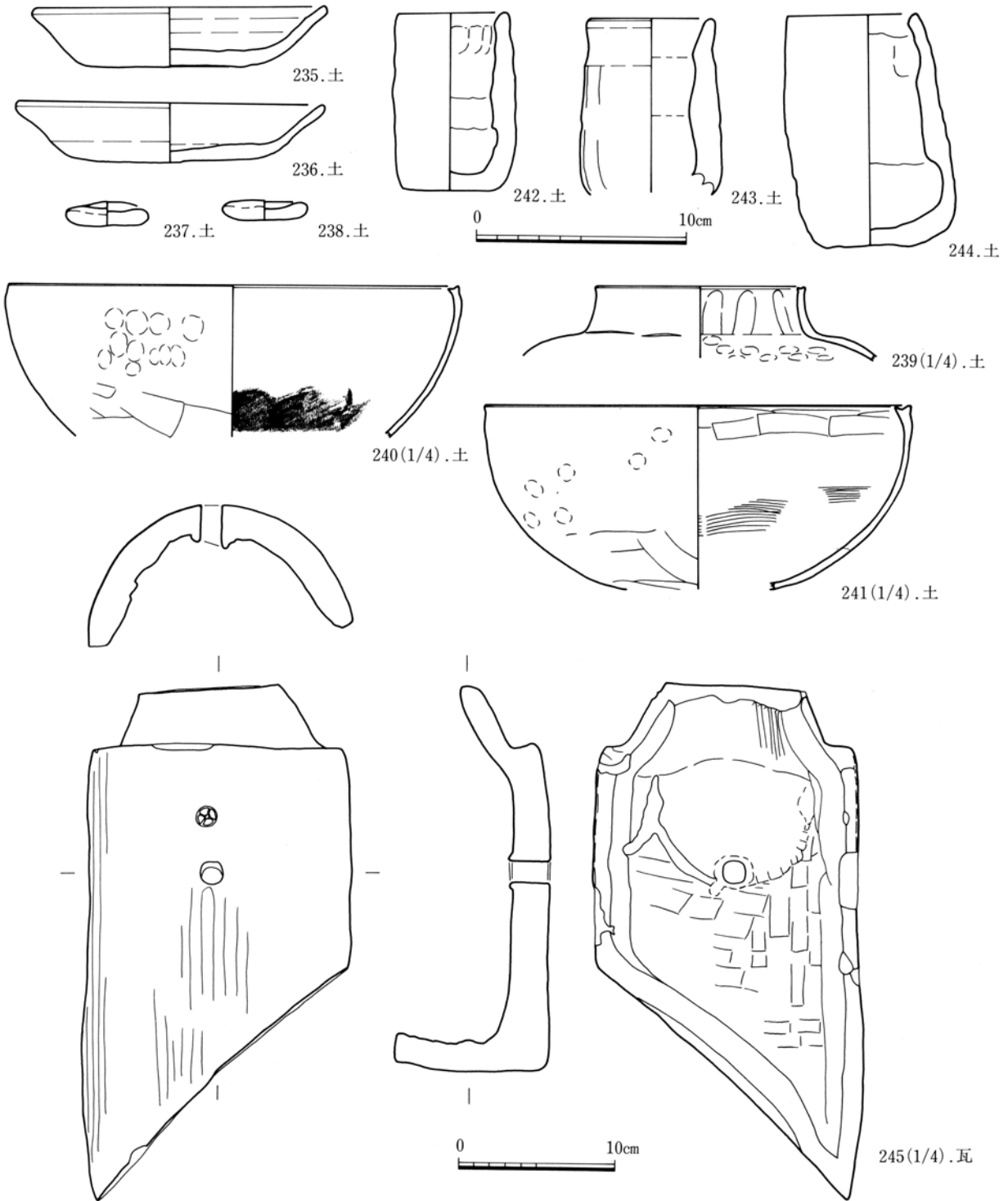
第44図 SK701出土遺物実測図①



第45図 S K701出土遺物実測図② (206~213は1/4、その他は1/3)



第46図 S K701出土遺物実測図③ (214は1/4、その他は1/3)



第47図 SK701出土遺物実測図④ (239~241・245は1/4、その他は1/3)

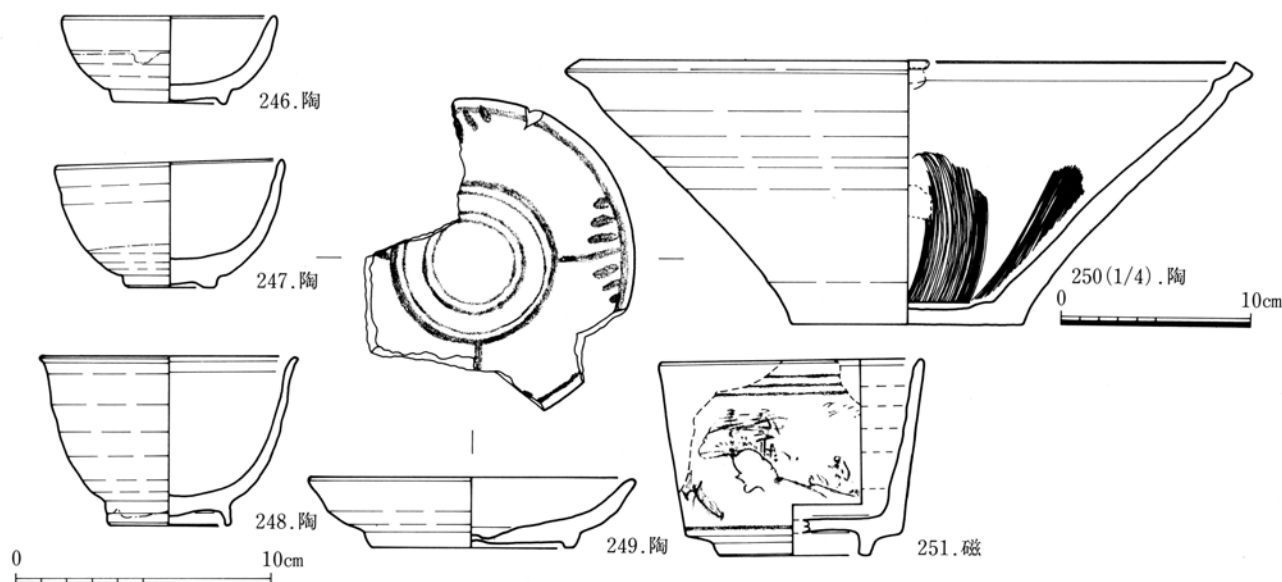
図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
44-189	SK701	1	瀬戸<美濃	1	1		2	-	6.90~7.00	11.30	5.00		17c	E-189
44-190	SK701	1	瀬戸	1	1		2	-	7.35	(11.00)	4.40		17c	E-190
44-191	SK701	1	美濃	1	1		2	-	6.80	11.30	4.40		17c	E-191
44-192	SK701	1	美濃	1	2		1	-	5.50	8.80	4.20		17c	E-192
44-193	SK701	1	美濃	1	2		2	-	6.90	10.90	4.50		17c	E-193
44-194	SK701	1	瀬戸	1	2		1	-	7.70	10.80	4.90		17c	E-194
44-195	SK701	1	瀬戸	1	2		1	-	6.70	10.40	5.00		17c	E-195
44-196	SK701	1	美濃	1	2		1	-	5.70	(11.30)	5.20		17cか	E-196
44-197	SK701	1	美濃	1	2		1	-	-	(10.80)	-		17c	E-197
44-198	SK701	1	瀬戸	1	3		1	-	5.70	(13.60)	8.20		17c	E-198

第14表 SK701出土遺物観察表① ※分類数値はV章3節参照

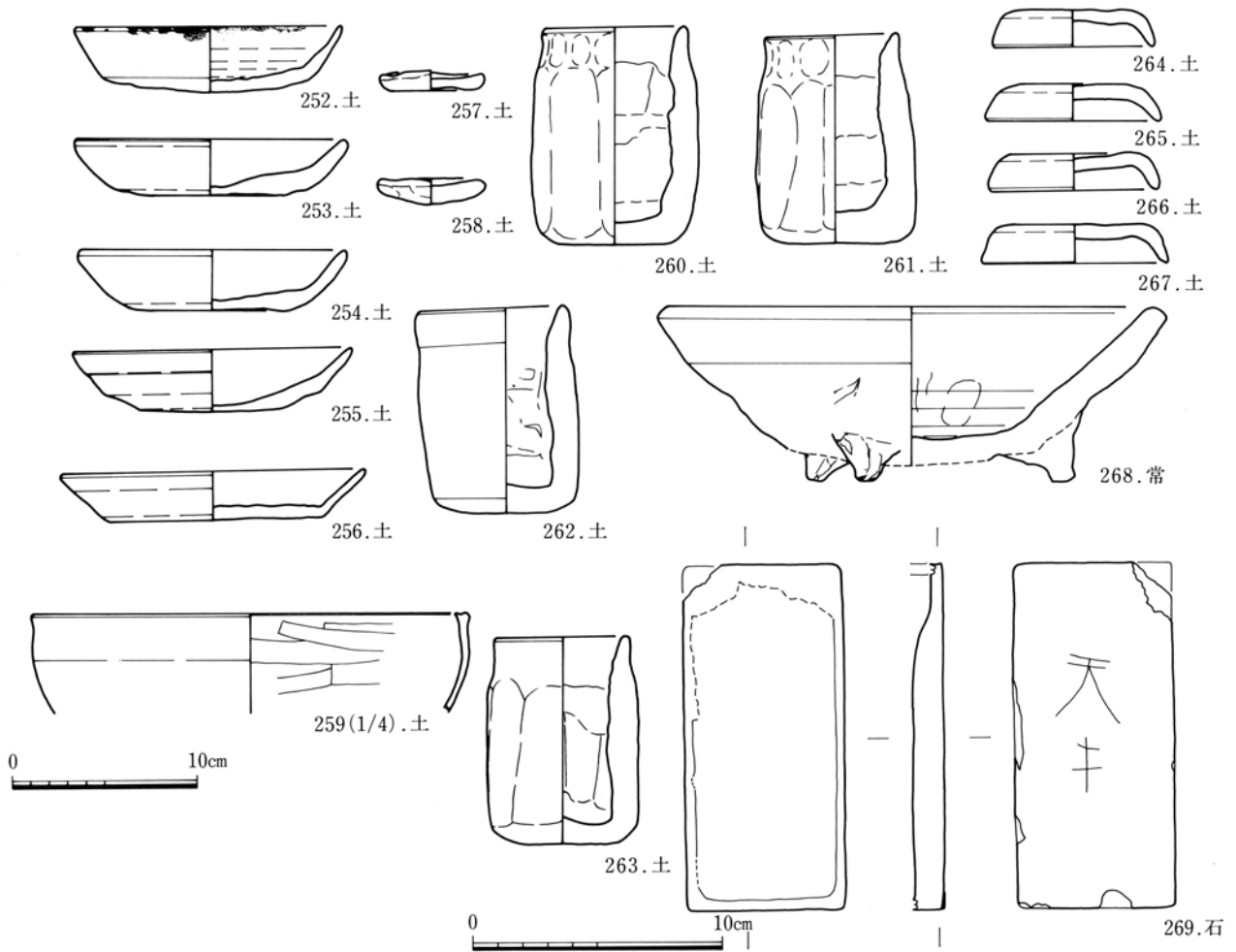
第三章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
44-199	SK701	1	瀬戸・美濃	2	1		1	-	2.45	(12.00)	(6.50)		志野、17c	E-199
44-200	SK701	1	美濃	2	1		1	-	3.20	(14.80)	8.00		17c	E-200
44-201	SK701	1	美濃	2	3		1	-	4.00	15.70	-		清安寺御深井、17c第二四半期	E-201
45-202	SK701	1	美濃	2	3		1	-	4.00	-	-		17c	E-202
45-203	SK701	1	美濃	2	3		1	-	3.30	-	6.80		御深井志野、17c	E-203
45-204	SK701	1	瀬戸・美濃	3	4		2	-	5.50	(14.00)	(9.60)	(15.00)	17c	E-204
45-205	SK701	1	瀬戸	3	4		2	2,5	10.30	-	8.10		17c	E-205
45-206	SK701	1	瀬戸	3	3	3	2	4	6.10	(24.00)	-		17c	E-206
46-207	SK701	1	瀬戸	3	3	4	2	-	-	(35.60)	-		17c	E-207
45-208	SK701	1	瀬戸	3	3	4	2	-	-	(38.60)	-		17c	E-208
45-209	SK701	1	不明	3	6		4	-	-	26.40	-			E-209
45-210	SK701	1	美濃	3	1		1	-	5.60	25.90	14.90		鉄絵、17c	E-210
45-211	SK701	1	美濃	3	1		1	-	5.75	(30.00)	16.80		鉄絵、銅緑釉流し17c	E-211
45-212	SK701	1	美濃	3	1		1	-	4.60	23.30	13.90		17c	E-212
45-213	SK701	1	美濃	3	1		1	-	7.50	29.90	14.80		鉄絵、銅緑釉流し、17c	E-213
46-214	SK701	1	美濃	3	2		1	-	7.70	30.10	15.80		志野織部、鉄絵、17c	E-214
46-215	SK701	1	美濃?	4	8		2	-	-	-	14.00			E-215
46-216	SK701	1	肥前	1	2		3	-	6.70	9.30	4.80		1640~1650	E-216
46-217	SK701	1	肥前	1	2		3	-	4.70	8.20	3.20			E-217
46-218	SK701	1	肥前	1	2		3	-	-	(10.90)	-		1650~1670	E-218
46-219	SK701	1	肥前	1	2		3	-	7.70	(9.80)	4.40			E-219
46-220	SK701	1	中国(福建省)	3	1		7	-	2.10	-	6.80		呉須赤、1590~1630	E-220
46-221	SK701	1	肥前	1	2		3	-	7.60	(15.30)	5.50		1655~1660	E-221
46-222	SK701	1	肥前	1	6		6	-	6.40	(8.00)	4.10		1630年代	E-222
46-223	SK701	1	土器	2	1		5	-	1.50	(7.30)	4.00			E-223
46-224	SK701	1	土器	2	1		5	-	1.65	7.85	5.20			E-224
46-225	SK701	1	土器	2	1		5	-	2.35	(10.20)	6.30			E-225
46-226	SK701	1	土器	2	1		5	5,6,7	2.05	10.60	6.10			E-226
46-227	SK701	1	土器	2	1		5	-	2.35	10.60	5.80			E-227
46-228	SK701	1	土器	2	1		5	7	2.15	(11.10)	6.00			E-228
46-229	SK701	1	土器	2	1		5	-	2.00	10.70	8.00			E-229
46-230	SK701	1	土器	2	1		5	7	2.25	(11.00)	5.90			E-230
46-231	SK701	1	土器	2	1		5	7	2.30	(11.00)	5.90			E-231
46-232	SK701	1	土器	2	1		5	5,6	2.60	(13.10)	8.00			E-232
46-233	SK701	1	土器	2	1		5	-	3.00	(14.30)	8.00			E-233
46-234	SK701	1	土器	2	1		5	7	3.00	14.50	8.60			E-234
47-235	SK701	1	土器	2	1		5	5,6,7	2.90	(13.90)	8.00			E-235
47-236	SK701	1	土器	2	1		5	-	3.00	14.60	9.00			E-236
47-237	SK701	1	土器	2	2		5	-	1.15	3.95	-			E-237
47-238	SK701	1	土器	2	2		5	-	1.00	4.05	-			E-238
47-239	SK701	1	土器	5	2		5	6	-	(17.40)	-			E-239
47-240	SK701	1	土器	5	3		5	5,6,7	-	(28.90)	-			E-240
47-241	SK701	1	土器	5	3		5	6,7	-	(27.30)	-			E-241
47-242	SK701	1	土器	8	1		5	-	8.60	5.20	3.30			E-242
47-243	SK701	1	土器	8	1		5	-	8.00	(6.00)	-		輪積	E-243
47-244	SK701	1	土器	8	1		5	-	11.10	(6.10)	4.00			E-244
47-245	SK701	1	瓦						10.00	全長 33.40	幅17.20		丸瓦	E-245

第15表 SK701出土遺物観察表② ※分類数値はV章3節参照



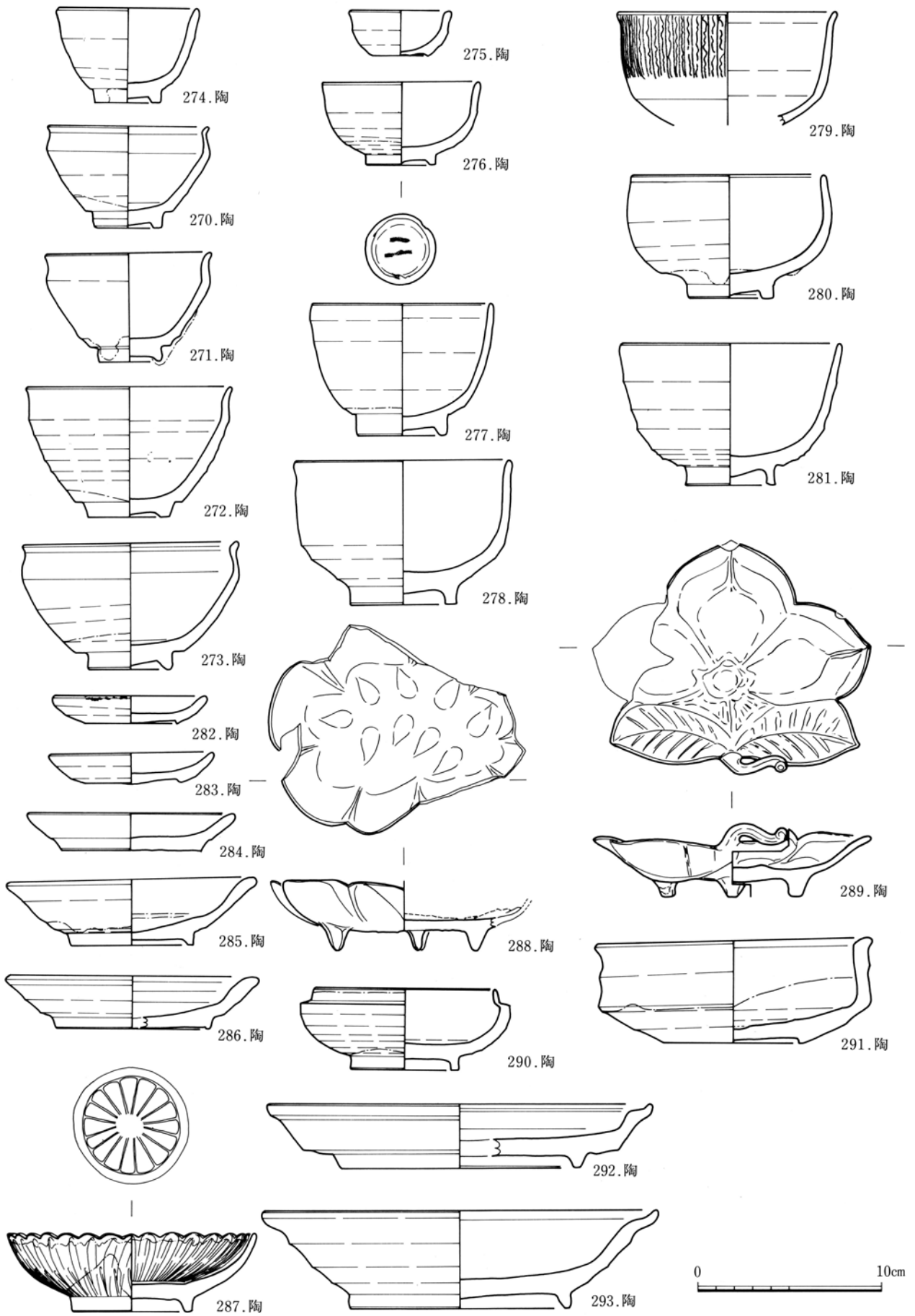
第48図 SK702出土遺物実測図① (250は1/4、その他は1/3)



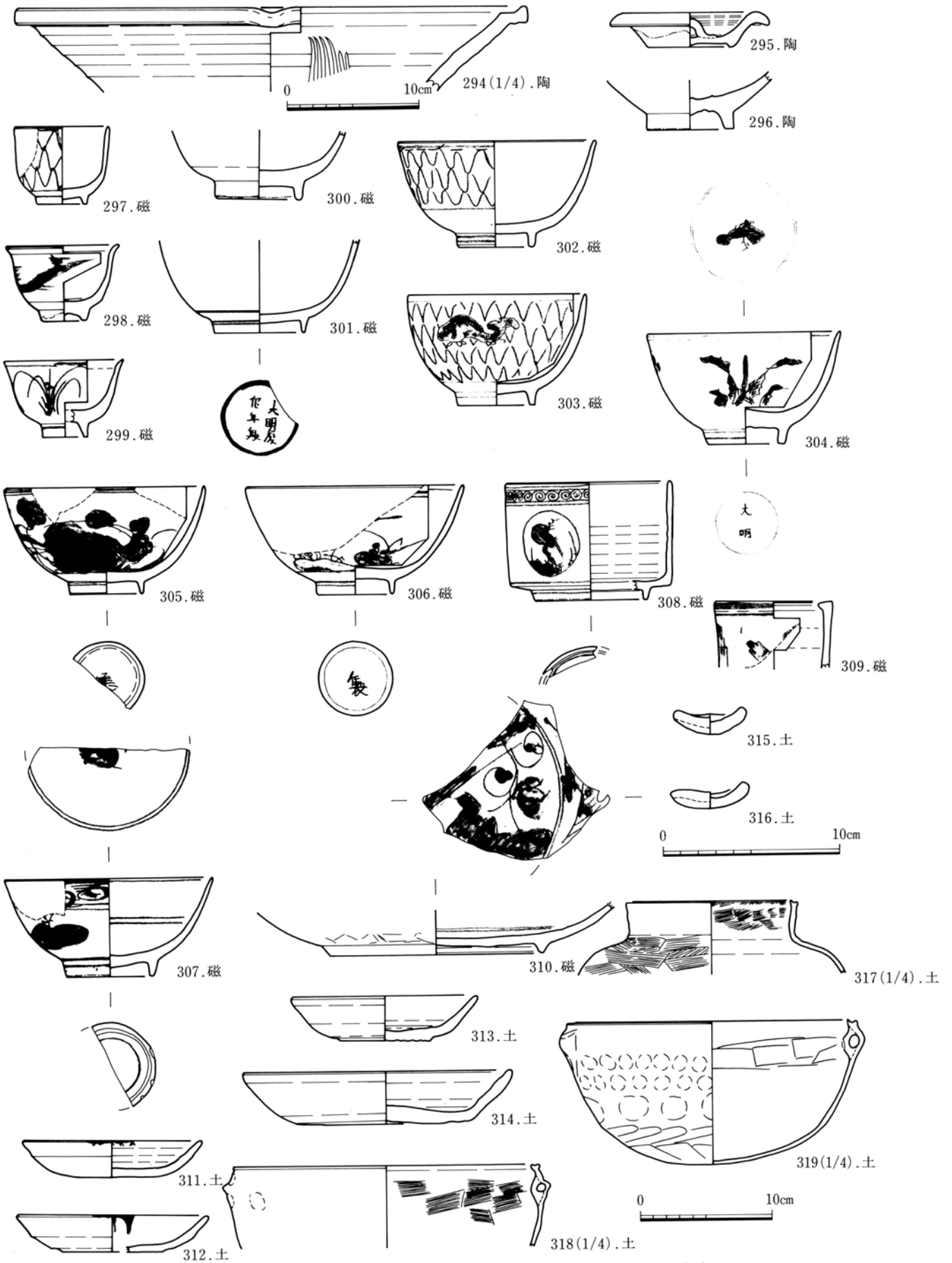
第49図 SK702出土遺物実測図② (259は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
48-246	SK702	1	美濃	1	7		1	9?	3.40	8.20	4.40		17c	E-246
48-247	SK702	1	瀬戸	1	2		1	-	4.90	8.80	3.40		志野、17c	E-247
48-248	SK702	1	瀬戸	1	2		1	-	6.70	(9.90)	(4.60)		志野、17c	E-248
48-249	SK702	1	美濃	2	1		1	-	2.80	12.60	8.00		志野、鉄絵、17c	E-249
48-250	SK702	1	瀬戸	3	3	3	2	-	13.90	(32.40)	22.20		17c	E-250
48-251	SK702	1	肥前	1	3		3	-	7.70	(10.10)	(5.80)			E-251
49-252	SK702	1	土器	2	1		5	7	2.70	(10.60)	7.40			E-252
49-253	SK702	1	土器	2	1		5	5,6,7	2.30	(10.80)	5.60			E-253
49-254	SK702	1	土器	2	1		5	-	2.40	(10.60)	5.80			E-254
49-255	SK702	1	土器	2	1		5	6	2.55	(11.20)	5.40			E-255
49-256	SK702	1	土器	2	1		5	-	2.00	(12.20)	8.40			E-256
49-257	SK702	1	土器	2	2		5	-	0.80	4.10	3.30			E-257
49-258	SK702	1	土器	2	2		5	-	1.05	3.90	0.90			E-258
49-259	SK702	1	土器	5	3		5	6	-	(23.60)	-			E-259
49-260	SK702	1	土器	8	1		5	-	8.90	5.60	4.00			E-260
49-261	SK702	1	土器	8	1		5	-	8.50	5.20	3.80			E-261
49-262	SK702	1	土器	8	1		5	-	8.50	5.70	3.00			E-262
49-263	SK702	1	土器	8	1		5	-	8.45	5.20	3.40			E-263
49-264	SK702	1	土器	8	2		5	-	1.50	(6.40)	-			E-264
49-265	SK702	1	土器	8	2		5	-	1.40	7.00	-			E-265
49-266	SK702	1	土器	8	2		5	-	1.30	(6.80)	-			E-266
49-267	SK702	1	土器	8	2		5	-	1.60	(7.40)	-			E-267
49-268	SK702	1	常滑	7			9	-	7.10	(19.60)	(10.20)			E-268
49-269	SK702	1	石						1.35	全長14.10	幅6.50		硯	S-269

第16表 SK702出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照

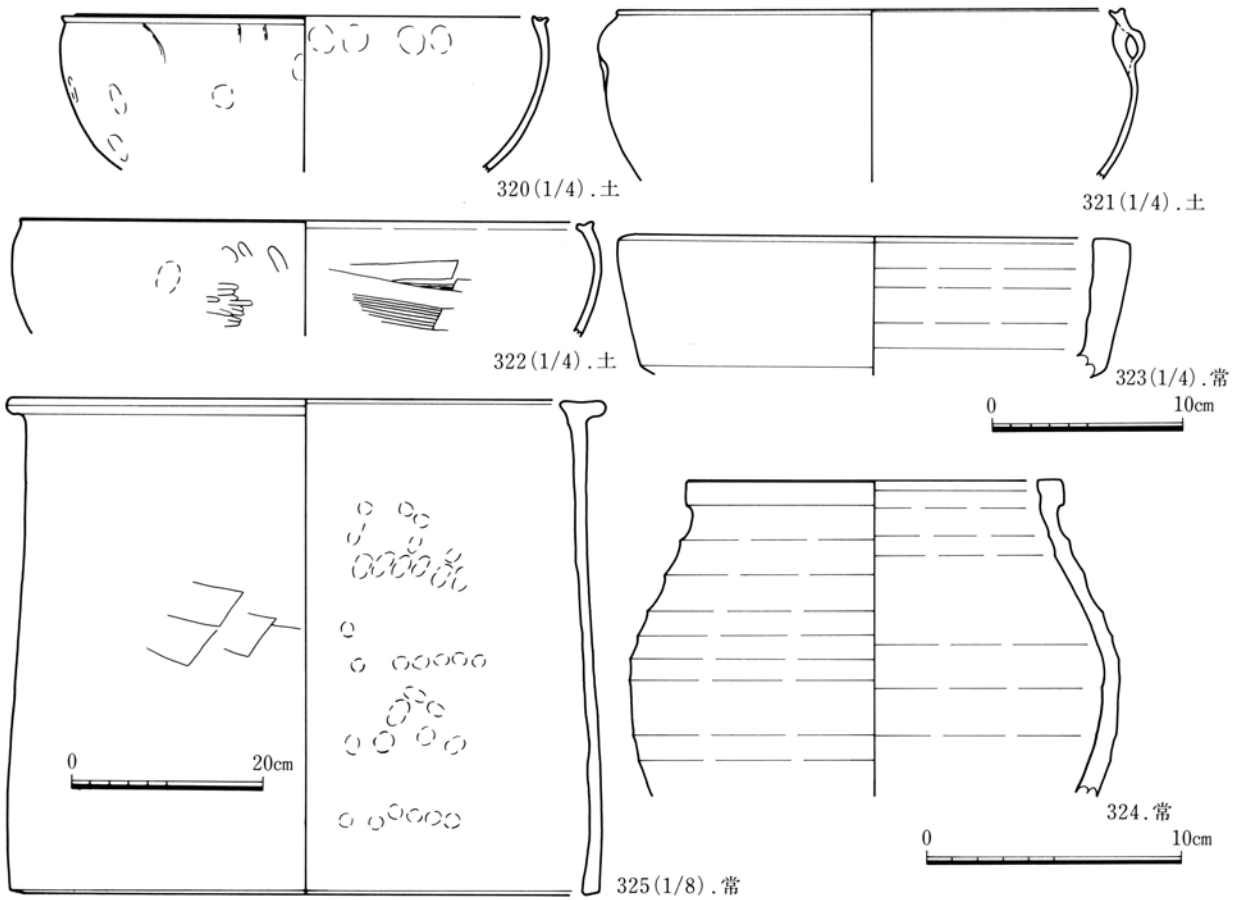


第50图 S K 703出土遗物实测图①



第51図 SK703出土遺物実測図② (294・317~319は1/4、その他は1/3)

第三章 遺物



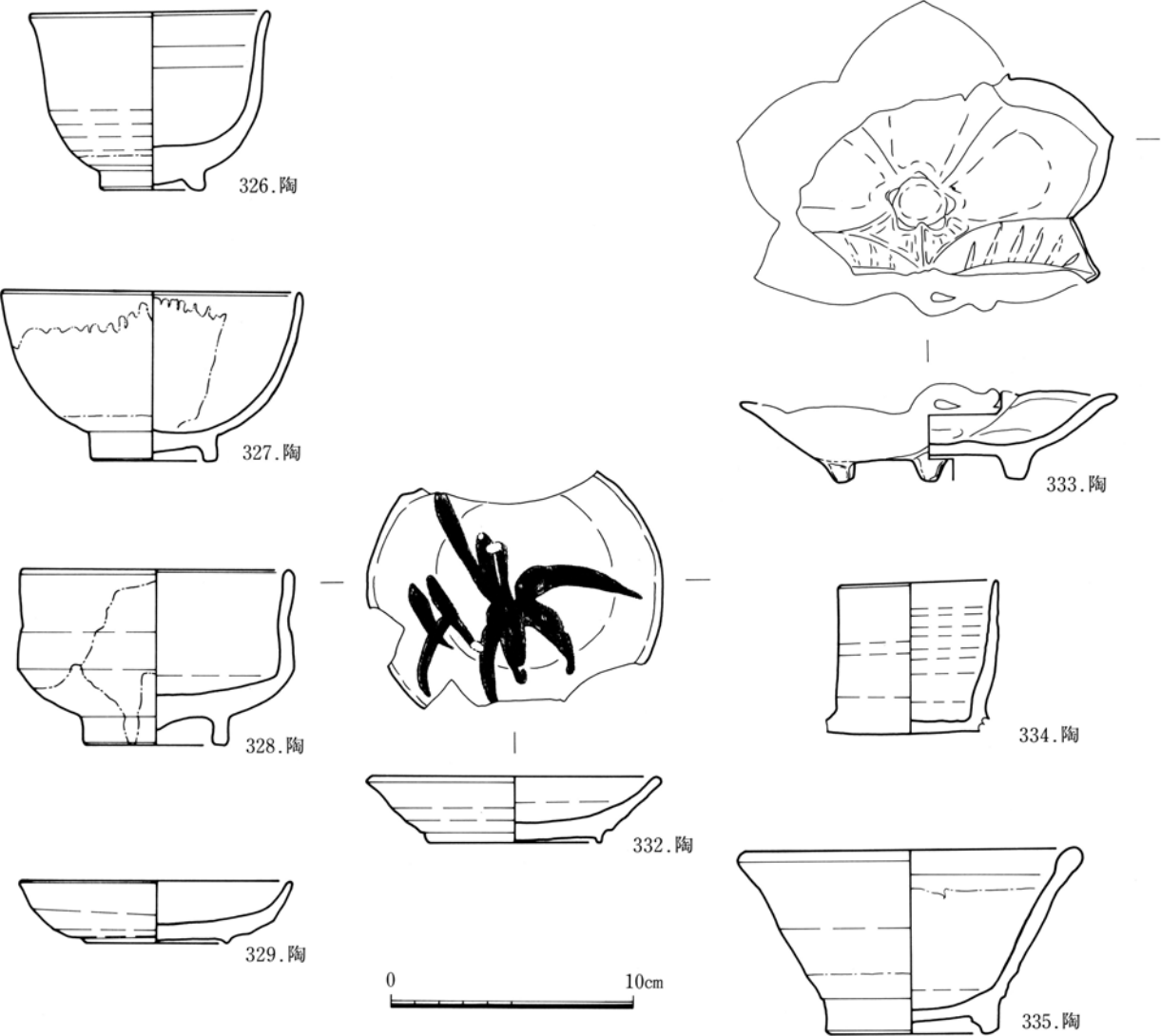
第52図 SK703出土遺物実測図③ (320~323は1/4、325は1/8 324は1/3)

図版No	遺構No	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
50-270	SK703	1	瀬戸	1	1		2	-	5.60	8.60	3.50	8.90	17c	E-270
50-271	SK703	1	美濃	1	1		2	-	5.95	9.10	3.40		17c	E-271
50-272	SK703	1	美濃	1	1		2	-	7.20	(11.20)	4.50		17c	E-272
50-273	SK703	1	瀬戸	1	1		2	-	7.00	11.50	4.40		18c	E-273
50-274	SK703	1	瀬戸	1	2		1	-	5.20	7.80	3.60		17c	E-274
50-275	SK703	1	瀬戸	1	7		1	-	2.55	(5.40)	3.00		17c	E-275
50-276	SK703	1	瀬戸	1	7		1	9	4.60	8.41	3.80		志野、18cか	E-276
50-277	SK703	1	美濃	1	2		2	-	7.20	(9.80)	4.50		17c	E-277
50-278	SK703	1	美濃	1	2		2	-	7.90	11.60	5.80		灰釉流し、18c	E-278
50-279	SK703	1	美濃	1	2		1	-	-	(11.80)	-		鳴海織部、鉄絵、17c	E-279
50-280	SK703	1	美濃	1	2		1	-	6.80	(10.40)	4.60	11.20	17c	E-280
50-281	SK703	1	美濃	1	2		2	-	7.80	(12.00)	4.90		18c	E-281
50-282	SK703	1	瀬戸・美濃	2	1		1	7	1.50	8.30	5.00		志野、18c	E-282
50-283	SK703	1	美濃	2	2		1	-	1.65	9.00	5.00		18c	E-283
50-284	SK703	1	美濃	2	1		1	-	2.05	(11.20)	7.60		17c	E-284
50-285	SK703	1	美濃	2	1		1	-	3.70	13.20	6.60		17c	E-285
50-286	SK703	1	瀬戸	2	1		1	6	2.90	(13.20)	(8.30)		17c	E-286
50-287	SK703	1	瀬戸	2	1		1	-	4.30	(13.60)	6.40		銅緑釉流し、17c~18c中	E-287
50-288	SK703	1	美濃	2	3		1	-	3.90	-	-		17c	E-288
50-289	SK703	1	美濃	2	3		1	-	-	(15.10)	-		17c	E-289
50-290	SK703	1	美濃	3	1		2	-	4.45	4.80	5.80		18c	E-290
50-291	SK703	1	美濃	3	4		2	-	5.85	14.70	7.60		17c	E-291
50-292	SK703	1	瀬戸	3	8		1	-	3.50	(20.70)	(13.00)		17c	E-292
50-293	SK703	1	瀬戸	3	1		1	-	5.40	(21.60)	12.00		17c	E-293
51-294	SK703	1	瀬戸	3	3	3	2	-	7.00	(38.40)	-		片口、17c	E-294
51-295	SK703	1	瀬戸	7	10		2	-	2.00	(9.10)	4.70		18c	E-295
51-296	SK703	1	肥前	1	2		1	-	2.80	-	5.00			E-296
51-297	SK703	1	肥前	1	7		3	-	4.40	(5.20)	2.80		1640~1660	E-297
51-298	SK703	1	肥前	1	7		3	-	4.30	(6.20)	(2.40)		1640年頃	E-298
51-299	SK703	1	肥前	1	7		3	-	4.40	6.70	2.50		1640頃	E-299

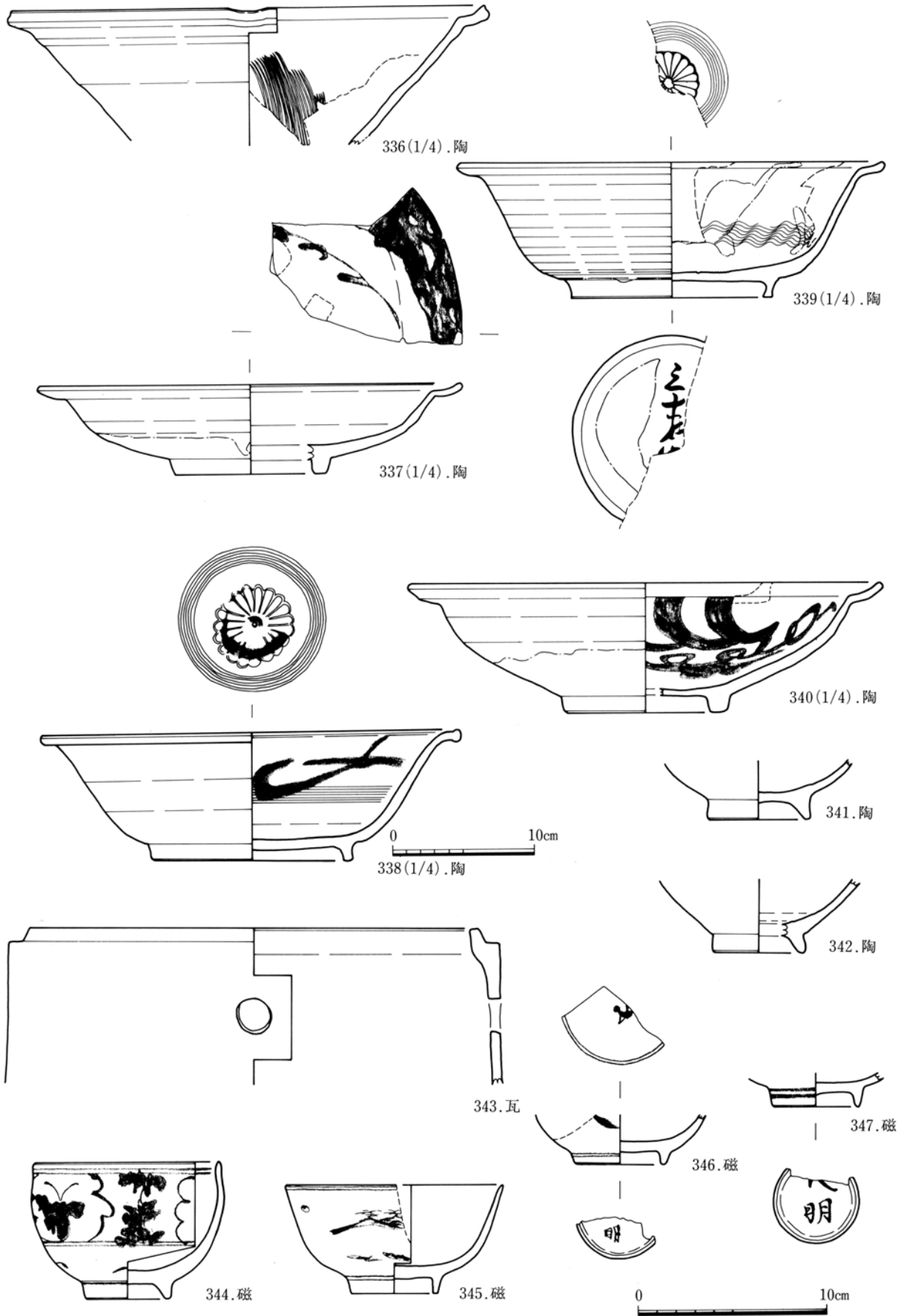
第17表 SK703出土遺物観察表① ※分類数値はV章3節参照

図版No	遺構No	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉素	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
51-300	SK703	1	肥前	1	2		7	-	-	-	4.70	-	1640年代	E-300
51-301	SK703	1	肥前	1	2		3	-	5.30	-	5.00	-	1650~1670	E-301
51-302	SK703	1	肥前	1	2		3	-	6.10	(11.00)	(4.20)	-	1650~1670	E-302
51-303	SK703	1	肥前	1	2		3	-	6.50	10.20	4.40	-	1350~1660	E-303
51-304	SK703	1	肥前	1	2		3	-	6.40	11.10	4.40	-	1640~1650	E-304
51-305	SK703	1	肥前	1	2		3	-	6.10	(11.20)	4.20	-	1650~1670	E-305
51-306	SK703	1	肥前	1	2		3	-	6.30	(12.40)	4.20	-	1660~1670	E-306
51-307	SK703	1	中国(景德镇)	1	2		3	-	5.60	(11.70)	(4.90)	-	1590~1630	E-307
51-308	SK703	1	肥前	1	3		3	-	6.70	(9.20)	(6.30)	-	1630~1640	E-308
51-309	SK703	1	肥前	3	4		3	-	-	(6.60)	-	-	香炉、鉄釉施文、1630~1640	E-309
51-310	SK703	1	中国(福建省)	3	8		3	-	-	-	(12.10)	-	1590~1630	E-310
51-311	SK703	1	土器	2	1		5	7	2.10	(10.00)	4.20	-		E-311
51-312	SK703	1	土器	2	1		5	7	2.10	(10.60)	5.60	-		E-312
51-313	SK703	1	土器	2	1		5	-	2.60	10.30	5.20	-		E-313
51-314	SK703	1	土器	2	1		5	6	3.00	(15.10)	10.10	-		E-314
51-315	SK703	1	土器	2	2		5	-	1.40~1.50	3.60	-	-		E-315
51-316	SK703	1	土器	2	2		5	-	1.10~1.60	3.90	-	-		E-316
51-317	SK703	1	土器	5	2		5	6	-	13.00	-	-		E-317
51-318	SK703	1	土器	5	3		5	5,6	-	(23.10)	-	-		E-318
51-319	SK703	1	土器	5	3		5	5,6,7	11.00	(22.00)	-	-		E-319
52-320	SK703	1	土器	5	3		5	6	-	(23.90)	-	-		E-320
52-321	SK703	1	土器	5	3		5	6	-	(26.40)	-	(28.70)		E-321
52-322	SK703	1	土器	5	3		5	5,6	6.10	(31.00)	-	-		E-322
52-323	SK703	1	常滑	7			9	-	-	(23.30)	-	-		E-323
52-324	SK703	1	常滑	7			9	-	12.50	(14.60)	-	-		E-324
52-325	SK703	1	常滑	6			10	-	52.15	31.80	58.80	-	底無し	E-325

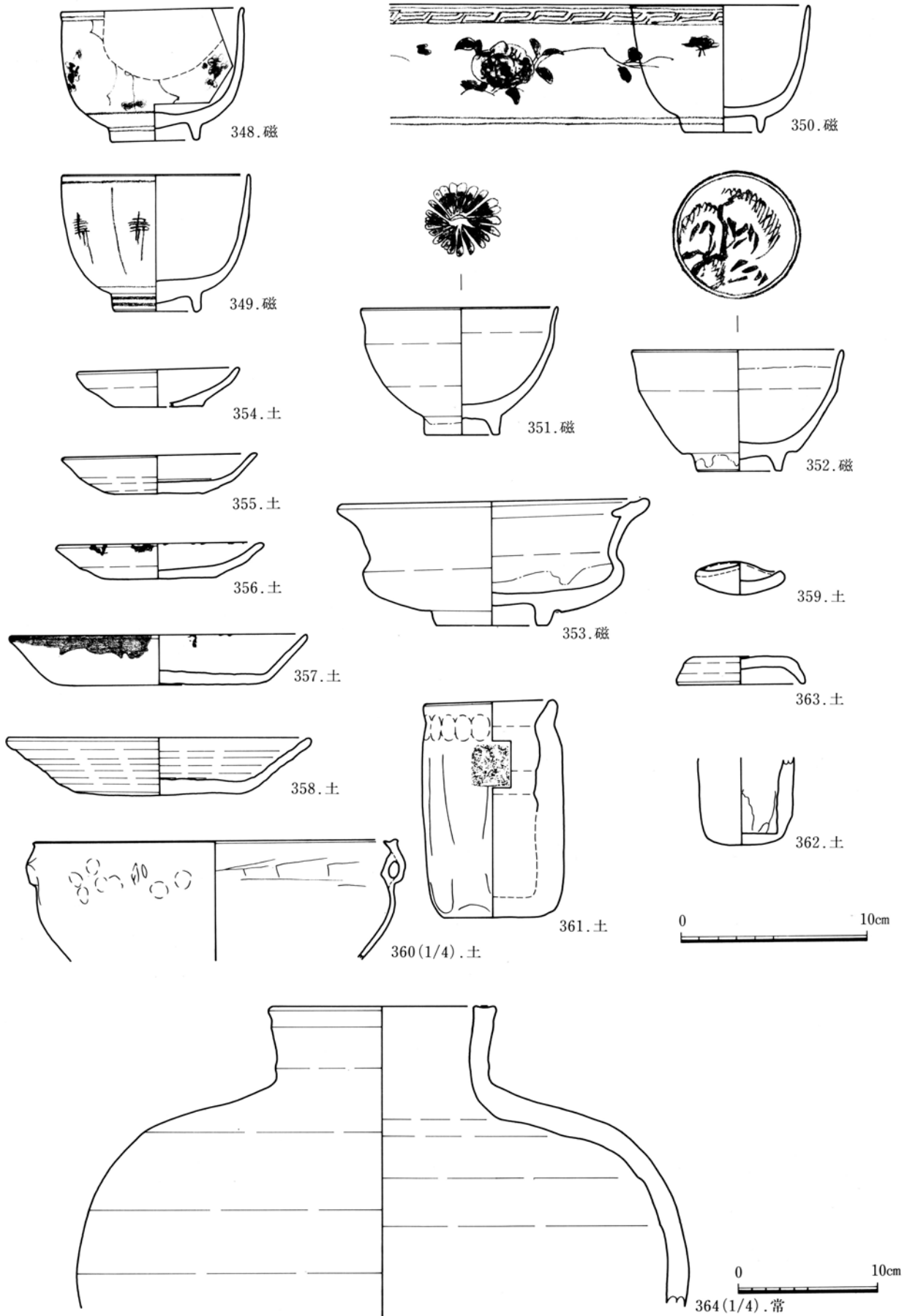
第18表 SK703出土遺物観察表② ※分類数値はV章3節参照



第53図 SK704出土遺物実測図①

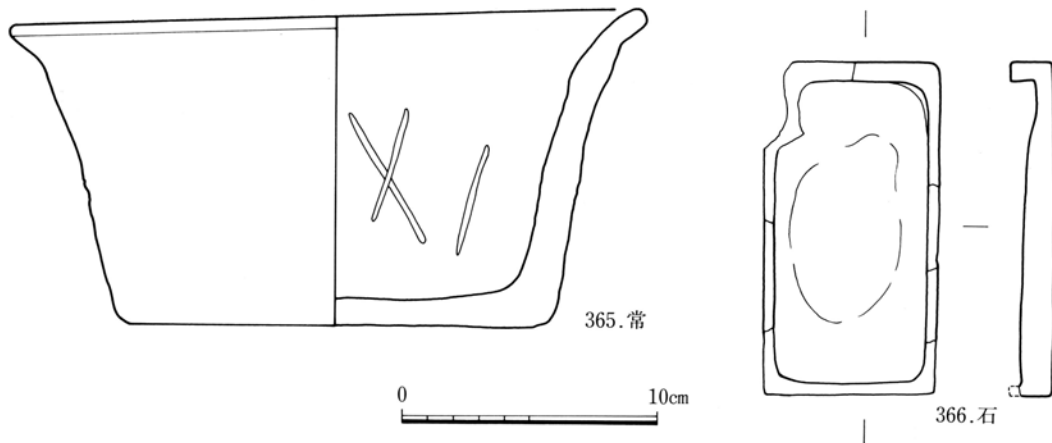


第54図 SK704出土遺物実測図② (336~340は1/4、その他は1/3)



第55図 SK704出土遺物実測図③ (360・364は1/4、その他は1/3)

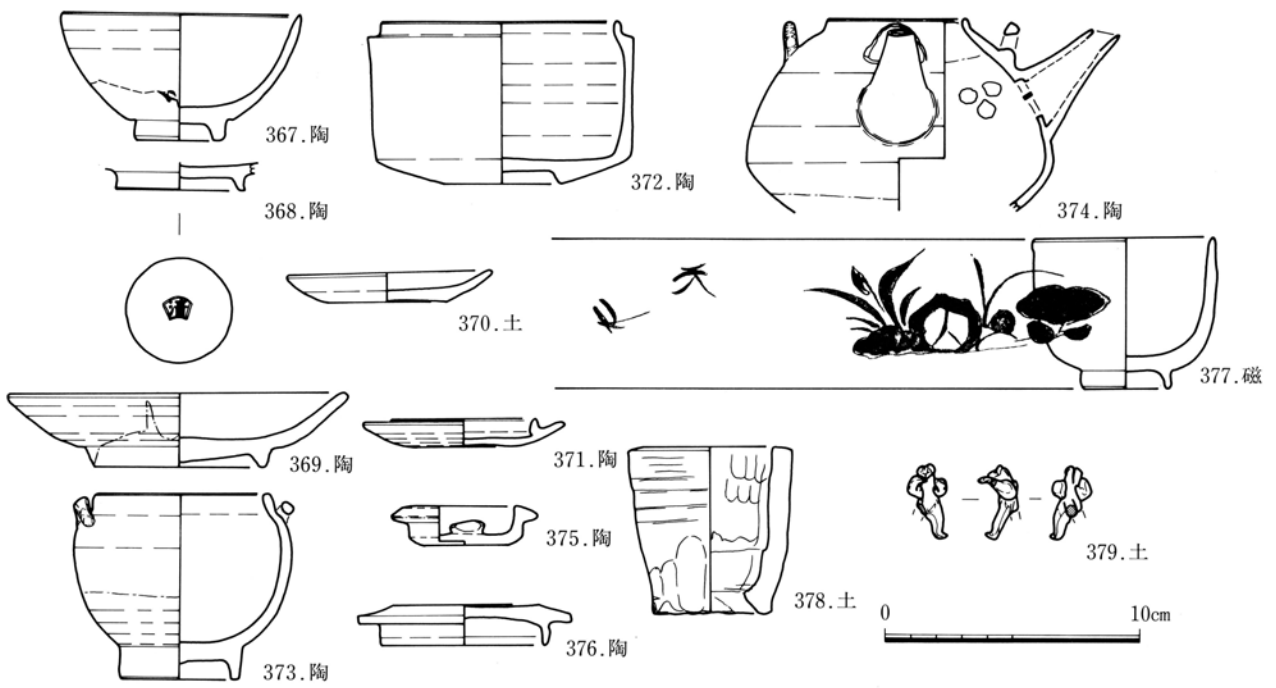
第三章 遺物



第56図 SK704出土遺物実測図④

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
53-326	SK704	1	瀬戸	1	2		1	-	7.40	9.70	4.10		17c	E-326
53-327	SK704	1	瀬戸	1	2		1,2	-	7.00	12.20	5.00		灰・鉄釉流し、17c	E-327
53-328	SK704	1	美濃	1	3		1,2	-	7.80	11.00	5.80		17c	E-328
53-329	SK704	1	美濃	2	1		1	-	2.60	11.10	5.80		志野、17c	E-329
53-332	SK704	1	瀬戸	2	1		1	-	2.70	11.70	7.10		鉄絵、17c	E-332
53-333	SK704	1	美濃	2	3		1	-	-	(14.90)	-		17c	E-333
53-334	SK704	1	美濃	7	4		1	-	6.40	-	-		17c	E-334
53-335	SK704	1	美濃	3	3	10	2	-	7.70	(13.40)	6.40		煙硝描鉢、17c	E-335
54-336	SK704	1	瀬戸	3	3	3	2	-	-	(33.30)	-		17c	E-336
54-337	SK704	1	肥前	3	1		1	-	6.40	(29.60)	10.70		鉄絵、銅緑釉流し	E-337
54-338	SK704	1	瀬戸	3	1		1	-	9.10	29.20	13.90		陰刻、印花、銅緑釉流し、17c	E-338
54-339	SK704	1	美濃	3	2		1	9	9.60	(30.00)	14.20		陰刻、印花、銅緑釉流し、17c	E-339
54-340	SK704	1	肥前	3	1		1	-	9.30	(33.10)	10.80		鉄絵、銅緑釉施文	E-340
54-341	SK704	1	肥前系	1	2		1	-	-	-	5.20			E-341
54-342	SK704	1	肥前	1	2		1	-	-	-	4.80			E-342
54-343	SK704	1	瓦器	7	4		5	6	-	(23.80)	-			E-343
54-344	SK704	1	肥前(有田)	1	2		3	-	7.30	(9.80)	4.40		1630~1640	E-344
54-345	SK704	1	肥前	1	2		3	-	5.80	(11.40)	4.60		1650~1670	E-345
54-346	SK704	1	肥前	1	2		3	-	-	-	4.80		1650~1660	E-346
54-347	SK704	1	肥前	1	2		3	-	-	-	4.60		1650~1660	E-347
55-348	SK704	1	肥前	1	2		3	-	7.10	(9.80)	4.70		1650~1660	E-348
55-349	SK704	1	肥前	1	2		3	-	7.40	(10.00)	4.50		1650~1660	E-349
55-350	SK704	1	肥前	1	2		3	-	6.90	9.50	4.40		1640~1660	E-350
55-351	SK704	1	肥前	1	1		6,3	-	6.90	(10.50)	4.00		1630~1640	E-351
55-352	SK704	1	肥前(有田)	1	1		6,3	-	6.50~6.60	11.40	4.60		谷窯、1630~1640	E-352
55-353	SK704	1	肥前	3	4		6	-	6.60~6.85	16.80	6.00		香炉、1630~1640	E-353
55-354	SK704	1	土器	2	1		5	6	2.00	8.60	4.80			E-354
55-355	SK704	1	土器	2	1		5	-	2.20	10.00	4.80			E-355
55-356	SK704	1	土器	2	1		5	6,7	1.90	10.80	5.60			E-356
55-357	SK704	1	土器	2	1		5	6,7	2.70	(15.90)	10.00			E-357
55-358	SK704	1	土器	2	1		5	-	3.30	16.00	9.00			E-358
55-359	SK704	1	土器	2	2		5	-	1.80	4.40	-			E-359
55-360	SK704	1	土器	5	3		5	6	-	(25.80)	-			E-360
55-361	SK704	1	土器	8	1		5	7,6	11.50~11.70	6.90	5.10		刻印「ミなと藤左エ門」、内面焦げ	E-361
55-362	SK704	1	土器	8	1		5	-	-	-	1.50			E-362
55-363	SK704	1	土器	8	2		5	-	1.50	(6.70)	-			E-363
55-364	SK704	1	常滑	7			9	-	21.80	16.20	-			E-364
56-365	SK704	1	常滑	7			10	6	22.20	24.80	15.60			E-365
56-366	SK704	1	石						1.70	全長 13.20	幅6.90		硯	S-366

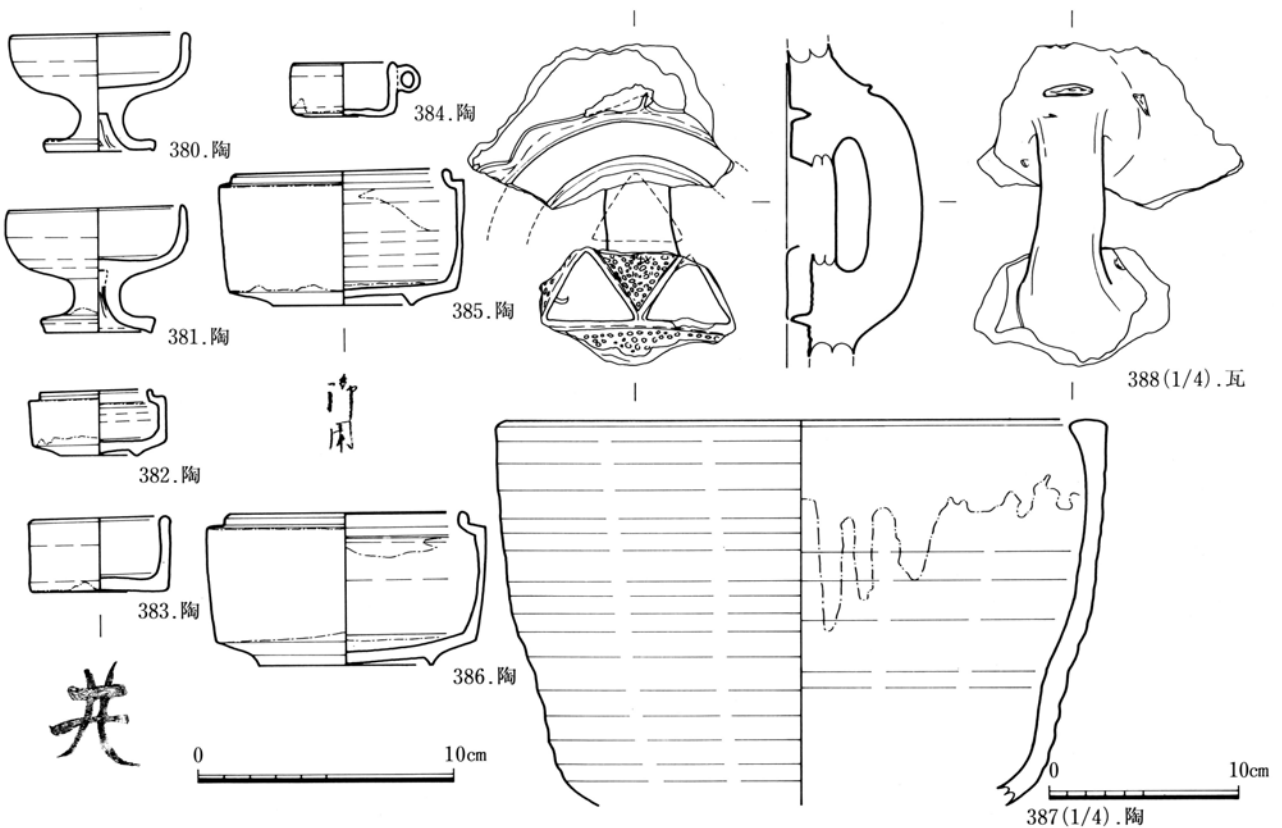
第19表 SK704出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



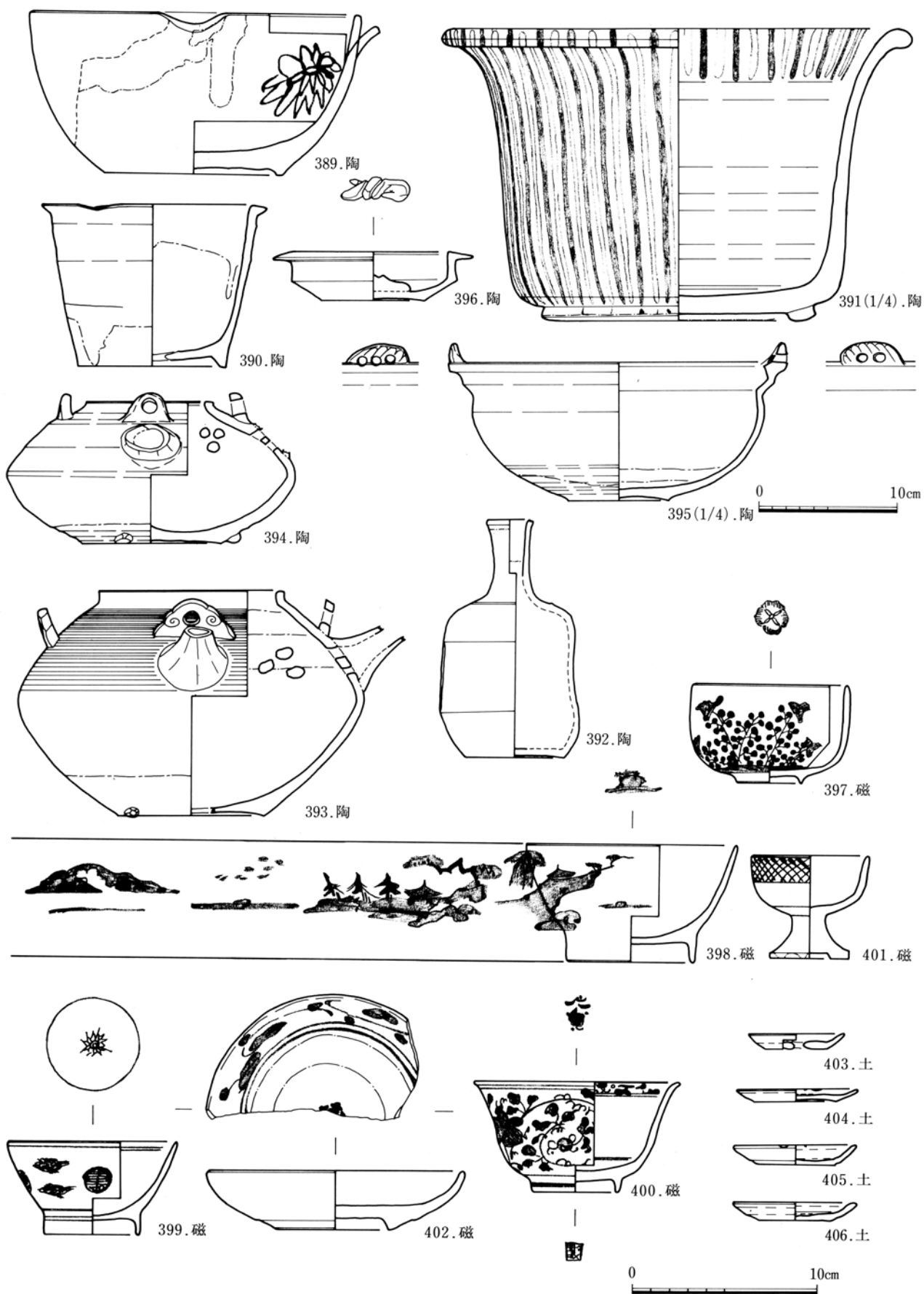
第57図 S D101出土遺物実測図

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
57-367	SD101	3	瀬戸		1	2	1	-	5.00	(9.20)	3.20			E-367
57-368	SD101	3	瀬戸		1		2	-	-	-	5.10		18c	E-368
57-369	SD101	3	美濃		1	2	1	7	3.00	(13.10)	6.70		18c	E-369
57-370	SD101	3	土器		2	1	5	-	1.20	7.80	4.60			E-370
57-371	SD101	3	美濃		2	1	2	-	1.10	(7.60)	4.00			E-371
57-372	SD101	3	不明		3	4	1	-	6.40	9.20	4.50			E-372
57-373	SD101	3	瀬戸		4	2	1	-	7.30	6.60	4.60			E-373
57-374	SD101	3	瀬戸		4	6	2	-	-	5.40	-		18c後~19c中	E-374
57-375	SD101	3	瀬戸		7	10	2	-	1.50	5.80	3.40			E-375
57-376	SD101	3	瀬戸		7	10	1	-	1.60	6.30	-	8.40		E-376
57-377	SD101	3	関西系?		1	7	3	-	6.10	7.00	3.40			E-377
57-378	SD101	3	土器		8	1	5	-	6.60	5.00	4.60			E-378
57-379	SD101	3		人形									第39表参照	E-379

第20表 S D101出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



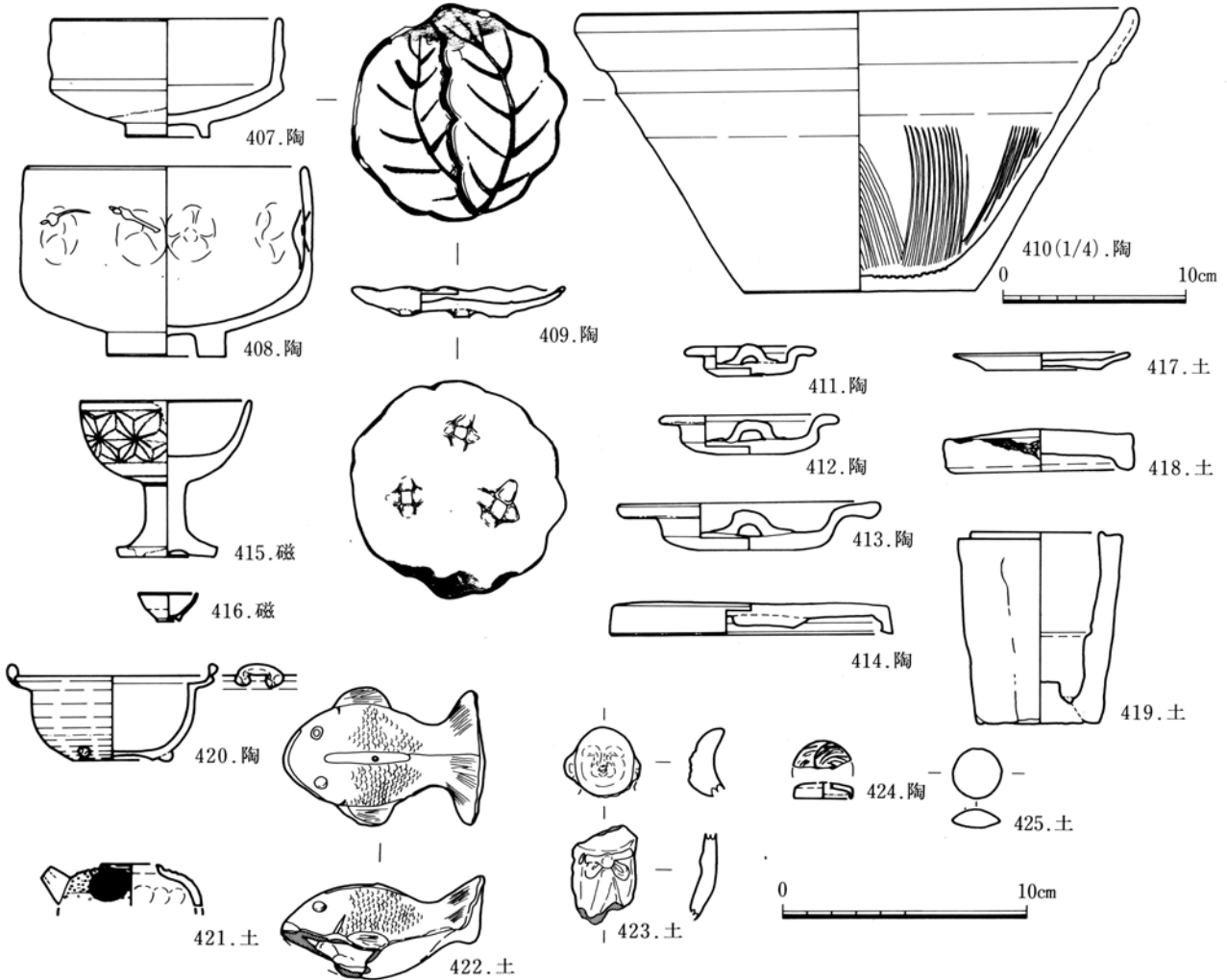
第58図 S K316出土遺物実測図① (387・388は1/4、その他は1/3)



第59図 SK316出土遺物実測図② (391・395は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
58-380	SK316	2	美濃	1	6		1	-	4.60	6.80	4.20		18c後~19c中	E-380
58-381	SK316	2	瀬戸	1	6		1	-	5.00	6.80	4.10		18c後	E-381
58-382	SK316	2	美濃	3	9		1	-	2.60	4.20	3.00	5.30	18c後~19c中か	E-382
58-383	SK316	2	美濃	3	9		1	9	2.95	5.10	5.10		18c後~19c中	E-383
58-384	SK316	2	美濃	3	9		1	-	2.10	3.90	3.10	4.20	18c後~19c中	E-384
58-385	SK316	2	美濃	3	4		1	9	5.30	8.20	5.50	9.60	18c後~19c中	E-385
58-386	SK316	2	瀬戸?	3	4		1	-	6.00	9.10	6.80	10.90	18c後~19c中	E-386
58-387	SK316	2	美濃	3	1		1	-	-	30.60	-	-	鉄釉流し	E-387
58-388	SK316	2	瓦						-	-	-	-	「三鱗」紋瓦	E-388
59-389	SK316	2	瀬戸?	3	1		1	-	8.70	17.50	9.50	18.90	鉄絵、銅緑釉流し(織部)、18c後~19c中	E-389
59-390	SK316	2	瀬戸(赤津)	3	7		2	3	8.80	12.15	7.90		18c後~19c中	E-390
59-391	SK316	2	瀬戸	3	1		1	-	21.30	32.10	19.70		鉄・呉須絵	E-391
59-392	SK316	2	美濃	4	8		2	2	12.90	-	5.30	8.00		E-392
59-393	SK316	2	美濃?	4	6		1	6	12.25	9.90	7.80	18.70	18c後~19c中	E-393
59-394	SK316	2	瀬戸?	4	6		2	5,6	8.10	6.80	7.40		18c後	E-394
59-395	SK316	2	美濃	7	9		2	5,6	11.50	24.40	7.20		18c後~19c中	E-395
59-396	SK316	2	不明	7	10		1	-	2.60	10.80	5.70			E-396
59-397	SK316	2	肥前系	1	2		3	-	5.35	8.20	3.40		内外面染付、1780~19c前	E-397
59-398	SK316	2	肥前	1	2		3	1	6.40	11.40	6.80		内外面染付、1780~19c前	E-398
59-399	SK316	2	肥前系	1	5		3	1	5.10	9.00	5.00		内外面染付、1780~19c前	E-399
59-400	SK316	2	瀬戸	1	2		3	-	6.00	11.20	4.50		内外面染付、1820~幕末	E-400
59-401	SK316	2	肥前	1	6		3	-	5.60	6.20	4.20		1780~19c前	E-401
59-402	SK316	2	肥前(波佐見)	2	1		3	-	3.70	(13.80)	5.80		18c後	E-402
59-403	SK316	2	土器	2	1		5	3	0.85	5.10	3.20			E-403
59-404	SK316	2	土器	2	1		5	6	0.70	6.40	4.40			E-404
59-405	SK316	2	土器	2	1		5	6	1.10	6.50	4.10			E-405
59-406	SK316	2	土器	2	1		5	-	1.00	6.40	3.90			E-406

第21表 SK316出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照

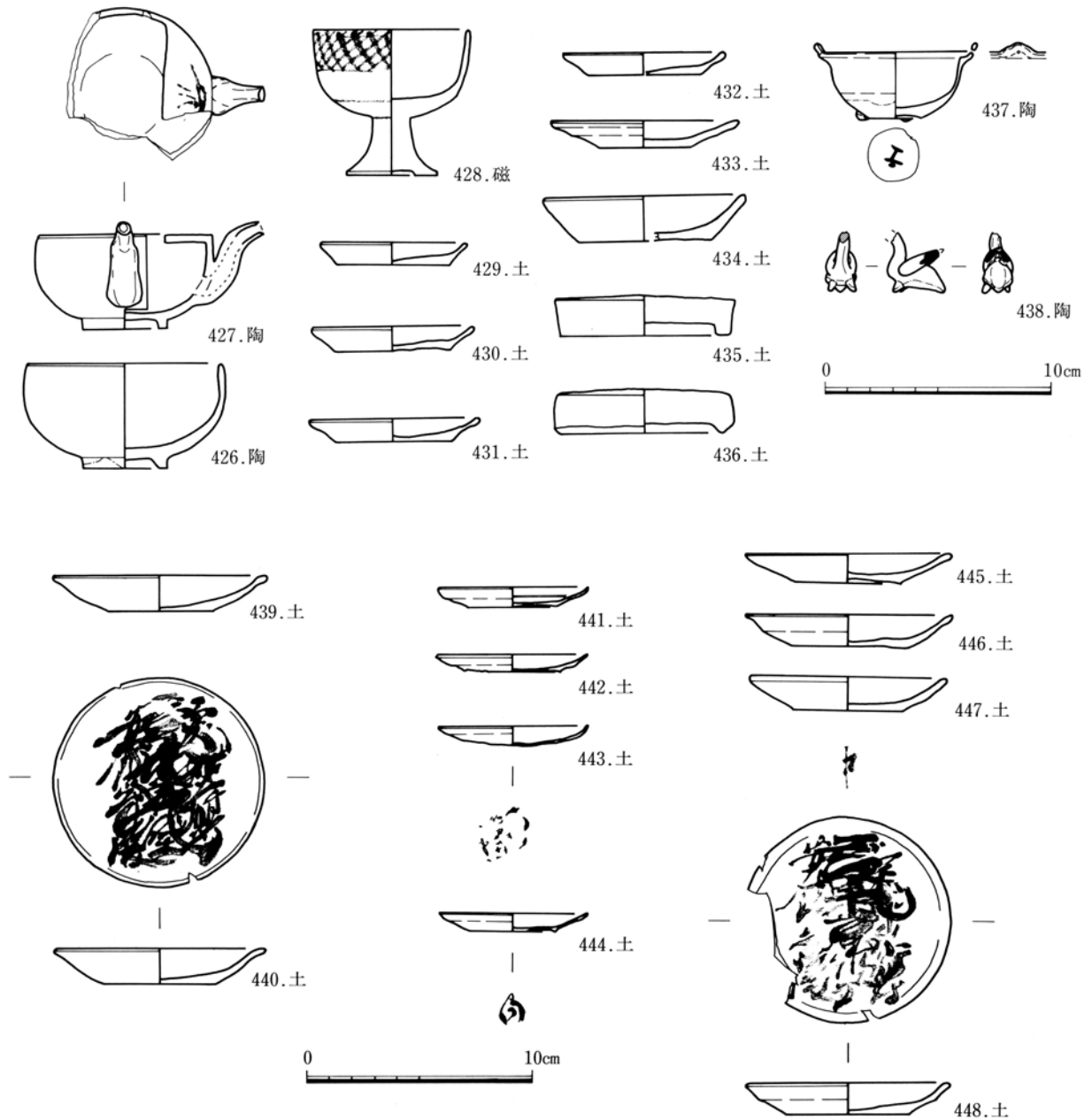


第60図 SK320出土遺物実測図 (410は1/4、その他は1/3)

第III章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
60-407	SK320	2	瀬戸	1	3		1	-	4.80	(9.20)	3.40		18c後	E-407
60-408	SK320	2	瀬戸	1	3		2	-	7.80	(11.30)	4.80		18c	E-408
60-409	SK320	2	瀬戸	2	3		1	-	1.20	8.80	4.40		鉄絵、銅緑釉流し(織部)、18c後~19c中	E-409
60-410	SK320	2	瀬戸	3	3	6	2	-	15.50	(30.00)	12.60		18c後~19c中	E-410
60-411	SK320	2	美濃	7	10		1	-	1.30	5.40	2.80		18c後~19c中	E-411
60-412	SK320	2	瀬戸	7	10		1	-	1.60	7.40	3.60		18c後~19c中	E-412
60-413	SK320	2	美濃	7	10		1	-	1.95	10.80	4.60		18c後~19c中	E-413
60-414	SK320	2	美濃	7	10		1	-	1.40	11.60	-		18c後~19c中	E-414
60-415	SK320	2	肥前	1	6		3	-	6.40	(6.80)	3.90		18c後	E-415
60-416	SK320	2	肥前	1	7		7	-	1.10	2.40	0.90		紅皿	E-416
60-417	SK320	2	土器	2	1		5	-	0.70	7.20	4.80			E-417
60-418	SK320	2	土器	8	2		5	7	1.70	7.20	-			E-418
60-419	SK320	2	土器	8	1		5	-	7.90	5.80	4.50	6.70		E-419
60-420	SK320	2	美濃?	7	9		2	-	4.00	7.80	3.20		ミニチュア、18c後~19c中	E-420
60-421	SK320	2		人形									第39表参照	E-421
60-422	SK320	2		人形									第39表参照	E-422
60-423	SK320	2		人形									第39表参照	E-423
60-424	SK320	2		人形									第39表参照	E-424
60-425	SK320	2		人形									第39表参照	E-425

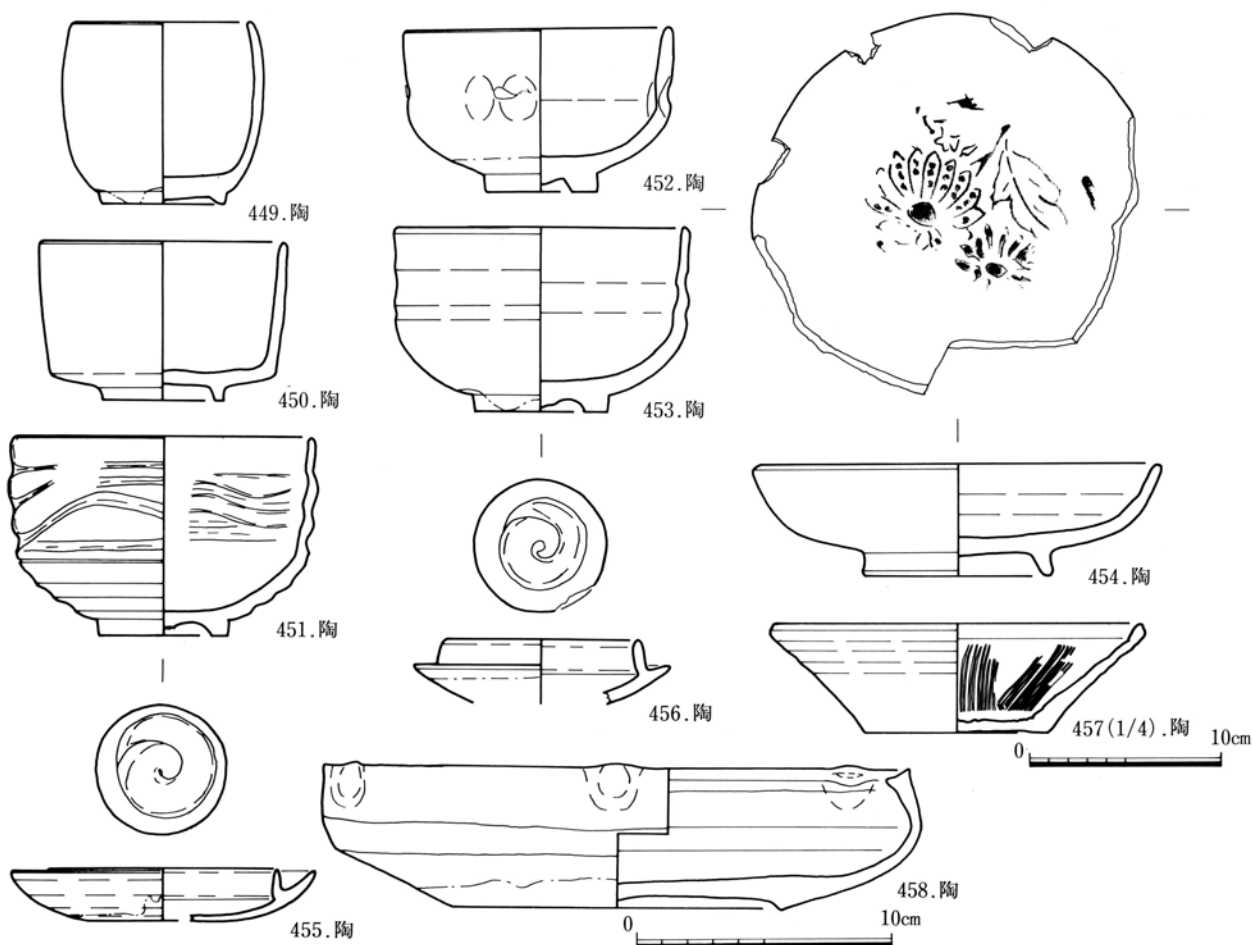
第22表 SK320出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第61図 SK62・SK114・SK116・SK172出土遺物実測図

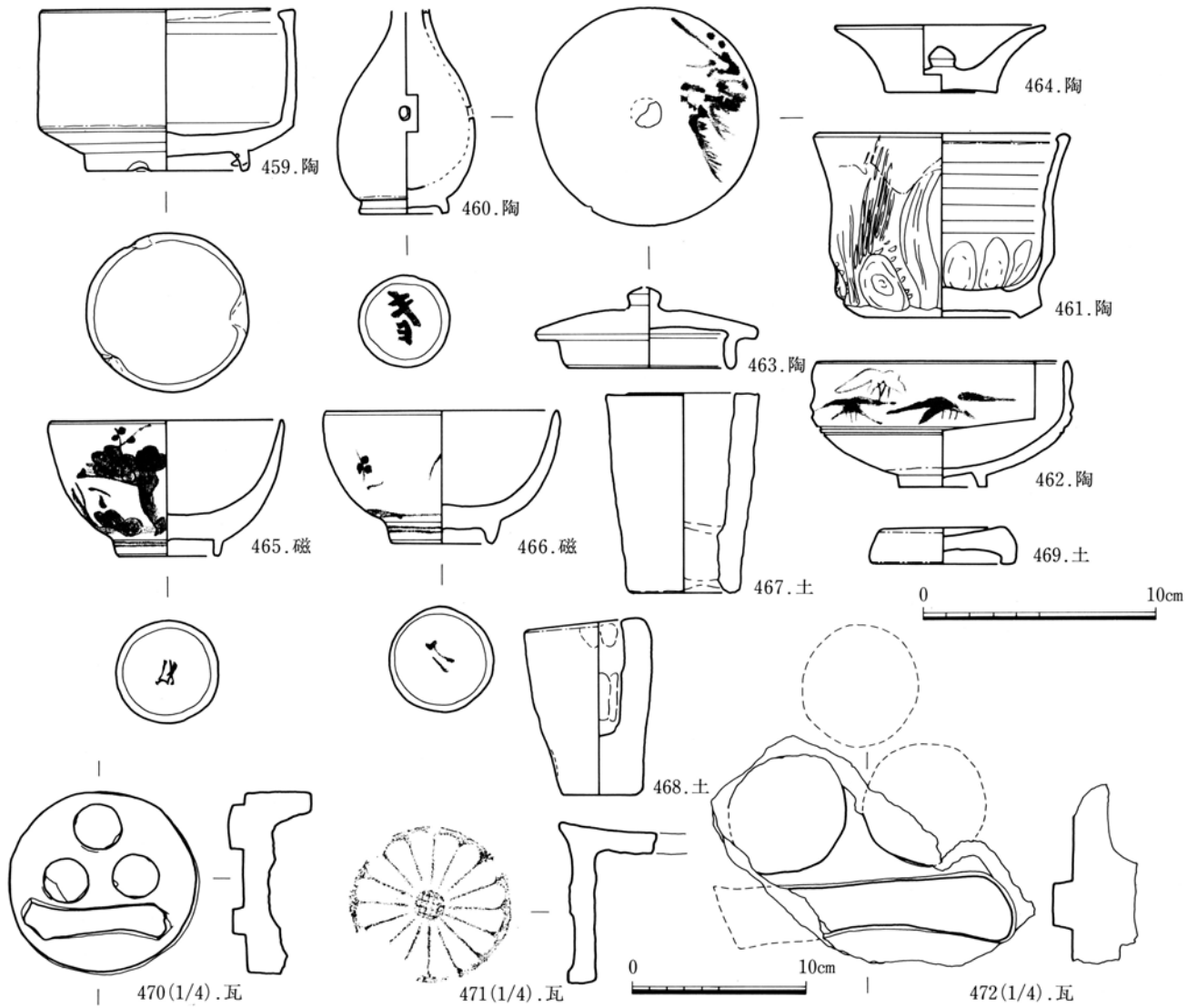
図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
61-426	SK62	2	美濃?	1	2		1	9	4.70	(8.60)	3.80		18c後~19c中	E-426
61-427	SK62	2	瀬戸	4	7		1	-	4.80	(7.80)	3.80		鉄絵, 18c後~19c中	E-427
61-428	SK62	2	肥前	1	6		3	-	6.50	7.00	4.00			E-428
61-429	SK62	2	土器	2	1		5	5	1.00	(6.60)	5.00			E-429
61-430	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.10	(7.00)	5.20			E-430
61-431	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.00	(7.60)	5.00			E-431
61-432	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.00	(7.20)	5.00			E-432
61-433	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.20	(8.40)	4.00			E-433
61-434	SK62	2	土器	2	1		5	-	2.00	(9.00)	5.00			E-434
61-435	SK62	2	土器	8	2		5	-	1.80	7.40	-			E-435
61-436	SK62	2	土器	8	2		5	-	2.00	8.00	-			E-436
61-437	SK62	2		人形									第39表参照	E-437
61-438	SK62	2		人形									第39表参照	E-438
61-439	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.60	9.60	4.70			E-439
61-440	SK62	2	土器	2	1		5	9	1.60	9.40	4.90			E-440
61-441	SK62	2	土器	2	1		5	-	0.90	6.50	3.90			E-441
61-442	SK62	2	土器	2	1		5	9	0.80	6.60	1.90			E-442
61-443	SK62	2	土器	2	1		5	9	0.90	6.60	1.00			E-443
61-444	SK62	2	土器	2	1		5	9	0.80	6.50	3.80			E-444
61-445	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.20~1.50	9.20	4.70			E-445
61-446	SK62	2	土器	2	1		5	-	1.40~1.50	9.20	5.10			E-446
61-447	SK62	2	土器	2	1		5	9	1.50	8.80	5.00			E-447
61-448	SK62	2	土器	2	1		5	9	1.40	9.20	5.40			E-448

第23表 SK62・114・116・172出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第62図 SK201出土遺物実測図① (457は1/4、その他は1/3)

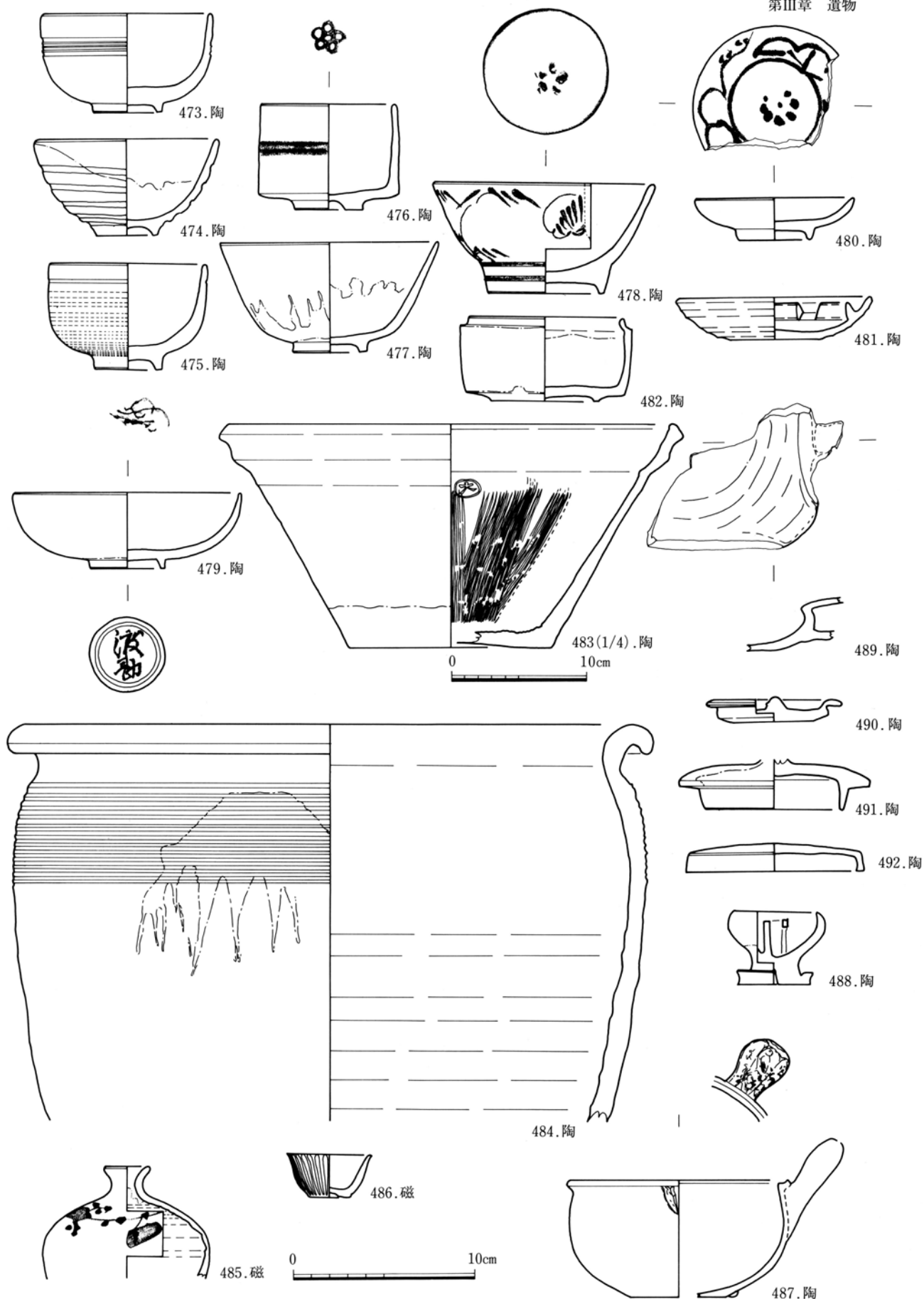
第三章 遺物



第63図 SK201出土遺物実測図② (470~472は1/4、その他は1/3)

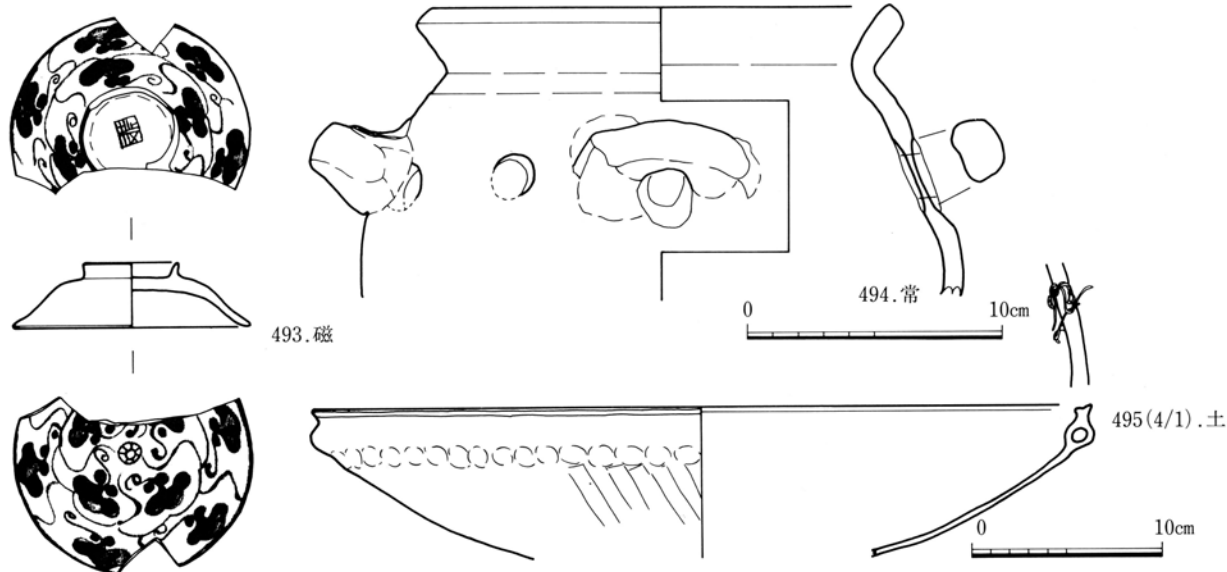
図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	軸葉	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.	
62-449	SK201	1	瀬戸		1	2	1	-	7.20	(7.00)	4.80		18c後~19c中	E-449	
62-450	SK201	1	瀬戸		1	3	1	-	6.30	(9.60)	4.80		18c	E-450	
62-451	SK201	1	美濃?		1	2	2	-	7.90	11.60	5.10		18cか	E-451	
62-452	SK201	1	瀬戸		1	3	2	-	6.40~6.50	10.30	4.40		長石軸施文、18c後~19c中	E-452	
62-453	SK201	1	美濃		1	2	1	-	7.30	(11.40)	5.20		鉄軸流し、18c	E-453	
62-454	SK201	1	瀬戸		3	8	1	-	4.40	(15.60)	7.40		鉄絵、18c後	E-454	
62-455	SK201	1	美濃		2	4	2	-	2.05	(9.00)	6.00	11.90	18c後~19c中	E-455	
62-456	SK201	1	美濃		2	4	1	-	-	(7.60)	-	10.10	18c	E-456	
62-457	SK201	1	瀬戸(赤津)		3	3	7	2	4	-	(19.20)	9.60		18c後~19c中	E-457
62-458	SK201	1	瀬戸		7	6	1	-	5.70	23.00	12.80		18c後~19c中	E-458	
63-459	SK201	1	美濃		3	4	1	6	7.00	10.80	6.80		内面無軸、18c	E-459	
63-460	SK201	1	瀬戸		4	9	1	9	-	-	3.70		18c後~19c中	E-460	
63-461	SK201	1	瀬戸		7	2	1	2	8.00	(10.70)	6.80		口縁鉄軸流し、内面無軸、19c	E-461	
63-462	SK201	1	京都		1	3	1	-	5.50	10.80	3.80		鉄・灰軸絵	E-462	
63-463	SK201	1	瀬戸		7	10	1	-	3.50	9.60	-	9.60	鉄・呉須絵、19c	E-463	
63-464	SK201	1	美濃		7	10	2	-	2.90	9.15	4.80		18c	E-464	
63-465	SK201	1	肥前(波佐見系)		1	2	3	-	5.90	(10.00)	4.30		18c中~末	E-465	
63-466	SK201	1	肥前(波佐見系)		1	2	3	-	5.80	(10.00)	4.40		18c中~末	E-466	
63-467	SK201	1	土器		8	1	5	-	8.70	(5.10)	4.30	6.60		E-467	
63-468	SK201	1	土器		8	1	5	-	7.70	4.70	3.10			E-468	
63-469	SK201	1	土器		8	2	5	-	1.55	6.40	-			E-469	
63-470	SK201	1	瓦						径 10.30	-	-		「三星一文字」紋瓦	E-470	
63-471	SK201	1	瓦						径 9.20	-	-		棟入瓦	E-471	
63-472	SK201	1	瓦						-	-	-		「三星一文字」	E-472	

第24表 SK201出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第64図 S K206出土遺物実測図① (483は1/4、その他は1/3)

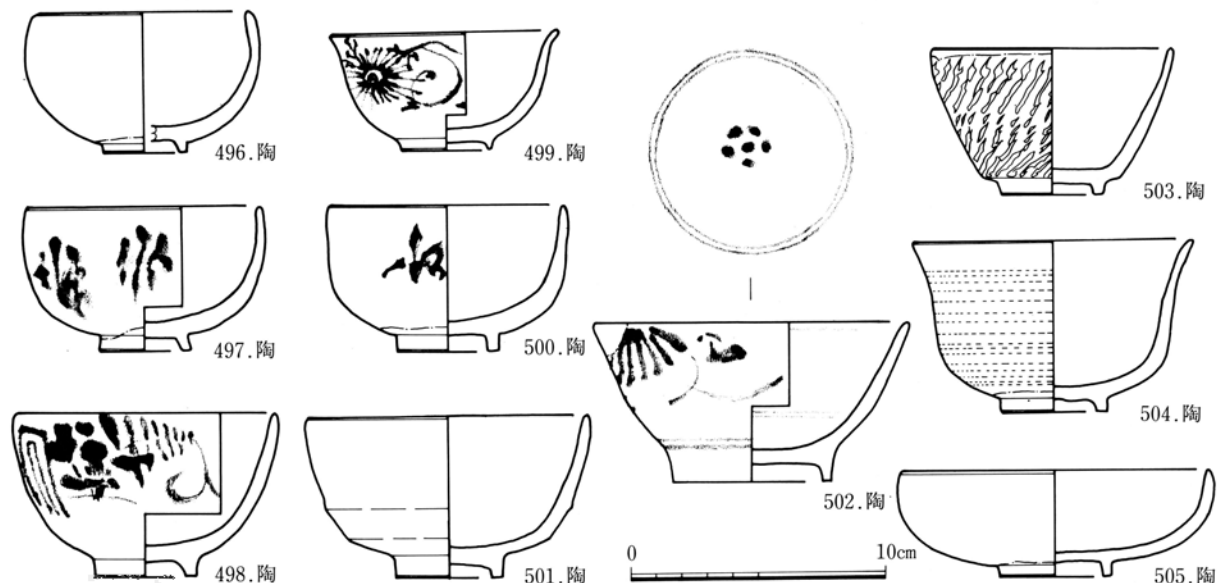
第三章 遺物



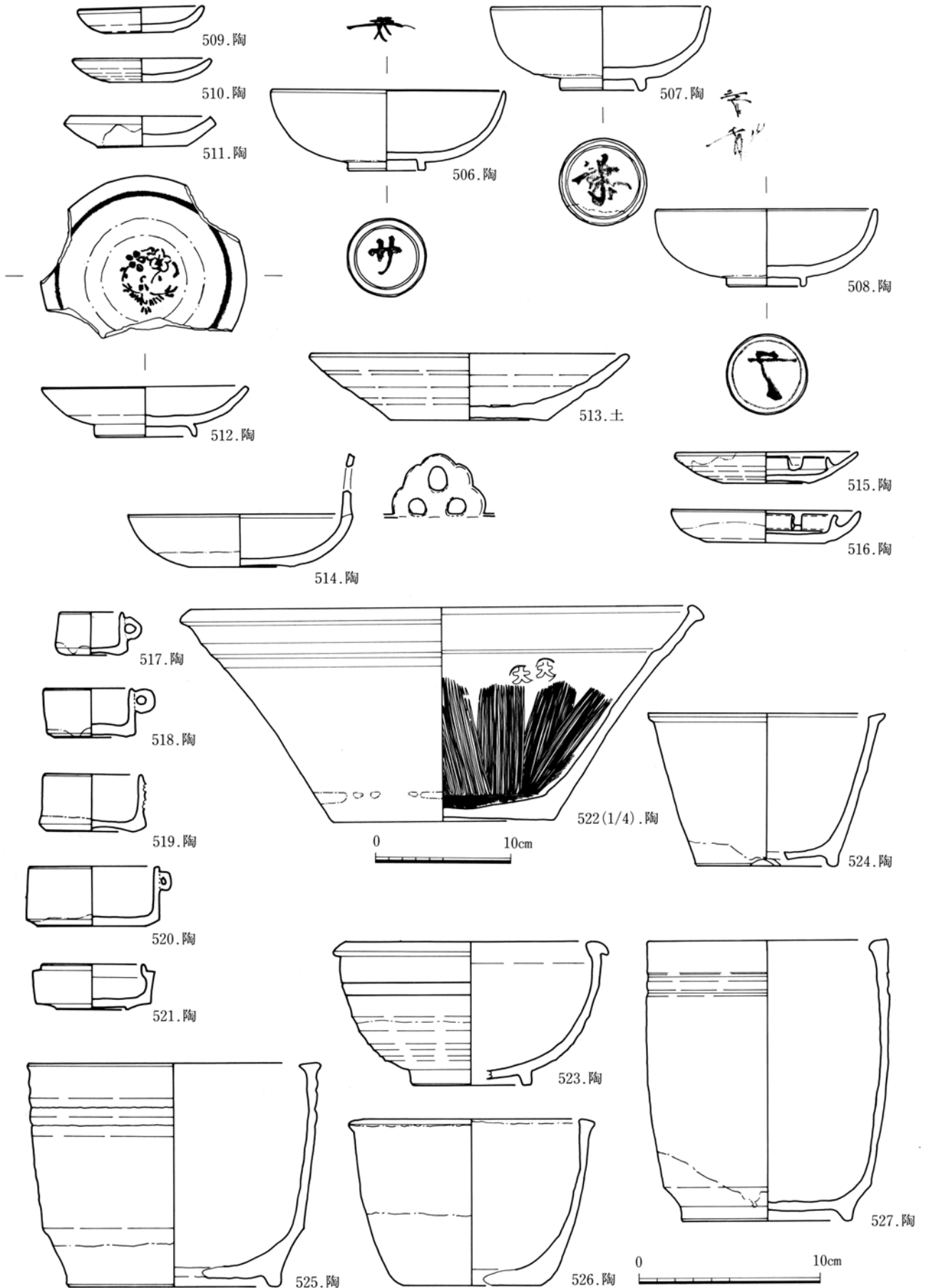
第65図 SK206出土遺物実測図② (495は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
64-473	SK206	1	瀬戸	1	2		1,2	-	5.50	9.40	3.80		18c後	E-473
64-474	SK206	1	瀬戸	1	2		1	-	5.35	(10.00)	3.40		鉄絵、銅緑釉流し、18c後~19c中	E-474
64-475	SK206	1	瀬戸	1	2		2,4	-	6.00	8.60	3.80		19c	E-475
64-476	SK206	1	瀬戸	1	3		1	-	5.90	(7.40)	3.80		呉須絵、19c	E-476
64-477	SK206	1	美濃	1	2		1	-	6.10	12.00	4.00		鉄釉(2色)流し、18c後~19c中か	E-477
64-478	SK206	1	瀬戸	1	5		1	-	6.10~6.20	12.20	6.40		呉須絵、19c	E-478
64-479	SK206	1	瀬戸	2	1		1	9	4.20	12.60	4.20		鉄絵、18c後	E-479
64-480	SK206	1	瀬戸	2	1		1	-	2.30	8.80	4.00		呉須絵、18c後	E-480
64-481	SK206	1	美濃	2	4		2	-	2.35	(10.80)	5.00		18c後~19c中	E-481
64-482	SK206	1	美濃	3	4		1	-	4.60~4.70	8.50	6.00		18cか	E-482
64-483	SK206	1	瀬戸	3	3	7	2	-	16.60	(32.90)	(15.00)		19c	E-483
64-484	SK206	1	瀬戸	4	2		2	-	-	33.50	-		鉄釉(2色)流し、18c後	E-484
64-485	SK206	1	肥前	4	10		3	-	-	2.40	-		18c	E-485
64-486	SK206	1	肥前	1	7		7	-	2.40	4.70	2.20		紅皿、17c後~18c前	E-486
64-487	SK206	1	不明	7	8		4	-	8.70	16.20	7.00		柄に陽刻(オウム)	E-487
64-488	SK206	1	瀬戸	7	4		2	-	4.00~4.10	4.40	4.00		19c	E-488
64-489	SK206	1	瀬戸	7	11		2	-	-	-	-		十能、18c後~19c中	E-489
64-490	SK206	1	美濃	7	10		2	-	1.40	7.60	-		18c後~19c中	E-490
64-491	SK206	1	瀬戸	7	10		1,4	-	2.80	10.60	-		18c後~19c中	E-491
64-492	SK206	1	美濃	7	10		1	-	1.55	9.90	-		18cか	E-492
65-493	SK206	1	瀬戸	7	10		3	-	2.60	9.40	-		1820~1860	E-493
65-494	SK206	1	常滑	7			10	6	-	(18.00)	-			E-494
65-495	SK206	1	土器	5	3		5	6	-	(40.80)	-		銅線残存	E-495

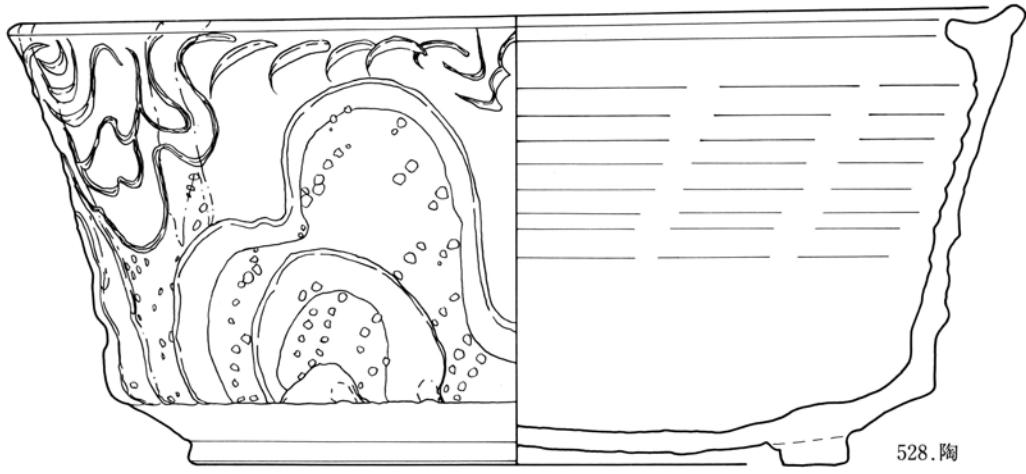
第25表 SK206出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



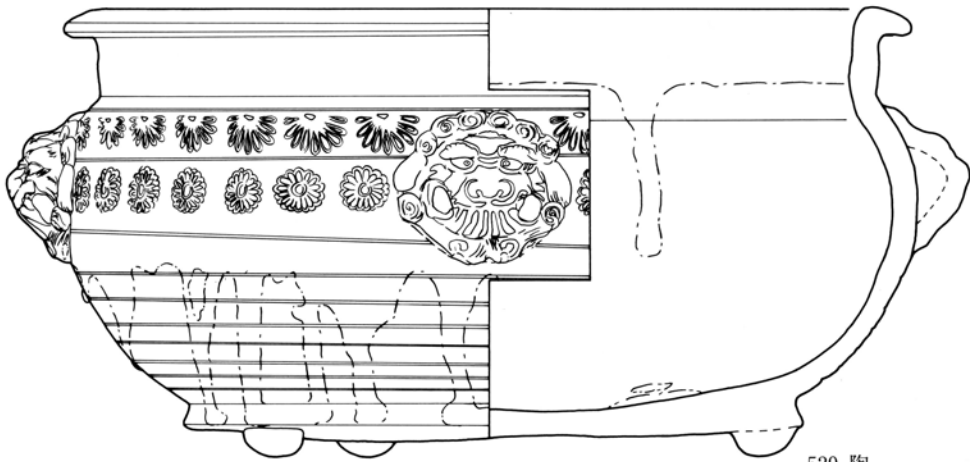
第66図 SK309出土遺物実測図①



第67図 SK309出土遺物実測図② (522は1/4、その他は1/3)

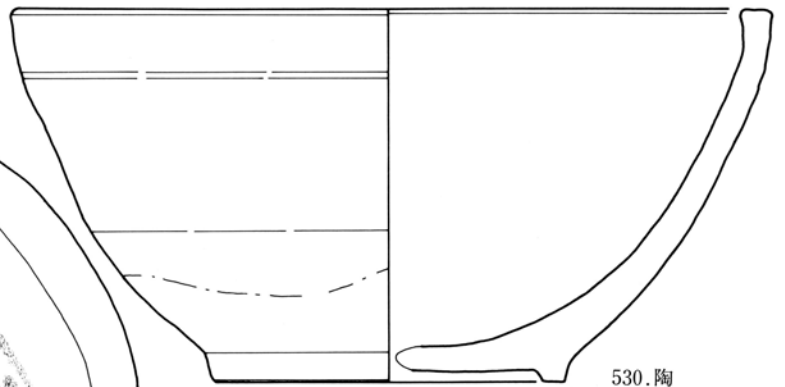


528. 陶

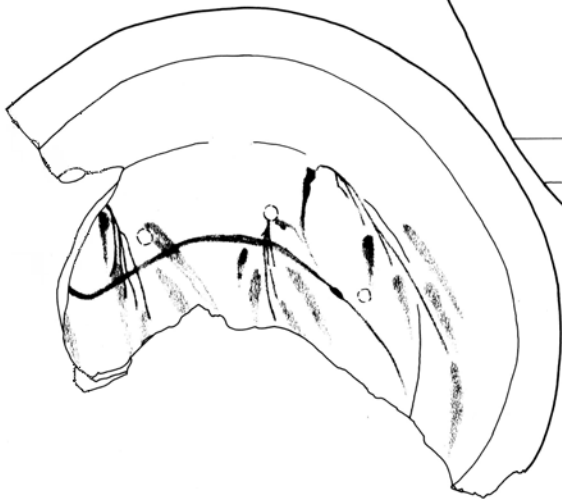


529. 陶

0 10cm



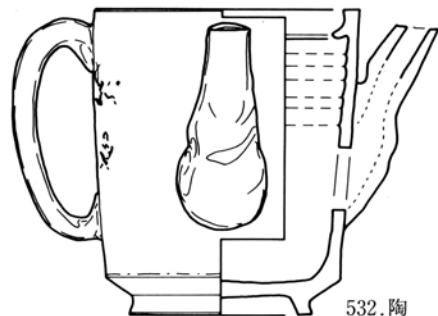
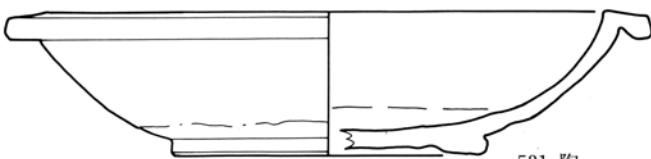
530. 陶



531. 陶

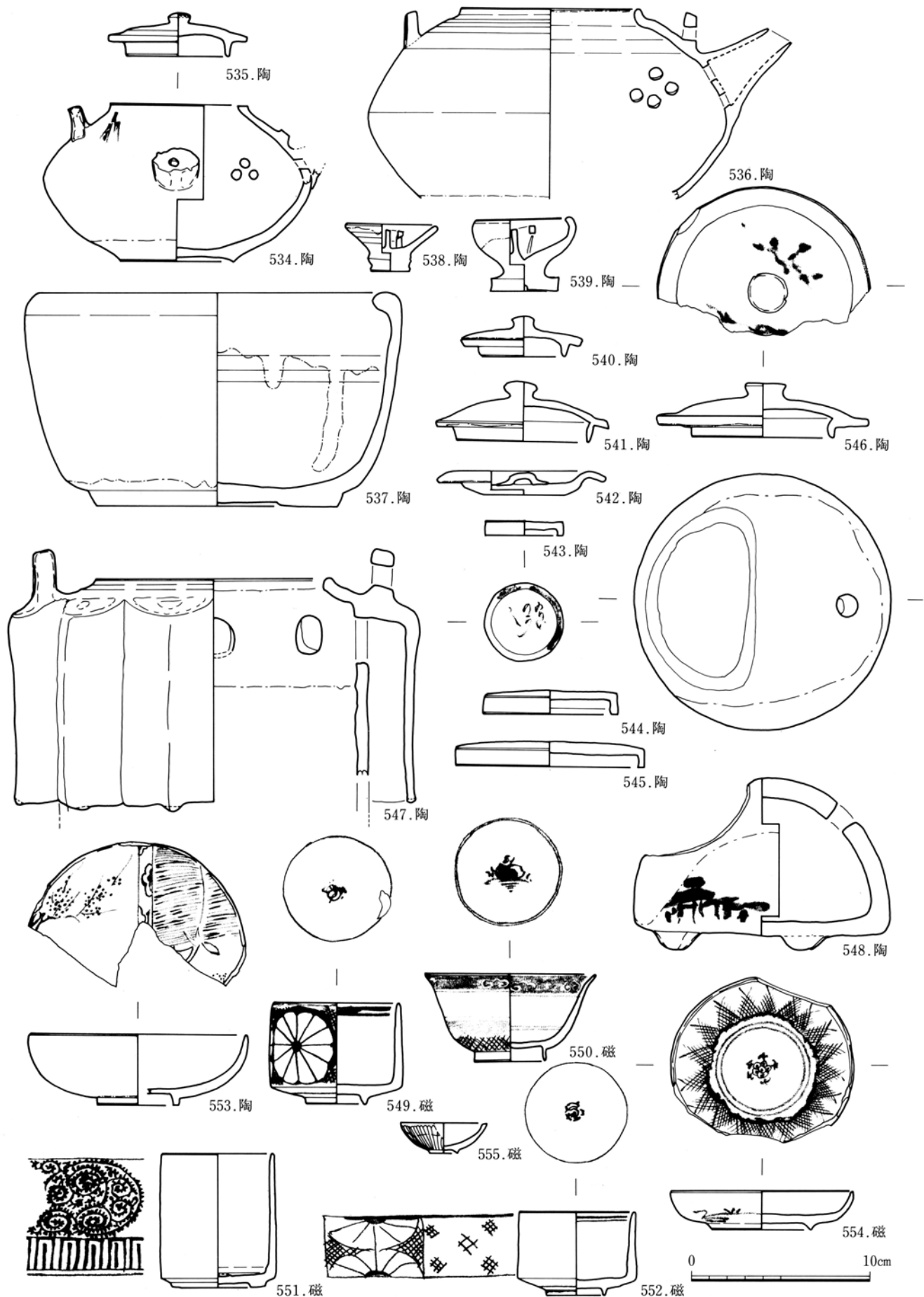


533. 陶

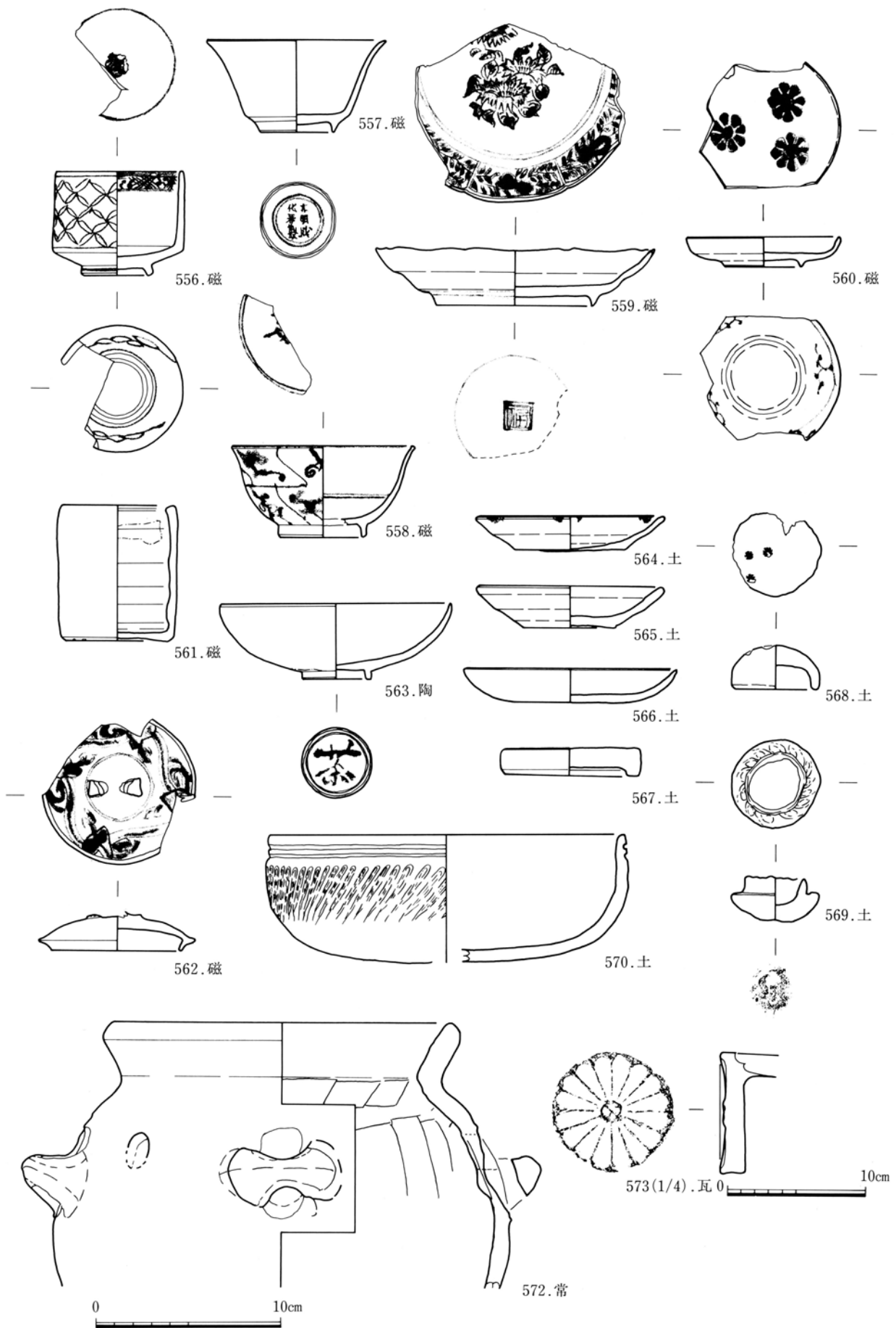


532. 陶

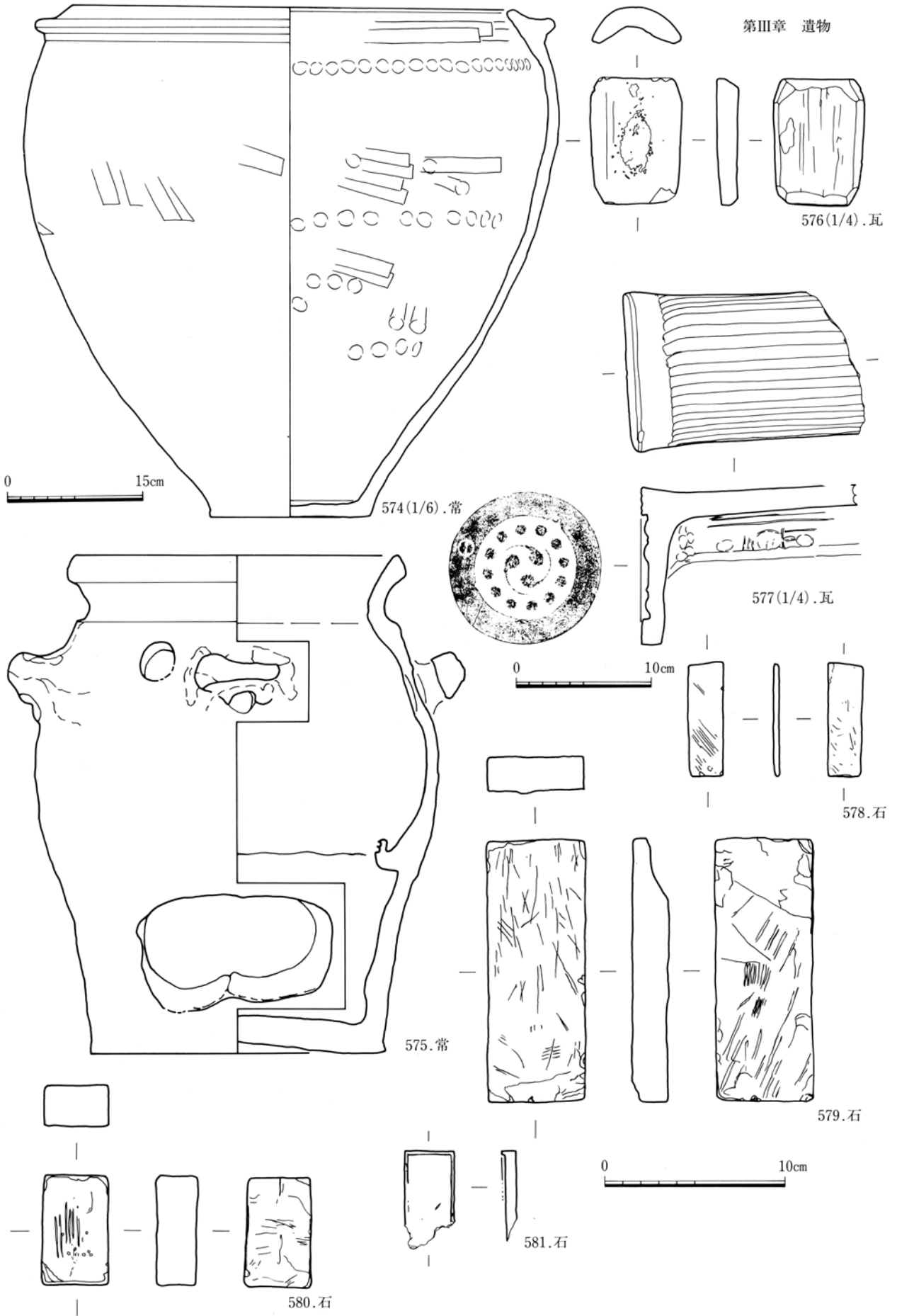
第68图 S K309出土遗物实测图③



第69图 S K309出土遺物実測図④



第70図 SK309出土遺物実測図⑤ (573は1/4、その他は1/3)



第71図 SK309出土遺物実測図⑥ (576・577は1/4、574は1/6、その他は1/3)

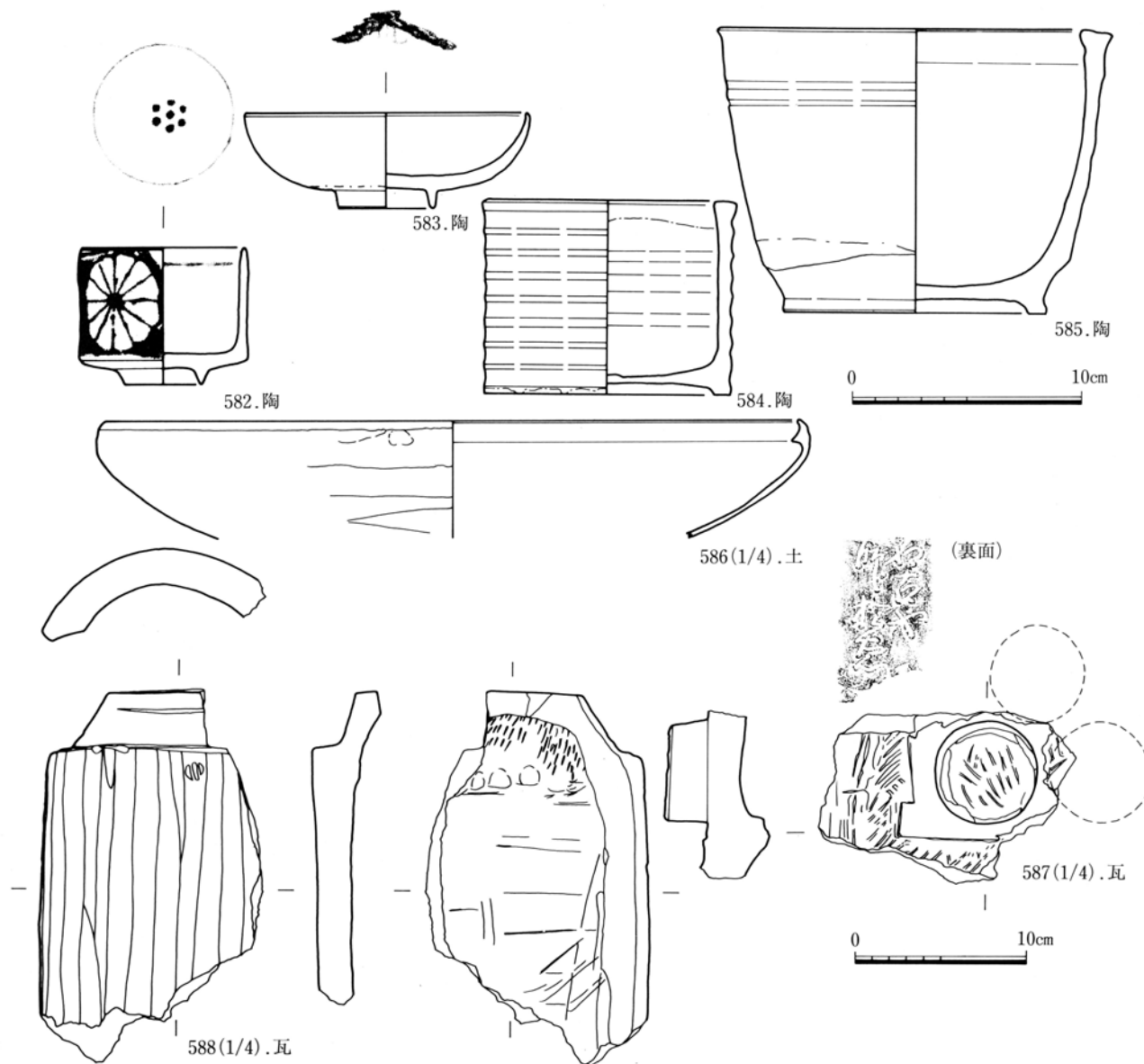
第III章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
66-496	SK309	1	瀬戸	1	2		1	-	5.05	(8.20)	3.20		18c後~19c中	E-496
66-497	SK309	1	瀬戸	1	2		1	-	5.70	9.20	3.60		呉須絵、18c後~19c中	E-497
66-498	SK309	1	瀬戸	1	2		1	2,6	6.50	10.20	4.00		呉須絵、口欠部に赤い付着、18c後~19c中	E-498
66-499	SK309	1	瀬戸	1	2		1	-	4.70	(9.00)	3.60		鉄絵、18c後~19c中	E-499
66-500	SK309	1	瀬戸	1	2		1	2,6	5.80	9.20	4.00		呉須絵、18c後~19c中	E-500
66-501	SK309	1	瀬戸	1	2	1	-	-	6.40	(11.00)	4.20		18c後~19c中	E-501
66-502	SK309	1	瀬戸	1	5		1	-	6.30	(12.40)	6.20		呉須絵、19c	E-502
66-503	SK309	1	瀬戸	1	3		1,2	-	5.80	9.40	4.00		トビガンナ、18c後~19c中	E-503
66-504	SK309	1	瀬戸	1	2		1	-	6.80	(11.00)	4.20		18c後	E-504
66-505	SK309	1	瀬戸	2	1		1	-	4.20	12.20	4.40		鉄絵、18c後	E-505
67-506	SK309	1	瀬戸?	2	1		1	6,9	4.50	12.70	4.20		鉄絵、18c後	E-506
67-507	SK309	1	瀬戸	2	1		1	9	4.65	11.90	4.60		18c後	E-507
67-508	SK309	1	瀬戸	2	1		1	6,9	4.30	12.00	4.20		鉄絵、18c後	E-508
67-509	SK309	1	美濃	2	5		2	-	1.40	6.80	3.40		18c後~19c中	E-509
67-510	SK309	1	美濃	2	5		2	-	1.30	7.40	3.20		18c後~19c中	E-510
67-511	SK309	1	瀬戸	2	5		1	-	1.60~1.80	7.80	5.00		18c後~19c中	E-511
67-512	SK309	1	瀬戸	2	1		1	-	2.80	11.20	5.60		鉄絵、18c後~19c中	E-512
67-513	SK309	1	土器	2	1		5	-	3.70	(17.60)	8.70			E-513
67-514	SK309	1	不明	2	5		1	-	6.20	12.40	5.60		おろし目、取手付	E-514
67-515	SK309	1	美濃	2	4		2	-	1.70	10.00	4.70		18c後~19c中	E-515
67-516	SK309	1	美濃	2	4		1	-	1.80	(10.40)	6.40		18c後~19c中	E-516
67-517	SK309	1	瀬戸	3	9		1	-	2.40	3.40	3.20		18c後~19c中	E-517
67-518	SK309	1	美濃?	3	9		1	-	2.70	4.30	4.00		18c後~19c中	E-518
67-519	SK309	1	美濃	3	9		1	-	3.20	5.30	5.00		18c後~19c中	E-519
67-520	SK309	1	瀬戸	3	9		1	-	3.30	7.20	6.00		18c後~19c中	E-520
67-521	SK309	1	美濃	3	4		1	-	2.45~2.50	5.70	5.80		18c後	E-521
67-522	SK309	1	瀬戸	3	3	10	2	4	15.90	36.80	16.20		19c	E-522
67-523	SK309	1	瀬戸	3	1		1	-	8.00	14.00	6.60		18c後~19c中	E-523
67-524	SK309	1	瀬戸(赤津)	3	7		2	-	8.50	(13.00)	7.70		18c後~19c中	E-524
67-525	SK309	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	3	12.40	(16.00)	(11.50)		転用植木鉢、18c後~19c中	E-525
67-526	SK309	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	3	9.20	(12.00)	(7.60)		転用植木鉢、18c後~19c中	E-526
67-527	SK309	1	瀬戸(赤津)	7	1		2	-	15.60	(13.20)	(9.10)		18c後~19c中	E-527
68-528	SK309	1	瀬戸	3	6		1	-	17.80	38.90	25.00		鉄釉流し、19c	E-528
68-529	SK309	1	瀬戸	3	1		2,4	-	17.80	30.10	24.30		掛分け、獅子頭取手、18c後	E-529
68-530	SK309	1	瀬戸(赤津)	3	1		2	3	14.70	30.00	13.80		転用植木鉢、18c後~19c中	E-530
68-531	SK309	1	瀬戸	3	8		1	-	5.70	(22.00)	(11.90)		鉄・呉須絵、18c後~19c中	E-531
68-532	SK309	1	瀬戸	4	7		1	-	12.10	10.40	7.20		18c後~19c中	E-532
68-533	SK309	1	瀬戸	7	10		1	-	1.80	9.00	-		18c後~19c	E-533
69-534	SK309	1	瀬戸	4	6		1	-	8.80~8.90	7.70	6.40		鉄絵、18c後~19c中	E-534
69-535	SK309	1	瀬戸	7	10		1	-	2.45	7.70	-		18c後~19c中	E-535
69-536	SK309	1	瀬戸	4	6		2	-	-	(10.00)	-		18c後~19c中	E-536
69-537	SK309	1	美濃	7	7		2	2	12.10	19.10	13.50		18c前後~19c中	E-537
69-538	SK309	1	瀬戸	7	4		1	-	3.20	4.90	2.20		18c後~19c中	E-538
69-539	SK309	1	瀬戸	7	4		2	-	4.10	5.10	3.80		18c後~19c中	E-539
69-540	SK309	1	瀬戸	7	10		1	-	2.30	6.40	-		18c後~19c中	E-540
69-541	SK309	1	瀬戸?	7	10		1	-	3.40	9.60	-		18c後~19c中	E-541
69-542	SK309	1	瀬戸	7	10		1	-	1.35	9.30	9		18c後~19c中	E-542
69-543	SK309	1	美濃	7	10		1	9	0.80	4.40	-		18c後~19c中	E-543
69-544	SK309	1	美濃	7	10		1	-	1.80	7.60	-		18c後~19c中	E-544
69-545	SK309	1	瀬戸?	7	10		1	-	1.40	10.60	-		18c後~19c中	E-545
69-546	SK309	1	瀬戸	7	10		1	-	3.10	11.80	-		呉須絵、18c後~19c中	E-546
69-547	SK309	1	瀬戸	7	11		1	5,6,7	-	13.00	-			E-547
69-548	SK309	1	瀬戸	7	11		1,4	2	9.70	-	14.40		鉄絵(織部)、明治近く、19c中	E-548
69-549	SK309	1	瀬戸	1	3		3	-	5.70	7.50	3.70		1780~19c前	E-549
69-550	SK309	1	瀬戸	1	2		3	-	5.00	9.50	3.90		1820~幕末	E-550
69-551	SK309	1	肥前	1	3		3	-	7.60	6.20	5.20		18c末~19c前	E-551
69-552	SK309	1	肥前系	1	3		3	-	4.80	6.50	3.20		1780~1810	E-552
69-553	SK309	1	京都?	2	1		1	-	4.50	(12.20)	4.60		上絵、18c	E-553
69-554	SK309	1	肥前	2	1		3	-	2.20	10.40	5.50		18c中~末	E-554
69-555	SK309	1	肥前	1	7		7	-	1.70	(4.80)	1.60		絵皿	E-555
70-556	SK309	1	肥前系	1	3		3	-	5.70	6.80	3.50		1780~1810	E-556
70-557	SK309	1	中国(景德鎮)	1	3		6,3	-	5.10	9.70	3.90		1600~1630	E-557
70-558	SK309	1	中国	1	2		3	-	5.00	(9.80)	4.50		18c後~19c前	E-558
70-559	SK309	1	肥前(有田)	2	1		3	-	3.00	(15.00)	8.50		1660~1690	E-559
70-560	SK309	1	肥前	2	1		3	-	1.60	(8.20)	4.10		18c	E-560
70-561	SK309	1	肥前	7	1		6,7	-	7.40	6.10	4.10		18c後~幕末	E-561
70-562	SK309	1	肥前	7	10		3	-	1.80	8.40	-		18c	E-562
70-563	SK309	1	不明	2	1		1	9	4.15	(12.00)	3.70			E-563
70-564	SK309	1	土器	2	1		5	6	1.90	(10.30)	(6.00)			E-564

第26表 SK309出土遺物観察表① ※分類数値はV章3節参照

図版No	遺構No	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
70-565	SK309	1	土器	2	1		5	-	2.30	10.20	5.00			E-565
70-566	SK309	1	土器	2	1		5	5,6	1.85	11.60	10.00			E-566
70-567	SK309	1	土器	8	2		5	-	1.50	7.20				E-567
70-568	SK309	1	土器	7	2		8	-	2.40	(4.40)			朱泥(外側丁寧、内側雑)、No.569とセット	E-568
70-569	SK309	1	土器	7	1		8	-	2.50	3.20	1.20	4.80	内外に朱泥(蓋受外は無釉)、No.568とセット	E-569
70-570	SK309	1	土器	7	1		8	-	-	(19.10)			全面に朱泥	E-570
70-572	SK309	1	常滑	7			10	5,6	-	(18.10)				E-572
70-573	SK309	1	瓦						径 8.80				棟入瓦	E-573
71-574	SK309	1	常滑	6			10	14	57.00	42.90	18.00	59.40		E-574
71-575	SK309	1	常滑	7			10	-	28.80	(17.90)	16.20			E-575
71-576	SK309	1	瓦						全長 9.20	幅 6.80			道具瓦	E-576
71-577	SK309	1	瓦						径 11.80				軒丸瓦	E-577
71-578	SK309	1	石						0.50	全長 8.60	幅 2.60		砥石	S-578
71-579	SK309	1	石						2.60	全長 19.60	幅 7.40		砥石	S-579
71-580	SK309	1	石						3.00	全長 8.40	幅 4.90		砥石	S-580
71-581	SK309	1	石						1.20	全長 -	幅 3.70		硯	S-581

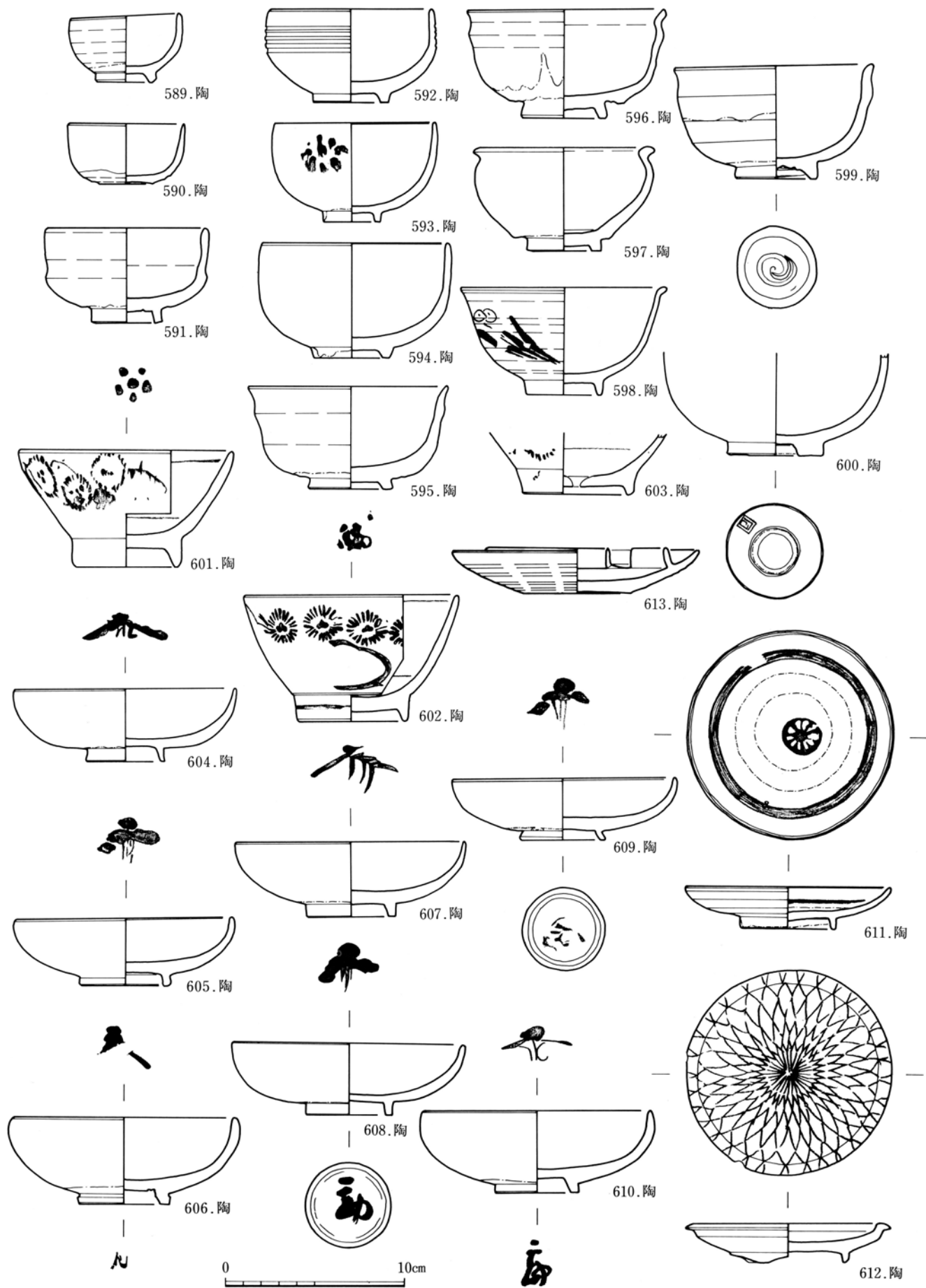
第27表 SK309出土遺物観察表② ※分類数値はV章3節参照



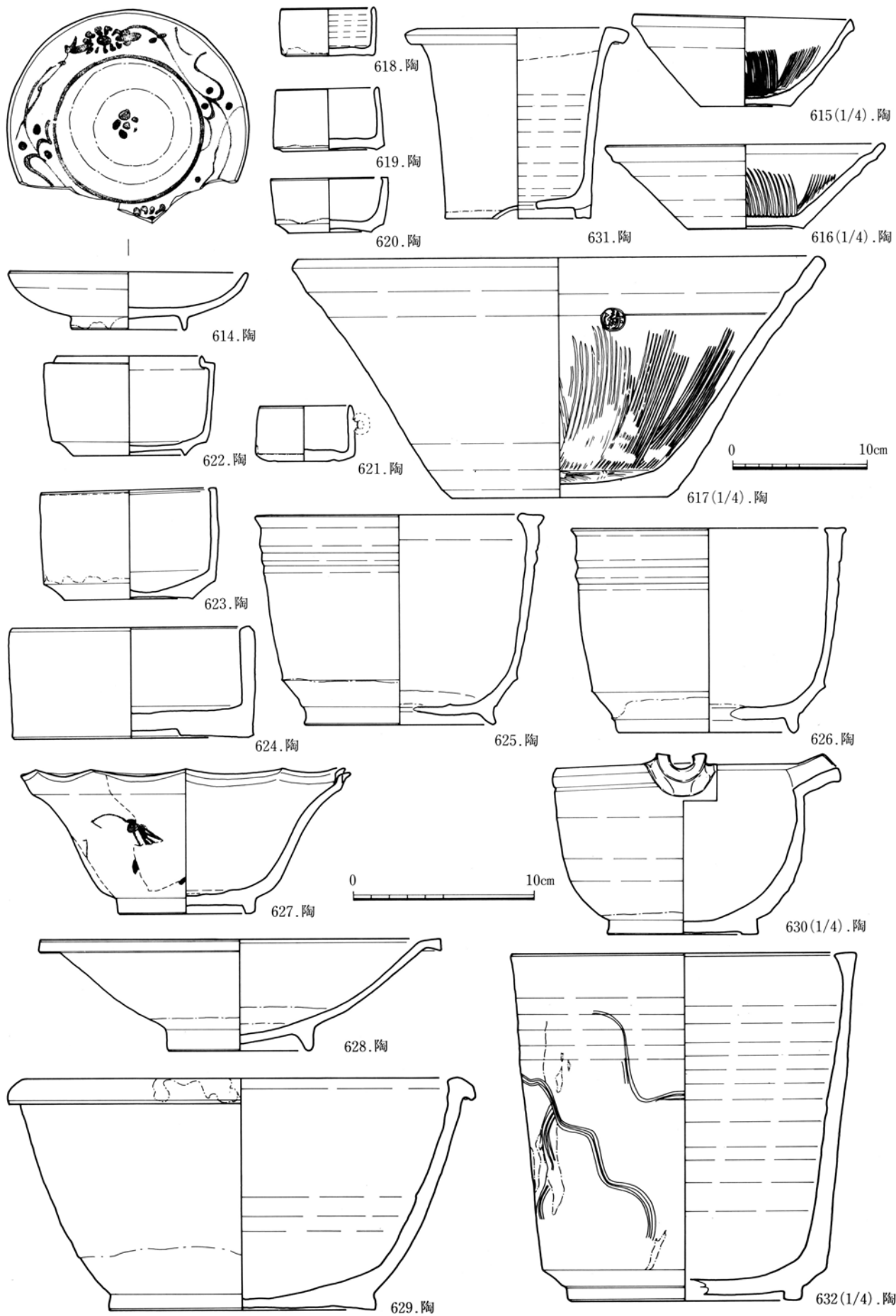
第27図 SK310出土遺物実測図 (586~588は1/4、その他は1/3)

図版No	遺構No	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No
72-582	SK310	1	美濃	1	3		1	-	6.00	(7.10)	3.40		呉須絵、18c後~19c中	E-582
72-583	SK310	1	瀬戸	2	1		1	2	4.20	12.30	4.00		鉄絵、18c後	E-583
72-584	SK310	1	瀬戸?	3	4		4	-	8.50	11.10	10.70			E-584
72-585	SK310	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	-	12.40	17.30	11.40		18c後~19c中	E-585
72-586	SK310	1	土器	5	3		5	6	-	(40.40)				E-586
72-587	SK310	1	瓦						-				「三星一文字」紋文(内面刻書)	E-587
72-588	SK310	1	瓦						-				丸瓦	E-588

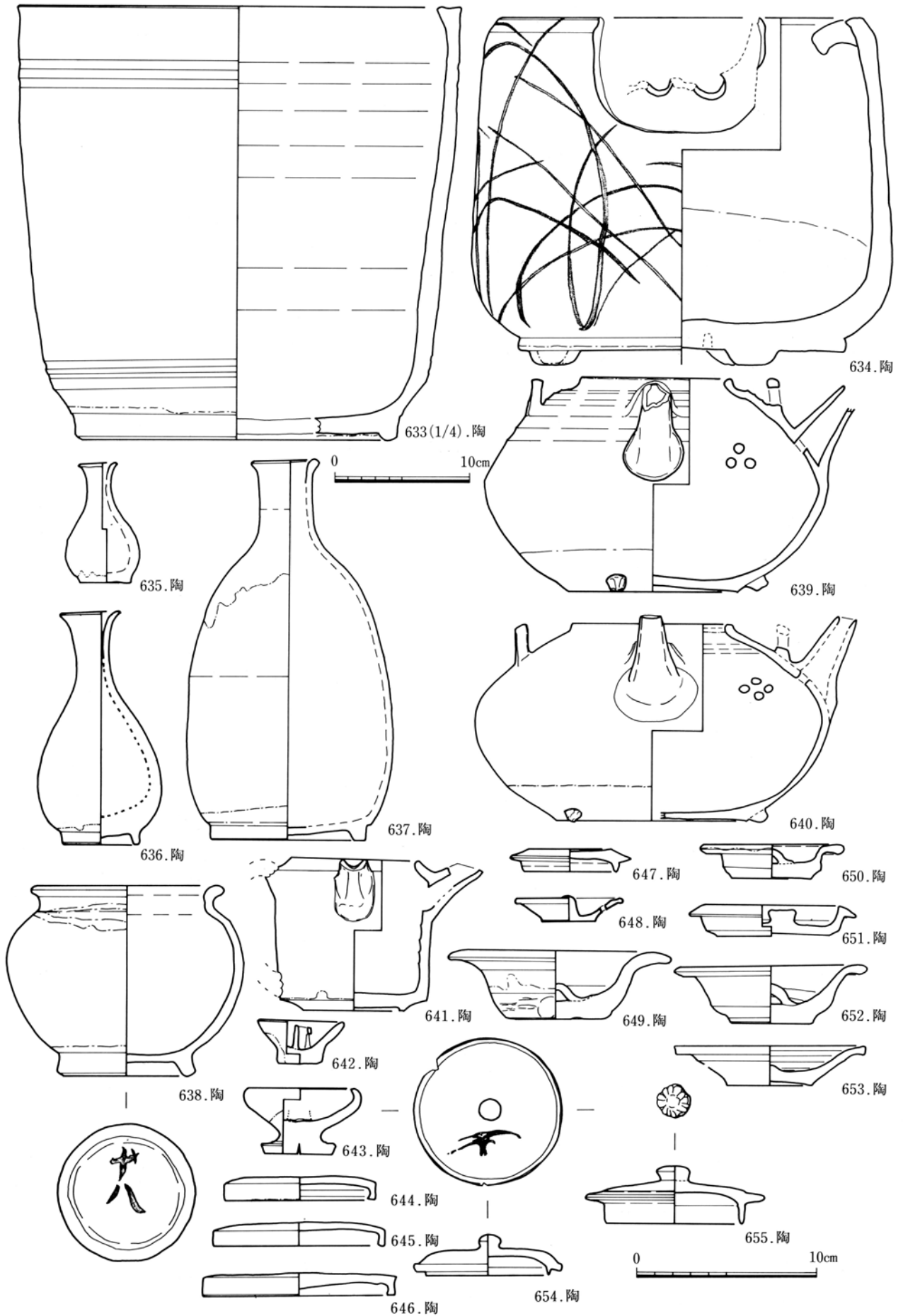
第28表 SK310出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



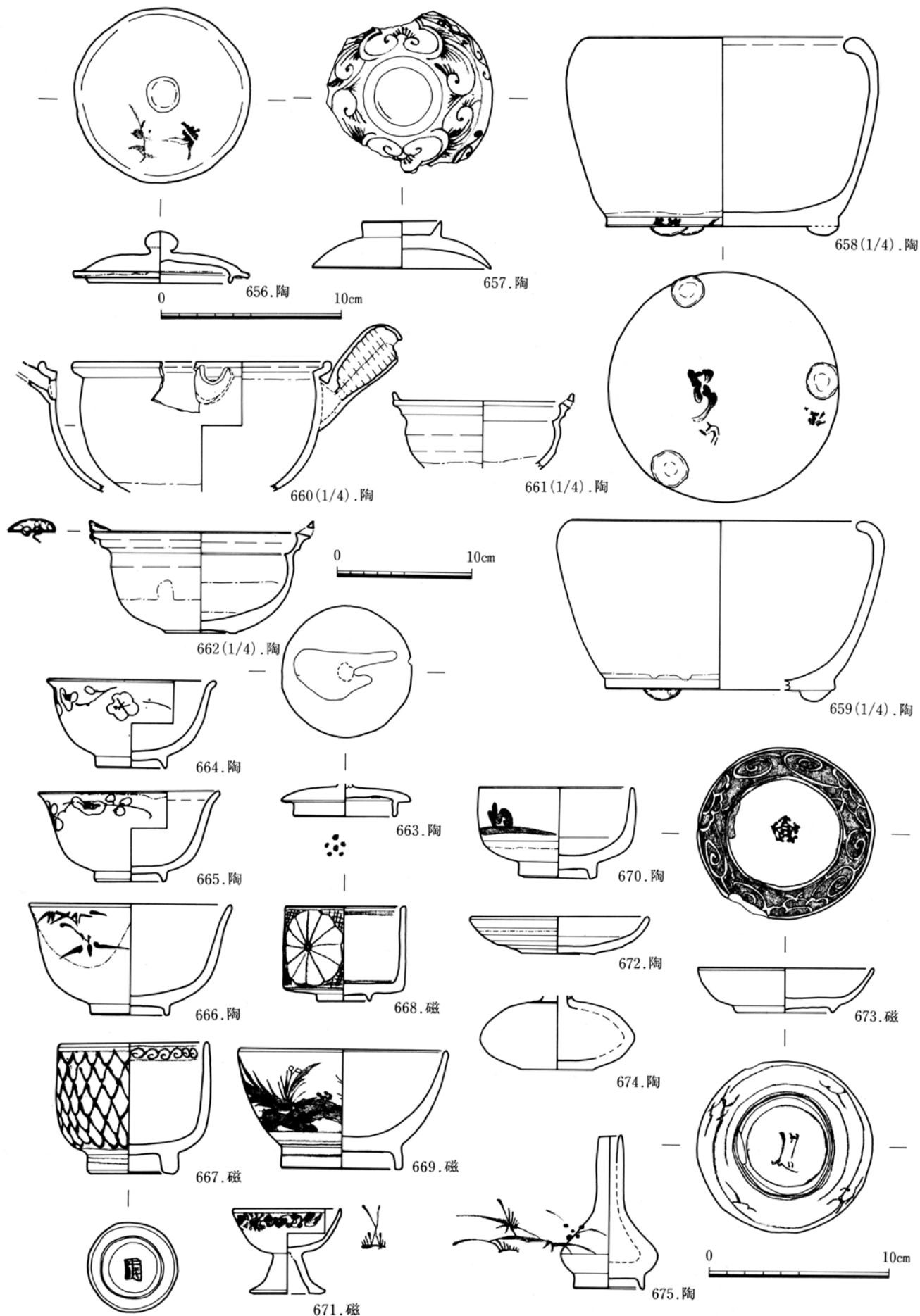
第73图 SK312出土遗物实测图①



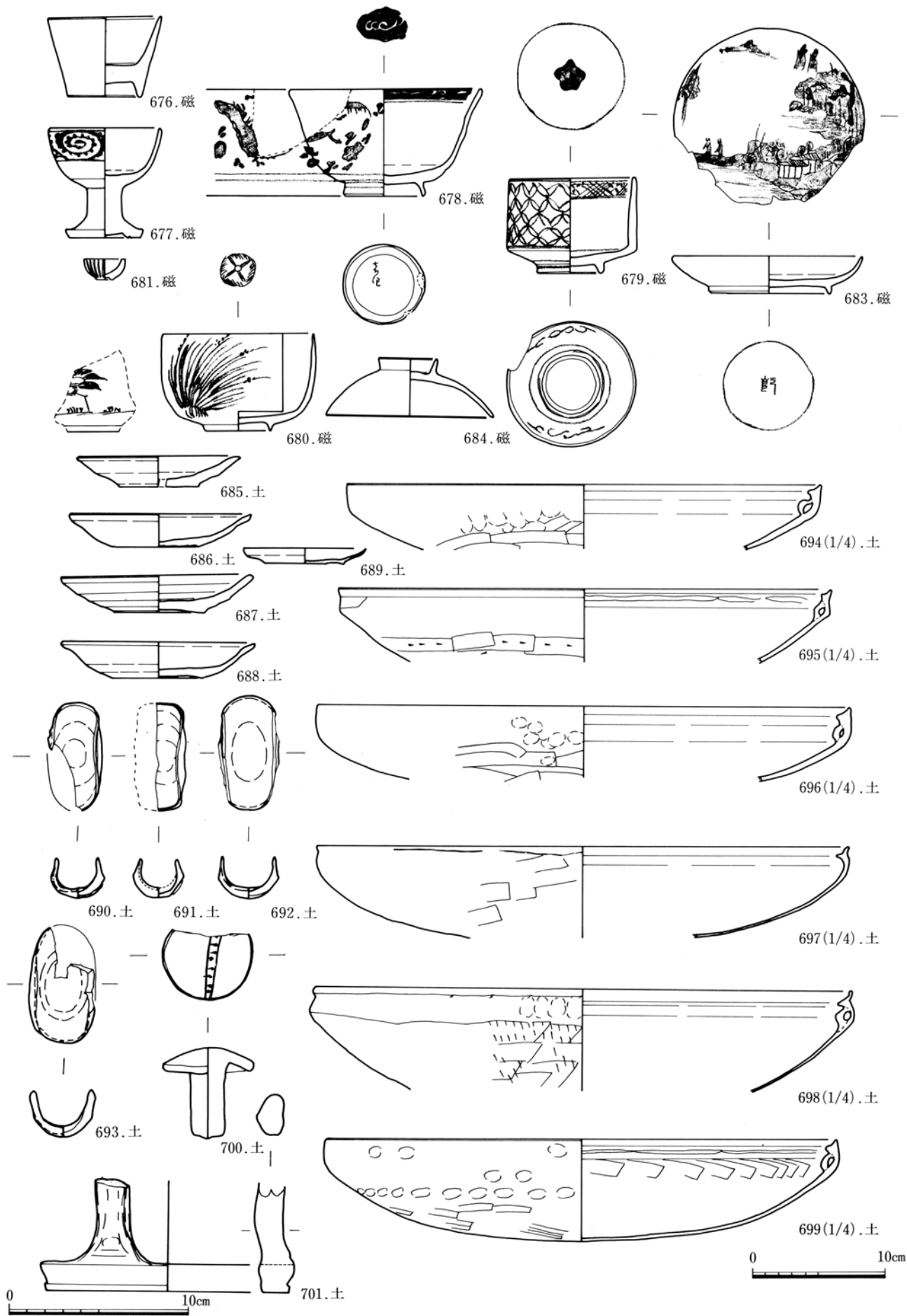
第74図 SK312出土遺物実測図② (615~617・630・632は1/4、その他は1/3)



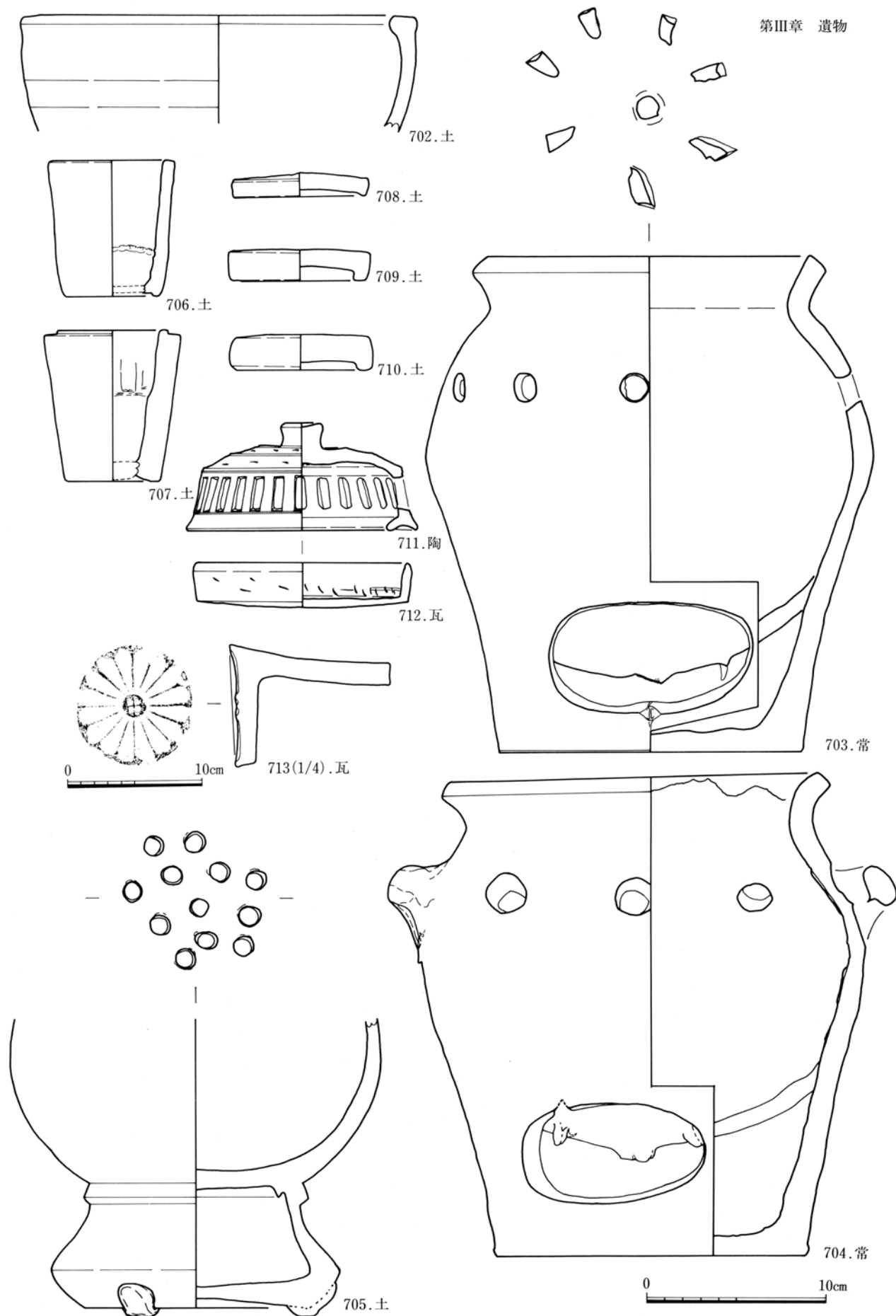
第75図 SK312出土遺物実測図③ (633は1/4、その他は1/3)



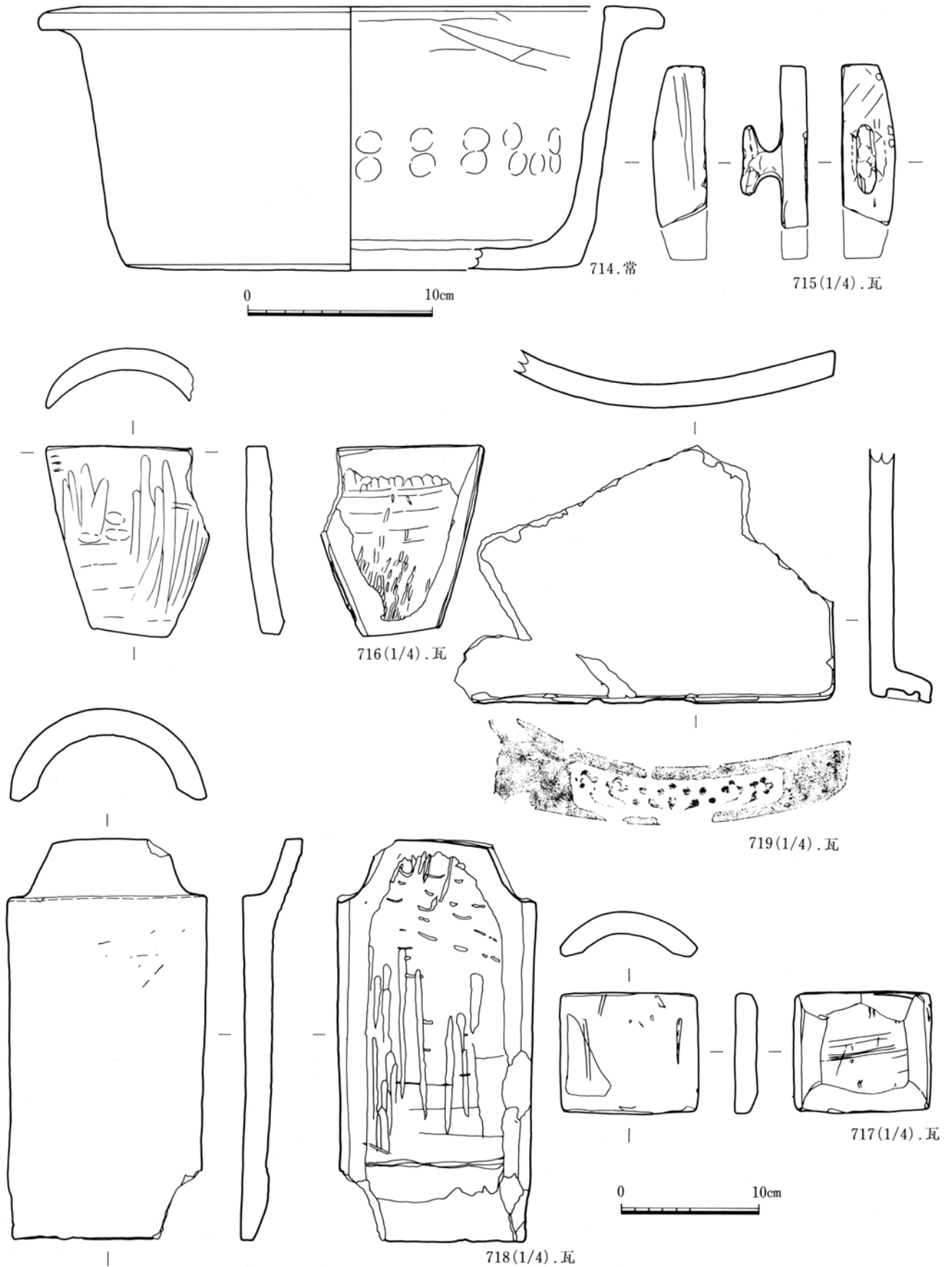
第76図 SK312出土遺物実測図④ (658~662は1/4、その他は1/3)



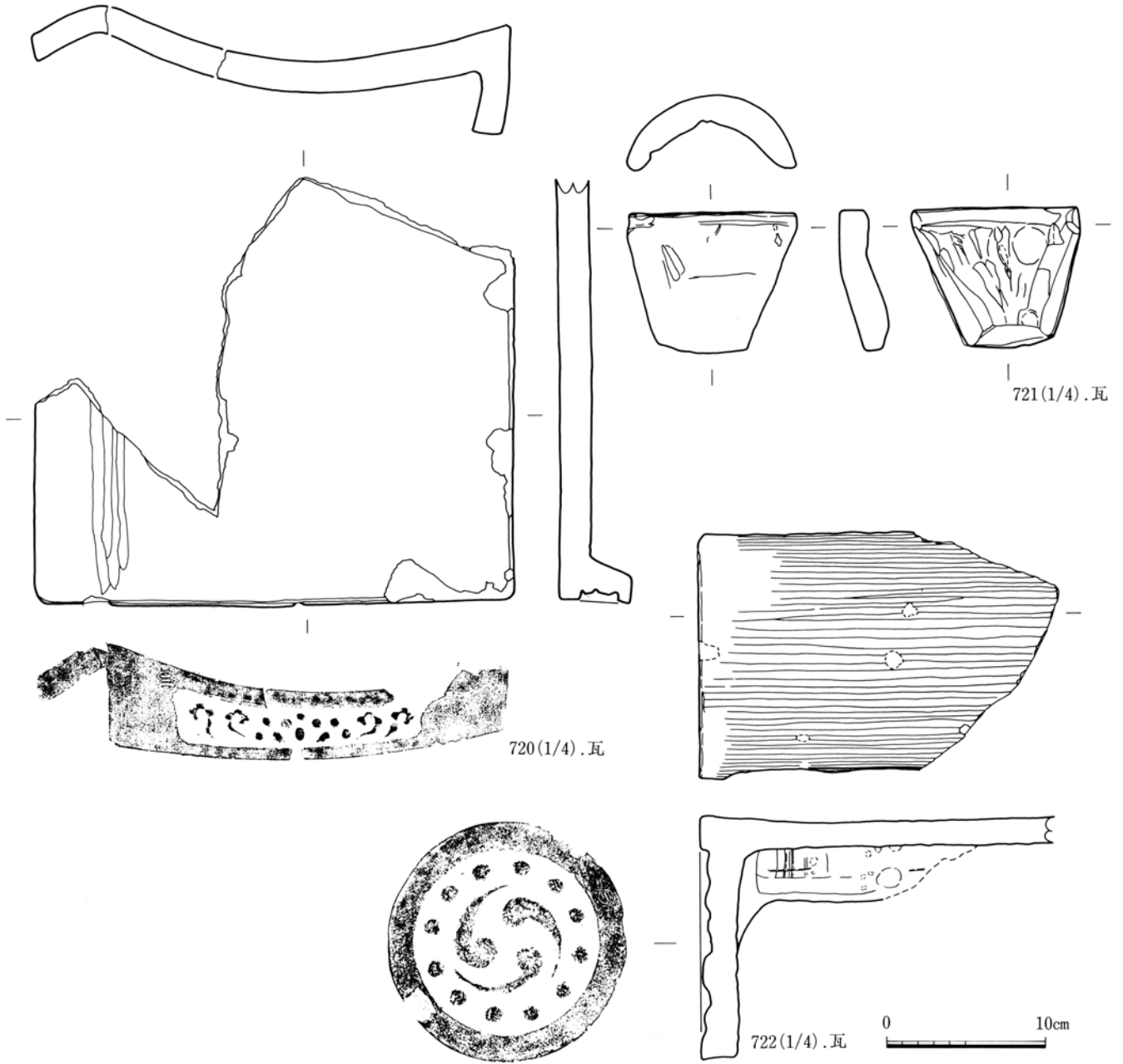
第77図 SK312出土遺物実測図⑤ (694~699は1/4、その他は1/3)



第78図 SK312出土遺物実測図⑥ (713は1/4、その他は1/3)



第79図 SK312出土遺物実測図㉔ (715~719は1/4、その他は1/3)



第80図 SK312出土遺物実測図⑧

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
73-589	SK312	1	美濃	1	7		1	-	3.90	6.00	3.10			E-589
73-590	SK312	1	美濃	1	7		2	-	3.40	6.60	3.00		18c後~19c中	E-590
73-591	SK312	1	瀬戸・美濃?	1	2		1	-	5.30	(8.80)	4.20		18c後~19c中	E-591
73-592	SK312	1	瀬戸	1	2		1,2	-	5.30	9.00	4.20		18c後~19c中	E-592
73-593	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	5.60	8.90	3.20		呉須絵, 18c後~19c中	E-593
73-594	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	6.50	10.30	4.20		18cか	E-594
73-595	SK312	1	瀬戸	1	2		2	-	5.80	11.00	4.50		18c後	E-595
73-596	SK312	1	瀬戸	1	2		1,2	-	6.20	11.00	4.60		掛分け, 18c後~19c中	E-596
73-597	SK312	1	瀬戸・美濃	1	1		2	-	5.90	9.40	4.20		18c後~19c中	E-597
73-598	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	6.10	11.20	4.00		鉄絵, 18c後~19c中	E-598
73-599	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	6.50	11.10	4.40		灰釉流し, 19c	E-599
73-600	SK312	1	美濃	1	2		2	-	-	-	5.30		18c~19c中	E-600
73-601	SK312	1	瀬戸	1	5		1	-	6.60	11.80	5.70		鉄・呉須絵, 19c	E-601
73-602	SK312	1	瀬戸	1	5		1	-	7.15	12.20	6.00		呉須絵, 19c	E-602
73-603	SK312	1	瀬戸	1	5		1	3	-	-	5.90		呉須絵, 19c	E-603
73-604	SK312	1	不明	2	1		1	-	4.10	12.40	4.40		鉄絵	E-604

第29表 SK312出土遺物観察表① ※分類数値はV章3節参照

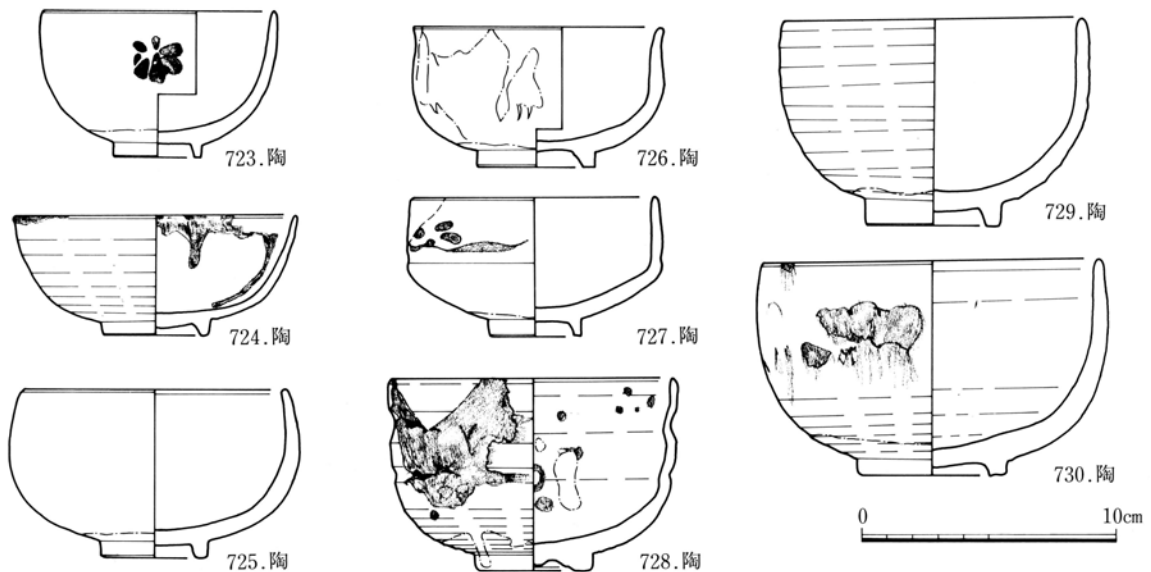
第三章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
73-605	SK312	1	瀬戸?	2	1		1	-	3.90	12.00	4.90		鉄絵、18c後～19c中	E-605
73-606	SK312	1	不明	2	1		1	9	4.90	(12.40)	5.10		鉄絵	E-606
73-607	SK312	1	不明	2	1		1	6	4.25	12.70	4.80		鉄絵	E-607
73-608	SK312	1	瀬戸?	2	1		1	9	4.00～4.10	13.00	4.80		鉄絵	E-608
73-609	SK312	1	瀬戸	2	1		1	9	3.55	12.40	4.60		鉄絵、18c後～19c中か	E-609
73-610	SK312	1	不明	2	1		1	9	4.60	12.70	4.70		鉄絵	E-610
73-611	SK312	1	美濃?	2	1		1	-	2.40	11.40	5.70		鉄絵、18c後～19c中	E-611
73-612	SK312	1	瀬戸	2	1		1	-	2.20	10.20	6.40		鉄絵、18c後～19c中	E-612
73-613	SK312	1	美濃	2	4		2	-	2.60	13.90	6.00		18c後	E-613
74-614	SK312	1	美濃?	2	1		1	-	3.20	13.20	6.20		呉須絵	E-614
74-615	SK312	1	瀬戸(赤津)	3	3	4	2	-	6.70	16.20	6.60		18c後～19c中	E-615
74-616	SK312	1	瀬戸(赤津)	3	3	7	2	-	6.30	20.60	8.60		18c後～19c中	E-616
74-617	SK312	1	瀬戸	3	3	8	2	4	17.95	(38.60)	16.00		19c後	E-617
74-618	SK312	1	美濃	3	9		1	-	2.70	5.10	4.85			E-618
74-619	SK312	1	美濃	3	9		1	-	3.45	5.60	5.20		18c後～19c中	E-619
74-620	SK312	1	瀬戸	3	9		1	-	3.00	6.50	4.60		18c後～19c中か	E-620
74-621	SK312	1	美濃	3	9		1	-	3.10	4.90	3.60		18c後～19c中	E-621
74-622	SK312	1	美濃?	3	4		1	-	5.50	8.10	6.30		18c後～19c中	E-622
74-623	SK312	1	美濃?	3	4		1	3?	6.20	9.30	7.10		18c後～19c中	E-623
74-624	SK312	1	美濃	3	4		1	-	6.20	(13.20)	13.40		18c後～19c中	E-624
74-625	SK312	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	3	11.70	(13.40)	10.30		転用植木鉢、18c後～19c中	E-625
74-626	SK312	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	3	11.40	15.00	9.10		転用植木鉢、18c後～19c中	E-626
74-627	SK312	1	瀬戸	3	1		1	-	8.05	(18.30)	7.20		口鏽、鉄絵、18c後～19c中	E-627
74-628	SK312	1	美濃	3	2		1	-	6.70	22.20	8.00		18c後	E-628
74-629	SK312	1	瀬戸	3	1		1	-	12.90	24.00	14.70		18c後	E-629
74-630	SK312	1	美濃	3	1		1	9	13.50	21.00	11.20		片口、19c	E-630
74-631	SK312	1	瀬戸・美濃	3	7		1	-	10.60	10.00	8.10		18c後～19c中	E-631
74-632	SK312	1	瀬戸・美濃	3	4		1	-	25.90	(27.60)	16.80		陰刻、鉄釉流し、18cか	E-632
75-633	SK312	1	瀬戸(赤津)	3	4		2	-	32.30	32.70	23.80		18c後～19c中	E-633
75-634	SK312	1	瀬戸・美濃	7	7		1	2,6	19.40	19.80	18.00		鉄絵、18c後～19c中	E-634
75-635	SK312	1	美濃	4	9		1	-	6.70	1.95	2.80	4.10	18c後～19c中	E-635
75-636	SK312	1	美濃	4	9		1	-	13.00	(3.10)	4.20	6.80	18c	E-636
75-637	SK312	1	美濃	4	8		2	-	21.20	3.80	8.50	11.40	尾呂徳利、灰釉流し、18c	E-637
75-638	SK312	1	瀬戸	4	2		2	9	10.60	11.80	7.80	13.20	18c後	E-638
75-639	SK312	1	瀬戸	4	6		2	-	11.90～12.00	8.20	9.40		18c後	E-639
75-640	SK312	1	瀬戸・美濃?	4	6		1	6,7	10.00	8.80	10.40		18c後～19c中	E-640
75-641	SK312	1	瀬戸	4	7		1	-	8.40～8.50	7.00	5.60		18c後～19c中	E-641
75-642	SK312	1	瀬戸	7	4		1	-	2.40	4.60	2.40		18c後～19c中	E-642
75-643	SK312	1	瀬戸	7	4		2	-	3.70	5.80	3.75		18c後～19c中	E-643
75-644	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	1.30	8.30	-		18c後～19c中	E-644
75-645	SK312	1	美濃	7	10		1	6,7	1.30	9.50	-		18c後～19c中	E-645
75-646	SK312	1	美濃	7	10		1	-	1.30	10.80	-		18c後～19c中	E-646
75-647	SK312	1	瀬戸?	7	10		1	-	1.25	5.10	-		18c後～19c中	E-647
75-648	SK312	1	不明	7	10		2	-	1.40	6.00	3.00			E-648
75-649	SK312	1	瀬戸?	7	10		1	-	3.70	12.40	6.00			E-649
75-650	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	1.90	7.90	4.40		18c後～19c中	E-650
75-651	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	1.70	9.40	6.20		18c後～19c中	E-651
75-652	SK312	1	美濃	7	10		1	-	3.30	10.70	4.60		18c～19c中	E-652
75-653	SK312	1	瀬戸(赤津?)	7	10		2	-	2.20	(10.40)	4.70		18c後～19c中	E-653
75-654	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	2.30	6.20	-	8.20	鉄絵、18c後～19c中	E-654
75-655	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	3.20	7.50	-		18c後～19c中	E-655
76-656	SK312	1	瀬戸?	7	10		1	-	2.90	9.80	-		鉄絵、18c後～19c中	E-656
76-657	SK312	1	瀬戸	7	10		1	-	2.70	(10.00)	4.40		鉄絵、18c後	E-657
76-658	SK312	1	瀬戸	7	7		2	2,9	14.90	(20.00)	17.60		18c後	E-658
76-659	SK312	1	美濃	7	7		2	2	13.50	(22.00)	17.00		18c後～19c中	E-659
76-660	SK312	1	不明	7	8		1	6	(9.80)	18.80	-			E-660
76-661	SK312	1	美濃	7	9		2	6	-	13.60	-		18c後～19c中	E-661
76-662	SK312	1	美濃	7	9		2	6	8.40	16.40	5.30		銅線残存	E-662
76-663	SK312	1	信楽?	7	10		1	-	-	7.20	-		銅緑釉流し	E-663
76-664	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	4.90	(9.40)	4.00		鉄・灰釉絵、18c後～19c中	E-664
76-665	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	5.10	10.00	3.80		鉄・灰釉絵、19c中	E-665
76-666	SK312	1	瀬戸?	1	2		1	-	6.20	(11.10)	4.10		鉄絵、白泥、18c後～19c中	E-666
76-667	SK312	1	瀬戸?	1	2		3	-	7.40	8.10	4.50		1820～幕末	E-667
76-668	SK312	1	美濃	1	7		1	-	5.30	6.65	2.90		呉須絵、1780～19c前	E-668
76-669	SK312	1	不明	1	5		3	1	6.70	(11.50)	6.60		1780～19c前	E-669
76-670	SK312	1	瀬戸	1	2		1	-	5.20	8.40	3.70		呉須絵、18c後～19c中	E-670
76-671	SK312	1	瀬戸	1	6		3	-	4.80	(5.90)	3.70		1820～幕末	E-671
76-672	SK312	1	不明	2	5		1	-	2.10	9.90	4.00		18c後～19c中	E-672
76-673	SK312	1	肥前系	2	1		3	-	2.50	9.80	5.30		18c前～中	E-673
76-674	SK312	1	不明	4	10		2	-	-	-	4.00		18c後～19c中	E-674
76-675	SK312	1	美濃	4	9		3	-	8.60	1.20	3.80	5.70	18c後～19c中	E-675

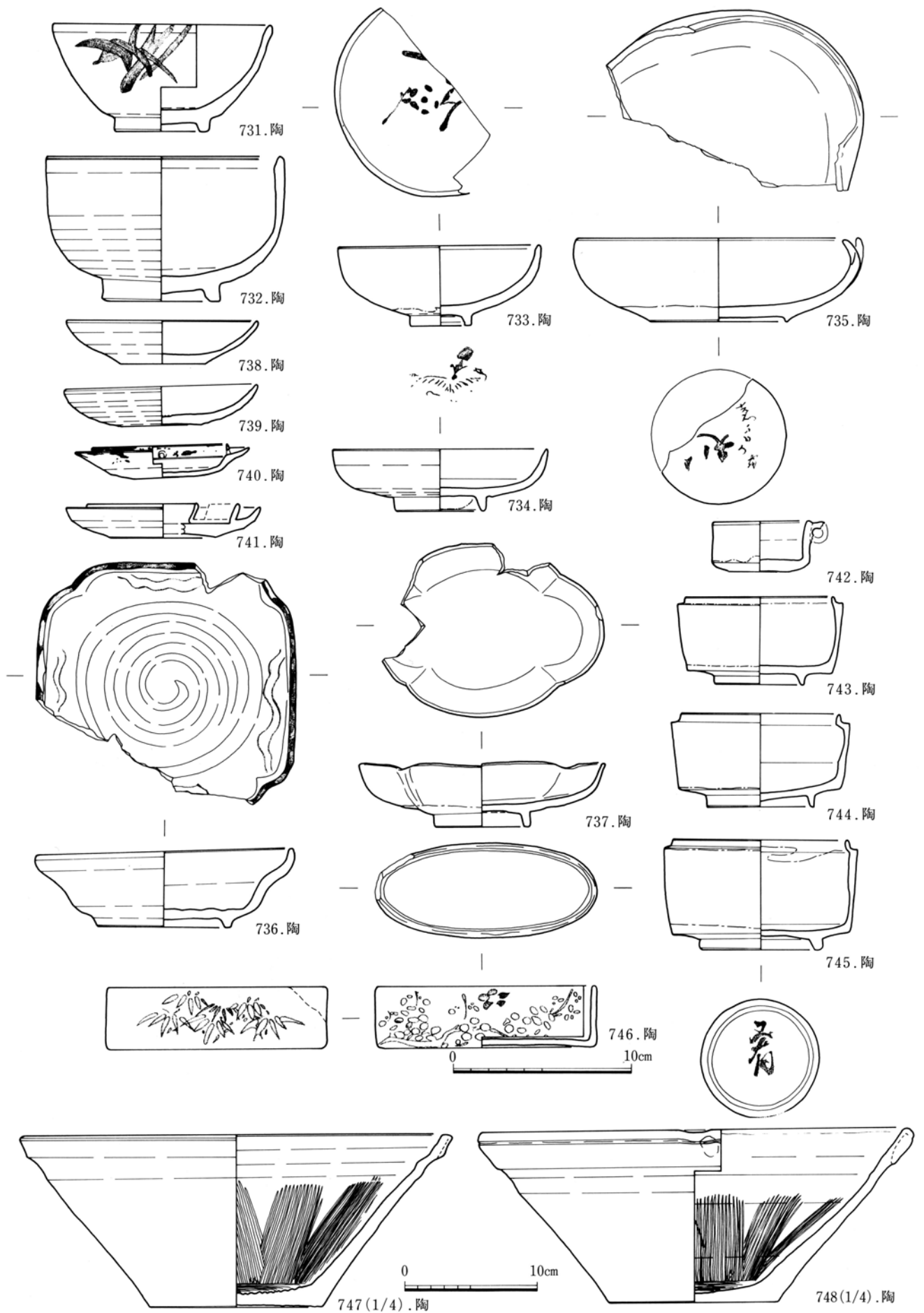
第30表 S K312出土遺物観察表② ※分類数値はV章3節参照

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
77-676	SK312	1	肥前系	1	7		7	-	4.60	6.30	4.10		18c後~19c初	E-676
77-677	SK312	1	肥前系	1	6		3	-	6.20	(6.10)	4.00		18c後~19c前	E-677
77-678	SK312	1	肥前系	1	2		3	1	6.00	(10.60)	4.40		朱書き、1820~1860	E-678
77-679	SK312	1	肥前系	1	7		3	-	5.45	6.90	3.55		1780~1810	E-679
77-680	SK312	1	肥前系	1	7		3	11	5.50	(8.80)	3.60		1780~1810	E-680
77-681	SK312	1	肥前	1	7		7	-	1.15	2.30	0.90		紅皿	E-681
77-683	SK312	1	肥前	2	1		3	-	2.10	(10.60)	6.60		19c初~幕末	E-683
77-684	SK312	1	瀬戸or関西?	7	10		7	-	3.30	9.35	3.40		19c(幕末)	E-684
77-685	SK312	1	土器	2	1		5	-	1.75	(9.10)	4.50			E-685
77-686	SK312	1	土器	2	1		5	-	1.90	10.20	4.50			E-686
77-687	SK312	1	土器	2	1		5	6	2.10	10.50	5.05			E-687
77-688	SK312	1	土器	2	1		5	7	2.10	10.90	5.00			E-688
77-689	SK312	1	土器	2	1		5	2	0.90	6.90	4.40			E-689
77-690	SK312	1	土器	2	1		5	-	2.30	2.30~6.00	-		耳皿	E-690
77-691	SK312	1	土器	2	1		5	-	2.20	2.00~6.00	0.60		耳皿	E-691
77-692	SK312	1	土器	2	1		5	-	2.40	2.90~6.40	-		耳皿	E-692
77-693	SK312	1	土器	2	1		5	-	2.60	3.20~6.60	-		耳皿	E-693
77-694	SK312	1	土器	5	3		5	6	4.90	(35.50)	-			E-694
77-695	SK312	1	土器	5	3		5	5,6	-	(36.70)	-			E-695
77-696	SK312	1	土器	5	3		5	6	5.60	(39.80)	-			E-696
77-697	SK312	1	土器	5	3		5	6	-	(39.60)	-			E-697
77-698	SK312	1	土器	5	3		5	6	-	(40.10)	-			E-698
77-699	SK312	1	土器	5	3		5	5,6	7.70	(39.00)	-			E-699
77-700	SK312	1	土器	7	2		5	-	5.10	-	-			E-700
77-701	SK312	1	土器	7	1		5	-	6.80	-	13.60			E-701
78-702	SK312	1	土器	7	1		5	6	6.50	(19.60)	-			E-702
78-703	SK312	1	常滑	7			10	5,6	27.70	18.00	17.00			E-703
78-704	SK312	1	常滑	7			10	5,6	26.80	20.40	17.20			E-704
78-705	SK312	1	不明	7	11				16.60	-	12.40			E-705
78-706	SK312	1	土器	8	1		5	-	7.60	(5.80)	5.00	7.00		E-706
78-707	SK312	1	土器	8	1		5	-	8.40	(5.20)	5.20	7.60		E-707
78-708	SK312	1	土器	8	2		5	-	1.35	7.50	-			E-708
78-709	SK312	1	土器	8	2		5	-	1.75	7.90	-			E-709
78-710	SK312	1	土器	8	2		5	-	2.00	8.00	-			E-710
78-711	SK312	1	美濃	7	10		5	6,7	6.00	12.60	-		No712とセット	E-711
78-712	SK312	1	瓦	7	3		5	6	2.50	11.60	7.00		No711とセット	E-712
78-713	SK312	1	瓦						径 9.20	全長 11.80			棟入瓦	E-713
79-714	SK312	1	常滑	7			9	-	14.40	(27.80)	(24.60)			E-714
79-715	SK312	1	瓦							全長 -	幅 3.80		道具瓦	E-715
79-716	SK312	1	瓦							全長 13.60	幅 -		道具瓦	E-716
79-717	SK312	1	瓦							全長 9.00	幅 10.00		道具瓦	E-717
79-718	SK312	1	瓦							全長 29.20	幅 14.00		丸瓦	E-718
79-719	SK312	1	瓦							全長 -	幅 -		軒平瓦	E-719
79-720	SK312	1	瓦							全長 -	幅 30.00		棧瓦	E-720
79-721	SK312	1	瓦							全長 9.00	幅 10.80		道具瓦	E-721
79-722	SK312	1	瓦						径 15.20	全長 -	幅 14.80		軒丸瓦	E-722

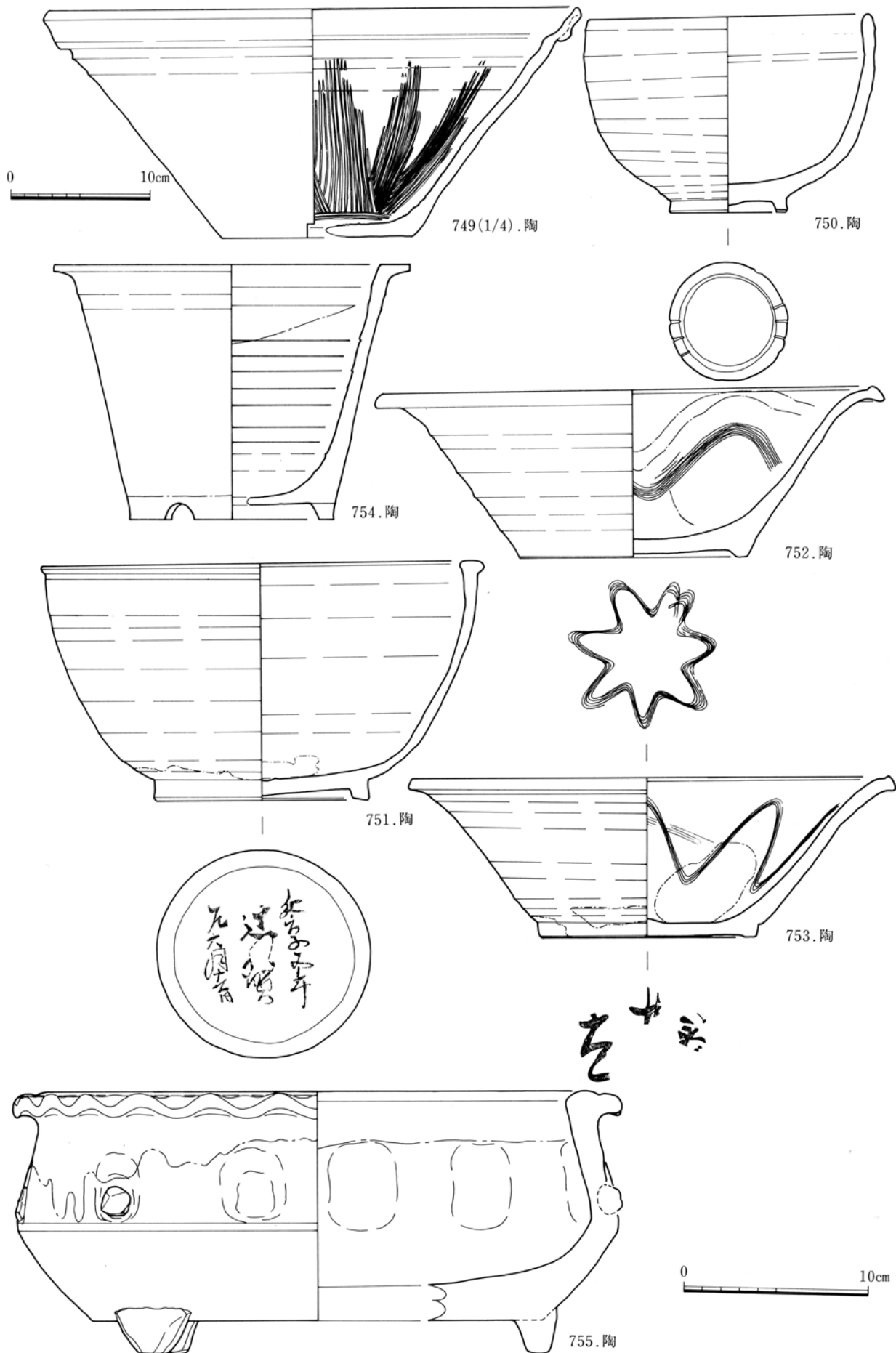
第31表 SK312出土遺物観察表③ ※分類数値はV章3節参照



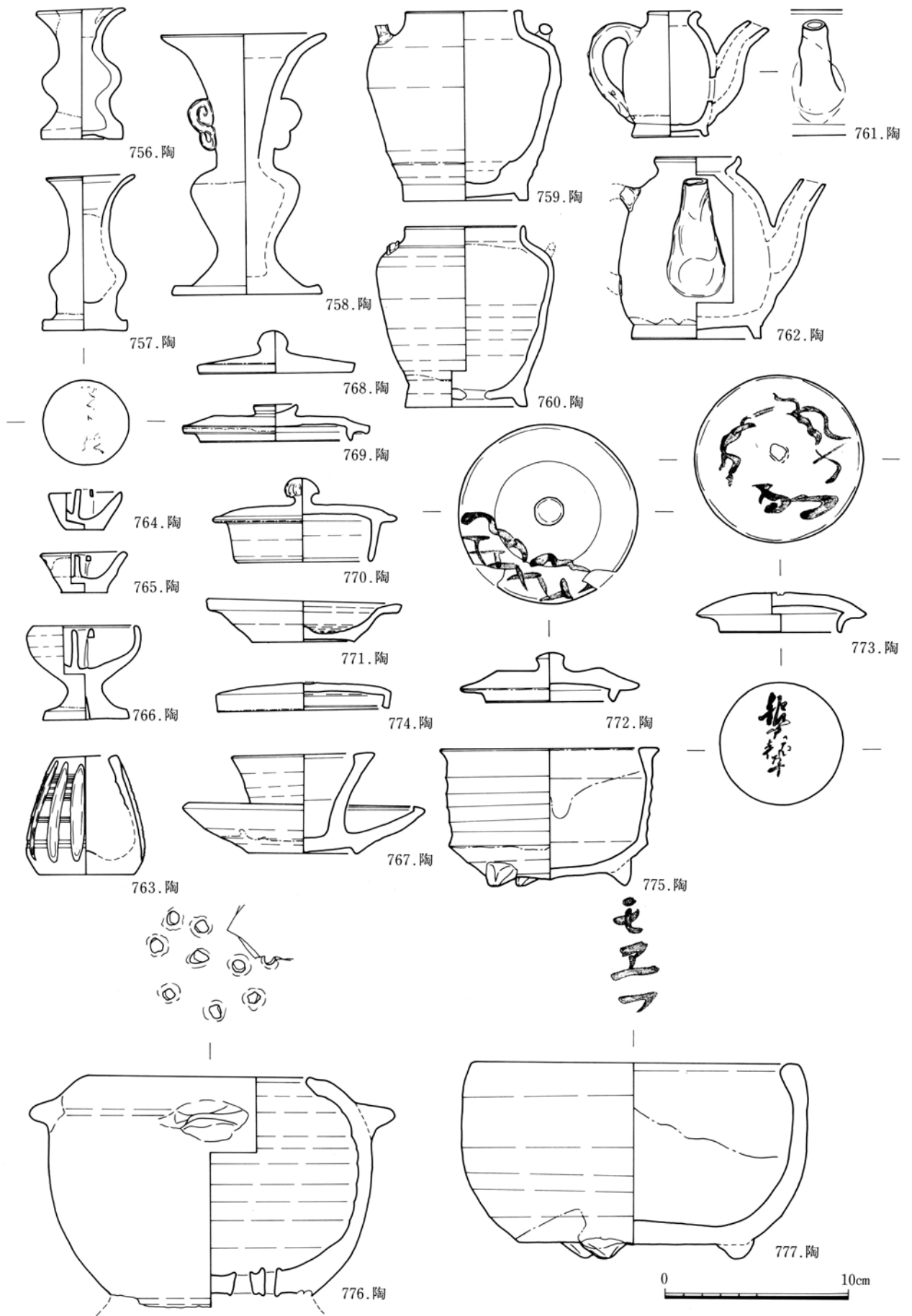
第81図 SK318出土遺物実測図①



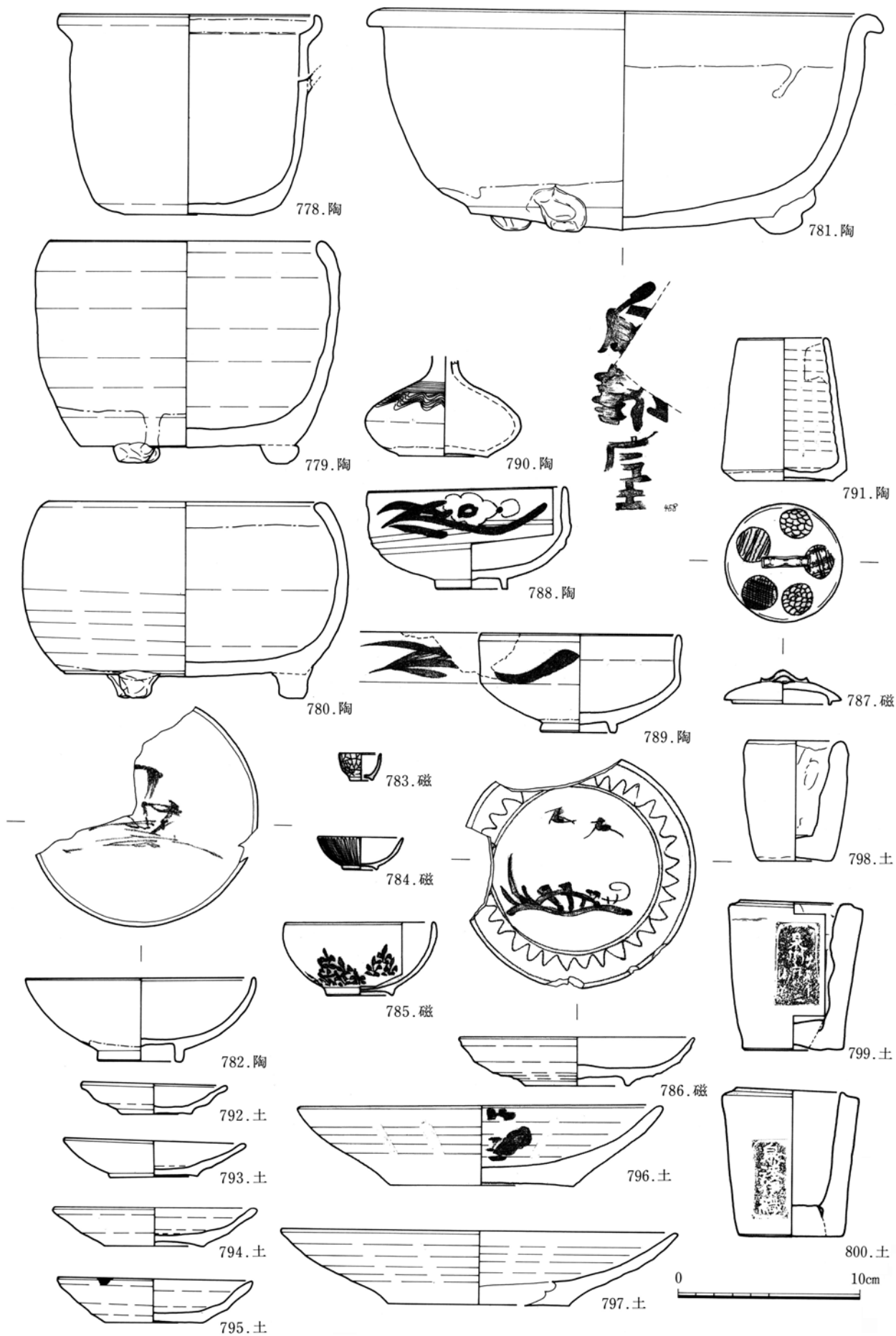
第82図 SK318出土遺物実測図② (747・748は1/4、その他は1/3)



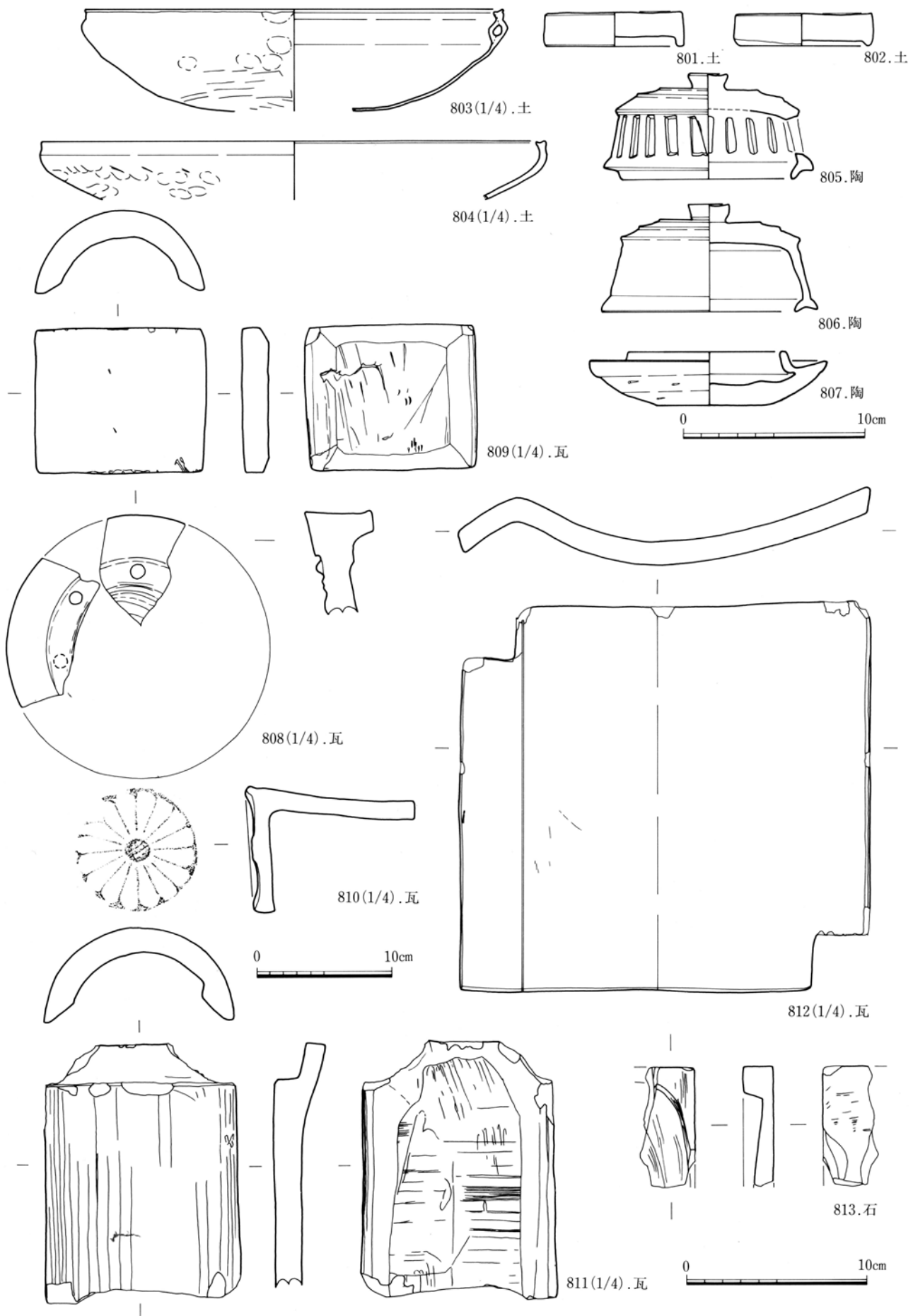
第83図 SK318出土遺物実測図③ (749は1/4、その他は1/3)



第84图 SK318出土遗物实测图④



第85图 SK318出土遗物实测图⑤



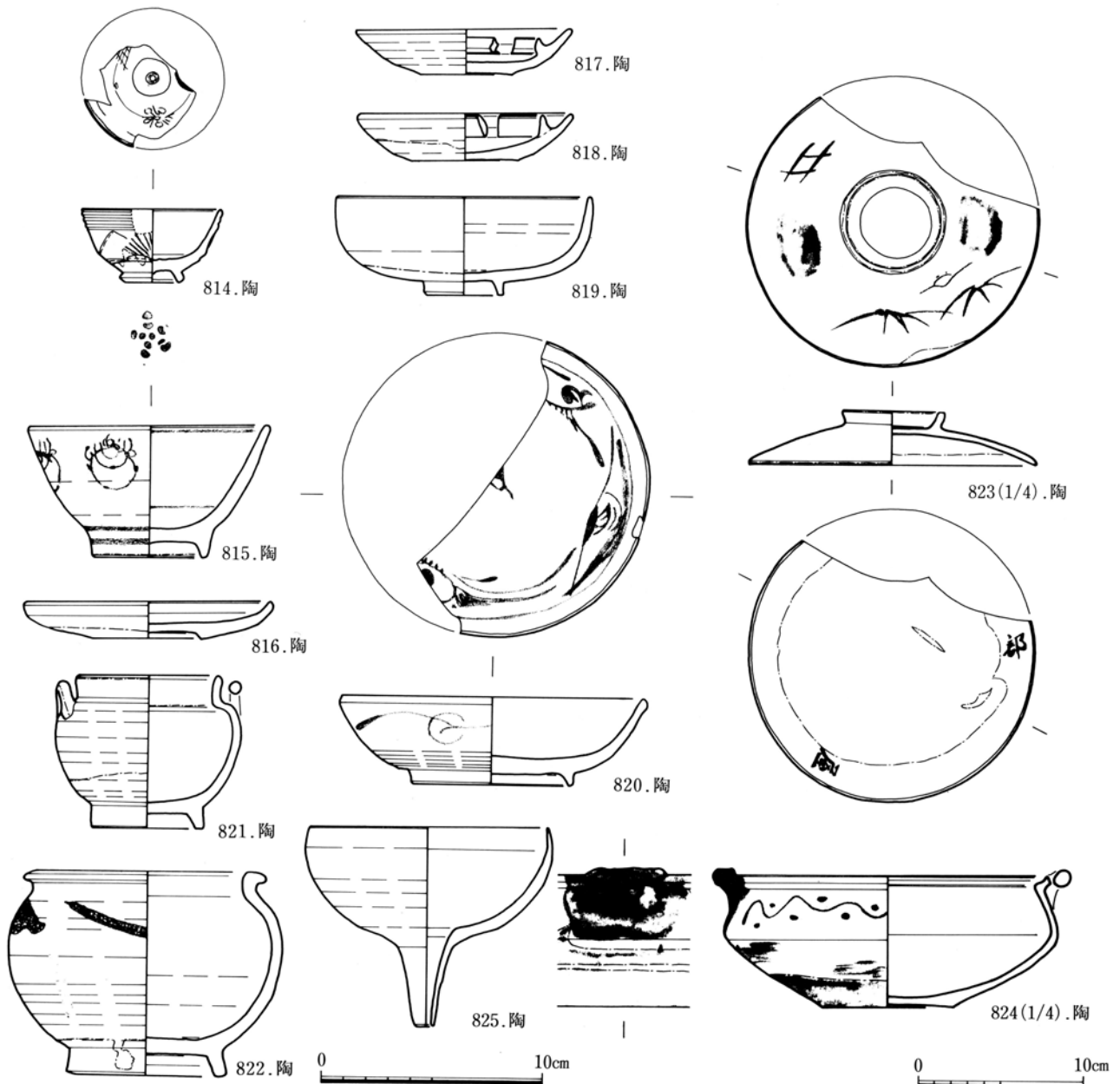
第86図 SK318出土遺物実測図⑥ (803・804・808～812は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	軸葉	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
81-723	SK318	1	瀬戸	1	2		1	-	5.80	9.20	3.40		呉須絵、18c後	E-723
81-724	SK318	1	瀬戸・美濃	1	2		2	-	4.70	11.00	4.10		口縁部鉄軸流し、18c	E-724
81-725	SK318	1	美濃	1	2		1	-	6.70	10.10	4.00	11.40	18c	E-725
81-726	SK318	1	美濃	1	2		1	-	5.50	9.80	4.60		鉄軸・呉須絵、18c中～後	E-726
81-727	SK318	1	瀬戸	1	3		1	-	5.50	(9.60)	3.60		鉄・呉須絵、18c後	E-727
81-728	SK318	1	美濃	1	2		1	-	7.60	11.10	4.30		鉄軸流し、18c	E-728
81-729	SK318	1	美濃	1	2		1	-	8.20	11.60	5.20		18c	E-729
81-730	SK318	1	瀬戸	1	2		1	9	8.50	13.20	5.60		鉄軸流し、18c	E-730
82-731	SK318	1	瀬戸	1	2		1	-	6.10	12.40	5.20		18c後	E-731
82-732	SK318	1	美濃	1	2		1	-	8.15	(13.00)	6.30		18c	E-732
82-733	SK318	1	瀬戸	2	1		1	-	4.50	(11.20)	3.30		鉄・呉須絵、18c後	E-733
82-734	SK318	1	美濃	2	1		1	-	3.50	(11.90)	4.90		呉須絵、18c中	E-734
82-735	SK318	1	美濃	2	3		1	9	4.70	14.00～15.80	7.60		18c	E-735
82-736	SK318	1	瀬戸	2	3		1	7	4.30	14.20	7.40		鉄絵、18c～19c中	E-736
82-737	SK318	1	美濃	2	3		1	-	3.65	(13.80)	9.80	5.20	18c	E-737
82-738	SK318	1	美濃	2	5		2	-	2.50	10.60	4.80		18c	E-738
82-739	SK318	1	不明	2	5		2	6,7	2.35	10.70	4.50			E-739
82-740	SK318	1	志戸呂?	2	4		2	7	1.80	7.30	3.20	9.70		E-740
82-741	SK318	1	美濃	2	4		2	-	1.90	10.90	5.80		18c後	E-741
82-742	SK318	1	美濃	3	9		1	-	2.90	5.40	3.40		18c後～19c中	E-742
82-743	SK318	1	美濃	3	4		1	-	5.00	8.30	4.90		18c	E-743
82-744	SK318	1	美濃	3	4		1	-	5.20～5.30	8.80	6.00		18c	E-744
82-745	SK318	1	美濃	3	4		1	6,9	6.30	9.70	6.60		18cか	E-745
82-746	SK318	1	関西?	3	5		1	-	3.50	12.50	12.30		上絵	E-746
82-747	SK318	1	瀬戸(赤津)	3	3	6	2	-	13.10	31.50	12.90		18c後	E-747
82-748	SK318	1	瀬戸(赤津)	3	3	10	2	-	13.20	32.00	12.70		18c	E-748
83-749	SK318	1	瀬戸(赤津)	3	3	6	2	3,4	16.70	37.90	13.50		18c	E-749
83-750	SK318	1	美濃	3	1		1	-	10.80	15.00	6.30		18c	E-750
83-751	SK318	1	美濃	3	1		1	9	13.00	23.00	11.40		18c	E-751
83-752	SK318	1	美濃	3	2		1	-	9.00～9.20	26.50	12.40		陰刻、銅緑軸施文、18c	E-752
83-753	SK318	1	美濃	3	2		1	9	8.70	25.70	11.60		陰刻、18c中～19c後	E-753
83-754	SK318	1	瀬戸<美濃	3	7		1	3	13.90	(19.20)	11.00		18c中～19c後	E-754
83-755	SK318	1	瀬戸	3	6		1	2	14.25	29.00	24.40		石埋込み、鉄・銅緑軸流し、18c後	E-755
84-756	SK318	1	美濃	4	5		1	-	7.20	4.50	4.50		鉄軸流し、18cか	E-756
84-757	SK318	1	美濃	4	5		1	9	8.50	4.70	4.60		18c	E-757
84-758	SK318	1	瀬戸	4	5		1,2	-	14.30	9.00	8.20		掛分け、18c	E-758
84-759	SK318	1	美濃	4	2		2	-	10.40	(6.40)	6.80		18c	E-759
84-760	SK318	1	美濃	4	2		2	-	9.90	6.40	6.60		18c	E-760
84-761	SK318	1	美濃	4	7		2	-	6.90	2.70	4.00		灰軸流し、18c	E-761
84-762	SK318	1	美濃	4	7		2	-	10.00	4.70	7.00		18c	E-762
84-763	SK318	1	瀬戸	7	2		1,2	2	6.60	3.30	5.20		掛分け、18c	E-763
84-764	SK318	1	瀬戸	7	4		1	-	2.20	3.90	2.10		18c後～19c中	E-764
84-765	SK318	1	瀬戸	7	4		1	-	2.20	4.30	2.50		18c後～19c中	E-765
84-766	SK318	1	瀬戸	7	4		2	-	5.20	5.40	4.70		18c	E-766
84-767	SK318	1	美濃	7	4		2	-	5.50	12.20	6.00	13.20	18c	E-767
84-768	SK318	1	瀬戸・美濃	7	10		1	-	2.30	8.40	-		18c	E-768
84-769	SK318	1	美濃?	7	10		2	-	2.00	8.20	-	10.20	18c	E-769
84-770	SK318	1	美濃?	7	10		2	-	4.60	7.40	-	10.00	18c後～19c中か	E-770
84-771	SK318	1	瀬戸(赤津)	7	10		5	-	2.45	11.20	5.60		18c後～19c中か	E-771
84-772	SK318	1	瀬戸	7	10		1	-	2.70	7.00	-	9.80	鉄・呉須絵、18c後か	E-772
84-773	SK318	1	瀬戸	7	10		1	9	2.20	6.60	-	9.20	鉄・呉須絵、18c後～19c中	E-773
84-774	SK318	1	美濃	7	10		1	-	1.50	9.30	-	9.50	18c～19c中	E-774
84-775	SK318	1	瀬戸	7	1		2	-	7.55	(11.70)	7.20		18c	E-775
84-776	SK318	1	不明	7	11		5	5,6,7	12.70	12.60	-			E-776
84-777	SK318	1	瀬戸	7	7		2	2,9	10.75	17.80	12.60		18c中～18c後	E-777
85-778	SK318	1	美濃	7	11		2	-	10.00	13.90	7.00		片口、18c～19c中	E-778
85-779	SK318	1	瀬戸	7	7		2	2	12.20	(15.00)	11.70		18c中～後	E-779
85-780	SK318	1	瀬戸	7	7		2	-	10.80	15.00	13.20		18c中～後	E-780
85-781	SK318	1	美濃	7	7		1	9	12.10	(26.80)	16.60		18cか	E-781
85-782	SK318	1	肥前	2	1		1	-	4.60	12.50	4.60	12.60	京焼風、鉄絵、18c前頃	E-782
85-783	SK318	1	肥前	1	7		3	-	1.50	2.30	1.20		紅皿	E-783
85-784	SK318	1	肥前	1	7		7	-	1.80	(4.60)	1.80		紅皿	E-784
85-785	SK318	1	肥前	1	2		3	-	4.00	(8.00)	3.80		18c前頃	E-785
85-786	SK318	1	肥前	2	1		3	-	2.70	13.00	5.80		1640～1650	E-786
85-787	SK318	1	肥前	7	10		3	-	1.85	5.50	-	6.40	18c第四四半期～19c前	E-787
85-788	SK318	1	京都	1	3		1	-	5.40～5.60	10.60	3.90		鉄絵	E-788
85-789	SK318	1	京都	1	3		1	-	5.40	10.80	4.00		鉄絵	E-789
85-790	SK318	1	美濃?	4	10		2	-	5.50	-	4.90		18c～19c中	E-790
85-791	SK318	1	不明	7	1		1	2	7.90	5.80	5.40			E-791

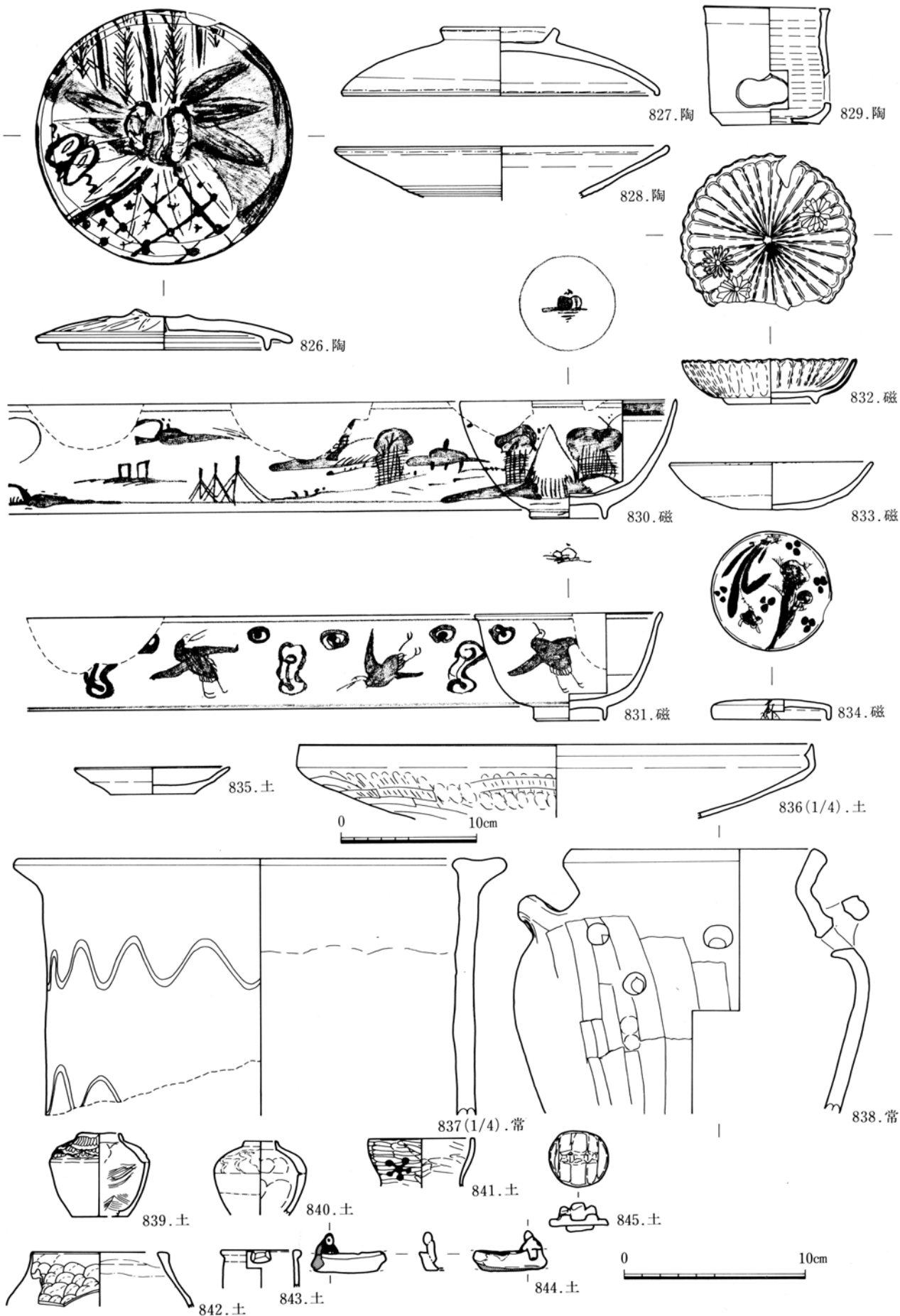
第32表 SK318出土遺物観察表① ※分類数値はV章3節参照

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
85-792	SK318	1	土器	2	1		5	-	1.70	(7.80)	3.80			E-792
85-793	SK318	1	土器	2	1		5	-	1.90	(9.80)	4.70			E-793
85-794	SK318	1	土器	2	1		5	7	2.10	(11.00)	5.40			E-794
85-795	SK318	1	土器	2	1		5	7	2.50	10.60	5.20			E-795
85-796	SK318	1	土器	2	1		5	6,7	4.40	19.70	10.00	20.00		E-796
85-797	SK318	1	土器	2	1		5	7	4.10	(21.60)	(9.80)			E-797
85-798	SK318	1	土器	8	1		5	2	6.60	(5.10)	4.00	5.70		E-798
85-799	SK318	1	土器	8	1		5	-	8.20	6.20	5.50	7.40	刻印「泉州磨生 サカイ 御塩所」	E-799
85-800	SK318	1	土器	8	1		5	-	8.20	5.80	5.60	7.60	刻印「泉湊伊織」、18c中～後	E-800
86-801	SK318	1	土器	8	2		5	-	1.95	7.50	-	7.80		E-801
86-802	SK318	1	土器	8	2		5	-	1.80	7.20	-	7.80		E-802
86-803	SK318	1	土器	5	3		5	7	-	(38.00)	-	-	内耳	E-803
86-804	SK318	1	土器	5	3		5	5,6	4.30	(37.20)	-	-		E-804
86-805	SK318	1	美濃?	7	10		5	6,7	5.90	7.50	-	11.70	瓦燈	E-805
86-806	SK318	1	美濃?	7	10		5	6,7	6.00	7.60	-	12.00	瓦燈(火消し用)	E-806
86-807	SK318	1	美濃?	7	11		5	6,7	3.50	8.60	-	-	瓦燈の受け皿に転用	E-807
86-808	SK318	1	陶質瓦						径 -	全長 -	幅 -	-	軒丸瓦(緑釉)	E-808
86-809	SK318	1	瓦						径 -	全長 10.80	幅 12.80	-	道具瓦	E-809
86-810	SK318	1	瓦						径 9.00	全長 12.60	幅 -	-	棟入瓦	E-810
86-811	SK318	1	瓦						径 -	全長 -	幅 14.20	-	丸瓦	E-811
86-812	SK318	1	瓦						径 2.40	全長 28.60	幅 30.40	-	棧瓦	E-812
86-813	SK318	1	石						-	全長 -	幅 -	-	砥石	S-813

第33表 SK318出土遺物観察表② ※分類数値はV章3節参照



第87図 SK318出土遺物実測図① (823・824は1/4、その他は1/3)

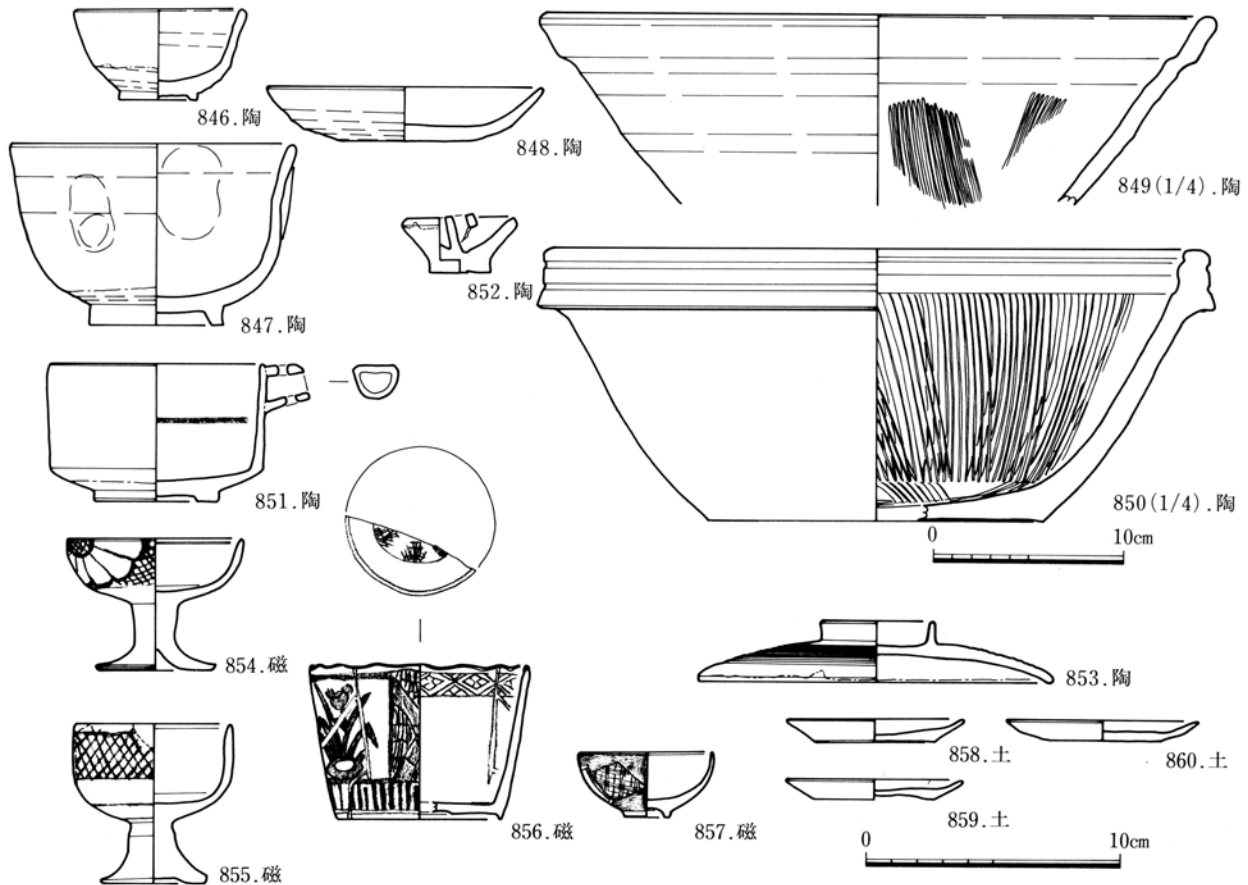


第88図 SK319出土遺物実測図② (836・837は1/4、その他は1/3)

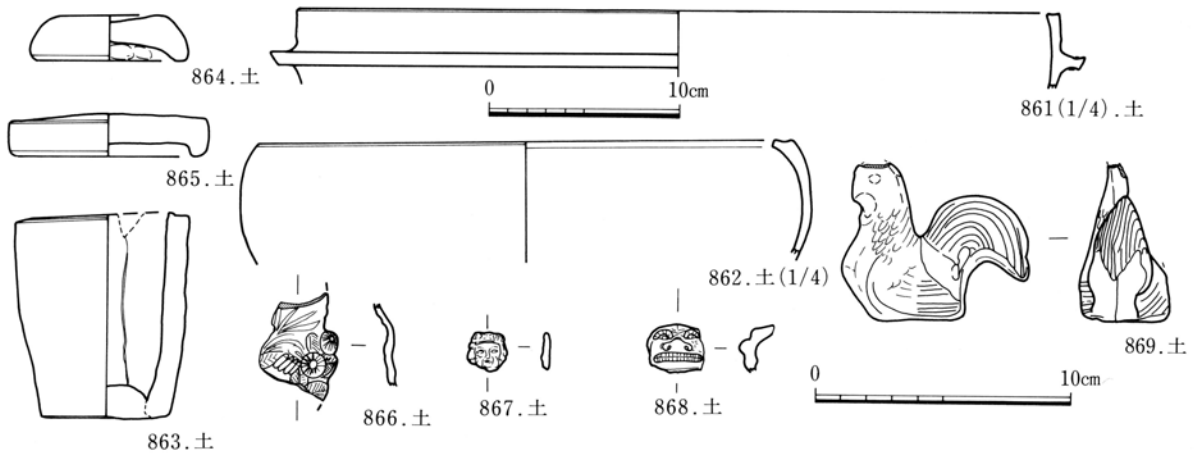
第三章 遺物

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
87-814	SK319	2	不明	1	7		1	-	3.35	(6.20)	2.40	6.30	鉄絵	E-814
87-815	SK319	2	美濃	1	5		1	-	6.10	10.60	5.00	10.90	呉須絵、19c中	E-815
87-816	SK319	2	不明	2	1		2	-	1.70	11.00	4.90	11.30		E-816
87-817	SK319	2	美濃	2	4		2	-	2.10	6.80	4.00	9.80	18c後～19c中	E-817
87-818	SK319	2	美濃	2	4		1	-	2.10	7.00	4.70	9.30	18c後	E-818
87-819	SK319	2	不明	2	1		1	-	4.50	11.30	3.40	11.60		E-819
87-820	SK319	2	瀬戸	2	1		1	-	4.00	13.60	7.10	13.90	呉須絵、19c中	E-820
87-821	SK319	2	瀬戸	4	2		1	-	7.00	6.20	5.00	8.40	19c	E-821
87-822	SK319	2	瀬戸	4	2		2	-	9.30	9.70	6.50	12.30	18c後～19c中	E-222
87-823	SK319	2	瀬戸・美濃	7	10		1,4	9	3.30	17.20	5.80	17.45	織部写し、鉄絵、No824とセット、幕末	E-823
87-824	SK319	2	瀬戸・美濃	7	9		1,4	6	8.40	18.70	7.90	(20.00)	織部写し、鉄絵、No823とセット、幕末	E-824
87-825	SK319	2	美濃	7	11		2	-	9.10	(10.00)	-	11.10	漏斗、18c後～19c中	E-825
88-826	SK319	2	瀬戸	7	10		1,4	-	-	11.40	-	14.20	織部写し、鉄絵、18c後～19c中	E-826
88-827	SK319	2	瀬戸	7	10		1	-	3.80	17.40	-	17.60	No828とセット、18c後～19c中	E-827
88-828	SK319	2	瀬戸	3	8		1	-	-	(18.10)	-	18.50	No827とセット、18c後～19c中	E-828
88-829	SK319	2	不明	3	4		5	-	6.65	6.80	5.40	-		E-829
88-830	SK319	2	瀬戸・美濃	1	2		3	-	6.60	11.80	4.20	-	1820～幕末、19c中	E-830
88-831	SK319	2	関西系	2	1		7	-	6.00	10.30	3.80	-	陽刻、幕末～明治初、19c中	E-831
88-832	SK319	2	関西系?	1	2		3	-	2.60	11.20	3.50	-	1820～1860	E-832
88-833	SK319	2	不明	2	5		7	7	2.50	9.60	4.90	-	灯明皿、19c	E-833
88-834	SK319	2	肥前系(関西系)?	7	10		3	-	1.10	6.90	-	-	19c初～幕末	E-834
88-835	SK319	2	土器	2	1		5	-	1.50	(8.50)	4.60	-		E-835
88-836	SK319	2	土器	5	3		5	6	-	(37.90)	-	-		E-836
88-837	SK319	2	常滑	6			10	5,6	-	(35.80)	-	-		E-837
88-838	SK319	2	常滑	7			10	5,6	-	18.00	-	-		E-838
88-839	SK319	2		人形									第39表参照	E-839
88-840	SK319	2		人形									第39表参照	E-840
88-841	SK319	2		人形									第39表参照	E-841
88-842	SK319	2		人形									第39表参照	E-842
88-843	SK319	2		人形									第39表参照	E-843
88-844	SK319	2		人形									第39表参照	E-844
88-845	SK319	2		人形									第39表参照	E-845

第34表 SK319出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照



第89図 SK11出土遺物実測図① (849・850は1/4、その他は1/3)



第90図 SK11出土遺物実測図② (861・862は1/4、その他は1/3)

図版No.	遺構No.	屋敷	産地・材質	器種名	器形1	器形2	釉薬	使用痕	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	備考	登録No.
89-846	SX11	2	瀬戸	1	7		1	-	3.60	6.50	3.00		17cか	E-846
89-847	SX11	2	瀬戸	1	2		1	-	7.20	11.00	5.30		非円形碗、18cか	E-847
89-848	SX11	2	美濃	2	5		2	-	2.10	10.80	4.90		18c	E-848
89-849	SX11	2	瀬戸	3	3	8	2	4	-	(35.00)	-			E-849
89-850	SX11	2	堺	3	3	9	5	4	14.40	(34.00)	8.80		18c後～19c前	E-850
89-851	SX11	2	美濃	7	3		1	3	5.40	(8.20)	4.80		18c～19c	E-851
89-852	SX11	2	瀬戸	7	4		1	-	2.20	4.20	2.40		18c後～19c中	E-852
89-853	SX11	2	美濃	7	10		1	-	2.40	13.80	4.40		18c後～19c中	E-853
89-854	SX11	2	瀬戸	1	6		3	-	5.20	6.80	4.50	6.90	1780～19c前	E-854
89-855	SX11	2	肥前系	1	6		3	-	6.30	(6.00)	4.00	6.20	18c第四四半期～19c	E-855
89-856	SX11	2	肥前	1	8		3	1	6.10	8.40	6.40	8.60	ソバ猪口、18c後～19c初	E-856
89-857	SX11	2	肥前(有田)	1	7		7	-	2.60	5.20	1.70	5.30	上絵、18c後～19c前	E-857
89-858	SX11	2	土器	2	1		5	7	0.90	(7.00)	4.80			E-858
89-859	SX11	2	土器	2	1		5	7	0.80	(7.00)	4.60			E-859
89-860	SX11	2	土器	2	1		5	-	0.80	(7.60)	4.40			E-860
90-861	SX11	2	土器	5	1		5	-	4.00	(40.00)	-			E-861
90-862	SX11	2	土器	5	3		5	6	4.80	(21.00)	-			E-862
90-863	SX11	2	土器	8	1		5	2	8.15	5.60	4.90	6.80		E-863
90-864	SX11	2	土器	8	2		5	-	1.80	5.80	-	6.20		E-864
90-865	SX11	2	土器	8	2		5	-	1.70	7.20	-	7.85		E-865
90-866	SX11	2		人形									第39表参照	E-866
90-867	SX11	2		人形									第39表参照	E-867
90-868	SX11	2		人形									第39表参照	E-868
90-869	SX11	2		人形									第39表参照	E-869

第35表 SX11出土遺物観察表 ※分類数値はV章3節参照

2 その他の遺物

(1) 人形・玩具類（第92～94図及び各一括出土遺構遺物図版）

本調査地点で出土した人形・玩具類は、総数382（546）点である。数値は識別可能な個体数、（）内は接合前破片数である（以下同じ）。その内遺構からの出土は105（142）点で全体の3割近くを占めている。材質は素焼及び鉛釉を施した土製品を主とするが、一部に陶製、磁製品も含まれる。種別は人形、ミニチュアの他、芥子面、首人形、面、鈴、碁石状土製品があった（第36表）。以下人形・玩具類の出土内容について種別毎に説明を加えることとする。

人形は272（401）点出土し、全体の7割以上を占めている。形状には神に類するもの、人物、動物の3種類がある。但し人形の4割は形状不明の破片であった。神に類するものとしては、天神、恵比須、大黒、福助があるが、天神の4点を最高として各1、2点ずつしかない。人物では各種の童子がもっとも多く、その他に唐子、子守、虚無僧、釣人、相撲取組み、婦人などがあった。動物では猿、馬、鹿、稲荷狐、犬、猫、鶏、鳩、雀、鷹、鴛鴦、水鳥、亀、魚、金魚、蛙などがある。この内鶏が22点で、全体的に鳥類が多い。鶏の次に多いのは12点の馬で、この内11点は912と同形のものである。但し馬は細片が多く、これ以外には同形のものが多数出土する傾向はない。なお、422・919・920・941は浮き人形、883は笛になっている。

ミニチュアには器物形と建造物形の2種類がある。器物形には碗、皿、鉢、播鉢、土鍋、土瓶、鉄瓶、鉄釜、蓋、徳利、壺、風炉、こんろ、くど、硯、太鼓などがあった。947は楽茶碗である。口縁をやや波打たせ、高台裏に多数の刺突痕が付けられている。948は素焼の播鉢で、瀬戸美濃製品を模倣したものと思われる。183は陶製の鍋であるが、錆釉を全面に施し、底部にへそ状の突起が表現してあることから鉄鍋を模した可能性が考えられる。建造物形には橋、舟、塔、家、灯籠があったが、舟が4点、灯籠、橋が3点で量的に少ない。

芥子面（けしめん）とは、型成形で片面のみ立体的に抜き出した、極小型の土製品である。屋敷地2から3点出土している。形状は867・893が人面、894が大黒全身像である。両者とも「芥子面」と称されるものにあたるかどうかには問題があるが、他の人形とは区別してとりあえずこの名称を使用することとする。

首人形は939が1点のみ出土している。頭部のみを表裏とも表現し、棒の先に取り付けるための孔が開けられている。形状は剃髪の老人であることから、西行と思われる。

面は938の狐面が1点のみ出土した。前後の型で粘土をプレスして成形されている。裏側の土手状部分に穿孔しているが、孔は貫通していない。

鈴は3点出土しているが、その内1点は玉で、もう1点は近世の遺構から出土しているが形態上戦国時代に属する可能性があり、実質的には895の1点しかない。

碁石状土製品は3点出土した。いずれも425と胎土、形態、大きさとも同じで、表面に指圧痕等の調整痕は見られない。また、彩色の痕も認められない。

遺構の相伴遺物によると、本調査地点出土の人形・玩具類の出現時期は18世紀後半から

である。18世紀前半までの遺構からは、特殊な例外を除いて人形・玩具類は出土せず、18世紀後半の遺構から、まとまって出土するようになることが確認される。18世紀前半以前の遺物としては、S K313出土の182の鉢？と183の鉄鍋のミニチュアがある。但しこれらは形状も特殊で、玩具かどうかということ自体問題があると思われる。他に17世紀前半のS D603からは941の陶製の魚が出土している。

大きさについては、多くが15cm以下の中・小型品である。大型のものでは872の福助らしき人物像と、881の猫、904の人物脚部、950の舟があるが、他には形状の判断できるものはない。なお、904はおそらく鎧に掛けた童子の左足部分と思われる。

種別については、人形が圧倒的に多くミニチュアはその3分の1程度である。ただし施釉品についてはミニチュアが人形の3倍となっている。

遺構出土のものについては、最も出土数の多いのはS X11の23 (30) 点であり、以下S K320の18 (33) 点、S K62の11 (16) 点、S K319の7 (14) 点と続き、その他の遺構では4点以下の出土しかない。ただしS X11・S K320においては形状不明の人形の破片が多く、ある程度形の復元できるものは図示した限りである。従って、本調査地点では人形・玩具類を多量に出土する遺構は存在しない。注目されるのは上記の遺構がすべて屋敷地2に属するもので、屋敷地1・屋敷地3では人形・玩具類の遺構からの出土が更に少なくなるということである。また、陶磁器全体の出土量が大きければ人形・玩具類も一定量出土する、という関係は成り立たない。三の丸遺跡愛知県警本部地点でも指摘されたように、本調査地点でも人形・玩具類の出土には遺構による偏りがあることが確認できる。調査区西辺(屋敷地1)の、幕末期の遺物が出土する巨大な廃棄土坑S K312・318では、陶磁器カウント数がそれぞれ千点を越えているが、人形・玩具類は1、2点の細片以外殆ど出土していない。また、屋敷地2で隣接する、幕末期の遺物を出土する廃棄土坑S K316・319は、それぞれ104点と183点の陶磁器をカウントしており、器種の内容にも特に差は見られないが、人形・玩具類の出土はS K319が7 (14) 点であるのに対し、S K316はわずか1 (1) 点であった。このことを、遺構外出土遺物を含めて出土地点毎に見てみると、人形・玩具類出土の空間的偏りが明瞭に現れる(第37表・第91図)。屋敷地1における出土数は19 (22) 点で、全体のわずか5 (4) %である。人形は941の陶製の魚と図示しなかった磁製の稲荷狐以外、形状の復元できるものは殆ど出土せず、ミニチュアも9点で、しかも940の碗やススの付着した鉄釜など実用品の疑いがあるもの以外は、蓋と碗の2点のみである。これに対し、屋敷地2では163 (271) 点、屋敷地3では122 (154) 点が出土しており、それぞれ全体の43 (50) %・32 (28) %を占めている。特に出土が集中したのは屋敷地2の東辺(北側調査区)、及び屋敷地3の庭園遺構のある位置と南側の屋敷境付近であった。屋敷地1での人形・玩具類の空白については、調査区西辺において近代の攪乱が激しく、上面の遺構が殆ど破壊されてしまった可能性も考慮する必要があるが、屋敷地1が1700年前後にその南側の渡邊半蔵の屋敷地に添地として付け加えられ、調査地点が屋敷裏の更に裏にあたる空間であった、という事情もある程度関係しているものと思われる。本調査地点に

見られる人形・玩具類の出土状況は、その場の空間利用、廃棄のあり方の一端を反映したものと推定される。

文字・記号のあるものは7点あった。墨書があるものは879の相撲取組み、907の釣人、437の鍋、928の鉢である。879の一方の人物の背中には「□川」、907の底部には「十四」と書かれている。刻印のあるものは949のこんろのほかに図示しなかった蓋がある。こんろの底部には「清水」の崩し字と判読不明のもう一種の刻印が押されている。また、886の鴛鴦の底部には亀甲枠に「亀」の字の浮印がある。この紋は欽古堂亀祐とその子孫が使用したことが知られている。欽古堂亀祐（1765～1837）は京焼の陶工であるが、伏見街道沿いの人形・焼物を売る店「丹波屋」に生まれ、伏見人形の原型も製作したと伝えられている。浮印であることから、丹波屋のものとするれば幕末期の3代目亀助以降のものと考えられる。

最後に本調査地点における人形・玩具類の特徴について簡単にまとめておく。

- ① 人形・玩具類の全体の出土数は、これまで本埋蔵文化財センターが調査した名古屋城三の丸遺跡の各調査地点と比較すると少ない(第38表)。人形・玩具類のカウントを行った家庭・簡易裁判所合同庁舎地点、愛知県警本部地点と比べると、本調査地点は単位面積当たりの出土量で3分の1である。ただし、近郊の宿場町であった清洲城下町遺跡との比較では、遺物出土量の最も多かった本町地区に対してもその4倍の出土量がある。
- ② 人形・玩具類出現の時期は18世紀後半からである。
- ③ 人形・玩具類の出土数には空間的な偏りが認められる。
- ④ 人形では、童子座像(875)、馬(912)、鳩(885)、鷹、雀(923・924)、鶏(946)、猫などこれまでの三の丸遺跡の調査で複数以上出土する傾向のある形のは、本調査地点においても一通り出土しているが、同じ形のものが多数出土することは殆どなく、形状は様々である。
- ⑤ 円板状の「泥面子」は、名古屋城下の遺跡および清洲城下町遺跡においてはこれまで1点も出土していないが、本調査地点においてもまったく出土しない。

参考文献

- 松井かおる 1991 「型抜き遊びについて」 『江戸在地系土器の研究Ⅰ』 江戸在地系土器研究会  
 広田長三郎 1972 『欽古堂亀祐』 限定出版(京都)  
 金子健一編 1992 『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』 財愛知県埋蔵文化財センター  
 遠藤才文編 1993 『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』 財愛知県埋蔵文化財センター  
 鈴木正貴編 1995 『清洲城下町遺跡Ⅴ』 財愛知県埋蔵文化財センター

	土製品 (無釉)		土製品 (施釉)		陶製品		磁製品		合計	
	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数
人形	246	372	16	18	5	5	5	6	272	401
ミニチュア(器物)	32	51	32	38	8	13			72	102
ミニチュア(建造物)			14	17					14	17
芥子面	4	4							4	4
首人形	1	1							1	1
面	1	1							1	1
鈴	3	3							3	3
碁石状土製品	3	3							3	3
不明	7	9	4	4	1	1			12	14
合計	297	444	66	77	14	19	5	6	382	546

第36表 人形・玩具類 種別・材質別出土数

	屋敷地1				屋敷地2				屋敷地3				不明				合計			
	遺構内 個体数	破片数	遺構外 個体数	破片数	遺構内 個体数	破片数	遺構外 個体数	破片数	遺構内 個体数	破片数	遺構外 個体数	破片数	遺構内 個体数	破片数	遺構外 個体数	破片数	遺構内 個体数	破片数	遺構外 個体数	破片数
人形	4	4	3	4	43	65	79	142	17	17	68	97	1	1	57	71	65	87	207	314
ミニチュア(器物)	6	7	3	3	17	29	11	21	4	5	17	19			14	18	27	41	45	61
ミニチュア(構造物)					3	4	2	2			6	6			3	5	3	4	11	13
芥子面					2	2	1	1							1	1	2	2	2	2
首人形											1	1							1	1
面					2	2			1	1	1	1					3	3		
鈴					1	1	1	1			1	1					1	1	2	2
碁石状土製品									4	4	2	2					4	4	8	10
不明			3	4			1	1							2	3				
小計	10	11	9	11	68	103	95	168	26	27	96	127	1	1	77	98	105	142	277	404
合計	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数

第37表 人形・玩具類 屋敷地別出土数

調査地点(報告書名)	人形・玩具類 出土個体数 A		調査面積 概数(m <sup>2</sup> ) B		1 m <sup>2</sup> 当り 出土数 A/B	人形・玩具類 出土個体数 比率		陶磁器 遺構内 口縁残存率 比率	
	個体数	破片数	比率	比率		比率	比率	比率	比率
a. 名古屋城三の丸遺跡III	947	2800	0.82	0.338	626	5.96	—	—	
b. 名古屋城三の丸遺跡IV	1065	3600	1.06	0.296	938	8.93	32161	1.34	
c. 名古屋城三の丸遺跡V	382	3400	1.00	0.112	105	1.00	24026	1.00	
a + b + c	2394	9800	—	0.244	1669	—	—	—	
清洲城下町遺跡V(本町地区)	194	6557	1.93	0.030	108	1.03	18707	0.78	

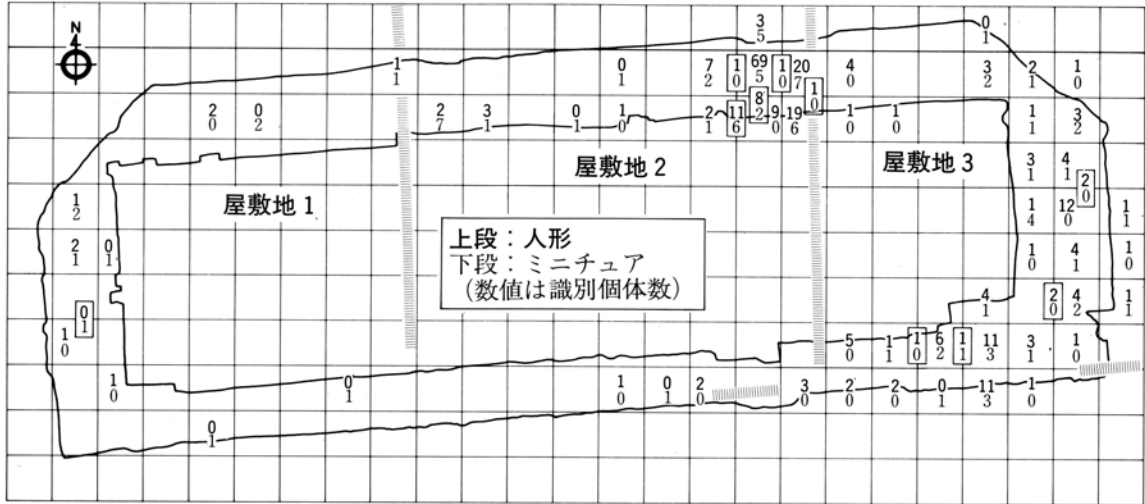
第38表 人形玩具類 調査地点別出土数の比較

\* 比率は本調査地点を1とした場合

No.	遺構番号	グリッド	材質	種別	形状	成形法	釉・彩色	胎土色/精粗/焼成	高	幅	奥行	備考
182	SK313	III A19n	土製	ミニチュア	鉢?	ろくろ	鉛釉(透明/全面、緑/絵)	橙白色	2.5	6.4	3.0	
183	SK313	III A19n	陶製	ミニチュア	鉄鍋?	ろくろ+手(両耳、3足)	錆釉(全面)	灰色/硬	残3.1	9.2		口縁欠損部に曇り着
379	SD101	IV B4h	土製	人形?	狐	手捻り	鉛釉(透明、茶/目・頭頂部)	黄白色	2.9	1.6	残1.6	
420	SK320	III B19de	陶製	ミニチュア	土鍋	ろくろ+手(両耳、3足)	鉄釉	灰色	4.0	7.8	3.2	
421	SK320	III B19de	土製	ミニチュア	鉄瓶	型/上下	鉄釉(透明、緑斑)	黄白色/粗	残1.7	2.4		注口は貫通後埋る
422	SK320	III B19de	土製	人形/浮	金魚	型/上下 中空 頂孔0.1 薄手		黄灰色	3.9	5.4	8.8	
423	SK320	III B19de	土製	人形	童子	型/前後 中空 内外面雲母		淡褐色	残2.8	残3.1	残1.4	腹部も残存
424	SK320	III B19de	陶製	ミニチュア	蓋	ろくろ	灰釉、上絵(赤、他2色)	黄白色/精	残0.6	2.4		
425	SK320	III B19de	土製	基石?		手捻り?		褐色	0.7	2.0	2.0	完形
437	SK62	III B18e, 19e	陶製	ミニチュア	土鍋	ろくろ+手(両耳、3足)	鉄釉	黄白色	3.5	6.7	2.3	底部墨書?
438	SK62	III B18e, 19e	陶製	人形	鳥	手捻り	灰釉、鉄絵	黄灰色/精	残2.7	1.3	残2.6	
839	SK319	III A19r	土製	ミニチュア	土瓶	型/上下		黄灰色/軟	4.6	2.4	3.0	
840	SK319	III A19r	土製	ミニチュア	土瓶	型/上下	鉛釉(透明)、白土	淡褐色/粗	残4.1	1.8		
841	SK319	III A19r	土製	ミニチュア?	器物	ろくろ? 内外面ヘラケズリ	鉛釉(透明、緑斑、濃茶/絵)	黄白色/粗	残2.7	5.8		織部風、釉は白濁
842	SK319	III A19r	土製	ミニチュア?	器物	型/半面(外面)?	鉛釉(透明)	淡褐色/精/硬	残3.1	7.6		
843	SK319	III A19r	土製	ミニチュア	こんろ	ろくろ+手(ツメ3ヶ?)		橙白色	残2.1	4.4		
844	SK319	III A19r	土製	ミニチュア	舟+人	型/左右+手(人物)	鉛釉(透明/顔、濃茶/髪・目・舟べり、茶/衣)	橙白色/軟	2.2	残1.0	残4.1	舟側面は無釉
845	SK319	III A19r	土製	ミニチュア	釜蓋	型/半面+手(返し)		橙白色	1.6	3.2		完形
866	SX11	III B18l	土製	人形	人物/左手	型/前後 中空		灰褐色/軟	残4.3	残3.1	残1.2	
867	SX11	III B18l	土製	芥子面	人物	型/半面 裏ヘラケズリ		淡褐色	1.5	1.6	0.4	完形
868	SX11	III B18l	土製	人形	獅子頭?	型/前後 中空		灰白色/粗	残1.9	残2.3	残1.4	
869	SX11	III B18l	土製	人形	鶏	型/左右 中空 布目		橙白色/軟	残6.3	3.5	7.4	外面黒色付着物
870	検出 I-1	III B18e	土製	人形	天神	型/前後 孔無	鉛釉(透明/全面、緑/台座)	橙白色	残2.9	3.1	2.0	
871	検出 I-2	III B18de	土製	人形	恵比寿	型/前後 中空	鉄釉(透明、緑/上衣、黒/鳥帽子・眉・目、赤/鬚)	橙白色	残3.1	残3.0	残1.6	
872	検出 I-1	III B19d	土製	人形	福助?	型/前後 中空 布目 薄手		橙白色	残2.8	残3.4	残1.5	
873	北壁トレンチ	III B17e	土製	人形	恵比寿	型/前後 中空 孔無		橙白色/軟	5.8	4.5	2.6	完形
874	北壁トレンチ	III B17e	土製	人形	大黒	型/前後 中空 孔無		橙白色	5.6	3.8	2.9	完形
875	SK59	III B18f	土製	ミニチュア	童子/座像	型/前後(頭・脚は別作り) 中空		淡褐色/軟	残4.8	残3.0	残3.1	
876	検出 I-1	III B18e	土製	人形	童子	型/前後 中空 内外面雲母?		淡褐色	残4.6	残5.2	残3.4	状見人形? 右袖他残存
877	検出 I-1	III B19e	土製	人形	童子	型/前後 中空		淡褐色	残2.7	残2.6	残1.7	背面左袖も残存
878	検出 II-1	III B19b	土製	人形	虚無僧	型/前後 中空	鉛釉(透明、緑/笠・斑・茶斑)	黄白色	残7.1	残4.4	残2.7	
879	検出 I-4	IV B5b	土製	人形	相撲取組み	手捻り		橙白色/軟	残5.2	残4.7	残5.6	墨書「□川」
880	検出 I-1	III B19e	土製	人形	猿?	手捻り		橙白色/精/軟	2.9	1.9	1.8	
881	検出 I-1	III B19e	土製	人形	猫	型/前後 中空 布目		黄白色	残5.6	残4.4	残3.9	
882	検出 II-2	III A19s	土製	人形	蛙	型/半面 裏指オエ	鉛釉(緑)	橙白色	1.4	2.0	残2.6	
883	北壁トレンチ	III B17e	土製	人形/笛	鳥	手捻り 中空 吹口孔0.3~0.15	鉛釉(透明/全面、緑斑)	橙白色	2.0	2.2	6.2	完形
884	検出 I-1	III B19e	土製	人形	水鳥	型/左右 中空 布目		橙白色/軟	残2.4	残1.2	残4.1	
885	検出 II-3	III B18e	土製	人形	鳩	型/左右 中空		黄白色	7.8	残2.2	残7.7	
886	検出 II-3	III B18e	土製	人形	鴛鴦	型/左右 中空 布目 薄手		黄灰色	5.7	残4.6	残7.1	浮印/亀甲枠に「亀」字
887	北壁トレンチ	III B17e	土製	ミニチュア	皿	型/半面 高台張付 外面雲母?	彩色(白、濃茶/枝、赤/花、緑/葉)	黄白色/精	1.7	5.8	7.7	完形
888	北壁トレンチ	III B17e	土製	ミニチュア	皿	型/半面 高台張付 外側雲母?	彩色(白、濃茶/枝、赤/花、緑/葉)	橙白色/精	1.7	5.7	7.8	完形
889	北壁トレンチ	III B17e	陶製	ミニチュア	壺	型/前後	透明釉、白土	黄褐色/精	3.6	0.7	2.7	完形
890	北壁トレンチ	III B17e	陶製	ミニチュア	壺	ろくろ	透明釉	暗褐色	残3.6	1.8		
891	検出 I-1	III B18e	土製	ミニチュア?	風炉	ろくろ+手(ツメ3ヶ?) 孔0.6		橙白色/粗	残3.3	8.1		
892	検出 I-1	III B19d	土製	ミニチュア?	器物	型/半面(陰紋) 裏ナデ		橙白色/軟	0.3	3.0	残2.7	
893	検出 I-1	III B19e	土製	芥子面	人物	型/半面 裏指オリエ		褐色	1.6	1.6	0.4	完形
894	SK62	III B18e, 19e	土製	芥子面	大黒	型/半面 側面ヘラ切り落とし		淡褐色	1.3	1.1	0.4	完形
895	SK112	III B18a	土製	鈴		手捻り 紐孔0.25		黄灰~灰色	3.6	2.9	2.9	

第39表 人形・玩具類観察表①

- \* 成形欄の「孔」の後は、孔直径×深さ(cm単位)を数字のみ記載する。
- \* 法量の単位はcmである。
- \* 器物形ミニチュアの法量は、「幅」欄に口径を、「奥行」欄に底径を記載する。

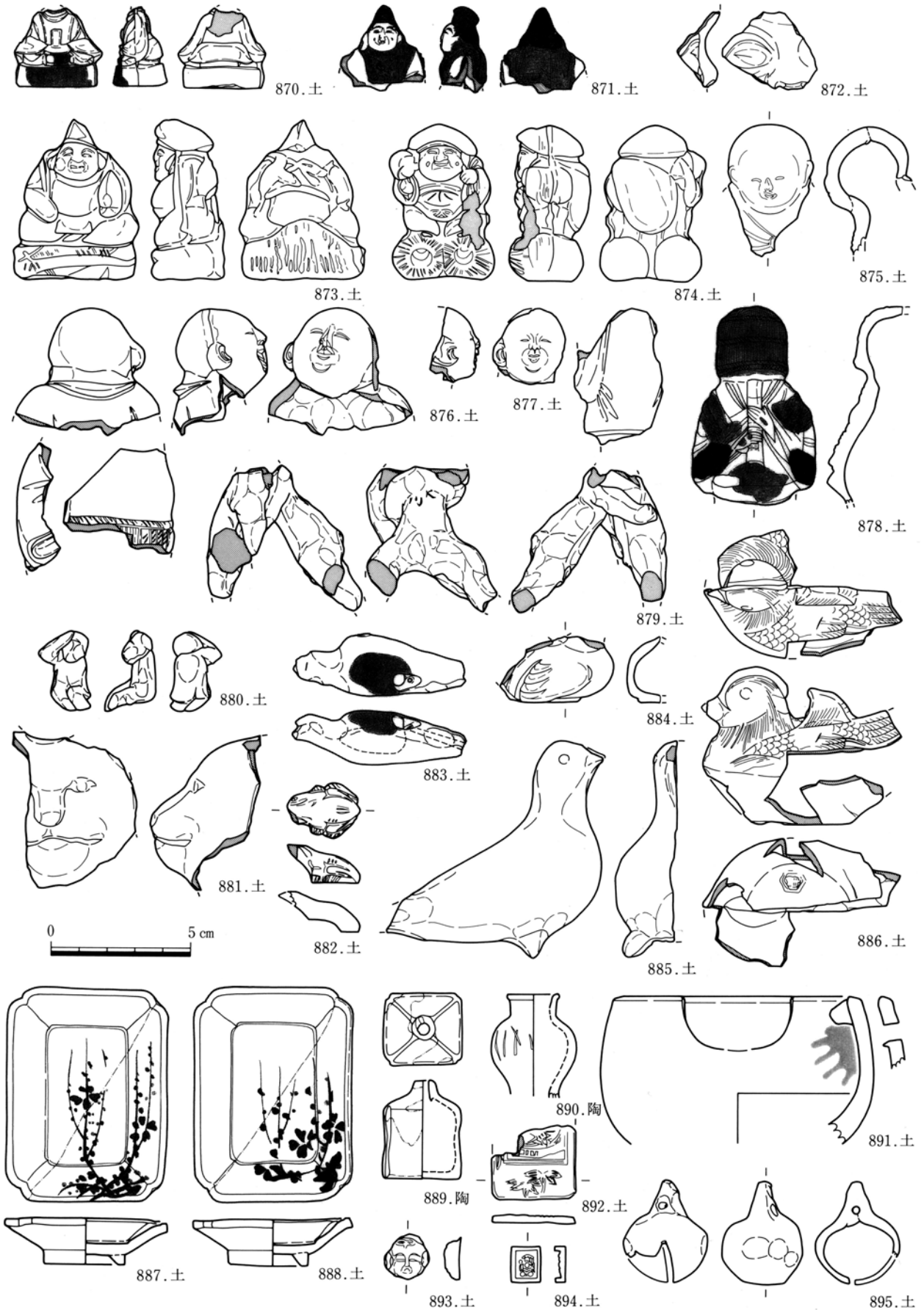


第91図 人形・ミニチュア出土分布 (格子は5×5mの小グリッド)

No	遺構番号	グリッド	材質	種別	形状	成形法	軸・彩色	胎土色/精粗/焼成	高	幅	奥行	備考
896	検出II-4	IVB2m	土製	人形	天神	型/前後 底孔0.25×1.9		淡褐色	3.1	2.4	1.1	ほぼ完形
897	検出I-3	IVB3l	土製	人形	天神	型/前後 底孔0.25×1.8、0.25×2.0		橙白色	残2.8	3.0	1.5	
898	SX301	IVB4j	土製	人形	天神	型/前後 底孔3.5×2.1		橙白色	残2.7	2.9	1.4	型あまい
899	検出II-2	IVB1l	土製	人形	福助?	型/前後 中空	彩色(白)	灰褐色	残2.8	残3.0	残1.3	
900	検出I-2	III B18k	土製	人形	福助	型/前後 中空 底孔0.1 内面雲母	彩色(白/地、黒/髪・眉・目、赤/上衣、黄緑/下衣)	褐色	2.4	2.1	1.7	
901	SK22l	IVB2l	土製	人形	童子	型/前後 中空	鉛釉(透明、茶/眉・目)	橙白色	残2.2	残1.8	残1.6	
902	検出I-3	IVB4j	土製	人形	童子	型/前後 中空 底孔0.3 薄手 雲母		黄灰~淡褐色	残9.9	残5.3	3.3	
903	東壁トレンチ	III B19l	土製	人形	童子	型/前後 中空 布目		橙白色/軟	残4.6	残3.2	残1.5	型あまい
904	検出II-2	IVB1l	土製	人形	人物/左足	型/前後 中空 内外面雲母		淡褐色	残4.9	残5.9	残1.5	
905	検出II-6	IVB1l	土製	人形	婦人	手+型/半面(顔)		褐色/粗	6.8	3.0	残2.7	
906	検出II-2	IVB1l	土製	人形	子守り	型/前後 中空 頭部補込		橙白色/粗/軟	残8.3	残4.2	残2.0	
907	検出I-3	IVB4j	土製	人形	釣人	型/前後 中空 孔無	鉛釉(透明、黄/脚半、橙/笠、緑/衣・びく、濃緑/びく、茶/眉・目)	黄白色/精/硬	5.5	5.6	3.6	完形、墨書「十四」
908	検出I-2	IVB4l	土製	人形	人物/左足	型/前後? 中空	彩色(黒/脚半)	白色	残2.2	残4.1	残1.9	
909	検出I-1	IVB4g	磁製	人形	手風琴弾き	型/前後 中空	透明釉、上絵(赤/蛇腹、橙/襟、黄緑/上衣)	白色	残3.3	残1.6	残2.3	
910	SX301	IVB4i	土製	人形	(馬+)人	手+型/半面(顔)		黄白色/硬	残6.4	残3.1	残3.9	
911	検出II-2	IVB1l	土製	人形	猿	手捻り+型/半面(顔)		黄白色	3.9	残2.2	残2.7	
912	検出II-6	IVB1l	土製	人形	馬	型/左右 中空		黄白色/硬	残6.9	残2.1	残7.7	
913	検出II	IVB3j	土製	人形	馬	型/左右 後足底孔0.25×1.0		橙白色	2.9	1.8	残3.4	
914	SK18	IVB4j	土製	人形	狐or犬?	手捻り		灰褐色	残2.7	残2.2	残2.0	
915	検出I-3	IVB4j	土製	人形	狐?/脚部	手捻り		淡褐色	残6.1	残1.4	残4.3	
916	SK219	IVB3l	土製	人形	犬?/脚部	型/前後? 中空 布目 薄手		橙白色/軟	残5.2	残5.1	残3.7	
917	検出II-3	IVB2l	土製	人形	犬	手捻り		橙白色	残2.3	残3.3	残4.2	
918	検出II-2	IVB1l	土製	人形	亀	型/上下 左脇腹孔0.3×2.1		橙白色	1.2	2.8	4.8	完形、孔は甲に貫通
919	検出I-1	IVB4g	磁製	人形/浮	金魚	型/上下 中空	透明釉、上絵(淡朱、濃朱)	白色	残2.5	残4.9	残3.7	
920	検出I-1	IVB4g	磁製	人形/浮	金魚	型/上下 中空 頂孔0.05 布目 薄手	透明釉、上絵(赤、金)	白色	残1.5	残2.2	残2.9	
921	検出I-1	IVB4j	土製	人形	鶏	型/左右 中空		淡褐色/軟	残4.2	残2.0	残4.2	
922	検出II	III B8l	土製	人形	鶏	型/左右 中空 薄手		橙白色	残6.7	残2.1	残5.2	
923	検出II-2	IVB1l	土製	人形	雀	手捻り 目は張付け		橙白色	3.9	2.1	4.9	
924	検出II-2	IVB1l	土製	人形	雀	手捻り 底孔0.6×1.5		淡褐色	5.0	残2.9	残6.2	
925	検出I-2	IVB4k	土製	人形	雉?	型/左右 中空		淡褐色	残4.3	残2.0	残5.5	
926	検出II-2	III B19l	土製	ミニチュア	碗	型/半面	鉛釉(緑)	黄白色/軟	1.6	3.4	1.2	
927	検出II-4	III B19k	土製	ミニチュア?	皿?	ろくろ	鉛釉(透明/全面、緑斑)	黄白色/軟	1.7	6.0	3.9	
928	検出I-4	IVB4k	土製	ミニチュア	鉢	型/半面	鉛釉(緑)	黄白色/粗	2.4	推5.0	2.2	底部墨書「□」
929	SK18	IVB4j	土製	ミニチュア	皿/扇形	型/半面 高台張付	鉛釉(透明/全面、黄・緑/扇面、赤/要)	橙白色	1.0	推3.7	推5.3	
930	検出I-3	IVB4j	土製	ミニチュア	徳利	ろくろ	鉛釉(透明、緑斑、茶/絵)	黄灰色/粗	残3.7			
931	SX301	IVB4j	土製	ミニチュア	蓋	型/半面 裏へラケズリ	鉛釉(緑)	橙白色	0.8	2.4		完形
932	検出I-3	IVB4j	土製	ミニチュア	蓋	型/半面 裏へラケズリ	鉛釉(透明、緑)	黄白色	0.8	2.8		完形
933	検出I-2	III B18j	土製	ミニチュア	碗	型/半面 裏へラケズリ 外面雲母		淡褐色	0.6	2.1	4.6	
934	検出II-4	III B18k	土製	ミニチュア	灯籠/笠	型/半面(笠)、前後(宝珠)	鉛釉(透明、黄、緑)	橙白色/軟	残3.4	残5.3	残4.7	
935	検出I-4	IVB1k	土製	ミニチュア	灯籠/笠	型/半面	鉛釉(透明、緑)	黄白色	残0.9	残3.1	残2.6	
936	検出I-4	IVB1k	土製	ミニチュア	茶室?	型/半面 裏指オリエ	鉛釉(透明、緑/屋根、茶/窓、濃茶/柱)	橙白色	残3.0	残2.0	残1.5	
937	検出II	IVB3j	土製	ミニチュア	塔	型/対角線 頂部孔0.3×1.5		灰褐色/粗	残4.9	残3.1	残3.1	
938	検出I-1	IVB3l	土製	面	狐	賣め型/前後 土手部孔0.2×1.1		褐色/粗	4.2	残3.9	2.5	
939	検出II-6	IVB1l	土製	首人形	西行?	型/前後 孔0.2×2.0		黄灰色/精	2.4	2.6	2.2	ほぼ完形
940	検出I-2	IVA5q	土製	ミニチュア	碗	型/半面	鉛釉(緑)	橙白色	1.0	2.5	1.0	
941	SD603	IVA5k	陶製	人形/浮	魚	型/左右+手 中空 孔無 薄手	鉄釉	黄白色/精	1.9	残2.1	6.8	下顎に共土の重り
942	検出I-4	IVB5j	土製	人形	童子/春駒	型/前後 中空 薄手 内外面雲母		黄灰~淡褐色	残5.3	残3.5	残1.9	
943	北壁トレンチ	III A18q	陶製	人形	鹿	型/左右 孔無	鉄釉	灰色/精/硬	3.6	2.0	残4.0	
944	検出II-2	III B18f	土製	人形	亀	型/上下 中空 内面雲母		淡褐色	残2.0	4.7	残5.6	
945	検出II	IVB5k	土製	人形	鶏	型/左右 中空 薄手 内外面雲母		橙白色	残6.2	残2.2	残3.2	
946	検出I-4	IVB5g	土製	人形	鶏	手捻り 底開口		橙白色/軟	残7.1	残3.9	残5.2	
947	トレンチ	IVB5j	土製	ミニチュア	茶碗	型?	鉛釉(透明)	淡褐色	1.2	2.2	1.3	高台内刺突痕多数
948	検出I-4	IVB5j	土製	ミニチュア	播鉢	ろくろ 回転糸切痕		淡褐~黄灰色	3.1	8.4	2.4	
949	検出II-5	III B18f	土製	ミニチュア	こんろ	型/半面+手(突起3ヶ所) 窓孔1.3		黄灰色/粗	3.2	3.6	2.7	刻印「清水」 「カ□□」
950	検出II-1	III B19f	土製	ミニチュア	舟	型/半面 裏ナテ 薄手	鉛釉(透明/全面)	黄白色/精	残1.5	残4.0	残8.1	

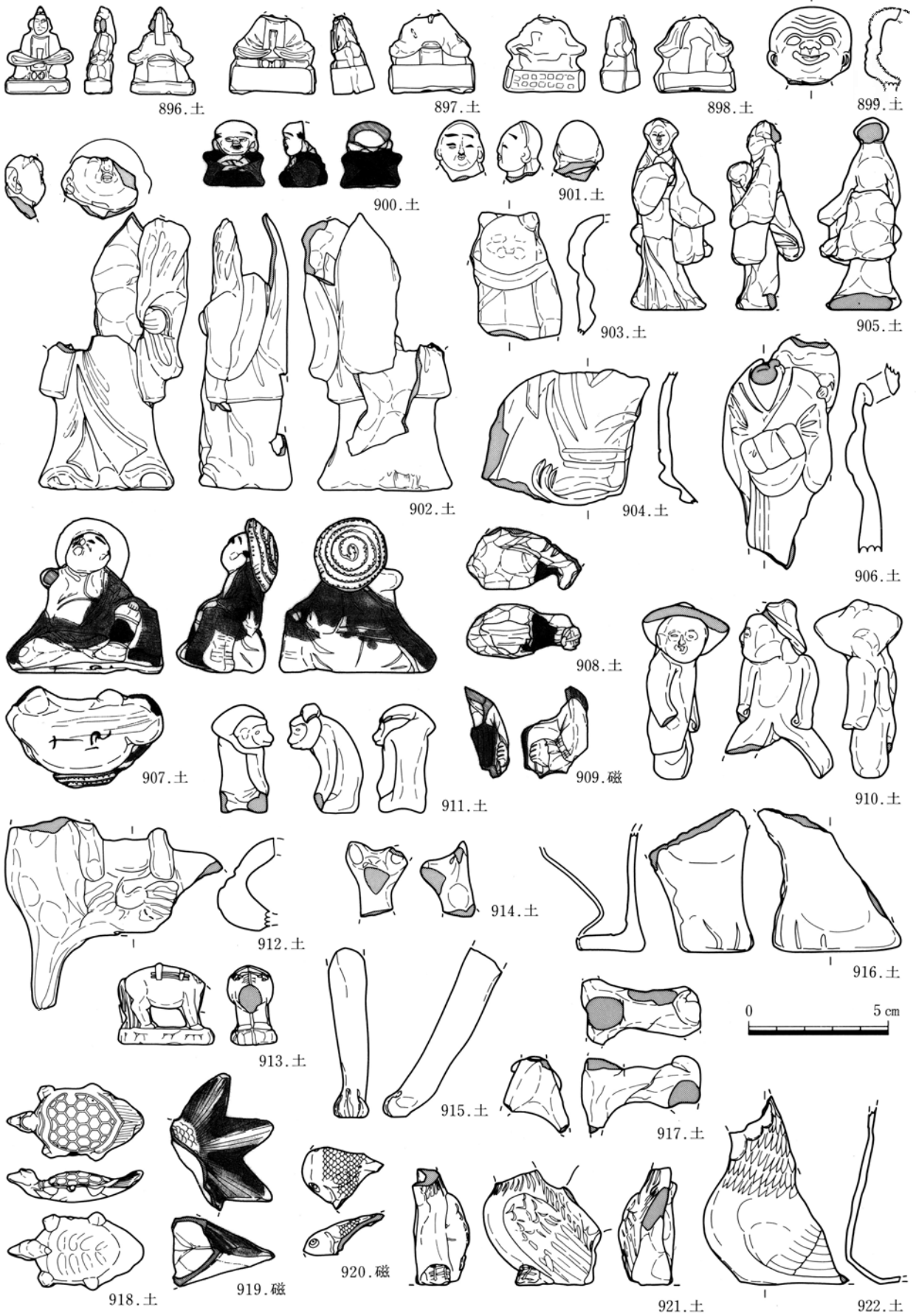
第40表 人形・玩具類観察表②

屋敷地 2



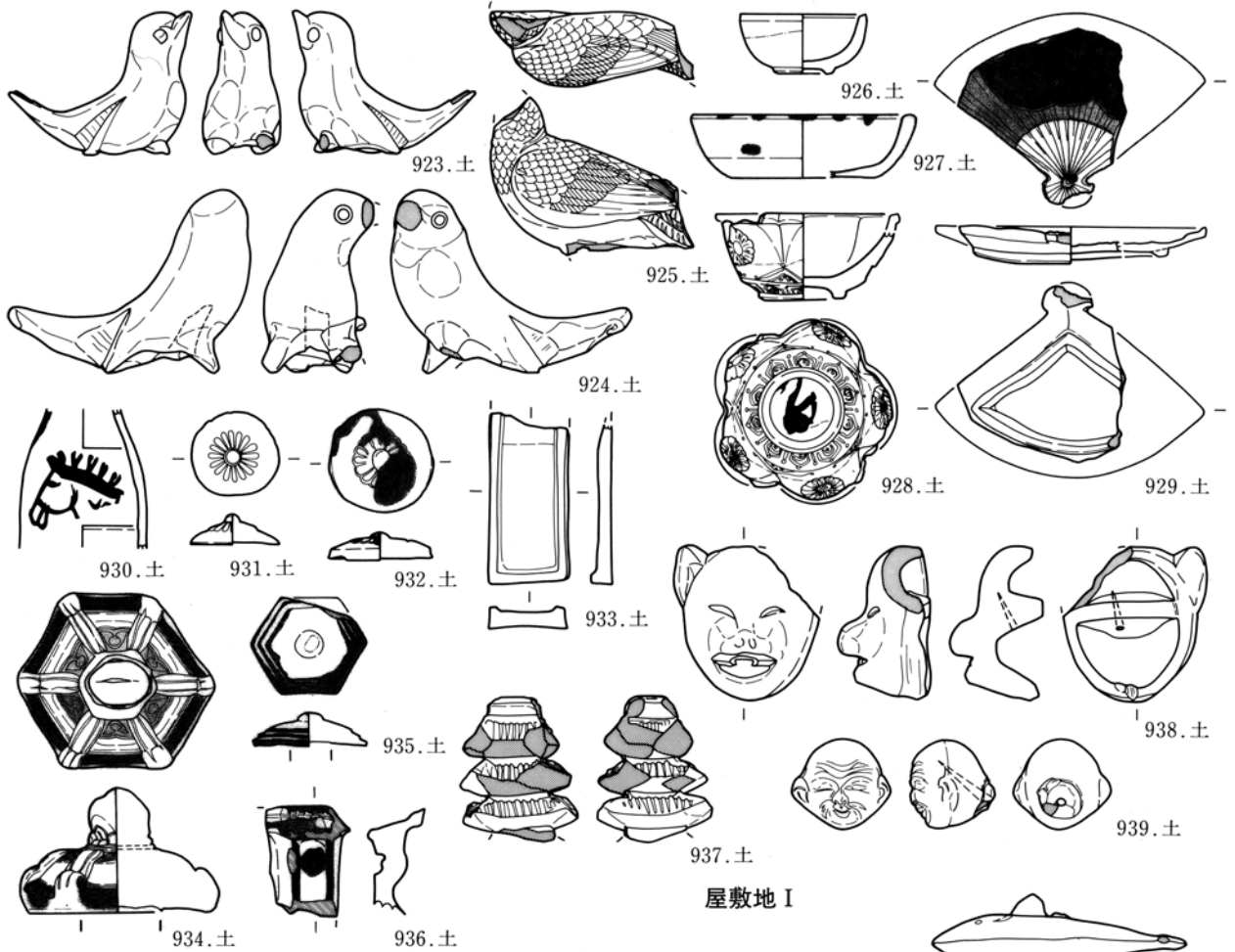
第92図 人形・玩具類実測図①

屋敷地 3

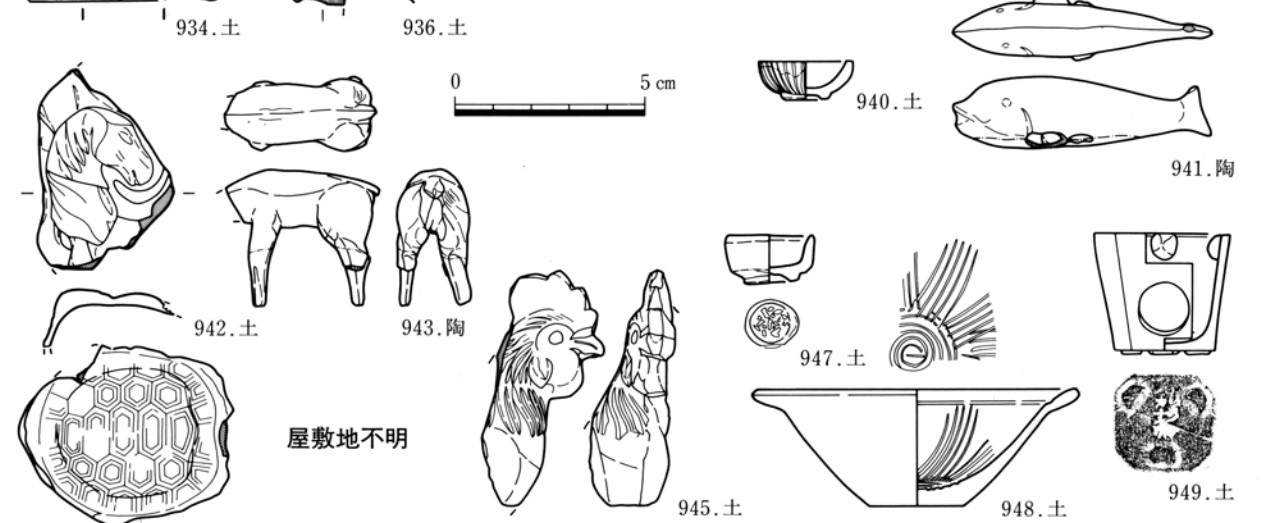


第93图 人形・玩具類実測図②

屋敷地 3



屋敷地 I



屋敷地不明



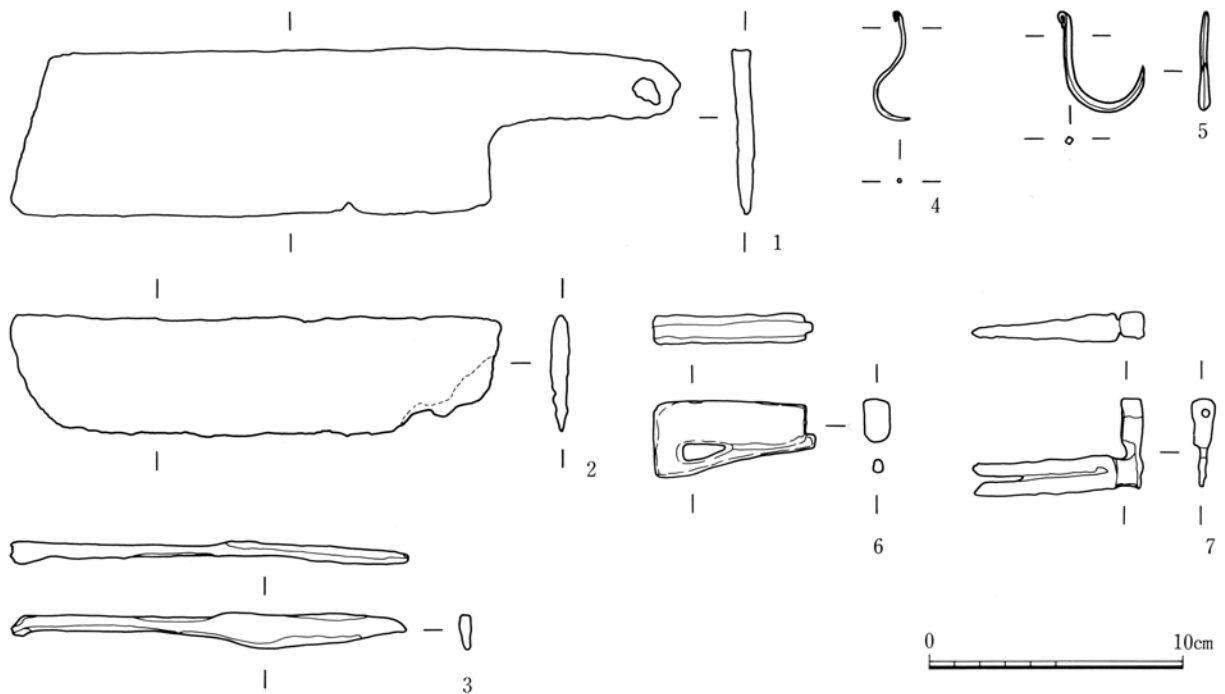
第94図 人形・玩具類実測図③

(2) 金属製品

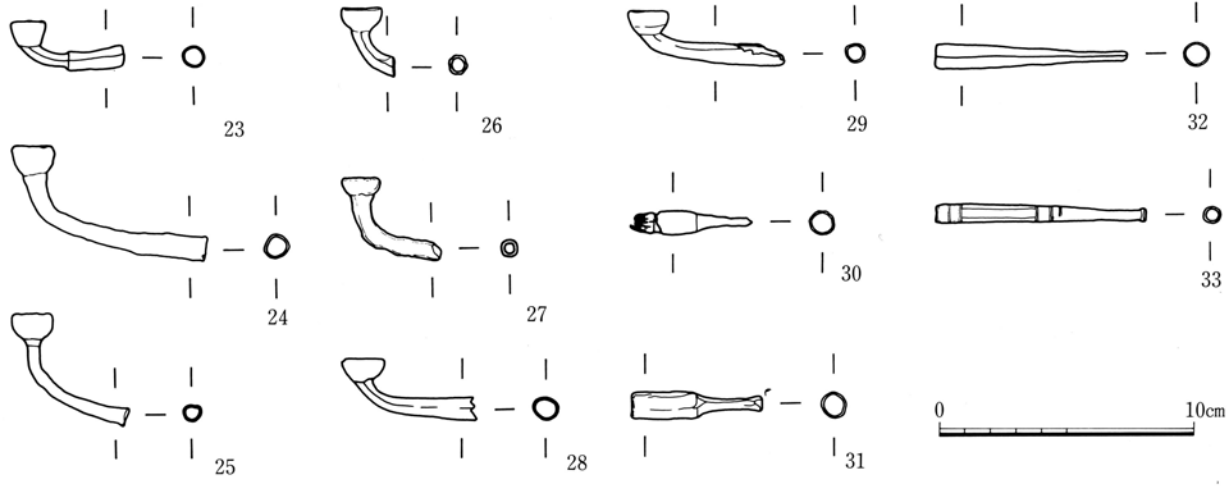
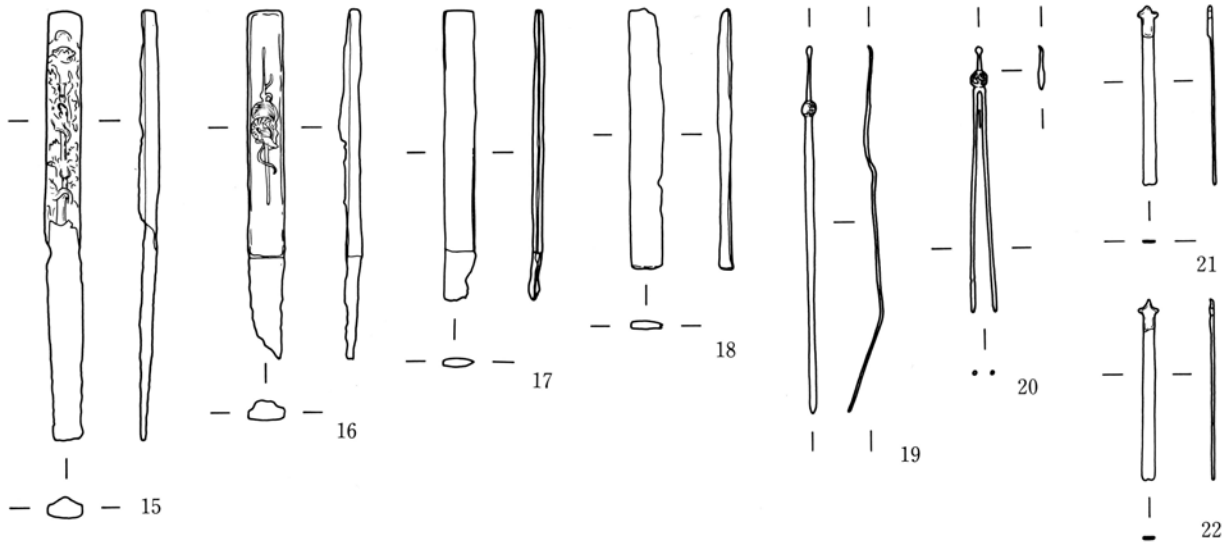
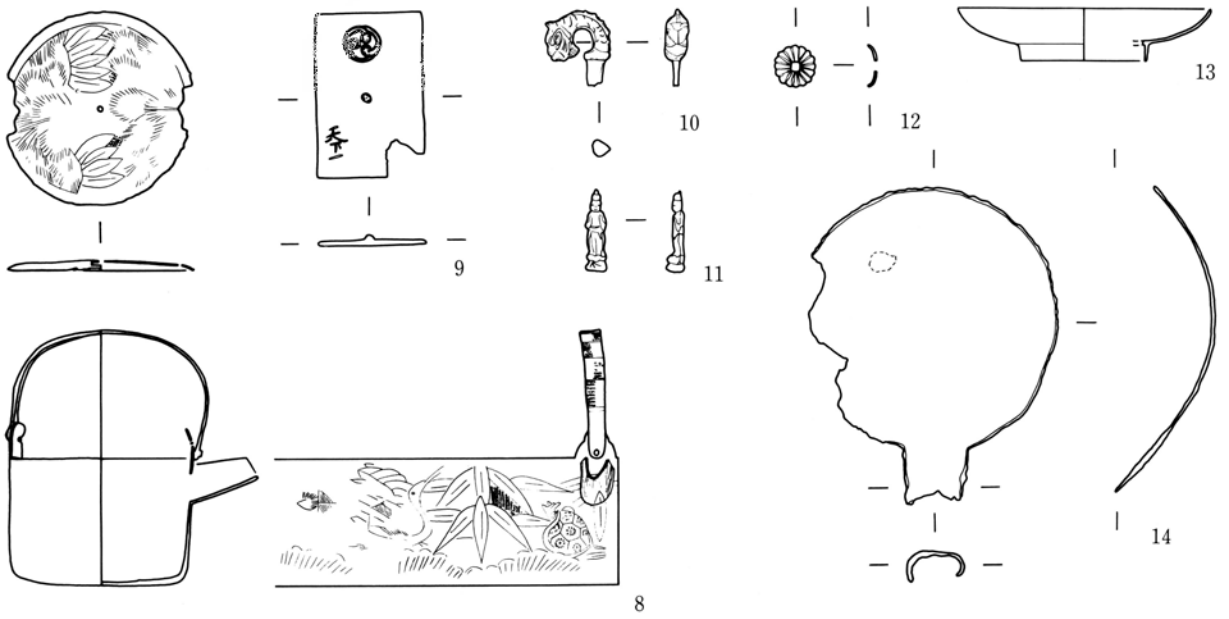
金属製品は、鉄、銅、真鍮、鉛等の材質のものが2971点出土したが、大部分が残存の悪い鉄製品であり、また遺構出土は943点のみである。S K309・312・313・318・320などが金属製品を多く出土し、特にS K318では216点を数え、中でも鉄釘が多くみられる。

1～7は鉄製品である。1・2は包丁と思われる刃物で、1の柄の先端には、持ち手を留めるためか両側に突起が出ている。3は用途不明の刀子状製品である。4・5は釣り針で、この他にも銅製のものが7点出土している。8以降は銅または真鍮製品であるが、緑青に覆われた状態での銅と真鍮の判別は困難であり、表面に金色の部分をもつもののみ真鍮製品とした。8は真鍮製の提で、蓋にも体部にも線刻で細かい文様が施されている。9も蓋で、「天下一」の文字と巴紋が浮き彫りになっている。10は龍の首をモチーフとした飾り金具であるが、一部に赤色の付着物が残っており、元は赤色に塗られていたものと思われる。15～18は小柄で、柄の部分がいろいろな材質でつくられており、1点鍍金かと思われるもの(18)がある。23～33は煙管の雁首及び吸口で、17世紀前半から18世紀後半までの形のものが見られる。30には竹製のラウが一部残っている。33は文様、形態から水口キセルと思われる。

銭貨は、鉄貨が7点、銅貨が200点、金貨が1点出土している。渡来銭は18点見られるが、模倣銭の可能性もあり、34・43・47などは全く同じ残存形のものも1点出土していることから、切り加工されたものと思われる。48は文政一朱金である。これは文政7(1824)年に発行されたが、世評が悪く10年にも満たないうちに姿を消したとされるものである。金の質が悪く銀色に近い色である。49～53は古寛永、54～62は新寛永である。



第95図 金属製品実測図①



第96图 金属製品実測図②



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



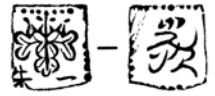
45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



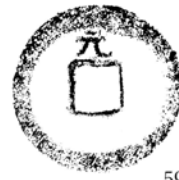
57



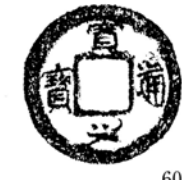
58



—



59



60



61



62

第97圖 錢貨拓影圖(原寸)

図版No.	遺構	種類	材質	法 量 (cm)			備考	登録No.
				全長	刃長	幅		
95-1	検出	包丁	鉄	全長(26.40)	刃長(19.00)	幅 6.50		M-1
95-2	SK701	包丁?	鉄	全長 -	刃長 -	幅 4.70		M-2
95-3	SK704	刀子状のもの	鉄	全長 15.60	刃長 5.65			M-3
95-4	検出	釣針	銅	針高 4.35				M-4
95-5	検出	釣針	銅	針高 4.00				M-5
95-6	SK702	鍵?	鉄	縦 6.00	横 3.00			M-6
95-7	SK702	掛金具?	鉄	縦 6.70	横 3.50			M-7
96-8	SD101	提	銅	柄までの高さ 10.10	全長 9.70	口径 7.20		M-8
				蓋高さ0.40	径 7.40			
96-9	SX402	蓋	銅	縦 6.55	横 4.20	高さ 0.40	刻字(「天下一」)、家紋(三ツ巴紋)	M-9
96-10	検出	飾金具?	銅	全長 3.00	幅 2.60		赤色の付着物あり	M-10
96-11	検出	観音像?	銅	全長1.60				M-11
96-12	SK309	建具金具	銅	径 1.10	孔径 0.35		飾り金具、中央に方形の穿孔あり	M-12
96-13	SK744	銅皿	銅	器高 2.05	口径 9.95	底径 4.90		M-13
96-14	SK206	杓子	銅	全長 12.60	杓径 10.50			M-14
96-15	SD101	小柄	刃=鉄、柄=鉛合金?	全長(17.10)	柄長 9.45	幅 0.90		M-15
96-16	SK313	小柄	刃=鉄、柄=銅	全長(13.80)	柄長 9.75	幅 1.40		M-16
96-17	SK738	小柄	刃=鉄、柄=銅	全長(11.65)	柄長 6.95	幅 1.25		M-17
96-18	SK702	小柄	真鍮?	全長 -	柄長 10.30	幅 1.30	金鍍金?	M-18
96-19	SK011	かんざし	真鍮	全長 14.55	幅 0.30			M-19
96-20	検出	かんざし	真鍮	全長 10.55	幅 -			M-20
96-21	SK320	かんざし	真鍮	全長 -	幅 0.45			M-21
96-22	SK320	かんざし	真鍮	全長 -	幅 0.40			M-22
96-23	SK318	煙管(雁首)	真鍮	首長 -	火皿径 1.40	高さ 2.00		M-23
96-24	SD307	煙管(雁首)	銅	首長 7.70	火皿径 1.60	高さ 4.70		M-24
96-25	SD307	煙管(雁首)	銅	首長 4.60	火皿径 1.60	高さ 4.50		M-25
96-26	SK703	煙管(雁首)	銅	首長 -	火皿径 1.60	高さ 2.70		M-26
96-27	SD309	煙管(雁首)	銅	首長 3.90	火皿径 1.50	高さ 3.30		M-27
96-28	SK312	煙管(雁首)	銅	首長 -	火皿径 1.60	高さ 2.45		M-28
96-29	SK318	煙管(雁首)	銅	首長 6.10	火皿径 1.55	高さ 2.10		M-29
96-30	SK744	煙管(吸口)	銅	全長 -	最大径 0.95			M-30
96-31	SK318	煙管(吸口)	真鍮	全長 5.15	最大径 1.05			M-31
96-32	SK318	煙管(吸口)	真鍮	全長 7.60	最大径 0.90			M-32
96-33	検出	煙管(吸口)	真鍮	全長 8.40	最大径 0.75		水口キセル	M-33

第41表 金属製品観察表

図版No.	遺構	種類	材質	法 量 (cm)		備考	登録No.
				径	孔径		
97-34	検出	大平通寶(隸書)	銅	(2.30)	(0.60)	北宋銭 初鑄 976年 切り加工	M-34
97-35	検出	祥符通寶(楷書)	銅	2.25	0.60	北宋銭 初鑄 1008年	M-35
97-36	検出	皇宋通寶(篆書)	銅	2.55	0.70	北宋銭 初鑄 1039年	M-36
97-37	検出	皇宋通寶(隸書)	銅	2.50	0.65	北宋銭 初鑄 1039年	M-37
97-38	SK702	嘉祐通寶(隸書)	銅	2.50	0.70	北宋銭 初鑄 1056年	M-38
97-39	検出	治平元翼(篆書)	銅	2.35	0.70	北宋銭 初鑄 1064年	M-39
97-40	検出	熙寧元翼(楷書)	銅	2.25	0.75	北宋銭 初鑄 1068年	M-40
97-41	SK702	元豊通寶(篆書)	銅	2.35	0.70	北宋銭 初鑄 1078年	M-41
97-42	SK370	元豊通寶(行書)	銅	2.50	0.70	北宋銭 初鑄 1078年	M-42
97-43	SK290	元祐通寶(篆書)	銅	2.35	0.65	北宋銭 初鑄 1086年 切り加工	M-43
97-44	検出	大觀通寶(楷書)	銅	2.40	0.60	北宋銭 初鑄 1107年	M-44
97-45	検出	政和通寶(篆書)	銅	2.40	0.70	北宋銭 初鑄 1111年	M-45
97-46	SK316	洪武通寶(楷書)	銅	2.30	0.60	明銭 初鑄 1368年 背「治」?	M-46
97-47	検出	永樂通寶(楷書)	銅	(2.40)	(0.50)	明銭 初鑄 1408年 切り加工	M-47
97-48	SK102	文政一朱金	金	1.15	(1.05)	初鑄 1824年	M-48
97-49	SK309	寛永通寶	銅	2.50	0.60	古寛永	M-49
97-50	検出	寛永通寶	銅	2.45	0.50	古寛永	M-50
97-51	検出	寛永通寶	銅	2.35	0.50	古寛永	M-51
97-52	検出	寛永通寶	銅	2.40	0.55	古寛永	M-52
97-53	検出	寛永通寶	銅	2.40	0.50	古寛永	M-53
97-54	SK338	寛永通寶	銅	2.35	0.55	新寛永	M-54
97-55	SK309	寛永通寶	銅	2.55	0.55	新寛永 背「文」	M-55
97-56	SK309	寛永通寶	銅	2.50	0.60	新寛永	M-56
97-57	SK318	寛永通寶	銅	2.60	0.60	新寛永	M-57
97-58	検出	寛永通寶	銅	2.35	0.60	新寛永	M-58
97-59	検出	寛永通寶	銅	2.25	0.65	新寛永 背「元」	M-59
97-60	検出	寛永通寶	銅	2.15	0.60	新寛永	M-60
97-61	検出	寛永通寶	銅	2.25	0.65	新寛永 背「元」	M-61
97-62	検出	寛永通寶	銅	2.40	0.55	新寛永	M-62

第42表 銭貨観察表

参考文献

- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』(考古学ライブラリー48) ニュー・サイエンス社
- 鈴木正貴 1994 『清洲城下町遺跡IV』(叻愛知県埋蔵文化財センター)
- 郡司勇夫 1981 『日本貨幣図鑑』 東洋経済新報社

## 第IV章 自然科学的分析

### 1 はじめに

今回の発掘調査で検出された戦国期の堀（S D602）は、那古野城の堀の性格を考察する上で非常に重要な資料である。この堀の埋土は大きく2つに分類できる。1つは堀の下底部に認められる層状の堆積部分で、堀が機能していた当時の環境情報を蓄えた自然の堆積物で構成され、もう1つはこの上に重なる人為的に埋められた土（名古屋城形成時の土地整備の際に埋め立てられたもの）で構成される。

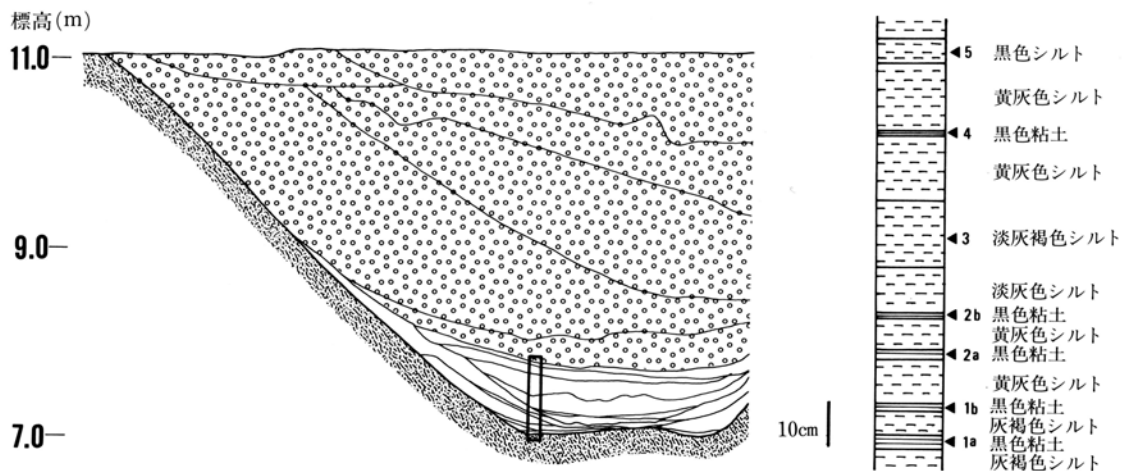
ここでは、堀の下層から得られた堆積物に含まれる花粉および珪藻の分析を行い、堀が機能していた当時の気候、継続年数、水の状況の解明を試みる。

### 2 試料

分析試料は第98図に示した7点である。試料を採取した堀の下層堆積物には、厚さ15cm程度の灰白色シルト層8層と、厚さ3cm程度の植物混じりの黒色粘土層6層が交互に堆積している。灰白色シルト層は堀の基盤となっている熱田層のシルト層が降水などで侵食・再堆積したもの、また、黒色粘土層は堀内に水が溜った際の堆積物であろうと考えられる。そのため、堀が機能していた時の環境をよりの確に反映していると考えられる黒色粘土層を分析試料に用いた。

### 3 珪藻分析

乾燥重量1gをトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。岩片除去ののち、水洗を4～5回繰り返しながら、同時に比重選別を行った。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定するよう行った。



第98図 試料採取位置図・模式柱状図

しかし今回の試料については試料に含まれる珪藻殻が極端に少なく、200個まで同呈することはできなかった。同定された珪藻は、*Pinnularia gibba* *Hantzshia amphioxys* などの底生種および *Achnanthes limearis*, *Cymbella minuta* などの付着生種であった。

#### 4 花粉分析

約10gの試料を10%KOH溶液処理（1晩）→60メッシュの篩に通し粗粒物質を除去→水洗→10%KOH溶液を加え湯煎（4分間）→傾斜法により粗粒物質を除去→10% ZnCl<sub>2</sub>溶液による比重分離（1500回転／分の遠心分離を2回繰り返す）→HF溶液処理（1晩）で鉱物片を除去→水洗→アセトリシス処理（40秒間）→水洗→グリセリン・ゼリーで封入。検鏡は400倍で、木本花粉が200個体以上に達するまで行った。また木本花粉が200個に達しない試料については、1プレパラートについて走査線の間隔を1.5mmとして全面検鏡を行った。出現率の算出は、木本花粉については木本花粉の総計を基数とし、草本花粉については総木本花粉と総草本花粉の和を基数とした。

	1 a	1 b	2 a	2 b	3	4	5
<i>Taxus</i>		2		3		2	2
<i>Prinus</i>		2	16				
<i>Prinus (Diplo.)</i>		1	39	15	6	1	42
<i>Tsuga</i>	1			1			
<i>Cryptomeria</i>				1	2		
<i>Salix</i>				5	3	1	
<i>Myrica</i>					1	1	1
<i>Juglans-Pterocaria</i>		1	4	34	15	3	9
<i>Abnus</i>	2	1	1	17	14		12
<i>Betula</i>			2	3	2		2
<i>Carpinus</i>			4	15	19		3
<i>Corylus</i>			2	12	7	1	10
<i>Fagus</i>			2	2	9	1	16
<i>Lepidobalanus</i>	2		1	16	11	5	16
<i>Cyclobalanopsis</i>	2	1	1	10	1		9
<i>Castanea</i>							2
<i>Castanopsis-Pasania</i>					1		1
<i>Ulmus-Zelkova</i>			5	9	9	1	3
<i>Celtis-Aphanante</i>			3	8	26	5	8
<i>Rhus</i>				2			3
<i>Ilex</i>	1			6	3		
<i>Acer</i>	1			1			1
<i>Aesculus</i>					1		1
<i>Pathenocissus</i>				1	4		
<i>Tilia</i>				2	1		
Ericaceae	1	1	1		2		1
<i>Styrax</i>							3
<i>Symplocos</i>							3
Oleaceae		2	2	43	18	5	21
<i>Vitis</i>					2		1
<i>Lonicera</i>					2		3
<i>Fagopyrum</i>	1		1	16	33		12
<i>Persicaria-Echinoc.</i>				1	34	3	72
Chenopodiaceae		5		60	32	1	10
Caryophyllaceae	1			9	4		3
<i>Sanguisorba</i>							1
<i>Haloragis</i>	6		4	62	66	12	82
<i>Cichorioideae</i>				1	2		
Carduoideae		1		7	7	1	5
<i>Artemisia</i>	3	3		33	10	1	9
<i>Typha</i>	15	15	10	112	114	15	152
<i>Sagittaria</i>				23	3		
Gramineae	8	30	26	571	440	57	275
Cyperaceae	2	2		2	3		1
<i>Iris</i>				1			
Spore	42	53	32	57	69	16	58
木本花粉	10	7	67	203	157	24	168
草本花粉	36	56	41	897	750	90	625
胞子	42	53	32	57	69	16	58
総花粉数	88	116	140	1157	976	130	851

第43表 花粉数一覧表

今回の分析結果を第43表に示した。検鏡を行った試料のうち木本花粉の総数が200個をこしたものは1試料しか存在しなかったため、花粉ダイアグラムを描くに至らなかった。全体に草本花粉数が多く、中でもガマ属やイネ科が多いことや堀の底部からアシ類の茎が出土したことから、堀の底部は湿地状であったと推測される。またイヌタデ属やアカザ科、ヨモギ属なども多くみられることから、堀の周囲は荒地の状態であったと推測される。

#### 5 今後の課題

今回戦国期の堀の底にみられた堆積物から、堆積の時期差などを明らかにしようと、珪藻分析および花粉分析を行ったのだが、微化石の保存状態が非常に悪く目的を達成することはできなかった。今後はこのように花粉や珪藻殻の保存状態が不良な試料についても、その原因を追求してゆく必要があるのではないだろうか。

## 第V章 補論

### 第1節 名古屋台地における古代

本稿は、名古屋城三の丸遺跡の立地する名古屋台地上の古代における様相を、多少なりとも明らかにしようとしたものである。名古屋台地を形成する地層は、熱田層と呼ばれる洪積層である。台地は、北から西南西に緩やかに傾斜しており、台地西端は段丘崖となっている。このような台地上に先人はどのような足跡を残したのであろうか、以下その一端を見ていきたい。

なお、本稿で「名古屋台地」と表現する台地は、いわゆる熱田層によって成り立つ熱田台地のうち名古屋城や金山総合駅、熱田神宮などがのる象の鼻状に南北に延びた台地を指すものとする。(第99図参照)

#### 1 律令制下の名古屋台地

##### 古代の愛智郡

名古屋城三の丸遺跡の所在する地は、古代においては尾張国八郡のうちのひとつ愛智郡に位置していた。郡名である「愛智」の名を史料上において確実に確認できるのは『続日本紀』和銅二(709)年五月庚申条に、「筑前国宗形郡大領外従五位下宗形朝臣等授外従五位上。尾張国愛知郡大領外従六位上尾張宿禰乎己志外従五位下」(下線筆者)とあるのが初見である(1)。和銅六(713)年五月には、畿内七道諸国に対して郡郷名に好字を用いるよう朝廷から指令が出されたが、愛智郡の場合はそれ以前から使われていたと思われる「吾湯市」や「年魚市」(『日本書紀』)等の表記をとらず、「愛智」・「愛知」に統一していったものと考えられる。

愛智郡は、北は山田郡、西は庄内川を境に海部郡、南は智多郡、東は国境である境川を隔てて三河国とそれぞれ接していたものと考えられている。その郡域は実はよくわからないのであるが、国境が地形を利用したのに対して、郡境は川などの自然地形と人為的な区割りで決められている場合が多いことはこれまでも指摘されている(2)。

##### 愛智十郷

さて、愛智郡内には『和名抄』によれば「中村」「千竈」「日部」「太毛」「物部」「熱田(厚田)」「作良」「成海」「駅家」「神戸」の十郷のムラが記載されている。郷数からすれば、尾張国内では最も多いのが海部郡と丹羽郡の12郷、続いて愛智郡と同じ山田郡の10郷、国府の置かれた中嶋郡が9郷、春部郡が6郷、葉栗郡と智多郡の5郷の順となっている。律令

の規定によれば、郷数の関係から海部郡と丹羽郡は大郡、愛智郡と山田郡、中嶋郡は中郡、他の郡は小郡ということになる。ちなみに中郡の場合、郡司は大領1人、少領1人、主政1人、主帳1人の4人体制となる。さらに各ムラの位置比定であるが、「中村郷」は庄内川左岸の現在の中村区内と考えられている。「千竈郷」は大きく二説あり、一説は『尾張志』などの推定する上・下知我麻神社のかつての鎮座地である名古屋市南区の旧本地村説であり、今ひとつは『大日本地名辞書』などの推す現在の上・下知我麻神社の鎮座地である熱田区近辺説である。「日部郷」「太毛郷」に関しては諸説あり、現在までのところ確実な比定は難しいのが現状である。「物部郷」は、式内社物部神社の所在から千種区内のかつての古井村に比定する説が有力である。「熱田郷」は、熱田神宮の所在する熱田区内の比定に諸説一致している。「作良郷」は、南区北部の旧桜村近辺でこれも諸説一致している。「成海郷」は、緑区・昭和区内の旧鳴海村に比定されているが、海岸線が南へ後退するまで本地区は古代・中世を通じて潟を形成しており、交通の要所でもあり、難所でもあった。「駅家郷」は古代東海道の駅家である「新溝駅」とその駅戸を含めたムラが想定され、その位置を中区古渡周辺に置く説が有力であるが、西区南駅・北駅町に置く説もある。「神戸郷」は、伊勢神宮あるいは熱田神宮の神戸を中心にしたムラであろうが、その位置比定は不明である。

このように『和名抄』記載の郷の位置比定を見た時、比定地が不明な郷を除いて、名古屋台地上にムラが営まれたと考えられるのは、「熱田郷」と「駅家郷」であることがわかる(3)。

### 熱田郷周辺

名古屋台地南端に鎮座する熱田神宮は、紀記神話で知られた草薙剣を御神体として奉る大社である。古代豪族尾張氏の社であり、熱田神宮から北西に100mほどの距離にある断夫山古墳は、その尾張氏を被葬者にもつ古墳と考えられている。東海地方最大規模を誇る断夫山古墳は、6世紀前葉に位置づけられており、それに関連するかのよう台地上南部には弥生時代から続く高蔵遺跡をはじめに正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡などの古墳時代の遺跡が見られる。なかでも正木町周辺の名古屋台地西縁辺部に5世紀中葉から6世紀にかけての竪穴住居が集中していることがわかってきており(4)、古代豪族尾張氏を中心にした集落の想定が考えられる。

### 尾張元興寺

さらに、7世紀中ごろになって現在の中区正木町地内に尾張元興寺が建立される(5)。尾張元興寺は、奈良元興寺の道照の弟子である道場法師によって創建されたという伝承が残るが、その立地からも尾張氏の氏寺としての機能を果たしたものと思われる。尾張元興寺跡の発掘調査は5次におよび、その成果から7世紀中ごろの建立時期が割り出されたのであるが、そこから『日本霊異記』上巻第三「雷のむかしびを得て生ましめし子、強き力あ

る縁」の主人公である道場法師に関する説話の史実性も浮かび上がってきた。

この説話は、敏達天皇の御世に尾張国阿育知郡片葩里(6)の一人の農夫が、雷を助けたことで農夫の子が力人として生まれ、数々の働きをした結果、得度出家を許されて奈良元興寺の道場法師としてその名が広く知られるようになったという内容である。そして、その道場法師が故郷に帰って尾張元興寺を建立したという伝承が残っているのである。道場法師の史実性は、かつて和田萃氏が飛鳥の地における道場法師の水争いの史実を明らかにしたが(7)、註(5)の報告書の中で服部哲也氏は、「道場法師個人の実在性はともかく、その内容は和田氏の説かれた「水争い」の段だけでなく、全体が史実にもとづいたもので、それが脚色され説話化したもの」ととらえている。

いずれにしても奈良元興寺の強い影響を受けた古代寺院が、名古屋台地上に7世紀中ごろの段階で存在していたわけで、中央との結びつきを考えるうえで重要な遺跡である。

奈良時代に入っの名古屋台地周辺を記した史料に、同じ『日本霊異記』の説話の中に中巻第四「力女、力くらべし試みる縁」と第二十七「力女、強力を示す縁」の二段がある。実はこの二段は、上巻第三「雷のむかしびを得て生ましめし子、強き力ある縁」の後日譚のようなものである。どちらも道場法師の孫である力女が主人公であり、彼女はやはり尾張国片輪里に住んでいる。話の時期設定は8世紀第2四半期の聖武天皇の時代である。前段は彼女が、三野国片県郡少川の市(現在の岐阜県本巣郡本巣町あたり)で商人に危害を加える悪い力女をこらしめる話であるが、少川の市へ船で乗り付ける下りは、当時の河川を利用した流通機能が垣間みられて興味深い。

また後段は、第四段に登場した道場法師の孫である力女が結婚してからの話である。彼女が嫁いだ先は当時尾張國中嶋郡の大領であった尾張宿禰久玖利であり、彼女は郡司の長に嫁ぐだけの階層に生まれたことがわかる。ここでもやはり怪力でもって非道の国司をこらしめてしまうのであるが、国司の恨みを恐れた大領一族から離縁され、実家の愛知郡片葩里に帰されてしまう。その後、実家の近くを流れる草津川の「河津」で衣を洗っている時、大船に荷物を乗せた船長にからかわれた彼女は、再び怪力でもって荷物の載った船を1町ほど陸に引き上げてしまう。このようなことはもちろん史実とは言えないが、在地に根をはる郡司一族との婚姻の実態や愛知郡片葩里(中区古渡付近)において「河津」があり、商船が行き交う様子が見られる。これらの点は、史実でないことを積極的に示す史料もないことから、8世紀段階の実態を反映しているものと思われる。実は、中区古渡付近に比定されている片葩里のあたりは、10世紀前半に編纂された『延喜式』の「兵部省諸国駅伝馬条」に記載された「新溝駅」の比定地でもある。同じ10世紀前半に編纂された『和名抄』には「片葩・片輪郷」の記載はないことから、「駅家郷」は「片葩・片輪」のムラを実体としている可能性もある。いずれにしても古代において、現中区古渡周辺は交通面・流通面での拠点であったように思われる。

## 2 王朝国家体制下の名古屋台地

### 古代豪族尾張氏の変容

王朝国家体制が進むにつれ、いわゆる古代豪族が衰退していく傾向が見られるが、尾張氏もその例外でなかった。それは、尾張氏がその大宮司職をつとめる熱田神社の退転に現れてくる。それは『宇治拾遺物語』の説話「伏見修理大夫俊綱ノ事」などに端的に見られるように、かつての大宮司の威勢は見られなくなったのである。この説話の主人公の橘俊綱は、11世紀中ごろ尾張守に任じられており、その時期には尾張氏の没落が始まっていたと考えられている。

このような状況の中で尾張氏の選んだ道は、藤原氏と外戚関係をもつことであった。尾張員職の女と婚姻関係を結んだ藤原季兼は、父に文章博士大学頭である藤原実範をもつ儒者の家系であった。しかし、季兼はその道を進まず『尊卑分脈』が「参川四郎大夫」と記すごとく三河に活動拠点を置き、所領の開発等を進めていたらしい。季兼が三河に活動の拠点を置いたわけは、異母兄弟の季綱が1070年代後半に三河守を務めていたことに起因するものと考えられ(8)、三河の高橋荘・高橋新荘の開発領主も彼であるとされている(9)。季兼は、その後承暦四(1080)年ころには尾張国目代となっており(10)、そこで熱田大宮司家と結びつきをもつことになったのである。寛治三(1089)年には季範が生まれ、大宮司職が藤原流となっていく。源頼朝の母は、季範の女であることはあまりにも有名である。

### 那古野荘の成立

11世紀中ごろから12世紀にかけて全国に寄進による荘園や御厨等が乱立するようになるが、名古屋台地上にも荘園が成立してくる。那古野荘がそれである。那古野荘の荘域は、貞治三(1364)年の奥書をもつ写本に「於尾張国那古野荘安養寺壇所 忍寒気書写了」とあることから、中世に安養寺が所在した現在の名古屋城域を含むものと考えられている。しかし、はっきりした荘域はわからないのが現状である。また本荘園の沿革についても史料が少なく、わずかに1点「江家次第裏書」に記された「建春門院法花堂領尾張国那古野庄領家職相伝系図」によって領家職の変遷が知られるのみである。(第101図参照) そのため那古野荘の研究自体も、この系図史料を発見した小嶋鉦作氏が昭和8年に発表した論文以降(11)、深化が見られないと言ってよい状況である。そこで、ここではその成立過程に絞って考えてみたいと思う。

先の系図によれば、開発領主は、「九條民部卿顕頼□男」である小野法印顕恵であるとする。九條民部卿藤原顕頼は、白河院の近臣として「夜の関白」(『今鏡])ともいわれた藤原顕隆を父に、藤原季綱の女で鳥羽天皇の乳母を務めた悦子を母にもち嫡男として生まれた。また、同母弟に顕能、異母兄弟には三河守として渥美の大アラコ窯を開き、自らの銘の入った陶器を焼成させたことで有名な顕長がいる。その顕頼の子、顕恵が開発領主となったわけである。顕恵の祖父顕隆は、白河院の腹心、父顕頼はこれまた鳥羽院の腹心であり、院に非常に近い存在であったことは留意する必要がある。さらに、ここで注目したいのは、

顕頼の母である悦子の父、藤原季綱である。この人物は実は先述した尾張氏に婿入りした藤原季兼と兄弟なのである。尾張氏が狙ったのは、このつながりであったのかもしれない。また、顕隆一族に三河守の経験者が多いのは三河守であった季兼との何らかのつながりが考えられる可能性を指摘しておきたい。

### 三河国守藤原顕長

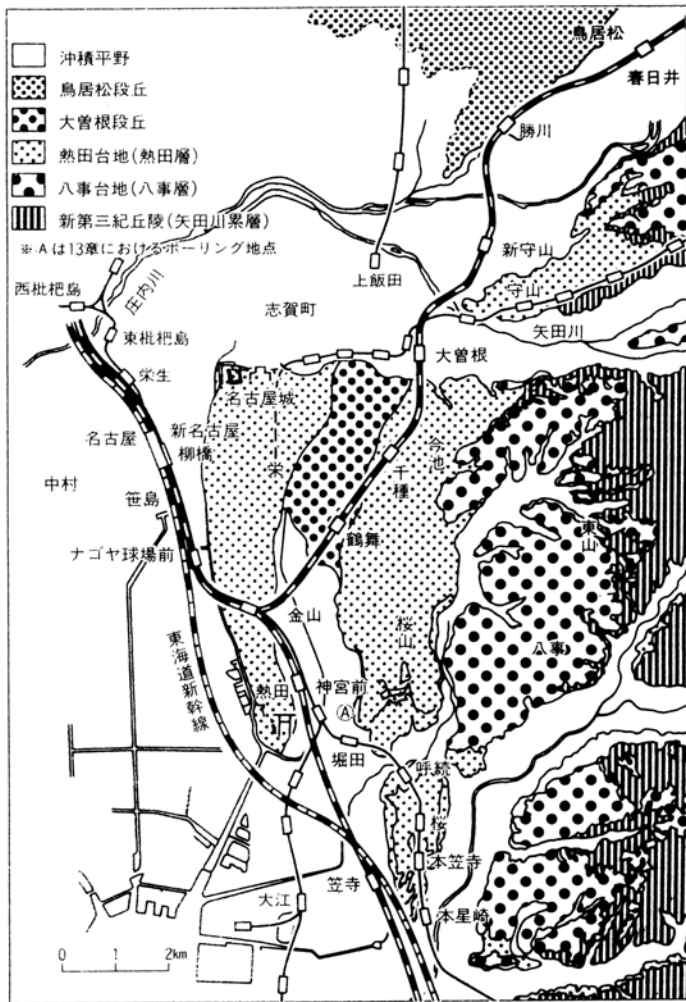
ここで顕恵にとって叔父にあたる藤原顕長について少し述べてみたい。顕長は『公卿補任』によれば9歳にして紀伊守に任じられたのを振り出しに、三河守を保延二(1136)年から久安元(1145)年と久安五(1149)年から久壽二(1155)年の計17年間の長きにわたって務めている。彼はその後、中央政界で昇進を重ね、権中納言従二位にまで昇りつめたのである。『尊卑分脈』では仁安二(1167)年に50歳で亡くなったとすることから、彼の人生の中で20代から30代後半までの長期にわたり三河国と深い関係をもっていたことになる。この間、彼は大アラコ窯の開窯や大般若経の書写事業(12)を行ったり、伊勢神宮の神官層と一体となり蘇美御厨の立券に関わったりした(13)。このように院制期の受領国司は、院や諸権門と巧みに結びつきその実をあげていったのである。

### 小野法印顕恵

さて、那古野荘の開発領主である小野法印顕恵であるが、「若くして仏道に志し、累進して法印権大僧都となり、永萬二(1166)年七月には東大寺別當に補せられ、御白河法皇には畏くも東大寺に於て顕恵に就いて御受戒あらせられたこともあり、安元元(1175)年二月に示寂するまで、九箇年間寺務を執行した当時の宗教界に於ける重鎮」(14)とされている。しかし、東大寺の寺僧であった顕恵がなぜ尾張国の荘園を開発できたのであろうか。この点は謎であるが、それを解く鍵は同じ顕頼の子で、顕恵と兄弟にあたる説頼にあるかもしれない(第100図参照)。藤原説頼は、『本朝世紀』の記事から久安三(1147)年に尾張守であったことが知られる人物である。この説頼が尾張守であった時期に、名古屋台地周辺の開発に取り組んだ可能性が考えられる(15)。

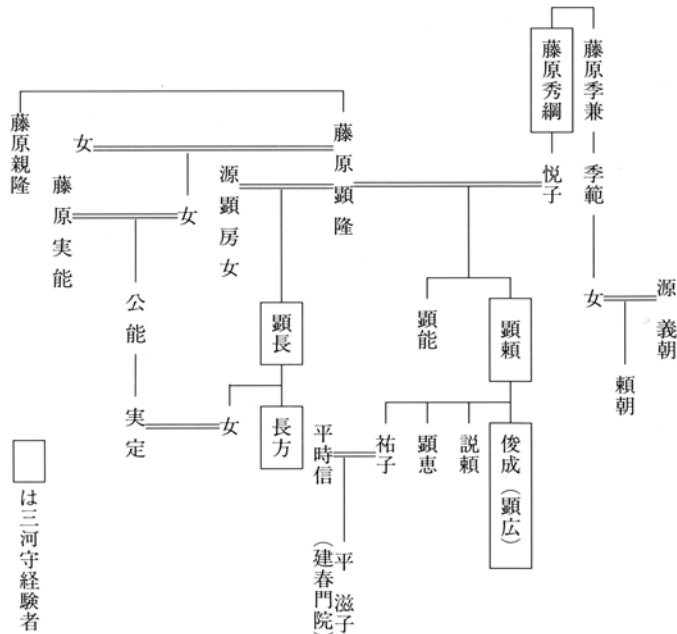
また本荘園は建春門院法花堂領であるが、寄進時期が建春門院(1142～76年)の生前かその後かの判断は荘園の成立時期とも重なり重要であるが、判然としない。しかし、ここで従来見落とされてきた点をあげておきたい。それは、顕恵の兄弟姉妹の中に建春門院の母となった女子がいることである。その名は、祐子。平時信の妻で、その実子が平滋子、つまり建春門院である。つまり顕恵は、姪にあたる建春門院に開発した土地を寄進したわけである。一族のなかで所領の安定を計る姿がそこに見られるのである。その意味において、寄進時期は建春門院の生前であったとしておきたい。

「建春門院法花堂領尾張国那古野庄領家職相伝系図」は、さらに南北朝期における領家職の相続争いを記しているが、その後の那古野庄の動向は知る術がない。やがて名古屋台地上にも動乱の戦国期がやってくるのである。



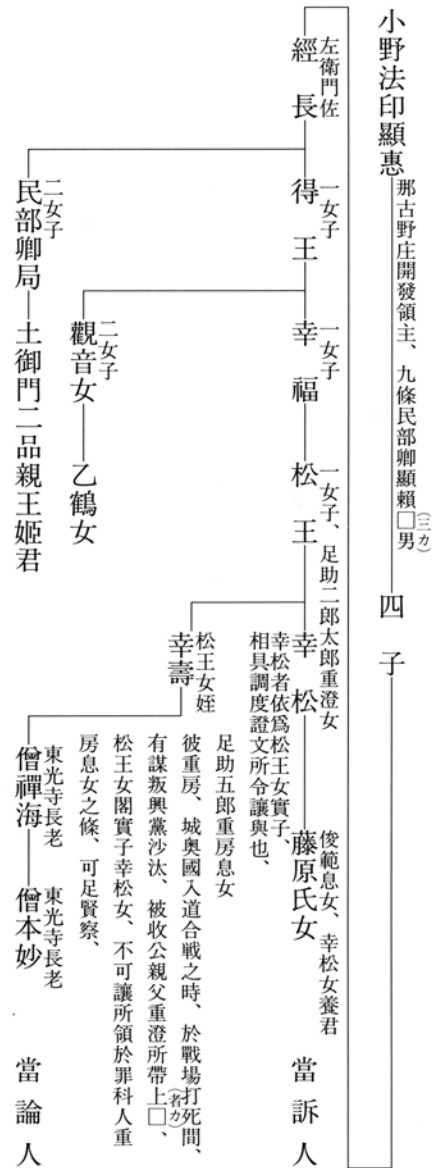
第99図 名古屋地域の地質概略図

(井関弘太郎『車窓の風景科学』より転載)



第100図 藤原顕隆をめぐる系譜

- 註
- (1) 「愛智」の表記文字は、『延喜式』『和名抄』で使われているが、「愛智」も同時代史料で散見されるため、区別なく使用されたい。
  - (2) 水野時二 『奈良制の歴史地理的研究』 大明堂 1971
  - (3) ただし古代を通じ、ムラの再編成が行われたこともまた事実である。
  - (4) 赤塚次郎 岩野晃司 『日本の古代遺跡 愛知』 保育社 1994
  - (5) 『尾張元興寺跡発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会 1994
  - (6) 『金鱗九十九之塵』などから名古屋市中区古渡町付近に比定されている。
  - (7) 和田 幸 『飛鳥川の環』『日本史研究』第130号 1973
  - (8) 『新編岡崎市史』第1巻 第7章第6節 1992
  - (9) 『豊田市史』第1巻 1976
  - 00 註(8)前掲書
  - 01 『尾張国那古野荘の開発と伝領』『歴史地理』第62巻第2号 1933
  - 02 註7前掲書 第7章第7節
  - 03 『牛ノ松遺跡』 財団法人埋蔵文化財センター 1995
  - 04 註10前掲書
  - 05 親隆(顕頼の叔父)が説頼の後を受け、久安三(1147)年から久寿(1155)年の間、尾張守となっている。あるいは親隆も立荘に関わっているのかもしれない。



第101図 建春門院法花堂領 尾張国那古野庄領家職相伝系図

## 第2節 三の丸に居住した人々

この節では、「三の丸に居住した人々」の表題で三の丸内の屋敷地ごとの居住者の変遷表を掲載するが、まず表作成に関する概説を行う。

ここでいう「三の丸」とは、外堀内の狭義の三の丸の屋敷地のみでなく、外堀の南及び東側に展開した屋敷地をも含むものとする。この屋敷地も表に組み込んだ理由は以下のとおりである。

- ・狭義の三の丸内に住む武士と禄高・役職のほとんど変わらない万石以上年寄りと呼ばれた石河家以下の上級武士達が住んでいた。
- ・三の丸を描いた絵図にこの屋敷地を描いているものも多く、文献でも三の丸を扱うものにここに記述が及んでいるものがあり、ここが「準」三の丸とでもいうべき地域だと考えられる。
- ・技術的な面として、今回利用した史料のほとんどがこの屋敷地の居住者の変遷を記録しており、狭義の三の丸内のものとほぼ同様の扱いで史料を押さえていくことが可能である。また、両屋敷地の範囲内での屋敷替えが比較的多く、屋敷の範囲をあまり広げずに表の完成度を高めることができる。

次に、今回表を作成する際に利用した文献の特徴を述べよう。

- ・『尾州那護屋御城郭内諸士宅地草創已来転換聞書』（鶴舞中央図書館蔵）

宝永4年(1707)改正の書き付けがあるが、正徳5年(1715)まで下る記述も見られる。宝永・正徳期までのものとは形式の違う書き方で単に名前を羅列しただけでそれ以降を補筆してある屋敷も数軒ある。また、一軒ずつ朱で、朱を入れた際の屋敷の居住者と思われる苗字が書き加えられている。内容としては、屋敷ごとの居住者の姓と仮名と屋敷替えの時期。実名の書かれたものもあるが、朱書きの補筆である。時期の記述は以下にあげる文献と比べ圧倒的に多い。

- ・『御郭内外邸記』（鶴舞中央図書館蔵）

文化末年(1810)訂正の作事役所本に水野正信が嘉永3年(1850)に諸書で補遺を行ったもの。居住者は嘉永3年のものまで記述してあるものもあるがすべてではなく、文化年間までの記述しかないと思われるものもある。内容は、屋敷ごとの居住者の苗字と仮名・実名。千石以上の屋敷については邸宅の間数を入れる。屋敷替えの時期の記述はわずか。

- ・『金城温古録』『御郭内士第転換』（『名古屋叢書続編』16巻所収）

奥村得義がこの本を完成させたのは安政5年(1858)だが、居住者の記述は『御郭内外邸記』と同じかそれ以前のものまでしかされておらず、外堀外の屋敷も記述がない。内容は、屋敷ごとの居住者の苗字と仮名。屋敷替えの時期の記述はわずか。ただし、三の丸東北角の屋敷地の変遷を6時期に分け詳述。

・『旧邸礎跡略』（鶴舞中央図書館蔵）

明治7年(1874)に小寺玉晁が三の丸の終焉までの居住者の変遷を記述したもの。一部終焉時期までの居住者の記述がないと思われる屋敷もある。内容は、屋敷ごとの居住者の苗字と仮名・実名。屋敷替えの時期の記述が少しある。その他に終焉時期の屋敷の様子を詳述。ただし、三の丸東北角の築城当時から元禄ごろまで続く屋敷地の記述はない。

・『丸之内・片端屋敷之記』（鶴舞中央図書館蔵）

『旧邸礎跡略』と同じ著者であるが、居住者名等に違いが見られる。居住者の変遷については『旧邸礎跡略』と同様である。内容は、居住者の苗字と仮名・実名及び屋敷替えの時期。後二者に関する記述は『旧邸礎跡略』より豊富。三の丸東北角の屋敷地の記述も全時期にわたる。ただし、屋敷の様子は書かれていない。

実際の表作成は以下の手順で行った。

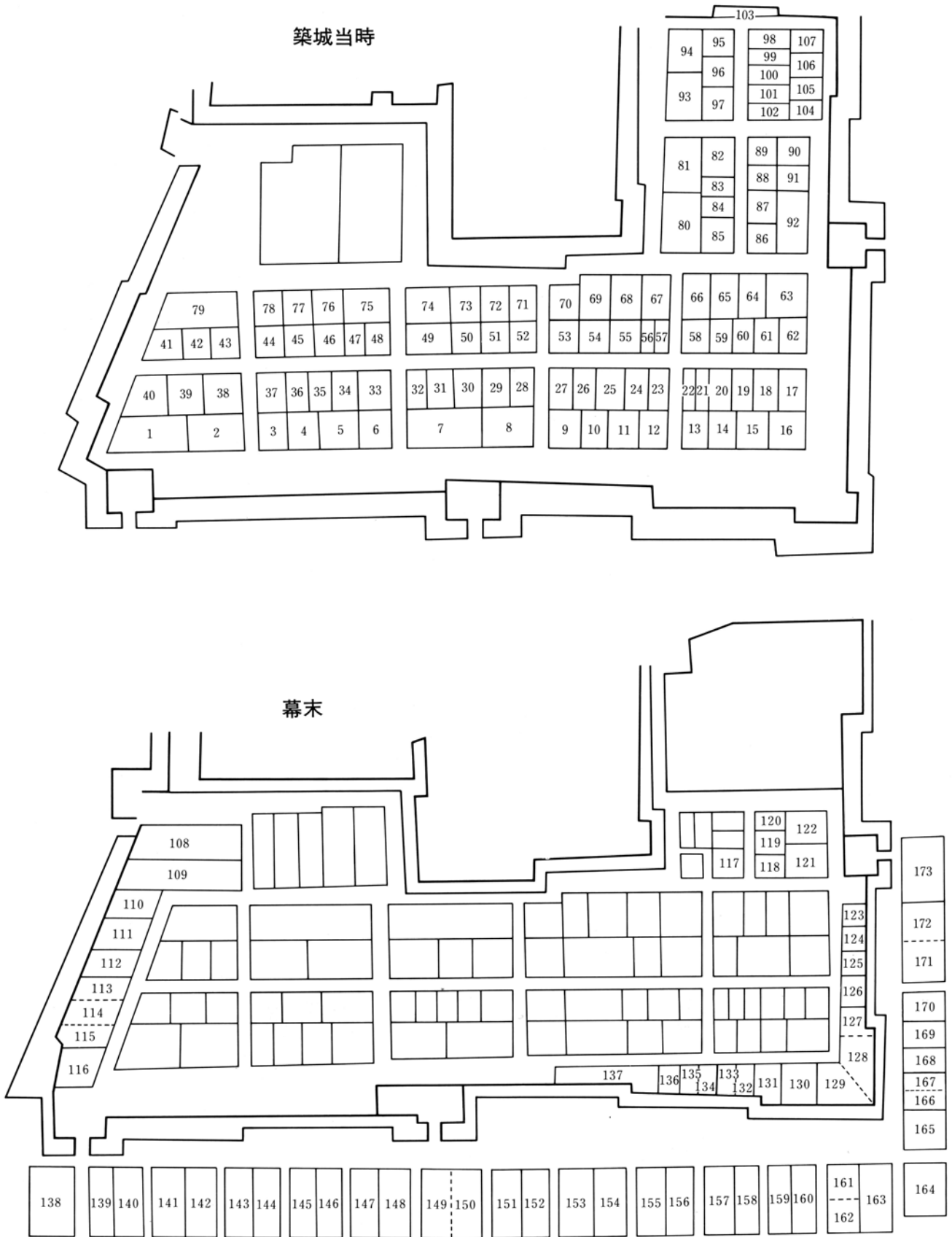
- ① 屋敷ごとの居住者は終焉時期までの記述がなされている『旧邸礎跡略』・『丸之内・片端屋敷之記』の記述を基準とする。ただし、上記のものが『尾州那護屋御城郭内諸士宅地草創以来転換聞書』（以下『転換聞書』と略す）の記述と相違するときは『転換聞書』の記述をとる。
- ② 屋敷替えの時期は諸史料に載るものをすべてとる。「寛政」などと元号のみ記述されていて、『士林派洄』で「何年断絶」などと具体的な年とその人物が勤仕をやめたことわかる記述があれば、その年を屋敷に住んでいた最後の年とする。系譜上相続が行われたと考えられる人物が同一屋敷内に続いて居住しているときは相続がその屋敷で行われたと考え、「隠居」の記述がある場合はその年を、ない場合は死没年を屋敷替えの時期とする。この年号は、『士林派洄』及び『藩士名寄』等を利用して確認を行った。また、この調査の過程、その屋敷に居住したと推定される人数と①で考えられた居住者数が違う場合は、前者のほうをとる。
- ③ 実名のないものは『士林派洄』・諸家譜を利用して、前後の実名のあるものや屋敷替え時期などから推定する。『士林派洄』を利用して推定したものと諸史料に記述されたものが相違するときは『士林派洄』からの推定をとる。
- ④ 同一姓名のものを拾い上げて屋敷の変更を推定する。同じ年号を持つものはそのあいだで屋敷替えが行われたと考える。ある屋敷でAからBに居住者が変わり他の屋敷でBからAに変わったときは二つの屋敷の間で屋敷の交換があったと考える。②の後半ようなときには父親が他の屋敷から来てそこで相続を行い、その後子どもが他の屋敷に移る場合と、子どもがあらかじめ他の屋敷を与えられており相続の際に屋敷を移る場合とが想定されるが、前後の年号からどちらかに確定できるものは確定する。
- ⑤ ある人物の屋敷の移動がわかり、その屋敷を出た時期・他の屋敷にはいった時期のどちらかがわかったいるときは、もう一方も同年に行われたとする。

最後に図と変遷表・索引について説明する。図は『金城温古録』の「三之丸内邸宅古図」と「三之丸内邸宅近体」を修正した後に模式化したものである。「築城時」と書かれた図は名古屋城築城当時の様子を描いたもので、これには外堀外の屋敷が描かれていないが、ここが江戸時代を通じて大きく変化していないので省略しただけであり、ここも築城時から成立していた。「幕末」と書かれた図の中で外堀内の番号が入っている屋敷が築城時にはなくてその後つくられていった屋敷を示す。左側と外堀内右側から下に降り左に続いていく屋敷は寛永初年(1620)に成立した。右上の6軒の屋敷は、「築城時」の図の同位置にある屋敷が元禄ごろ(1700年頃)までに一端「御屋形郭」と呼ばれる空間になった後100年以上経過した文化年間から次第に武家屋敷となっていったところである。それぞれの屋敷の成立年代については、表の中で見ていただきたい。「幕末」と書かれた図の番号の入っていない屋敷は大きな変化はなかったものの、いくつかの屋敷で分割・合併等が行われてる。この点についても、表と「築城時」の図を比較することからその変遷を読みとっていただきたい。また、「幕末」の図の中に点線の入っている屋敷があるが、これは、その屋敷がつくられたときには点線の入っているところで屋敷が分かれていたものが、合併等が行われて幕末時には実線の屋敷のようになっていたことを示している。

屋敷の変遷表は以下のようである。5桁の番号の内、上3桁が屋敷の番号を下2桁がその屋敷での居住の順を示し、屋敷の番号は三の丸の図中の番号に対応する。「武家屋敷の居住者の変遷」を目的としたため、その場所が家臣の居住空間でなくなった時点で各表は終わっている。「いつまで」はその居住者がその屋敷にいた最終時点を示すものであるが、同一家系内での相続の場合は隠居の年を示し、実際にはその屋敷に居住し続けた可能性はある。「どこから」「どこへ」の項目はその人物が三の丸内のどの屋敷から来てどの屋敷にいったかを示すものである。

索引については、苗字のみを五十音順に並べたもので実名や仮名の部分はアト・ランダムになっている。実名の確定ないし推定できた人物については実名を、実名のわからないものや確定・推定できなかった人物は仮名をあげてある。同じ実名ないし仮名のあるものは同名異人か同一人物と確定できなかったものである。下に括弧でくくられた苗字が書かれているものは、変遷表の中でその両方の苗字ででてくるが同一人物であることを示す。

先行の参照すべき研究もなく手探りで考察のため粗雑な表になってしまったが、今後各種の『分限帳』等の史料を使いよりよいものとしていきたい。なお、表作成中に山本祐子氏の「名古屋城下図の年代比定と編年について」(『名古屋市博物館研究紀要』第17巻)が出版された。山本氏の研究目的は筆者と違うものであったが裨益するところがあった。最後に、尾張藩の文献にくらかったわたしを指導して下さった元蓬左文庫職員の前江和子氏に感謝の意を表す。



第102図 名古屋城三の丸屋敷割図

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	
00101	山下三郎氏勝	寛永19(1642)			00507	山澄大膳英貞	正徳5(1715)	049	016	00908	天野丹弥景美	享保19(1734)		021	
00102	山下市正氏政	寛文3(1663)		×改易	00508	生駒因幡致長		016	016	00909	津田新十郎盛昌		036		
00103	志水監物忠知	寛文13(1673)			00509	津田又六寛当		049	004	00910	津田左平信栄			023	
00104	志水式部忠長	延宝3(1675)		002	00510	成瀬内膳正苗	元文5(1740)	004	067	00911	高橋図書麻雅			015	
00105	大道寺玄蕃直治	貞享2(1685)	005		00511	津田幸次郎信周	明和1(1764)	004		00912	河村半左衛門品秀		023	033	
00106	大道寺兵部直秀	享保10(1725)			00512	津田幸次郎信郷	安永7(1778)			00913	沢井仙次郎元矩	寛政12(1800)	006		
00107	大道寺主水直澄	宝暦8(1758)			00513	津田悦三郎			069	00914	沢井三左衛門元算	天保5(1834)			
00108	大道寺孫九郎直長				00514	下条庄右衛門正貞	寛政2(1790)	069		00915	沢井長次郎元亮	天保8(1837)			
00109	大道寺佐馬次郎直方	文化13(1816)			00515	下条安吉正賀	文化7(1810)			00916	沢井繁作元敏	明治1(1868)			
00110	大道寺欽也直寅	文久2(1862)			00516	下条庄右衛門正香	文政5(1822)		117	00917	沢井馬次郎				
00111	大道寺孫九郎直良	慶応4(1868)			00517	滝川彦次郎忠暁	文政6(1823)			00918	天野一雲				
00112	大道寺民次郎直壯	明治4(1871)			00518	滝川鑄松忠貴									
00201	稲葉七之丞正定	寛永3(1626)			00601	沢井刑部元慶	天保2(1645)			01001	水野金藏吉守				
00202	稲葉源四郎正辰	万治1(1658)			00602	沢井平左衛門元重	元禄8(1695)			01002	水野甚左衛門	寛永7(1630)			
00203	稲葉七郎右衛門正上	延宝2(1674)		×断絶	00603	沢井与三右衛門元智	元禄13(1700)	030		01003	水野主馬吉繩	寛文5(1665)			
00204	志水式部忠長	天和2(1682)	001	×断絶	00604	沢井兵部元旭	享保16(1731)			01004	水野内藏助雅信	延宝7(1679)		169	
00205	石川七郎右衛門正相	正徳3(1713)			00605	沢井丹波元倚	元文2(1645)			01004	水野伝九郎繩興	元禄6(1693)			
00206	石川権平興則	享保6(1721)			00606	沢井小平元照	宝暦3(1753)			01005	肥田孫左衛門忠興	享保9(1724)	080		
00207	石川千次郎正茂	享保18(1733)			00607	沢井仙次郎元矩			009	01006	肥田孫三郎忠寅				
00208	石河新内祥昌	宝暦5(1755)			00608	滝川彦左衛門忠栄	宝暦9(1759)	068		01007	肥田孫三郎忠順	天明3(1783)			
00209	石河民部祥久	安永3(1774)			00609	滝川小重郎				01008	肥田鉄六忠良	文政1(1818)			
00210	石河桓三郎当厚	文化5(1808)			00610	滝川長門忠厚	安永2(1773)			01009	肥田金之丞忠篤	安政3(1856)			
00211	石河式三郎当頭	文政6(1823)			00611	滝川彦次郎忠暁	文政6(1823)			01010	肥田孫三郎忠献	明治3(1870)			
00212	石河申之丞当伝	嘉永4(1851)			00612	滝川権十郎忠據	文政9(1826)			01011	肥田孫三郎				
00213	石河竹治郎正基				00613	滝川彦次郎忠雄	文久3(1863)								
					00614	滝川亀松忠挙				01101	都筑修理				
00301	稲富士佐秀明	正保4(1647)			00701	渡辺半藏守綱	元和6(1620)			01102	都筑忠兵衛	寛永(1630頃)			
00302	稲富士膳秀隆	慶安3(1650)		×断絶	00702	渡辺半藏重綱	寛永20(1643)		032	01103	小笠原三郎右衛門正吉	寛永8(1631)			
00303	横井孫右衛門時元	寛文2(1662)	134		00703	渡辺半藏治綱	明暦3(1657)	032		01104	小笠原治部右衛門吉龍	寛文13(1673)			
00304	横井孫右衛門時英	寛文3(1663)		116	00704	渡辺半藏宣綱	元禄2(1689)			01105	小笠原新藏長昌	正徳1(1711)			
00305	小瀬新右衛門忠次	貞享2(1685)	072		00705	渡辺半藏定綱	正徳5(1715)	032		01106	小笠原三九郎長綱	正徳4(1714)		140	
00306	小瀬三五郎忠智	宝永4(1707)		156	00706	渡辺源之助直綱	享保3(1718)			01107	熊谷鑄之助武実			054	
00307	五味兵馬真秀	正徳1(1711)	133		00707	渡辺源三郎綱保	宝暦4(1754)			01108	上野小左衛門師資	享保16(1731)			
00308	岩田長右衛門成元				00708	渡辺半五郎綱通	寛政12(1800)			01109	上野左助延興	宝暦13(1763)			
00309	生駒外記勝周	寛保2(1742)	054		00709	渡辺半藏綱光	文化1(1804)			01110	上野内膳景福				
00310	生駒六郎左衛門周房	延享4(1747)		016	00710	渡辺半藏剛綱	文政2(1819)			01111	上野千太郎景温	文化3(1806)			
00311	加賀島七郎左衛門正信	宝暦7(1757)	039		00711	渡辺半藏寧綱	万延1(1860)			01112	上野半助資厚	文政8(1825)			
00312	鏡島小兵衛正英	安永7(1778)			00712	渡辺半藏綱倫	元治1(1864)			01113	上野左助景澄	天保12(1841)			
00313	鏡島逸次郎当辰	天明5(1785)			00713	渡辺半藏潤綱				01114	上野久松資寿	慶応4(1868)			
00314	鏡島将曹養正	天保6(1835)								01115	上野錦				
00315	鏡島刑部正晋	嘉永2(1849)			00801	津金修理胤久	元和8(1622)			01201	兼松修理正吉	寛永4(1627)			
00316	鏡島小兵衛正鶴				00802	津金三郎左衛門	寛永3(1626)		×断絶	01202	兼松源兵衛正成	寛永17(1640)			
00401	伊奈左門吉勝				00803	上田忠左衛門			085	01203	兼松源兵衛正栄	寛文4(1664)			
00402	伊奈左門吉次				00804	上田甚五平衛正勝	万治3(1660)			01204	兼松久六正明	元禄2(1689)			
00403	伊奈源五右衛門定次	元禄3(1690)			00805	上田忠左衛門	寛文2(1662)		×断絶	01205	兼松源七正武	正徳3(1713)			
00404	伊奈左助重定	元禄10(1697)		×自殺	00806	鈴木主殿重長	正徳1(1711)	040		01206	兼松兵右衛門武矩			062	
00405	下条庄右衛門正春	宝永2(1705)	088		00807	鈴木金四郎明雅				01207	中村又藏勝時	宝暦11(1761)			
00406	下条新内孝正	正徳1(1711)			00808	庵原内膳志			138	01208	中村一学勝長	安永8(1779)			
00407	成瀬竹之助正惟			056	00809	鈴木丹後守明雅	寛保3(1743)	138		01209	中村清次郎元矩			039	
00408	成瀬大膳正苗			005	00810	鈴木亀次郎重章	延享4(1747)			01210	榑原兵庫寧綱	天明5(1785)	039		
00409	津田兵部寛当	享保19(1734)	005		00811	鈴木繁之進	宝暦5(1755)			01211	榑原孫四郎尚昌	寛政7(1795)			
00410	津田幸次郎信周			005	00812	鈴木明雅	明和2(1765)			01212	榑原武九郎寧如	天保11(1840)			
00411	横井伊織時申			070	00813	鈴木千七郎重期			070	01213	榑原勘解由正邦	慶応4(1868)			
00412	遠山彦左衛門景慶		069	067	00814	横井丹後守時申	天明6(1786)	070		01301	成瀬内膳勝吉	元和5(1619)		×断絶	
00413	成瀬吉左衛門正為	安永3(1774)	079		00815	横井織部有時	文化9(1812)			01302	牧主馬				
00414	成瀬大内藏喬長	文化11(1814)			00816	横井伊織介時宜	天保7(1836)			01303	牧宮内			×断絶	
00415	成瀬吉左衛門喬治	天保4(1833)			00817	横井兵吉永宣	明治2(1869)			01304	松井五郎左衛門	慶安2(1649)	095		
00416	成瀬吉五郎正敦	慶応4(1868)			00818	横井兵吉時忠				01305	松井竹右衛門	慶安3(1650)		×断絶	
00417	成瀬吉太正平									01306	村上六郎右衛門	万治3(1659)			
00501	大道寺玄蕃直重	寛永5(1628)			00901	八橋大和信昌	元和1(1615)			01307	岩田長右衛門昌風	寛文4(1664)			
00502	大道寺出雲直時	寛文2(1662)			00902	高力七左衛門信重	万治2(1656)			01308	岩田長右衛門昌成	延宝2(1674)			
00503	大道寺庄十郎直治	延宝3(1675)		001	00903	高力七兵衛信安	元禄11(1698)			01309	岩田新三郎要元	元禄6(1693)			
00504	寺尾内匠就実	宝永1(1704)	024		00904	高力七左衛門信綱	宝永3(1706)			01310	高木源五左衛門吉深	元禄12(1699)			
00505	寺尾頼母好実	宝永3(1706)			00905	稲葉惣左衛門規通	正徳1(1711)	038		01311	高木善太夫秀堅	元禄14(1701)			
00506	寺尾悦之助実延	宝永6(1709)	027		00906	稲葉源七正照	正徳2(1712)			01312	高木八郎左衛門秀矩	宝永2(1705)	150		
					00907	天野四郎兵衛景林	享保14(1729)			01313	高木主計秀久	宝永2(1705)			

第44表 居住者屋敷地別一覧表①

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
01314	川澄一郎右衛門政長	宝永6(1709)	156	
01315	川澄八九郎保久	正徳1(1711)		045
01316	榊原孫助宗昌	元文1(1736)	064	
01317	榊原孫助寧綱	延享4(1747)		039
	寺社奉行所	安永6(1777)		
01318	人見弥右衛門	天明5(1785)	124	
01319	人見弥之丞	天保9(1838)		
01320	人見弥八郎	天保14(1843)		
01321	人見弥右衛門			
01322	人見景福			
01401	成瀬新太郎	元和5(1619)		×断絶
01402	藤田一徳忠次		067	
01403	藤田九郎左衛門忠房			
01404	鈴木与三右衛門景之	承応3(1654)	024	
01405	鈴木友之助景昆	延宝5(1677)		
01406	鈴木友之助景忠	宝永5(1708)		
01407	鈴木此佐之丞正苗		067	
01408	小笠原富宮長辰	享保20(1735)		
01409	小笠原要人長成			
01410	加藤伴左衛門正景			
01411	小笠原三郎右衛門長成	安永5(1776)		
01412	小笠原三九郎長員	文化7(1810)		
01413	小笠原三九郎長益	天保14(1843)		
01414	小笠原彦三郎長貞	嘉永4(1851)		
01415	小笠原駒次郎長春	明治2(1869)		
01416	小笠原房之丞長清			
01501	横井作左衛門時久	寛永20(1643)		
01502	横井小兵太	正保2(1645)		
01503	横井吉三郎時豪	寛文12(1672)		
01504	横井与右衛門豊時	元禄6(1693)		
01505	横井市右衛門時令	元禄6(1693)	109	
01506	後藤弥次右衛門方元	宝永1(1704)		
01507	後藤友之丞方脩	正徳2(1712)		
01508	後藤幾之介方脩	正徳3(1713)		
01509	庵原平左衛門志	正徳4(1714)	138	
01510	富永内左衛門兼考	享保7(1722)	143	
01511	富永富次郎兼伯		020	
01512	小山市兵衛政高	享保20(1735)		
01513	織田宮内貞辰		033	
01514	高橋司書麻雅	宝暦5(1755)	009	
01515	高橋弁次郎武雅	明和8(1771)	159	
01516	生駒因幡周邑	安永3(1774)	016	
01517	高橋司書武雅	天明8(1788)	159	
01518	高橋弁次郎長豫	文化14(1817)	121	
01519	大道寺孫藏直盛	文政6(1823)		
01520	大道寺孫四郎直廉	嘉永6(1853)		
01521	大道寺孫四郎直方	安政5(1858)		
01522	大道寺良次郎直道			
01601	生駒隼人利豊	正保4(1647)		
01602	生駒八右衛門利勝	貞享5(1688)		
01603	生駒頼母宗勝	元禄13(1700)		
01604	生駒大膳致長	正徳5(1715)	005	
01605	山澄主税英貞		005	049
01606	生駒因幡致長	元文6(1741)	005	
01607	生駒金次郎致綱	延享4(1747)		
01608	生駒六郎左衛門周房	明和2(1765)	003	
01609	生駒藤次郎周邑	明和8(1771)		015
01610	生駒大膳亮周房	安永3(1774)		
01611	生駒因幡周邑	寛政5(1793)	015	
01612	生駒因幡周詢	文政3(1820)		
01613	生駒益太郎周晃	安政2(1855)		
01614	生駒鐸次郎周行			
01701	石黒勘右衛門			
01702	石黒勘右衛門良通	寛文(1670頃)	169	

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
01703	伊達半平	延宝4(1676)	031	×改易
01704	加藤伴左衛門正長			
01705	小畑五大夫武敬			
01706	小畑善太夫武慶			
01707	水野平大夫			
01708	永井伴大夫			
01709	成田新五左衛門次充	宝永2(1705)	135	
01710	成田友之丞氏章	正徳4(1714)		
01711	長野久平衛祐永	享保3(1718)		
01712	長野八之丞重祐			
01713	中山刑部貞福			021
01714	中根新六秀行		021	053
01715	川澄甚兵衛保久	元文5(1740)	133	
01716	川澄三郎右衛門充常			
01717	大崎七郎右衛門刻貞	宝暦6(1756)	162	
01718	大崎伸之丞昌長	天保15(1844)		
01719	大崎政藏	文久1(1861)		
01720	大崎七五郎昌福	慶応2(1866)		
01721	大崎銀次郎			
01801	本多勤助親信	慶長17(1612)		×殉死
01802	太田百助正勝	正保3(1646)		
01803	太田瀬左衛門資昆			
01804	都筑次右衛門			
01805	石川求馬昭信	宝永4(1707)		
01806	石川金助昭安			
01807	横井藤三郎時望	宝暦6(1756)		
01808	横井唯四郎時若	天明4(1784)		
01809	横井助次郎時有	文政10(1827)		
01810	横井安次郎輝時	文久2(1862)		
01811	横井助次郎	慶応2(1866)		
01812	横井房吉			
01901	本多与次右衛門吉信	寛永10(1633)		
01902	稲生織部	正保3(1646)		
01903	稲生新八郎俊政	元禄14(1701)		
01904	稲生伊右衛門政之			
01905	稲生新七郎			
01906	稲生由九郎	文化5(1808)		
01907	稲生猪兵衛政春	文政9(1826)		
01908	稲生吉次郎	嘉永1(1848)		
01909	稲生万松	万延1(1860)		
01910	稲生卯七正道	明治3(1870)		
01911	稲生鏡次郎端光			
02001	星野甚右衛門則勝			
02002	星野伝右衛門則等	寛永3(1626)		×改易
02003	内藤寛弥			
02004	野崎主悦兼洪			059
02005	市辺八助豊勝			
02006	土屋庄左衛門重泰	宝永1(1704)	090	
02007	土屋半之右衛門邦泰	宝永4(1707)		
02008	土屋半十郎徳弘			026
02009	伊東兵部			
02010	富永富次郎兼伯		015	146
02011	井野口安之丞宜学	文化8(1811)		
02012	井野口六郎左衛門宜鑑	嘉永2(1849)		
02013	井野口次六郎宜崇			
02101	鈴木将監			
02102	鈴木三左衛門	寛永(1630頃)		
02103	堅田殿			
02104	吉田加右衛門			
02105	河村右平治長秀	宝永6(1709)		
02106	中根新六秀行			017
02107	中山刑部貞福		017	
02108	横井牧多時久			
02109	天野四郎兵衛景美	享保21(1736)	009	

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
02110	天野増之丞			
02111	天野増之丞景忠			
02112	吉田主水	寛政6(1794)	036	036
02113	吉田求馬	天保9(1838)		
02114	吉田元蔵			
02115	増田一			
02201	小畑惣兵衛正業			
02202	小畑重太夫久広	寛永11(1634)		
02203	都筑主税正英			062
02204	阿部善兵衛正周	寛永16(1639)		065
02205	小畑重太夫久広			
02206	小畑重太夫正房	元禄6(1693)		
02207	高木大膳秀親			
02208	長野久兵衛祐永	宝永7(1710)		
02209	遠山治部景端	正徳5(1715)		
02210	田島金左衛門正為			
02211	吉田甚左衛門政幸	宝暦8(1758)		
02212	吉田获平次	寛政9(1797)		
02213	吉田三九郎	天保10(1839)		
02214	吉田孫三郎	文久3(1863)		
02215	吉田甚兵衛			
02301	徳山半兵衛	元和(1620頃)		
02302	横田三郎兵衛			
02303	横田権之助			
02304	寺尾三左衛門正龍		112	101
02305	志水八郎左衛門懐信	慶安3(1650)	101	
02306	志水友之助安忠			
02307	寺西主馬雅宣	正徳5(1715)	067	
02308	寺西九平雅矩	享保8(1723)		
02309	寺西藤左衛門昌豊			041
02310	高橋司書麻雅		009	009
02311	津田左平信榮	宝暦11(1761)		
02312	津田友吉正方			
02313	津田由之助信高	文化10(1813)		
02314	津田由之助盛高	天保7(1836)		
02315	津田義之助	嘉永6(1853)		
02316	津田邦吉信寧	文久2(1862)		
02317	津田定之助	元治1(1864)		
02318	津田正吉郎信勝			
02401	天野金治	寛永(1630頃)		
02402	鈴木宇兵衛景之			014
02403	熊谷与兵衛正実	万治1(1658)	034	
02404	熊谷内匠就実	延宝3(1675)		005
02405	稲葉右平治屋通			
02406	問宮治左衛門正等	元禄5(1692)	150	
02407	問宮外記之政	享保18(1733)		
02408	問宮藤江之峯	明和3(1766)		
02409	問宮外記之惟			064
02410	横井三太夫時表	文化14(1817)	064	
02411	横井告十郎時行	文政4(1821)		
02412	横井勇吉時定	明治2(1869)		
02413	横井紋三郎時育			
02501	青山作兵衛忠次	寛永(1630頃)		
02502	横井李時信		043	
02503	横井伊右衛門時貞	元禄6(1693)		
02504	横井伊右衛門時尚	享保15(1730)		
02505	横井伊右衛門時敏	宝暦11(1761)		
02506	横井登美四郎	寛政12(1800)		
02507	横井鉄太郎時良	嘉永6(1853)		
02508	横井定四郎	安政3(1856)		
02509	横井定之丞	慶応1(1865)		
02510	横井真蔵			
02601	園田善太夫	慶安1(1648)		

第45表 居住者屋敷地別一覽表②

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
02602	園田美太夫	寛文 8 (1668)		×改易	03003	山本平太夫秀熊	寛文 3 (1663)	098	145	03401	鈴木五郎左衛門			
02603	寺尾弥右衛門政親				03004	横井大学時良				03402	鈴木清右衛門	寛永 (1630頃)		
02604	中条主水康満		068		03005	沢井内藏助元智	元禄 8 (1695)		006	03403	熊谷与七郎正実			024
02605	千村数馬重治		089	055	03006	松井与兵衛充房				03404	堀七九郎道隣			
02607	兼松織部吉豊				03007	白井治兵衛常春	宝永 1 (1704)				033と合併			
02608	土屋半之右衛門徳弘		020		03008	白井孫作常義				03501	石黒太郎左衛門重弘	元和 5 (1619)		×退去
02609	石川一学章治	宝永 4 (1707)		142	03009	山本伝藏成昌	正徳 5 (1715)			03502	堀与十郎正意	寛永 16 (1639)		
02610	今泉佐左衛門定当				03010	山本孫市成之				03503	堀外記貞高			141
02611	小塩安左衛門田賢			126	03011	桜井内記尚定	享保 18 (1733)		161		033と合併			
02612	横井右衛門時久		126		03012	千賀与八郎信賢			147					
02613	芝山幸右衛門宣晴				03013	佐藤源左衛門忠盈	寛保 1 (1741)	147						
02614	中川武左衛門典高				03014	佐藤平治俱忠			147	03601	石黒市十郎	元和 5 (1619)		
02615	中川勘左衛門典厚				03015	成瀬半太夫正明	宝暦 7 (1757)		056	03602	飯島土佐光重	寛永 10 (1633)		
02616	赤林孫七郎	寛政 10 (1798)			03016	松井喜代之助宣喬				03603	飯島左源太光貞			
02617	赤林新十郎	文政 10 (1827)			03017	横井吉平宏時	寛政 4 (1792)	043		03604	田辺彦四郎常澄			
02618	赤林武平	嘉永 2 (1849)			03018	横井重郎左衛門時恭	文政 3 (1820)			03605	寺西藤左衛門雅矩		082	144
02619	赤林孫七郎信敏				03019	横井隆吉時邦	弘化 4 (1847)			03606	織田縫殿介貞幹	元禄 8 (1695)	031	067
					03020	横井金次郎	嘉永 3 (1850)			03607	津田新十郎信明	正徳 3 (1713)	029	
					03021	横井万之助				03608	津田金十郎盛昌			009
02701	平岩権左衛門									03609	島沢熊之助佐往	元文 4 (1739)	111	
02702	平岩因書	寛永 (1630頃)			03101	清水兵助忠政				03610	島沢一之右衛門徳高			
02703	鈴木主殿重之				03102	清水兵助	寛永 (1620c)			03611	尾崎伝兵衛規忠			
02704	志水友之介懐信		101		03103	佐枝平兵衛種定			049	03612	尾崎新左衛門熊忠	寛保 2 (1742)		
02705	滝川亦左衛門忠尚	良享 4 (1687)	101		03104	長野六右衛門重政	寛文 2 (1662)		060	03613	堀原金左衛門貞以			
02706	滝川三郎左衛門忠周				03105	伊達半平			050	03614	堀原五左衛門貞寿	宝暦 6 (1756)		062
02707	津田九郎兵衛高寛	宝永 6 (1709)	049		03106	渡辺源太左衛門奉綱	延宝 5 (1677)		017	03615	兼松源兵衛寅正		062	
02708	寺尾悦之助実延	延享 4 (1747)	005		03107	渡辺源五右衛門兼純				03616	吉田主水			
02709	寺尾六郎左衛門実隆	天明 1 (1781)			03108	吉田六郎衛門				03617	吉田鉄之進			021
02710	寺尾庄九郎実専	文化 13 (1816)			03109	織田太郎左衛門貞幹			036	03618	天野四郎兵衛景忠		021	
02711	寺尾勝太郎実備	嘉永 2 (1849)			03110	山内半三郎知重	元禄 9 (1696)	040		03619	天野鉄三郎兼武	文化 10 (1813)		
02712	寺尾勝太郎実修					007と合併				03620	天野四郎兵衛景貞	嘉永 3 (1850)		
02713	寺尾左馬之助実方	明治 2 (1869)			03201	本多主殿	寛永 (1620c)		×断絶	03621	天野四郎兵衛景澄			
02714	寺尾孫十郎				03202	渡辺忠右衛門治綱	寛永 20 (1643)	033	007	03701	石黒善九郎重成	元和 2 (1616)		
02801	平岩左馬助				03203	渡辺次郎三郎重綱	慶安 1 (1648)	007		03702	石黒善十郎重玄	寛永 12 (1635)		
02802	平岩新五左衛門	寛永 (1630頃)			03204	渡辺藤藏長綱	寛文 8 (1668)			03703	石黒善十郎重時	寛文 3 (1663)		
02803	服部作十郎正忠	明暦 3 (1657)			03205	渡辺半之助基綱				03704	石黒善十郎重正	元禄 6 (1693)		
02804	服部仁兵衛正憲				03206	渡辺半平定綱	元禄 2 (1689)		007	03705	富永左門昌長	宝永 6 (1709)		155
02805	服部牛之助正茂	正徳 1 (1711)	143		03207	野崎源五右衛門兼純	享保 7 (1722)	168		03706	長屋紋右衛門忠秀			
02806	小笠原半平直恒	享保 4 (1719)			03208	野崎一学兼永	宝暦 8 (1758)			03707	中西基五兵衛勝統	延享 2 (1745)		
02807	小笠原司馬直行				03209	野崎源五右衛門兼敏				03708	中西基太郎匡見			
02808	山崎又兵衛元武	享保 8 (1723)			03210	野崎源五右衛門兼綱	文化 12 (1815)			03709	中西主税長之	文化 14 (1817)		
02809	山崎主水元昭		039	045	03211	野崎一学兼敏	嘉永 4 (1851)			03710	中西主税長毅	嘉永 7 (1854)		
02810	小笠原司馬直行	享保 12 (1727)			03212	野崎善九郎兼良	明治 4 (1871)			03711	中西主税長裕	文久 2 (1862)		
02811	小笠原仁左衛門直忠				03213	野崎国松兼清				03712	中西基太郎長教			
02812	横井孫太郎				03301	平岩伯耆	元和 9 (1623)			03801	河野庄助	元和 9 (1623)		
02813	田辺太左衛門常政	享保 20 (1735)	150		03302	渡辺治郎三郎治綱			032	03802	稲葉治部正直	寛永 9 (1632)		
02814	田辺新兵衛常治			043	03303	酒井平九郎				03803	稲葉惣左衛門正武	寛文 6 (1666)		
02815	横井源五兵衛時枝			126	03304	鮎川権右衛門長冬	寛永 20 (1643)	167	×改易	03804	稲葉重郎左衛門正信	元禄 3 (1690)		
02816	横井源五兵衛時房				03305	成瀬吉兵衛正継			062	03805	稲葉惣十郎規通	宝永 3 (1706)		009
02817	上田頼母享	明和 8 (1771)	053		03306	成瀬勲貞正英	寛文 9 (1669)	062		03806	石川兵庫正相	正徳 3 (1713)		002
02818	上田与七郎慎	文政 3 (1820)			03307	成瀬四郎左衛門正時	寛文 10 (1670)		150	03807	石川権平興則			002
02819	上田帯刀仲敏	文久 3 (1863)			03308	竹腰丹波正辰	宝永 3 (1706)		101	03808	服部小太郎正治	享保 8 (1723)		160
02820	上田大兵衛				03309	竹腰民部正武	宝永 6 (1709)		071	03809	鈴木新兵衛理重			
02901	三宅逸平治				03310	滝川弥一右衛門時令	享保 6 (1721)	109		03810	鈴木九郎重藏			
02902	三宅逸平治	慶安 1 (1648)			03311	滝川友之助善成	享保 15 (1730)			03811	服部小十郎正治	明和 3 (1766)		
02903	三宅三之丞重良	寛文 (1670頃)			03312	滝川彦左衛門忠栄			067	03812	服部小十郎	明和 4 (1767)		
02904	津田三十郎信明	元禄 8 (1695)		036	03313	織田周防長恒			067	03813	服部小重郎			
02905	松井市右衛門玄吉	宝永 1 (1704)	148		03314	山村甚兵衛良啓				03814	服部龜吉	明和 7 (1770)		
02906	松井勘兵衛弍吉	宝暦 7 (1757)			03315	河村半左衛門水秀	寛保 3 (1743)			03815	堀田治右衛門			
02907	松井要人一登	寛政 2 (1790)			03316	河村兵馬兵秀			009	03816	堀田小重郎			
02908	松井左次馬	文政 5 (1822)			03317	織田宮内貞辰	明和 9 (1772)	015		03817	吉原竹太郎	寛政 1 (1789)	044	
02909	松井要人	文政 7 (1824)			03318	織田藤四郎信伝	文化 8 (1811)			03818	吉原宇門	文化 1 (1804)		
02910	松井要之助	慶応 4 (1868)			03319	織田縫殿介信庸	安政 2 (1855)			03819	吉原権六郎	文化 1 (1804)		
02911	松井雄之助				03320	織田捨吉信建	元治 1 (1864)			03820	吉原権六郎	明治 2 (1869)		
03001	山本内藏助				03321	織田万弥信重				03821	吉原易三郎			
03002	山本宗兵衛													

第46表 居住者屋敷地別一覧表③

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
03901	河野孫兵衛				04212	山澄清記意清	嘉永2(1849)			04902	佐枝平兵衛種定	万治4(1661)	031	166
03902	河野孫兵衛	寛永15(1638)		×退去	04213	山澄安次郎	安政7(1860)			04903	山澄将監英龍	寛文12(1672)	072	
03903	堀田長門				04214	山澄清之助				04904	山澄将監英重	元禄12(1699)		
03904	白杵弥左衛門正次				04301	武藤掃部				04905	山澄辰之助英貞	宝永6(1709)		005
03905	福富八郎衛門貞次				04302	武藤佐吉				04906	津田九郎兵衛高寛	享保4(1719)	027	
03906	野崎織部兼明	元禄7(1694)	059	059	04303	武藤兵太夫	寛永(1620c)		×改易	04907	津田又六郎寛当			005
03907	野崎将監兼洪		059		04304	横井重郎左衛門時信		129	025	04908	山澄将監英貞	享保17(1732)	016	
03908	大橋幾左衛門政親	宝永2(1705)			04305	井野口六郎左衛門宜依	宝永5(1708)			04909	山澄直三郎胤豊	明和6(1769)		
03909	大橋新弥政芳				04306	井野口治太夫賀親	享保6(1721)			04910	山澄主膳龍明	享和2(1802)		
03910	山崎主水元昭	享保8(1723)		028	04307	井野大助宜丘				04911	山澄豊吉豊尚	天保14(1843)		
03911	恒川文五右衛門至政				04308	横井重郎左衛門時諱	宝暦3(1753)			04912	山澄右近胤勝	慶応1(1865)		
03912	加賀島七郎左衛門正信	延享4(1747)		003	04309	横井重郎左衛門時諱	宝暦8(1758)			04913	山澄主税豊功	慶応2(1866)		
03913	榑原兵衛寧綱		013	012	04310	横井吉平宏時			030	04914	山澄式部豊利			
03914	中村清次郎元矩	文政4(1821)		012	04311	千賀志摩信賢		147		05001	小笠原次郎右衛門			
03915	中村勝三郎元教	天保9(1838)		156	04312	田辺新兵衛常治	明和7(1770)	028		05002	小笠原半弥	万治(1660頃)		×断絶
03916	埴原鏡之丞貞利	天保12(1841)	156		04313	田辺喜内常為	安永3(1774)			05003	鈴木外記			
03917	埴原乙三郎貞安	弘化3(1846)			04314	田辺三太郎常方	安永6(1777)		151	05004	伊達半平	寛文2(1662)		031
03918	埴原鍋三郎貞善	文久2(1862)			04315	寺社奉行所	天保9(1838)			049と合併				
03919	埴原十郎貞健	慶応3(1867)			04316	石川十郎左衛門昭嗣	天保11(1840)	151		05101	平岩主水	元和(1620頃)		071
03920	埴原馬二郎				04317	石川重次郎昭房	慶応4(1868)		×改易	05102	高木図書			
04001	石川石見正重	慶安2(1649)		110	04401	堀田治右衛門之重				05103	矢島左京			
04002	志水半左衛門忠継	承応2(1653)		108	04402	堀田三郎兵衛武明	寛文8(1668)			05104	間島権右衛門重正	承応3(1654)		
04003	鈴木五郎作重長	寛文2(1662)	074	008	04403	堀田治左衛門方教	元禄9(1696)		×退去	05105	間島三四郎正重	貞享2(1685)		
04004	山内治太夫知真	元禄6(1693)			04404	吉原甚太夫仲治	享保10(1725)			05106	間島弥三郎正曜			
04005	山内治左衛門明真	元禄9(1696)			04405	遠山重右門仲昌	明和4(1767)			05107	熊谷三九郎宗実	宝永7(1710)		140
04006	山内半三郎知重			031	04406	吉原重兵衛	安永8(1779)			05108	佐藤弥平治忠益			147
04007	渡辺監物頼綱				04407	吉原竹太郎			038	05109	横井十郎左衛門時諱			
04008	水野惣右衛門康寛	享保16(1731)			04408	馬場三右衛門	寛政4(1792)			05110	河村百之進安秀	宝暦9(1759)		
04009	水野内藏康村	延享3(1746)			04409	馬場源之丞	文化13(1816)			05111	河村松三郎秀雄			054
04010	水野内藏助康友	天明8(1788)			04410	馬場三右衛門	安政2(1855)			05112	熊谷孫九郎実房	寛政6(1794)	054	
04011	水野助之進	寛政2(1790)			04411	馬場常吉信久				05113	熊谷三九郎周実	文化3(1806)		
04012	水野内藏助康民	天保9(1838)			04501	高木外記吉任	寛永1(1624)		076	05114	熊谷鍋吉懐実	嘉永6(1853)		
04013	水野惣右衛門康功	安政6(1859)			04502	高木内膳吉近	寛文4(1664)			05115	熊谷式三郎方寅			
04014	水野内藏康年				04503	高木八郎左衛門秀矩	元禄10(1697)	111	150	05201	平岩伝右衛門重勝			
04101	野村清治昌直	元和1(1615)		×戦死	04504	寺尾権之丞正純	元禄15(1702)	152		05202	平岩伝右衛門安武	寛永(1630頃)		
04102	下方左近貞景	承応2(1653)			04505	寺尾与三右衛門正辰	宝永1(1704)			05203	石川左衛門宗直	延宝2(1674)		
04103	下方太郎兵衛貞名			085	04506	遠山重郎左衛門景供	宝永4(1707)		069	05204	石川左衛門宗令	天和3(1683)		
04104	三沢内匠宣昌				04507	川村兵藏方秀	正徳1(1711)		064	05205	石川漸意宗直	元禄5(1692)		
04105	矢崎十兵衛利金			085	04508	川澄八九郎保久			013	05206	石川宮内宗幸	享保4(1719)		
04106	下方太郎兵衛貞名	延宝1(1673)	085		04509	成瀬藤左衛門正晨	享保16(1731)	068	133	05207	石河宮内直澄	安永6(1777)		
04107	下方平十郎貞豊				04510	成瀬藤左衛門正晨				05208	石河主水興移	寛政6(1794)		
04108	横井源五兵衛時春			159	04511	山崎又兵衛元昭	元文6(1741)	028		05209	石河吉十郎公猷	文政9(1826)		
04109	町野助左衛門				04512	山崎百太郎元英	享和3(1803)			05210	石河図書好生	嘉永4(1851)		
04110	内藤喜左衛門正聰			152	04513	山崎要人	文化14(1817)			05211	石河群十郎賢綱			
04111	成瀬小平治一禄	享保18(1733)			04514	松平又兵衛	弘化4(1847)			05301	松平文右衛門正広	寛永12(1635)		
04112	成瀬勝左衛門正峰	享保20(1735)			04515	松平俊之充	安政6(1859)			05302	松平三太夫尚我	寛文3(1663)		
04113	成瀬市三郎正英				04516	松平乾造				05303	松平治郎右衛門久広	元禄7(1694)	059	
04114	寺西藤左衛門昌豊	享保12(1727)	023		04601	鈴木権太夫			×改易	05304	松平三太夫永親	元禄10(1697)		
04115	寺西七左衛門昌凭	明和9(1772)			04602	鈴木式部	寛永17(1640)			05305	小山市兵衛政卿	元禄12(1699)	146	
04116	寺西忠四郎昌殊			124	04603	寺尾左馬直政	慶安3(1650)	079		05306	小山市之丞政純			
04117	野村佐太夫昌武	寛政12(1800)			04604	寺尾半之助直龍	延宝3(1675)		×兇狂	05307	横井重郎左衛門時諱			
04118	野村八郎右衛門昌並	文政10(1827)				御殿				05308	中根新六秀行			017
04119	野村告之丞	文久2(1862)			04701	鈴木清左衛門				05309	松井与兵衛充房			
04120	野村佐太夫				04702	鈴木右京重成	慶長17(1612)		153	05310	松井式部明喬			
04201	津田新十郎正盛				046と合併					05311	上田半右衛門重純	明和2(1765)	146	
04202	津田新十郎正方				04801	鈴木淡路重吉	慶長17(1612)			05312	上田頼母享	明和8(1781)		028
04203	兼松修理正載	宝永4(1707)			04802	大津庄兵衛直次	寛永9(1632)			05313	岩田数馬元壽	文化5(1808)	159	
04204	大野芳庵直則	正徳3(1713)			04803	大津庄兵衛直江				05314	岩田金之丞	天保14(1843)		
04205	大野彦之助直歡	正徳4(1714)			046と合併					05315	岩田栄太郎	慶応4(1868)		
04206	馬杉権右衛門直良	享保2(1717)			04901	佐枝主馬種長				05316	岩田武之丞			
04207	馬杉惣左衛門直昌	享保20(1735)								05401	松平庄之助			
04208	馬杉勝之丞直義	寛保2(1742)								05402	鈴木兵藏重香			142
04209	馬杉源之進直該	寛延2(1749)								05403	野崎左近洪隆	延宝7(1679)		
04210	馬杉惣左衛門													
04211	山澄瀬左衛門義清	文政9(1826)	137											

第47表 居住者屋敷地別一覧表④

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
05404	野崎内兼純			168	06001	平岩圭	元和(1620頃)		×退去	06503	阿部善兵衛正周		022	022
05405	浜島伊織				06002	渡辺新左衛門秀綱			164	06504	石原内膳			
05406	上野市之助資房	宝永1(1704)			06003	津田重郎兵衛直信		089	127	06505	水野三九郎政勝			
05407	上野市之助資時				06004	長野又右衛門重政	天和2(1682)	031		06506	内藤頼母忠卓			
05408	生駒三左衛門勝周			003	06605	長野紋右衛門重時	天和3(1683)		150	06507	野崎丹下兼典			
05409	熊谷与兵衛武実	延享1(1744)	011			053と合併				06508	島沢代右衛門往長		068	
05410	熊谷門太郎実房			051	06101	岡田八兵衛					064と'066に分割			
05411	河村松三郎秀雄	文化4(1807)	051		06102	岡田六郎兵衛	寛永10(1633)			06601	阿部河内正興	寛永17(1640)		
05412	河村多門	天保8(1837)			06103	倉合左近				06602	阿部河内正政	承応4(1655)	065	
05413	河村小三郎				06104	木村一学				06603	阿部七三郎正治	延宝4(1676)		
05414	河村図書永興				06105	大竹金弥				06604	阿部長三郎正寛	享保5(1720)		
05501	酒井源左衛門忠近	寛永8(1631)			06106	都筑次右衛門			018	06605	阿部右京正恭	享保12(1727)		
05502	酒井源十郎					060と062に分割				06606	阿部善右衛門正茂	明和4(1767)		
05503	松井市右衛門				06201	酒井金兵衛忠安	寛永2(1625)			06607	阿部五郎作正嘉			
05504	松井勘兵衛玄吉			148	06202	酒井金兵衛忠許	寛永(1630頃)			06608	阿部石見正長	文化3(1806)		
05505	高木源五左衛門清忠			013	06203	成瀬四郎左衛門正英		022	033	06609	阿部石見正信	天保3(1832)		
05506	水野数馬重治	享保9(1724)	026		06204	成瀬吉兵衛正継	元禄5(1692)	033		06610	阿部大治郎正直	文久3(1863)		
05507	千村亦作重矩	延享1(1748)			06205	成瀬勝四郎一信	宝永7(1710)		068	06611	阿部主膳正傷			
05508	千村多門伯斉			147	06206	横井重郎左衛門時諄			068					
	056と合併				06207	兼松源兵衛武矩	延享4(1747)	012		06701	藤田民部忠次			014
05601	天野助大夫重春	寛永(1630頃)		068	06208	兼松甚兵衛正郷	宝曆6(1756)			06702	藤田大学忠量			×退去
05602	問宮権大夫之等	万治1(1658)	082		06209	兼松多宮寅正			036	06703	藤田民部忠常	寛文3(1663)		
05603	問宮主馬正像	寛文3(1663)	×改易		06210	埴原金左衛門貞寿			036	06704	寺尾三左衛門正龍	延宝2(1674)	101	
05604	横井伊織時峰	延宝4(1676)			06211	竹中彦左衛門				06705	寺尾龜之助正勝	元禄7(1694)		152
05605	横井織部時盛	元禄8(1695)			06212	竹中用吉和順	文化7(1810)			06706	長野修理祐重			138
05606	横井織之丞時真	宝永4(1676)		070	06213	竹中内膳和貴	天保11(1840)			06707	長野新次郎祐久			139
05607	中条主水康満	享保10(1725)	070		06214	竹中内膳重順	明治1(1868)			06708	寺西藤左衛門雅宣	正徳3(1713)	139	023
05608	中条信濃康英				06215	竹中彦太郎重之				06709	織田太郎右衛門貞幹	享保3(1718)	036	
05609	成瀬大和守正雄	宝曆7(1757)	004		06301	玉置小平太				06710	織田藤四郎長恒			033
05610	成瀬半大夫正明	明和8(1771)	030		06302	玉置小平太				06711	滝川彦左衛門忠栄		033	068
05611	成瀬半大夫正恕	文化3(1806)			06303	玉置長五郎直次	延宝4(1676)			06712	成瀬内膳正苗			
05612	成瀬半大夫正邦	天保9(1838)			06304	玉置小平太直承	元禄10(1697)			06713	成瀬大膳正喜		005	079
05613	成瀬半之丞正の	安政3(1856)			06305	玉置半四郎直頼	元禄10(1697)			06714	遠山重郎左衛門景慶	明和8(1771)	004	
05614	成瀬竹之助正直				06306	玉置小平衛直承	宝永1(1704)			06715	遠山山九郎景恭	文化7(1810)		
05701	平野采女	慶長17(1612)			06307	玉置豊三郎直貞	正徳2(1712)			06716	遠山大膳景雄	天保14(1843)		
05702	休清院				06308	玉置右膳直教	享保4(1719)	157		06717	遠山大膳景道	元治1(1864)		
	056と合併				06309	玉置左源太直之	享保6(1721)			06718	遠山大十郎景英			
05801	荒川三郎次郎弘秋	慶長18(1613)			06310	玉置卜之直連	寛保2(1742)			06801	天野伊豆重次			
05802	荒川伯耆吉政	正保1(1644)			06311	玉置小平太直香	宝曆9(1759)			06802	天野助大夫重春	寛永14(1637)	056	
05803	荒川次郎九郎吉任	寛文4(1664)			06312	玉置長九郎直辰	明和1(1764)			06803	天野小麦右衛門重治	延宝3(1675)		
05804	荒川三弥頼廉	元禄5(1692)			06313	玉置藏吉直和	文化11(1814)			06804	天野新助重矩	延宝7(1679)		165
05805	荒川小四郎頼資	享保15(1730)			06314	玉置新十郎直方	嘉永2(1849)			06805	鈴木重郎左衛門重好			
05806	荒川伯耆頼標	天保9(1759)			06315	玉置幾四郎直虎	文久3(1863)			06806	通姫			
05807	荒川繁三郎頼忠				06316	玉置小太郎直照				06807	中条主水康満		026	
05808	荒川金次郎頼豊	文化7(1810)			06401	岡田喜右衛門				06808	横井十郎左衛門時諄	宝永7(1710)		062
05809	荒川藏主頼重	安政5(1858)			06402	岡田八兵衛	寛永(1630頃)			06809	成瀬藤大夫一信	享保1(1716)	062	
05810	荒川藏主頼則	文久2(1862)			06403	小沢兵部	承応3(1654)		×改易	06810	成瀬典膳雅貞			045
05811	荒川鉄弥義廉				06404	榊原孫助宗俊	寛文12(1672)	100		06811	島沢仁大夫往長			065
05901	平岩鞠負				06405	榊原孫助宗氏	元禄16(1703)			06812	織田太郎右衛門貞幹	享保3(1718)		
05902	平岩鞠負	寛永(1630頃)			06406	榊原林左衛門宗令	元禄16(1703)			06813	織田藤四郎長恒			
05903	上総殿				06407	榊原用左衛門宗昌	正徳1(1711)		013	06814	星野司馬則昔			
05904	松平次郎右衛門久広			053	06408	河村兵藏方秀	正徳4(1714)	045		06815	滝川彦左衛門忠栄		067	006
05905	野崎主税兼洪	元禄7(1694)	020	039	06409	奥田仙太郎智雄	享保5(1720)		160	06816	渡辺主馬当綱	宝曆11(1761)		
05906	野崎織部兼明	元禄14(1701)	039		06410	横井告右衛門時房	享保15(1730)	133		06817	渡辺主馬年綱	寛政6(1794)		
05907	野崎清左衛門兼林	享保14(1729)			06411	横井三太夫時芳	元文5(1740)			06818	渡辺源吉豊綱	天保15(1844)		
05908	野崎主税兼央	昭和6(1769)			06412	横井源之丞時式				06819	渡辺半九郎愷綱	嘉永7(1854)		
05909	野崎河内兼歳	寛政7(1795)			06413	横井三太夫時表			024	06820	渡辺半九郎春綱			
05910	野崎彦三郎兼雄	寛政10(1798)			06414	問宮外記之惟	文化3(1806)	024		06901	小笠原土佐政元	寛永14(1637)		
05911	野崎主税兼亮	文化5(1808)			06415	問宮岩三郎正兼	文政7(1824)			06902	小笠原与一右衛門吉武	寛文2(1662)		
05912	野崎新九郎兼寛	文政9(1826)			06416	問宮延太郎正統	天保13(1842)			06903	遠山彦左衛門景正	元禄6(1693)		
05913	野崎主膳兼紀	天保11(1840)			06417	問宮金之丞正兼				06904	遠山重郎左衛門景明	宝永4(1707)		
05914	野崎一慶兼当	明治1(1868)			06501	天野金太夫貞直	寛永(1620c)			06905	遠山重郎左衛門景供	享保15(1730)	045	
05915	野崎祐吉郎兼良				06502	阿部五郎作正致	寛永17(1640)		066	06906	遠山百太郎景慶			004
										06907	下条庄右衛門正貞			005
										06908	津田悦三郎	文化1(1804)	005	

第48表 居住者屋敷地別一覧表⑤

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
06909	津田又六郎	文化5(1808)			07603	高木久太夫吉和 075と合併	寛文3(1663)	112	140	08504	矢崎十兵衛利金		041	
06910	津田左馬助寛吉	文政2(1819)								08505	津金次郎四郎胤広 御用屋敷	元禄6(1693)		
06911	津田太郎左衛門寛饒	明治2(1869)			07701	伊奈縫殿	元和1(1615)		×退去	08601	豊田小作	寛永(1620c)		
06912	津田兵十郎信教				07702	横井伊織時安	正保4(1647)			08602	遠山園書遠景	寛永12(1635)		
07001	松平助左衛門秀勝	寛永6(1629)			07703	横井伊織時峰 075と合併	寛文3(1663)		056	08603	岩田長右衛門昌成			
07002	松平助左衛門貞則	寛永17(1640)		×改易						08604	生田兵六			
07003	鈴木主殿重之				07801	竹中内膳重長	元和8(1622)			08605	松井与兵衛宗卿	貞享2(1685)		
07004	古屋新五左衛門景成	寛文8(1668)		×退去	07802	竹中源助重昌	寛永19(1642)			08606	松井頼母充房 御用屋敷	元禄6(1693)		
07005	久野奎太夫長雄	天和2(1682)	071		07803	竹中左太夫重政 075と合併	寛文12(1672)							
07006	久野奎太夫定直	元禄6(1693)		164						08701	豊田七右衛門			
07007	成瀬半太夫正信	元禄13(1700)		169						08702	矢崎佐左衛門 86と'88に分割		124	
07008	成瀬竹之助正推													
07009	中条主水康満	宝永4(1707)		056										
07010	横井頼母時真			056	07901	御鷹部屋 富永大学直次			155					
07011	河村兵馬永秀				07902	寺尾左馬直政			046					
07012	渡辺主馬当綱				07903	竹腰出雲守信良	寛永14(1637)		×蝸居					
07013	横井伊折時申				07904	成瀬吉右衛門正則	寛文11(1671)				08801	肥田孫三郎忠重	寛永(1620c)	80
07014	鈴木千七郎重期	寛政9(1797)		008	07905	成瀬吉太夫長則	元禄7(1694)			08802	鈴木八郎右衛門			
07015	鈴木嘉十郎重達	天保15(1844)		008	07906	成瀬内記長勝	寛保1(1741)			08803	下条庄右衛門正明	寛文5(1665)		
07016	鈴木弾正重到	慶応4(1868)			07907	成瀬吉左衛門長貞	延享4(1747)			08804	下条源左衛門正則	延宝2(1674)		
07017	鈴木勇三郎				07908	成瀬喜三郎正為			004	08805	下条半弥正春 御用屋敷	元禄10(1697)		004
					07909	成瀬豊前正喜			067					
07101	平岩宮内				07910	成瀬比左之丞正健	天和8(1771)			08901	河手十郎兵衛	正保(1640c)		
07102	平岩主水	寛永(1630頃)	051	167	07911	成瀬大膳正元	天保2(1831)			08902	津田縫殿直信			060
07103	久野七郎右衛門宗信	寛文3(1663)			07912	成瀬大内蔵正植	嘉永6(1853)			08903	井野口六郎左衛門宣依			
07104	久野奎太夫長雄	寛文8(1668)			07913	成瀬孟次郎正心	元治1(1864)			08904	水野三九郎政勝			
07105	竹腰山城守正晴	延宝5(1677)		070	07914	成瀬豊前守正晴				08905	京極半左衛門高直			
07106	竹腰龍助友正	宝永3(1706)			07915	成瀬比佐吉正心				08906	千村数馬重治 御用屋敷	元禄5(1692)		026
07107	竹腰兵部正映	宝永6(1709)												
07108	竹腰民部正武	宝暦9(1759)	033		08001	奥田求馬	元和1(1615)			09001	土屋善之丞	慶安3(1650)		
07109	竹腰老岐守勝紀				08002	松井石見				09002	土屋太郎右衛門	寛文3(1663)		×退去
07110	竹腰小伝次咲群	文化1(1804)			08003	肥田孫左衛門忠重	慶安2(1649)	088		09903	細野甚五兵衛定次			
07111	竹腰山城守正定	天保8(1837)			08004	肥田孫三郎忠勝	元和3(1683)			09904	津田奎之助直連			157
07112	竹腰老岐守正	文久2(1862)			08005	肥田孫三郎忠興 御用屋敷	元禄6(1693)		010	09905	土屋庄左衛門重泰 御用屋敷	元禄5(1692)		020
07113	竹腰澄若正旧													
07201	杉山次郎太夫				08101	市辺虎之助正好	寛永18(1641)			09101	山城宮内少輔			
07202	杉山次郎太夫政武	寛永(1620c)		146	08102	市辺十左衛門勝信	万治(1660c)			09102	山城九兵衛	元和(1610c)		×断絶
07203	山澄新兵衛英龍			049	08103	松平因書康久				09103	柳生兵庫教幸	慶安3(1650)		
07204	小瀬新右衛門忠次 071と合併	寛文3(1663)		003	08104	松平大助康永	延宝3(1675)			09104	柳生茂左衛門利方 092と合併	寛文2(1662)		
07301	三木左京	寛永(1620c)			08105	松平無三康久								
07302	小野沢五郎兵衛吉清	正保2(1645)			08106	松平大膳正賀								
07303	小野沢五左衛門吉記	明暦4(1658)		×退去	08107	松平無三康久 御用屋敷	延宝6(1678)			09201	佐久間河内守			
07304	山下佐左衛門氏紹 071と合併	寛文3(1663)	106	×退去						09202	佐久間半兵衛	元和2(1616)		×断絶
					08201	間宮次郎四郎之等	寛永(1620c)		056	09203	古屋主水景泰	景安2(1649)		
					08202	寺西三五郎昌勝	明暦1(1655)		094	09204	石川伊賀正光	寛文11(1671)	093	
					08203	寺西虎之丞雅矩			036	09205	石川七郎右衛門章長 御用屋敷	元禄6(1693)		173
					08204	鈴木覚太夫								
07401	奥山大膳忠元	寛永1(1624)		×退去	08205	佐藤吉右衛門正勝 御用屋敷	元禄(1690c)			09301	石川市正光忠	寛永5(1628)		
07402	鈴木主殿重之	慶安3(1650)								09302	石川太郎八正光 御用屋敷	慶安2(1649)		092
07403	鈴木五郎作重長 評定所 071と合併	寛文3(1663)		040										
07501	中村亦藏元勝	慶長15(1610)			08301	市辺惣十郎清政	寛永13(1636)			09401	寺西藤左衛門昌吉			
07502	中村亦藏元悦				08302	市辺伊兵衛成政	慶安(1650c)			09402	寺西三五郎秀昌	寛永10(1633)		
07503	中村亦藏勝親	寛文3(1663)			08303	御局				09403	寺西三五郎昌勝			082
07504	成瀬隼人正正親	元禄16(1703)			08304	津金文左衛門胤景				09404	細野篠兵衛成定	承応1(1652)	097	
07505	成瀬小吉正輝	享保17(1732)			08305	津金次郎四郎胤広				09405	細野篠兵衛成住 御用屋敷	元禄5(1692)		
07506	成瀬隼人正正太	明和5(1768)			08306	深沢兵助利忠 御用屋敷			099					
07507	成瀬隼人正正典	文化6(1809)												
07508	成瀬小吉正寿	天保9(1838)			08401	榑原孫助宗俊				09501	津田太郎左衛門知信			013
07509	成瀬主殿頭正任	安政4(1857)			08402	榑原五左衛門宗親 083と合併				09502	松井主殿 細工所 御用屋敷			
07510	成瀬主殿頭正肥													
07601	高木志摩一吉	寛永1(1624)			08501	上田忠三郎	寛永3(1626)			09601	粟生将監			
07602	高木修理吉任	慶安3(1650)	045		08502	津金齋胤景								
					08503	下方太郎兵衛貞名			041	041				

第49表 居住者屋敷地別一覧表⑥

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
09602	高木善右衛門			
09603	佐治四郎兵衛			
09604	粟生将監			
09605	守屋伊兵衛氏盛 御屋敷	慶安 4 (1651)		
09701	一色龍雲某			127
09702	内藤覚弥			
09703	細野一雲成定 御屋敷	慶安 4 (1651)		094
09801	兼松丹三郎正安			
09802	武野安齋知信			
09803	守屋伊兵衛氏盛			
09804	山本兵太夫秀熊			030
09805	鈴木兵藏季重			142
09806	三沢内匠宣昌			
09807	中西左七勝澄			
09808	中根清右衛門 御屋敷			
09901	浅野庄藏長治			
09902	浅野文右衛門治易	明暦 2 (1656)		
09903	水野三九郎政勝			
09904	原源五右衛門			
09905	深沢善助利忠 御屋敷			
10001	村田権右衛門			
10002	村田喜藤次	元和 6 (1620)		
10003	滝川長門時成			
10004	志水采女忠良			
10005	榊原孫助宗俊			084
10006	天野太郎左衛門忠正			064
10007	井野口六郎左衛門宣依			
10008	鈴木覚太夫 御屋敷			
10101	滝川豊前守法忠			
10102	滝川長十郎時成	寛永12(1635)	100	109
10103	滝川又左衛門忠尚			027
10104	志水八郎左衛門懐信			027
10105	寺尾三左衛門正龍			023
10106	竹腰丹波正辰 御屋敷			067
10201	中島甚兵衛			
10202	中島甚助定良			147
10203	浅香右衛門宣依 御屋敷			
10301	小笠原彦右衛門勝忠			170
10302	長野猪右衛門			
10303	林勘右衛門			
10304	駒井庄左衛門			
10305	細野八左衛門定次			
10306	横井大学時良 御屋敷			
10401	矢野八助政成			138
10402	富永丹波兼種	寛永 9 (1632)		
10403	富永丹波兼吉 御屋敷	万治 3 (1660)		
10501	玄益			
10502	玄隆			
10503	玄 御屋敷	万治 3 (1660)		

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
10601	遠山右近景豊			
10602	遠山掃部景吉	寛永12(1635)		
10603	遠山辰之助某			
10604	山下佐左衛門氏紹 御屋敷	万治 2 (1659)		073
10701	遠山掃部景吉	寛永12(1635)		
10702	加藤伊織景信			
10703	岩田長右衛門昌風 御屋敷	万治 2 (1659)		
10801	志水甲斐忠政	承応 2 (1653)		
10802	志水甲斐忠継	寛文 5 (1665)	040	
10803	志水虎之助忠秀	宝永 7 (1710)		
10804	志水右門忠栄	享保 9 (1724)		
10805	志水甲斐忠染	宝暦 8 (1758)		
10806	志水嘉吉忠吉	明和 3 (1766)		
10807	志水甲斐忠珍	天明 5 (1785)		
10808	志水甲斐忠喬	文化14(1817)		
10809	志水小八郎忠受	天保 3 (1832)		
10810	志水金の丞忠勤	天保 4 (1833)		
10811	志水菅次郎忠厚	天保 9 (1838)		
10812	志水小八郎忠愛	享政 5 (1858)		
10813	志水半三郎忠賢	文久 2 (1862)		
10814	志水録次郎忠平			
10901	成瀬半左衛門正虎	寛永 2 (1625)		
10902	滝川豊前守法忠			
10903	滝川豊前時成	寛永12(1635)	101	
10904	滝川権十郎之成	元禄 6 (1693)		
10905	滝川弥一右衛門征成	宝永 2 (1705)		
10906	滝川作左衛門時令 御屋敷	宝永 6 (1709)		033
11001	吉田平内	元和 (1620頃)		
11002	奥山権兵衛			
11003	川地友之助			
11004	石川勘解由正重			40
11005	並河芳庵	万治 2 (1659)		
11006	並河意卜	元禄11(1698)		
11007	並河治兵衛	宝永 2 (1705)		
11008	若林治左衛門尚連	正徳 2 (1712)		
11009	若林治左衛門尚吉			
11010	吉見左京大夫幸和	享保13(1728)		
11011	吉見右門幸混	宝暦13(1763)		
11012	吉見越前守幸孝	寛政 9 (1797)		
11013	吉見相模守幸茂	天保 8 (1837)		
11014	吉見讃岐守幸純	文久 3 (1863)		
11015	吉見石見守			
11101	下方弥左衛門	明暦 2 (1656)		
11102	下方弥三郎貞実	寛文 2 (1662)		
11103	高木作十郎秀矩	寛永 4 (1664)		
11104	山田漸庵玄祐	延宝 3 (1675)		
11105	山田漸庵玄哲	宝永 3 (1705)		
11106	山田玄広重英			
11107	河村波門兼秀			
11108	鳥沢市之右衛門佐往			036
11109	野呂瀬九郎右衛門			
11110	間宮小膳	天保 8 (1837)		
11111	間宮式太郎	慶応 4 (1868)		
11112	間宮藤五郎			
11201	寺尾与兵衛正俊			
11202	寺尾三左衛門正龍	寛永13(1636)		023
11203	高木久太夫吉和	慶安 3 (1650)		076
11204	三沢内匠宣昌			
11205	浅野文右衛門治易			099

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
11206	小笠原九郎次郎宗正	延宝 5 (1677)	112	×断絶
11207	内藤内記忠泰			
11208	大井半左衛門	貞享 2 (1685)		
11209	通姫			
11210	朝倉伊左衛門道景	元禄14(1701)		
11211	朝倉市三郎景包			
11212	寺西左源治雅言	正徳 3 (1713)		158
11213	堀田七郎左衛門之喜			158
11214	堀田九郎兵衛之長			
11215	山内鼎時真			
11216	鈴木市郎右衛門唯重	享和 1 (1801)		
11217	鈴木要人	文政 7 (1824)		
11218	鈴木伊三郎義信	弘化 2 (1845)		
11219	鈴木宇右衛門			
11301	大橋長右衛門	寛永 (1630頃)		
11302	高清院 役割御用場			
11303	安達玄長	宝永 6 (1709)		
11304	渡辺佐一郎	享保 9 (1724)		
11305	渡辺佐一郎			
11306	渡辺齋	文化 7 (1810)		
11307	渡辺佐一郎	文化14(1817)		
11308	水野藤兵衛忠栄	天保 2 (1831)		
11309	水野藤三郎忠真	天保11(1840)		
11310	水野鏡三郎忠愛	慶応 2 (1866)		
11311	水野藤馬			
11401	岩附惣左衛門			
11402	岩附惣左衛門 113と合併	寛永 (1630頃)		
11501	大橋七平伊舎	寛永18(1641)		
11502	大橋勘太夫伊則			
11503	山下市郎兵衛秀氏	寛文 3 (1663)		×退去
11504	稲垣岡右衛門			
11505	楠丈庵正刻	貞享 2 (1685)		
11506	楠道二正職			
11507	並河自晦	宝永 7 (1710)		
11508	山田類庵宗信			
11509	谷田茂庵広康	元文 2 (1737)	125	
11510	谷田武平治村芳	寛保 2 (1742)		
11511	谷田喜伝治益村	寛政 3 (1791)		
11512	谷田喜伝治 113と合併	文化14(1817)		
11601	藤沢権左衛門正重	寛永14(1637)		
11602	藤沢長治郎正長			
11603	山下八郎右衛門氏輝	寛文 3 (1663)		×退去
11604	横井孫右衛門時英	元禄 6 (1693)	003	
11605	横井辰之丞時衡	享保12(1727)		
11606	横井市郎平時般			144
11607	中条金四郎康篤	延享 2 (1745)	140	
11608	中条東四郎康多	寛政 6 (1794)		
11609	中条多藤康永	文政 7 (1824)		
11610	中条珪五郎康理	文政 9 (1826)		
11611	中条蝶吉康庸	天保14(1843)		
11612	中条熊吉康哉	慶応 4 (1868)		
11613	中条錦之丞康济			
11701	下条庄右衛門正香	天保 9 (1838)	005	
11702	下条数馬正従	慶応 2 (1866)		
11703	下条数馬正義			
11801	須賀井順吉正次	天保14(1843)		
11802	須賀井左膳時恒			
11803	須賀井健吉正			

第50表 居住者屋敷地別一覧表⑦

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
11901	田宮半兵衛翼			168	12607	小塩平八照賢	安永3(1774)			13206	堀源五郎貞俊	延享1(1744)		
11902	小菅釜之助正致	天保3(1832)	168		12608	小塩平八郎定賢				13207	堀源之進延貞	寛政9(1798)		
11903	小菅市郎左衛門正義	嘉永1(1848)			12609	横井源五兵衛時房	享和1(1801)	028		13208	堀与十郎	天保2(1831)		
11904	小菅愛之助	安政6(1859)			12610	横井平一郎久時	安政2(1855)			13209	堀金次郎貞岡	慶応4(1868)		
11905	小菅金太郎				12611	横井平太夫時喜	明治3(1870)			13210	堀永之進親仁			
					12612	横井富雄								
12001	中根清五郎				12701	一色龍雲	寛永6(1629)	087		13301	横井吉三郎時家			
12002	中根綱吉重遠				12702	一色造酒丞孝治	寛文4(1664)			13302	石原文右衛門重富	貞享3(1686)		
12101	高橋河内守長豫	文政3(1820)	015		12703	津田重郎兵衛直信	延宝6(1678)	060		13303	石原源藏重田			
12102	高橋司書武韶	安政4(1857)			12704	津田勝之丞英信	宝永3(1706)			13304	奥田頼母忠雄	宝永3(1706)		
12103	高橋司書武維	元治1(1864)			12705	津田九郎左衛門秉文	享保20(1735)			13305	五味平馬馬秀	宝永4(1707)		003
12104	高橋民部武為	明治4(1871)			12706	津田善弥信誕	元文5(1740)			13306	中根源左衛門宗房	正徳4(1714)		
12105	高橋宮次郎				12707	津田善弥信誕	元文5(1740)			13307	横井告右衛門時房			064
12201	幡野弥五右衛門		168		12708	津田松之助信尹	寛延3(1750)			13308	川澄八九郎保久		045	017
12301	四手井承安	寛永(1620c)			12709	津田九郎右衛門信栄	寛政10(1798)			13309	林久左衛門英興			
12302	岡本玄皓				12710	津田縫殿信任	弘化3(1846)			13310	肥田喜内久忠			
12303	大田少休				12711	津田縫殿信好	安政2(1855)				132と134に分割			
12304	坂意策 作事小屋	元禄(1690c)			12801	坂井半九郎	明暦2(1656)			13401	横井孫右衛門時孝	寛永15(1638)		
12401	米倉市太夫				12802	坂井久左衛門 127と合併	寛文4(1664)		×改易	13402	横井孫右衛門時元	慶安3(1650)		003
12402	矢崎作左衛門			087	12901	横井伊右衛門時有				13403	稲富権之丞秀勝	貞享4(1687)		
12403	松村新兵衛				12902	横井重郎左衛門時信	寛永(1630頃)		043	13404	稲富太平夫祐清	享保2(1717)		
12404	天野太郎左衛門忠正				12903	武野安斎知信				13405	稲富吉次郎秀栄	明和4(1767)		
12405	市辺清兵衛正明				12904	守屋伊右衛門				13406	稲富吉次郎秀邦	寛政3(1791)		
12406	水野八弥				12905	守屋善助				13407	稲富平左衛門	文政5(1822)		
12407	松井与兵衛充房				12906	一色頼母				13408	稲富吉次郎秀蜜	天保11(1840)		
12408	津田重郎右衛門雪信	寛保3(1743)			12907	津金文左衛門胤景				13409	稲富四郎	文久3(1863)		
12409	津田角弥仲郡				12908	津金次郎四郎胤広	元禄13(1700)			13410	稲富喜太郎			
12410	岩屋平右衛門朝公	寛保3(1743)			12909	津金文助胤郷	元禄13(1700)			13501	武野新右衛門仲定	寛永17(1640)		
12411	岩屋富三郎朝稚				12910	津金伊三郎胤英	宝永2(1705)			13502	武野新五右衛門信安	元禄8(1695)		
12412	人見弥右衛門	安永6(1777)	013		12911	津金文左衛門胤忠				13503	武野新五左衛門仲房			
12413	岡田喜三郎				12912	津金金之丞胤臣 127と合併	享保16(1731)			13504	成田新五左衛門次充			017
12414	本多									13505	五味新治左衛門貞尹	宝永2(1705)		
12415	寺西忠四郎昌殊	寛政2(1790)	041		13001	石黒作兵衛時勝				13506	五味弾七信福			
12416	寺西九平	天保14(1843)			13002	石黒作兵衛時長	寛文1(1661)			13507	下条庄兵衛正昭	享保2(1717)		
12417	寺西虎之丞昌剛	安政6(1859)			13003	石黒八之助時全				13508	下条半左衛門広貞	文化9(1812)		
12418	寺西三五郎昌員				13004	山澄五郎兵衛経英	宝永7(1710)			13509	下条彦吉正純	安政5(1858)		
12501	南部午之助宗清	寛永(1630頃)		152	13005	山澄清治郎英卿	延享1(1744)			13510	下条半五郎	慶応2(1866)		
12502	玄札				13006	山澄喜兵衛	延享2(1745)			13511	下条新之丞			
12503	山本彦助				13007	山澄清左衛門義清	安永2(1773)			13601	山本道伝政之	元禄2(1689)		
12504	小野沢七郎兵衛吉行				13008	小笠原弥三郎主忠			13602	山本道栄政儀	正徳5(1715)			
12505	谷田茂庵安信	貞享2(1685)			13009	小笠原九郎兵衛		137	137	13603	山本政之進政房	元文1(1736)		
12506	谷田茂伯広藤			115	13010	小笠原与三郎				13604	山本政之進政晚			
12507	桜木宮内				13011	小笠原八右衛門	文化3(1806)			13605	山本政之進			
12508	石川外記利久				13012	小笠原一馬忠意	天保14(1843)			13606	山本道伝	安永8(1779)		
12509	千村平兵衛	正徳5(1715)			13013	小笠原延次郎				13607	山本道八郎	文政6(1823)		
12510	水野新右衛門時興	享保19(1734)			13101	横井十右衛門	寛永(1630頃)			13608	山本吉五郎	文政6(1823)		
12511	水野治兵衛時尹				13102	柳下仁右衛門	慶安4(1651)			13610	山本勝太郎	安政7(1860)		
12512	勝野常元享叔				13103	柳下仁右衛門				13611	山本久兵衛			
12513	吉田元格				13104	富永重郎右衛門兼俊	宝永6(1709)			13701	水野三四郎	寛永(1630頃)		
12514	室賀平九郎				13105	柳原八郎兵衛宗種				13702	津金妙雲			
12515	高木平七一貫	天明8(1788)			13106	勝野郷右衛門良柯				13703	津金善七			
12516	高木徳三郎	天保5(1834)			13107	五味織江真堯	延享1(1744)			13704	津金七右衛門			
12517	高木平七	明治3(1870)			13108	高木安次郎	文化1(1804)			13705	小川玄智			
12518	高木愛之丞				13109	高木甚五左衛門	文政10(1827)			13706	小川玄智			
12601	兼松彦四郎	寛永1(1624)			13110	高木金弥	天保2(1831)			13707	小坂宗雲			
12602	兼松太郎兵衛正以	慶安4(1651)			13111	高木甚五左衛門				13708	渡辺昌軒	宝永6(1709)		
12603	兼松彦四郎	寛文7(1667)			13201	横井三太夫	天保2(1831)			13709	寺尾兵次郎正重			
12604	渡辺七九郎久綱	元禄13(1700)			13202	横井采女賢時	享保4(1719)			13710	伊藤弥右衛門			
12605	渡辺七九郎成綱				13203	横井貞之右衛門時尚	享保15(1730)			13711	小笠原弥三郎主忠			130
12606	横井宇右衛門時久			026	13204	横井治郎左衛門時洪				13712	山澄清左衛門義清 空き地		130	042
12606	小塩安左衛門旧賢	宝暦5(1755)	026		13205	堀勘兵衛貞貞	享保16(1731)	148		13801	原田右衛門盛次	寛永6(1629)		

第51表 居住者屋敷地別一覽表⑧

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	
13802	長野五郎右衛門政成	正保1(1644)	104		14206	鈴木兵藏重香	貞享4(1687)	054			御国奉行所				
13803	長野数馬政武	天和1(1681)			14207	鈴木紋左衛門季重		098			14601	松井勘兵衛	寛永1(1624)		
13804	長野友之助祐重			067	14208	星野三四郎貞則	元禄10(1697)				14602	松井三左衛門			
13805	渡辺監物頼綱				14209	星野伝十郎恒則	元禄10(1697)				14603	杉山次郎太夫政武	正保4(1647)	072	
13806	寺西園書雅矩	元禄13(1700)	144		14210	都筑弥兵衛	元禄11(1698)	145			14604	鳥居藤左衛門	承応2(1653)		
13807	奥田主馬忠雄	正徳1(1711)	133		14211	都筑次兵衛陳信	宝永4(1707)				14605	天野三右衛門	寛文2(1662)		
13808	奥田主馬仲雄	正徳3(1713)	143		14212	都筑三郎左衛門本武	宝永4(1707)				14606	小山市兵衛清政	天和3(1683)		
13809	庵原平左衛門志		015	008	14213	石川一学章治	享保18(1733)	026			14607	小山権左衛門政卿	元禄7(1694)	053	
13810	鈴木丹後明雅		008	015	14214	石河安次郎章純	寛延1(1748)				14608	水谷九左衛門忠知	元禄12(1699)	147	
13811	庵原内膳志	享保5(1720)	008		14215	石河銀次郎光壽	明和5(1768)				14609	鳥居八右衛門勝明	元禄13(1700)		
13812	庵原文之丞守承	享保11(1726)			14216	石河外三郎章信					14610	星野七右衛門則章			
	御国奉行手代屋敷				14217	長野八助祐清	文化1(1804)				14611	上田半右衛門重純			
13901	奥平求馬貞実				14218	長野七郎右衛門祐喜	文政6(1823)				14612	河村兵馬永秀		053	
13902	奥平弾兵衛貞利	慶安1(1648)			14219	長野鍋吉祐寿	弘化4(1847)				14613	星野八左衛門則益	寛延2(1749)		
13903	田辺四郎右衛門常之				14220	長野鍋吉祐信					14614	星野武之助則臣			
13904	田辺彦四郎常澄				14301	安部勘兵衛良長	寛永20(1643)				14615	富永内左衛門兼伯	安永6(1777)	020	
13905	寺西藤左衛門雅直			067	14302	安部六左衛門良信					14616	富永内匠	天明5(1785)		
13906	長野権右衛門祐久	享保14(1729)		067	14303	安部六左衛門種季	延宝5(1677)				14701	平岩九郎左衛門元正			
13907	長野伝之助祐軌	享保15(1730)			14304	安部権太夫盛種	貞享1(1684)				14702	平岩又右衛門			
13908	長野彦次郎祐式	宝暦4(1754)			14305	富永内左衛門貞兼	元禄13(1700)				14703	渡辺半十郎景綱	寛文5(1665)	150	
13909	長野増四郎祐正	明和8(1771)			14306	富永伝之丞兼孝	宝永4(1707)	015			14704	遠山伝十郎	寛文7(1667)	148	
13910	長野与次郎政若				14307	奥田右衛門仲雄	正徳1(1711)	138			14705	天野孫作信幸	貞享1(1684)		
13911	大久保平太夫	天明3(1783)			14308	服部仁左衛門正茂		028			14706	片桐弥五右衛門嘉寛	元禄6(1693)	144	
13912	富永内左衛門兼氏	文化1(1804)			14309	五味平馬真秀	延享1(1744)				14707	中島葛正良	元禄7(1694)	102	
13913	富永内匠兼多	文化5(1808)			14310	五味織江真堯	寛延3(1750)	131			14708	水谷九左衛門忠知	元禄7(1694)	146	
13914	富永筆吉兼美	文政2(1819)			14311	五味平馬義真	文化7(1810)				14709	尾崎小兵衛致隆	元禄13(1700)	145	
13915	富永千弥兼文	天保14(1843)			14312	五味平馬直茂	天保10(1839)				14710	沢井助左衛門元敦	正徳2(1712)		
13916	富永内匠兼邸	文久2(1862)			14313	五味伝次郎直真	安政2(1855)				14711	野崎三之右衛門兼善	享保8(1723)		
13917	富永二藏忠直				14314	五味織江守真					14712	橋田与左衛門	享保9(1724)		
14001	原田市左衛門				14401	戸田右馬允					14713	佐藤源左衛門忠益	享保18(1733)	051	
14002	原田作左衛門			161	14402	水野猪左衛門守政		157			14714	千賀綾殿信賢		030	
14003	山下権之助氏忠	寛文3(1663)	161		14403	中野理右衛門満貞	寛文5(1665)	157			14715	千村多門伯奇		043	
14004	高木志摩吉和	延宝3(1675)	076		14404	佐藤半太夫	寛文7(1667)	145			14716	佐藤源左衛門俱忠	安永7(1778)	030	
14005	高木三郎兵衛清長	宝永5(1708)			14405	遠山伝十郎	延宝1(1673)	147			14717	佐藤歌次郎兼忠	文政2(1819)		
14006	高木政次郎孝保	宝永6(1709)			14406	稲葉九郎左衛門正俊	元禄5(1692)				14718	佐藤三弥嘉忠	嘉永5(1852)		
14007	熊谷与兵衛宗実	正徳3(1713)	051		14407	片桐弥五右衛門嘉寛	元禄7(1694)	147			14719	佐藤分之助忠恭	慶応4(1868)		
14008	熊谷鍋之助武実	正徳4(1714)			14408	長坂次兵衛忠貞	元禄12(1699)				14720	佐藤喜内忠恒			
14009	小笠原三九郎長綱				14409	寺西園書雅矩	元禄13(1700)	036	138						
14010	中条主水乗康	享保19(1734)			14410	近藤弥五太夫種房	元禄16(1703)				14801	鳥沢九兵衛正勝	寛永(1630頃)		
14011	中条金四郎康篤			116	14411	富永金七兼豊	正徳4(1714)				14802	小笠原惣左衛門	正保3(1646)	149	
14012	高木八郎左衛門秀綱	宝暦7(1757)			14412	平岩七太夫元雅	享保6(1721)	148			14803	川澄平左衛門正吉	万治2(1659)	156	
14013	高木貞治郎秀胤	寛政9(1797)			14413	小山重郎兵衛政純		053			14804	遠山伝十郎	寛文5(1665)	147	
14014	高木文太郎秀真	天保14(1843)			14414	水野伴左衛門					14805	土岐基右衛門頼要	寛文6(1666)		
14015	高木内膳秀徹	嘉永3(1850)			14415	渡辺主馬当綱					14806	林市郎左衛門正勝	延宝1(1673)	145	
14016	高木伴十郎秀林				14416	横井孫右衛門時般	宝暦4(1754)	116			14807	蛭川善左衛門武親	天和3(1683)		
14101	吉原五左衛門				14417	横井丈吉番時	天明7(1787)				14808	都筑弥兵衛	元禄2(1689)	145	
14102	吉原数馬				14418	横井源太郎時憲	文化14(1817)				14809	松井市右衛門玄吉	元禄8(1695)	055	
14103	吉原助太夫仲頼	寛文5(1665)			14419	横井孫右衛門時成	文政3(1820)				14810	千村作左衛門秀信	元禄12(1699)		
14104	堀勘兵永貞高	元禄6(1693)	034		14420	横井初之丞時邦	安政5(1858)				14811	西尾三郎兵衛富首	元禄17(1704)	145	
14105	堀次郎右衛門貞儀				14421	横井市郎平時是	慶応2(1866)				14812	平岩七太夫元雅	正徳4(1714)	144	
14106	伊奈庄左衛門重定				14422	横井孫太郎時陳	慶応4(1868)				14813	堀勘兵衛貞紀	享保8(1723)	132	
14107	松井与兵衛充房				14423	横井亮三郎					14814	武野治兵衛影信	享保11(1726)		
14108	野呂瀨内記直盛	元文2(1737)			14501	田代法印綱重	寛永10(1633)								
14109	野呂瀨内記直亮	明和2(1765)			14502	田代内記広綱	寛永21(1644)				14901	長谷川左門	寛永(1630頃)		
14110	野呂瀨六太郎直衛	寛政6(1794)			14503	田代武兵衛尹綱	寛文4(1664)				14902	成瀬吉左衛門正則	寛永14(1637)	079	
14111	野呂瀨六太郎直休	享和2(1802)			14504	山本平太夫秀熊			030		14903	小笠原惣左衛門		148	
14112	野呂瀨喜十郎直温	文政12(1829)			14505	本多久兵衛勝正	寛文8(1668)				14904	小笠原安左衛門	寛文3(1663)		
14113	野呂瀨半之助直賢	明治3(1870)			14506	佐藤半太夫	寛文11(1671)	144				評定所			
14114	野呂瀨直一郎直陳				14507	西尾助右衛門正房	延宝1(1673)				15001	前田平兵衛			
14201	岩瀬権左衛門	寛永6(1629)			14508	林市郎左衛門正勝	元禄2(1689)	148			15002	前田七郎兵衛	寛永17(1640)		
14202	左右田与平重次	寛永15(1638)			14509	都筑弥兵衛	元禄10(1697)	148	142		15003	問宮治左衛門正等	寛文10(1670)	024	
14203	左右田九平俊重	慶安1(1648)			14510	五味所左衛門延貞	元禄13(1700)				15004	都筑藤兵衛			
14204	左右庄左衛門綱俊	万治2(1659)			14511	尾崎小浜衛致隆	元禄16(1703)	147			15005	成瀬四郎左衛門正時	延宝5(1677)	033	
14205	左右田与平重武				14512	西尾三郎兵衛富首	正徳2(1712)	148							
					14513	箕形善左衛門忠政	享保11(1726)								

第52表 居住者屋敷地別一覧表⑨

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	番号	人名	いつまで	どこから	どこへ	
15006	渡辺半十郎景綱		147		15505	富永弥十郎兼佐	宝永6(1709)			15909	岩田左門斯元	宝曆9(1759)			
15007	長野紋左衛門重時		060		15506	富永彦兵衛兼俊	宝永6(1709)			15910	岩田多宮兼辰	明和8(1771)			
15008	田辺太左衛門常政			152	15507	富永左門昌長	享保19(1734)	131	037	15911	岩田金吾元寿	明和8(1771)		053	
15009	高木八郎左衛門秀矩 評定所	元禄11(1698)	045	013	15508	富永定右衛門正忠	明和3(1766)			15912	高橋司書麻雅	安永3(1774)	015	015	
15101	石川甚四郎成信				15509	富永善之助兼敏	安永5(1776)			15913	岡野八左衛門				
15102	石川八郎兵衛昭成	延宝4(1676)			15510	富永左門忠栄	文化14(1817)			15914	松井小重郎惟喬	文政8(1825)			
15103	石川新兵衛氏昭	元禄15(1702)			15511	富永孫四郎忠純	安政4(1857)			15915	松井源三郎景喬	嘉永4(1851)			
15104	石川弥十郎昭成	享保9(1724)			15512	富永茲治兼保				15916	松井延二郎実秀				
15105	石川右衛門八昭嘉	天明3(1783)			15601	小川庄右衛門	寛永7(1630)			16001	服部次郎右衛門正長				
15106	石川伊織昭臣	文化1(1804)			15602	小川庄右衛門生政				16002	服部小十郎正吉	慶安4(1651)			
15107	石川善之丞昭嗣 寺社奉行所	天保8(1837)		043	15603	小川覚兵衛	万治2(1659)			16003	服部小左衛門正勝	天和3(1683)			
15201	戸田加賀	寛永17(1640)			15604	川澄平左衛門正吉	寛文5(1665)	148		16004	服部半平正真	元禄15(1702)			
15202	南部牛之助宗清	明暦2(1656)	125		15605	川澄分助房成	元禄10(1697)			16005	服部鐵之進正長	正徳5(1715)			
15203	南部安兵衛宗武	貞享4(1687)			15606	川澄惣左衛門延長			013	16006	服部新五郎正治			038	
15204	南部源五右衛門宗忠	元禄2(1689)			15607	上田織部執重	宝永4(1707)			16007	奥田千太郎智雄	宝暦2(1752)	064		
15205	渡辺善左衛門顯綱				15608	小瀬新右衛門忠智	延享3(1796)	003		16008	奥田右門昌雄	安永1(1772)			
15206	寺尾三左衛門正勝	元禄7(1694)	067		15609	小瀬新左衛門珠真	安永4(1775)			16009	奥田頼母春雄	文化6(1809)			
15207	寺尾幸之助正純			045	15610	小瀬齋正方	文政7(1824)			16010	奥田頼母貞雄	天保15(1844)			
15208	田辺太左衛門常政		150	028	15611	小瀬新太郎				16011	奥田鉄太郎義雄	文久2(1862)			
15209	内藤喜左衛門正聰	享保11(1726)	041		15612	埴原金左衛門貞健	天明6(1786)			16012	奥田武彦基雄	明治2(1869)			
15210	内藤喜一郎正辰	延享4(1747)			15613	埴原金十郎貞昭	文政12(1829)								
15211	内藤喜左衛門正伸	天明2(1782)			15614	埴原誠之丞貞利	天保9(1838)		039						
15212	内藤喜一郎正著				15615	中村又藏元教	慶応1(1865)	039							
15213	田辺三太郎 御国奉行所 勘定所	天明5(1785) 寛政6(1794) 明治2(1869)			15616	中村一吉親礼									
15214	林正十郎				15701	寺西半左衛門									
15301	加藤李				15702	寺西四郎兵衛				16101	水野佐右衛門	寛永(1630頃)			
15302	加藤忠八				15703	寺西十六夫				16102	水野善太夫				
15303	上田半平				15704	寺西道意				16103	山下権之助氏忠			140	
15304	鈴木右京重成	万治1(1658)	047		15705	中野理右衛門満貞				16104	原田作左衛門			140	
15305	鈴木武兵衛重方	元禄6(1658)			15706	水野猪左衛門守政	寛文8(1668)	144		16105	桜井内記善親	寛文7(1667)			
15306	鈴木七郎左衛門重教	元禄14(1701)			15707	水野友右衛門貞信	元禄1(1688)			16106	桜井三十郎定頼	享保18(1733)			
15307	鈴木武兵衛重辰	宝暦4(1754)			15708	津田市正直連	元禄12(1699)	090		16107	桜井内記尚定	宝暦9(1759)	030		
15308	鈴木四郎左衛門重真	明和1(1764)			15709	玉置安之丸直球	正徳2(1712)		067	16108	桜井牧之助歴定	天明6(1786)			
15309	鈴木能登所重	明和8(1771)			15710	毛利治部左衛門頼容	享保16(1731)			16109	桜井内記庶定	文化13(1816)			
15310	鈴木半之助重角	寛政2(1790)			15711	毛利掃部広直	享保20(1735)			16110	桜井内記定民	嘉永5(1852)			
15311	鈴木菊四郎重達	享和1(1801)			15712	毛利源内義由				16111	桜井作左衛門民典				
15312	鈴木治部左衛門重継	弘化4(1847)			15713	毛利源五左衛門頼忠				16201	大崎七郎右衛門昌好	元和6(1620)			
15313	鈴木亀太郎重徳	安政6(1859)			15714	毛利勘解由広吉	文化4(1807)			16202	大崎七郎右衛門昌繼	寛永11(1634)			
15314	鈴木鎖太郎重安	明治3(1870)			15715	毛利健一郎広居	文政11(1828)			16203	大崎七郎右衛門昌次	延宝3(1675)			
15315	鈴木亀彦重住				15716	毛利八左衛門広賢	弘化3(1846)			16204	大崎三郎昌貞	享保3(1718)			
15401	中川庄藏政盛	寛永9(1632)			15717	毛利鍊太郎広貫	明治4(1871)			16205	大崎仲之進刻貞 161と合併			017	
15402	中川織部重政	寛永18(1641)			15718	中川直三郎直亮				16301	千村平右衛門良重	寛永7(1630)			
15403	中川庄藏政玄	元禄15(1702)								16302	千村新平重長	寛文1(1661)			
15404	中川庄助政清	宝永2(1705)								16303	千村吉之助重定	貞享3(1686)			
15405	大橋儀右衛門政芳									16304	千村平六重好	貞享5(1688)			
15406	大橋新弥									16305	千村弥十郎仲成	宝永3(1706)			
15407	堀田弥五右衛門之成	宝永6(1709)		158						16306	千村主税政成	宝永6(1756)			
15408	石黒太郎左衛門重継	享保2(1717)	158							16307	千村平右衛門政武	明和1(1764)			
15409	石黒善左衛門重寛	享保11(1726)								16308	千村平右衛門頼寿				
15410	石黒丹下矩古	延享4(1747)								16309	千村平右衛門仲雄	文政11(1828)			
15411	石黒丹下矩敦	天明5(1785)								16310	千村平右衛門仲冬	嘉永6(1853)			
15412	石黒助三郎矩持	文政6(1823)								16311	千村平右衛門仲展				
15413	石黒善十郎重富	天保11(1840)								16401	相原内匠広親				
15414	石黒助三郎重方	明治2(1869)								16402	相原七郎兵衛				
15415	石黒善之丞重弘									16403	渡辺新左衛門秀綱		060		
15501	彦坂主善政勝	慶安3(1650)	079							16404	渡辺郷右衛門有綱				
15502	富永大学直次	承応3(1654)								16405	稲葉一学				
15503	富永弥四郎直兼	元禄4(1691)								16406	小笠原安左衛門某	万治2(1659)			
15504	富永弥左衛門兼宣									16407	小笠原藤太郎之敵				
					15901	平岩七兵衛元吉	元和6(1620)			16408	飯島清藏隆重	元禄14(1701)			
					15902	平岩瀨兵衛元成	正保4(1647)			16409	飯島藤十郎重清				
					15903	平岩善右衛門元則	延宝1(1763)			16410	久野奎太夫定直	宝永5(1708)	070		
					15904	平岩善太夫元綱	元禄8(1695)			16411	久野竹之進宗直	享保19(1734)			
					15905	横井源五兵衛時春	享保2(1717)	041		16412	久野左近辰正	天明1(1781)			
					15906	横井仁助時照				16413	久野七左衛門	寛政10(1798)			
					15907	幡野弥五兵衛忠徳	元文3(1738)			16414	久野千之進	天保3(1832)			
					15908	幡野新藏忠岐									

第53表 居住者屋敷地別一覧表⑩

第V章 補論

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
16415	久野七之丞			
16416	小笠原惣左衛門成徹	天保9(1838)		
16417	小笠原伝三郎成職	天保13(1842)		
16418	小笠原松太郎成庸	嘉永4(1851)		
16419	小笠原覚四郎成憲			
16501	平岩掃部吉範	元和5(1619)		
16502	平岩左近吉縁	寛永7(1630)		
16503	平岩三郎左衛門吉忠			
16504	小野沢七郎兵衛吉行			
16505	三沢内匠宜昌			
16506	天野小麦右衛門重矩	享保15(1730)	68	
16507	天野内左衛門重美	寛延2(1749)		
16508	天野小源太重頼	宝曆11(1761)		
16509	天野亀之丞	天明4(1784)		
16510	天野重孝	文化13(1816)		
16511	天野新太郎宜重	文久3(1863)		
16512	天野藤四郎重昭			
16601	刑部十右衛門氏継			
16602	久松弥市右衛門	寛文1(1661)		
16603	佐枝平兵衛種定	延宝2(1678)	049	
16604	佐枝源藏種次	貞享2(1685)		
16605	佐枝平右衛門種輝	元禄9(1696)		
16606	佐枝平右衛門種朝	寛延1(1748)		
16607	佐枝平兵衛房種	明和1(1764)		
16608	佐枝主馬之助寛種	天明4(1784)		
16609	佐枝伝助種甫	文化15(1818)		
16610	佐枝新十郎嘉種	万延1(1860)		
16611	佐枝新十郎種義			
16612	佐枝安次郎			
16701	鮎川権右衛門長冬		033	
16702	平岩主水 166と合併	寛文1(1661)	071	
16801	天野四郎右衛門頼藏			
16802	小笠原九郎兵衛宗雄			
16803	小菅六郎左衛門正有	元禄6(1693)		
16804	小菅庄藏正純			
16805	野崎宮内兼純		054	032
16806	小菅市郎左衛門正純	享保16(1731)		
16807	小菅庄藏正寿	宝曆8(1758)		
16808	小菅定之助	文化3(1806)		
16809	小菅庄藏	文政2(1819)		
16810	小菅釜之助正致			119
16811	田宮半兵衛翼	天保3(1832)	119	
16812	田宮弥太郎惟篤	安政6(1859)		
16813	幡野弥五兵衛	文久2(1862)		122
16814	田宮弥太郎惟篤			
16815	田宮兵治継武			
16901	天野四郎兵衛景貞	正保1(1644)		
16902	天野四郎兵衛景隆	寛文(1670頃)		
16903	石黒勘右衛門良通		017	
16904	石黒伝太夫矩通			
16905	成瀬半太夫正信			070
16906	水野権太夫繩興	元禄13(1700)	010	
16907	水野安之助忠知			
16908	荒川主馬頼久	正徳3(1713)		
16909	荒川外記頼頭	寛保1(1741)		
16910	荒川主馬頼恭	寛政4(1792)		
16911	荒川三郎次郎頼時	天保12(1841)		
16912	荒川代次郎頼利	元治1(1864)		
16913	荒川代次郎頼寧			
17001	小笠原彦右衛門勝忠	寛文7(1667)	103	
17002	小笠原九郎兵衛宗雄	寛文8(1668)		

番号	人名	いつまで	どこから	どこへ
17003	小笠原九郎太郎宗正			112
17004	西郷主水正雄			
17005	野崎金五左衛門昌兼	正徳5(1715)		
17006	野崎武兵衛兼道	寛延3(1748)		
17007	野崎宇兵衛兼豊			
17008	野崎利兵衛兼寛	文化5(1808)		
17009	野崎新九郎兼寛	文政9(1826)		
17010	野崎猪三郎			
17011	林三郎左衛門都富	文政4(1821)		
17012	林勘兵衛	天保8(1837)		
17013	林久右衛門			
17101	山村甚兵衛良勝	寛永6(1629)		
17102	山村三郎九郎良豊	延宝8(1680)		
17103	山村外記良忠	宝永2(1705)		
17104	山村外記良景	宝永7(1710)		
17105	山村三太夫良及	延享3(1746)		
17106	星野織部則昔			
17107	山村甚兵衛良啓	宝曆9(1759)	033	
17108	山村甚兵衛良由	天明8(1788)		
17109	山村甚兵衛良喬	文政10(1827)		
17110	山村三郎九郎良熙	弘化1(1844)		
17111	山村三郎九郎良祺	明治2(1869)		
17112	山村三郎九郎良醇			
17201	加藤四郎兵衛			
17202	加藤勘右衛門	寛文6(1666)		
17203	山村九兵衛良政 171と合併	元禄6(1693)		
17301	成瀬藤九郎	元和5(1619)		
17302	福澄弥右衛門元国			
17303	福澄小次郎元勝			
17304	成瀬大膳資景	貞享3(1686)		
17305	石川大和守章長	宝永3(1706)	092	
17306	石川鞠貞正章	享保17(1732)		
17307	石河隠岐忠喜	享保18(1733)		
17308	石河雅楽光当	安永2(1773)		
17309	石河太郎光壽	文化6(1869)		
17310	石河太郎光茂	嘉永6(1853)		
17311	石河太郎光晃			

第54表 居住者屋敷地別一覽表①

氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号
ア行		荒川頼利	16912	石河忠喜	17307	稲生万松	01909	大田少休	12303
相原七郎兵衛	16402	荒川頼則	05810	石川興則	00206:03807	稲生由九郎	01906	大竹金弥	06105
相原広親	16401	荒川吉任	05803	石川章長	17305:09205	稲生俊政	01903	大津直次	04802
青山忠次	02501	荒川義康	05811	石川正相	03806:00205	稲生新七郎	01905	大津直江	04803
赤林新十郎	02617	荒川弘秋	05801	石川章治	14213:02609	稲生政之	01904	大野直歎	04205
赤林武平	02618	荒川頼時	16911	石川正章	17306	稲生瑞光	01911	大野直則	04204
赤林孫七郎	02616	粟生持監衛	09604:9601	石河賢綱	05211	井野口宜崇	02013	大橋伊則	11502
赤林信敏	02619	安藤平六	15804	石河正基	00213	井野口宜鑑	02012	大橋長右衛門	11301
浅香宣依	10203:10007	安藤十郎左衛門	15803	石河光壽	14215	井野口宜学	02011	大橋政親	03908
(井野口)	08903:04305	安藤太郎兵衛	15801	石河公猷	05209	井野口宜丘	04307	大橋新弥	15406
朝倉道景	11210	安藤平六	15802	石川正光	09302:09204	井野口賀親	04306	大橋政芳	03909:15405
朝倉景包	11211	飯島光重	03602	石河章純	14214	井野口宜依	10007:08903	大橋伊舍	11501
浅野長治	09901	飯島重清	16409	石河光壽	17309	(浅香)	04305:10203	岡田八兵衛	06101
浅野治易	09902:11205	飯島隆重	16408	石河当頭	00211	庵原守承	13812	岡田六郎兵衛	06102
安達玄長	11303	飯島光貞	03603	石河章信	14216	庵原志	00808:13809	岡田八兵衛	06402
阿部正直	06610	生田経忠	08604	石河光当	17308	今泉定当	01509:13811	岡田喜右衛門	06401
阿部正徳	06611	生駒周晃	01613	石川光忠	09301	岩瀬権左衛門	02610	岡田喜三郎	12413
阿部正恭	06605	生駒利豊	01601	石河祥昌	00208	岩田栄太郎	14201	岡野八左衛門	15913
阿部正信	06609	生駒周行	01614	石河祥久	00209	岩田要元	05315	岡本玄皓	12302
阿部正周	06503:02204	生駒致長	00508:01606	石川宗幸	05206	岩田要元	01309	小笠原成職	16417
阿部正長	06608		01604	石河直澄	05207	岩田元壽	05313:15911	小笠原安左衛門	14904:16406
阿部正寛	06604	生駒周詢	01612	石川宗令	05204	岩田昌成	01308:08603	小笠原長昌	01105
阿部正嘉	06607	生駒勝周	00309:05408	石河好生	05210	岩田武之丞	05316	小笠原勝左衛門	14903:14802
阿部正茂	06606	生駒致稠	01607	石川宗直	05203:05205	岩田昌風	08603:01307	小笠原長成	01411:01409
阿部正興	06601	生駒利勝	01602	石原内膳	06504		10703	小笠原八右衛門	13012
阿部正致	06502:06602	生駒宗勝	01603	石原重富	13302	岩田兼辰	15910	小笠原宗雄	17002
阿部正治	06603	生駒周邑	10609:01611	石原重田	13303	岩田斯元	15909	小笠原勝忠	10301:17001
安倍良長	14301		01516	市辺正明	12405	岩田成元	00308	小笠原直恒	02806
安倍種季	14303	生駒周房	00310:01610	市辺豊勝	02205	岩田金之丞	15314	小笠原与三郎	13011
安倍盛種	14304		01608	市辺正好	08101	岩附惣左衛門	11401	小笠原主忠	13009:13711
安倍良信	14302	石川正重	11004:04001	市辺清政	08301	岩附惣左衛門	11402	小笠原長綱	01106
天野重顕	16508	石川利久	12508	市辺成政	08302	岩屋朝公	12410	小笠原半弥	05002
天野増之丞	02110	石川昭信	01805	市辺勝信	08102	岩屋朝稚	12411	小笠原直行	02810:02807
天野重美	16507	石川正重	04001	一色龍雲	12701:09701	上田半平	15303	小笠原正吉	01103
天野頼巖	16801	石川昭嘉	15105	一色孝治	12702	上田正勝	00804	小笠原政元	06901
天野景忠	03618:02111	石川昭臣	15106	一色頼母	12906	上田重純	14611:05311	小笠原成徳	16416
天野景澄	03621	石川氏昭	15103	伊藤弥右衛門	13710	上田忠左衛門	00805	小笠原勝忠	17001
天野三右衛門	14605	石川昭綱	04315:15107	伊藤兵部	02009	上田慎	02818	小笠原吉龍	01104
天野景隆	16902	石川昭安	01806	伊奈縫殿	07701	上田軌重	15607	小笠原吉武	06902
天野景美	02109:00908	石川成信	15101	伊奈吉次	00402	上田忠左衛門	00803:08501	小笠原長綱	14009:01106
天野重春	05601:06802	石川昭房	04316	伊奈重定	00404:14106	上田大兵衛	02820	小笠原延次郎	13014
天野忠正	10006:12404	石川昭成	15104	伊奈吉勝	00401	上田享	02817:05312	小笠原宗雄	16802
天野重治	06803	石川昭成	15102	伊奈定次	00403	上田仲敏	02819	小笠原宗正	11206:17003
天野重昭	16512	石黒重玄	03702	稲垣岡右衛門	11504	上野資寿	01114	小笠原次郎右衛門	05001
天野兼武	03619	石黒重寛	15409	稲富秀邦	13406	上野資房	05406	小笠原長良	01412
天野一雲	00918	石黒時全	13003	稲富祐清	13404	上野景温	01111	小笠原長辰	01408
天野重矩	16506:06804	石黒矩教	15411	稲富秀勝	13403	上野資時	05407	小笠原長盛	01413
天野亀之丞	16509	石黒重富	15413	稲富秀榮	13405	上野景福	01110	小笠原直忠	02811
天野景員	03620	石黒矩古	15410	稲富平左衛門	13407	上野延興	01109	小笠原長清	01416
天野宜重	16511	石黒重成	03701	稲富秀蜜	13408	上野師資	01108	小笠原長貞	01414
天野景貞	16901	石黒重弘	03501	稲富喜太郎	13410	上野資厚	01112	小笠原長春	01415
天野金治	02401	石黒重弘	15415	稲富四郎	13409	上野錦	01115	小笠原成庸	16418
天野重次	06801	石黒重方	15414	稲富秀明	00301	上野景澄	01113	小笠原忠意	13013
天野信幸	14705	石黒重継	15408:15805	稲富秀隆	00302	白井孫作常義	03008	小笠原之敵	16407
天野景林	12404	石黒矩通	16904	稲葉正照	00906	白井常春	03007	小笠原九郎兵衛	13010
天野貞直	06501	石黒市十郎	03601	稲葉正俊	14406	白井正次	03904	小笠原成憲	16419
天野重孝	16510	石黒時勝	13001	稲葉正辰	00202	大井半左衛門	11208	小川玄智	13705
鮎川長冬	03304:16701	石黒時長	13002	稲葉規通	03805:00905	大久保平太夫	13911	小川玄了	13706
荒川吉政	05802	石黒重正	03704	稲葉正武	03803	大崎昌繼	16202	小川庄右衛門	15601
荒川頼恭	16910	石黒勘右衛門	01701	稲葉屋通	02405	大崎銀次郎	01721	小川覚兵衛	15603
荒川頼久	16908	石黒矩持	15412	稲葉一学	16405	大崎昌福	01720	小川生政	15602
荒川頼資	05805	石黒良通	16903:01702	稲葉正直	03802	大崎昌次	16203	奥田智雄	16007:06409
荒川頼寧	16913	石黒重時	03703	稲葉正信	03804	大崎昌長	01718	奥田貞雄	16010
荒川頼豊	05808	石河当伝	00212	稲葉正定	00201	大崎政蔵	01719	奥田基雄	16012
荒川頼頭	16909	石河興移	05208	稲葉正上	00203	大崎昌貞	16204	奥田仲雄	13808:14307
荒川頼標	05806	石川正茂	00207	稲生政春	01907	大崎刻貞	16205:01717	奥田春雄	16009
荒川頼廉	05804	石河光晃	17311	稲生織部	01902	大崎昌好	16201	奥田義雄	16011
荒川頼忠	05807	石河当厚	00210	稲生吉次郎	01908	太田資昆	01803	奥田求馬	08001
荒川頼重	05809	石河光茂	17310	稲生正道	01910	太田正勝	01802	奥田忠雄	13304:13807

第55表 居住者索引⑤

第V章 補論

氏名	番号
奥田昌雄	16008
奥平貞利	13902
奥平貞実	13901
奥山権兵衛	11002
奥山忠元	07401
刑部氏継	16601
尾崎規忠	03611
尾崎熊忠	03612
尾崎致隆	14511:14709
小沢兵部	06403
小塩定賢	12608
小塩田賢	12606:02611
小塩照賢	12607
小瀬正方	15610
小瀬忠智	15608:00306
小瀬珠真	15609
小瀬新太郎	15611
小瀬忠次	07204:00305
織田信伝	03318
織田信重	03321
織田信庸	03319
織田信建	03320
織田長恒	06710:03313
	06813
織田貞幹	06812:03109
	03606:06709
織田貞辰	01513:03317
小野沢吉記	07303
小野沢吉清	07302
小野沢吉行	12504:16504
小山政高	01512
小山清政	14606
小山政卿	14607:05305
小山政純	05306:14413
力行	
鏡島正英	00312
鏡島養正	00314
鏡島正普	00315
鏡島正鶴	00316
鏡島当辰	00313
加賀島正信	00311:03912
片桐寛寛	14407:14706
勝野享叔	12512
勝野良柯	13106
加藤四郎兵衛	17201
加藤伊織景信	10702
加藤正長	01704
加藤李	15301
加藤忠八	15302
加藤正景	01410
加藤勘右衛門	17202
兼松正明	01204
兼松正成	01202
兼松彦四郎	12601
兼松正載	04203
兼松武矩	01206:06207
兼松彦四郎	12603
兼松正榮	01203
兼松吉豊	02607
兼松正吉	01201
兼松寅正	03615:06209
兼松正以	12602
兼松正武	01205
兼松正郷	06208
兼松正安	09801
川澄保久	01715:13308
川澄保久	04508:01315
川澄正吉	14808:15604
川澄房成	15605

氏名	番号
川澄充常	01716
川澄政長	01314:15606
河手十郎兵衛	08901
川地友之助	11003
河野孫兵衛	03902
河野庄助	03801
河野孫兵衛	03901
河村兼秀	11107
河村多門	05412
河村永秀	07011:14612
	03315
河村永奥	05414
河村方秀	06408:04507
河村秀雄	05111:05411
河村小三郎	05413
河村長秀	02105
河村安秀	05110
河村品秀	00912:03316
完倉左近	06103
橘田与左衛門	14712
木村一学	06104
京極高直	08905
楠正職	11506
楠正刻	11505
久野七之丞	16415
久野定直	16410:07006
久野千之進	16414
久野宗直	16411
久野辰正	16412
久野七左衛門	16413
久野長雄	07005:07104
久野宗信	07103
熊谷周実	05113
熊谷正実	03403:02403
熊谷実房	05112:05410
熊谷宗実	05107:14007
熊谷方寅	05115
熊谷武実	14008:05409
01107	
熊谷懐実	05114
熊谷就実	02404:00504
(寺尾)	
玄益	10501
玄礼	12502
玄隆	10502
玄取	10503
高力信繩	00904
高力信安	00903
高力信重	00902
小菅正純	16806:16804
小菅正致	16810:11902
小菅正義	11903
小菅正寿	16807
小菅愛之助	11904
小菅金太郎	11905
小菅庄藏	16809
小坂定之助	16808
小畑正有	16803
小畑宗雲	13707
小畑正房	02206
小畑正義	02201
小畑武慶	01706
小畑武敬	01705
小畑久広	02202:02205
駒井庄左衛門	10304
近藤種房	14410
後藤方教	01508
後藤方元	01506
後藤方脩	01507

氏名	番号
五味延貞	14510
五味真秀	14309:00307
	13305
五味貞尹	13505
五味義真	14311
五味真堯	14310:13107
五味信福	13506
五味直真	14313
五味直茂	14312
五味守真	14314
サ行	
西郷正雄	17004
佐枝種定	04902:16603
	03103
佐枝種次	16604
佐枝嘉種	16610
佐枝輝種	16605
佐枝寛種	16608
佐枝種甫	16609
佐枝種朝	16606
佐枝房種	16607
佐枝種義	16611
佐枝安次郎	16612
佐枝種長	04901
酒井忠許	06202
酒井源十郎	05502
坂井久左衛門	12802
酒井忠安	06201
酒井忠近	05501
酒井平九郎	03303
坂井半九郎	12801
榑原寧如	01212
榑原宗種	13105
榑原寧綱	01317:01210
榑原宗令	03913
榑原宗令	06406
榑原宗親	08402
榑原正邦	01213
榑原宗俊	10005:06404
榑原宗昌	06407:01316
榑原尚昌	01211
榑原宗氏	06405
佐久間河内守	09201
佐久間半兵衛	09202
桜井定民	16110
桜井庶定	16109
桜井善親	16105
桜井照定	16108
桜井定頼	16106
桜井民典	16111
桜井尚定	16107:03011
桜木宮内	12507
佐治四郎兵衛	09603
佐藤忠恒	14720
佐藤忠盈	03013:05108
	14713
佐藤嘉忠	14718
佐藤供忠	03014:14716
佐藤半太夫	14404:14506
佐藤正勝	08205
佐藤忠恭	14719
佐藤兼忠	14717
沢井元智	00603:03005
沢井元倚	00605
沢井元亮	00915
沢井元照	00606
沢井元矩	00913:00607
沢井元算	00914

氏名	番号
沢井元敏	00916
沢井元旭	00604
沢井元慶	00601
沢井馬次郎	00917
沢井元重	00602
沢井元教	14710
四手井承安	12301
芝山宜晴	02613
島沢佐住	03609:11108
島沢住長	06811:06508
島沢徳高	03610
島沢正勝	14801
清水忠政	03101
清水兵助	03102
志水忠厚	10811
志水忠政	10801
志水忠栄	10804
志水忠良	10004
志水忠梁	10805
志水忠受	10809
志水忠継	10802:04002
志水忠愛	10812
志水忠吉	10806
志水忠知	00103
志水安忠	02306
志水忠賢	10813
志水懐信	02305:02704
	10104
志水忠喬	10808
志水忠長	00104:00204
志水忠秀	10803
志水忠平	10814
志水忠勤	10810
志水忠珍	10807
下方貞実	11102
下方貞景	04102
下方弥左衛門	11101
下方貞名	04106:04103
	08503
下方貞豊	04107
下条新之丞	13511
下条半五郎	13510
下条正從	11702
下条正明	08803
下条正義	11703
下条正香	00516:11701
下条正貝	06907:00514
下条正昭	13507
下条広貞	13508
下条正純	13509
下条正賀	00515
下条正春	00405:08805
下条孝正	00406
下条正則	08804
須賀井正	11803
須賀井正次	11801
須賀井時恒	11802
杉山次郎太夫	07201
杉山政武	07202:14603
鈴木景昆	01405
鈴木所重	15309
鈴木季重	14207:09805
鈴木重徳	15313
鈴木重吉	04801
鈴木義信	11218
鈴木外記	05003
鈴木式部	04602
鈴木重識	03810
鈴木重方	15305

氏名	番号
鈴木清右衛門	03402
鈴木重真	15308
鈴木重教	15306
鈴木重角	15310
鈴木重到	07016
鈴木重好	06805
鈴木重成	15304
鈴木明雅	00812:13810
	00807:00809
	07017
鈴木勇三郎	07403:04003
鈴木重長	00806
鈴木正苗	01407:06712
(成瀬)	
鈴木景忠	01406
鈴木理重	03809
鈴木五郎左衛門	03401
鈴木唯重	11216
鈴木要人	11217
鈴木繁之進	00811
鈴木八郎右衛門	08802
鈴木宇右衛門	11219
鈴木重辰	15307
鈴木覚太夫	10008:08204
鈴木将監	02101
鈴木重住	15315
鈴木景之	01404:02402
鈴木重之	07003:07402
	02703
鈴木重章	00810
鈴木重期	00813:07014
鈴木權太夫	04601
鈴木三左衛門	02102
鈴木重繼	15312
鈴木重香	05402:14206
鈴木重達	15311
鈴木重達	07015
鈴木重安	15314
鈴木清左衛門	04701
千賀信賢	03012:14714
	04311
左右田俊重	14203
左右田重次	14202
左右田綱俊	14204
左右田重武	14205
園田善太夫	02602
園田美太夫	02601
高木秀胤	14013
高木雅信	15808:11212
(寺西)	
高木吉深	01310
高木秀親	02207
高木甚五左衛門	13111
高木秀矩	04503:11103
	01312:15009
高木甚五左衛門	13109
高木吉和	14004:11203
	07603
高木吉近	04502
高木考保	14006
高木安次郎	13108
高木秀繩	14012
高木秀繼	14015
高木秀真	14014
高木愛之丞	12518
高木秀林	14016
高木平七	12517
高木吉任	07602:04501

第56表 居住者索引②

氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号
高木金弥	13110	田代広綱	14502	中条康満	06807:05607	都築本武	14212	富永兼種	10402
高木秀堅	01311	田島正為	02210	中条康満	02604:07009	都築陳信	14211	富永兼俊	13104:15506
高木徳三郎	12516	田辺常之	13903	中条康庸	11611	都築正英	02203:03306	富永直次	15502:07901
高木修理	15813	田辺常治	02814:04312	中条康済	11613	(成瀬)		富永兼氏	13912
高木清忠	05505	田辺常方	04315	中条康多	11608	都築忠兵衛	01102:06203	富永兼文	13915
高木次郎左衛門	15811	田辺常為	04314	中条康哉	11612	恒川至政	03911	富永兼美	13914
高木一貫	12515	田辺常政	15208:15008	中条康永	11609	寺尾実専	02710	富永兼佐	15505
高木清昌	15809		02813	中条康理	11610	寺尾正勝	15206:06705	富永兼邸	13916
高木善右衛門	09602	田辺常澄	13904:03604	中条康篤	14011:11607	寺尾正龍	02304:11202	富永兼宜	15504
高木図書	05102	田辺三太郎	15213	津金胤景	12907:08502		06704:10105	富永良兼	14305
高木清長	14005	谷田喜伝治	11512		08304	寺尾正辰	04505	富永忠直	13917
高木三郎兵衛	15810	谷田広康	12506:11509	津金妙雲	13702	寺尾実備	02711	富永兼保	15512
高木鏡太郎	15812	谷田益村	11511	津金善七	13703	寺尾孫十郎	02714	富永兼多	13913
高木一吉	07601	谷田安信	12505	津金胤広	12908:08305	寺尾実延	02708:00506	富永忠純	15511
高木秀久	01313	谷田村芳	11510		08505	寺尾直政	07902:04603	富永兼敏	15509
高橋麻雅	02310:01514	玉置直香	06311	津金胤英	12910	寺尾好実	00505	富永内匠	14616
	00911	玉置直虎	06315	津金三郎左衛門	00802	寺尾就実	00504:02404	富永直兼	15503
高橋武維	12103	玉置直教	06308:15709	津金胤郷	12909	(熊谷)		富永正忠	15508
高橋宮次郎	12105	玉置直承	06306:06304	津金胤忠	12911	寺尾実隆	02709	富永兼豊	14411
高橋長豫	01518:12101	玉置小平太	06301	津金胤臣	12912	寺尾政親	02603	富永兼伯	14615:02010
高橋武為	12104	玉置小平太	06302	津金七右衛門	13704	寺尾正純	04504:15207		01511
高橋武韶	12102	玉置直之	06309	津金胤久	00801	寺尾実修	02712	富永兼吉	10403
高橋武雅	01517:01515	玉置直照	06316	津田信任	12709	寺尾正俊	11201	豊田小作	08601
	15912	玉置直次	06303	津田秉文	12705	寺尾実方	02713	豊田七右衛門	08701
滝川小重郎	00609	玉置直方	06314	津田直信	08902:12703	寺尾直龍	04604	鳥居勝明	14609
滝川善成	03311	玉置直連	06310:09004		06003	寺尾正重	13709	鳥居藤左衛門	14604
滝川忠據	00612	(津田)	15708	津田信榮	12708	寺西昌剛	12417	才行	
滝川忠榮	06711:03312	玉置直和	06313	津田信明	03607:02904	寺西半左衛門	15701	内藤忠泰	11207
	00608:06815	玉置直頼	06305	津田雪信	12408	寺西昌凭	04115	内藤忠卓	06506
滝川忠孝	00614	玉置直貞	06307	津田祝三郎	06908:00513	寺西四郎兵衛	15702	内藤覚弥	09702:02003
滝川忠聡	00517:00611	玉置直辰	06312	津田盛昌	03608:00909	寺西雅宣	02307:06708	内藤正辰	15210
滝川忠貫	00518	田宮惟篤	16812:16814	津田信寧	02316		13095	内藤正聰	15209:04110
滝川之成	10904	田宮維武	16815	津田信尹	12707	寺西十大夫	15703	内藤正著	15212
滝川忠厚	00610	田宮翼	16811:11901	津田寛吉	06910	寺西九平	12416	内藤正伸	15211
滝川忠周	02706	大道時直通	01519	津田信周	00410:00511	寺西昌勝	08202:09403	内藤寛弥	02003
滝川征成	10905	大道寺直重	00501	津田寛当	04907:00409	寺西昌殊	04116:12415	中川直亮	15718
滝川時成	10903:10003	大道寺直時	00502		00509	寺西昌吉	09401	中川政玄	15403
	10102	大道寺直方	00109	津田信勝	02318	寺西昌員	12418	中川典高	02614
滝川法忠	10902:10101	大道寺直長	00108	津田信郷	00512	寺西秀昌	09402	中川政清	15404
滝川忠雄	00613	大道寺直良	00111	津田正方	02312	寺西道意	15704	中川重政	15402
滝川忠尚	02705:10103	大道寺直秀	00106	津田正方	04202	寺西雅言	11212:15808	中川典厚	02615
滝川時令	03310:10906	大道寺直澄	00107	津田義之助	02315	(高木)		中川政盛	15401
(横井)	01505	大道寺直廉	01520	津田仲郡	12409	寺西昌豊	04114:02309	中島貞良	14707
竹中重順	06214	大道寺直壯	00112	津田信高	02313	寺西雅矩	02308:13806	中島甚兵衛	10201
竹中重長	07801	大道寺直治	00105:00503	津田信教	06912		08203:14409	中島定良	10202:14707
竹中重和	06212	大道寺直方	01521	津田盛高	02314	遠山景正	06903	中西勝澄	09807
竹中重貴	06213	大道寺直道	01522	津田信好	12710	遠山景明	06904	中西勝統	03707
竹中重昌	07802	大道寺直寅	00110	津田信敏	12711	遠山景瑞	02209	中西長敦	03712
竹中重政	07803	伊達半平	01703:05004	津田信榮	00910:02311	遠山景道	06717	中西長毅	03710
竹中彦左衛門	06211		03105	津田正盛	04201	遠山景吉	10602:10701	中西匡見	03708
竹中重之	06215	千村頼寿	16308	津田寛鏡	06911	遠山景吉	10602:10701	中西長之	03709
武野影信	14814	千村政武	16307	津田定之助	02317	遠山景英	06718	中西長裕	03711
武野知信	12903:09802	千村政成	16306	津田直連	09004:15708	遠山景豊	10601	中根清右衛門	09808
武野仲定	13501	千村重治	02605:08906	(玉置)	06310	遠山伝十郎	14405:14704	中根重遠	12002
武野信安	13502	(水野)	05506	津田高寛	02707:04906		14804	中根清五郎	12001
武野仲房	13503	千村仲成	16305	津田知信	09501	遠山景恭	06715	中根秀行	02106:05308
竹腰正晴	07105	千村良重	16301	津田英信	12704	遠山辰之助	10603		01714
竹腰勝紀	07109	千村重好	16304	津田信誕	12706	遠山景雄	06716	中根宗房	13306
竹腰正辰	03308:10106	千村重長	16302	津田又六郎	06909	遠山遠景	08602	中野満貞	14403:15705
竹腰殿孫	07110	千村仲冬	16310	土屋太郎右衛門	09002	遠山景供	04506:06905	中村元教	03915:15615
竹腰信良	07903	千村平兵衛	12509	土屋善之丞	09001	遠山景慶	06714:06906	中村元悦	07502
竹腰正映	07107	千村伯斉	05508:14715	土屋徳弘	02608:02008		00412	中村元矩	01209:03914
竹腰友正	07106	千村秀信	14810	土屋邦泰	02007	土岐頼要	14805	中村勝親	07503
竹腰正定	07111	千村重定	16303	土屋重泰	09005:02006	徳山半兵衛	02301	中村勝時	01207
竹腰正武	03309:07108	千村仲雄	16309	都築次右衛門	01804:06106	戸田右馬允	14401	中村元勝	07501
竹腰守正	07112	千村仲展	16311		15004	戸田加賀	15201	中村親礼	15616
竹腰正田	07113	千村重矩	05507	都築修理	01101	富永昌長	03705:15507	中村勝長	01208
田代尹綱	14503	中条康康	14010	都築弥兵衛	14808:14210	富永兼孝	01510:14306	中山貞福	02107:01713
田代綱重	14501	中条康英	05608		14509	富永忠榮	15510	永井伴大夫	01708

第57表 居住者索引③

第V章 補論

氏名	番号
長坂忠貞	14408
長野重祐	01712
長野祐式	13908
長野政武	13803
長野重時	15007:06005
長野祐寿	14219
長野祐喜	14218
長野祐清	14217
長野祐重	13804:06706
長野祐軌	13907
長野祐佑	14220
長野祐永	01711:02208
長野政若	13910
長野重政	03104:06004
長野祐正	13909
長野祐久	06707:13906
長野猪右衛門	10302
長野政成	13802:10401
(矢野)	
長屋忠秀	03706
並河芳庵	11005
並河治兵衛	11007
並河意卜	11006
並河自晦	11507
成田次充	01709:13504
成田氏章	01710
成瀬正信	07007:16905
成瀬勝吉	01301
成瀬正心	07915
成瀬正心	07913
成瀬正継	03305:06204
成瀬正寿	07508
成瀬正喜	07909:00408
	00510
成瀬正邦	05612
成瀬一信	06205:06809
成瀬正任	07509
成瀬正惟	05609:07008
	00407
成瀬正峰	04112
成瀬喬長	00414
成瀬正肥	07510
成瀬正的	05613
成瀬正則	07904:14902
成瀬正英	04113
成瀬正苗	00510:06712
(鈴木)	01407
成瀬新太郎	01401
成瀬長則	07905
成瀬正植	07914
成瀬藤九郎	17301
成瀬正植	07912
成瀬長勝	07906
成瀬正輝	07505
成瀬長貞	07907
成瀬資景	17304
成瀬正元	07911
成瀬正英	03306:06203
(都築)	02203
成瀬正直	05614
成瀬正為	00413:07908
成瀬正時	03307:15005
成瀬正敦	00416
成瀬正健	07910
成瀬喬治	00415
成瀬雅貞	04509:06810
成瀬正晨	04510
成瀬正平	00417
成瀬正恕	05611

氏名	番号
成瀬正太	07506
成瀬正明	03105:05610
成瀬正虎	10901
成瀬正典	07507
成瀬正親	07504
成瀬一祿	04111
南部宗清	12501:15202
南部宗志	15204
南部宗武	15203
西尾富首	14811:14512
西尾正房	14507
蛭川武親	14807
丹羽佐市郎	04317
野崎兼久	05911
野崎兼綱	03210
野崎兼道	17006
野崎兼純	16805:03207
	05404
野崎昌兼	17005
野崎兼重	17008
野崎兼豊	17007
野崎洪隆	05403
野崎兼央	05908
野崎兼当	05914
野崎兼敏	03209
野崎兼明	03906:05906
野崎兼清	03213
野崎兼林	05907
野崎兼雄	05910
野崎兼笛	14711
野崎猪三郎	17010
野崎兼良	03212
野崎兼良	05915
野崎兼典	06507
野崎兼重	03208
野崎兼綏	03211
野崎兼洪	02004:05905
	03907
野崎兼寛	05912
野崎兼寛	17009
野崎兼紀	05913
野崎兼歳	05909
野村昌武	04117
野村昌並	04118
野村告之丞	04119
野村佐太夫	04120
野村昌直	04101
野呂潮直陳	14114
野呂潮直温	14112
野呂潮直亮	14109
野呂潮九郎右衛門	11109
野呂潮直林	14111
野呂潮直質	14113
野呂潮直衛	14110
野呂潮直盛	14108
八行	
埴原貞健	03919
埴原貞健	15612
埴原貞昭	15613
埴原貞以	03613
埴原貞寿	03614:06210
埴原貞利	15614:03916
埴原貞善	03918
埴原貞安	03917
埴原貞二郎	03920
長谷川左門	14901
幡野弥五兵衛	16813:12201
幡野忠徳	15907
幡野忠岐	15908

氏名	番号
服部正茂	02805:14308
服部正憲	02804
服部小十郎	03812
服部小重郎	03813
服部正勝	16003
服部正治	16006:03811
	03808
服部正忠	02803
服部正吉	16002
服部亀吉	03814
服部正真	16004
服部正長	16001
服部正長	16005
浜島伊織	05405
林勘兵衛	17012
林勘右衛門	10303
林都富	17011
林英興	13309
林正勝	14508:14806
林久右衛門	17013
林正十郎	15214
原源五右衛門	09904
原田作左衛門	14002:16104
原田盛次	13801
原田市左衛門	14001
馬場三右衛門	04410
馬場信久	04411
馬場三右衛門	04408
馬場源之丞	04409
坂意策	12304
彦坂政勝	15501
久松弥市右衛門	16602
肥田忠興	08005:01005
肥田忠猷	01010
肥田忠重	08801:08003
肥田忠寅	01006
肥田忠良	01008
肥田忠篤	01009
肥田忠順	01007
肥田久忠	13310
肥田孫三郎	01011
肥田忠勝	08004
人見弥之丞	01319
人見弥右衛門	01318:12412
人見景福	01322
人見弥八郎	01321
平岩奎	06001
平岩元則	15903
平岩吉縁	16502
平岩吉忠	16503
平岩元吉	15901
平岩主水	07102:05101
	16702
平岩重勝	05201
平岩園書	02702
平岩新五左衛門	02802
平岩初負	05902
平岩安武	05202
平岩元正	14701
平岩元雅	14412:14812
平岩左馬助	02801
平岩伯耆	03301
平岩初負	05901
平岩吉範	16501
平岩宮内	07101
平岩権左衛門	02701
平岩元綱	15904
平岩又右衛門	14702

氏名	番号
平岩元成	15902
平野采女	05702
深沢利忠	08306:09905
福澄元国	17302
福澄元勝	17303
福富貞次	03905
藤沢正長	11602
藤沢正重	11601
藤田忠房	01403
藤田忠量	06702
藤田忠常	06703
藤田忠次	01402:06701
古屋景成	07004
古屋景泰	09203
星野則臣	14614
星野則章	14610
星野則昔	06814:17105
星野則益	14613
星野則勝	02001
星野則等	02002
星野恒則	14209
星野貞則	14208
細野成住	09405
細野成定	09404:09703
細野定次	10305:09003
堀田之長	11214
堀田小重郎	03816
堀田方教	04403
堀田長門	03903
堀田治右衛門	03815
堀田之成	15806:15407
堀田武明	04402
堀田之重	04401
堀田之喜	15807:11213
堀延貞	13207
堀与十郎	13208
堀貞俊	13206
堀貞岡	13209
堀貞紀	13205:14813
堀道隣	03404
堀貞儀	14105
堀正意	03502
堀親仁	13210
堀貞高	03503:14104
本多	12414
本多親信	01801
本多吉信	01901
本多主殿	03201
本多勝正	14505
マ行	
前田七郎兵衛	15002
前田平兵衛	15001
牧宮内	01303
牧主馬	01302
間島正重	05105
間島重正	05104
間島正耀	05106
馬杉直良	04206
馬杉直昌	04207
馬杉惣左衛門	04210
馬杉直義	04208
馬杉直談	04209
増田一	02115
町野助左衛門	04109
松井要人	02909
松井弉吉	02906
松井充房	14107:08606
	12407:05309
	03006

氏名	番号
松井雄之助	02911
松井景喬	15915
松井宜喬	03016
松井要之助	02910
松井石見	08002
松井実秀	15916
松井左次馬	02908
松井宗卿	08605
松井竹右衛門	01305
松井明喬	05310
松井三左衛門	14602
松井勘兵衛	14601
松井主殿	09502:01304
松井玄吉	02905:14809
	05504
松井市右衛門	05503
松井惟喬	15914
松井一喬	02907
松井康久	08105:08107
	08103
松平庄之助	05401
松平乾造	04516
松平又兵衛	04514
松平尚我	05302
松平貞則	07002
松平秀勝	07001
松平俊之允	04515
松平永親	05304
松平康永	08104
松平正賀	08106
松平久広	05904:05303
松平正広	05301
松村新兵衛	12403
間宮之等	05602:08201
間宮之政	02407
間宮之峯	02408
間宮正統	06416
間宮式太郎	11111
間宮藤五郎	11112
間宮正像	05603
間宮之惟	02409:06414
間宮小膳	11110
間宮正等	15003:02406
間宮正萬	06417
間宮正業	06415
三木左京	07301
三沢宜昌	09806:04104
	16505:11204
水谷忠知	14608:14708
水野時興	12510
水野忠知	16907
水野康功	04013
水野平大夫	01707
水野康寛	04008
水野佐右衛門	16101
水野繩興	16906:01004
水野康民	04012
水野伴左衛門	14414
水野甚太夫	16102
水野康友	04010
水野雅信	01004
水野貞信	15707
水野吉守	01001
水野忠栄	11308
水野忠愛	11310
水野藤馬	11311
水野甚左衛門	01002
水野吉繩	01003
水野時尹	12511

第58表 居住者索引④

氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名	番号
水野康年	04014	山澄英卿	13005	横井時忠	00818	吉原竹太郎	03817
水野助之進	04011	山澄経英	13004	横井時貞	02503	吉原易三郎	03821
水野八弥	12406	山澄豊功	04913	横井時豪	01503	吉原重兵衛	04406
水野政勝	09903:08904	山澄意清	04212	横井時育	02413	吉原仲頼	14103
	06505	山澄豊尚	04911	横井助次郎	01811	吉原伸治	04404
水野三四郎	13701	山澄義清	04211:13007	横井時行	02411	吉原仲昌	04405
水野康村	04009		13712	横井小兵太	01502	吉原宇門	03818
水野重治	05506:02605	山田宗信	11508	横井時安	07702	吉原竹太郎	04407:03817
(千村)	08906	山田玄哲	11105	横井時照	15906	吉原数馬	14102
水野忠真	11309	山田重英	11106	横井時邦	03019	吉原権六郎	03819
水野守政	14402:15706	山田玄祐	11104	横井時邦	14420	吉原権六郎	03820
箕形忠政	14513	山内時真	11215	横井時久	01501	吉原五左衛門	14101
三宅重良	02903	山内明真	04005	横井亮三郎	114423	吉見幸純	11014
三宅逸平治	02902	山内知真	04004	横井真霞	02510	吉見幸混	11011
三宅逸平治	02901	山内知重	03110:04006	横井時是	14421	吉見幸孝	11012
武藤掃部	04301	山村良景	17104	横井時申	00411:00814	吉見幸茂	11013
武藤兵太夫	04303	山村良及	17106		07013	吉見幸和	11010
武藤佐吉	04302	山村良熙	17110	横井登美四郎	02506	吉見石見守	11015
村上六郎右衛門	01306	山村良忠	17103	横井時春	15905:04108	米倉位市太夫	12401
村田喜藤次	10002	山村良齋	17109	横井時棟	14422	ワ行	
村田権右衛門	10001	山村良祺	17111	横井時良	03004:10306	若林尚連	11008
室賀平九郎	12514	山村良政	17203	横井時憲	14418	若林尚吉	11009
毛利広貫	15717	山村良勝	17101	横井定之丞	02509	渡辺有綱	16404
毛利広吉	15714	山村良由	17108	横井時家	13301	渡辺綱綱	13805:04007
毛利頼容	15710	山村良醇	17112	横井富雄	12612		03107:15205
毛利広居	15715	山村良豊	17102	横井時英	00304:11604	渡辺重綱	00702:03203
毛利頼忠	15713	山村良啓	17107:03314	横井時喜	12611	渡辺綱倫	00712
毛利広賢	15716	山本成之	03010	横井時盛	05605	渡辺豊綱	06818
毛利広直	15711	山本政之	13601	横井時令	01505:03310	渡辺潤綱	00713
毛利義由	15712	山本秀熊	09804:03003	(滝川)	10906	渡辺昌軒	13708
守屋氏盛	09605:09803		14504	横井貞洪	13204	渡辺綱保	00707
守屋伊右衛門	12904	山本勝太郎	13610	横井時尚	13203	渡辺愷綱	06819
守屋善助	12905	山本成昌	03009	横井時尚	02504	渡辺治綱	03202:00703
ヤ行		山本宗兵衛	03002	横井十右衛門	13101		03302
柳生利方	09104	山本吉五郎	13609	横井万之助	03021	渡辺景綱	15006:14703
柳生教幸	09103	山本道八郎	13608	横井賢時	13202	渡辺成綱	12604
矢崎佐左衛門	08702	山本政之進	13605	横井時真	07010:05606	渡辺秀綱	06002:16403
矢崎作左衛門	12402	山本政之進	13606	横井孫太郎	02812	渡辺剛綱	00710
矢崎利金	04105:08504	山本道伝	13607	横井三太夫	13201	渡辺佐一郎	11304
矢島左京	05103	山本政晩	13604	横井時孝	13401	渡辺基綱	03205
八橋信昌	00901	山本久兵衛	13611	横井房吉	01812	渡辺佐一郎	11305
柳下仁右衛門	13103	山本政儀	13602	横井永宣	00817	渡辺年綱	06817
柳下仁右衛門	13102	山本政房	13603	横井時信	02502:12902	渡辺綱光	00709
矢野政成	10401:13802	山本彦助	12503		04304	渡辺直綱	00706
(長野)		山本内藏助	03001	横井定四郎	02508	渡辺斎	11306
山崎要人	04513	横井時表	02410:06413	横井時諄	06206:05307	渡辺綱通	00708
山崎元昭	04511:02809	横井時定	02412		06808:04308	渡辺守綱	00701
	03910	横井有時	01809		05109	渡辺長綱	03204
山崎元英	04512	横井有時	00815	横井時辰	04309	渡辺定綱	03206:00705
山崎元武	02808	横井時有	12901	横井時衡	11605	渡辺宣綱	00704
山下氏紹	10604:07304	横井時若	01808	横井久時	12610	渡辺佐一郎	11307
山下氏政	00102	横井輝時	01810	横井時枝	02815	渡辺久綱	12604
山下氏勝	00101	横井時望	01807	横井時恭	03018	渡辺寿綱	06820
山下秀氏	11503	横井時成	14419	横井時良	02507	渡辺寧綱	00711
山下氏忠	16103:14003	横井時式	06412	横田三郎兵衛	02302	渡辺奉綱	03106
山下氏輝	11603	横井時宜	00816	横田権之助	02303	渡辺当綱	06816:07012
山城九兵衛	09102	横井時芳	06411	吉田求馬	02113		14415
山城宮内少輔	09101	横井時久	02108:02612	吉田孫三郎	02214		
山澄英龍	04903:07203		12605	吉田元格	12513		
山澄龍豊	04909	横井時元	13402:00303	吉田主水	03616		
山澄龍明	04910	横井番時	14417	吉田平内	11001		
山澄英貞	04905:00507	横井時房	06410:13307	吉田加右衛門	02104		
	04908:01605	横井時房	12609:02816	吉田主水	02112:03617		
山澄喜兵衛	13006	横井時峰	07703:05604	吉田元藏	02114		
山澄龍麟	04912	横井時敏	02505	吉田甚兵衛	02215		
山澄豊利	04914	横井豊時	01504	吉田获平次	02212		
山澄安次郎	04213	横井宏時	03017:04310	吉田政幸	02211		
山澄英重	04904	横井時般	11606:14416	吉田三九郎	02213		
山澄清之助	04214	横井金次郎	03020	吉田六郎衛門	03108		

第59表 居住者索引⑤

## 第3節 調査地点の空間的・時間的位置付け

### 1 はじめに

今回の調査では、古墳・戦国・江戸時代の遺構、遺物が検出できた。このうち古墳時代は、情報量が少ないことから、いくつかの視点で捉えることは無理であった。戦国・江戸時代については、遺構、遺物量ともに豊富で、特に江戸時代の遺物については出土数は膨大な量にのぼった。こうした検出遺構、出土遺物に対して、調査結果からどのような情報を引き出すかが、調査報告書を作成する作業において第一の課題となった。

ここでは戦国・江戸時代の検出遺構が、当該期にどのような目的を持ってつくられたのか、そして膨大な出土遺物はどのような組成を示すのかについて、いくつかの視点から考えてみたい。

### 2 遺構からみた空間的特質

#### (1) 戦国時代

戦国時代の遺構は、第II章において3期に区分した。第103図にみられるように時期別に各遺構を比較してみると、I・II期では南北方向の溝が、 $N-6\sim 9^{\circ}-E$ の方位を示すのに対して、III期では南北方向の溝が $N-1^{\circ}-E\sim N-2^{\circ}-W$ の方位を示す。言い換えれば、I・II期の南北溝は北を向いてわずかに東側に振るが、III期の南北溝はほぼ真北を向く。III期の東西溝SD601も、当該期の南北溝に対応する方位を示す。従って、瀬戸・美濃産陶器の編年上大窯III期に位置付けられる時期（16世紀後葉）に、なんらかの空間的改編が行われたことが、本調査地点の戦国時代各時期における遺構の変化から読みとれる。

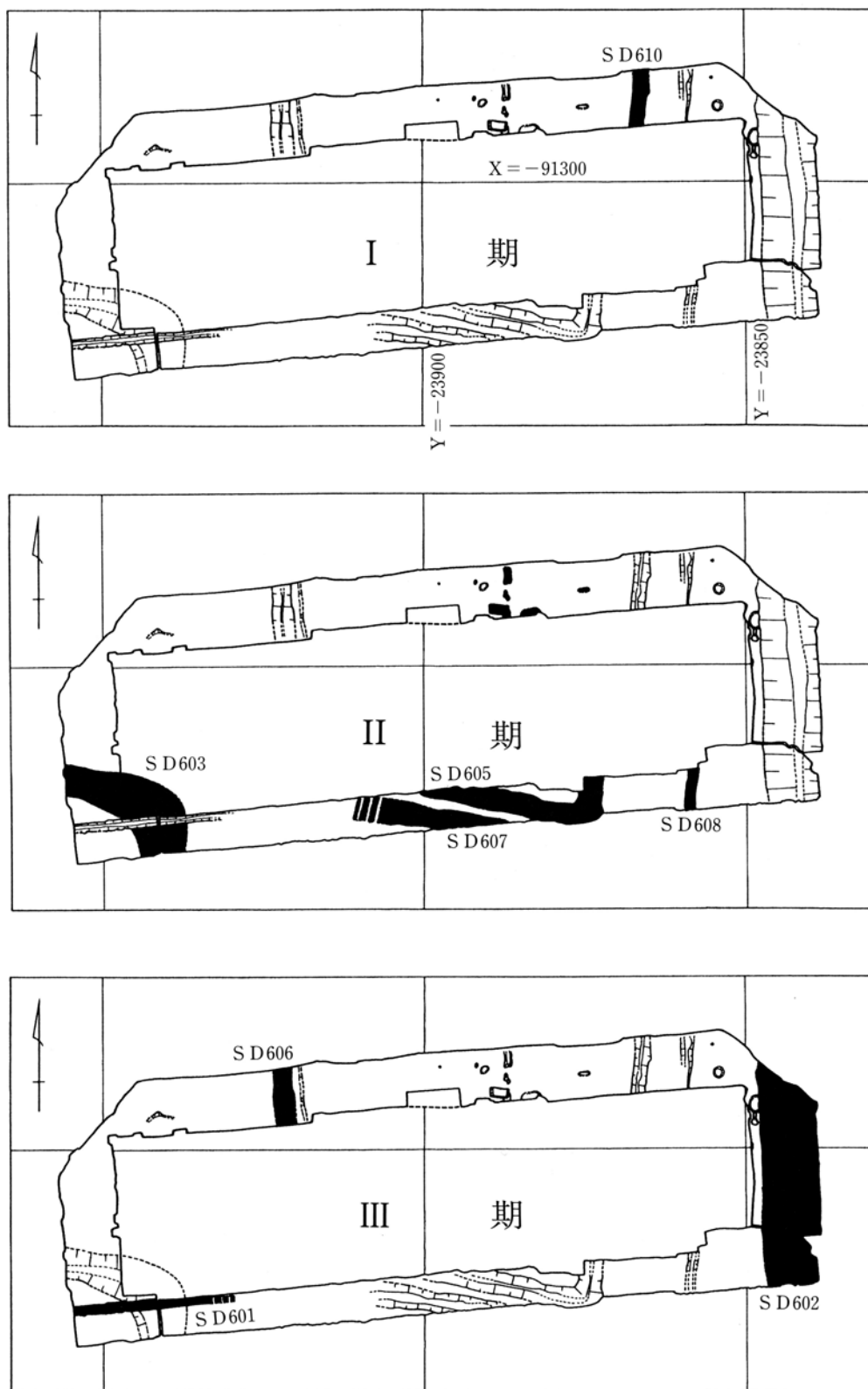
第105図は、周辺で現在までに戦国時代の遺構が検出された調査地点と、主要遺構である。本センターで調査した5地点では、どの地点においてもこの時期の遺構が検出されており、これに名古屋市教育委員会の第4・5次発掘調査地点が加わる。これまでの調査で戦国時代とされたこれらの遺構は、出土遺物が少なく、その時期的判断が明確にできなかったものが多い。しかしながらこれらの遺構を概観すると、今回の調査地点で確認できた溝の方位が、ほかの調査地点の戦国時代溝にも概ね当てはまることが見て取れる。すなわち、北を向いて東側に $6\sim 25^{\circ}$ 振る南北溝及びこれに対応する方位の東西溝の一群（準方位溝）と、南北、東西の方位にほぼの一群（正方位溝）である。

#### ・準方位溝群（道路側溝含む）

第105図の調査地点I・IV・V及び4・5地点などで確認できる、東西軸・南北軸からやや右回転に振る（ $6^{\circ}$ 以上）方向を示すものである。特に4・5地点では方形区画の中の屋敷溝も含めて、東西・南北の方位から $20\sim 25^{\circ}$ 振る。

#### ・正方位溝群

第105図の調査地点I～Vで確認できる、主軸が東西・南北軸から大きく振らない（ $6^{\circ}$ 未満）方向を示す溝で、調査地点4・5の戦国時代溝では、該当するものがみられない。



第103図 戦国時代遺構変遷図

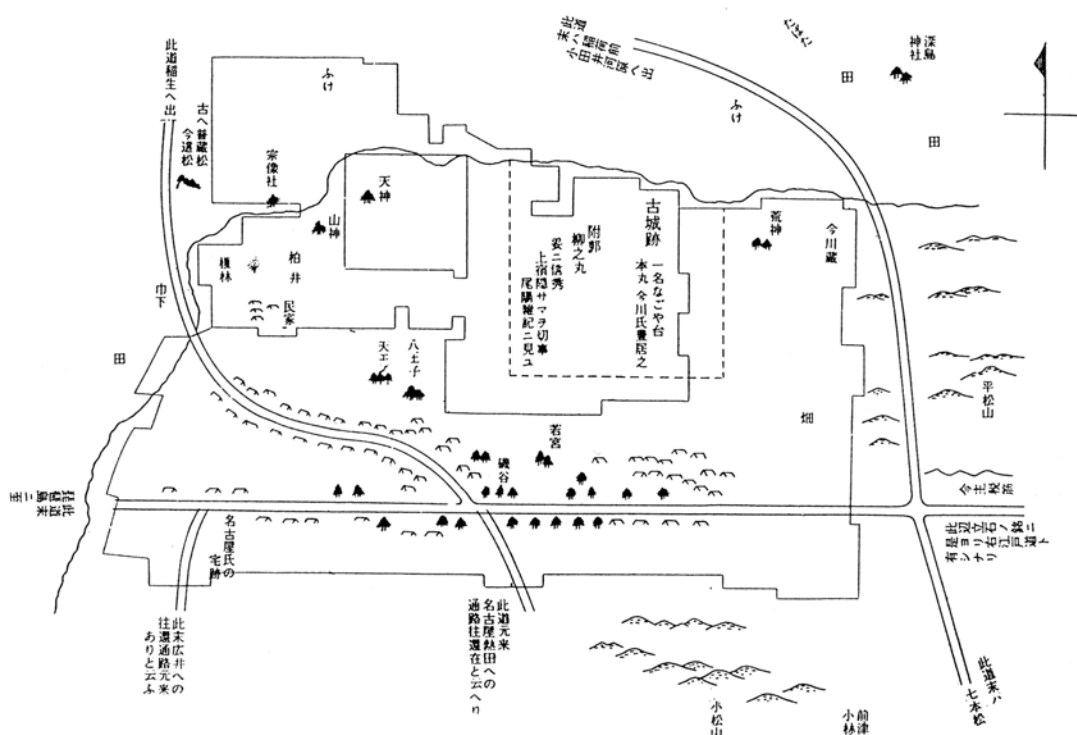
今回の調査区（調査地点V）では、戦国時代の溝をその方向性において2群に大別したが、それが時期差につながることは先述した。すなわち準方位溝は概ね15世紀後葉～16世紀中葉に、正方位溝は16世紀後葉に位置付けられる。そこで、この方位と時期の関係について、そのほかの調査地点にもこの法則性がみられるか比較してみる。

調査地点Iでは、当分類による準方位溝は15世紀末～16世紀前葉のもので、正方位溝は16世紀中葉～後葉に位置付けられており、調査地点Vの方位と時期の関係に照応する。

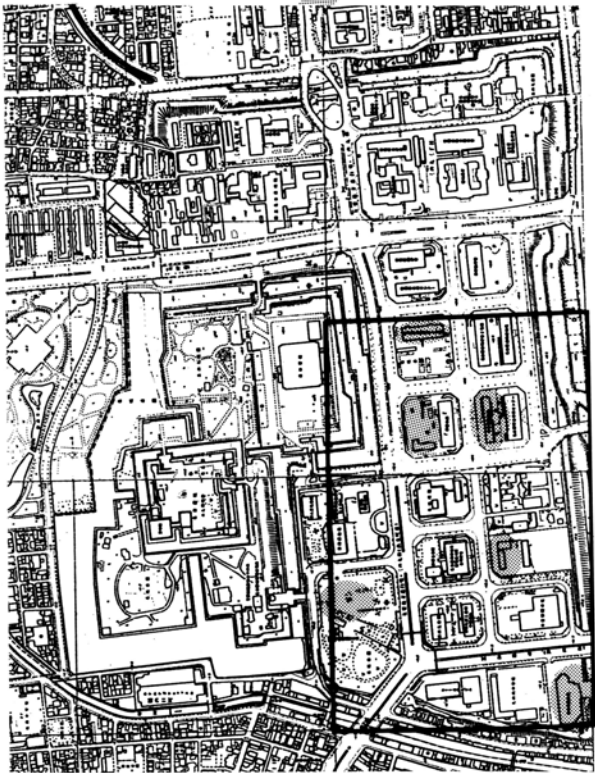
調査地点IIでは、準方位溝に該当するものはみられず、正方位溝は城郭の堀と考えられる東西方向の大溝があり、15世紀末から16世紀初頭に薬研堀で開削され、16世紀中葉に箱堀に改修されたとされており、方位と時期の関係は調査地点Vとは照応しない。

調査地点IIIでは、準方位溝は遺存度や検出位置などの点で図示していないが、中世II-1・2期（15世紀後半～16世紀前半）とされるものが、E-8~10°-Sである。正方位溝は城郭の堀的規模の大溝が逆L字形で検出され、E-5°-N・N-3°-Wという方向を示し、中世III期（16世紀後半以降）に位置付けられており、調査地点Vの方位と時期の関係に照応する。

調査地点IVでは、戦国時代をI期（古瀬戸後期様式～大窯期）、II期（大窯II期主体）に分類しており、当分類における正方位溝の時期は存在しない。このI・II期を比較すると、I期ではほとんどの溝が準方位を示し、II期になると柵列も含めたほとんどが正方位を示している。方位と時期との関係は、時期において調査地点Vより先行するが、戦国時代の古段階において準方位を示したものが、新段階では正方位に変わる点は同様である。



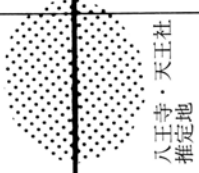
第104図 築城当時の名古屋古図（『名古屋城史』より）



那古野城主要部推定地



Y = -23900



Y = -24100



X = -91100

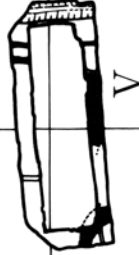


若宮八幡 推定地

道 (推定)

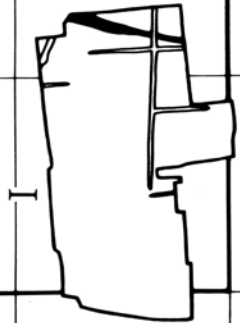
稲吉へ出る道

琵琶島に至る道 (江戸期三の丸中小路)



熱田へ至る道

Y = -91400



第105図 調査区周辺戦国時代遺構図 (黒塗り遺構は準方位溝)

調査地点4・5では、検出されている戦国時代の溝（道路側溝含む）はすべて準方位溝で、正方位溝はみられない。この地点の戦国時代溝の方位は、N-20~25°-Wを示しており、各調査地点の中では振る角度がもっとも大きい。これらの遺構の時期は、15世紀後半~16世紀後半に位置付けられており、掘削時期を16世紀中頃以前とすれば、方位と時期の関係は、調査地点Vと照応する。

各調査地点における戦国時代の溝について比較した結果、本調査地点の検出状況と時期・方向において照応関係が認められるのは調査地点I・III及び4・5で、時期的にずれるが古段階から新段階で本調査地点と同方向の変化が認められるのが調査地点IV、方向と時期が照応しないのが調査地点IIである。換言すれば、溝の示す方位は地点に関わらず2元的に捉えることができる。しかし、今回の調査地点周辺の戦国時代溝は、調査地点によっては時期的に対応しないものがあるため、マクロ的には方位=時期として捉えきれないことになる。

第104図は、徳川氏による名古屋城築城当時、城の縄張地域の旧態がどのようなものであったかを、江戸時代後半の時点で復元を試みたものである。この図（以下築前図）は『金城温古録』で試みられたものであるが、さらにこれとは別に、名古屋市鶴舞中央図書館の所蔵する「尾張國名古屋古図」（以下古図）には、徳川氏名古屋城築城以前に存在した寺社などの位置が、江戸時代の三の丸のどの屋敷近くであったか、部分的に書き添えてある。これらの史料を参考にして、徳川氏名古屋城築城以前の旧態を概観してみる。

第104図にみられるように、那古野城の存在したと思われる場所は、その主要部分が名古屋城における二の丸付近とされる。この古城跡の南側には「若宮」という記載があるが、この地点は古図の添え書きによれば「今山澄近所」とあり、山澄邸付近であったことがわかる。築前図において東西を直線で貫く道に対しては、古図には「今中小路」の添え書きがあり、名古屋城三の丸内の屋敷地を区画する中小路にあたることが示されている。さらに築前図において「八王子」・「天王」の記載が並んでいるが、この地点は、名古屋城三の丸の御霊屋にも天王社が残り、築前図に当てはめられた名古屋城の割り付け位置からも、名古屋城三の丸御霊屋東側付近と思われる。

第105図の推定案は、少ないながらこうした材料から各地点を検討した結果である。稲生（現在の岩倉）へ出る道は、各神社推定地と築前図の位置関係から割り出しているため、あくまでも推察位置にすぎない。しかし、若宮八幡の推定地西側から巾下方面に抜けるためには、北西に向かう以外に方向はなく、この推定位置からの極端な位置・方向的ずれはないものとする。古図に示したA地点から巾下の方向に向かって北西に進む道は、S字状に蛇行して書かれている。名古屋台地北西端にあたるこの地域は、各調査地点のベース面を比較すれば明らかなように、比較的起伏のあった場所であるため、この部分の蛇行は自然地形に影響された可能性が考えられる。この稲生へ向かう道（以下稲生道）に対して、琵琶島に至る道（以下琵琶島道）は起伏のあったであろう台地上に、ほぼ東西軸にのる方向で直線に通っている。このような方向性をもつ両道を本調査地点の溝分類に当てはめる

と、稲生道は準方位、琵琶島道は正方位を想起させる。

戦国城館としての那古野城は、名古屋城の二の丸付近に主要部があったと推定される。この那古野城は、関連する少ない文献資料などによれば、大永4（1524）年頃に今川氏親によって築かれ、天文7（1538）年～弘治元（1555）年頃まで織田信秀～信長親子の居城となり、この後天正10（1582）年まで織田信光～林 通勝が居城して廃城を迎えたとされる。こうした年代的な流れの中で、那古野城の主要部分に関しては、現在まで旧態を想定できる材料がなく、地点が推定できる程度にとどまる。したがって主要部分の城館配置などは一切判明しておらず、現時点での把握は不可能である。このような状況にもかかわらず、主要部分を含む城館とその周辺の空間的な構成をイメージするため、現在までに把握できた材料から仮説を立てることにする。

各調査地点の戦国期溝について、その方位と時期について比較したが、調査地点IIにおける大溝は、今回の調査地点で行った分類とは、方位と時期の関係が照応しないものであった。つまり大窯I期の時点で、ほぼ東西軸にのる方向を示す唯一の溝である。そのほかの地点で確認できた同時期の溝は、すべて東西・南北軸から振る方位を示しており、戦国期の新しい段階にはいるほど、ほぼ東西・南北軸にのる方位を示すようになる。したがって、古い時期に軸線にのる方向を示す調査地点IIの大溝を、古式様相の溝として捉え、ほかの地点ではどの時期にこの方向に変化するかを整理してみる。

#### 調査地点II

瀬戸・美濃産陶器編年上、大窯I期の段階で正方位を示す空間。

#### 調査地点IV

大窯II期の段階で、正方位を示す空間。

#### 調査地点I・III・V

大窯III期の段階で、正方位を示す空間。

#### 調査地点4・5

戦国時代を通じて正方位を示さず、準方位を示し続ける空間。

以上のような結果から、調査地点IIにおける大溝を、方位と時期の関係から古式様相として捉えると、最初から正方位であった空間が時間を経て、南西方向にある準方位の空間を取り込んで行く様相がみてとれる。これによって戦国時代において、調査地点II付近から南西方向に向かって方位に影響を与えた存在が、調査地点IIより北東方向に中心をもっていた可能性が見出せる。戦国期のこの地点において、この正方位の中心的存在を見出すならば、那古野城主要部に比定されるであろう。したがってこのような仮説に立てば、正方位をもつ那古野城は、16世紀前葉の築城当時、その南端を調査地点II付近においたが、南西方向は準方位を示す地域が存在しており、16世紀前葉～中葉の時期に城館域の拡張をまず西側にとり、16世紀中葉～後葉の時期にさらに南側に拡張したことが推察できる。このうち最後に拡張した時点では、影響下に入る範囲が琵琶島に至る道の南側に広く認められるが、これは正方位の琵琶島道の成立を、この16世紀中～後葉の拡張に伴うものと考え、

その影響下で調査地点Iなどの正方位の溝が成立するものと推察したい。したがって準方位の溝をもつ名古屋台地北西端の地域は、初めに稲生へ出る道の方位のもとに成立し、那古野城の拡張などに伴って順次正方位に変わってゆく地域と、名古屋城築城まで準方位を継承する地域とが、それぞれ存在したと思われる。さらに準方位の振る角度に差があり、北西端に向かうほど大きくなるのは、稲生へ出る道が蛇行していたことに伴うものと思われる。

今回の調査区周辺が戦国時代にどのような空間的变化をみせたのか、当該期の溝を中心として考えてみた。この中で材料として扱った個々の溝が、どのような性格のものであるかということにまで視点が届かなかったが、これらの溝は、軍事、区画、排水などそれぞれの目的を持って掘削されたものである。個々の溝のこうした目的をそれぞれ明らかにして行くためには、出土遺物の検討、資料の増加などを積み重ねて行く必要がある。こうしたミクロ的な復元が、今回試みたマクロ的な復元の再検討、具体化につながるものと思われるため、今後の検討課題としたい。

#### 参考文献

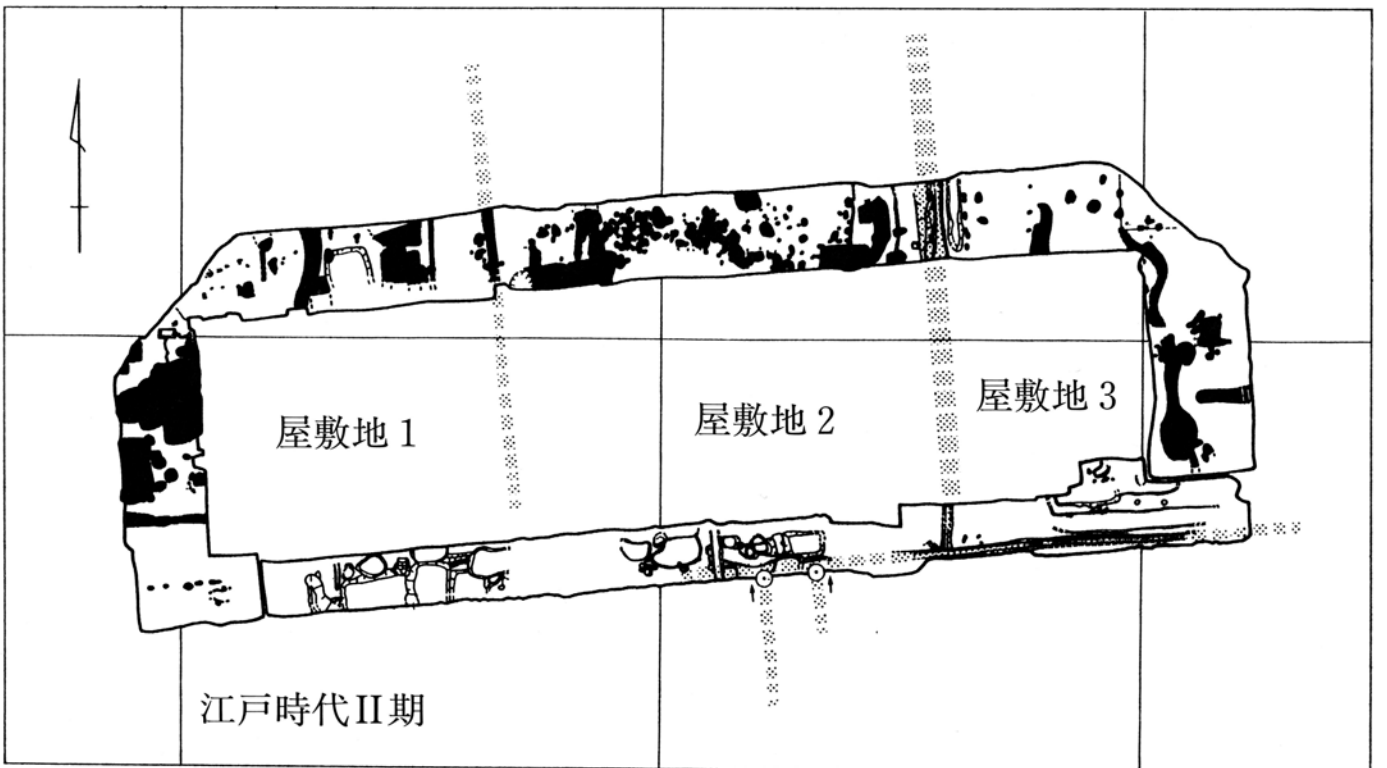
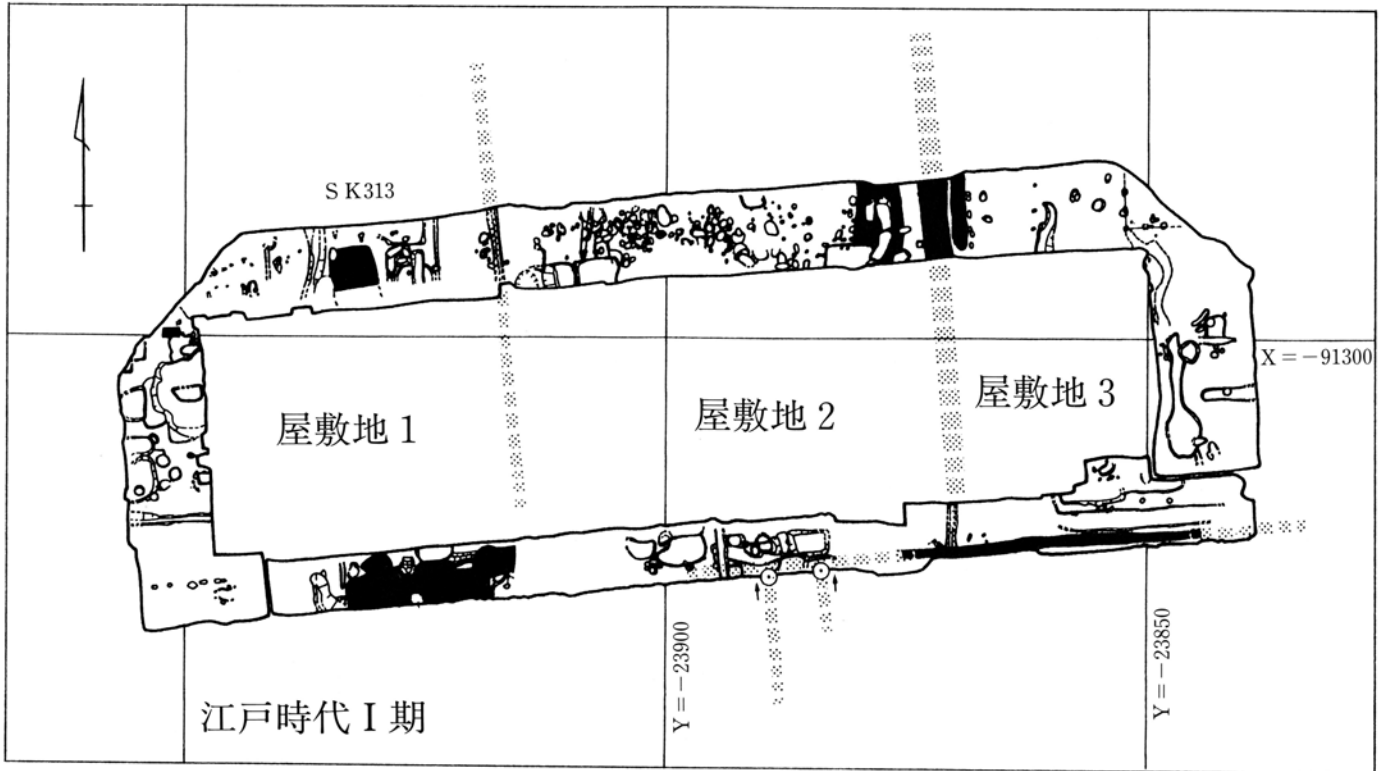
- 佐藤公保ほか 1990 『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』 愛知県埋蔵文化財センター  
 梅本博志ほか 1990 『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』 愛知県埋蔵文化財センター  
 金子健一ほか 1992 『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』 愛知県埋蔵文化財センター  
 遠藤才文ほか 1993 『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』 愛知県埋蔵文化財センター  
 服部哲也・水野裕之 1994 『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査一遺構編一』 名古屋市教育委員会  
 高木元裕ほか 1959 『名古屋城史』 名古屋市  
 奥村得義 1860 『金城温古録』(名古屋叢書別巻13~16) 名古屋市

## (2) 江戸時代

江戸時代の遺構は、第2章において2期に区分した。この時代については、多くの絵図、文献資料などによって、名古屋城三の丸内の屋敷割とその変化、各居住者の変遷などが既に確認できるため、今回の調査地点が、屋敷内のどのような空間に当たるのかを考えてみる。

本調査地点は第I章でも述べたように、南北軸の方が長い方形の屋敷地が東西に並ぶ地点である。このうち調査区にかかるのは3軒分の屋敷地で、B区の南端で東西方向の屋敷境がみついているため、A・B両調査区は、この3軒の屋敷地の南側を東西に「ロ」の字形に抜いたことになる。

時期別に遺構を比較してみると、第106図にみられるように、I期の遺構は数が少なく比較的大型で、検出される場所がいくつかに限定できる。II期の遺構は、数も多く大きさは大小さまざま、集中化する傾向はみられるものの、調査区全般にわたって検出すること



第106図 江戸時代遺構変遷図

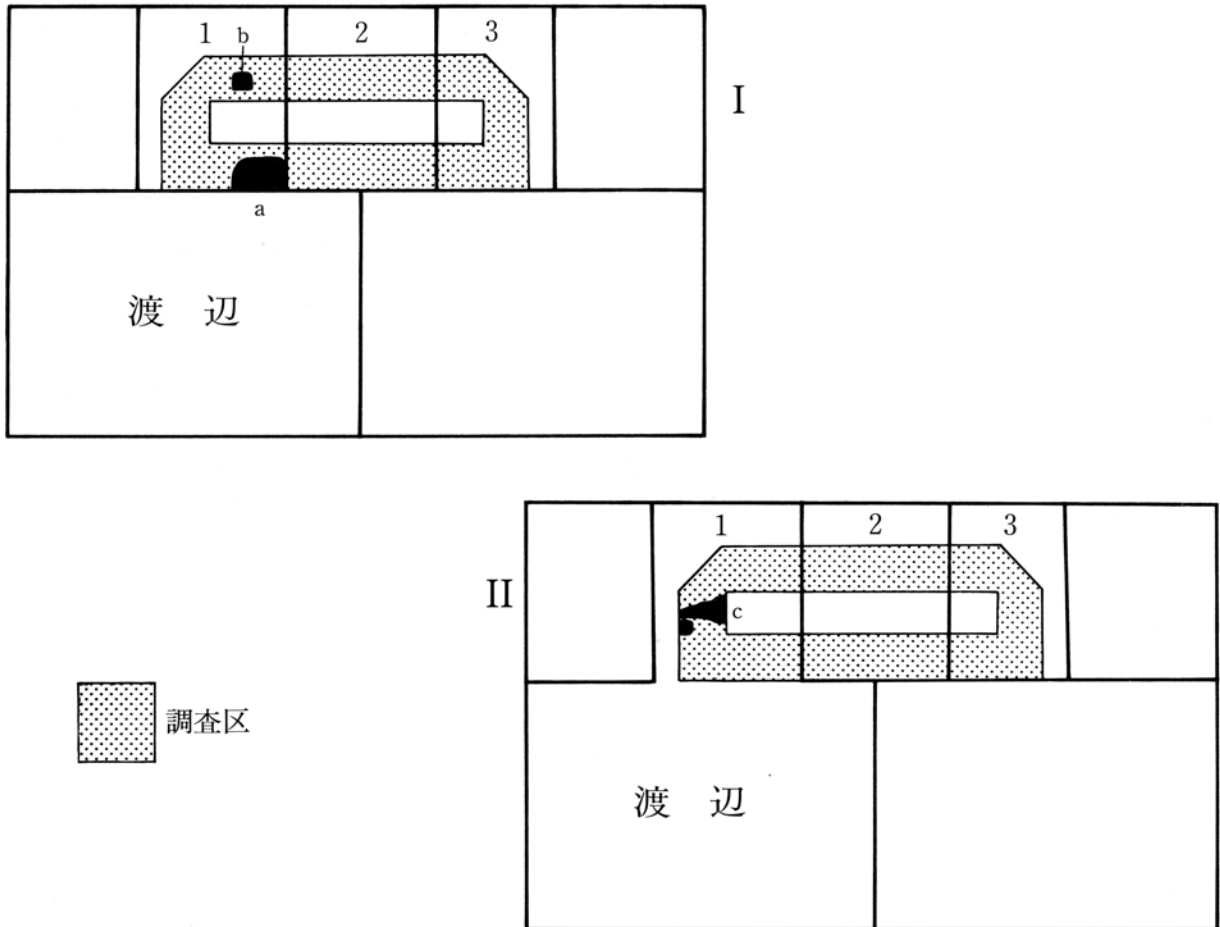
ができる。

I期の遺構は、検出された場所が屋敷地1の南側と北側、屋敷地2・3の境付近にみられ、そのほかの場所ではほとんど検出されない。屋敷地1の南側では、17世紀中頃～18世紀初頭の廃棄を目的に掘削されたと思われる遺構が集中している。屋敷地1の北側では、18世紀前半に機能を停止したと思われる地下室から、大量の遺物が出土している。屋敷地2・3の境付近では、屋敷境の溝を含み、南北方向の溝状遺構が併走する。

II期の遺構は、調査区全般にわたって検出されたが、大量に遺物が出土する遺構は、調査区西側の地点に集中する。また、小土坑に関しては、屋敷地2の北側で集中して検出される。

江戸時代のI・II期遺構では、いくつかの特徴をもつものが検出されたが、この中でも大量に遺物が出土した遺構は限られる。このような最終的に廃棄を目的に埋伏行為が行われた遺構を取り上げ、その変遷状況を考えてみたい。

第107図は、調査区に関連する名古屋城三の丸内のブロックに調査区位置を示し、その中で大型廃棄土坑の位置する地点を、黒塗りで示したものである。I・II期ともに屋敷地1に集中しており、3地点(a～c)に分かれる。



第107図 調査区廃棄地点位置図

廃棄地点 a 屋敷地 1 の南端に位置する。17世紀中頃から18世紀初頭の時期の大型遺構が、切り合い関係をもって検出される。

廃棄地点 b 屋敷地 1 の北側に位置する。18世紀前半に機能を停止した地下室に、大量投棄されたとされる S K313 が検出される。

廃棄地点 c 屋敷地 1 の中央よりやや南西に位置する。18世紀後半～19世紀前半までの大型遺構が、複雑に切り合って検出される。

屋敷地 1 に関しては、第 I 章でも述べたように、三の丸が成立した17世紀前半から1700年前後まで、ここに居住した当主は10人に上る。それが1700年前後に、南側に居を構える渡辺半蔵邸の添え屋敷として取り込まれる。したがって、屋敷地 1 は1700年前後までは独立した屋敷地として機能し、その出入口を設けた位置は、区画設定上、当時の中小路に面した屋敷地北側以外には不可能である。こうしたことから、1700年前後までの屋敷地 1 内の空間構成は、その北側が屋敷表に、南側が屋敷裏として機能していたことがわかる。

廃棄地点 a は、17世紀中頃から18世紀初頭にかけての遺構が集中しているが、この地点は当該期に空間構成上、屋敷裏に当たることが確認できるため、10人にも上る居住者が交代する際に、この地点を廃棄する空間として利用したことが考えられる。

廃棄地点 b は、屋敷地 1 の中では中央よりやや北東側に位置するが、この地点の遺構である S K313 からは、18世紀前半の遺物とともに、渡辺家の家紋である「三星一文字」入りの瓦が出土している。したがって、S K313 は地下室として掘られ、渡辺家がこの屋敷地を拝領した後に、埋伏行為が行われたと考えられる。なぜならば、最初は渡辺家の屋敷外であった地点に、屋敷を拝領する前の時点で、渡辺家の家紋瓦が廃棄される可能性は低いと思われるからである。したがって、S K313 の出土遺物から判断すると、遅くとも18世紀前半の時点で、この区画は渡辺家が拝領していたことが推定でき、絵図・文献史料等の記述が発掘調査の成果とも照合することになる。

廃棄地点 c は、屋敷地 1 の中では中央よりやや南西側に位置するが、この地点は18世紀後半～19世紀前半までの遺構が多く検出され、出土遺物から判断すると幕末までには至らないものと思われる。調査区内で、この時期の大量投棄を想起させる遺構は他にみられず、この地点が、当該期における屋敷地 1 の廃棄行為に利用された空間と考えられる。

調査区内で検出した、江戸時代における屋敷地 1 内の廃棄地点は、17世紀代には屋敷裏に当たる南端の a 地点が利用された。しかし a 地点は、渡辺家に取り込まれて以後は合体屋敷地となるため、この a 地点に対する屋敷裏という概念が変化し、その後は大量投棄に利用する空間が、c 地点へと移っていったことが考えられる。

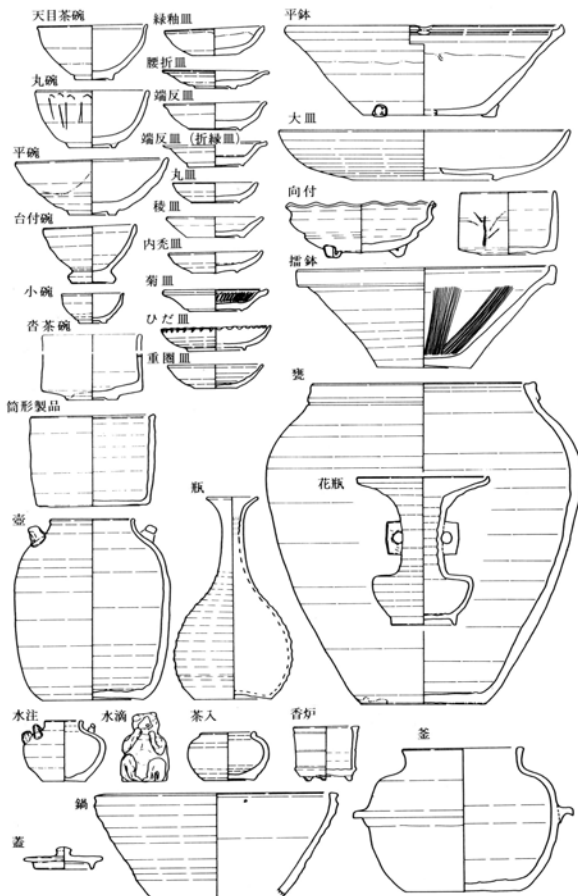
屋敷地 1 の居住者は、渡辺家が拝領した1700年前後より後は、代々相続され屋敷替えは行われていない。にもかかわらず、屋敷地 1 内検出の大量投棄が行われたと思われる土坑は、江戸時代初期より19世紀前半までの各時期で確認できる。こうした事実は、従来から大量投棄の理由として第一に考えられてきた屋敷替え以外にも、相続期、被災などの理由で、大量投棄という行為が行われた可能性を考えさせる。

### 3 出土遺物の考察

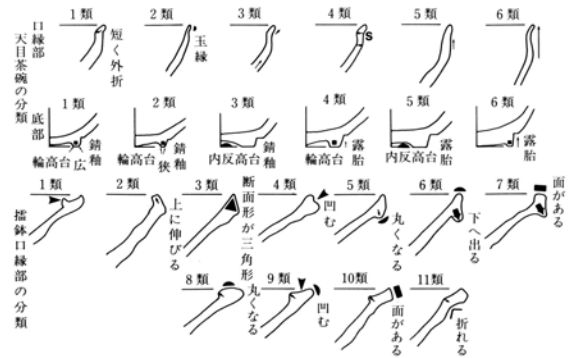
#### (1) 戦国時代出土遺物の分類と計測法

本調査地点で出土した戦国時代の遺物は、遺構の稿で述べたように3期に大別した。この時期の遺物の出土量は、調査面積、遺構の規模、量などから考えると少量である。しかしこの中には、那古野城関連の資料も含まれていると思われ、周辺の当該期遺跡との比較資料として提示することが必要と判断した。

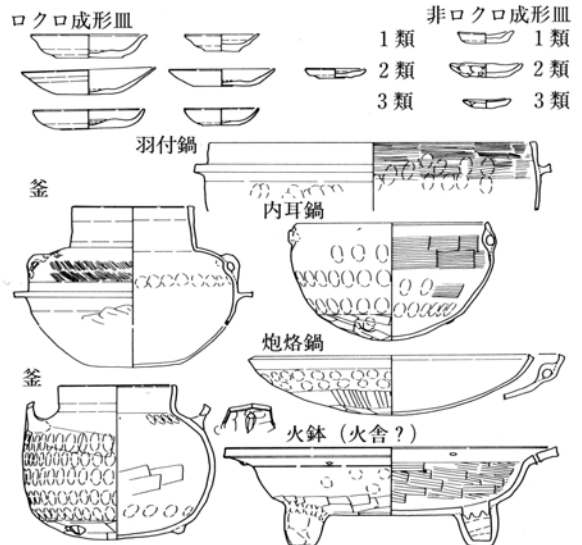
戦国時代の尾張地域は、特に後半の段階を考えると、織田氏を抜きにしては語れない。愛知県埋蔵文化財センターでは、この織田氏関連遺跡の発掘調査をすでに数地点で行っており、岩倉城、清須城下町や、上記の那古野城などがすでに報告されている。この中で戦国時代の出土遺物に関しては、本センターの鈴木正貴が『清洲城下町遺跡Ⅳ』（1994）において詳細な分類と計測を行っている。本遺跡においても、当該期の織田氏関連遺跡としてデータを共通化するため、この分類・計測に依拠することとし、その方法を用いることとする。したがって分類・計測法についての説明は鈴木報告（部分）を縮小転載するが、詳細については『清洲城下町遺跡Ⅳ』第Ⅳ章第1節（P.120～）を参考とされたい。



第108図 戦国時代瀬戸美濃産陶器種類分類 (S=1/8)



第109図 戦国時代天目茶碗・摺鉢器形分類



第110図 戦国時代土師器種類分類 (S=1/8)

## A 遺物のカウント

## ①陶磁器・土器類（瓦を除く）のカウント

陶磁器・土器類のカウントは、破片数（接合前）と口縁残存率（12分の1単位）を求めることにした。このため、以下の手順を経て実施した。なお、分類の詳細は項目を改めて記載する（本節第D項）。

## 第1手順 データの収集

整理担当の調査研究員が設定した分類案をもとに、主に整理補助員が遺物のデータを記録用紙に記入した。実施に当たり一定期間の整理補助員の勉強会を経て行い、作業途中で生じた問題点はその都度改善・変更した。データ収集の対象と記入方法は以下の通りである。

- ・遺物収納袋（遺構・グリッド別）毎に簡単に接合作業を実施した後、口縁部の有無で区分する。
- ・口縁部を有するものは、接合後の破片1点につき1データずつ記入した。
- ・口縁部を持たないものも、基本的には破片1点につき1データ設定した。（ただし、煩雑となる場合には全く同一のデータ内容を持つ破片を合計して1データとしている。）
- ・長さ1cm以下の小破片は、原則として分析対象から除外した（本節第C項を参照）。

## 第2手順 データの入力

整理担当の調査研究員がパーソナルコンピューターを用いて表計算ソフトに入力した。入力と同時に記録用紙の校正・点検も行った。調査別別にファイルを作成し、1ファイルに500データ以下を入力した。

## 第3手順 データの集計

入力されたデータを用紙に打ち出し再校正を行った後、設定した集計項目に則りパーソナルコンピューターによる計算作業を実施した。計算は1ファイル毎に行い、これらのデータを集積して編集した。

## 1 データの内容の詳細

データ収集における1データの内容は、①調査区、②グリッド、③遺構番号、④材質・産地、⑤器類、⑥器種、⑦器形（口縁部）、⑧器形（底部）、⑨軸案、⑩口縁部残存率、⑪口径、⑫使用痕、⑬破片数、⑭備考の14項目である。このうち④材質・産地、⑤器類、⑥器種、⑦器形（口縁部）、⑧器形（底部）、⑨軸案、⑫使用痕は設定された分類案の記号を記入する。また、⑬破片数は接合前の破片の総数を数値で記入し、⑭備考は特記事項を言葉で記入した。

⑩口縁部残存率と⑪口径の算定方法について更に詳述する。今回の分析で実施した口縁部計測法は、口径の算定も同時に行う形で、以下の手順を経ていた。

- ・対象資料は、口縁部を持つもの全てであるが、鈴・形代・陶丸・鉢・鉢等計測不能とした（破片のみで表現している）。
- ・単位は、口縁部が完存する場合を1として遺存している口縁部の割合を12分の1単位で計測した。小破片の資料化も試みたため、12分の1以下を切り上げて算定している。つまり具体的には、12分の0より大きく12分の1以下の破片を1、12分の1より大きく12分の2以下の破片を2としたのである。
- ・計測器具は、直径を1cm単位で拡大した同心円とその中心から放射状に12等分した直線（角度は30°づつ）を、白または透明の用紙に印刷したものを計測器として用意する。
- ・計測方法は、接合作業を実施した後の口縁部残存資料を1点づつ、計測器具に口縁部を当て、口縁部の曲線と同心円の曲線が重なる部分を捜し出す。丁度重ならない場合はより近似した曲線を求め、求めた同心円の直径が口径（mm単位は四捨五入）となる。また、口縁部の長さが、その口径の位置で放射状に12等分された区画の何個分に相当するか切り上げて算定すると、これが口縁部残存率の数値となる。

口径の算定が困難な小破片の場合は、口径不明とした。口縁部がゆがんでいる場合は、ゆがんでいなかった場合を想定して平均値を求めた。口縁部が方形の場合は一辺を4分の1に換算して計算した。注口を持つ製品は口縁部が2ヶ所存在するが、注口の口縁部は計測から除外した。

## B 陶磁器・土器類の分類

清洲城下町遺跡から出土した陶磁器・土器類を6つの分類のランク（材質産地・器類・器種・器形（口縁部）・器形（底部）・軸案）で区分した。なお、この区分は、小破片の遺物も可能な限り資料化する目的で設定されており、遺存状態が良好な資料をもとに作成されたこれまでの分類とは若干異なる<sup>(2)</sup>。例えば、瓶と壺は本来器類として分類したい所であるが、小破片では区分が困難であり器類不明となる。しかし、小破片であっても厚さや釉の掛かり方から碗や皿とは明確に区分できるのであり、この点を重視して、大形製品といった器類を設定している。以下にその概要を記す。

## ①材質・産地

胎土と焼成技法から陶磁器・土器類は以下の7類に区分する。

- 1 瀬戸美濃産陶器——白色の胎土を基本とする瀬戸・美濃の窯で生産されたと思われる陶器。
- 2 土師器——黄褐色の胎土を基本とする素焼きの土器。
- 3 瓦器——白色の胎土を基本とし、表面をいぶして作られた土器。
- 4 常滑産陶器——黒灰色または褐色の荒い胎土を基本とする常滑窯で生産された陶器。
- 5 唐津産陶器——黒灰色または褐色の胎土を基本とする唐津窯で生産された陶器。
- 6 中国産陶磁器——白色のきめの細かい胎土を基本とした磁器・釉に陶器をさす。
- 7 その他——楽・信楽・越前・備前・タイ等の産地の製品や産地不明のもの。

この類については別途の一覧表を作成した。

## ②器類

法量と全体のプロポーションのみで陶磁器・土器類全体を区分すると、a 碗類（小形で口径と器高が類似）、b 皿類（小形で器高が低い）、c 鉢類（大形で逆ハの字状に開く）、d 大壺類（大形で体部が袋形になる）、e 大瓶類（大形で口径が小さい）、f 筒形製品類（体部が筒状に直立）、g 小壺類（小形で体部が袋形になる）、h 小瓶類（小形で口径が小さい）に区分できる。但し、この区分はd 大壺類とe 大瓶類とf 筒形製品類の分類等が、小破片では困難である。また、清洲城下町遺跡の遺物で主体となっている鉢や鍋がこの分類では抽出できなくなる恐れがある。このような理由から、本来の器類という分類の原則<sup>(1)</sup>からはやや逸脱するが、以下の10類に区分することにした。

- 1 碗——口径10cm前後、器高7cm前後の小型容器。
- 2 皿——口径10cm前後、器高2cm前後の浅い小形容器。

- 3 浅鉢——口径25cm前後で逆ハの字状に開くものと向付と呼ばれる小鉢状のものを一括。
- 4 播鉢——内面に播目を持つ口径25cm前後で逆ハの字状に開く大形容器。
- 5 大形製品——筒形・袋形の形状をし、底径が10cm以上の容器。
- 6 小形製品——袋形の形状をし、底径が10cm以下の容器。
- 7 香炉——筒形の容器に脚がついたもの。
- 8 鍋・釜——煮沸・煮炊に使用されたと思われる浅鉢・大形製品を特に区分する。
- 9 その他——蓋・煙管・鈴・形代・陶丸・鉢等上記の分類に当てはまらないもの。
- 10 不明——器類が不明となるもの。

器種・器形——各々の産地・材質や器類によって個別に細分類している。出土量が少ない器類については個別の細区分を行っていないものもある。ここでは主要な産地・材質と器類についてのみ内容を記述し、実際に実施した分類案のうち一部を割愛している。

## 瀬戸美濃産陶器類（1：1）

- 1 天目茶碗——高台を削り出し逆ハの字状に開き、口縁部が屈曲する碗。
  - 口縁部1類——口縁部が短くくびれる。
  - 口縁部2類——口縁部が直立し口唇部が玉縁状になる。
  - 口縁部3類——口縁部が直立してやや外反する。
  - 口縁部4類——口縁部が大きくくびれ、S字状になる。
  - 口縁部5類——口縁部がややくびれ直立する。
  - 口縁部6類——口縁部の直立部分の高さが高い。
- 底部1類——高台幅が広い輪高台で、体部下下部に銷輪（化粧掛け）を施したもの。
- 底部2類——高台幅が狭い輪高台で、体部下下部に銷輪（化粧掛け）を施したもの。
- 底部3類——高台が内反高台で、体部下下部に銷輪（化粧掛け）を施したもの。
- 底部4類——高台が輪高台で、銷輪（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。
- 底部5類——高台が内反高台で、銷輪（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。
- 底部6類——高台が高い輪高台で、銷輪（化粧掛け）が極めて薄い、または施さないもの。

- 2 丸碗——高台を削り出し腰が張る形で開き、口縁部が直立する碗。
  - 口縁部1類——口縁部が直立し、体部外面に剣先状の蓮弁紋が施されたもの。
  - 口縁部2類——口縁部が直立し、体部外面に直線状の蓮弁紋が施されたもの。
  - 口縁部3類——口縁部がやや外反するもの。
  - 口縁部4類——口縁部が直立し、体部外面に蓮弁紋等が施されないもの。

- 3 平碗——高台を削り出し体部から口縁部にかけて逆ハの字状に開く碗。
- 4 台付碗——底部は広く台状に外に作られ逆ハの字状に開く碗。仏供とも呼ばれる。
  - 底部1類——外に広げられた底部の台の下に高台を作るもの。
  - 底部2類——外に広げられた底部の台の下に高台がないもの。
  - 底部3類——外に広げられた底部の台が退化してなくなったもの。
- 5 小碗——口径が8cm以下の碗。
  - 口縁部1類——口縁部がくびれるもの。天目茶碗の小形製品。
  - 口縁部2類——体部から口縁部にかけて大きく外反するもの。小杯。
  - 口縁部3類——口縁部が直立するもの。丸碗の小形製品。

- 6 宮茶碗——腰が著しく張り、一般にクロク引きしない碗。

## 瀬戸美濃産陶器類（1：2）

- 1 縁輪皿——口縁部端のみに釉薬が掛かる皿。
  - 口縁部1類——内面に印目がなく、口縁部が直立または内彎するもの。
  - 口縁部2類——内面に印目がなく、口縁部が外反するもの。
  - 口縁部3類——内面に印目があり、一般に口縁部端に面を持つもの。いわゆる印皿。
- 2 腰折皿——高台を削り出し口縁部にかけて強く外反するもの。体部下下部下半は露胎となる。
- 3 端反皿——内面全体に釉薬が掛かり、口縁部が外反する皿。
  - 口縁部1類——体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部が僅かに外反する通常の端反皿。
  - 口縁部2類——口縁部は外方へ強く屈曲し、端部で上方に短く立ち上がる折縁皿。
- 4 丸皿——内面全体に釉薬が掛かり、体部は丸みを持って立ち上がり、内彎する皿。
- 5 稜皿——体部は高台から直線的に開いて立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する皿。
- 6 内壳皿——内面中央（見込み部）に釉薬を掛けない皿。（但し、菊皿を除く。）
  - 口縁部1類——体部が丸みを持って立ち上がり内彎するもの。
  - 口縁部2類——体部は丸みを持って立ち上がり口縁部が僅かに外反するもの。
  - 口縁部3類——口縁部は外方へ強く屈曲し、端部で上方に短く立ち上がる折縁のもの。

- 7 菊皿——菊花状に作りをなしている皿。
  - 口縁部1類——花卉表現に丸ノミを使用し、内面全体に釉薬が掛かり、内彎するもの。
  - 口縁部2類——花卉表現に丸ノミを使用し、内面中央に釉薬が掛からない、内彎するもの。
  - 口縁部3類——花卉表現に丸ノミ、内面全体に釉薬が掛かり、口縁部が折縁となるもの。
  - 口縁部4類——花卉表現に丸ノミ、内面中央に釉薬が掛からない、口縁部が折縁となるもの。
  - 口縁部5類——花卉表現が型打ちで、口縁部まで花卉表現されるもの。

- 8 桜花皿——口縁部を外反させ花卉状に切り取るもので、通常内面に波状紋を描くもの。
- 9 ひだ皿——口縁部が外反し、口唇部をひだ状にした皿。
- 10 重圍皿——内面に凹線または凸線の同心円紋または螺旋状紋がつく皿。
  - 口縁部1類——内面に凹線の螺旋状紋が付き、口縁部端が内彎するもの。
  - 口縁部2類——内面に凹線の螺旋状紋が付き、口縁部端が直線状に伸びるもの。
  - 口縁部3類——内面に凸線の同心円紋が間隔広く付くもの。
  - 口縁部4類——内面に凸線の同心円紋が間隔狭く付くもの。

- 11 鉢み皿——平底で釉薬を掛けずに焼き締まった皿。
  - 皿全体について底部を以下のよう区分した。
  - 底部1類——平底。高台を持たないもの。
  - 底部2類——付高台。平底に粘土紐をつけて高台とするもの。

## 第V章 補論

底部3類——削り出し高台。高台内外を削り取って高台とするもの。

底部4類——碁筋底。高台内を削り取って高台の形態とするもの。

### 瀬戸美濃窯産陶器浅鉢（1：3）

1 平鉢——体部が逆ハの字状に開きやや深い鉢。

2 大皿——体部が逆ハの字状に開き、直径が大きく浅い鉢。

3 向付——体部が直立したり、平面形が円形にならない、小形の鉢を総称する。

上記の碗・皿・平鉢・大皿に当てはまらない口が開く小形容器。

### 瀬戸美濃窯産陶器深鉢（1：4）

器種の区分は存在しない。

口縁部1類——口縁部の内側に突帯が巡るもの。

口縁部2類——口縁端部を内側に屈曲させ、上方に伸ばしたもの。

口縁部3類——口縁端部に面を持ち、断面形が三角形になるもの。

口縁部4類——口縁端部に凹線状のへこみが巡るもの。

口縁部5類——口縁端部を外側に折り返し、玉縁状に丸くなるもの。

口縁部6類——口縁端部を外側に折り返して縁帯を作り、上端部が丸まっているもの。

口縁部7類——口縁端部を外側に折り返して縁帯を作り、上端部が平らな面となるもの。

口縁部8類——口縁部に内傾するやや幅広い平坦面を持ち、その平坦面が丸みを持つもの。

口縁部9類——口縁部に内傾するやや幅広い平坦面を持ち、その平坦面がへこむもの。

口縁部10類——口縁部に内傾する平坦面直下に段を持ち、上端部が平らな面を持つもの。

口縁部11類——口縁部に内傾する平坦面直下に段を持たず、屈曲する形態となったもの。

### 瀬戸美濃窯産陶器大形製品（1：5）

1 筒形容器——円筒状の体部を有する鉢。

口縁部1類——口縁端部が丸く納まるもの。

口縁部2類——口縁端部に平らな面がある。

口縁部3類——口縁端部の内側がやや張るもの。

口縁部4類——体部外面にタガの文様を模倣した突帯がつくもの。

口縁部5類——口縁部が外に折れるもの。

口縁部6類——口縁端部の外側がやや張るもの。

2 壺——体部が袋状の形態をなし、口径がやや大きい大形製品。

口縁部1類——口縁部が外側に丸く突出するもの。通常四個の耳がつく。

口縁部2類——口縁部が外側に張り出し口縁上端部が平らなもの。通常双耳壺となる。

口縁部3類——口縁端部が直立するもの。通常双耳壺となる。

口縁部4類——口縁端部に内傾する面を持つもの。通常双耳壺となる。

3 瓶——体部が袋状の形態をなし、口径が小さい大形製品。徳利。

口縁部1類——口縁部が外側にラッパ状に開くもの。

口縁部2類——口縁部が受け口状になるもの。

口縁部3類——口縁部が受け口状になり、端部が直立して伸びるもの。

口縁部4類——双耳瓶となるもの。

4 花瓶——体部が袋状の形態をなし、口縁部がラッパ状に大きく開くもの。

5 甕——体部が袋状の形態をなし、口径が大きい大形製品。

### 瀬戸美濃窯産陶器小形製品（1：6）

1 水注——体部が袋状の形態をなし、注口と双耳を持つ小形製品。

2 水滴——体部が袋状の形態をなし、注口を持つ小形製品。耳は存在しない。

3 茶入——体部が袋状の形態をなし、注口と双耳を持たない小形製品。

### 瀬戸美濃窯産陶器香炉（1：7）

器種の区分は存在しない。

口縁部1類——体部が一旦内側に屈曲するもの。いわゆる杓腰型。

口縁部2類——体部が直立し口縁部が内側に張り、外面に沈線による文様がないもの。

口縁部3類——体部が直立し口縁部が内側に張り、外面に沈線による文様があるもの。

### 瀬戸美濃窯産陶器鍋・釜（1：8）

1 釜——体部が袋状の形態をなすもの。

2 鍋——体部が鉢状に開くもの。

### 土師器皿（2：2）

1 ロクロ成形——底部に回転糸切りの痕跡が残存するもの。ロクロ（回転台）成形。

口縁部1類——口縁部が外反するもの。

口縁部2類——口縁部が直線的に伸びるもの。

口縁部3類——口縁部が内彎するもの。

2 非ロクロ成形——底部に回転糸切りの痕跡が残存しないもの。手づくね・内型成形。

口縁部1類——口縁部の外面にヨコナデを施して体部を作るもの。

口縁部2類——口縁部の外面にユビオサエして体部を作るもの。

口縁部3類——体部を立ち上げないもの。ヨコナデを施さないもの。

### 土師器鍋・釜（2：8）

1 羽付鍋——半球型の鉢で鍋があるもの。

2 内耳鍋——半球型の鉢で鍋がなく、内耳が付くもの。

3 炮烙鍋——極めて浅い鉢の形状をしたもの。

4 釜——口が狭められた袋状の壺の形状をしたもの。

釜は耳の形態と鍋の有無で細分が可能である。これらの要素を底部の器形に重複する形で記入したが、適切な記入方法ではないと思われる。

底部1類——紐状の粘土を縦方向に張り付けた耳を持つもの。

底部2類——五角形の粘土板を張り付けて穿孔した耳を付けたもの。

底部3類——鍋を持つもの。

底部4類——鍋を持たないもの。

### 瓦器大形製品（3：5）

1 風炉——体部に窓を有する大形製品。

2 火鉢——体部に窓を持たない大形製品。

### 常滑窯産陶器大形製品（4：5）

1 甕——体部が袋状の形態をなし、口径が大きい大形製品。

2 壺——体部が袋状の形態をなし、口径がやや大きい大形製品。

### 軸葉

1 灰軸

2 鉄軸

3 長石軸

4 銅緑軸

5 無軸——焼き締めた無軸製品や土師器・瓦器もこれに該当する。

6 銷軸

7 黄瀬戸軸——緑軸のタンパンが存在するものとし、他は灰軸と取り扱う。

8 その他

この他にこの項目には中国製磁器について3分類、常滑窯産陶器に2分類を追加した。

9 青磁

10 白磁

11 青花

12 焼締——常滑窯産陶器の内、堅緻に焼き締まった黒灰色の胎土を持つ真焼の製品。

13 赤物——常滑窯産陶器の内、焼きが若干干赤褐色の胎土を持つ製品。

### 使用痕

1 完形——全く破損していないもの。ゴミとして廃棄されなかったものと思われる。

2 口欠——口縁端部のみが細かく欠けているまたは摩滅しているもの。

3 穿孔——焼成後に孔を設けているもの。

4 摩滅——容器の内部が摩滅しているもの。摺る行為が行われたと思われる。

5 被熱——焦げて黒色化しているもの。火を利用した用途が考えられる。

6 煤附着——煤が付着するもの。煮沸・煮炊に利用されたと推定できる。

7 タール附着——口縁部にタールが付着したもの。灯明としての利用が想定される。

8 錆物附着——金属などが溶解した物質（スラッグ等）が付着したもの。

9 墨書——墨による文字・記号・絵画が記されたもの。

10 刻書——刻み込んで文字・記号・絵画が記されたもの。

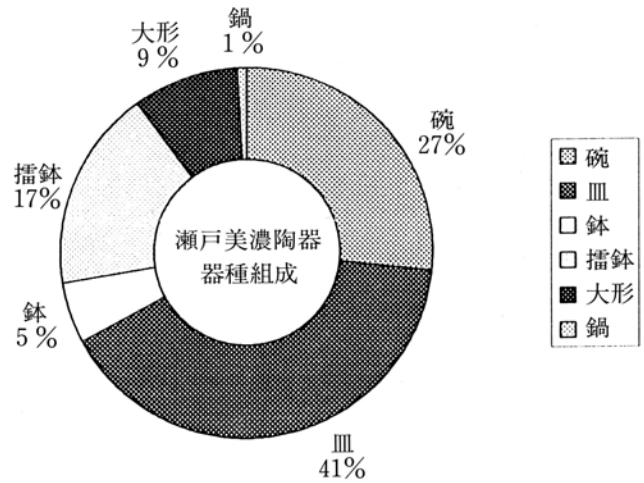
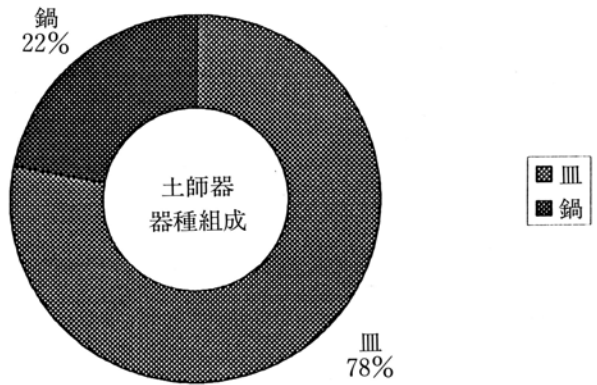
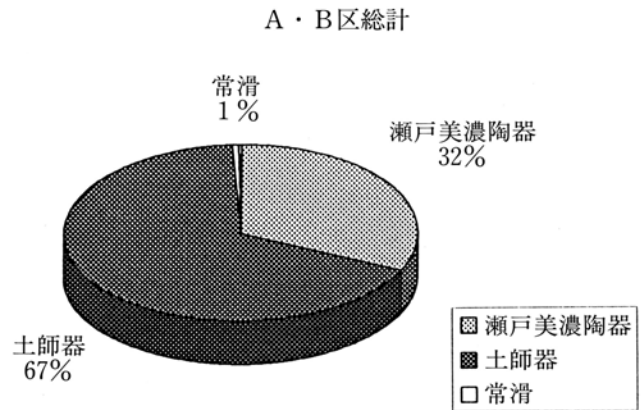
11 加工円盤——小破片を用いて円盤状に加工したもの。

12 漆継ぎ——破断面に漆が付着したもの。破損した製品を漆で接合した痕跡である。

13 不良製品——本来の製品が失敗したもの。

産地・材質	器類	器種・器形	A区	B区	A・B区総計	
瀬戸美濃陶器	碗	天目茶碗	67	15	82	
		丸碗	16	0	16	
		平碗	1	0	1	
		台付碗	3	0	3	
		小碗	15	0	15	
		沓茶碗	0	0	0	
	皿	緑釉皿	15	12	27	
		腰折皿	1	0	1	
		端反皿	灰釉	33	19	52
			鉄釉	8	1	9
			折縁	0	0	0
			志野	0	0	0
		丸皿	灰釉	19	2	21
			鉄釉	1	3	4
			志野	3	0	3
		稜皿	0	2	2	
		内壳皿	0	0	0	
		菊皿	1	0	1	
		稜花皿	0	0	0	
		ひだ皿	2	0	2	
		重圏皿	I類	15	19	34
			II類	4	2	6
			III類	0	5	5
			IV類	4	7	11
			V類	0	0	0
		挟み皿	3	0	3	
	浅鉢	平鉢	23	1	24	
		大皿	1	0	1	
		向付	0	0	0	
	播鉢	1類	5	0	5	
		2類	7	8	15	
		3類	5	4	9	
		4類	5	0	5	
		5類	1	1	2	
		6類	16	3	19	
		7類	3	2	5	
		8類	1	0	1	
		9類	2	0	2	
10類		1	0	1		
11類		2	0	2		
大形製品	筒形鉢	17	4	21		
	壺類	0	4	4		
	瓶類	11	4	15		
	花瓶類	4	0	4		
小形製品	甕類	0	0	0		
	水注類	0	0	0		
	水滴類	0	0	0		
香炉	茶入類	0	0	0		
	1類	0	0	0		
土師器	2類	0	0	0		
	3類	0	0	0		
	0	0	0			
皿	ロクロ成形 1類	15	34	49		
	2類	184	64	248		
	3類	40	8	48		
	非ロクロ成形 1類	67	8	75		
	2類	0	36	36		
	3類	101	16	117		
	鍋・釜	羽付鍋	9	1	10	
内耳鍋	116	55	171			
焙烙鍋	17	3	20			
壺形鍋	14	0	14			
瓦器		0	0	0		
常滑	真焼	4	2	6		
	赤物	1	1	2		
唐津	碗	0	0	0		
	皿	0	0	0		
	その他	0	0	0		
中国	青磁	2	0	2		
	白磁	2	0	2		
	染付	2	0	2		
その他		0	0	0		

第60表 戦国時代出土遺物残存率集計表



第111図 遺物組成グラフ

(2) 江戸時代出土遺物の分類と計測法

A 分類・計測作業の諸問題

本調査地点で出土した江戸時代の遺物は、遺構の稿で述べたように2期に大別した。当該期における遺物の出土量は膨大であり、器種は戦国時代以前とは比較にならないほど多様化する。こうした出土遺物に対しては、個々のもたらすミクロ的な情報を、マクロ的な情報としてまとめることが必要と判断した。このため出土遺物に分類基準を設定し、これを情報として整理し、統計処理を行うことにする。分析に先立ち、今回の調査で出土した遺物を、マクロ的な情報としてまとめるために生じた問題点を述べる。

・分類基準設定上の問題

個々の遺物がもたらす情報は、視点によって様々であるが、その中で各情報をどのように取捨選択するかが問題となる。換言すれば、なにを目的に分類するかあらかじめテーマ設定し、それに応じた基準を設定する必要が生じる。

現在まで江戸時代を主要とする発掘調査報告では、出土遺物の分類にあたって、大別すると2種類の方法が採用されている。すなわち、器形を基準にしたもの・用途を基準としたものである。

一般的に分類基準を選択する場合は、考古学的手法をとる以上、各時代を通じて伝統的に行われてきた器形を基準に分類する方法が、多く採用されている。しかし、器種・器形が極端に多様化する江戸時代では、この方法は様々な困難を伴う。先述したように、この時代の遺物はあまりにも種類が多いため、全体を統括しながらすべての器形をカバーして分類することに無理が生じる。また、1器形=1用途といったように、形によって用途が限定される特殊品目も多くみられ、これらは、統一した項目に組み込みにくい。したがって、器形を基準に分類する方法では、その名称などに俗称を使用したままのもの、俗称はつけられていても器形により機械的に分類した名称を用いているもの、などが混在する結果となる場合が、多くみられる。

用途を基準にした分類は、器形を基準にした分類に比べると採用される例が相対的に少ない。この方法は、器形を基準にした方法に対して、視点を変えた一つの解決策であるが、新たな問題点も指摘できる。それは使用痕を、用途分類において優先させる方法である。報告者は消費遺跡を調査する以上、出土遺物の用途を考えて行く必要がある。こうした用途を追う場合、器形から想定できるもの以外に、使用痕の観察からも想定される。しかし、器形から想定できる用途と、使用痕から想定できる用途が異なった場合、その遺物自体の使用期間の中で、どちらの使われ方がより長期間採られたかは、証明に困難を伴う。たとえば、すでにいくつかの指摘があるように、陶器の皿などにタールが付着している場合の捉え方がある。この場合、使用痕を優先して分析していれば、ここで想定し得る「灯明具」として扱われることになる。しかしこの分類方法では、極端に考えれば長年供膳具として使用してきた皿が、なんらかの理由でごく短期間灯明具として使用されたものであっても、

扱いは供膳具には入らない。これと同じく、焼塩壺の口縁部に数カ所人為的な敲打痕や、擦れが観察できるものは、「喫煙具」と扱われるかもしれない。したがって、使用痕などから用途を判断しても、あくまでもその遺物の最終的な使われ方が判明するだけである。換言するならば、使用痕に偏った分析は、その遺物自体の使用期間の中で、どちらの使われ方がより中心であったか証明できない以上、一時的な現象を捉えることになりかねないと言える。使用痕を優先させて遺物の用途を分類する方法は、一時的な現象も含み、遺物の最終的な使用状況を明らかにしたい場合以外、こうした問題をもつ点において、限界が感じられる。

#### ・情報処理作業の限界

今回の調査報告書を作成する作業期間は、洗浄、注記作業を除いて、10ヶ月間である。この中で分類・計測に費やす期間は、消化可能な処理量をあらかじめ算定し、分類方法の選択、作業の進行法決定まで含み、設定しなければならない。したがって、本来全出土遺物の処理が理想ではあるが、現実的な対応策として、限られた期間の中で限定した遺物の分類・計測作業にあたることになる。

分類・計測作業を始めるにあたり諸処の問題点を考慮したが、実際に作業を進める上では直面する壁を実感するのみであった。理想とするものは、なるべく単純に階層化された分類であるが、器形を基準とすれば、用途が二次的な扱いになり、用途を基準とすれば器形が二次的になりやすくなる。こうした矛盾をなくするために器形と用途を盛り込もうとすれば、果てしなく細分化を進めてしまうことになる。器形と用途を考慮しながら、多岐にわたらない分類は前例もなく、限られた時間の中で解決することは不可能と判断し、産地・材質別の組成を、遺構出土遺物に限って時期別に明らかにすることを第一の目的とした。また、今回の調査地点では屋敷地が3区画検出されたが、各屋敷地別の組成比較なども検討の対象とした。

## B 分類試案・計測の方法

分類・計測の対象遺物は、江戸時代各遺構より出土した遺物の内で、口縁部の残存する陶磁器・土器類で行い、その他の破片は割愛した。分類は当初単純に階層化できるよう考慮したが、器形を基本としつつ用途を加味せざるを得なかったため、より複雑化する結果となった。当初の目的に逆行する結果は本意ではなかったが、さらに新たな矛盾を生ずることとなり、江戸時代遺物の分類に伴う難題を痛感した。したがって本分類は、あくまでも試案である

情報の収集は、各遺構ごとに接合作業を行った後に口縁部片を選び出し、設定した項目別に、その破片についての情報を記録した。この各口縁部片の情報は、パーソナルコンピュータで表計算ソフトを用いて入力し、これを集計した。この集計の際には、江戸時

代I・II期毎に、屋敷地1～3毎に値を求めた。

各破片の記録用紙は、まず記録用紙毎に調査区・グリッド・遺構名・コンテナ番号を枠外に記入し、情報項目としては①計測番号（遺構別）、②産地・材質、③器種、④器形、⑤釉等、⑥使用痕、⑦口縁残存率、⑧時期、⑨屋敷地、⑩備考を設定した。各項目への記入にあたっては、⑩備考を除いたその他すべての欄にあらかじめ番号別に内容を設定しておき、その番号数字のみを記入することにした。各項目の内容は以下の通りである。

#### ①計測番号

本項目の番号は、分類・計測後に対象遺物と情報が照合できるように、各計測破片に色付きシールを貼り、各遺構毎に1から順にシール内に記入した番号がこの数字にあたる。

#### ②産地・材質

本項目は、対象遺物を胎土の特徴、焼成技法などから11類に分けた。

- 1 瀬戸・美濃産陶器…胎土・釉薬などの特徴から瀬戸・美濃地域産と思われる陶器
- 2 瀬戸・美濃産磁器…胎土・釉薬などの特徴から瀬戸・美濃地域産と思われる磁器
- 3 肥前産陶器……………胎土・釉薬などの特徴から肥前周辺で作られたと思われる陶器
- 4 肥前産磁器……………胎土・釉薬などの特徴から肥前周辺で作られたと思われる磁器
- 5 常滑産製品……………胎土の特徴などから常滑周辺で作られたと思われる製品
- 6 土器……………素焼きの製品
- 7 瓦質製品……………胎土・焼成技法の特徴が瓦質の製品
- 8 その他陶器……………1・3以外の産地（備前・信楽等）が推測できる陶器
- 9 その他磁器……………2・4以外の産地（海外・関西等）が推測できる磁器
- 10 産地不明陶器……………産地が特定できない陶器
- 11 産地不明磁器……………産地が特定できない磁器

#### ③器種④器形

陶磁器（1～4・8～11）に関しては、共通する器種・器形の分類項目に当てはめ、常滑産製品（5）・土器（6）・瓦質製品（7）に関しては、個別の器種・器形分類項目を設定した。なお、各名称については、俗称をそのまま使用したもの、本分類のため便宜上名付けたものが混在している。これらは適正な名称でないことを自戒しつつ、試案用に使用した。

#### ・陶磁器

- 1 碗…器高対口径の比率が近似し、口径15cm未満のもの
  - 1 天目茶碗…稜をもつ高台脇から直線的に開き、口縁部が屈曲するもの
  - 2 丸碗…腰部が丸みをもつもの

- 3 腰折碗…腰部が屈曲するもの
  - 4 平碗…腰部をほとんどもたないもの
  - 5 広東碗…巾広でやや高めの高台から、口縁部にかけて直線的に開くもの
  - 6 仏飯具…高杯状のもの
  - 7 小型碗…口径が8.5cm未満の碗
  - 8 その他…1～7に該当しないもの
- 2 皿…器高に比して口径の方がかなり大きく、口径15cm未満のもの
    - 1 丸皿…腰部が丸みをもつもの
    - 2 腰折皿…腰部が屈曲するもの
    - 3 非円形皿…有高台で、平面形態が円形でないもの
    - 4 灯さん…内面に受部を有するもの
    - 5 無高台皿…高台をもたないもの
    - 6 小型皿…口径5cm未満のもの
    - 7 その他…1～6に該当しないもの
- 3 鉢…形態的には碗・皿に近似し、口径15cm以上のもの（特殊・小型品除く）
    - 1 丸鉢…腰部が丸みをもつもの
    - 2 平鉢…腰部をほとんどもたないもの
    - 3 播鉢…内面に摺目を有するもの
    - 4 筒形鉢…体部が直立し、平面形態が円形のもの
    - 5 びん水入れ…体部が直立し、平面形態が楕円形のもの
    - 6 腰折鉢…腰部が屈曲するもの
    - 7 植木鉢…製作時に底部穿孔が行われたもの
    - 8 大型皿…口径が15cm以上の皿
    - 9 小型鉢…餌鉢などの小型製品
    - 10 その他…1～9に該当しないもの
- 4 壺・瓶…断面形態が袋状を呈するもの
    - 1 筒形壺…体部の径が大きく変化しないもの
    - 2 肩壺…最大径が体部上方にあるもの
    - 3 口壺…口径が最大径となるもの
    - 4 小型壺…小型の壺
    - 5 花瓶…ラッパ状口縁で、頸部に双耳状の飾りを有するもの
    - 6 土瓶類…平面形において注口の延長線上に吊り手を2つ有するか、注口からは左回転90°の位置に把手を有するもの
    - 7 汁つぎ…平面形において注口の延長に環状把手を有するもの
    - 8 徳利…全体の形状が細長く、頸部の細いもの
    - 9 小型徳利…8の小型製品

- 10油壺…頸部が細く体部が算盤玉形を呈するもの
- 11その他…1～10に該当しないもの
- 7 その他…1～4に該当しないもの
  - 1 筒形…口縁部から体部にかけて断面形態が筒形を呈するもの
  - 2 灰落とし…体部が底部から大きく屈曲せずにそのまますぼむもの
  - 3 ひしゃく…柄の連結部を有する筒形のもの
  - 4 ひょうそく類…内側に極端に大きな受け台か灯心立てを有するもの
  - 5 燭台…蠟燭立てをもつか装着できるもの
  - 6 盤…口径に比して器高が極端に低く、断面形態が直線的に開かないもの
  - 7 火鉢…体部の断面形態が丸みを帯び、口縁部が内彎し内面が全面施釉されないもの
  - 8 行平…丸形の鉢に注口と把手を有するもの
  - 9 鍋…断面形態が鉢形を呈し、外面が全面施釉されない吊り手を有するもの
  - 10 蓋…陶磁器製の蓋
  - 11 その他…上記のいずれにも該当しないもの

・常滑産製品

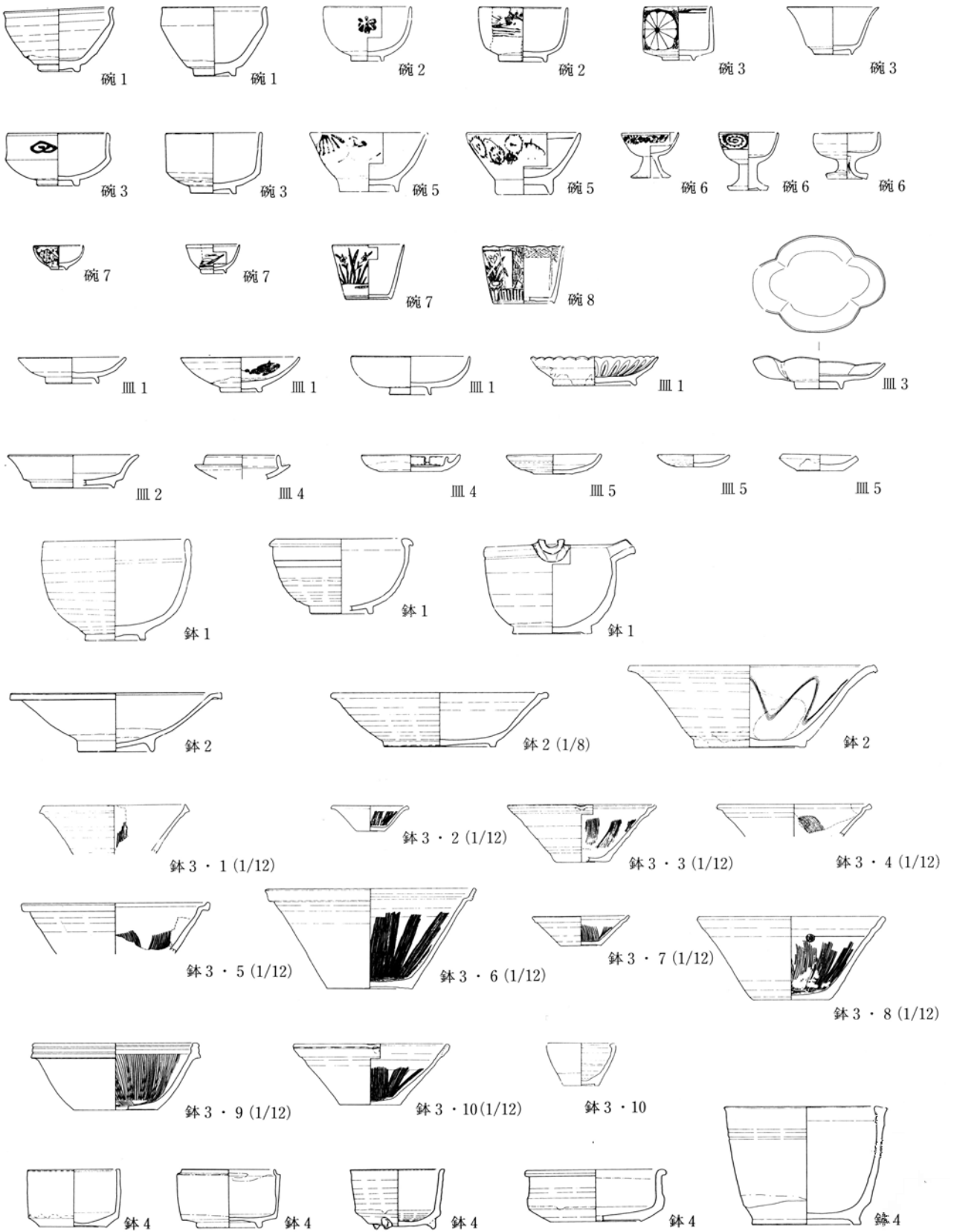
- 6 甕…口径が広く、ほとんどくびれない頸部を有するかこれに近似するもの
- 7 その他…甕以外の常滑産製品を一括する

・土器

- 1 皿…浅い容器を一括する
  - 1 ロクロ成形
  - 2 非ロクロ成形
- 5 鍋・釜…火にかけられる器壁の薄い大型製品を一括する
  - 1 羽釜…体部上方に鑊が設けられたもの
  - 2 釜…壺形で吊り手・三足などを有するもの
  - 3 焙烙・鍋…鉢形のもの

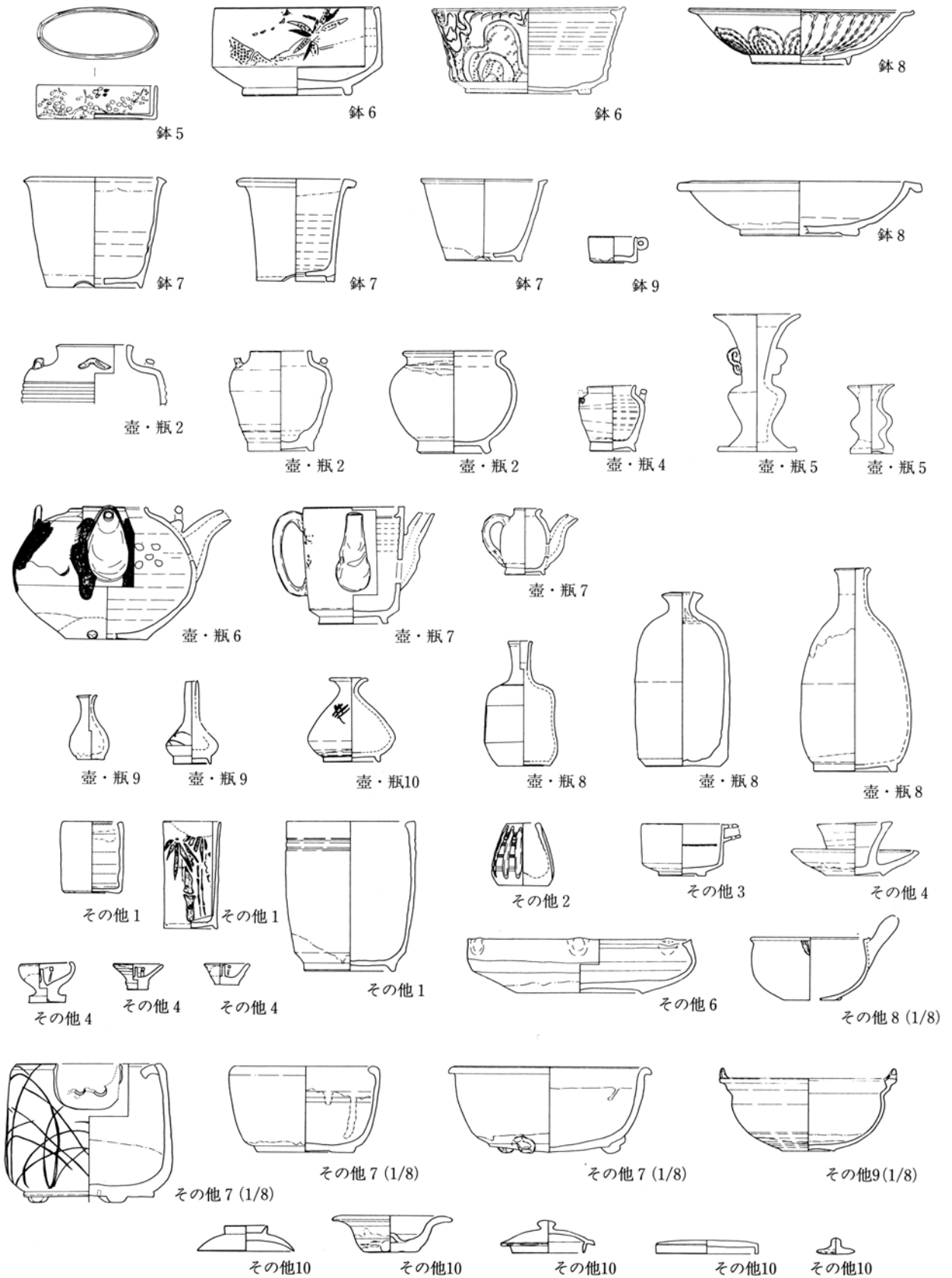
※本来、焙烙・鍋は使用目的が別（炒る・煮る）であるが、いずれも器壁が極端に薄いため、口縁部片は大半が小破片であった。こうした遺存度の低いものは、器形判断が難しく使用目的も鍋が兼用した可能性も考慮し、本誌案では一括した。

- 7 その他…1・5・8に該当しないもの
  - 1 その他土製品
  - 2 蓋
- 8 焼塩壺…コップ形で蓋を伴うもの
  - 1 壺
  - 2 蓋



第112図 江戸時代主要遺物分類概念図① (原則として1/6)

第V章 補論



第113図 江戸時代主要遺物分類概念図② (原則として1/6)



・瓦質製品

- 5 鍋…断面形態が鉢形を呈し、吊り手を有するもの
- 7 その他…5以外のもの

⑤釉等

江戸時代の陶磁器は、器種だけでなく釉薬も多様化する。この項目は遺物の主体となる釉薬等を示し、掛け分けの場合は複数記入した。さらに、存在するものをすべて項目化することは不可能と判断し、代表名を設定しこのもとに統合した。したがって代表名と内容は、必ずしも一致しない。

- 1 灰釉など…灰釉・透明釉・黄釉・白釉・長石釉等
- 2 鉄釉など…鉄釉・鉄錆釉・鉛釉・柿釉等
- 3 染付…呉須による施文に透明釉を施したもの
- 4 銅緑釉など…銅緑釉・上野釉等
- 5 無釉…釉薬を施さないもの（常滑産製品除く）
- 6 青磁…磁器で、胎土・釉薬・焼成温度などにより緑色系の発色を示すもの
- 7 白磁…磁器で、素地に透明釉のみ施されたもの（染付除く）
- 8 その他…1～7・9・10に該当しないもの
- 9 真焼…常滑産製品の中で堅緻に焼き締まり暗赤褐色の胎土をもつもの
- 10 赤物…常滑産製品の中で9に比して焼きが甘く淡赤褐色の胎土をもつもの

⑥使用痕

この項目では14例の使用痕を取り上げる。

- 1 ガラス継ぎ…割れ口に鉛ガラスで焼き継いだ痕跡が認められるもの
- 2 口欠け…口縁端部に敲打痕や磨減が認められるもの
- 3 穿孔…焼成後に孔を穿っているもの
- 4 磨減…器面が擦れているもの
- 5 焦げ…内容物などが焦げ付いているもの
- 6 スス付着…器面にススが付着するもので、火の利用が考えられるもの
- 7 タール付着…口縁部付近に黒色・褐色の油状物が付着するもの
- 8 鋳物付着…溶解した金属等が付着するもの
- 9 墨書…墨を用いて筆で文字等が記されたもの
- 10 刻書…刻み記されたもの
- 11 漆継ぎ…割れ口に漆で接合した痕跡が認められるもの
- 12 朱等付着…赤色付着物が認められるもの
- 13 漆塗り…漆が塗布されたもの
- 14 その他の付着…付着物で上記に該当しないもの

## ⑦口縁残存率

口縁部残存率を12分の1単位で計測した数値で、12分の1以下を切り上げて算出しており、 $0/12 \sim 1/12$ を1とし、 $11/12$ より多く残存しているものは12として記入した。したがって、同一種の残存率項目の合計を12で割れば、概ねの個体数を算定できることになる。しかしこの数値は同一個体の合計数とはなり得ないため、表記する数値はすべて12分割残存率の合計とする。

## ⑧時期

本調査区の江戸時代遺構・遺物は、2時期に大別したため、江戸時代I期（17世紀前半～18世紀中頃）をI、江戸時代II期（18世紀後半～19世紀中頃）をIIとして記入した。

## ⑨屋敷地

本調査区では、江戸時代の武家屋敷地が3区画検出されている。これらを屋敷地1～3としたが、本項目ではこの屋敷番号を記入した。

## ⑩備考

分類・計測項目に該当しない特記事項を記入した。

## C 分類・計測の結果

今回分類・計測したデータ数（口縁部破片数）の総計は、遺構出土遺物に限定したが、10,620点にのぼった。分類・計測の作業期間中は、担当者が全点の確認にあたり、この後にデータの入力、再確認・修正、集計・処理の手順をとった。基礎データの集計は、まず時期別にそれぞれのデータを集め、これを産地・材質、器種、器形ごとに屋敷地別に振り分けた。こうした江戸時代I・II期の表を基礎分類表として、目的に応じた各データ処理を行った。なお、今回の集計では産地・材質、器種などの組成を求めることに主眼をおいたため、この集計にはB—⑤・⑥・⑩の項目については割愛した。

## ①屋敷地別集計

第61表は江戸時代I期、第62・63表は江戸時代II期の器形別残存率計を屋敷地別に振り分けたものである。これらの量を屋敷地別に比較すると、ほとんどの項目について屋敷地1が圧倒的に多く、屋敷地3が相対的に少ないことが見て取れる。この中で江戸時代II期の土器皿については、屋敷地2が1を上回っているが、江戸時代II期のこの区画では内面にまじないの文言が墨で書かれた土製の皿が出土し、器壁の極端に薄い土製の皿が集中して検出されている。屋敷地2において、数量的に土製の皿が他の区画を上回るのは、こうした遺物の検出状況と考え合わせると興味深い。

第V章 補論

			残存率計				
産地・材質	器種名	器形	1	2	3	総計	
瀬戸・美濃陶器	碗	天目茶碗	116	45	13	174	
		丸碗	772	102	12	886	
		腰折碗	56	8	2	66	
		平碗	9	0	0	9	
		仏飯具	7	0	0	7	
		小型碗	113	9	5	127	
		その他	2	0	0	2	
	碗計			1075	164	32	1271
	皿	丸皿	633	51	29	713	
		腰折皿	22	7	0	29	
		非円形皿	162	2	0	164	
		灯さん	11	0	0	11	
		無高台皿	13	0	0	13	
	小型皿	2	0	0	2		
	皿計			843	60	29	932
	鉢	丸鉢	236	12	10	258	
		平鉢	62	6	0	68	
		播鉢	221	29	1	251	
		筒形鉢	102	4	2	108	
		びん水入れ	5	0	0	5	
		腰折鉢	2	0	0	2	
		植木鉢	5	0	0	5	
		大型皿	40	4	2	46	
		小型鉢	14	0	0	14	
		その他	0	3	0	3	
		鉢計			687	58	15
	壺・瓶	筒形壺	8	0	0	8	
肩壺		11	3	0	14		
小型壺		3	0	0	3		
花瓶		12	4	0	16		
土瓶類		8	1	0	9		
汁つぎ		12	0	0	12		
德利		68	0	0	68		
小型德利		0	12	0	12		
油壺		20	0	0	20		
壺・瓶計			142	20	0	162	
その他	筒形	13	1	0	14		
	灰落とし	5	0	0	5		
	ひょうそく類	13	0	0	13		
	盤	6	0	0	6		
	火鉢	9	0	0	9		
	鍋	6	0	0	6		
	蓋	103	8	3	114		
その他計			155	9	3	167	
瀬戸・美濃陶器計			2902	311	79	3292	
瀬戸・美濃磁器	碗	丸碗	4	0	0	4	
	碗計			4	0	0	4
瀬戸・美濃磁器計			4	0	0	4	
肥前陶器	碗	丸碗	35	0	0	35	
		小型碗	5	0	0	5	
	碗計			40	0	0	40
	皿	丸皿	0	2	0	2	
	皿計			0	2	0	2
	鉢	丸鉢	3	0	0	3	
		その他	8	0	0	8	
鉢計			11	0	0	11	
肥前陶器計			51	2	0	53	
肥前磁器	碗	天目茶碗	15	0	0	15	
		丸碗	312	22	7	341	
		腰折碗	17	0	0	17	
		仏飯具	4	0	0	4	
		小型碗	184	15	2	201	
	碗計			532	37	9	578
	皿	丸皿	46	0	0	46	
		非円形皿	1	0	0	1	
	皿計			47	0	0	47
	鉢	丸鉢	2	0	0	2	
		平鉢	1	0	0	1	
		筒形鉢	21	0	0	21	
		大型皿	35	0	0	35	
	皿計			59	0	0	59
	壺・瓶	小型德利	12	0	0	12	
		油壺	12	0	0	12	
	壺・瓶計			24	0	0	24
その他	盤	1	0	0	1		

			残存率計				
産地材質	器種名	器形	1	2	3	総計	
		蓋	8	1	0	9	
		その他計	9	1	0	10	
肥前磁器計			671	38	9	718	
常滑	甕	(空白)	100	2	0	102	
		甕計	100	2	0	102	
	その他	(空白)	93	2	0		
		その他計	93	2	0	95	
常滑計			193	4	0	197	
土器	皿	ロクロ成形	1466	0	0	1466	
		非ロクロ成形	165	0	0	165	
	皿計			1631	0	0	1631
	鍋・釜	釜	24	0	0	24	
		焙烙・鍋	239	0	1	240	
	鍋・釜計			263	0	1	264
	その他	その他	10	0	0	10	
		蓋	1	0	0	1	
	その他計			11	0	0	1
	焼壺壺	壺	壺	169	0	0	169
			蓋	88	0	0	88
焼壺壺・蓋計			257	0	0	257	
土器計			2162	0	1	2163	
瓦質製品	鍋・釜	(空白)	5	0	0	5	
		鍋・釜計	5	0	0	5	
	その他	その他	8	0	0	8	
		その他計	8	0	0	8	
瓦質製品計			13	0	0	13	
その他陶器	碗	丸碗	14	0	1	15	
		腰折碗	5	0	0	5	
	碗計			19	0	1	20
	鉢	大型皿	1	0	0	1	
鉢計			1	0	0	1	
その他陶器計			20	0	1	21	
その他磁器	碗	丸碗	2	4	0	6	
		小型碗	0	2	4	6	
	碗計			2	6	4	12
	鉢	丸鉢	0	2	0	2	
大型皿		0	3	0	3		
鉢計			0	5	0	5	
その他磁器計			2	11	4	17	
不明陶器	碗	丸碗	2	4	1	7	
		腰折碗	14	0	0	14	
	碗計			16	4	1	21
	皿	丸皿	丸皿	6	0	2	8
			腰折皿	1	0	0	1
		非円形皿	0	0	0	0	
	皿計			7	0	2	9
	鉢	筒形鉢	1	0	0	1	
		腰折鉢	6	0	0	6	
	鉢計			7	0	0	7
	壺・瓶	德利	1	0	0	1	
壺・瓶計			1	0	0	1	
その他	蓋	0	0	0	0		
その他計			0	0	0	0	
不明陶器計			31	4	3	38	
不明磁器	碗	丸碗	4	0	0	4	
		小型碗	1	0	0	1	
	碗計			5	0	0	5
	皿	丸皿	1	0	0	1	
非円形皿		1	0	0	1		
皿計			2	0	0	2	
不明磁器計			7	0	0	7	
総計			6056	370	97	6523	

第61表 江戸時代I期屋敷地別集計表

			残存率計			
産地・材質	器種名	器形	1	2	3	総計
瀬戸・美濃陶器	碗	天目茶碗	87	15	14	116
		丸碗	994	260	243	1497
		腰折碗	192	20	22	234
		平碗	12	0	16	28
		広東碗	97	11	3	111
		仏飯具	0	24	0	24
		小型碗	106	79	48	233
		碗計		1488	409	346
	皿	丸皿	895	168	171	1234
		腰折皿	8	3	5	16
		非円形皿	60	17	22	99
		灯さん	119	23	29	171
		無高台皿	85	26	29	140
		小型皿	3	3	0	6
		その他	3	0	0	3
		皿計		1173	240	256
	鉢	丸鉢	350	68	110	528
		平鉢	37	2	5	44
		播鉢	373	67	92	532
		筒形鉢	643	119	147	909
		腰折鉢	59	11	27	97
		植木鉢	105	48	89	242
		大型鉢	46	23	14	83
		小型鉢	161	64	18	243
		その他	2	0	10	12
		鉢計		1776	402	512
	壺・瓶	筒形壺	27	19	33	79
肩壺		55	36	21	112	
口壺		0	3	0	3	
小型壺		10	0	17	27	
花瓶		29	0	0	29	
土瓶類		106	76	44	226	
汁つぎ		87	17	0	104	
徳利		95	37	20	152	
小型徳利		13	1	0	14	
油壺		48	8	0	56	
その他		2	0	0	2	
壺・瓶計			472	197	135	804
その他		筒形	52	8	1	61
	灰落とし	19	0	3	22	
	ひしゃく	10	2	0	12	
	ひょうそく類	154	13	23	190	
	盤	20	2	1	23	
	火鉢	129	7	17	153	
	行平	15	3	17	35	
	鍋	125	105	56	286	
	蓋	914	245	189	1348	
	その他	89	3	14	106	
	その他計		1527	388	321	2236
	—	—	0	1	0	1
	一計		0	1	0	1
瀬戸・美濃陶器計		6436	1637	1570	9643	

			残存率計				
産地・材質	器種名	器形	1	2	3	総計	
瀬戸・美濃磁器	碗	丸碗	125	89	62	276	
		腰折碗	51	0	0	51	
		平碗	0	5	0	5	
		広東碗	43	11	7	61	
		仏飯具	7	17	0	24	
		小型碗	69	17	23	109	
		碗計		295	139	92	526
		皿	丸皿	20	17	24	61
	非円形皿		2	0	9	11	
	灯さん		5	0	0	5	
	無高台皿		0	9	0	9	
	小型皿		5	6	1	12	
	皿計		32	32	34	98	
	鉢	筒形鉢	2	2	0	4	
		腰折鉢	0	0	2	2	
		植木鉢	0	0	2	2	
		大型皿	1	0	1	2	
		その他	0	0	4	4	
	鉢計		3	2	9	14	
	壺・瓶	土瓶類	0	1	0	1	
徳利		0	5	0	5		
小型徳利		12	0	0	12		
壺・瓶計		12	6	0	18		
その他	蓋	30	2	21	53		
	その他	0	0	3	3		
その他計		30	2	24	56		
瀬戸・美濃磁器計		372	181	159	712		
肥前陶器	碗	丸碗	2	8	4	14	
		小型碗	5	0	0	5	
	碗計		7	8	4	19	
	皿	丸皿	8	0	0	8	
	皿計		8	0	0	8	
	鉢	丸鉢	3	2	0	5	
		大型皿	0	1	1	2	
	鉢計		3	3	1	7	
肥前陶器計		18	11	5	34		
肥前磁器	碗	天目茶碗	4	0	0	4	
		丸碗	230	167	94	491	
		腰折碗	87	16	4	107	
		広東碗	4	0	2	6	
		仏飯具	9	38	3	50	
		小型碗	141	81	63	285	
		その他	4	7	1	12	
		碗計		479	309	167	955
	皿	丸皿	107	34	29	170	
		腰折皿	7	0	0	7	
		非円形皿	13	1	4	18	
		無高台皿	0	0	1	1	
		小型皿	7	18	0	25	
その他		0	1	0	1		
皿計		134	54	34	222		

第62表 江戸時代瓦類壓敷地別集計表①

第V章 補論

			残存率計			
産地・材質	器種名	器形	1	2	3	総計
	鉢	丸鉢	22	0	5	27
		平鉢	0	0	4	4
		筒形鉢	40	9	7	56
		大型皿	22	5	3	30
	鉢計		84	14	19	117
	壺・瓶	小型德利	0	0	7	7
		油壺	12	0	0	12
	壺・瓶計		12	0	7	19
	その他	筒形	15	0	0	15
		盤	0	0	1	1
蓋		61	23	20	104	
その他		1	0	1	2	
その他計		77	23	22	122	
肥前磁器計			786	400	249	1435
常滑	鍋・釜		1	0	0	1
	鍋・釜計		1	0	0	1
	甕		249	45	30	324
	甕計		249	45	30	324
	その他		182	53	72	307
	その他計		182	53	72	307
常滑計			432	98	102	632
土器	碗	丸碗	0	0	6	6
	碗計		0	0	6	6
	皿	ロクロ成形	867	1099	186	2152
		非ロクロ成形	33	51	0	84
	皿計		900	1150	186	2236
	鍋・釜	羽釜	1	1	0	2
		釜	12	4	2	18
		焙烙・鍋	477	84	53	614
	鍋・釜計		490	89	55	634
	その他	その他	72	5	63	140
		蓋	16	0	0	16
	その他計		88	5	63	156
	焼塩壺	壺	99	83	41	223
		蓋	104	196	44	344
焼塩壺・蓋計		203	279	85	567	
土器計			1681	1523	395	3599
瓦器	鍋・釜		0	1	0	1
	鍋・釜計		0	1	0	1
	その他	瓦燈	8	0	0	8
		その他	4	1	0	5
	その他計		12	1	0	13
瓦器計			12	2	0	14
その他陶器	碗	丸碗	0	1	8	9
		腰折碗	14	0	0	14
		小型碗	1	0	0	1
	碗計		15	1	8	24
	皿	腰打皿	10	0	0	10
	皿計		10	0	0	10
	鉢	播鉢	2	3	0	5
	鉢計		2	3	0	5
	その他	筒形	0	1	0	1
		蓋	11	0	0	11
その他計		11	1	0	12	
その他陶器計			38	5	8	51

			残存率計			
産地・材質	器種名	器形	1	2	3	総計
その他磁器	碗	丸碗	4	9	2	15
		腰折碗	12	0	0	12
		小型碗	0	0	3	3
	碗計		16	9	5	30
その他磁器計			16	9	5	30
不明陶器	碗	丸碗	44	7	5	56
		腰折碗	0	0	3	3
	碗計		44	7	8	59
	皿	丸皿	50	2	2	54
		非円形皿	0	0	0	0
	皿計		50	2	2	54
	鉢	丸鉢	0	1	0	1
		播鉢	10	2	0	12
		筒形鉢	0	10	1	11
		びん水入れ	11	0	0	11
		植木鉢	3	0	0	3
		大型皿	3	1	0	4
	鉢計		27	14	1	42
	壺・瓶	筒形壺	0	2	0	2
肩壺		3	0	0	3	
土瓶類		23	4	9	36	
壺・瓶計		26	6	9	41	
その他	筒形	12	0	0	12	
	盤	0	1	0	1	
	行平	8	0	0	8	
	鍋	6	0	0	6	
	蓋	12	11	36	59	
	その他	6	0	5	11	
その他計		44	12	41	97	
—	—	1	1	0	2	
一計		1	1	0	2	
不明陶器計			192	42	61	295
不明磁器	碗	丸碗	21	10	13	44
		腰折碗	0	1	0	1
		広東碗	5	0	0	5
		仏飯具	0	11	0	11
		小型碗	5	17	21	43
	碗計		31	39	34	104
	皿	丸皿	7	5	0	12
		非円形皿	12	0	0	12
	皿計		19	5	0	24
	鉢	平鉢	3	0	0	3
大型皿		1	1	0	2	
鉢計		4	1	0	5	
その他	蓋	16	0	1	17	
その他計		16	0	1	17	
不明磁器計			70	45	35	150
総計			10053	3953	2589	16595

第63表 江戸時代II期屋敷地別集計表②

## ②時期別器種集計

第64表は第61～63表をさらにまとめ、各器種別の残存率集計を、江戸時代Ⅰ・Ⅱ期別に振り分けたものとその総計である。全体的に時期の総計を比較してみると、江戸時代Ⅰ期に比べて、Ⅱ期の遺物量の方がかなり多い。調査した場所による偏りも考慮しなければならないが、江戸時代Ⅰ期は17世紀前半～18世紀中頃（100年強）、Ⅱ期は18世紀後半～19世紀中頃（100年弱）という期間的な比較からすると、Ⅱ期の方に出土量が偏る傾向がみられる。こうした比率の中で特異な傾向をみせるものは、肥前の陶器、土器の皿・焼塩壺身、瓦質製品である。肥前陶器は、Ⅰ期に比べⅡ期になると減少する唯一の産地・材質である。土器皿は焼塩壺身・瓦質製品とともに、Ⅰ・Ⅱ期間に大きな数値の隔たりがなく、全体的な比率とは異なった傾向をみせる。瀬戸・美濃産磁器、不明磁器については、Ⅱ期の方が数値的に大きい点では共通するが、この比率が極端な傾向をみせる。本来瀬戸・美濃産の磁器は、Ⅰ期の段階では生産体制がなく存在しないものであるため、当然の傾向である。しかし、Ⅰ期に計測されたわずかな残存率は、混入品の可能性を自戒しつつ、計測データとしてそのまま掲載した。産地が不明である磁器に関しては、同一の傾向を示す瀬戸・美濃産磁器の可能性も有するが、この時期には肥前、瀬戸・美濃といった地域以外にも生産地が出現するため、数値にはこの時期の生産体制が反映している可能性も考えられる。以上のような数値表を元に、目的別にグラフ化を行う。

## ③産地・材質組成グラフ

第115～118図は、産地・材質、器種の組成をグラフ化したものである。数値が極端に小さいものや、目的にそぐわないもの、自明の理となるものなどは非表示・割愛した。

第115図は、本調査地点の江戸時代遺物を総計及び各時期別に、産地・材質組成としてグラフ化したものである。全体的には、瀬戸・美濃産の陶器が圧倒的量を示し、地場産業の影響が色濃く反映されている。時期別で比較すると、大きな変化を示すのは瀬戸・美濃産陶器、土器である。瀬戸・美濃産陶器は、Ⅰ期に比較するとⅡ期では8%増える。逆に土器では、Ⅰ期に比較するとⅡ期では12%減る。用途の差などもあるため一概には判断できないが、Ⅱ期になると瀬戸・美濃産製品は併せて全体の64%を占めるようになり、その他の産地・材質は大きな変化がなく、土器がかなり減少傾向を示すのは、特定の用途品における材質変化の可能性がうかがえる。

## ④器種組成グラフ

第116図は、江戸時代遺物を総計及び各時期別に、器種組成としてグラフ化したものである。注目されるのは江戸時代Ⅰ・Ⅱ期で、器種の組成がかなり異なる点である。碗、鉢に関しては、増減はみられるものの極端な変化ではない。しかし、皿に関してはⅠ期に比べるとⅡ期では16%減少しており、皿の占める組成に大きな変化が認められる。さらに各時期の全体的な組成を碗・皿の占める割合で比較してみると、Ⅰ期では碗・皿併せて全体の

産地・材質	器種	江戸時代I期残存率計	江戸時代II期残存率計	江戸時代残存率総計
瀬戸・美濃陶器	碗	1271	2243	3514
	皿	932	1669	2601
	鉢	760	2690	3450
	壺・瓶	162	804	966
	その他	167	2236	2403
瀬戸・美濃陶器計		3292	9643	12935
瀬戸・美濃磁器	碗	4	526	530
	皿	0	98	98
	鉢	0	14	14
	壺・瓶	0	18	18
	その他	0	56	56
瀬戸・美濃磁器計		4	712	716
肥前陶器	碗	40	19	59
	皿	2	8	10
	鉢	11	7	18
肥前陶器計		53	34	87
肥前磁器	碗	578	955	1533
	皿	47	222	269
	鉢	59	117	176
	壺・瓶	24	19	43
	その他	10	122	132
肥前磁器計		718	1435	2153
常滑	甕	102	324	426
	その他	95	307	402
常滑計		197	632	829
土器	碗	0	6	6
	皿	1631	2236	3867
	鍋・釜	264	634	898
	その他	11	156	167
	焼塩壺身	169	223	392
土器計		2163	3599	5762
瓦質製品	鍋・釜	5	1	6
	その他	8	13	21
瓦質製品計		13	14	27
その他陶器	碗	20	24	44
	皿	0	10	10
	鉢	1	5	6
	その他	0	12	12
その他陶器計		21	51	72
その他磁器	碗	12	30	42
	鉢	5	0	5
その他磁器計		17	30	47
不明陶器	碗	21	59	80
	皿	9	54	63
	鉢	7	42	49
	壺・瓶	1	41	42
	その他	0	97	97
不明陶器計		38	295	333
不明磁器	碗	5	104	109
	皿	2	24	26
	鉢	0	5	5
	その他	0	17	17
不明磁器計		7	157	157
総計		6523	16595	23118

第64表 器種別残存率集計表

73%を占めているのに対して、II期では51%に減少する。そして、その他としてまとめた器形的に碗・皿、鉢、壺・瓶などに該当しない器種が、I期ではわずか5%であるのに対して、II期では19%を占める。こうした組成の変化は、江戸時代II期に至った時、I期に比べて器種における多様化がかなり進んだことをうかがわせる。

#### ⑤主要産地・材質別器種組成グラフ

第116図は、江戸時代遺物を代表的な産地・質別に、器種組成としてグラフ化したものである。瀬戸・美濃産の陶器では、各器種が極端に偏ることのない組成を示すが、磁器においては、肥前産、瀬戸・美濃産ともに碗が70%以上を占める。調査地点における趣味・嗜好からか、生産体制によるものか、または供給体制によるものか、本調査地点では磁器を使用する際に、器種として碗がもっとも多く用いられたことが見て取れる。また土器では、皿の占める割合が70%を超えており、鍋・釜と併せると90%以上を占め、土器の器種の上でこの2種が代表的な組成を示すことが見て取れる。なお、常滑産製品は器種がある程度限定され、肥前産陶器や瓦質製品、その他の産地や産地不明の陶磁器は、データ数が少ないため割愛した。

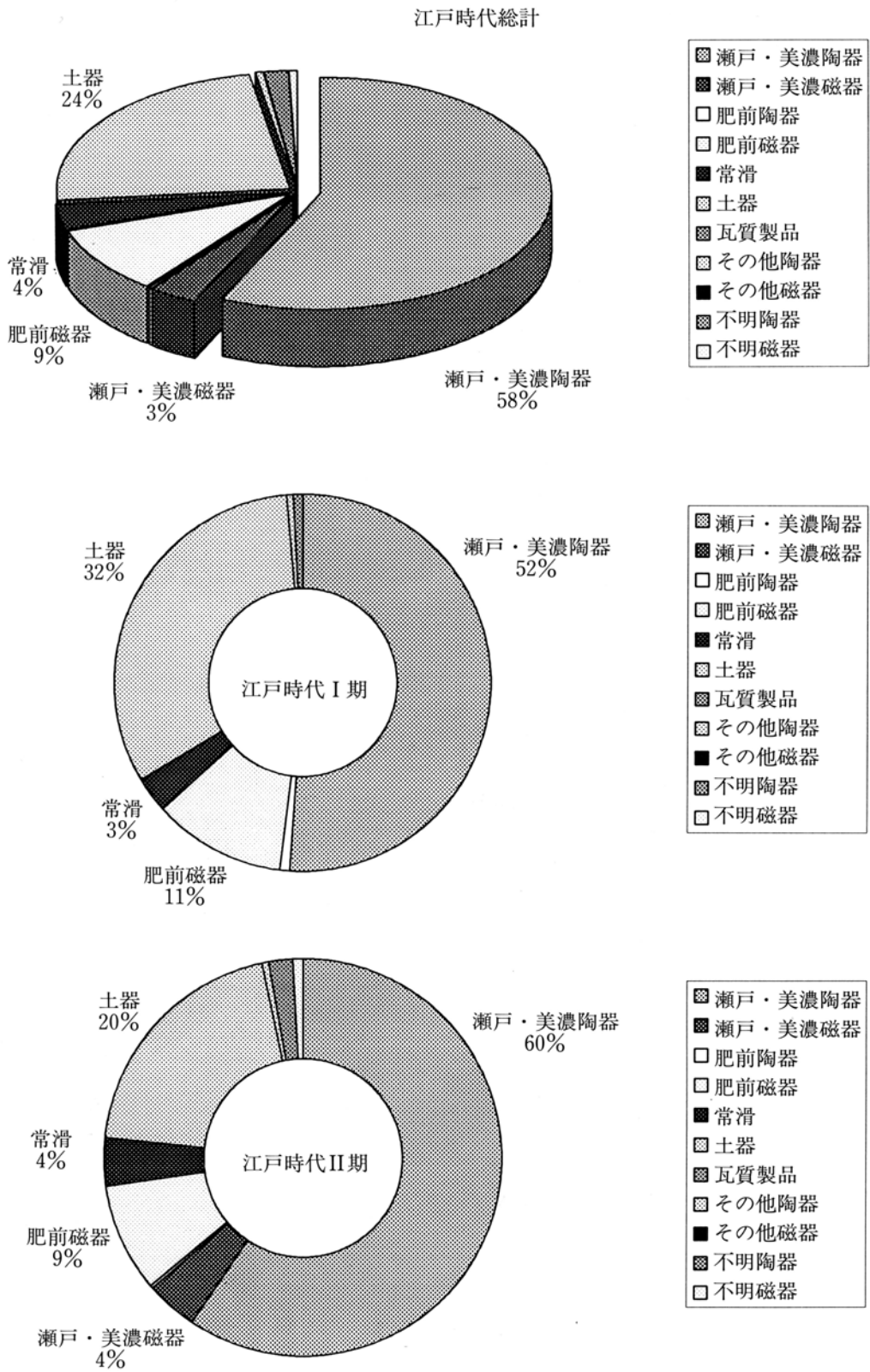
#### ⑥主要器種別産地・材質組成グラフ

第117図は、江戸時代遺物を主要な器種別に、産地・材質組成としてグラフ化したものである。瀬戸・美濃産の陶器は地場産業であり、全体的にどの器種においても占める割合が圧倒的に多い。そうした傾向の中で肥前産の磁器は、碗に限っては30%近くを占める。肥前磁器は、出土総量の中で10%前後の組成しか占めないが、碗という器種に関しては肥前産の磁器がより求められたことがうかがえる。

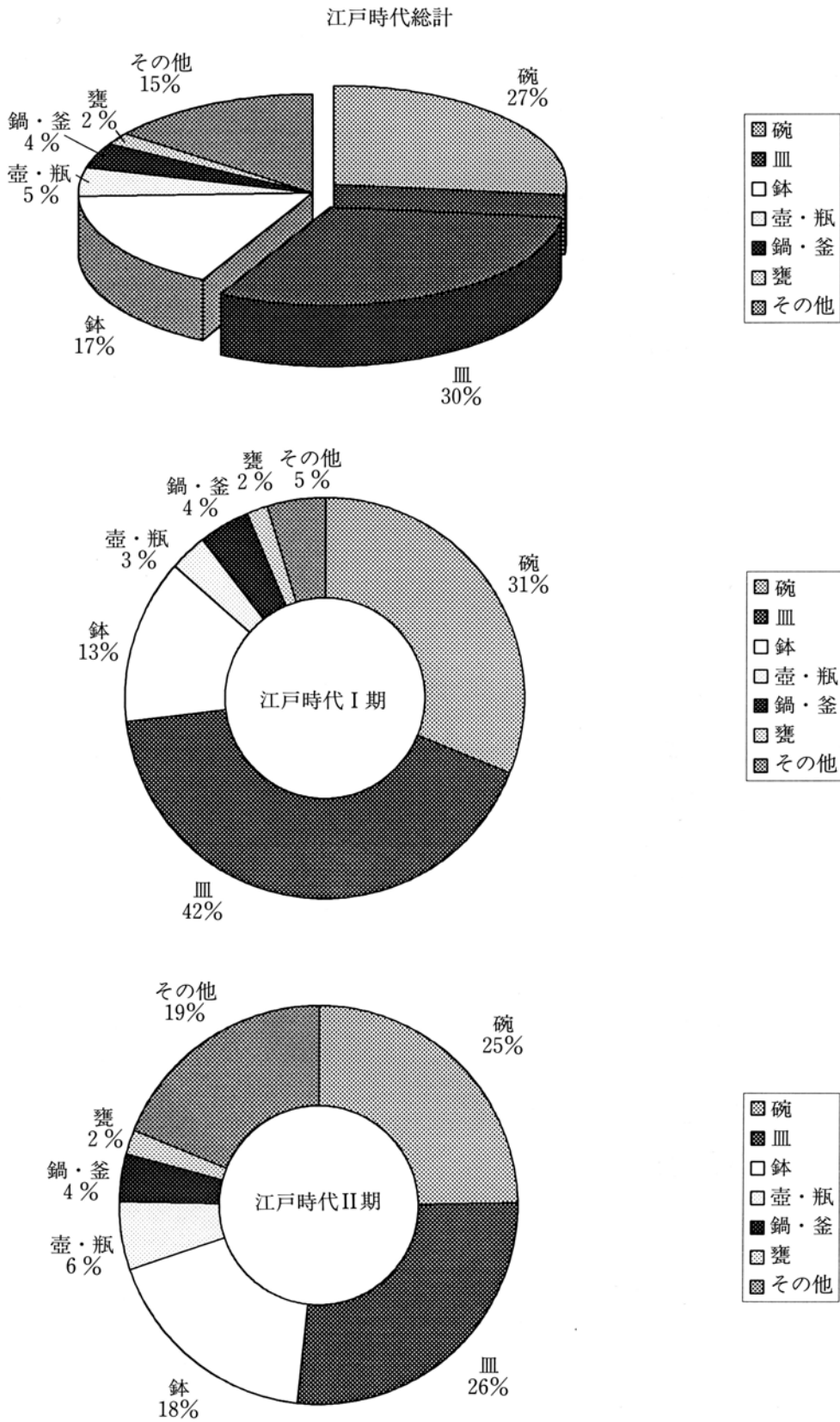
ここでは産地・材質、器種について、いくつかの視点で集計し、各組成を求めた。その中で各組成に、特異な傾向を示したのは、土器または土器皿である。ここでその傾向について若干の考察を行う。

土器全体の出土量を産地・材質別組成で見ると、I期に比べてII期ではかなり減少する傾向が認められる。そして、器種組成においては、皿がI期に比してII期でかなり減少する。総出土量における土器皿の時期別変化では、今回出土している他の産地・材質、器種に倣えば、I期に比べてII期で大きく増えるはずが、土器皿には数値的に大きな差が認められない。以上のような傾向から考えると、今回の調査地点では土器皿の使用頻度が、I期に比べてII期でかなり低くなったと考えられる。このことは、土器皿の主要な用途の一つとして考えられてきた、灯明皿としての機能を考え併せると興味深い。

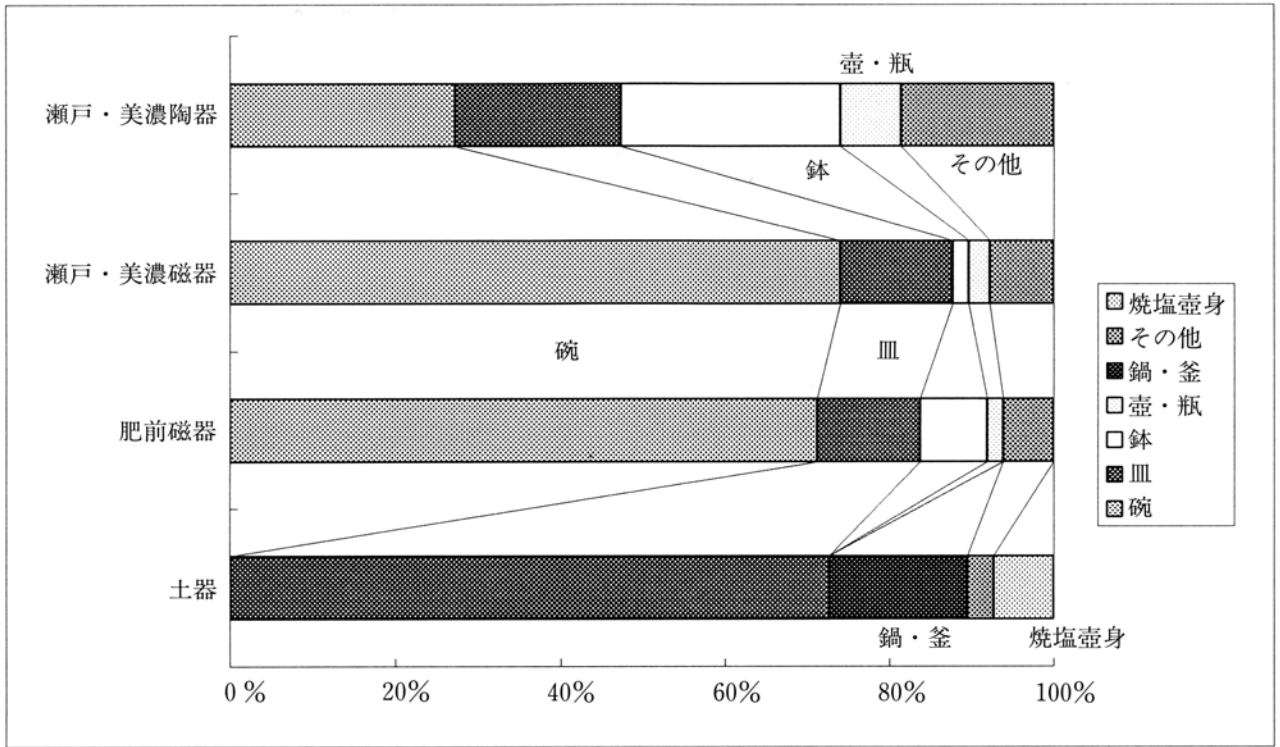
今回の調査地点で、II期になると土器皿の使用頻度がかなり減ったことは、各組成を求めた結果が示している。土器皿の主要用途の一つが灯明具であったとすれば、必然的に土製の灯明皿の使用頻度が、II期に至ると減少した可能性が考えられる。ここで考えあわせ



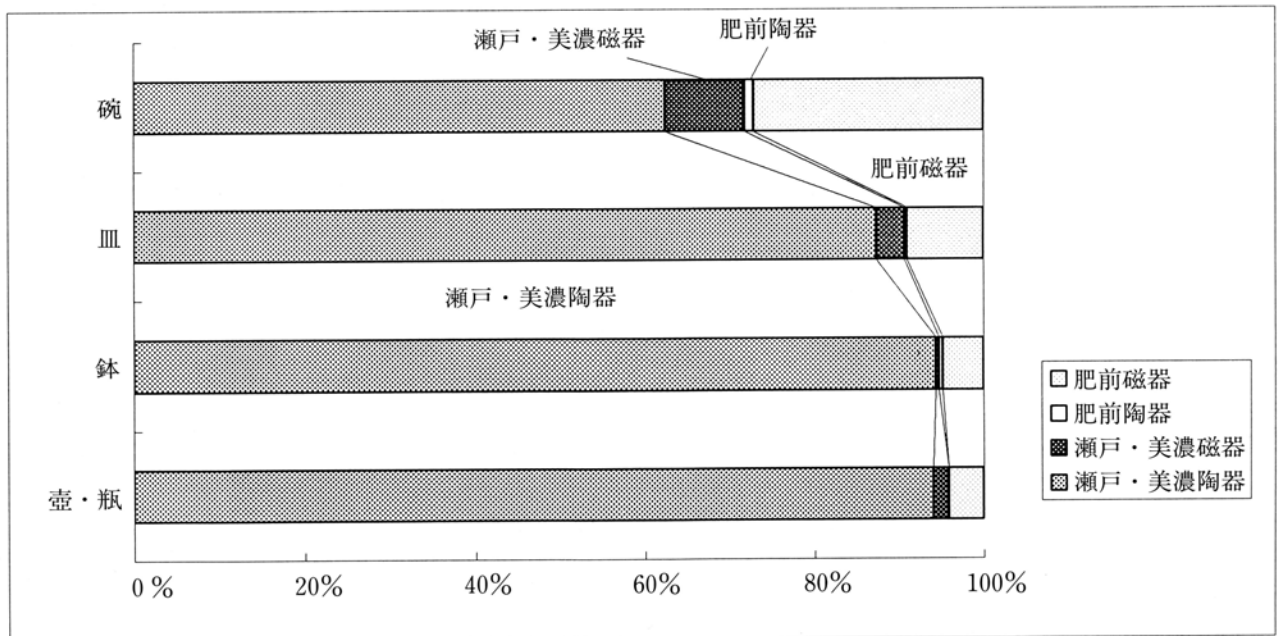
第115図 産地・材質組成グラフ



第116図 器種組成グラフ



第117図 主要産地・材質別器種組成グラフ



第118図 主要器種別産地・材質組成グラフ

たいのは、陶器の灯明皿・灯明皿受台・灯明皿受（灯さん）・ひょうそくなどの灯明具は、瀬戸・美濃産陶器の生産地における編年では、いずれも生産の開始が18世紀中頃か後半に位置付けられていることである。この時期は、本調査地点の江戸時代I期末かII期初頭にあたる。陶器の灯明具は土器皿に比べて、材質面から考えると継続使用の期間が比較的長期であったことが推察できる。短期使用型であった土製の皿は、江戸時代II期に至り、瀬戸・美濃地域で生産された陶器灯明具が普及することによって、灯明具としての機能が徐々に求められなくなっていったのではないだろうか。こうした推察は、陶器皿における使用痕（タール付着等）の時期別変化、燭台など他の灯明具の組成や蠟燭の使用頻度などを考慮した上で、さらに考えて行かねばならないであろう。しかし、今回行った分類・計測の結果、土器または土器皿の示した特異な傾向は、現時点ではその減少理由を陶器の灯明具普及に求めたい。

#### 4 おわりに

調査の結果得られたデータを、遺構・遺物別に視点を定め、その位置づけを試みた。その中で特に今回の分類・計測作業は、理想として客観的なものを心がけたにもかかわらず、主として分類において、主観的な部分が入ってしまったことは否めない。分類において、まず産地・材質別の組成を求めることに主眼をおいたのは、この項目が精度を上げる努力をすれば、より客観性をもたせた組成が求められると判断したからである。器種・器形分類については、器形に用途を加味したため不統一で、複雑化したことを反省している。結果として示したデータは、あくまでも今回の調査地点における一現象面として捉える必要があり、この結果から当該期の総合的な判断を下すつもりはない。しかし、現時点で理想的な分類方法が提示できない以上、主観的な部分も含めてこうした分類・計測・統計処理を各調査担当者が行い、その積み重ねの中に共通項を見出して、それぞれ比較検討して行くことが必要と思われる。

最後に、今回の分類・計測作業では、産地・時期の判断において瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏及び、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に多くのご教示を得、本センターの古橋佳子がデータ入力に労をとり、分類方法では同・鈴木正貴、統計処理では同・原田 幹に助言を得た。記して感謝する次第である。

#### 参考文献

- 藤澤良祐 1986～1989 『研究紀要V～VIII』 瀬戸市歴史民俗資料館  
 田口昭二 1993 『美濃窯の焼物』 多治見市教育委員会  
 大橋康二 1993 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社  
 鈴木正貴 1994 『清洲城下町遺跡IV』 働愛知県埋蔵文化財センター  
 遠藤才文 1994 『名古屋城三の丸遺跡IV』 働愛知県埋蔵文化財センター

# 図版

遺物写真は原則として1/3、別縮小は（ ）で表示

☆印は県埋文・○印は市教委調査地点

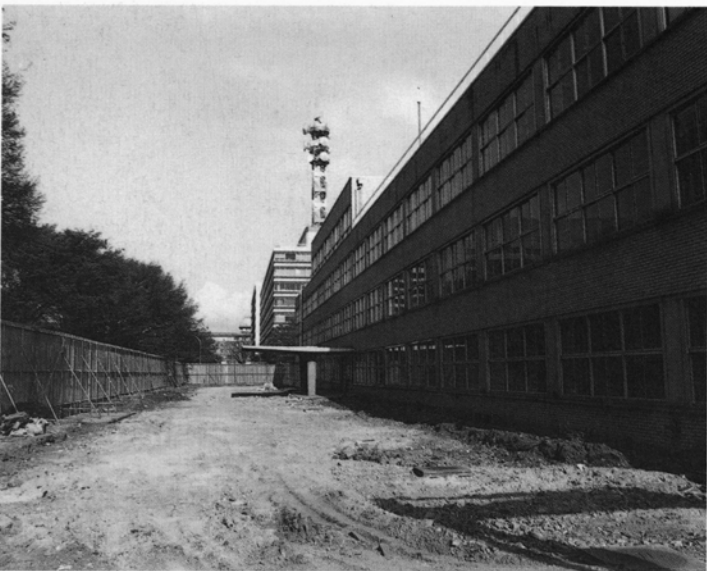




①表土剥ぎ風景



④A区上層北東隅 (南より)



②A区調査前風景 (西より)

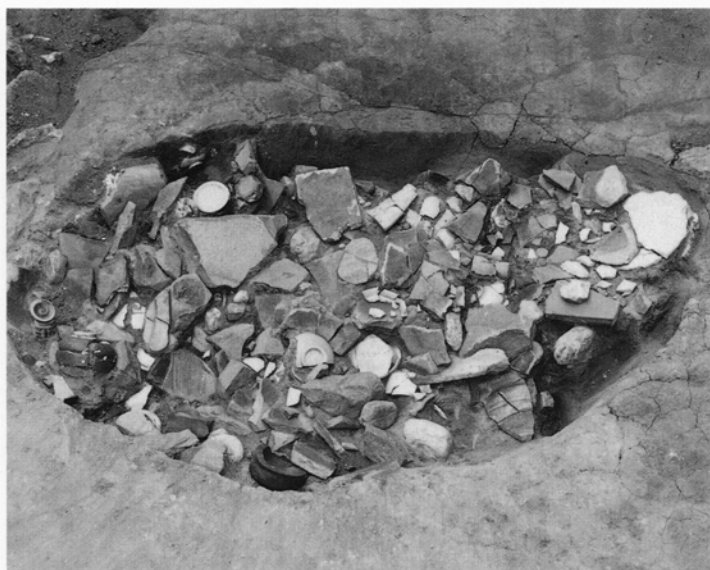


③B区調査前風景 (西より)

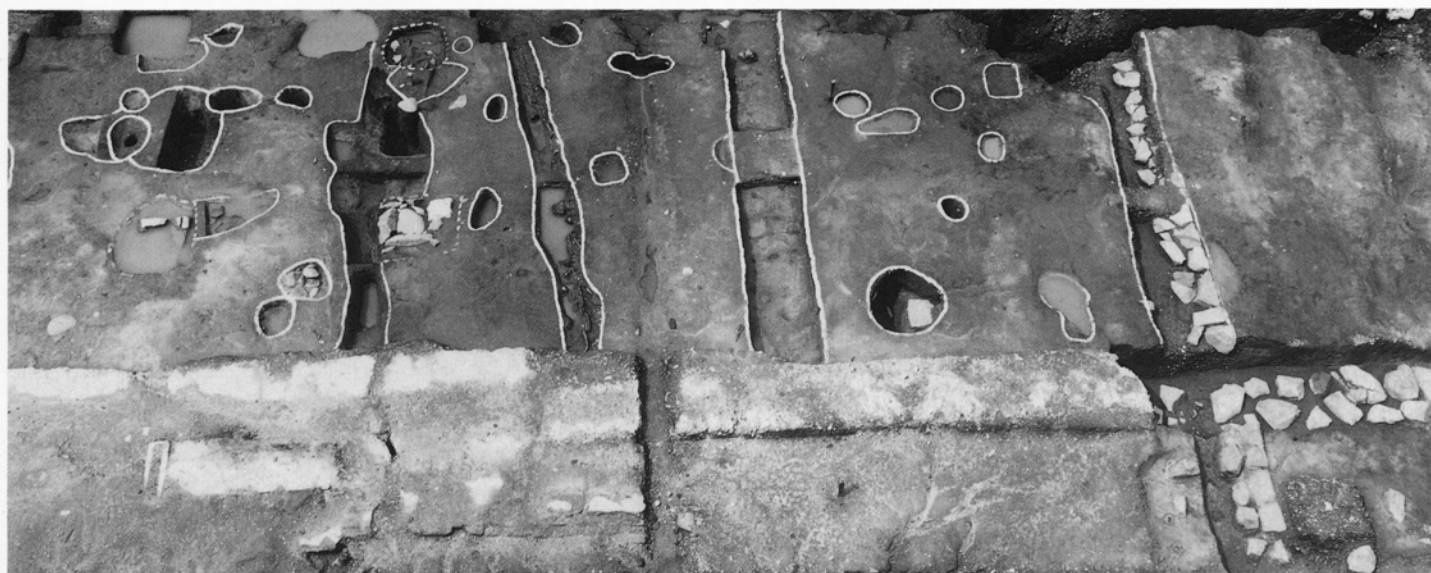
⑤A区上層全景 (西より)



① A区SK165セクション (南西より)



② A区SK201遺物出土状況 (東より)



③ A区上層溝群 (南より)



④ A区SD04セクション (南より)



⑤ A区SX11 (南より)



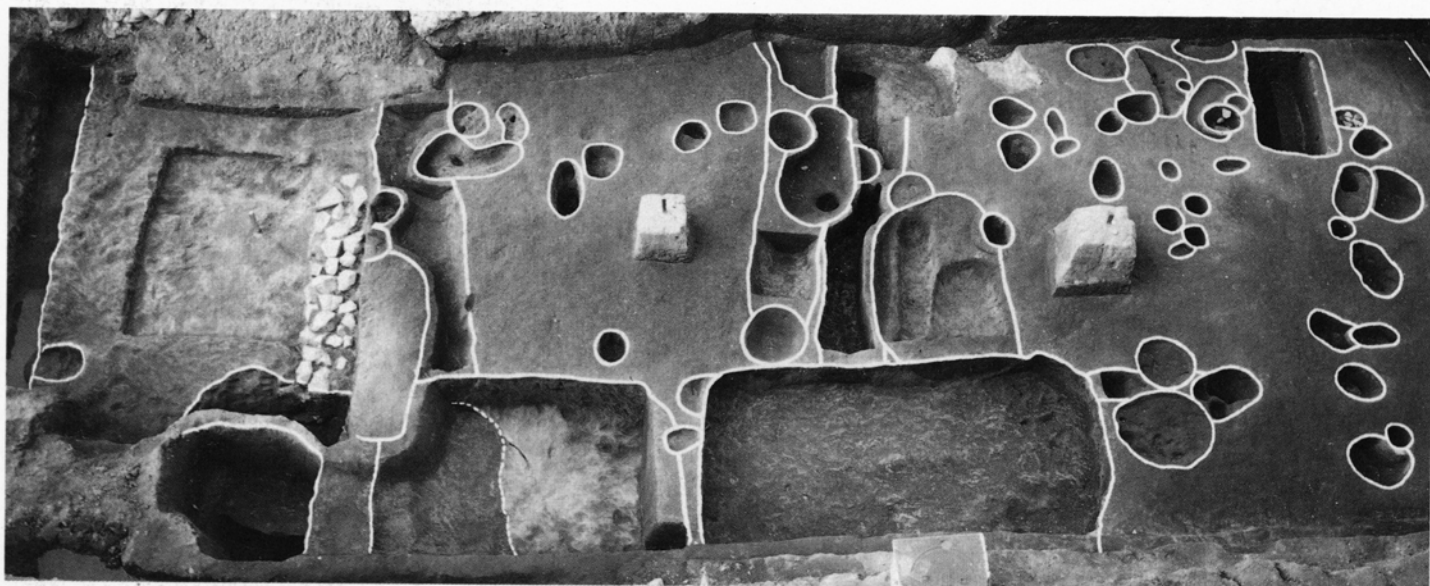
① A区下層全景 (南西より)



② A区SK 312周辺 (東より)



③ A区SK 313セクション (南より)



④ A区SK 315・316周辺 (南より)



① A区SK313 (南より)



② A区SK315セクション (北より)



③ A区SK316セクション (北より)



④ A区SK458・459 (南西より)



① A区 S D602セクション (南より)



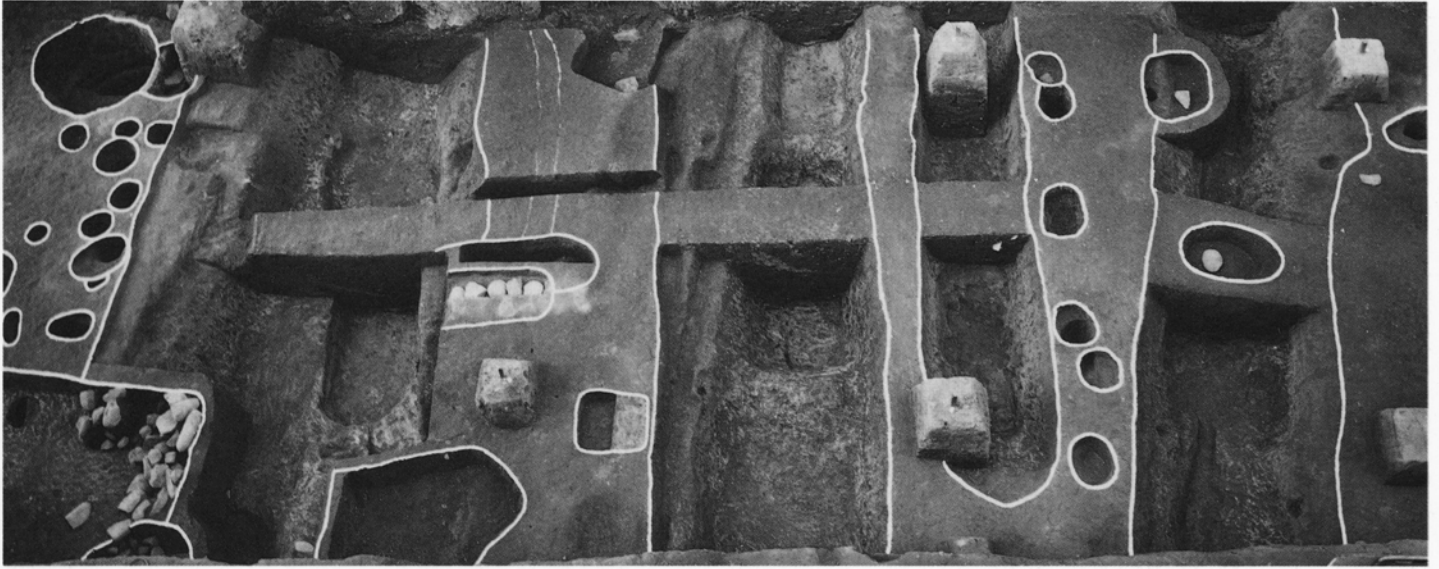
② A区 S D602 (南より)



③ A区 S D603セクション (東より)



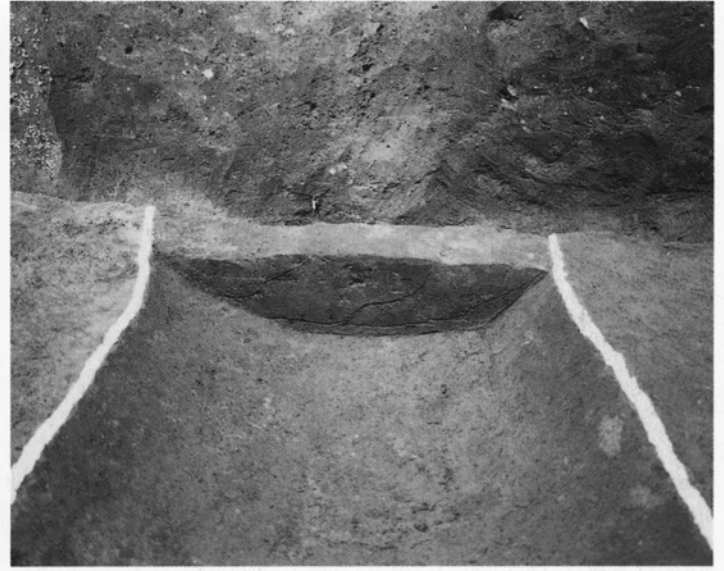
④ A区 S D604セクション (北より)



① A区 S D 308・309・610・611 (南より)



② A区 S D 606セクション (南より)



③ A区 S D 804セクション (南より)



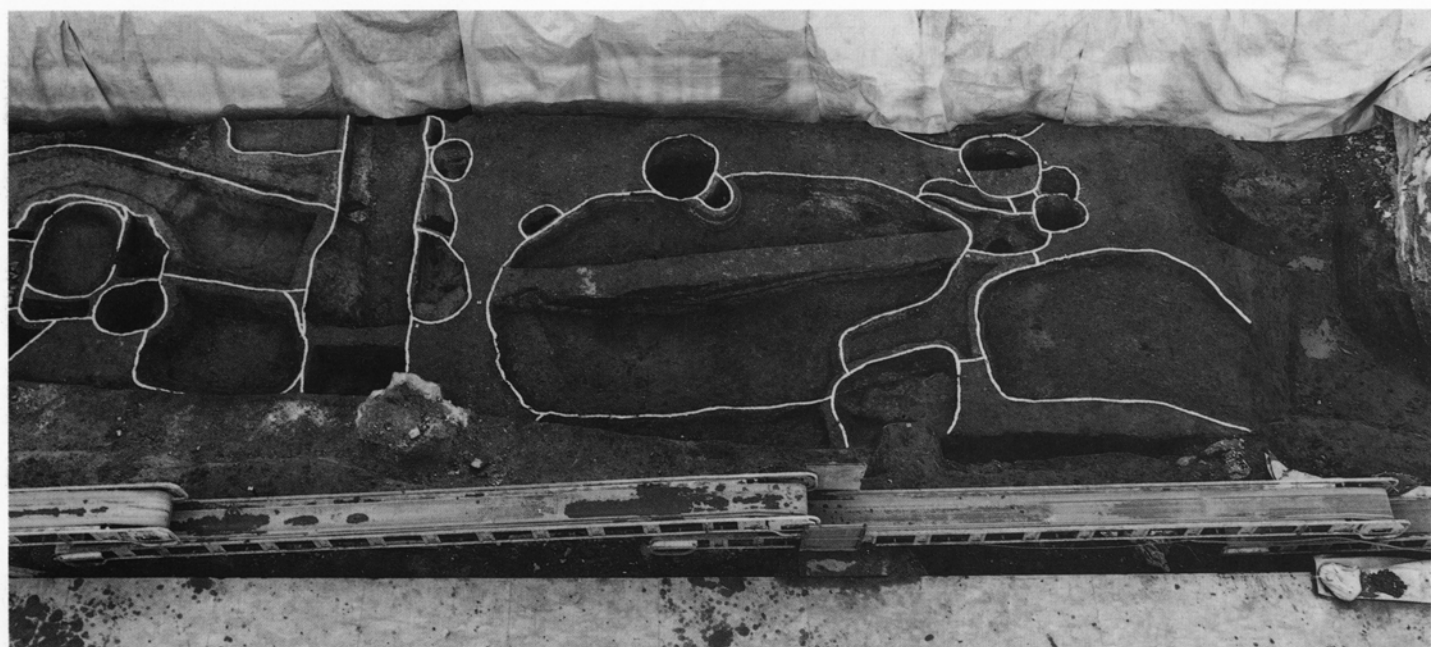
④ A区土師皿出土状態 (南より)



① B区上層全景（東より）



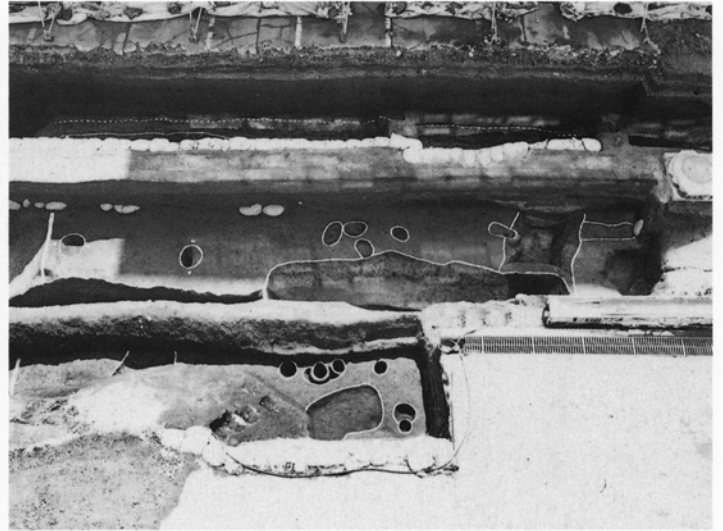
② B区上層東側（北より）



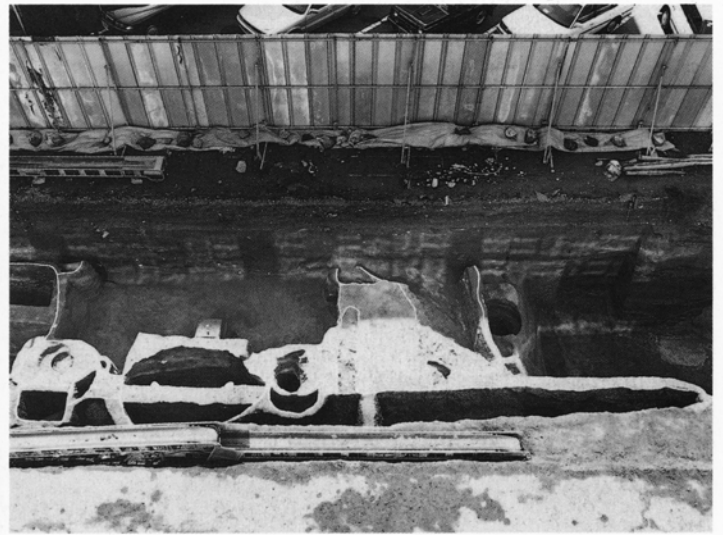
③ B区上層中央土坑群（北より）



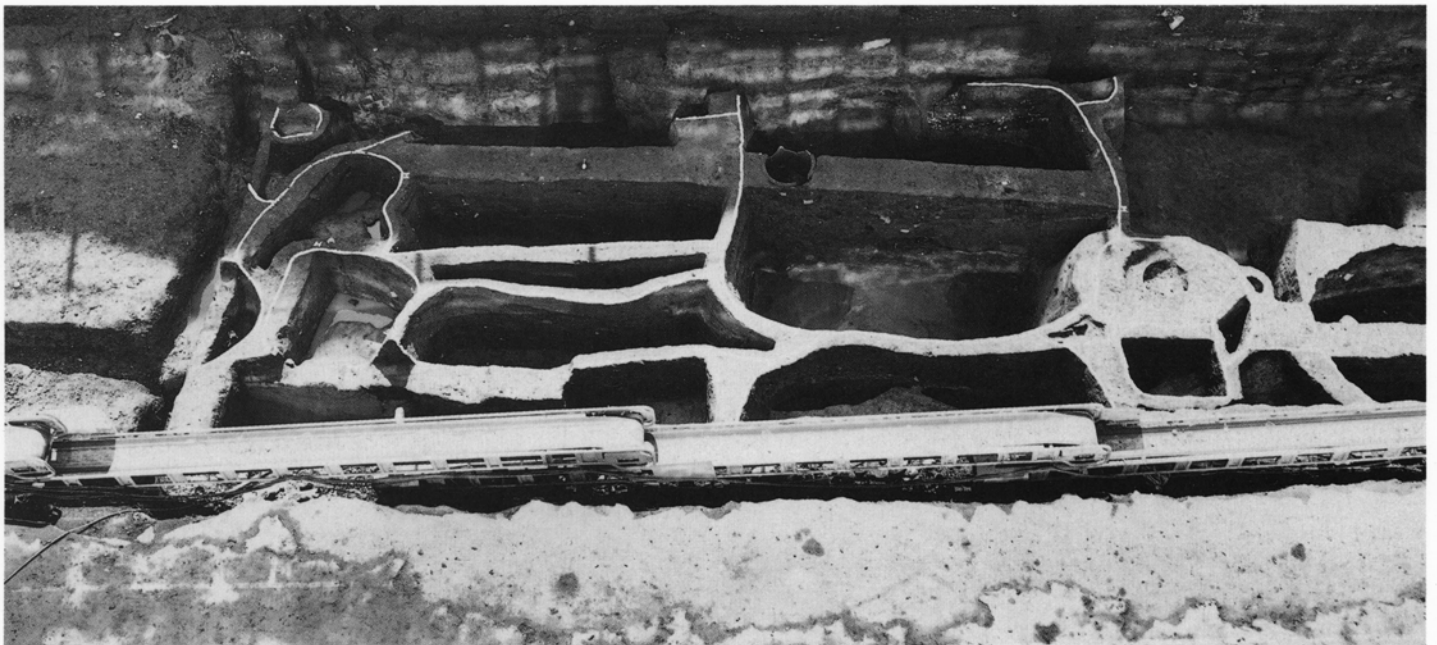
① B区下層全景 (東より)



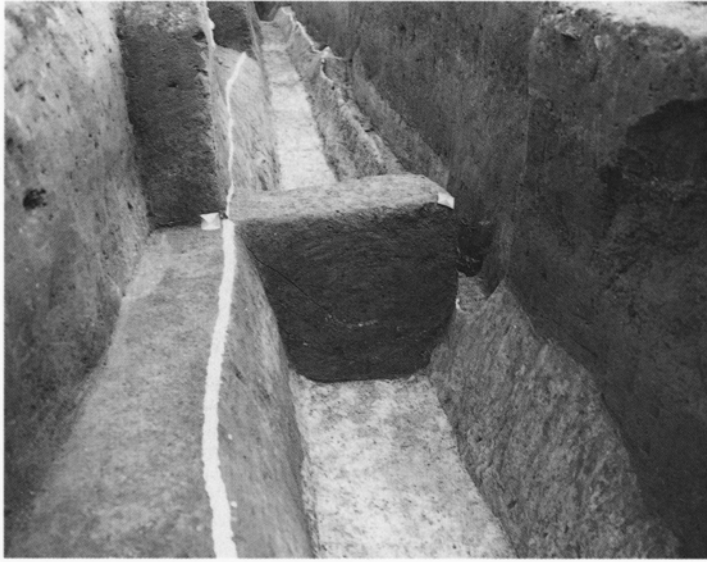
② B区下層東側 (北より)



③ B区SK 702周辺 (北より)



④ B区SK 703・704周辺 (北より)



① B区 S D 401 セクション (西より)



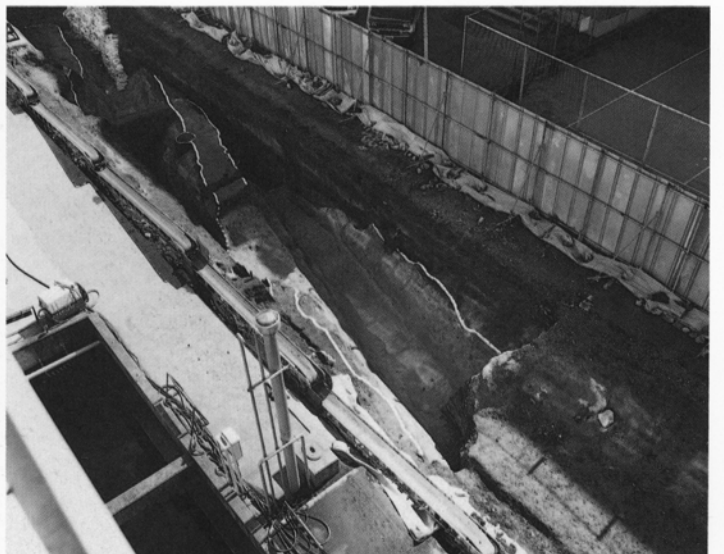
② B区 S D 601 セクション (東より)



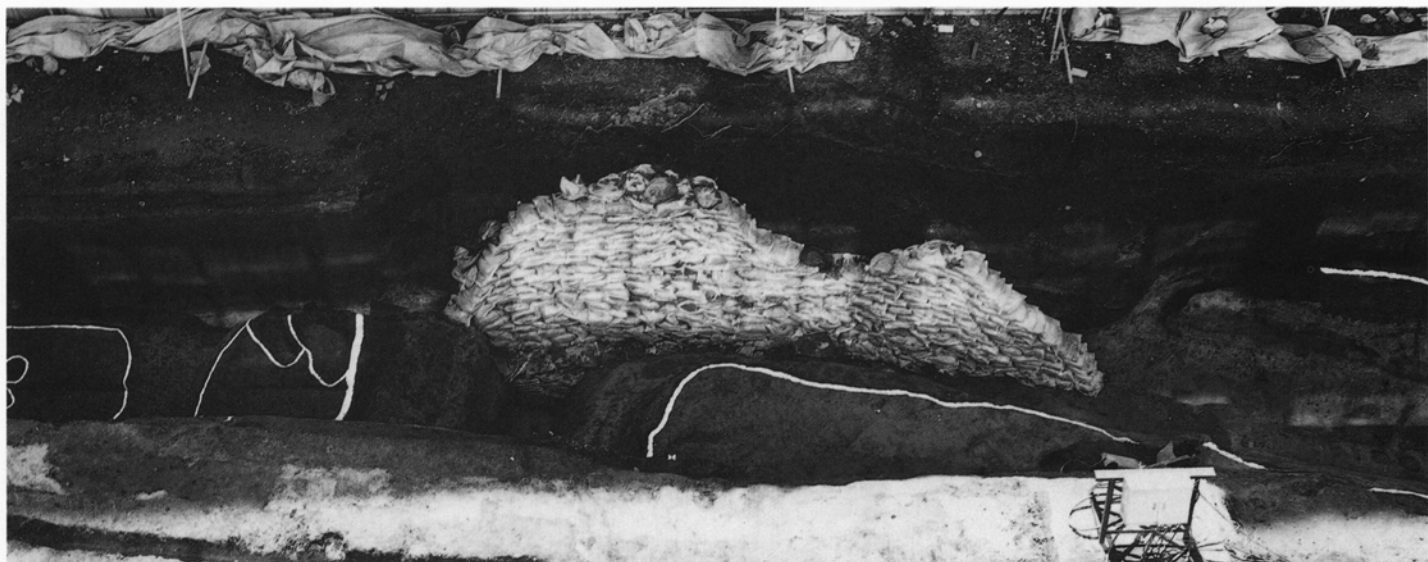
④ B区 S D 607 (北東より)



③ B区 S D 603 周辺 (北より)



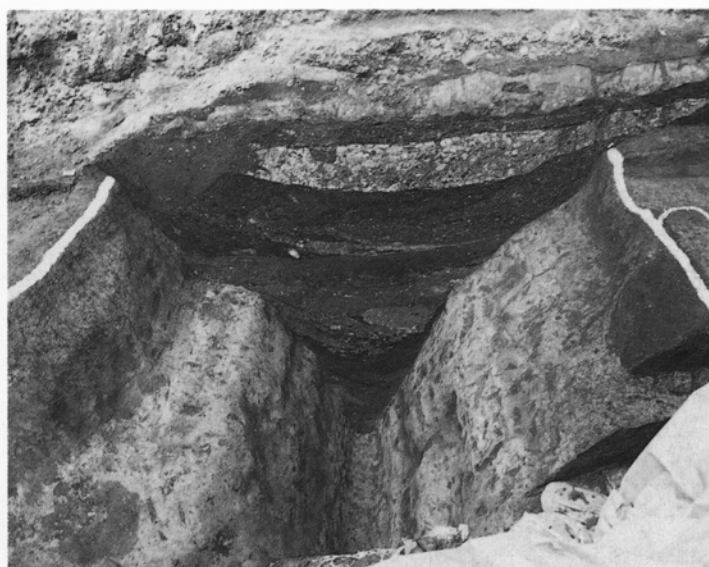
⑤ B区 S D 607 (北西より)



① B区 S D605コーナー (北より)



② B区 S D605セクション (東より)  
④ B区屋敷境溝セクション (北より)



③ B区 S D605セクション (南より)



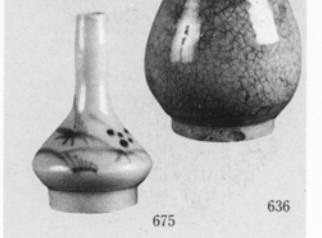
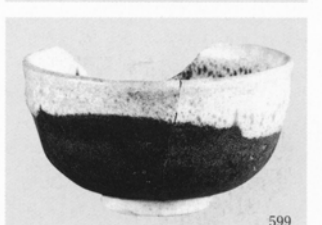
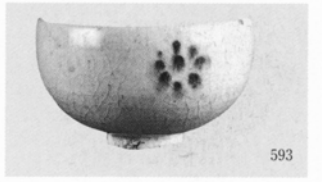
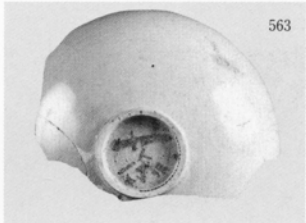
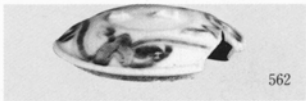
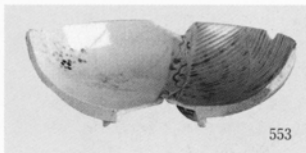
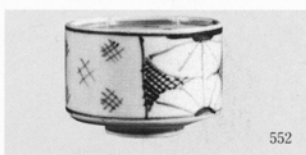
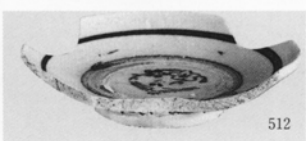
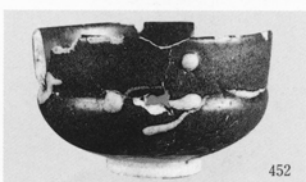
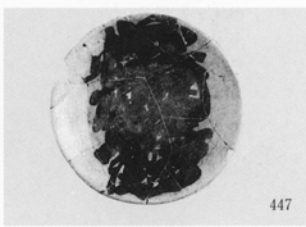
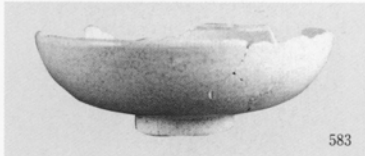
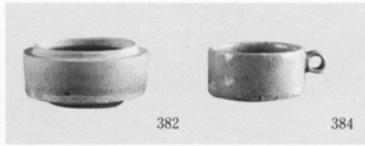
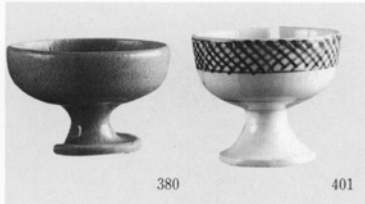


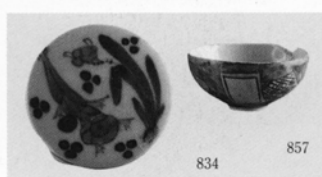
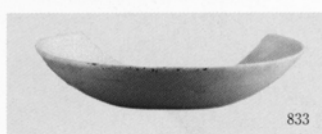
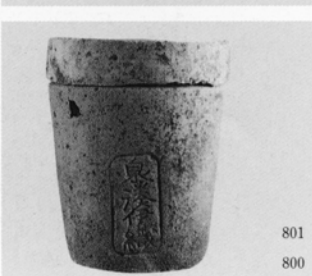
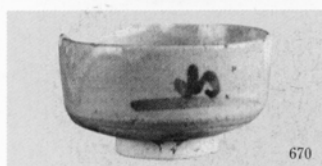
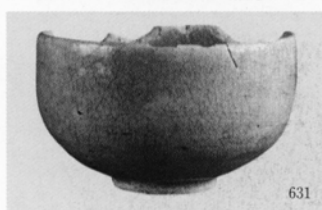
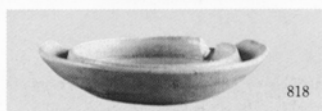
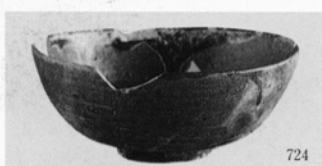
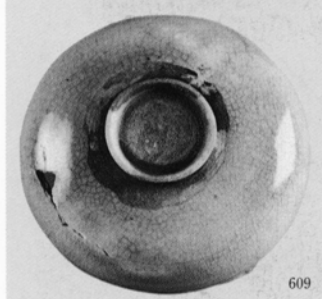
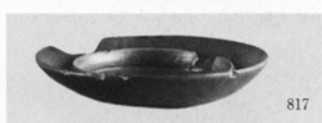
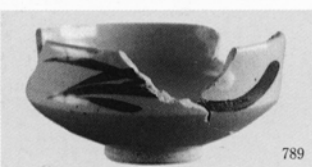
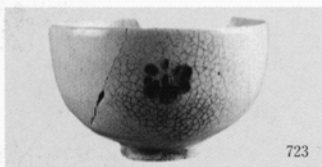
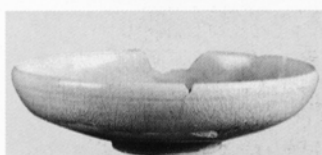
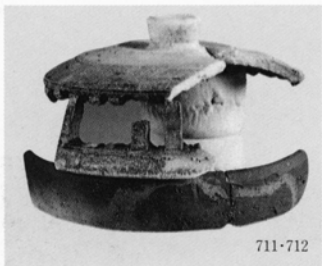
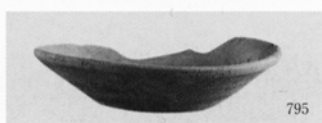
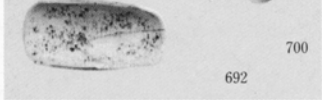
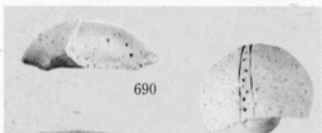
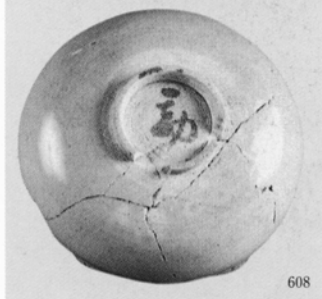
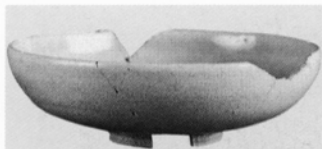






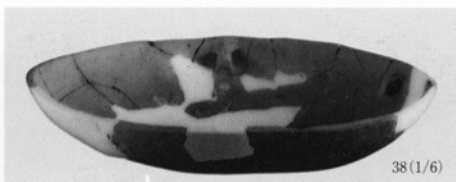




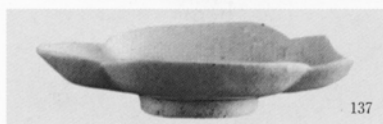




24  
(1/6)



38 (1/6)



137



97 (1/6)



269



289



141

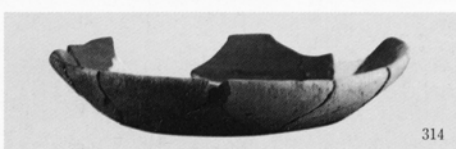


533

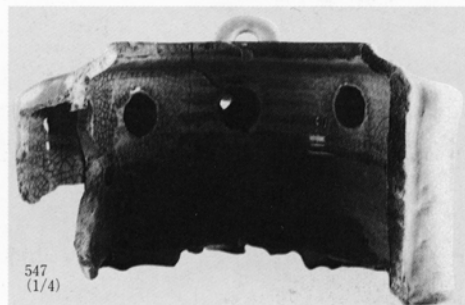
532



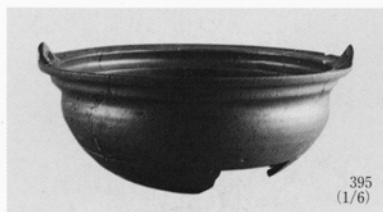
291



314



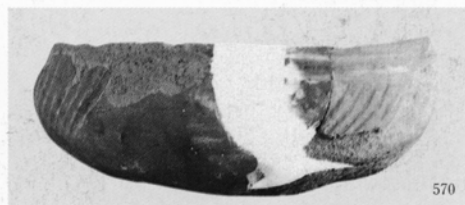
547  
(1/4)



395  
(1/6)



353



570



458  
(1/6)



530 (1/6)



587



720  
(1/6)



630  
(1/4)



629  
(1/6)



750



780



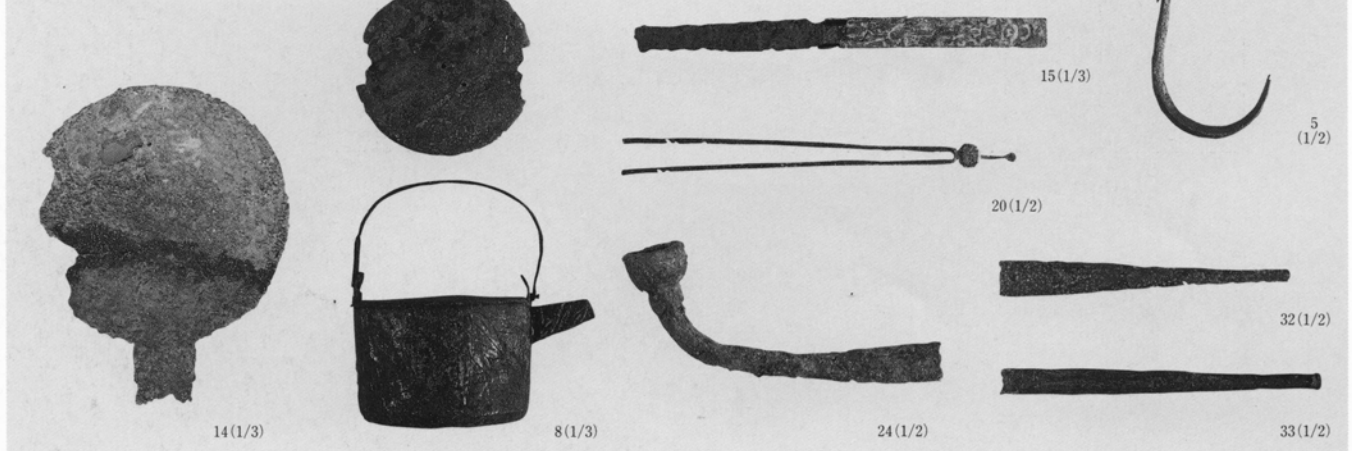
796



人形 (1/2)



金属



# 報告書抄録

フリガナ	ナゴヤジョウサンノマルイセキ
書名	名古屋城三の丸遺跡 (V)
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第60集
編著者名	松田 訓, 杉浦 茂, 伊藤秀紀, 堀木真美子, 服部俊之, 古橋佳子, 織田眞弓, 八木佳素実
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567-67-4163
発行年	西暦1995年3月31日

フリガナ	フリガナ	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ナゴヤジョウ 名古屋城 サンマル 三の丸	ナゴヤシナカク 名古屋市中区	23106	—	35°2'40"	136°54'16"	19930405 } 19940323	3404	建物建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城 三の丸	中・近世 城館跡	中世	堀・溝	9	中世陶磁器	戦国那古野城関連の 遺構  渡辺・横井・松井他 の武家屋敷地	
			土坑	17			
	近世	屋敷地	3	近世陶磁器			
		建物跡	1	瓦			
		井戸	9	人形			
		溝	31	金属製品			
	土坑	321	石製品				

愛知県埋蔵文化財センター第60集

名古屋城三の丸遺跡(V)

1995年3月31日

編集・発行 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社